鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9

平成４年度発掘調査報告
（第３分冊）

平成５年３月

鎌倉市教育委員会

目　次

（第１分冊）

序文……i
例言……ii
平成４年度の概観……1

１．由比ガ浜中世集団墓地遺跡……11
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……20
第二章　調査の経過と概要……27
第三章　検出した遺構・遺物……28
(1)　上層遺構……28
(2)　下層遺構……182
第四章　まとめ……196

（第２分冊）

２．大倉幕府周辺遺跡群……1
第一章　調査地点の概観……7
第二章　調査の概要……12
第三章　調査結果……14
第１節　中世の遺構と遺物……14
第四章　調査のまとめ……112
３．長谷小路周辺遺跡……145
第一章　調査の概要……153
第１節　調査に至る経緯……153
第２節　調査体制……153
第３節　調査の成果……154
第二章　遺跡地の概要……155

第１節　歴史地理的環境……155
第２節　調査地点……158
第三章　発見された遺構と遺物……160
第１節　中世以前……160
第２節　中世……167
第３節　上層遺物包含層……246
第四章　まとめ……249

（第３分冊）

４．保寧寺跡……1
第一章　遺跡の歴史地理的環境……5
第二章　発見された遺構と遺物……8
第１節　第１面で発見された遺構と遺物……8
第２節　第１面包含層出土遺物……19
第３節　第２面で発見された遺構と遺物……26
第４節　第２面包含層出土遺物……37
第三章　調査の成果と問題点……52
５．多宝寺跡……69
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……72
第二章　調査の概要……73
第１節　調査方法……73
第２節　堆積土層……74
第三章　検出遺構と出土遺物……76
第１節　第一面の遺構と遺物……76
第２節　第二面の遺構と遺物……78
第３節　第三面の遺構と遺物……80
第４節　第三面下の遺物……85
第四章　調査のまとめ……89

6．宇津宮辻子幕府跡……103
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……107
第二章　調査経過と概要……108
第三章　検出した遺構と遺物……109
(1)　遺構……109
(2)　遺物……115
第四章　まとめ……124
7．大倉幕府周辺遺跡群……131
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……135
第二章　調査の概要……136
第三章　検出遺構と出土遺物……137
第四章　まとめ……151
8．政所跡……165
第一章　遺跡の位置……170
第二章　調査の経緯……173
第三章　検出された遺構と遺物……175
第１節　上層で検出された遺構と遺物……175
第２節　第１面で検出された遺構と遺物……180
第３節　第１面かわらけ溜……185
第４節　かわらけ溜内出土遺物……229
第５節　第１面包含層出土遺物……230
第６節　第２面で検出された遺構……233
第７節　第２面の遺構と包含層出土遺物……236
第四章　調査の成果と問題点……238
9．若宮大路周辺遺跡群……259
第一章　調査地点の位置……263
第二章　調査の経過と概要……264
第三章　検出された遺構と遺物……266

(1) 遺構……266
(2) 遺物……270
第四章　まとめ……272
10. 若宮大路周辺遺跡群……277
第一章　調査地の位置と環境……281
第二章　調査軸線の設定……284
第三章　調査の経過と堆積土層……285
Ⅰ. 調査の経過……285
Ⅱ. 堆積土層……286
第四章　遺構と遺物……288
Ⅰ. 調査概要……288
Ⅱ. 遺構と遺物……288
第五章　まとめと考察……306
Ⅰ. 検出遺構の年代……306
Ⅱ. 遺構15について……307
Ⅲ. 遺構の変遷について……309

4．保　寧　寺　跡（No.175）

山ノ内字東管領屋敷133番３外地点

例言

1　本書は神奈川県鎌倉市山ノ内字東管領屋敷133番3、9地点に所在する保寧寺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は平成3年4月15日～同年7月20日まで実施した。

3　本書は手塚直樹が執筆、編集し、写真は手塚と田畑佐和子が撮影した。

4　調査体制は以下の通りである。

主任調査員　手塚直樹

調　査　員　田畑佐和子

補助調査員　明木文吾、上原恵美、大沼真理、小柳津シゲ子、菊地正明、滝田薫、野本賢二、山本直孝

作業協力　　狩野徳恵智、菅野五郎、戸塚栄

5　整理作業では大坪聖子、山崎理香の協力をえた。

6　図面、写真、遺物等は鎌倉市教育委員会で保管している。

目次

第一章　遺跡の歴史地理的環境 …… 5

第二章　発見された遺構と遺物 …… 8

第１節　第１面で発見された遺構と遺物 …… 8

第２節　第１面包含層出土遺物 …… 19

第３節　第２面で発見された遺構と遺物 …… 26

第４節　第２面包含層出土遺物 …… 37

第三章　調査の成果と問題点 …… 52

図版目次

図1　遺跡の位置と週辺……(6)
2　グリッド配置図……(9)
3　第1面遺構平面図、土層断面図……(11)
4　第1面遺構土層図・断面図……(13)
5　第1面遺構出土遺物……(15)
6　第1面遺構出土遺物……(16)
7　第1面包含層出土遺物　かわらけ…(20)
8　第1面包層出土遺物……(22)
9　第1面包含層出土遺物……(24)
10　第1面包含層出土遺物……(25)
11　第2面遺構平面図・土層断面図……(27)
12　第2面遺構土層図・断面図……(29)
13　第2面遺構出土遺物……(30)
14　第2面遺構出土遺物……(33)
15　第2面遺構出土遺物……(36)
16　第2面包含層出土遺物　かわらけ…(38)
17　第2面包含層出土遺物……(40)
18　第2面包含層出土遺物……(42)
19　第2面包含層出土遺物……(44)
20　第2面包含層出土遺物……(46)
21　第2面包含層出土遺物……(48)
22　第2面包含層出土遺物……(50)

写真図版目次

PL　1－1　建長寺延宝古絵図 ……(56)
1－2　明日院古絵図
2－1　第1面全景 ……(57)
2－2　第1面全景
3－1　第1面溝1 ……(58)
3－2　第1面土壙2
4－1　第2面全景 ……(59)
4－2　第2面全景
5－1　第2面柱列1 ……(60)
5－2　第2面河川東
6－1　第2面北地区 ……(61)
6－2　第2面北西地区
7　第1面遺構・包含層出土遺物(62)
8　第1面包含層出土遺物 ……(63)
9　第1面包含層出土遺物 ……(64)
10　第2面遺構・包含層出土遺物(65)
11　第2面包含層出土遺物 ……(66)
12　第2面包含層出土遺物 ……(67)

表目次

第1表　かわらけ計測表……(19)
第2表　かわらけ計測表……(37)

第一章　遺跡の歴史地理的環境

保寧寺は建長寺裏山の勝上嶽から派生した支脈が西方に広がる山裾の南側に位置する。寺は現在廃寺となっているが元は建長寺の末寺の一つであった。調査地点は鶴岡八幡宮の西側から鎌倉街道が巨福呂坂切通しを越え、建長寺門前を100m余り北上した東側、扇ヶ谷から東へ亀ヶ谷切通しを越え、鎌倉街道へ接する向い側の所にあたる。

建長寺から円覚寺に至る街道の両側には明月院古絵図（PL.1-2）、建長寺古絵図（PL.1-1）を見ると往時は禅宗寺院が軒を連ね、中華街のような様相を示していたといわれる。多くは廃寺となってしまったが現在でも円応寺、禅居庵、長寿寺、浄智寺、明月院、東慶寺などの名刹が街道沿いにある。

鎌倉旧市街の外、巨福呂坂を越えた山ノ内地区は執権北条泰時が仁治元（1240）年に巨福呂坂の造営、整備を始めてから開発が進み、建長寺は建長元（1249）年に草創、建長三（1251）年に事始がおこなわれている。開基は北条時頼、開山は蘭溪道隆である。この後、徐々に寺内の整備、塔頭、末寺が増加していったのであろう。

保寧寺に関してはほとんど資料が残っていない。文献上では暦応三（1340）年に足利直義が出した御教書[註1]に保寧寺を祈願寺とするのが初見である。次いで正平七(1352)年に足利尊氏が武蔵国都筑郡麻生郷の寺領に軍勢の乱妨を止める禁制[註2]を出している。永徳三（1383）年の夢窓疎石三十三年忌仏事結界の中に諸禅律僧尼寺十七箇所の中に「保寧」とある[註3]。下って永禄十一（1568）年には住持宗俊が地方に滞在するについて、禅珪を同寺の看司にし、梅州庵に勤むべき宗俊の庵役も禅珪にすると梅州庵に証文を差し出している。これにより当時保寧寺は梅州庵[註4]の末寺であった事がわかる。梅州庵は五山文学者で有名な中厳円月の塔所である。

古絵図では明月院古絵図を見ると下方に左から傳宗庵、正法寺、徳泉寺、安国寺、保寧寺、龍興院となり、明月院を周む山の西裾に見い出すことができる。この絵図は応永元（1394）年頃の状態を描いたものとされている[註5]。

建長寺古絵図（延宝六年に水戸光圀が施入と伝えられている。）を見ると左から正法院跡、徳泉寺跡、安国寺跡とあり、その隣りに「四十九院外、保寧寺跡、華蔵院」の記載があり、保寧寺の跡に華蔵院が移っている。華蔵院は現在はなく、寺のあった所は民家がならんでいる。

保寧寺はこれらの資料から暦応三（1340）年には存在し、永禄十一（1568）年から延宝六（1678）年の間に廃絶している。

建長寺境内では現在の庫裏のある龍王殿地域②で調査がおこなわれ、鎌倉時代後期の仏殿、法堂跡など近世までのⅦ期にわたる遺構が発見されている[註6]。蘭溪道隆の塔所である西来庵③では南北朝時代後期の石垣あるいは築地塀の基礎と思われる遺構が発見されている。ここでは多量の焼けた

正法寺跡
徳泉寺跡
安国寺跡
保寧寺跡
龍興院跡
玉雲庵跡
巨福呂坂旧道
山之内
東管領屋敷
白黒小路
鎌倉学園
中学校高等学校
0
50m

図１　遺跡の位置と周辺

瓦と陶磁器が発見されている[註7]。西来庵の参道を挟んで向い側の傳芳庵跡④からはやぐらと岩盤削り出しの基壇が発見されている[註8]。現在鎌倉学園の敷地になっている玉雲庵跡⑤ではやぐらが調査されている[註9]。西来庵、傳芳庵跡では狭い範囲ではあったが、寺院遺構としてはそれなりの成果をあげることができ、また遺物も有力禅宗寺院としてふさわしい物が多いことが注目される。

この他に山向うにあたるが、鶴岡八幡宮の二十五坊の一つ正覚院跡⑥[註10]、律宗寺院多宝寺⑦⑧[註11]などが調査されている。

明月院旧境内でも二ケ所調査がおこなわれている。明月ヶ谷の奥には現在最明寺址と伝わる所があり、ここに北条時頼の邸宅があったと伝えられている。最明寺は時頼邸の近辺にあったと言われる。最明寺はその後廃寺になり北条時宗が再興して禅興寺としている。禅興寺は蘭溪道隆が文永五（1268）年～六（1269）年頃開山となり開かれたと推定されている。明月院はここの塔頭の一つである。⑨地点では15世紀～16世紀の掘立建物などが発見されている[註12]。⑩地点では石垣、基壇、苑池など寺院と思われる遺構が発見されている[註13]。

註

註1　鎌倉国宝館浅見氏の御教示による。

註2　1959年『鎌倉市史一史料編第三』「三ノ二四二」鎌倉市教育委員会

註3　1959年『鎌倉市史一史料編第三』「三ノ二七」鎌倉市教育委員会

註4　1959年『鎌倉市史一史料編第三』「三ノ二五二」鎌倉市教育委員会

註5　1992年　三浦勝男『鎌倉の古絵図Ⅰ』「鎌倉国宝館図録第十五集」鎌倉国宝館

註6　1991年　河野真知郎他　『巨福山建長寺境内遺跡』建長寺境内遺跡発掘調査団

註7　1992年　筆者調査

註8　1992年　筆者調査

註9　1992年　筆者調査

註10　1984年　服部実喜　『裏八幡西谷遺跡』神奈川県理蔵文化財センター

註11　1976年　三上次男他　『多宝律寺跡発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会

　　1977年　三上次男他　『多宝律寺遺跡第７次発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会

註12　1989年　田代郁夫　「明月院旧境内遺跡」『鎌倉市理蔵文化財緊急調査報告書５』　鎌倉市教育委員会

註13　1990年調査　整理中

第二章　発見された遺構と遺物

第１節　第１面で発見された遺構と遺物

試掘調査によると表土から50㎝下層は近代の堆積層、その下約20㎝～30㎝の厚さの15世紀～16世紀の遺物包含層があり、その下に土丹（泥岩の鎌倉地方の呼称）地行層の存在が確認されている。このため表土から約50㎝は重機により排土をし、包含層から以下を手掘りで調査をした。

第１面上の包含層は黒褐色を呈し、炭化物、かわらけ、陶磁器など多量の遺物を多く含んでいた。この包含層を掘り下げる途中から、近現代の遺物も調査区の全域から見つかり下層の第１面の土丹地行面への影響が心配された。

包含層を除却し、土丹地行面の検出作業にかかると部分的にしか地行面は確認できず、あちこちで上層からの撹乱が入り込み、土丹地行面が確認できたのは調査区のほぼ１／４程度の狭い範囲であり、これも又部分的には上面が荒されている状態であった。

調査区の北東隅にはこの第１面より新しい時期の土丹地行層が狭い範囲でわずかに残っていたが近世以降の耕作によってほとんど消失していることが確認された。この面では柱穴が１基確認されただけである。

第１面で発見された遺構は溝、土壙、柱穴等であり、柱穴は建物、柵などを想像させる配置、柱間を認める事はできなかった。土壙は東側では長方形、西側では円形と片寄って存在する傾向があり、大きさは大小さまざまである。

第１面上には土丹塊が散在し遺構としてのまとまりはない。溝の西側で土丹が方形に配置されている所があるが、これは溝の護岸の移動と考えられる。また南東隅に土丹が方形に密集しているがこれも性格不明である。この周囲には柱穴が存在するが、距離、配置等から見るとばらばらであり建物の存在を認める事はできなかった。

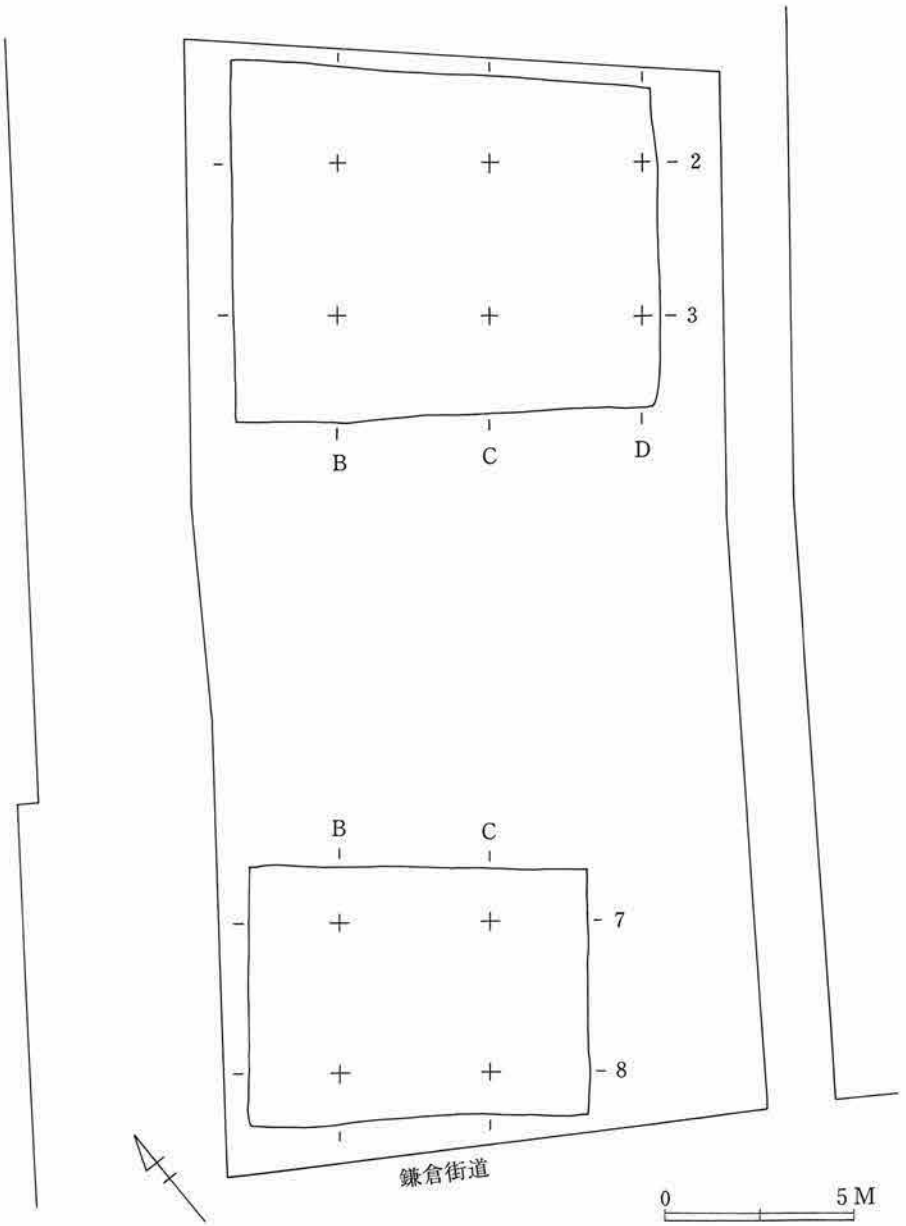


図 2　グリッド配置図

以下個別の遺構について述べてみる。

溝１　（図３．　PL3－1）

巾は約30cm～40cm、深さは約30cm余りで東西の方向に走る。溝の両側は土丹で護岸されている。東側の端では二段に積まれているのが確認され、現状ではほとんど壊れているが本来は二段積みされていたと思われる。土丹は整形された痕跡はなく、また積み方もきちんとしていない。所々鎌倉石も用いられ、護岸の控えもなく粗雑な造りである。溝は東～西の８ｍの間で約10cmの比高差を持ち西側へ流れる。溝の土層図を見ると数回浚渫しているようである。

出土遺物（図５－１～２）

溝の残りが悪いためかわらけ、瀬戸、常滑の製品、滑石などわずかであった。

かわらけは小片のため実測可能な製品はなく、口縁の型態から15Ｃ中頃～16Ｃ前半と考えられる。

瀬戸平碗（図５－１）　高台径4.9cmである。高台は削り出しで粗く、畳付には糸切り痕が残る。素地は黄白色を呈する。釉は黄白色を呈し、部分的に風化し白色になる。

滑石不明品（図５－２）　石鍋の転用で各面は磨耗している。部分的に利器を研いだのであろうか断面三角形になる痕が残る。

土壙１

調査区の東側に位置し、ほぼ長方形を呈し長辺約1.3m、短辺約0.75m、深さ約30cmである。土壙中央に径約20cm、深さ約20cmの柱穴が確認されたが、土壙に伴うかは不明である。土壙内からはかわらけ片が少量発見されているが実測できる大きさではなかった。

土壙２

調査区の西側に位置し、不正円形を呈する。長径約1.5m、短径約1.15m、深さ約40cmである。土壙内からかわらけ、常滑、手焙り、緑泥片岩、瀬戸、青磁、玉が発見されている。緑泥片岩は製品ではないようである。

出土遺物(図５－３～９)

かわらけ（３～７）は小型と大型の２種類である。小型は口径７cm余りで５は口縁部にタールが付着する。大型は口径13cm余りで器壁は薄い。

玉(８）はほぼ円形を呈し、直径0.8cm、孔径２mmである。色は水色を呈し、部分的に銀化し白色を呈する。

瀬戸（９）は口径14.8cmの大型の灰釉花生か尊になると思われる。素地は灰白色を呈し砂っぽい。釉は透明度のある黄緑色を呈し、内側の中程までかけられている。

土壙３

調査区の北東隅、溝１の西北に位置する。西側は上層からの撹乱、北側は調査区外になり規模は不明であるが、方形を呈し、深さは約５cmと浅い。この土壙からは遺物が多く、かわらけ、瀬戸、青磁、瓦質風呂、骨製品などが出土している。

出土遺物（図５－10～29)

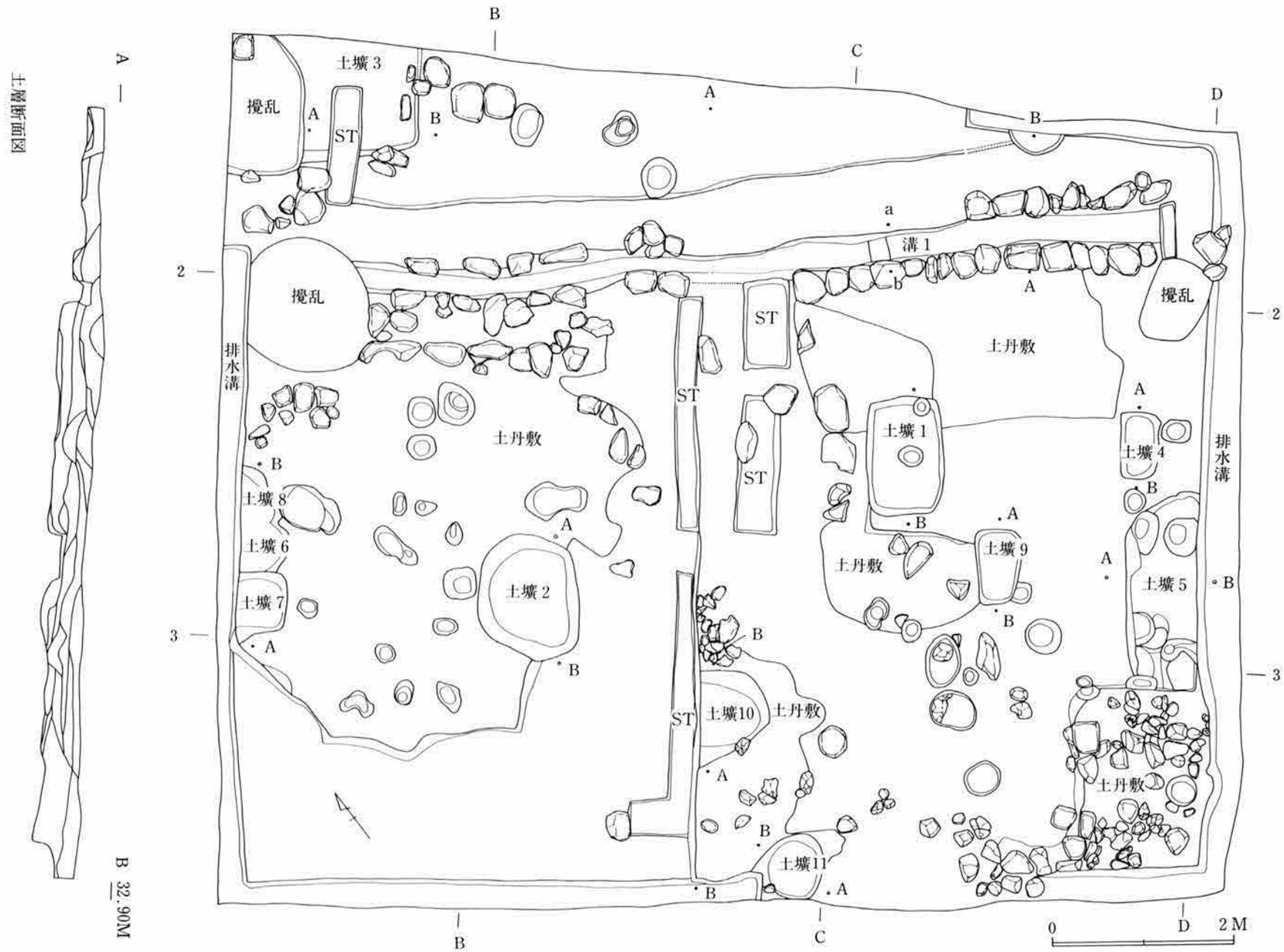


図3　第1面遺構平面図.土層断面図

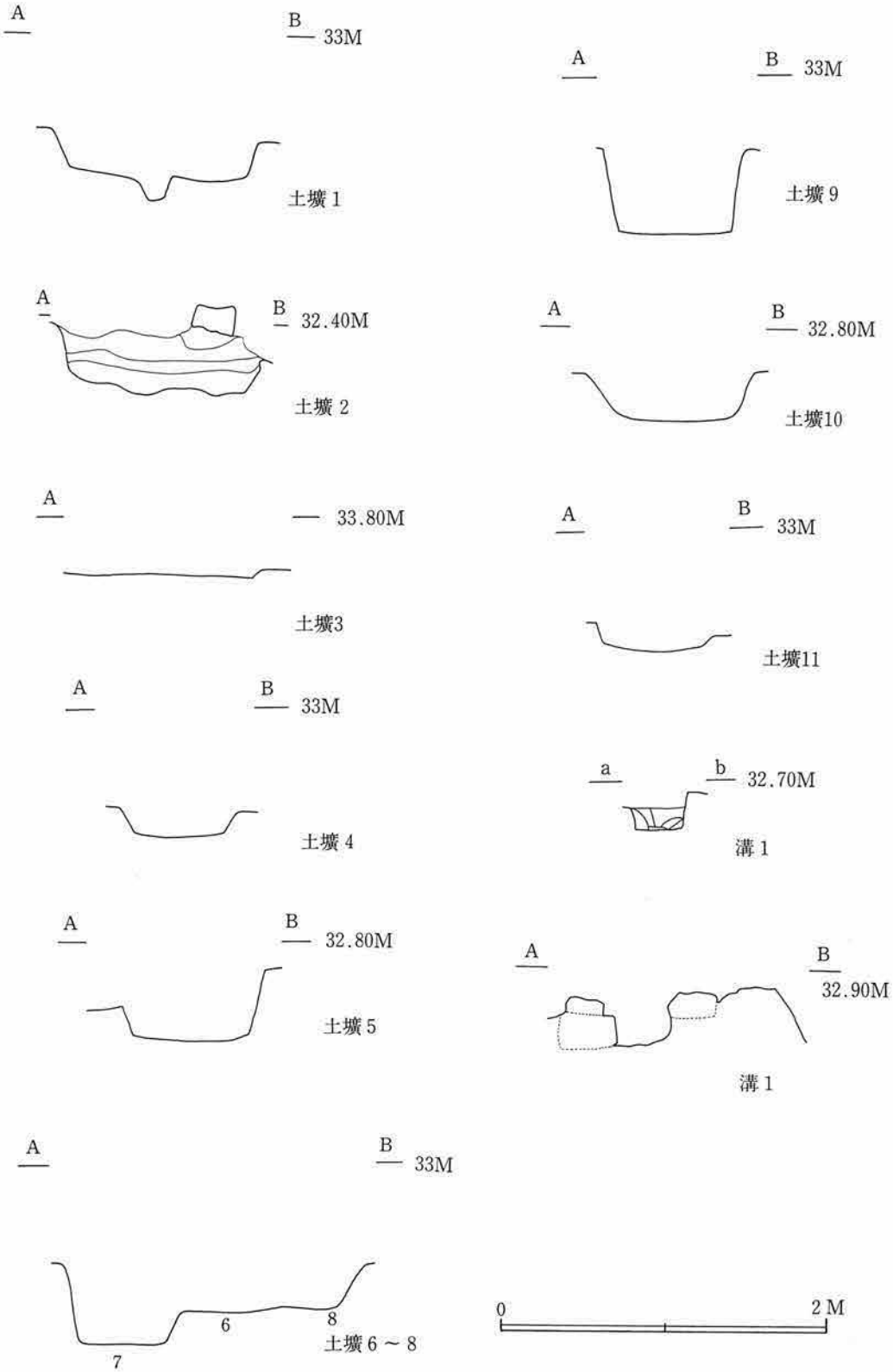


図 4　第 1 面遺構土層図・断面図

かわらけ(10～21)　小型の製品ばかりである。このうち約半数には口縁部にタールが付着している。口径は約7㎝である。器体表面は赤色を呈し焼成が悪く触れると赤い粉が付く程である。

瀬戸（22～24）　22はおろし皿である。底部から胴部にかけて大きく開く。口径12.5㎝、器高2㎝、底径5.5㎝、糸切底、釉は暗緑色を呈し、口縁部のみかけている。素地は灰色を呈し堅い。23は尊形の花瓶である。底径は6.2㎝、外底には糸切り痕が残る。釉は黄緑色を呈し底近くまでかけられ、内側は底のみである。24は盤の底部である。底径は12㎝、釉は刷毛塗りで粗く塗り、白くなっている。内底には目痕と思われる痕が残る。外底は篦削りで目痕が残る。

青磁(25～27)　25は皿である。口径12.2㎝、器高3.3㎝、底径6.9㎝である。口縁は軽く外反する。釉は透明なオリーブグリーンを呈し、高台内側までかけ、外底面は無釉である。内底面は蓮花の印文がある。26は25と同様の皿である。口径13.6㎝、釉は不透明な草緑色を呈し、細い貫入がある。素地は口縁部付近は灰色、胴下部は赤色を呈する。27は碗である。口径15.4㎝、釉は透明な灰青色、素地は灰色を呈する。全体に貫入があり、口縁部は強く外反する。

骨製品(28)　鹿角製の双六の駒である。直径1.7㎝×1.5㎝の不正円形を呈し、厚さは0.3㎝である。

瓦質製品(29)　瓦質風呂である。頸部の径は31.6㎝である。素地は全体に赤褐色を呈する。頸部は連地格子の文様が配される。肩部に縦方向の墨痕が3ケ所残る。

土壙4

調査区の東側に位置し、長方形を呈する。長さ74㎝、幅42㎝、深さ15㎝である。火鉢、常滑が出土している。

出土遺物（図5―30.31）

火鉢（30)は大型で口径28㎝、器高8㎝、底径29.4㎝である。外面胴部上方には菊花のスタンプ、貼付珠文、胴中央には菊花のスタンプ、胴下方には貼付珠文を配する。胴部中央には篦磨き、内側胴部には指頭痕が残る。

常滑甕(31)の底部径は13.8㎝である。外面胴下部には木口状工具による成形痕が残る。

土壙5

調査区の東側に位置し、更に区域外に広がる長方形の土壙である。一辺は2.18m、深さ約20㎝、土壙の縁に柱穴が重複するが新旧関係は明らかにできなかった。遺物はかわらけ、骨製品が出土している。

出土遺物（図5―32、33）

かわらけ（32）小型の製品で口径7㎝、器高2.5㎝、底径2.8㎝である。口縁にタールが付着する。

骨製品(33)　箸である。巾約1.1㎝、頂部を欠損し、先尖は鋭角になる。

土壙6

調査区の西側に位置し、円形を呈し、土壙7、8と重複する。新旧関係はわからなかった。深さは約15㎝余りである。遺物はかわらけ、瀬戸、瓦質香炉、瓦、砥石が出土している。かわらけは小片のため実測はできなかった。

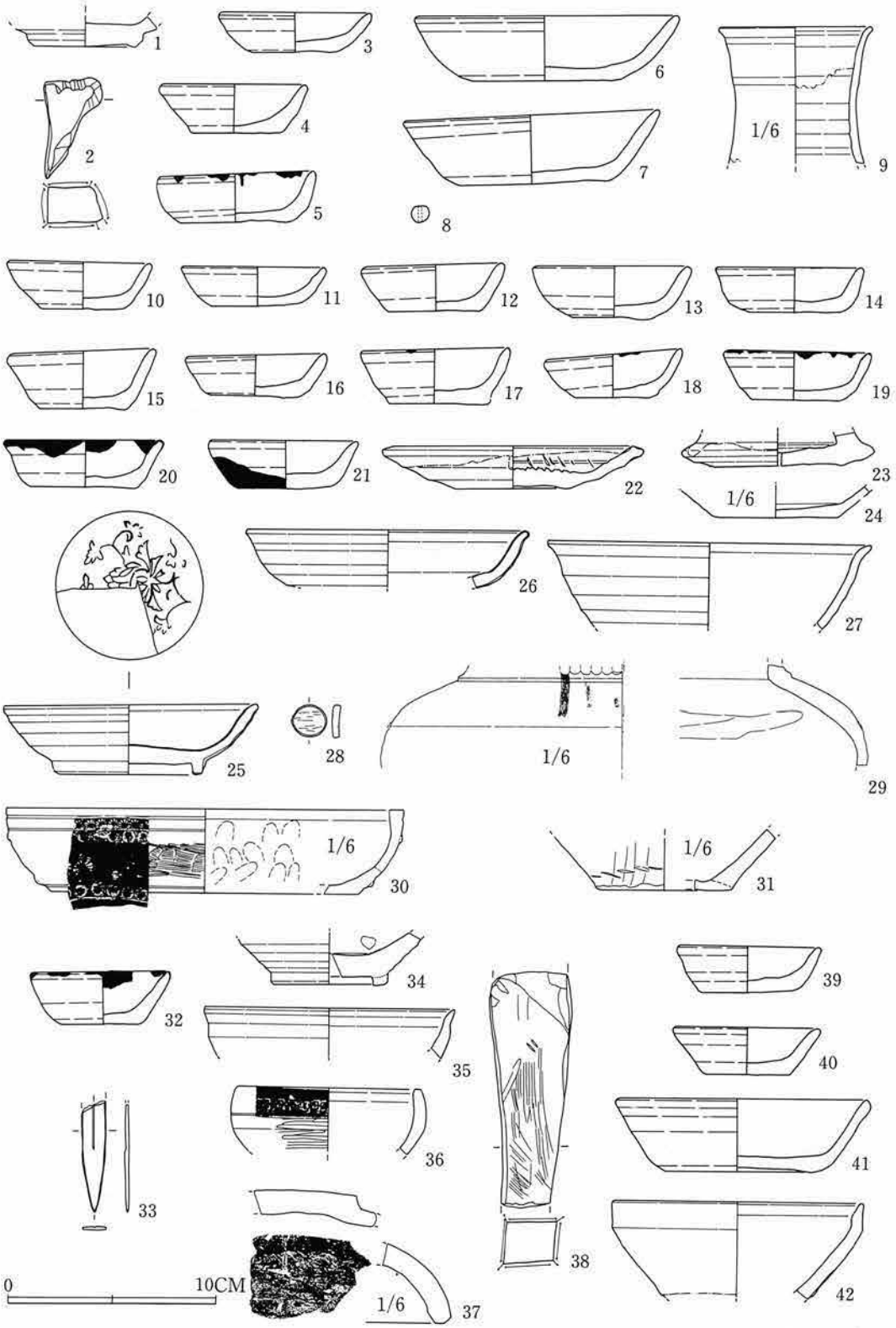


図5　第1面遺構出土遺物　溝1（1～2）土壙2（3～9）土壙3（10～29）土壙4（30～31）
土壙5（32～33）土壙6（34～38）土壙7（39～42）

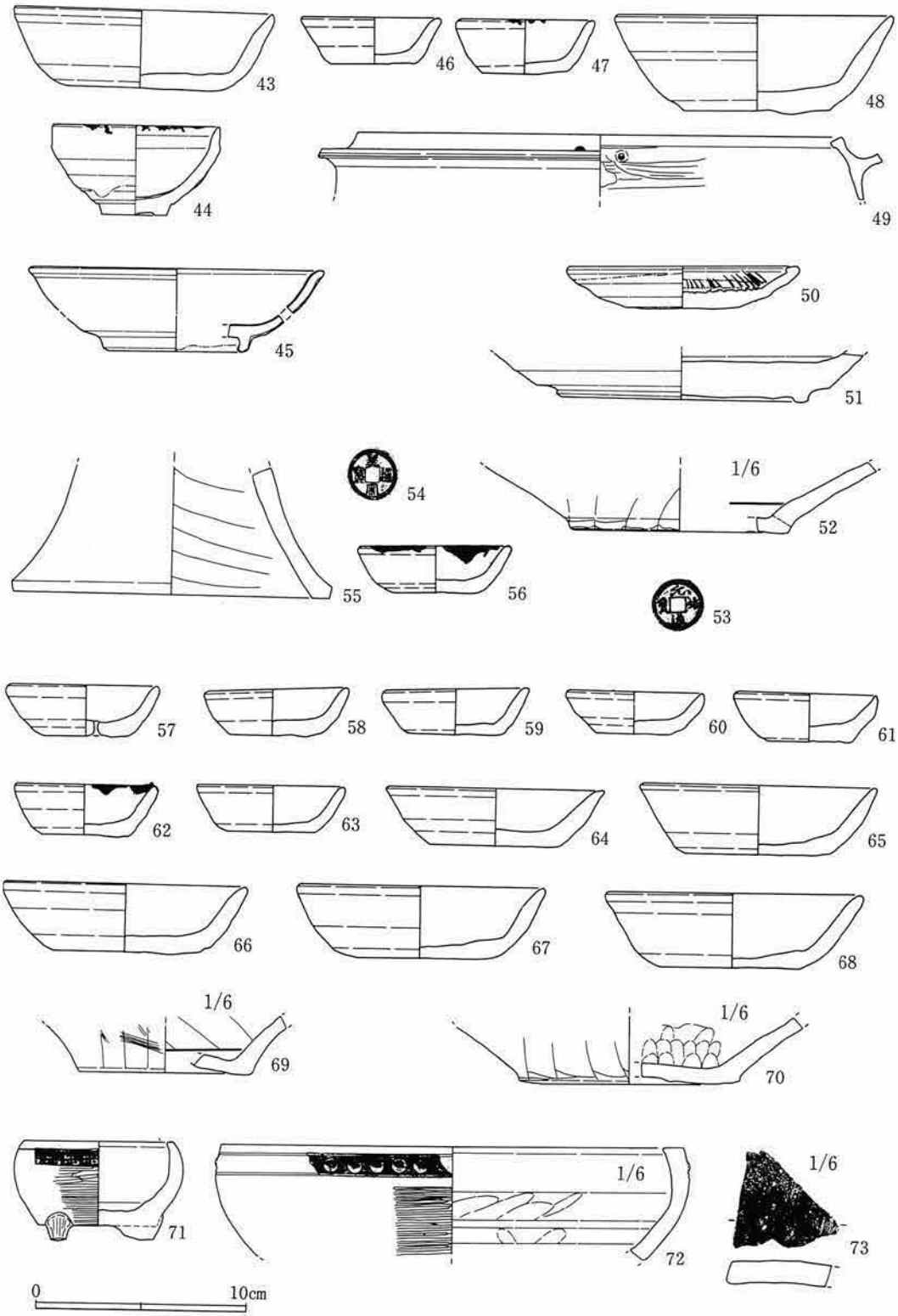


図6　第1面遺構出土遺物　土壙9（43～45）土壙11（46～53）柱穴（54～56）
かわらけ溜（57～73）

出土遺物（図５－34～38）

瀬戸(34.35)は灰釉平碗(34)と天目茶碗(35)が出土している。平碗の底径は5.2cmである。高台は付け高台で外底面には糸切り痕、内底面に目痕が残る。素地は黄色を呈する。釉は黄白色を呈し、現存の内側にかかる。天目茶碗(35)の口径は約10cmである、。釉は口縁部は茶色、口縁下は黒色、素地は灰色を呈する。

瓦質香炉(36)は小型で口径8.8cmである。表面は灰黒色に燻され、口縁下に方形の文様を押すが二重になり不明である。文様下に横ナデの痕が残る。

瓦(37)は軒丸瓦である。内面に布目痕がある。厚さは約２cm余り、胎土は密で灰色を呈する。

砥石(38)は中砥で四面全部を砥面にしている。一方の先端を欠く。

土壙７

調査区の西側に位置し、土壙６と重複する。一辺約65cm、深さ約50cmの方形を呈する。かわらけと天目茶碗が出土している。

出土遺物（図５－39～42）

かわらけ（39～41)は小型(39･40)、大型(41)の二種類がある。小型は口径約７cm、器高２cm、底径約4.5cmである。焼成は悪く赤色を呈する。糸切り底である。大型は口径12cm、器高3.5cm、底径７cm、口縁が軽く外反する。

瀬戸天目茶碗(42)は口径12cmである。口縁部は直立し、くびれはほとんどない。釉は下に黒、釉上に柿釉をかけ、胴下部がまだらになる。

土壙８

調査区の西に位置し、土壙６と重複するが新旧関係はつかめなかった。径約76cm、深さ約15cm、不正円形を呈する。遺物は出土していない。

土壙９

調査区東側に位置し、長辺83cm、短辺45cm、深さ約60cmの長方形を呈する。遺物はかわらけ、瀬戸、青磁が出土している。

出土遺物（図６－43～45）

かわらけ(43）は大型で口径12.2cm、器高3.7cm、底径7.1cmである。口縁部は軽く外反する。

瀬戸天目茶腕(44）は小型で口径7.9cm、器高4.2cm、底径3.2cmである。口縁部は直立し、くびれはほとんどない。タールが付着する。高台は削り出しで畳付に糸切り痕が残る。釉は黒釉をかけ、その上に柿釉をかけている。

青磁皿（45）は口径14cm、器高約3.9cm、底径6.4cmである。口縁部は軽く外反する。釉は透明な緑色を呈し、高台内側までかけている。

土壙10

調査区の中央に位置し、直径約１m、深さ約0.25mの不正円形を呈する。遺物は出土していない。

土壙11

調査区中央の南に位置し、直径約70cm、深さ約10cm余りの円形を呈する。かわらけ、瀬戸、常滑銭、羽釜が出土している。

出土遺物(図6－46～48)

かわらけ（46～48)は小型と大型がある。小型(46、47)は約6.5cm、器高約2.5cm、底径4cmである。焼成は悪く赤色を呈する。大型（48）は口径13.2cm、器高4.5cm、底径6.9cmである。胴部、底部が厚く、器高が高い。

羽釜(49)は口径23cm、口縁部には焼成後の穿孔が1ケ所ある。胎土は黄白色を呈し堅い。

瀬戸（50、51)おろし皿(50)は口径10.8cm、器高2cm、底径5.4cmである。口縁端部は水平に内折れになる。内底面のおろし目は胴部にまでかかる。釉は口縁部のみにかかる。外底は糸切りである。筒形花瓶(51)は底径11.8cmである。高台削り出しで、外底面は糸切り底である。釉は不透明な緑色を呈し、現存内面のみにかけている。内底面には目痕が3個（推定4個）残る。

常滑甕（52)は底径20.4cmである。外面胴下部に木口状工具による成形痕が残る。

銭(53)は元祐通宝(初鋳1086年)である。

柱穴出土遺物（図6－54～56)

P－13からは皇宗通宝(54)、初鋳、1039年、楷書。P－20からは底径15.2cmの瓦質灯台(55)。P－35からは口径7.2cm、器高2.2cm、底径4cmの灯明皿に転用されたかわらけ（56)が出土している。

かわらけ溜り出土遺物（57～73)

調査区中央南側の土壙11の東側に投棄された状態で発見された。かわらけ、常滑、香炉、瓦などが出土している。

かわらけ（57～68）　小型のかわらけ（57～63)は口径約7cm、器高約2.5cm、底径約4cmである。焼成は悪く赤色を呈し、触れると手に赤い粉が付く。15は内底面に穿孔がある。大型かわらけ(65～68)は口径約11.5cmで22は口径10.5cm、25は12.5cmを計る。焼成は小型と同様に悪い。

常滑(69、70)　69は底径16cm、上底状になる。外面胴下部に木口状工具による成形痕が残る。形状は甕の底部であるが、内面が磨滅しているため、破損後にこね鉢に転用している。70は底径21cm、上底状になる。外面胴下部に不口状工具による成形痕、内面には指頭痕が残る。

香炉（71）　口径7.2cm、器高4.7cm、底径5.6cm、三ケ所に脚が付く。口縁部には2本の沈線間に四目のスタンプを押す。胴、脚は細い篦磨の痕が残る。小型の火鉢の胎土は大型と比べて緻密ではなく、生産地が異なると思われる。

火鉢(72)　大型の火鉢で口径約40cm、器高10.6cm、底径37cmである。口縁の2本の沈線間に貼付珠文を配する。胴部には細い篦磨の痕が残る。

瓦（73）　平瓦で厚さは約2cm、叩目は無く、表面には砂が多く付着している。

第２節　第１面包含層出土遺物

かわらけ、瀬戸、常滑、舶載陶磁、瓦質製品などが多数出土している。

かわらけ（図７－１～46）

主に口径７cm～５cmの小型のかわらけが多い。口縁が直行する型（１～８）、口縁がわずかに外反する型（９～18）、口縁が直立する型（19～22）、口縁が内湾気味に立ちあがる型(23～27)が認められる。口径11cm～14cmの大型のかわらけは小型と比べると１／４程度と少ない。口縁が直行する型(31、34、35)、口縁がわずかに外反する型(32、37、38、40、41)、口縁が内湾する型（42～47）が

表Ⅰ

第１面　包含層出土かわらけ法量表（単位CM）

No. ＼ 法量	口　径	器　高	底　径	No. ＼ 法量	口　径	器　高	底　径
1	5.6	2.2	3.0	24	6.8	2.5	4.3
2	6.6	2.5	4.2	25	7.2	2.4	4.5
3	7.0	2.5	4.2	26	7.0	2.1	4.0
4	7.0	2.3	4.5	27	7.4	2.1	4.5
5	6.7	2.2	4.0	28	6.5	1.7	5.6
6	6.2	2.0	3.0	29	7.9	2.1	5.0
7	6.3	1.9	4.0	30	7.6	1.9	5.4
8	7.0	2.2	5.0	31	11.4	3.2	5.8
9	7.2	2.3	3.7	32	12.0	3.4	6.5
10	7.0	2.5	4.3	33	7.7	2.7	3.7
11	7.0	2.5	4.0	34	11.8	3.5	6.7
12	6.8	2.3	3.5	35	11.7	3.3	6.6
13	6.8	2.3	4.5	36	6.5	2.5	4.3
14	6.8	2.2	3.0	37	11.3	3.5	6.3
15	6.5	1.9	4.5	38	11.8	3.3	7.0
16	6.8	2.0	4.7	39	7.0	2.0	3.8
17	6.8	2.3	4.7	40	11.3	3.2	7.4
18	7.2	2.6	4.0	41	12.0	3.8	7.0
19	6.4	2.0	3.6	42	14.0	4.0	8.7
20	6.9	2.0	4.6	43	11.3	3.8	5.4
21	6.6	2.0	3.8	44	13.4	4.0	7.8
22	6.7	2.2	4.7	45	14.2	4.8	8.7
				46	11.7	3.7	7.7
23	6.6	2.1	4.0	47	11.2	3.3	7.0
				48	15.4	4.4	8.5

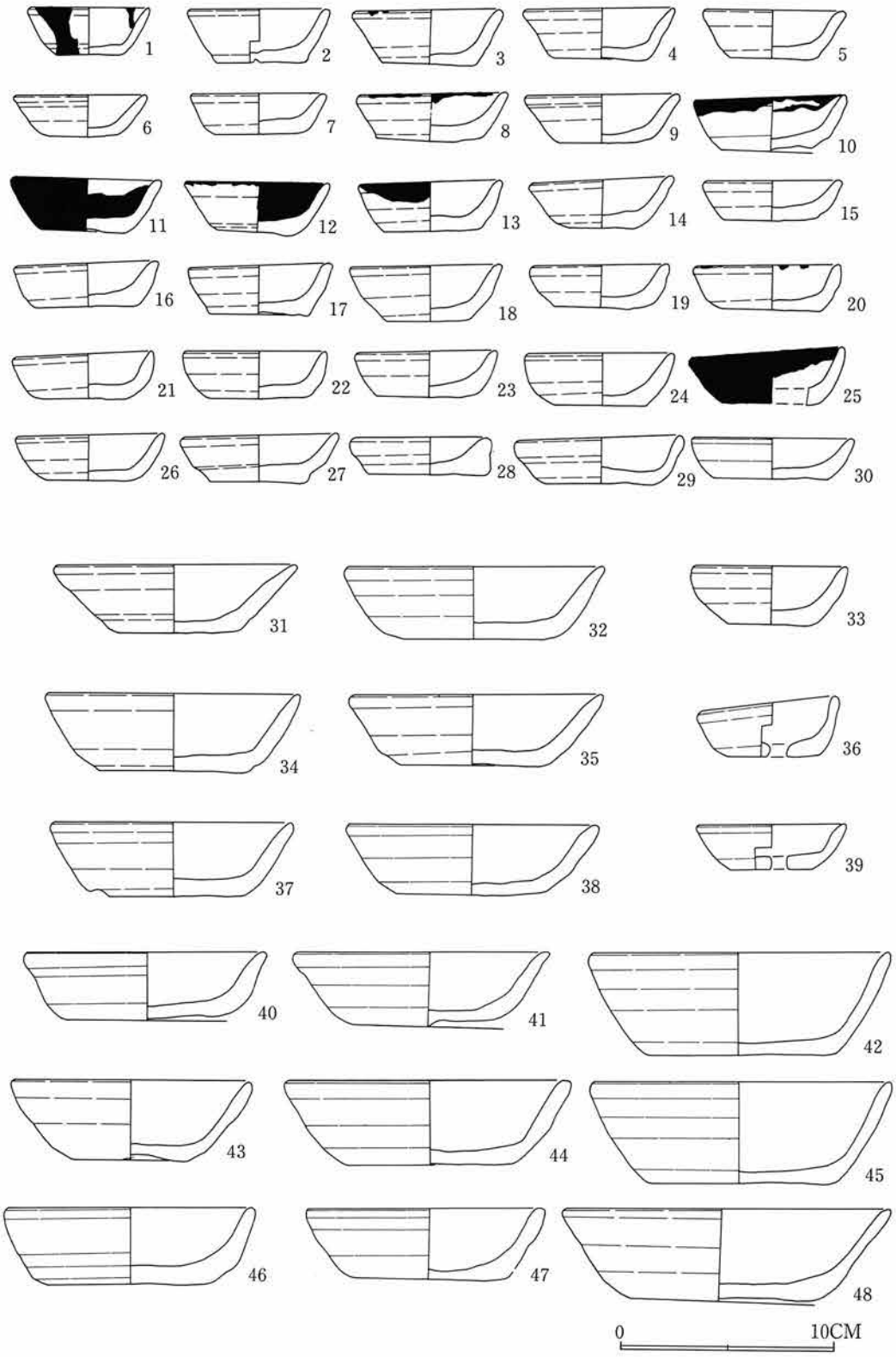


図7　第1面包含層出土遺物　かわらけ

ある。48は最も大きく口径は15.4cmになる。1面包含層から出土するかわらけは全体に赤色を呈し、焼成温度が上がらなかったためか、焼きしまらず、手に持つと赤い粉が付く。

瀬戸（図8－1～32）

小皿（1～13）　1～2は灰釉皿。1は口径10.8cm、器高2.8cm、底径5.5cm。釉は一度内底に薄くかけ、更に口縁に厚くかけている。内底に目痕が残る。2は口径11.8cm、器高2.9cm、底径5.6cm。釉を一度内面にかけ、更に口縁に厚くかけている。内底に3ケ所目痕が残る。3～6は灰釉縁釉小皿。3は口径10.8cm、器高3.2cm、底径4.8cm。器高が高く、胎土は粗く砂っぽく、他の製品とは異なる。内底に一本沈線を配する。4は口径11.6cm。釉は透明な黄緑色を呈する。5は口径10.6cm、器高2.4cm、底径4.6cm。釉は透明な緑色、胎土は黄白色を呈する。6は口径9.9cm、器高2.3cm、底径5.5cm。釉は焼成不良のため白渇色を呈する。7は口径10.4cm、器高2.2cm、底径5.8cm。底が丸くなる。釉は暗緑色、胎土は灰黄色を呈する。全体にススが付着し、口縁部にはタールが認められ、灯明皿に使われている。8は口径11.7cm、器高2.4cm、底径6cm。釉は透明な緑色、胎土は灰白色を呈する。9～13は黒釉縁釉小皿。9は口径11.2cm、器高3.1cm、底径6.2cm。釉は部分的に胴下部から外底に流れている。胎土は灰色を呈する。内底面に強いナデがある。10は口径11.2cm。胎土は灰黄色を呈する。11は口径11.3cm。内底面に赤色顔料が付着する。胎土は灰色を呈する。12は口径9.8cm、器高2.6cm、底径5.6cm。胎土は砂っぽく、灰黄色を呈する。13は口径10cm、器高2.5cm、底径5cm。内底に円圏と強いナデが残る。小皿はすべて糸切り底である。

灰釉碗（14～19）　14は底径4cm。釉は暗緑色を呈し、胴下部までかけている。胎土は灰色を呈し、粗い。高台は丸い粘土紐を貼り付け、外底面には糸切り痕が残る。15は底径5.8cm。釉は不透明な暗緑色を呈し、現存内面のみかけている。内面胴部に目痕が2ケ所残る。高台は削り出しである。16は口径16cm、器高6.6cm、底径5cm。釉は不透明な黄緑色を呈し、外面口縁下から内面にかけられている。内面に2ケ所目痕が残る。胎土は黄白色を呈する。高台は削り出しで、畳付に糸切り痕が残る。17は口径15.2cm、器高7cm、底径4.8cm。釉は斑な緑白色を呈し、胴下部から内面にかけられている。内面に1ケ所目痕が残る。胎土は灰色を呈する。高台は削り出しで、畳付に糸切り痕が残る。18は口径15.1cm、釉は緑色を呈する。口縁部は天目茶碗状に歪曲する。胎土は灰色を呈する。19は口径14cm。口縁部は天目茶碗状に歪曲する。釉は透明な緑色を呈し、内面に刷毛塗りし、更に口縁部に厚くかけている。胎土は灰色を呈する。

天目茶碗（20～24）　20は口径12.2cm、釉は柿釉と黒釉にかけ斑になる。胎土は灰色を呈する。21は口径12.3cm、器高6.4cm、底径3.8cm。釉は黒釉の上に柿釉を口縁部のみにかけている。胎土は灰白色を呈する。高台は削り出しである。22は口径20cm、器高約6cm、底径4cm。釉は黒釉の上に柿釉をかけている。胎土は灰白色を呈する。高台は削り出しである。23は底径4.8cm。高台脇から胴部へかけて直線的に立ちあがる。釉は黒釉である。胎土は灰白色を呈する。高台は削り出しである。24は底径4.2cm。釉は黒釉を現存内面のみにかけている。胎土は灰白色を呈する。高台は削り出しで畳付に糸切り痕が残る。

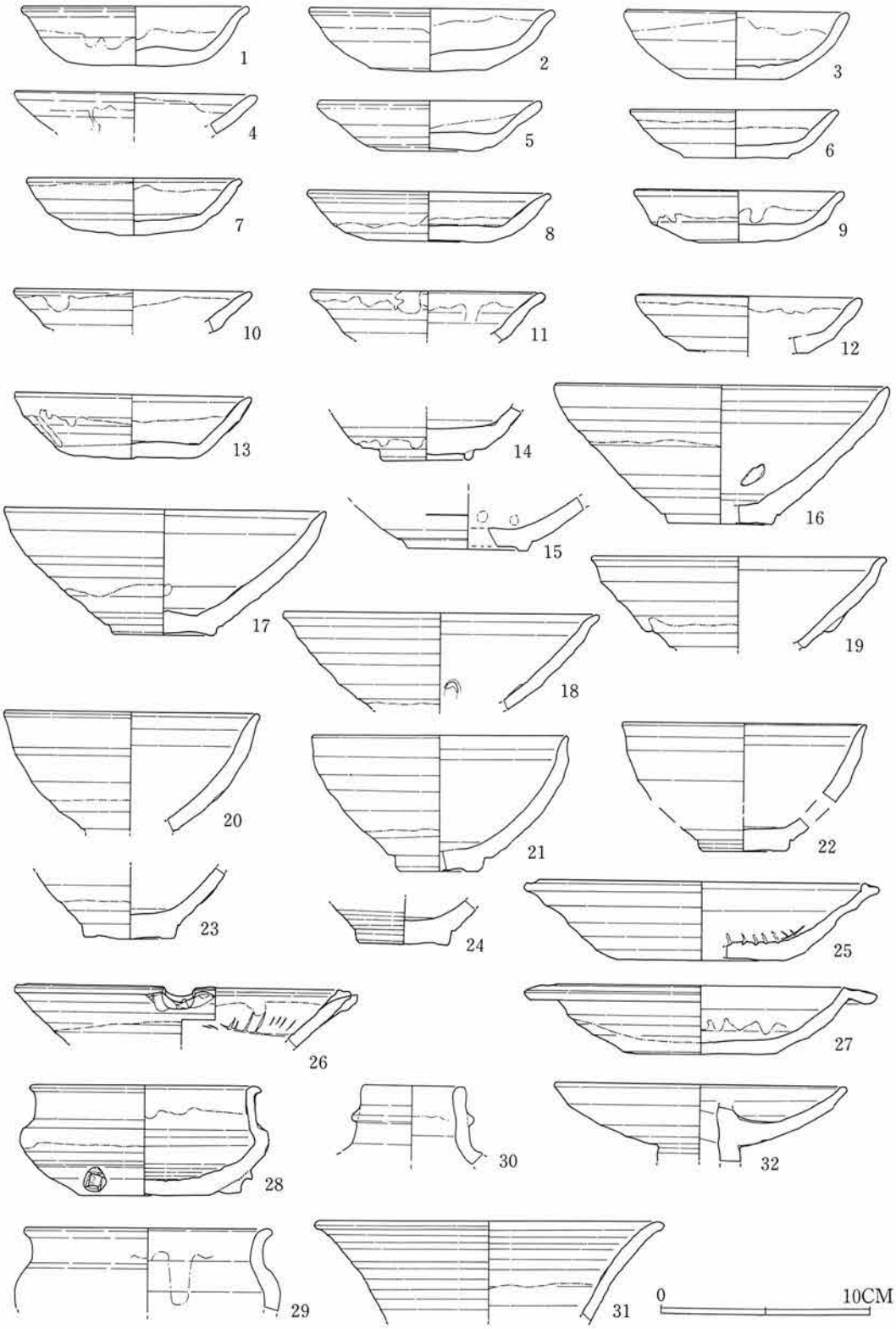


図 8　第 1 面包含層出土遺物

おろし皿(25、26)　25は口径17cm、器高3.2cm、底径8cm。口縁下部に強い窪みができ、端部はY字状になる。釉は緑白色を呈し、口縁端部にかけている。胎土は黄白色を呈する。26は口径16.4cm。口縁に片口が付く。釉は不透明な暗緑色を呈し、口縁端部にかける。胎土は灰黄色を呈する。

折縁皿(27)　口径16.8cm、器高3.2cm、底径17.4cm。口縁を水平近くまで折り曲げている。釉は黄色を呈し、内面を刷毛塗りし、口縁部を漬掛けしている。胎土は黄白色を呈する。破損面に修復の黒漆が残る。

香炉(28、29)　28は口径11.2cm、器高5.3cm、底径6.2cm。袴腰香炉である。脚は粘土塊を貼付けただけで浮いている。釉は暗緑色を呈し、外面胴部上から内面頸部までかけている。破損部に修復の黒漆が付着する。29は口径11.8cm、袴腰香炉である。釉は灰緑色を呈し内面頸部から外面胴部にかけている。

その他(30～32)　30は口径4.8cmの瓶子である。釉は緑色を呈し内面頸部から外面にかけてかけられている。31は口径16.6cmの花瓶である。釉は黄緑色を呈し、内面頸部の下から外面にかけられている。胎土は灰白色を呈する。32は燭台である。中位の皿の径は13.9cm。釉は透明な緑色を呈し、全体に細い貫入がある。軸の内側は無釉である。胎土は灰色を呈する。

青磁(図9－1～9)

碗（1～7）　1は口径13cmの蓮弁文碗。釉は透明な緑色、胎土は灰色を呈する。外面に轆轤成形痕が残る。2は口径14cmの蓮弁文碗。1より巾が広い。釉は不透明な緑色、胎土は灰色を呈する。3は口径14.6cmの端反り無文碗。釉は不透明な灰緑色、胎土は灰色を呈する。4は口径15.2cmの無文碗。釉は不透明な灰緑色、胎土は灰色を呈する。5は口径17cmの端反り無文碗。釉は透明な灰緑色、胎土は灰色を呈する。7は口径15cmの無文碗。釉は不透明な灰青色、胎土は灰色を呈する。

皿（8、9）　8は口径12cm。釉は不透明な灰緑色、胎土は灰色を呈する。口縁部が大きく外反する。9は底径7cm。釉は灰青色を呈し、高台外脇までかけている。胎土は灰色を呈する。

白磁（図9－10～13）

皿（10、11）10は口径12cm。口縁は内湾ぎみに立ち上がる。釉は白濁色をし、貫入がある。胎土は灰色をし陶質である。11は底径6.6cm、口兀皿である。釉は外底面までかけている。

碗(12、13)　14は口径8.6cm。腰が折れ、口縁は外反する。釉は透明な黄白色、胎土は白色を呈する。15は角坏である。釉は不透明な黄白色、胎土も同様で陶質である。

天目茶碗(図9－14、15)14は口径11.6cm。黒釉の上に柿釉をかけ、胴下部の釉溜りが厚い。胎土は灰色を呈する。15は底径4cm。高台は削り出している。釉は漆黒を呈し、胴下部の釉溜りが厚い。胎土は灰色を呈する。

褐釉四耳壺(図9－16)頸部径は11.6cm。釉は褐釉の上に黄をかけているようである。胎土は紫褐色を呈し、挟雑物を含まず堅緻である。市内でしばしば発見される茶入の胎土と同じである。

常滑(図10－1～3)

鉢（1、2）　1は口径40cmの擂鉢。外面口縁下がくびれる。鎌倉市内の遺跡からはこれまで出

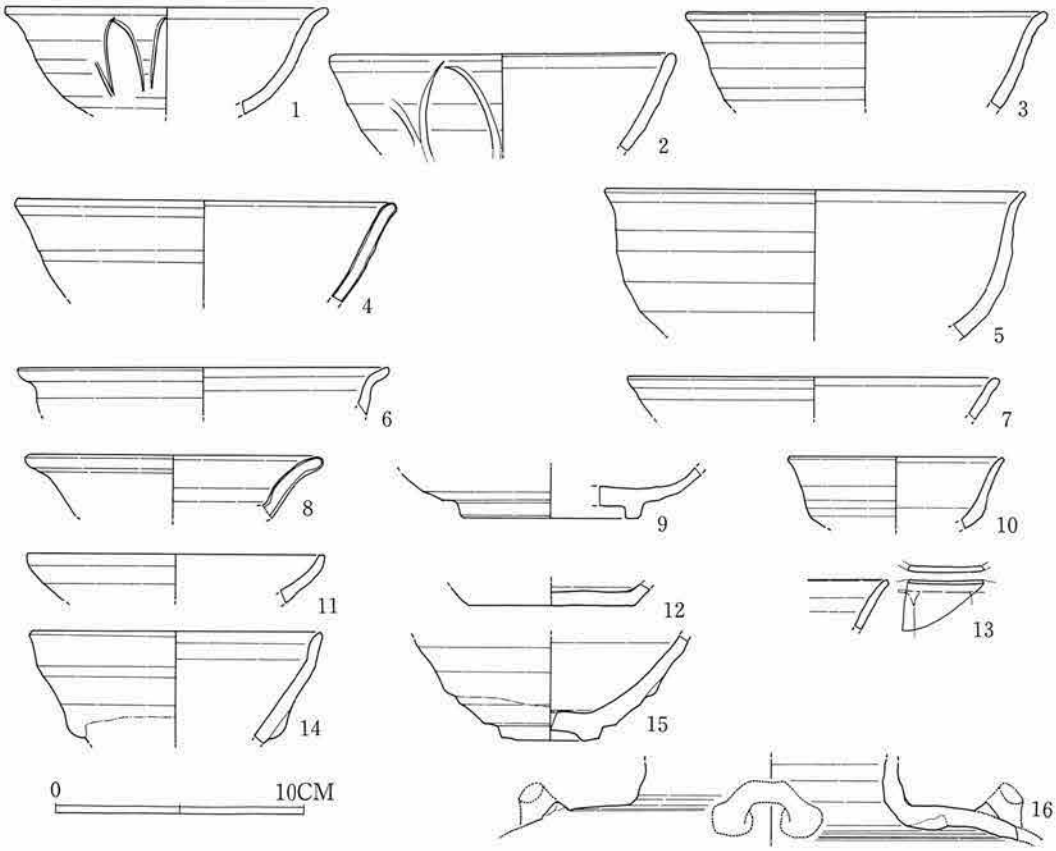


図9　第1面包含層出土遺物

土していない。細い状線が下から上に配される。外面胴下に指頭痕が残る。2は口径31.6cmのこね鉢。口縁部の両端を引き出している。

甕（3）　底径21.2cm。外面胴下に木口状工具による調整痕、内面にも刷毛目状の痕が残る。

瓦質製品（図10―4～19）

香炉（4～8）　4は口径7cm。口縁下に一本沈線を巡らせ、斜状文を型押しする。5は口径10.4cm、器高4.5cm、底径6.8cm。口縁下に一本沈線を巡らせ、唐草と梅花を型押しする。6は口径11cm。口縁下の2本沈線の間に雷文を型押しする。7は口径7.8cm、器高4.2cm、底径5cm。底に脚が付く。口縁下の2本沈線の間に釘貫文を型押しする。8は口径8.2cm、器高4.6cm、底径6.4cm。底に脚が付く。口縁下の一本沈線の上に雷文を型押しし、胴部には箆磨の痕が残る。

火鉢（9～13）　9は口径25.6cm、器高9.2cm、底径16.8cm。底に脚が付く。外面全体と内面口縁下に箆磨の痕が残る。文様はない。10は鍔付である。鍔上に円形の文様を型押しする。鍔の端から上方は黒く燻され、強い箆磨きの痕が残る。11は口縁下に菊花を型押しし、珠文を貼付する。12は口縁下の2本の突帯の間に珠文を貼付する。13は口径37.6cm、器高11.2cm、底径15cm。口縁下の2本沈線下に珠文を貼付する。文様下に箆磨きの痕が残る。

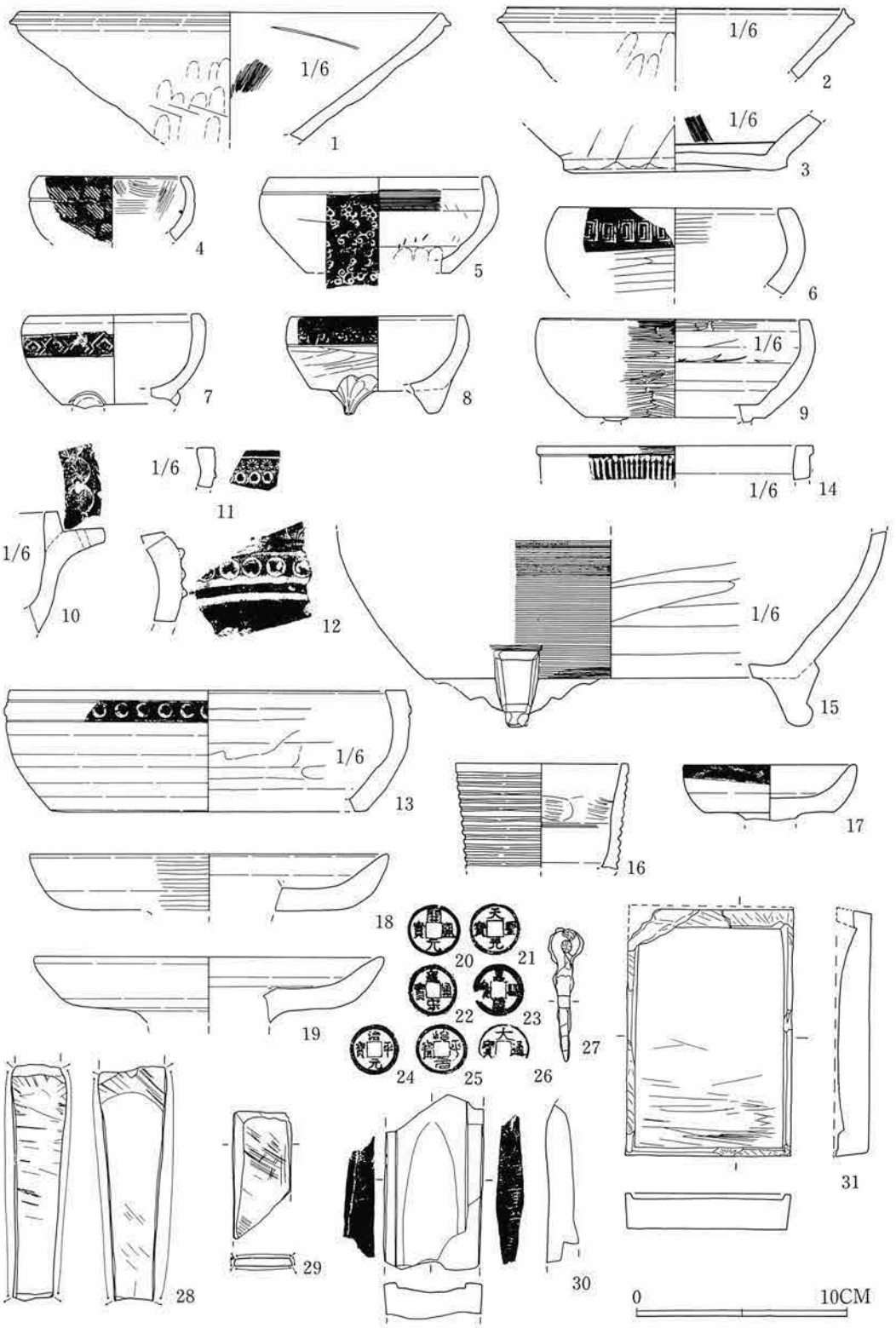


図10　第１面包含層出土遺物

風呂(14、15)　14は口径26.2cm。口縁は水平に折れ、頸部に型押しの連子を配する。15は底径35cm。面取りした脚が付き、胴下部にかけて強い篦磨きの痕が残る。

香炉(16)　口径8.2cm、外面は口縁から胴下部まで輪状の文様が入り、強い篦磨きの痕が残る。

燭台(17～19)　17は口径8.2cm。口縁部にタールが付着する。外面は篦磨きされている。内面にはナデ痕が残る。18は口径17.1cm。燭台の中位に付く皿と思われる。外面胴部と内底面に篦磨きの痕が残る。19は口径16.9cm。燭台の中位に付く皿と思われる。外面胴部と内底中心近くに篦磨きの痕が残る。

金属製品(図10―20～27)

銭が7点出土している。20は開元通宝、楷書、初鋳621年。21は天聖元宝、楷書、初鋳1023年。22は皇宋通宝、楷書、初鋳1039年。23は嘉祐通宝、篆書、初鋳1056年。24、25は治平元宝、行書、篆書、初鋳造1064年。23は大観通宝、楷書、初鋳1107年。

留金具(27)は、頂部を丸くまるめて環状に作っている。長さ6.2cm。

石製品(図10―28～31)

砥石(28、29)　28は柱状の中砥である。両端が欠損している。29は京都深草産の仕上砥である。

硯(30、31)　30は粘板岩製である。両側面に釘でひっかいたような文字がある。右側は「圍光也」、左側は「高重花影」と読める。31は長さ11.8cm、幅7.8cm、高さ1.7cm。断面は台形を呈する。石材は灰褐色を呈する。

第3節　第2面で発見された遺構と遺物

第2面は第1面下の土丹地行層、その下層の暗褐色土、植物が腐触した土層が約50cm余り堆積し、部分的に土丹地行をした面があらわれる。第2面の検出作業にあたっては、第1面時に湧水が多く、遺構が冠水する程であったため、更に四周に排水用の溝とカマ場を南西隅に設けた。

土丹地行面は調査区の南半分から、かなりしっかりした状態で発見されたが、北側ではそれ程しっかりとはしていない。第1面程ではないが、遺構の残りは良くない。柵列、溝、土壙、橋（？）河川が発見された。確実にまとまりのある建物と思われる遺構は発見されなかった。以下遺構について述べてみる。

溝1

調査区の中央を巾約60cmで河川に直交するように流れ込む。約4mの長さで比高差は約50cmと急激に落ち込む。北側よりに堰状の巾50cmの高まりがある。溝中からは少量のかわらけ片が発見されたにすぎない。

出土遺物（図13－1）

かわらけ（1）　口径8cm、器高2.5cm、底径4.4cmである。口縁部の内外にタールが付着する。

溝2

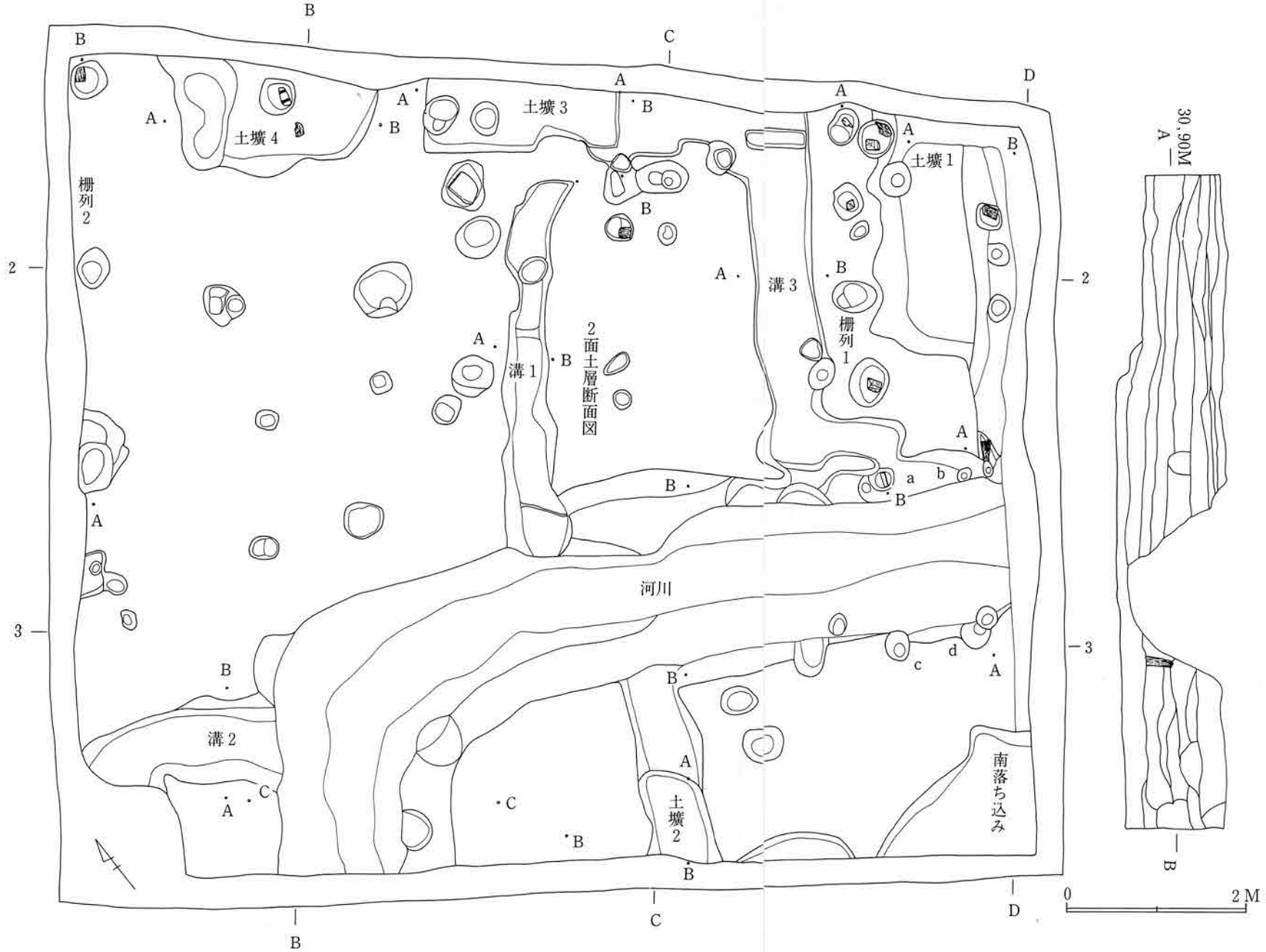


図11　第2面遺構平面図・土層断面図

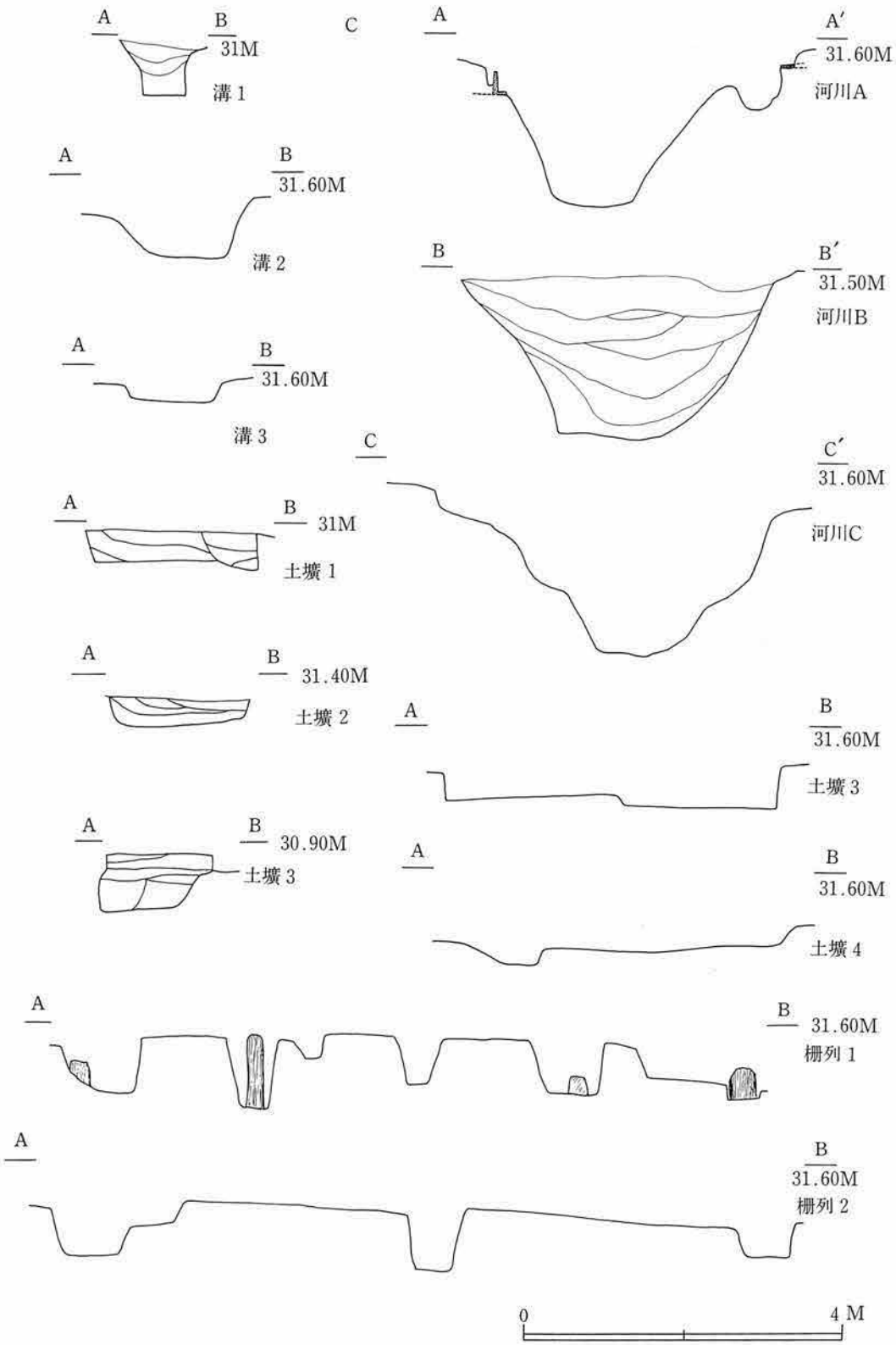


図12　第 2 面遺構土層図・断面図

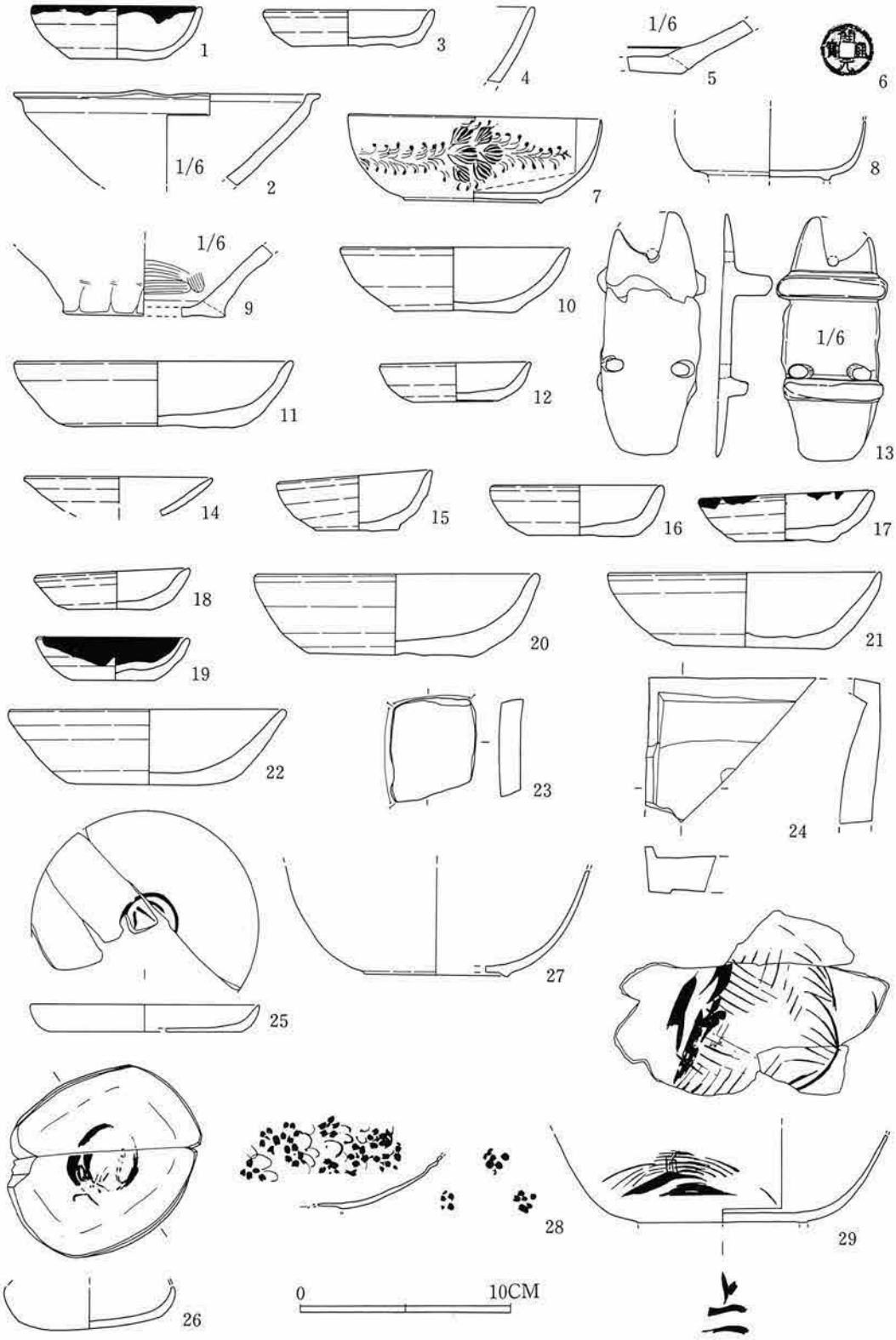


図13　第２面遺構出土遺物　溝（１～２）土壙（３～８）柱穴（９～13）河川上層（14～29）

巾約１m、深さ約30cmで河川が南に曲る付近に直するように接続する。溝は1.2m余りで南側に曲る。溝は東から西へ４cmの比高差を持つ。溝の底は河川の底より70cm余り高く、同時存在とすれば河川の水が増水するとこの溝に流れ込むようになる。溝中からはかわらけ小片、常滑こね鉢が出土している。

出土遺物

常滑こね鉢（図13－２）口径29cm、口縁部がわずかに片口状になる。胎土は赤褐色をし、小砂利を含む。内側に磨滅痕が残る。

溝３

調査区の東側に位置し、鍵の手状に歪曲しながら河川と接する。北側は土壙３により破壊され東に北へのびるかは不明である。巾約70cm、10cm～20cmで川へ流れ込む。比高差は北と南で約25cm余りである。溝中からは小かわらけ片が出土しただけである。

土壙１

調査区北東隅に位置し、調査区外に延る方形の土壙である。土壙の東側は更に溝あるいは土壙に切られている。土壙の底はほぼ平らであるが、中央東寄りから傾斜し、他の遺構がからんでいると思われる。土層図からも確認することができる。遺物はかわらけ、常滑、銭、漆器が出土している。

出土遺物（図13－３～８）

かわらけ（３）　口径8.1cm、器高1.6cm、底径5.4cmである。胎土は赤色を呈し粗い。

瓦質黒縁碗(4) の口縁。胎土は灰色を呈し良く精製されている。口縁の内外が真黒常滑（５）大甕の底である。小片のため計測できなかった。

銭（６）　開元通宝、楷書、初鋳621年。

漆器（７、８）　７は中型の椀で口径12cm、器高４cm、底径6.5cm。全面に黒漆を塗り、手描きで花(藤？)を描く。８は底径約5.8cmの椀である。外面は黒漆、内面を朱漆と塗り別けている。文様はない。

土壙２

調査区南側に位置し、調査区外に延る。巾約70cm、深さ約15cmで長方形を呈する。遺物は発見されていない。

土壙３

調査区の北側に位置し、一辺約2.15m、深さ約10cmの方形を呈する。土壙の西側に２個の柱穴が発見されているが土壙との関係は不明である。土壙中央から東にかけて20cm余りの比高差で低くなる。他の遺構と重複しているのかは確認できなかった。遺物は出土していない。

土壙４

土壙３の西側に位置する。西側の端は２個の柱により壊されている形状は方形を呈するようで、深さは東側では浅く約10cm、西側では深く約30cmである。遺物は出土していない。

柵列１

調査区の西側隅に南北方向に発見された。柱間は１間2.10mの間隔で２間発見された。遺物は出土していない。

柵列２

調査区東の土壙１と溝３の間を南北方向に延る。柱間は１間約１mの間隔で３間発見された。柱穴内には１間おきに礎板が入る。

橋状遺構（図11－ａ～ｄ）

河川の東端にほぼ似た柱穴を発見した。南岸の柱穴は径約35cm、深さ40cm、北岸の柱穴のは径約25cmと15cm、深さ約50cm余りある。この柱はそれぞれが対応し、南北約1.80m、東西約１m余りになる。ここでは橋の脚の可能性として取り上げた。簡単な橋の可能性が考えられないだろうか。遺物は出土していない。

柱穴出土遺物（図13－９～13）

遺物を構成する柱穴は発見されなかった。

柱穴５からは底径15.4cmの常滑甕（９）の底部、柱穴７からは口径10.9cm、器高３cm、底径５．６cmのかわらけ(10)、柱穴20からは口径13.2cm、器高3.1cm、底径4.7cmのかわらけ(11)、柱穴21からは口径7.2cm、器高1.8cm、底径４cmのかわらけ(12)、柱穴16(土壙４の中)からは長さ約22.8cm、巾9.2cm、高さ4.8cmの下駄(13)が出土している。下駄を柱穴中に礎板代わりに入れた例は千葉地や市内の遺跡からしばしば報告があるが本遺跡のように歯を上にした例はこれまではなかった。

河川出土遺物

発見時は寺内を区画する堀りではないかと考えたが、遺構内の堆積状況から河川と判断した。調査区の東から西へ約７m余りでほぼ直角に流路を南へかえる。巾は約1.5m～２m、深さは0.9m～１mあり、東から西へ比高さ15cmで流れる。河川内からは、かわらけ、陶磁器、木器、漆器など多くの遺物が発見されている。遺物は上層と下層に分けて取りあげているが、正確に層位的に分けていない。

上層出土遺物（図13－14～29．図14～30～35）

かわらけ（図13－14～22）

14は口径8.9cmの白かわらけである。胎土は灰白色を呈する。15～19は小型のかわらけである。18は内面から外面にかけて黒いタールが付着する。20～22は口径約13cm前後の大型かわらけである。

常滑(23)

常滑の甕の胴部片の断面が磨滅している。

石製品(24)

大型硯である。石材は茶褐色を呈する。裏面は高さ約0.2cmの縁が付く。

漆製品(25～32)

皿、椀、脚などが出土している。

皿(25、26)　25は口径10.8cm、器高1.3cm、底径９cm。黒漆を全体にかけ、内底面に朱漆で円を描

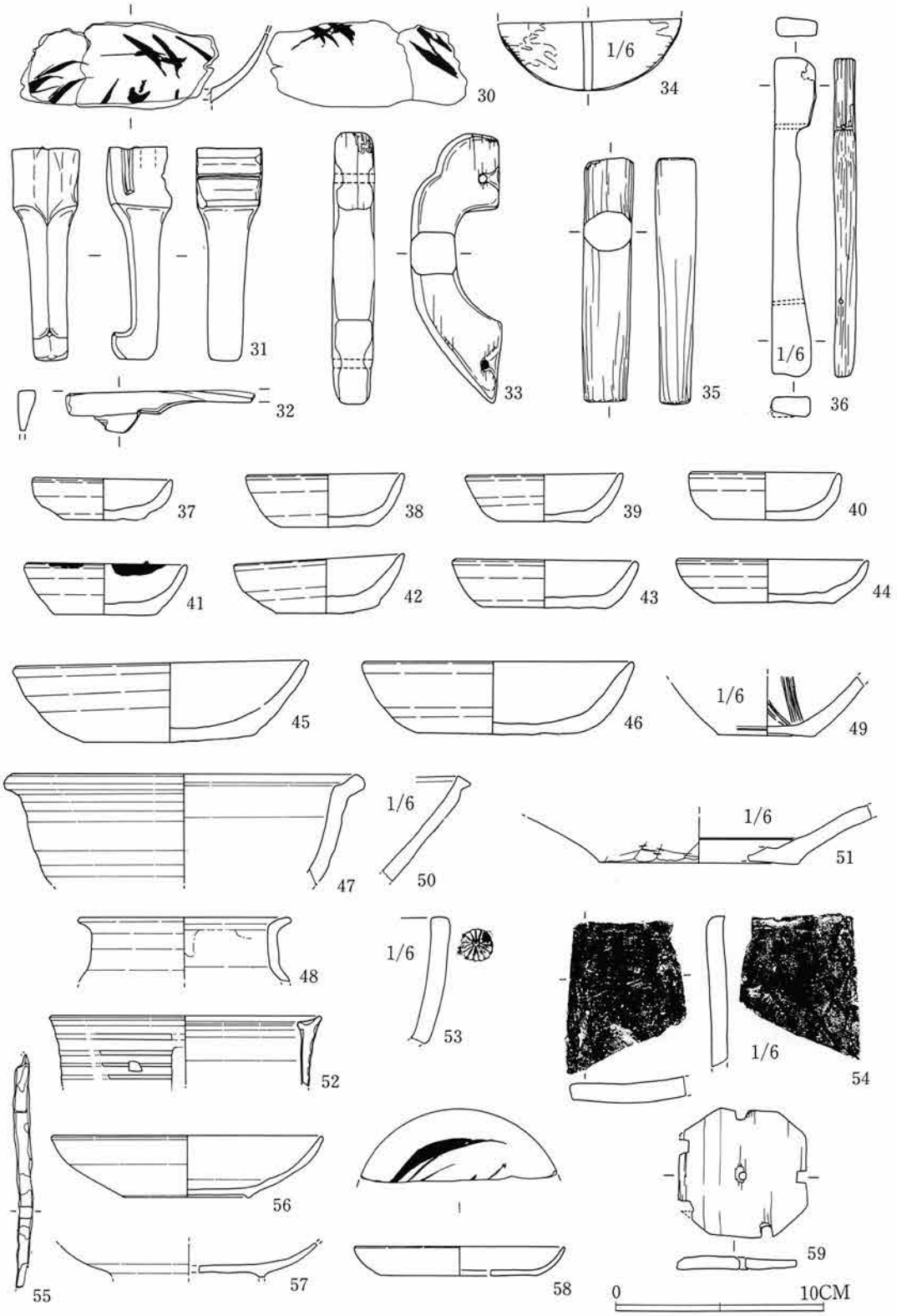


図14　第２面遺構出土遺物　河川上層（30～35）河川下層（36～59）

き中に不明の文様を配する。平底である。26は土圧で歪んでいる。推定すると底径は7.2cm余りになるが、口径、器高は不明。平底である。

椀(27～30)　27は底径6.7cm。低い高台が付く。外面は黒漆、内面は朱漆を塗る。文様はない。28は計測不能であった。全体に黒漆を塗り、朱漆で内面は梅状の文様を密に、外面には散在させている。29は底径約8cm。全体に黒漆を塗り、朱漆で内底面に波文、外面胴部に山水の文様を描く。外底面には朱漆で「上一」と描いている。30は椀の胴部である。内外面の胴部に朱漆で鳥文を描く。

脚(31)は全長10.2cm。非常に丁寧に造り、黒漆も厚くかけている。頂部には孔があり木釘が埋まっている。膳の脚であろうか。

肘状製品(32)　黒漆を全体にかけるが上面にはかけていない。天板に接続していたのであろう。断面は台形状になる。

木製品(33～36)

把手、曲物底、脚などが出土している。

把手(33)は全長13cm。雲形状を呈する。断面は方形を呈し、隅を落している。両端に曲物に結び付けた孔があり、下方の孔には桜の皮が残っている。

曲物底(34)は径17.6cm、厚さ0.8cm。

不明木製品(35)は全長11.7cm、断面は楕円形を呈し2.3cm×1.9cm。

脚(36)は全長30.8cm、断面は長方形を呈し、4cm×1.6cm。上方にくびれがあり下に向かって三角形状になる。反対側は直線になる。上方と下方に孔があり、木釘が残る。簡単な行器の脚かと思われる。

下層出土遺物（図14－37～59.図15－60～68）

上層と同様にかわらけ、瀬戸、常滑、舶載陶磁器、木器、漆器が出土している。

かわらけ（37～46）

37～41は口径約8cm、器高2cm～2.5cm、底径4cm～5cm。42、43、44は口径約9cm、器高約2.5cm、底径約6cm、45、46は口径約13～14cm、器高約3.5cm、底径約8cm。下層からは外反する型のかわらけは出土していない。

瀬戸（47～48）

47は口径16.6cmの灰釉折縁鉢。釉は黄白色を呈し、胴中程より内面にかけ、所々むらがある。胎土は黄白色を呈する。48は口径12.4cmの灰釉香炉。口縁部は折縁になる袴腰型と思われる。釉は透明な灰色を呈し、細い貫入があり、内面頸部から外面にかけられている。胎土は灰白色を呈する。

備前(49)

49は底径9.6cmの備前の擂鉢である。櫛目は5本で一単位になる。胎土は灰色を呈し堅い。内底近くは磨滅している。

常滑（50、51）

50は外面口縁部に強いくびれが入る。胎土は赤褐色を呈する。内面胴部は磨滅している。51は底

径19.4cmの常滑の甕。外面底近くに木口状工具による縦方向のナデ痕が残る。

青磁(52)

52は外面胴部に削り出しの算木文を配する口径13.2cmの筒形香炉である。釉は不透明な緑色を呈し厚くかけられている。口縁部の両端が少し黄色をおびる。胎土は灰白色を呈する。

瓦質製品(53、54)

53は外面口縁下に菊花文のスタンプを配する火鉢、54は裏面に傾格子の叩目を持つ瓦。

金属製品(55)

55は現存長12.3cm、一辺0.6cmの頂部の偏平につぶした角釘。

漆製品(56～58)

56は口径13cm、器高3cm、底径6.2cmの黒漆の皿である。口縁部が直立気味に立ちあがり、内底面近くに段ができる。これまで鎌倉では出土例がない。57は底径約7.4cmの椀と思われる。全体に黒漆を塗っている。58は口径10.2cm、器高1.4cm、底径7.4cmの平底の皿。全体に黒漆を塗り、朱漆で内底に波状の文様を描く。

木製品(59～68)

把手付曲物、折敷、蓋、不明木製品が出土している。59は不明木製品。約0.8cm余りの板を八角形に切り、中心に孔をあけ、縁に4ケ所の方形の刻を入れている。60は全長13cm、径約0.6cmの棒状木製品。箸と比べると径が太く、異なると思われる。61は不明木製品。長さ約9.6cm。少し湾曲し、一方に長方形の張り出しが付く。62は一辺18cmの折敷。各辺の中央に0.3cmの孔があく。厚さは約0.1cm程度である。63～65は把手である。いずれも側面は「う」の字状になり、上部に切り込みをいれている。曲物桶の把手である。上下2ケ所に孔をあけている。64、65は桜皮が残っている。66は直径約21.8cm、厚さ0.3cmの蓋と考えられる。中央に桜皮を結んで紐にしている。67は口径21.5cm高さ約13cmの把手付曲物桶。桶は三重に巻き、把手の所は四重になる。桶の綴目と把手の綴は別々にしている。底板の厚さは一方は0.9cm、一方は0.6cmと均一ではない。底板を留めた木釘の痕跡はない。底板の片面は黒褐色の遺物が浸み込んでいる。68は口径22.1cm高さ12.3cmの把手付曲物桶。桶は三重に巻き、把手の所は四重になる。桶の綴目と把手の綴は別々にしているようだ。残存状態が悪く不明。把手の接続部分の上方は桜皮が内面まででて綴ているのがわかるが、下方は不明で、中程で綴ている。底板は厚さ約0.8cmである。側面に木釘などの痕跡はない。66は曲物の綴場と把手の位置が同じ所になるが、67は把手の上の綴は内側まで貫通しているが下方の綴は中程で止まり貫通していない。このため曲物本体の綴場は異なる所に位置する可能性があるが、本体の残りが悪いため確認する事はできなかった。

南落ち込み出土遺物（図15—69～76)

調査区のちょうど南東隅に位置する。下場の線が余り明瞭ではなく、緩やかに南東へ傾斜する。性格は不明である。瀬戸、かわらけ、釘が出土している。

瀬戸(69)

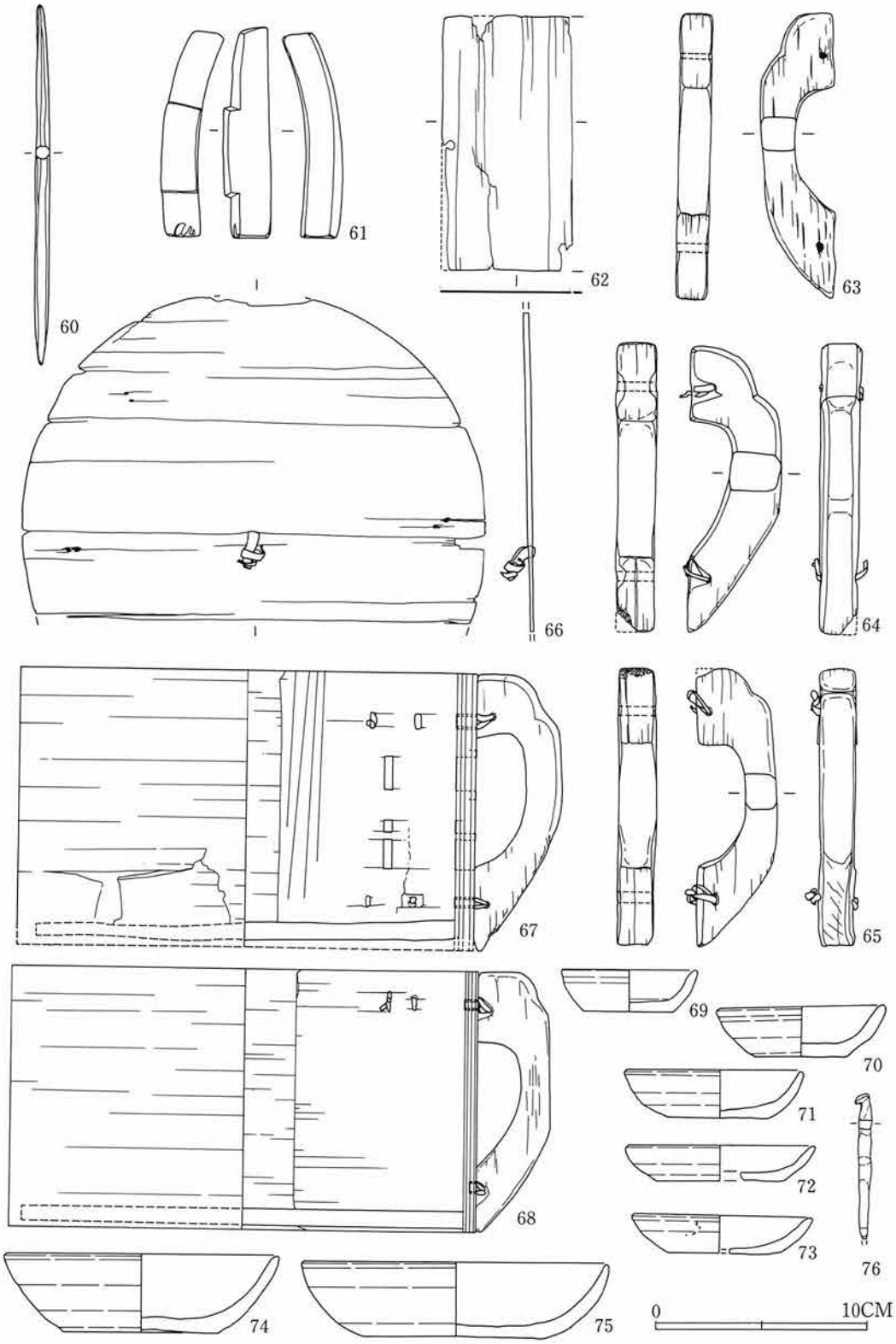


図15　第２面遺構出土遺物　河川下層（60～68）南落ち込み（69～76）

口径6.5cm、器高２cm、底径4.3cmの入子。内面から外面胴下部まで黒くススけている。内底は少し磨滅している。外底は糸切りである。

かわらけ(70～75)

小型かわらけは出土せず、中型かわらけ(70～73)のうち70、71は口径８cmと8.4cm、器高2.3cm、底径4.4cmと4.8cm。72、73は口径8.8cm、器高1.7cmと1.8cm、底径６cmと5.2cm。器高が70、71と比べて低い。大型かわらけ(74、75)は口径12.8cmと14.6cm、器高3.7cmと3.5cm、底径7.4cm、8.6cm。この遺構から発見されたかわらけで外反する口縁の型態はない。

金属製品(76)

鉄製角釘(76)　頂部と偏平にし、折り曲げている。全長6.9cm。鉄釘は何本か出土しているが、すべて銹がひどく、実測できたのは１本だけであった。

第４節　第２面包含層出土遺物

かわらけ、瀬戸、常滑、舶載陶磁器、瓦質製品、木器、漆器が出土している。

かわらけ（図16－１～47)

第１面の小型かわらけの器高が高く、器壁が厚く、外反する型は少ない。口縁が直行する型（１～４)、口縁外反する型（５～６)、口縁が直立気味に立ちあがる型（７～14)、口縁が内湾気味に立ちあがる型（15～19)が認められる。口径８cm前後の中型かわらけ（20～26)が少数残存する。口径８cm前後のかわらけは器高の低い製品が多い。口径13cm以上の大型かわらけ(27～45)もそれぞれ口縁が直行、直立、内湾の型があり、口縁が外反する型(36)は１点しかない。43、44は口径が16cm余りある。45、46は白かわらけ。45は口径6.1cm。46は手捏の白かわらけである。

表II

第２面　包含層かわらけ法量表（単位cm)

No. ＼ 法量	口径	器高	底径	No. ＼ 法量	口径	器高	底径
1	7.0	2.6	4.2	24	7.8	2.5	4.5
2	7.0	1.9	4.2	25	8.3	3.0	4.4
3	7.0	2.3	4.0	26	8.2	2.7	4.4
4	7.4	2.6	4.0	27	10.7	3.0	6.2
5	6.5	2.0	3.5	28	10.4	3.6	5.6
6	7.2	2.0	3.5	29	11.2	3.6	6.0
7	6.7	2.3	4.4	30	12.5	3.0	7.0
8	7.2	2.3	3.9	31	13.0	3.4	7.2
9	6.4	1.9	4.0	32	12.0	3.4	7.6
10	7.2	2.2	3.6	33	14.0	3.4	7.4
11	7.2	2.1	5.0	34	13.0	3.2	7.2
12	6.5	2.5	4.6	35	11.8	3.7	6.0
13	6.7	2.3	4.6	36	12.5	3.5	5.0
14	6.7	2.3	4.0	37	12.0	3.5	5.3
15	7.2	1.6	5.0	38	13.0	3.3	7.0
16	7.2	2.1	3.7	39	12.7	3.3	7.2
17	7.2	1.8	4.5	40	12.0	3.4	7.0
18	7.0	2.3	4.3	41	12.4	3.4	7.0
19	7.0	2.2	3.8	42	16.0	4.3	8.8
20	6.2	2.2	3.5	45	13.6	3.3	7.2
21	8.6	2.2	4.9	43	16.3	4.6	9.0
22	8.0	1.9	5.0	44	9.0		
23	8.0	2.3	5.0				

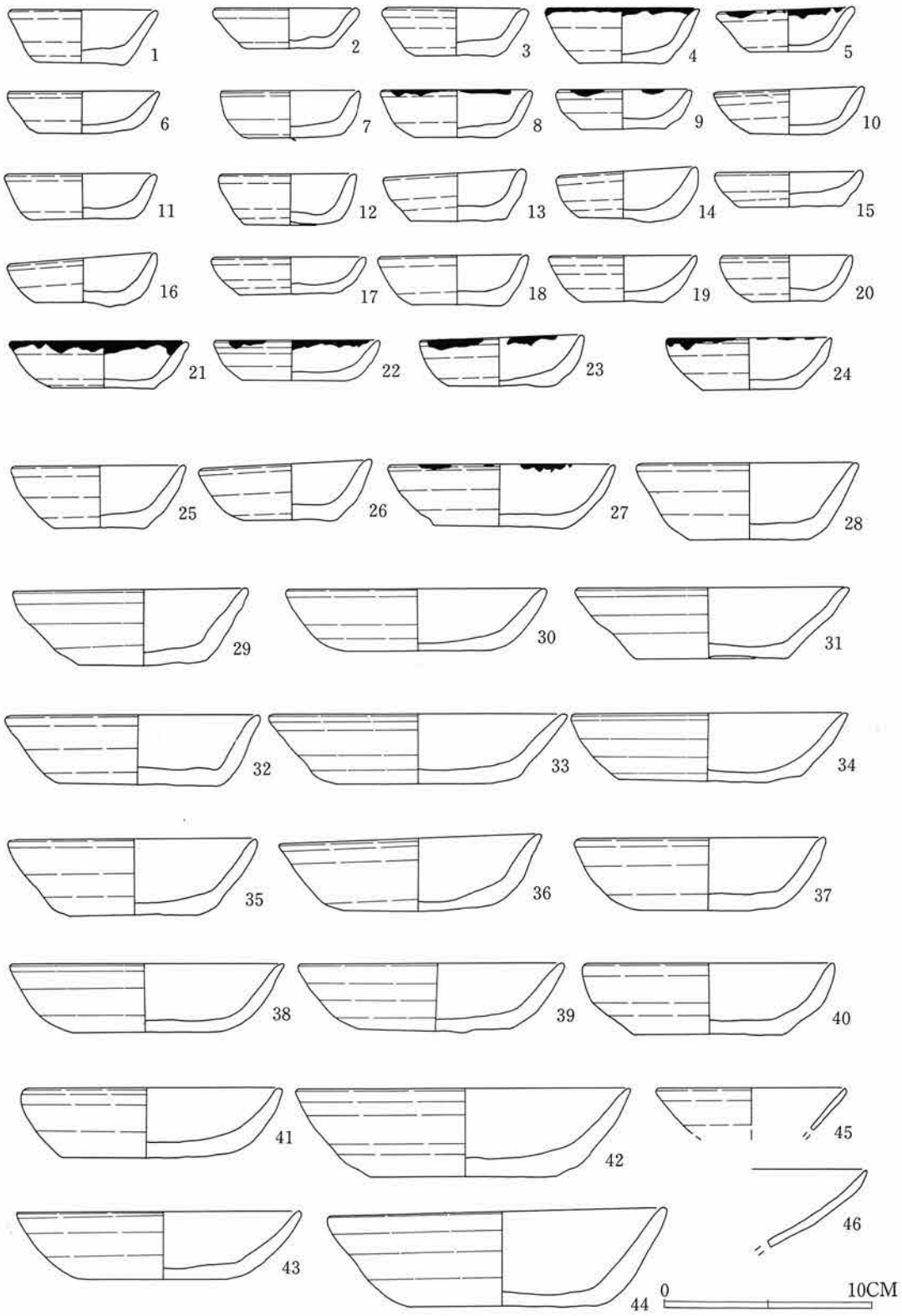


図16　2面包含層出土遺物　かわらけ

瀬戸(図17－１～30、図18－１～18)

陶磁器類では最も多く皿、碗、おろし皿、天目茶碗、鉢、鍋、香炉、小壺など多種類が出土している。

皿(１～14)　小皿、縁釉皿など多種類が出土している。

小皿(１～３)　１は口径5.2cm、器高1.2cm、底径3.3cm。釉は透明な緑色を呈し、口縁端部から内面にかけられる。胎土は灰色を呈する。底は糸切り。２は口径6.7cm、器高1.4cm、底径3.5cm。釉は透明な黄緑色を呈し、外面口縁下から内面にかけられる。胎土は黄白色を呈する。底は糸切り。３は口径7.5cm、器高1.8cm、底径4.6cmは透明な黄緑色を呈し、外面口縁から内面にかけられる。胎土は黄白色を呈する。底は糸切り。

皿（４～６）　４は口径11.8cm、器高2.6cm、底径５cm。内面に軽く一度灰釉を刷毛塗りし、その後口縁部を漬け掛けしている。内底面に４個目痕が残る。外底面に墨で「一」の字が書いてある。５は口径11.8cm、器高1.9cm、底径6.4cm。口縁端部が軽く外反する。釉のかけ方は同じである。内底に目痕が２個残る。外底にはスノコ状の痕が残る。６は口径10.8cm、器高2.7cm、底径4.2cm。釉のかけ方は同じである。内底に２個目痕が残る。

縁釉皿（７～13）　７は口径11.2cm、器高2.3cm、底径5.7cm。口縁に不透明な暗緑色の釉をかける。内底に４個目痕が残る。８は口径10.2cm、器高2.7cm、底径４cm。不透明な緑色の釉を口縁にかけている。内底に４個の目痕が残る。９は口径11.8cm、器高2.7cm、底径5.6cm。口縁に不透明な暗緑色を呈し、口縁部にかけている。内底と外面胴下部に４個の目痕がある。10は口径10.6cm。不透明な灰緑色の釉を口縁にかける。11は底径7.2cm。透明な緑色の釉を口縁にかける。内底面６個目痕が残る。12は口径10.5cm、器高３cm、底径5.4cm。口縁に黒釉をかけている。

その他の皿(13、14)　13は口径9.2cm、器高3.1cm、底径4.4cm。底から口縁にかけ直線的に立ちあがる。底は平高台になる。黄は透明な黄色を呈し、内面から胴下部にかける。底に糸切り痕が残る。14は口径11.8cm。口縁が外へ水平に折れる。内面から胴中程に不透明な暗緑色の釉をかける。露胎部が赤褐色を呈する。

碗(15～30)　灰釉平碗、天目茶碗が出土している。

灰釉碗(15～23)　15は口径13.4cm。釉は不透明な暗緑色を呈する。胎土は灰色を呈する。16～23は灰釉平碗である。16は口径19.2cm。釉は不透明黄色を呈する。胎土は黄白色を呈する。17は口径18cm。釉は不透明な黄緑色を呈する。胎土は灰色を呈する。外面に轆轤成形痕が明瞭に残る。内面胴部に目痕が残る。18は口径19cm。釉は不透明な暗緑色を呈する。胎土は灰色を呈する。外面には轆轤成形痕が明瞭に残る。19は口径18cm。釉は黄白色を呈し、胴中程までかける。胎土は黄色を呈する。内面に目痕が残る。20は口径20cm。釉は良く溶け切らず黄白色を呈する。胎土は黄色を呈する。21は底径5.6cm。釉は黄白色を呈する。高台は浅く削り出され、畳付と外底面に糸切り痕が残る。内、外底面には３ケ所目痕が残る。22は底径５cm。釉は黄色を呈し、現存の内面のみにかける。胎土は灰色を呈する。高台は浅く削り出され、畳付と外底面に糸切り痕が残る。23は底径6.4cm。高

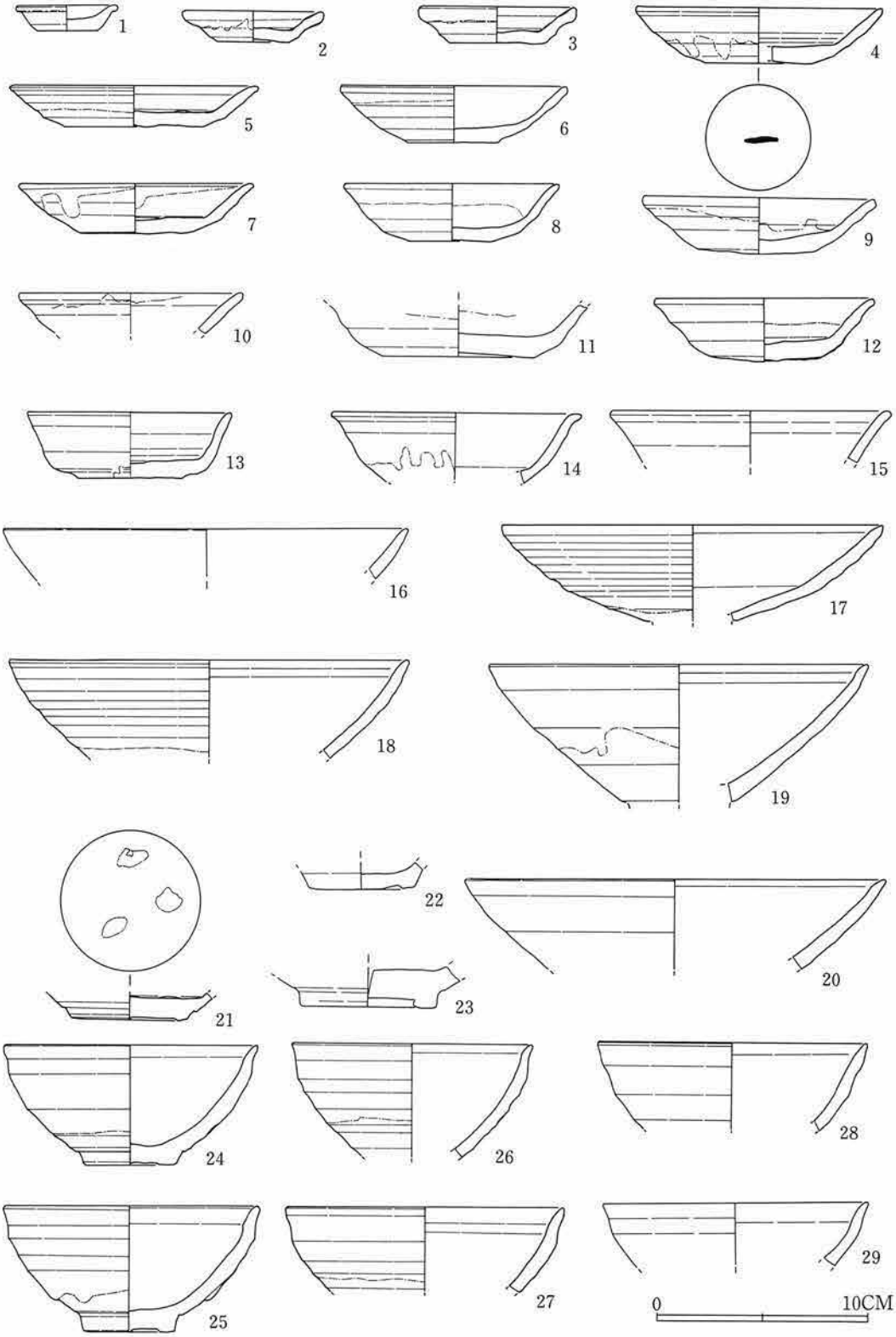


図17　第２面包含層出土遺物

台は付け高台で畳付の巾は広く、外底面に糸切り痕が残る。釉は黄緑色を呈し、胎土は灰色を呈する。

天目茶碗(24～30)　24は口径12cm、器高5.6cm、底径4.2cm。高台は削り出しである。釉は口縁端が柿釉をかけ、それ以下は鉄釉と柿釉の斑状になる。玳玻天目に似ている。胎土は灰白色を呈する。25は口径12.2cm、器高６cm、底径4.2cm。釉は口縁端部に柿釉をかけ、胴下部は柿釉と黒釉をかけ縞じょうになる。胎土は灰白を呈する。禾目天目に似ている。26は口径11.4cm。釉は褐色気味の色を呈する。口縁端部が黄褐色になる。轆轤成形痕が明瞭に残る。27は口径13cm。釉は口縁端部に柿釉をかけ、それ以下は柿釉と黒釉が斑になる。胎土は灰白色を呈する。28は口径12.8cm。釉は口縁端部に柿釉、それ以下は黒釉をかけている。胎土は灰白色を呈する。29は灰釉の天目茶碗である。口径12.6cm。釉は不透明な暗緑色を呈し、細い貫入がある。胎土は黄白色を呈する。

おろし皿(図18－１～5)　　大型や、鉢状の深いおろし皿がある。

２５は口径１８cm。口縁部がＹ字になる。口縁部に黄白色をした灰釉をかける。胎土は黄色を呈する。２は口径17cm。口縁部から外面胴中程まで黄緑色の釉をかける。胎土は黄白色を呈する。器高が他のおろし皿と比べて高い。３は口径17.6cm、器高3.5cm、底径8.8cm。口縁部は内折れ気味になる。外底は糸切り底である。釉は良く溶け切らず灰白色を呈する。胎土赤黄色を呈する。４は底径10cm。釉は良く溶け切らず灰白色に近い。胎土は黄色を呈する。５は口径25cm、器高6.6cm、底径10.8cm。釉は透明な黄緑色を呈し、内、外の胴中程までかけている。外面胴部から外底面にかけ箆削りの成形痕が残る。この後に高台を貼り付けている。胎土は灰白色を呈する。破損面に黒漆が付着する。

盤(図18－６～12)　平底と三足の型がある。

６は口径19.6cm。釉は黄白色を呈する。内面から外胴中程までかけている。胎土は黄白色を呈する。７は口径20.8cm、器高5.1cm、底径7.8cm。釉は黄緑色呈し、外面胴中程までかけている。胎土は黄白色を呈する。外面は轆轤成形痕が明瞭に残る。外底に糸切り痕が残る。内底には目痕が残る。破損面に黒漆が付着している。８は口径18.8cm、器高4.9cm、底径10cm。釉は透明な緑色を呈し、内面から胴下部にかけている。胎土は灰白色を呈する。外底に糸切り痕が残る。10は三足盤。口径33.8cm、器高10.4cm、底径16.6cm。釉は内底に一度軽く刷毛塗りをし、その後胴中程から上方を漬け掛けしている。釉は黄緑色、胎土は灰白を呈する。胴下部から外底にかけ箆成形をしている。内底に目痕が１ケ所と外面胴部には重ね焼き時の下の製品の口縁部が溶着した痕が残る。11は三足盤。口径31.4cm、器高10cm、底径13cm。口縁は10と同様に直行する。釉は胸中程から内底を一度刷毛塗りし、更に口縁部を漬け掛けしている。釉は不透明な暗緑色、胎土は灰色を呈する。胴下部から外底にかけ箆成形をしている。12は折縁の三足盤。口径32.8cm、器高7.7cm、底径12.2cm。釉は胸中程から内底に刷毛塗りし、更に口縁部を漬け掛けする。焼成不良のため釉は白色、胎土は黄白色を呈する。胴中程から外底周縁を箆成形する。外底中心部には糸切り痕が残る。

行平鍋(図18－13、14)

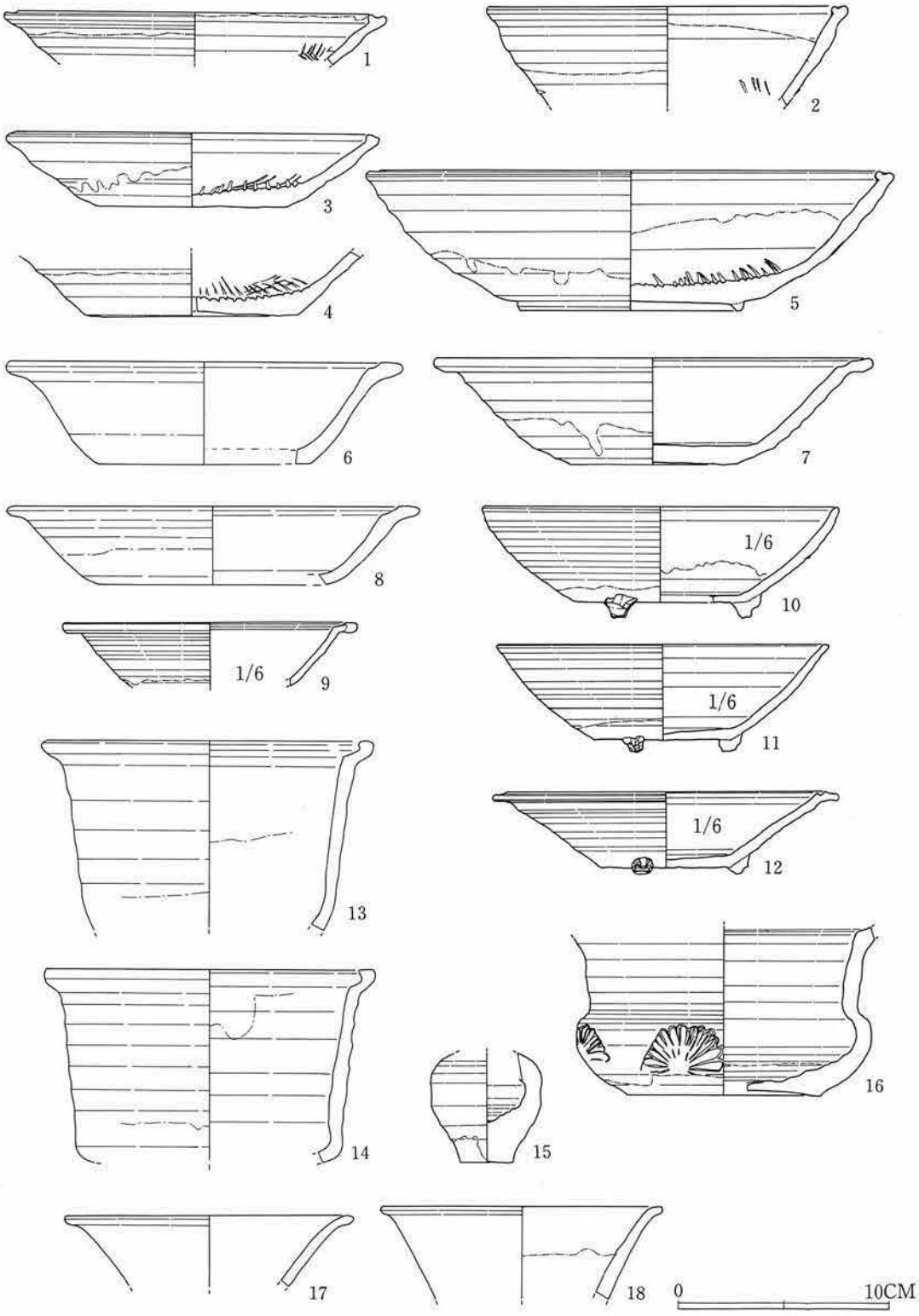


図18　第２面包含層出土遺物

13は口径15.8cm。釉は透明な緑色を呈し、細い貫入がある。胎土は灰色を呈し、表面が赤褐色を呈する。14は口径15.4cm。外面に轆轤成形痕が明瞭に残る。釉は透明な緑色を呈し、細い貫入がある。胎土は灰色を呈し、表面が赤褐色を呈する。

小壷(図18－15)

底径２cm。四耳壺の可能性がある。釉は透明な緑色を呈し、肩部から胴部にかかる。胎土は灰色を呈する。外底は箆削りである。

香炉(図18－16)

底径9.2cm。袴腰香炉である。口縁は水平に折れ、胴部に型押しの菊花文を配する。釉は鉄釉で内底近くから胴下部にかけている。胎土は灰白色を呈する。外底面は糸切り痕が残り、胴下部には脚の取れた痕が残る。

花瓶(図18－17、18)

17は口径13.6cm。釉は不透明な黄緑色を呈し、細い貫入がある。胎土は灰色を呈する。18は口径13.4cm。釉は不透明な暗灰色を呈し、内側は頸部中程までかけている。胎土は灰色を呈する。

常滑(図19－１～７)

甕とこね鉢が出土している。破片は多いが、小片ばかりで実測できたものは甕類だけであった。

甕（１～７）

１、２は口縁の縁帯が頸部に接続している。３は口縁の縁帯が頸部から離れている。４は口縁部の縁帯の継目の所が欠損している。現存口径53.8cm。５は口径44.2cm。縁帯の幅は狭く、頸部に接続していない。肩部に格子状の叩き目が残る。６は口径23.8cm。口縁端部が上方に曲がっている。７は底径18.4cm。外面胴下部に木口状工具による下方向のナデ痕が残る。

青磁(図19－８～15)　皿、碗、壷蓋が出土している。

皿（８）　口径14cm。釉は不透明な水緑色を呈し貫入がある。胎土は灰白色を呈する。

碗(９～13)　９は口径15.6cm。口縁が強く外反し、胴部に轆轤成形痕が明瞭に残る。釉は透明な灰緑色、胎土は灰白色を呈する。10は底径10.4cm。釉は透明な灰青色を呈し、高台外脇までかけられている。胎土は灰白色を呈する。11は口径12.9cm。外面に鎬蓮弁文を配する。釉は不透明な水色、胎土は灰白色を呈する。12は口径10.2cm。口縁が天目茶碗の様に強く外反する。外面に縦方向の線、内面にも文様を配するが不明。釉は不透明な水色を呈し、厚くかけられている。胎土は白色を呈する。13は底径2.8cm。釉は透明な草緑色を呈し、高台外脇までかけている。胎土は灰白を呈する。鎬蓮弁文の高台と思われる。

蓋(14、15)　14は内径9.8cmの酒会壷の蓋。外面に雑な線彫りの蓮弁を配する。釉は透明な緑色を呈し、外面と内面頂部にかけている。胎土は灰白色を呈する。破損面は接着剤に使用した黒漆が残る。15は内径3.6cmの壷の蓋。釉は不透明な草緑色を呈し、外面にかけている。小型酒会壷の蓋であろうか。

青白磁(図19－16)　青白磁は皿、梅瓶、水注が出土しているが、実測できるのは水注だけであった。

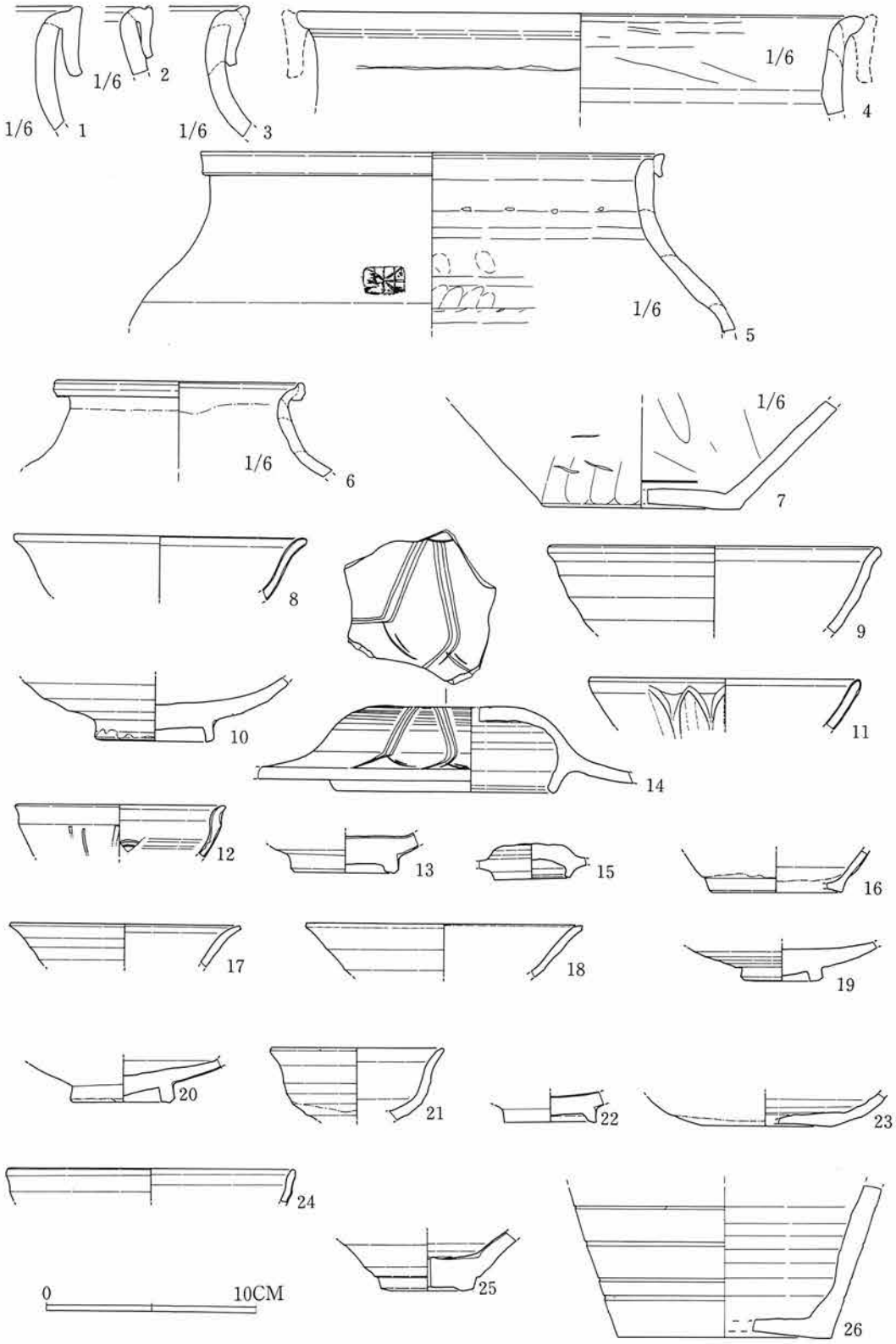


図19　第２面包含層出土遺物

16は底径6.1cm。現存部に文様はない。釉は不透明な水色を呈し、細い貫入がある。胎土は灰白色を呈する。

白磁(図19－17～22)　皿、碗が出土している。

皿(17～20)　17、18は口兀の皿。7は口径11.9cm。8は口径13.2cm。19は底径3.1cm。釉は透明な水白色を呈し、細い貫入があり、高台外脇までかけられている。胎土は灰白色を呈する。20は底径4.6cm。釉は不透明な白色を呈し、高台外脇までかけられている。胎土は灰白色を呈する。

碗(21、22)　21は口径8.2cmの小碗。釉は透明な水白色を呈し、細い貫入があり、胴下部までかけている。胎土は陶質に近く、灰白色を呈する。胴下部に轆轤成形痕が明瞭に残り、口縁は強く外反する。22は底径4.4cm。釉は不透明な水白色を呈し、高台外脇までかけている。胎土は灰白色を呈する。

黒褐釉(図19—23～26)　茶入、天目茶碗、壺が出土している。

茶入(23)　底径6.2cm。釉は黒褐色を呈し、内底の1部と外面胴下部までかけている。胎土は紫褐色を呈し、堅緻である。外底には糸切り痕が残る。

天目茶碗(24、25)　25は口径13.6cm。釉は茶褐色、胎土は灰色を呈する。器壁が大変薄い。26は底径4.4cm。釉は黒色、胎土は灰色を呈する。高台は浅く削り出されている。

壺(26)　底径10.2cm。釉は焼成不良のためか白濁色を呈し、胴下部から内底にかけている。胎土は灰色を呈する。胴部には4本の沈線が配され、外底は篦削りで上底になる。

瓦質製品（図20－1～18）　火鉢、燭台、香炉、硯などが出土している。

火鉢(1～13)　1は口径41.2cm。器12cm。底径34cm。口縁部は直立する。口縁下と胴下部に桔梗状の花文、胴部には菊唐草文を型押しする。2は口径37.8cm。口縁部は直立する。口縁下に菊花の型押し、その下と胴下部に珠文を貼付する。3は口径42cm。口縁部が直立気味になる。口縁下に巴文を型押しし、その下に珠文を貼付する。4は口径29.6cm、器高10cm、底径22.6cm。口縁部は直立する。口縁下に珠文を貼付する。外面には篦磨きの痕、内面胴下部には木口状工具による調整痕が残る。5は口径42cm。口縁部は内湾する。口縁下に桜花文を型押しする。6は口径37.4cm。口縁部は内湾する。口縁下に2本の浅い沈線を配し、細い篦磨きの痕が残る。7は口径36cm。口縁部は直立する。現存部に文様はない。内外面に細い篦磨きの痕が残る。8、9は口縁部が直立気味になる。8は口縁下に菊花文を型押しし、珠文を貼付する。9は口縁下に割菱を型押しし、珠文を貼付する。10は胴下部に突帯を貼付する。11は口径32.2cm。口縁部が厚くなる。口縁部が開き鍋の様な形になるのか。胎土は他の製品と同じである。とりあえずここに入れておく。12、13は脚。12は面取りし、丁寧に作っている。13は円錘形を呈し、外面は赤色顔料を塗り、丁寧に篦磨きをしている。

香炉(14、15)　14は口径8.2cm、器高3.6cm、底径5.2cm。全体に赤褐色を呈する。口縁に鋸歯状の文様を型押しし、その下に珠文を貼付し、胴には三重の円文と菊花を型押しする。15は口径9.6cm、口縁下に如意頭状の文様を型押しし、その下に珠文を貼付し、胴部には隙間なく菊花を型押ししている。

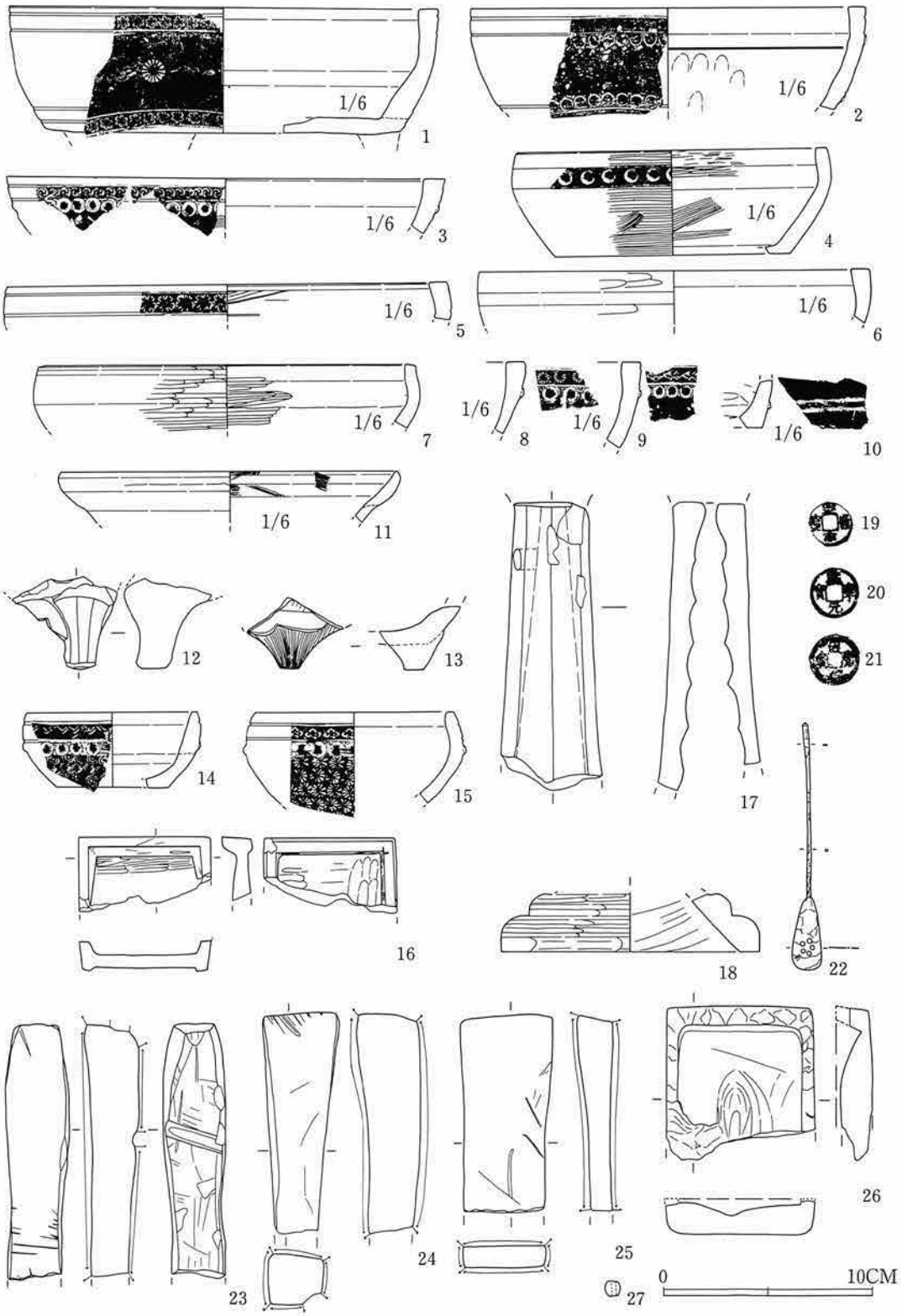


図20　第２面包含層出土遺物

硯(16)　巾6.4cm、高1.5cm。両面の硯である。火鉢などの転用品でなく、最初から硯として作っている。胎土は赤褐色を呈し、火鉢などの胎土と異なり密である。

燭台(17、18)　17は八角形の脚の部分である。縦方向に篦磨きされている。内面には螺線状の巻き上げ痕が残る。上方に一ケ所、焼成後の穿孔がある。18は径12.4cmの台の部分である。表面は灰白色を呈し、細く良く篦磨きされている。

金属製品(図20－19～22)　銭、匙、板状製品の他に角釘と思われる製品が多数出土しているが、実測できたのは小数である。

銭(19～21)　19は皇宋通宝、楷書、初鋳1039年。20は熙寧元宝、楷書、初鋳1068年。21は紹聖元宝、行書、初鋳1094年。

匙(22)　長さ11.9cm。柄の部分の先端は三角形を呈し、断面は方形、匙の部分は薄く叩いて延ばし楕円状にし、中心を梅花の様に打ち抜いている。現存の全体は金色を呈するが軽い。茶杓と思われる。

石製品(図20—23～26)　砥石、硯、滑石製品、茶臼などが出土しているが実測できたのは少数であった。

砥石(23～25)　方柱状の中砥である。全面を良く使用している。23の一面には丸ノミを研いだ様な窪みや削痕が残る。

硯(26)　巾約7cm。青灰色の粘板岩系の石材を使用している。海から陸にかけての所がひどく窪んでいる。

その他（図20－27)

ガラス玉(27)　楕円状を呈する。長径0.7cm、短径0.5cm、孔径0.2cm。不透明な水色を呈する。同製品が第1面土壙から出土している。

漆製品(図21－1～10)　漆絵の皿、椀が出土している。

皿（1～4）　1は口径8.6cm、器高1.1cm、底径6.3cm。黒漆を全体にかけ、内底面に寫沢文を朱漆で描く。2は口径9.1cm、器高1cm、底径7.8cm。黒漆を全体にかけ、朱漆で文様を描いているが、剝落がひどく不明である。3は口径8.6cm、器高1.3cm、底径7cm。黒漆を全体にかけ、朱漆で御所車状の文様を描く。4は口径8.8cm。器高1.4cm、底径7.4cm。黒漆を全体にかけている。文様はない。外底に漆をかけた後、×印を彫り込んでいる。

椀（5～10）　5は小型の椀。底径約6.2cm。内底に丸に三本線とその周囲に3ケ所波状の文様を描く。6は口径15.2cm、器高約5.2cm、底径約7.6cm。黒漆を全体にかけ、文様はない。7は口径16cm。黒漆を全体にかけている。器壁は厚く文様はない。8は底径約8cm。黒漆を外面、朱漆を内面にかけ、外面は朱漆で亀甲文を描く。亀甲文は全面隙間なく描かれず、所々抜けている。9は口径13.8cm、器高4.2cm、底径7.4cm。黒漆を全体にかけ、朱漆で竹を外面胴部と内底面に描く。外底面には漆を塗る前に彫り込んだV状の印が残る。10は底径約7.8cm。黒漆を全体にかけ、外面胴部に朱漆で梅花文を散らし、内面には隙間なく梅花と枝(？)を描く。

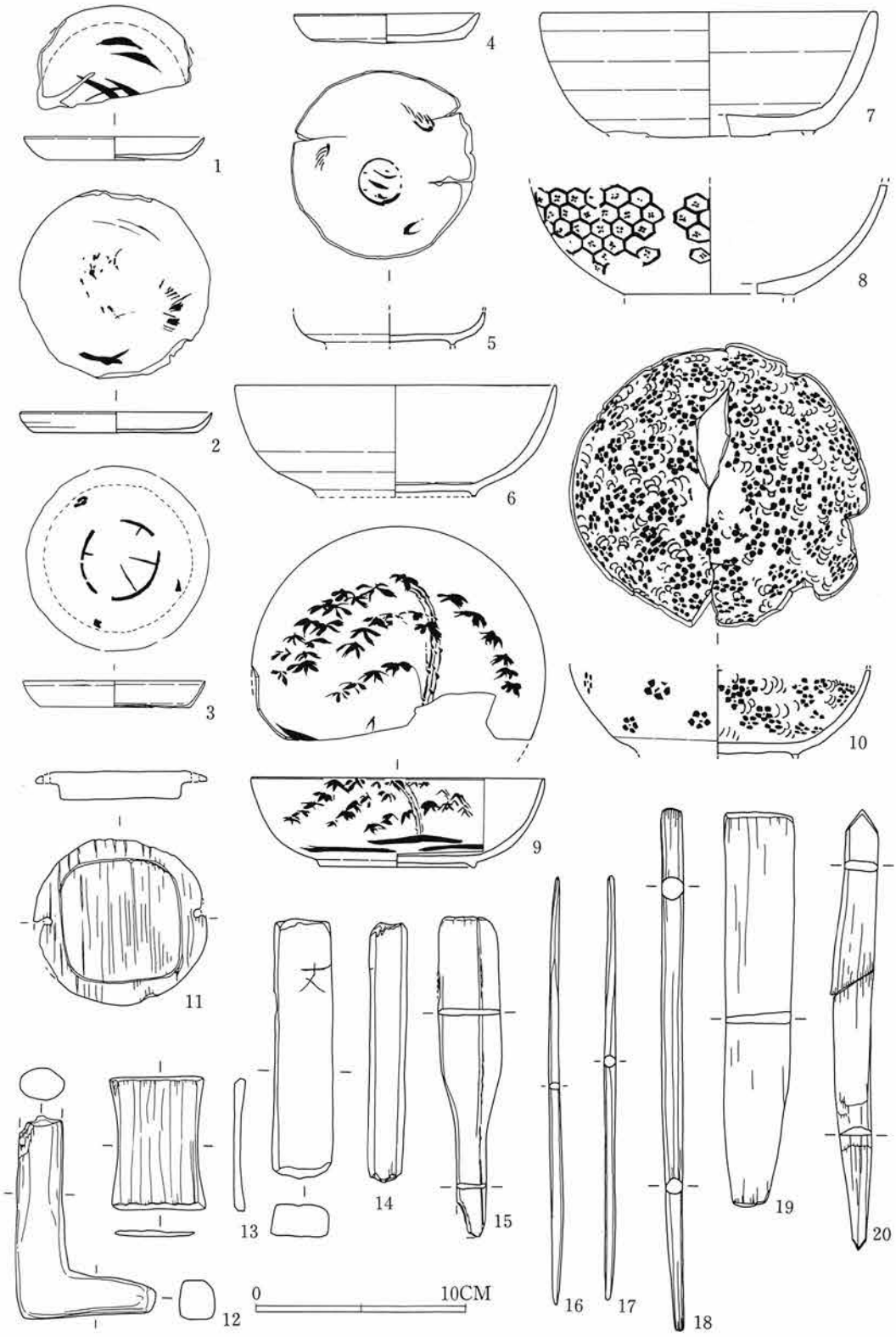


図21　第２面包含層出土遺物

木製品（図21－11～20、図22－21～44）　曲物製品を中心に多様な物が出土している。

11は蓋と思われる。直径8.2cm、厚さ約1.3cm。縁に２ケ所孔がある。下の部分は一辺約5.8cmの隅丸方形を呈する。四角い口の製品の蓋になるのであろうか。12は毬杖の先端部と思われる。断面は隅丸方形を呈し、全体を丁寧に削っている。13は不明木製品。長さ6.4cm、端巾4.5cm、中央巾3.9cm。中央が弓なりに巾が狭くなり、長辺の両端を斜めに切り落している。14は柄と思われる。長さ12.2cm、巾約2.6cm。厚さ約1.5cm。上部に「丈」あるいは「大」と思われる切傷がある。両端は折れているが、少し成形しているようである。15は杓文子。長さ30.4cm、巾5.9cm。16、17は箸。16は長さ20.4cm、17は長さ20.2cm。箸は20cm前後の同形の製品が多数出土している。18は棒状木製品。長さ24.8cm。ほぼ丸く削り、片方を細く削る。用途は不明である。19は礼状の製品である。長さ18.7cm、頂部巾3.2cm。木簡、呪符の形に似ている。墨書の痕跡を認めることはできなかった。20は斎串と思われる。長さ20.9cm、巾約1.5cm。頂部を三角形、下部を尖らせている。頂部両脇の切り込みはない。21～23は小型の折敷。１辺は約10cmで四隅を切り落している。四辺の中程に直径約0.3cmの縁板を留める孔があく。この孔は通常より大きい。23はたまたま縁が残っていたが、他はすべて外れていた。この小型の折敷は多数出土しているが、ほとんど破損し形状がわかる製品は極わずかであったが、ほとんどは一辺約10cm前後であった。24は盆。径30.6cm。縁は少し上方に持ち上がる。内側の縁周辺部には同心円状の削痕が残り、中心には切り傷が多数あり、俎に使用したのであろうか。漆の痕跡はまったくない。25、26は把手。25は長さ12.9cm。下部がわずかに欠損している。下方の孔には桜皮が残る。26は長さ13.1cm。25の製品より丁寧に丸味を持って作られている。27は曲物。径9.7cm。４ケ所の綴り孔がある。桜皮は残らず、径は現存で計測しているので多少小さくなると思われる。底板は0.3cm余りあり厚い。28～30は丸板に孔があく。甑ではないかと推定[註1]されている製品である。28は径12.4cm。中心からやや縁よりに径0.3cmの孔が２個接するようにあけられている。29は径12.5cm。中心より縁よりに径0.2cmの孔が２個、対称の位置にあけられている。片面に切傷が残り、俎にも利用したのであろうか。30は径14.8cm。中心に径1.2cmの孔があく。31、32は蓋と思われる。31は径22.5cm。中央に桜皮を貫通させている。32は径20cm。中央より縁よりに桜皮を貫通させている。桜皮の位置が片方に寄っているのは対称する位置（欠損部）に接続させ釣手状になるのかもしれない。33～34は曲物の底板。33は径7.7cm、厚さ0.5cm。34は径14.4cm、厚さは縁で約１cm、中央で0.5cm。２ケ所木釘の孔があく。35は径16.4cm、厚さ0.8cm。36は径19cm、厚さ縁は1.1cm、中心0.6cm。１ケ所木釘の孔があく。37は径19.4cm、厚さ0.6cm。38は径20.8cm、厚さ0.8cm。片面に切傷が残る俎に転用している。39は径19.7cm、厚さ0.7～0.5cmと一定ではない。40は径27.4cm、厚さ1.5cm。出土品の中では最も厚い。41は径37.2cm、厚さ約１cm。かなり反っている。42は径23.8cm、厚さ約0.9cm。43は径10.8cm、厚さ約0.7cm。唯一のほぼ完全な形で出土した。44は残存状態が良くなく曲物の底であるかは確心が持てないが、ここでは底と考えておく。形は楕円状を呈するようである。現存長約46cm、厚さ0.5cm～１cmと一定ではない。

曲物底板には大小の他にあまり際立った差はないが、縁の成形方法に３種類あることが認められ

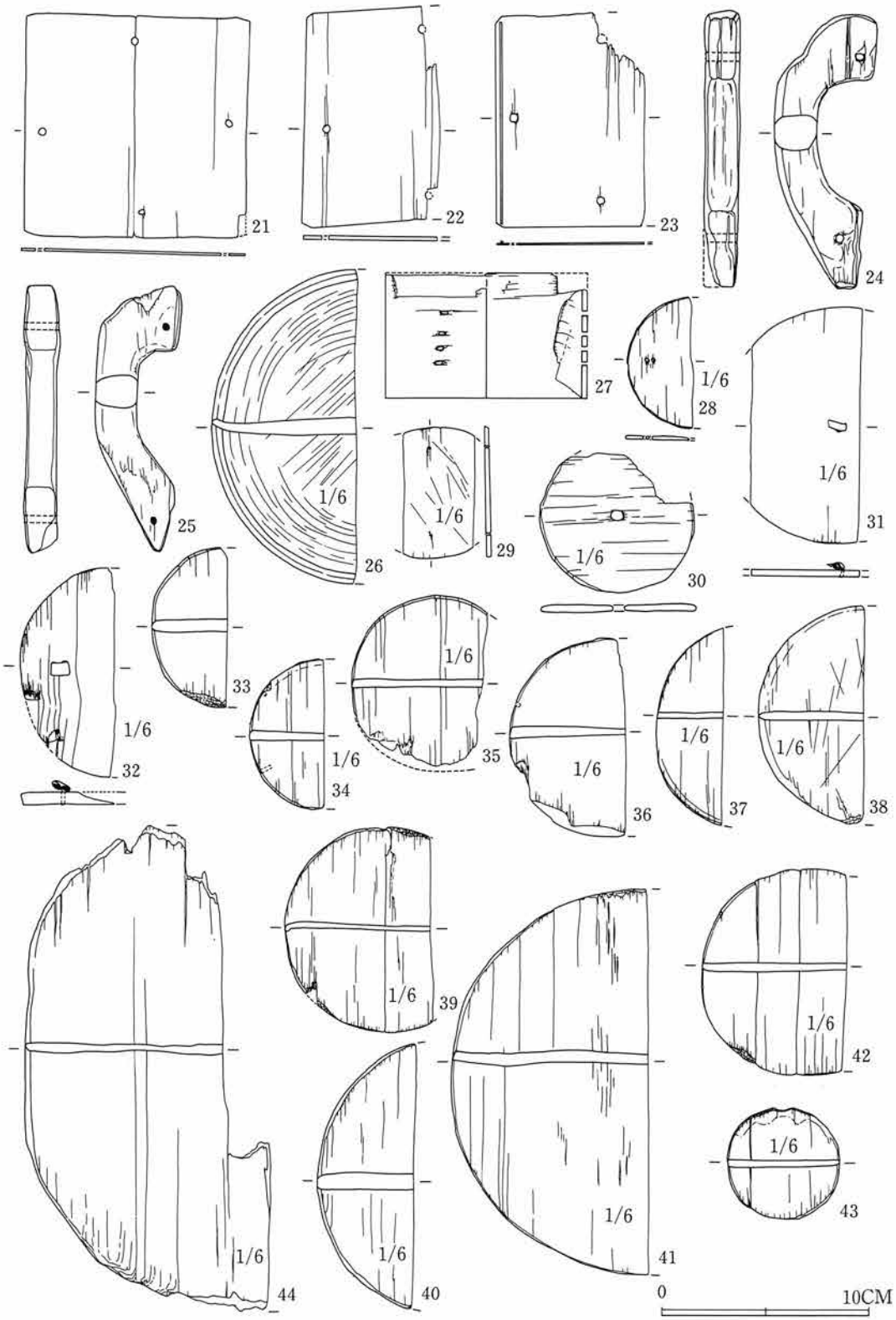


図22　第２面包含層出土遺物

る。第1には垂直に切った四角、第2に両面から切った台形、第3に片面から切った三角形の3種類がある。

木製品のうち折敷、箸は多く出土しているが、多くは破損がひどく実測できたものは少なく、折敷はほぼ同じ法量の製品ばかりであった。箸も同じ結果である。

また円形の曲物の底、蓋、甑と思われる製品も含まれている。

第三章　調査の成果と問題点

遺跡の性格

調査地点は市遺跡台帳では保寧寺跡とされている。この事は明院古絵図（鎌倉御所足利氏満の花押があり、氏満は1398年に没している。明月院ははじめ明月庵と称し、明月院と改ったのは関東管領上杉憲方が没した1394年頃とされている。このため絵図は応永元年頃描かれたとされている[註1]。）に保寧寺の名が記載されている。

建長寺伝延宝古絵図（伝水戸光圀が延宝６年（1678）に施入）を見ると亀ヶ谷切り通しのほぼ正面の位置に華蔵院が描かれ、その脇に四十九院外保寧寺跡とあり、保寧寺の跡に華蔵院のあった事がわかる。

両方の絵図を見ると山裾の線が蛇行して描かれ、その窪んだ所、谷戸の位置に寺の名がある。これは鎌倉の寺の多くがそうであるように谷戸内に寺院を配していた事からである。明月院古絵図では左（北西側）から正法寺、徳泉寺、安国寺、保寧寺、龍興院、玉雲庵と４番目となり、建長寺絵図と同じく、現在の地形図に合せてみても左から４番目の谷あたり、この地が保寧寺跡となる。

鎌倉街道の北側には、建長寺の谷戸内からの水路が街道に沿って流れ、所々に橋が架かり、金龍水と書いてある。現在この河は暗渠になっている。

調査地点は現在の鎌倉街道（主要地方道横浜、鎌倉線）に面し、明治初年の地図と比較しても、路はほとんど変わっていないので保寧寺域として良いであろう。ただ寺の中心は更に奥まった所ではないだろうか。ここは寺院の門前といった所になろう。遺構から見ると寺と判断できるものは何も発見されていない。同時期の他の市内遺跡と比較してみると土丹地行層が厚いといえる。

第１面の土丹積溝は鎌倉石などで積んだものではなく粗雑な造作であり、どこでも見られる。安山岩系の河原石を使用した礎石建物もない。調査地点が寺の中心部と考えている地点から離れているからかもしれない。

第２面では調査区の中央に河川が流れ、河川に続く溝もきちんと造られているわけではない。この河川は延宝古絵図の金龍水が15世紀にはこの地点を流れていたか、保寧寺あるいは禅居庵の谷戸内の河川の可能性がある。また建物跡も不明で、すべて掘立の柱穴である。遺構からは寺を想像させるもはなにもない。

遺跡の時代

今回の調査では２回にわたる地行面が確認された。第１面のかわらけは河野編年[註2]における第VI期に属する。また第２面のかわらけも同期に属する。しかし、第１面のかわらけは、外反する口縁が多く、第２面では外反する口縁のかわらけは明らかに少ない。河野が将来このVI期は分割可能の見透しを述べているが、ここでVI期の分割可能な資料を得ることができたのではないかと思ってい

る。第２面は共伴資料の常滑、瀬戸などの製品から15世紀第１四半期から15世紀の第２四半期、第１面は15世紀の第３四半期、15世紀第４半期に当ておきたい。これは美濃の大窯の製品が第１面から発見されず。また瀬戸、常滑の製品も同様の年代観を示している。

文献から観ると保寧寺の初見は暦応三（1340）年の南北時代まで遡り、最後は永禄十一（1568）年の戦国時代までである。江戸時代の延宝六（1678）年に水戸光圀により施入されたと伝えられる古絵図をみると、この時すでに保寧寺は無く「保寧寺跡」と書かれ、ここには建長寺塔頭の華蔵院が描かれている。華蔵院は建長寺六十世の伯英徳俊（応永９（1402）年示寂）の塔所である。華蔵院は16世紀後半以降にここに移ったものと思われる。保寧寺は14世紀中頃以降、少なくとも200年間は存続している。

今回の調査では14世紀の中頃に遡るかわらけは発見されていない。恐らく、鎌倉の他の寺院が谷の奥に造られている事を考えると寺院の中心地域でないことは明らかである。延宝古絵図を見ても華蔵院は鎌倉街道からずっと奥の谷戸内に描かれている。また調査終了後の工事立ち合いでは現地表下４ｍ余り下から河原石の礎石が発見された。第２面からも約３ｍ余り下で、その間は無遺物層が確認された。山崩れでいっきに埋まったのであろうか？。今回は下層の調査ができなかったが、これからはこの付近の調査では現地表面から４ｍ以上の掘削が入る場合は当然調査の対象にしなくてはいけない。

遺物の特徴

市内の14世紀～15世紀にかけての遺跡では割合まとまって瀬戸、舶載陶磁器、瓦質製品が出土した。

瀬戸では天目茶碗が多く、実測できなかったものを含め19個体（他に灰釉１、舶載５）、これまで市内出土例としては最も多い。鎌倉では栄西により喫茶が伝えられ『喫茶養生記』が著されている。また仏日庵公物目録にも天目茶碗を初めとして、中国から持たらされた文物の記載が多く、金沢文庫文書中にも多く喫茶にかかわる記事を見いだす事ができる。しかし、市内の遺跡を調査してみても天目茶碗、茶入、茶臼の出土例は鎌倉期の遺跡からは大変少なく、市街地遺跡（武家、庶民区域）ではなおさらである。寺院址では禅宗寺院、建長寺、円覚寺などでは割合多く、禅宗寺院では今日でも茶を飲む時は天目茶碗を使用するとの事であり、市街地遺跡より当然多く出土している。

保寧寺跡では天目台こそ出土しなかったが、天目茶碗、茶入、茶壺、風呂、茶杓などが同一地域内（一括ではない）から発見され、少なくともこの地において喫茶が盛んにおこなわれていた事がわかる。

瀬戸の製品では天目茶碗の他に縁釉皿、平碗、盤、おろし皿が多く出土している。実測可能な個体は少なかったが花瓶の破片が多いのも注目されよう。

国際の陶磁器類では供膳用具は多い他に、調整用具のおろし皿が多い。この時期になると前の時代の様にこね鉢の使用が減少するような調理方法になるのか、それとも調査地点の特殊性によるものなのか考えてみる必要があろう。

木製品では多量の大小の円板が出土している。この円板は蓋、底、甑などの製品と思われ、比較的多い。また折敷は一辺が約９㎝の小型の製品ばかりであり、かわらけなどがやっと一個残る程度である。市内遺跡から出土する普通の折敷は通常１辺約19㎝余りでこれと比べると面積で１／４と極端に小型化している。曲物では把手付桶が２点発見された。これまで把手だけは発見されていたが完全な形で見つかった。本遺跡では把手だけも多数あり、寺院内で多く使用したのであろうか。市街地遺跡でも数点出土しているが大変少なく、遺跡の性格によるのか、それとも年代的に把手付桶は時代が下らないとあらわれないのか不明である。

漆器類では、漆絵の椀、皿があり、手描きばかりで型押しの製品はない。皿類はすべて平底になり高台を有するものはない。また内面に朱漆を塗る製品が多くなる。鎌倉期の遺跡では大変少ないがそれ以降になると増加する傾向が見てとれる。

瓦質製品では輪花型の火鉢は大変少なく、無文の篦磨きの火鉢が少量であるが出土している。また小型の香炉が多い。これは寺としての性格を良くあらわしている製品の一つといえよう。

同時期の市内遺跡と比べてみて、前述しているような特徴があげられる。建長寺境内の調査と比べると境内調査は仏殿、法堂の跡で本遺跡とは性格が異なるが、日常生活空間であれば同じような結果が出たのではないかと思われる。

今回の調査で遺構から寺院址と推定できる資料を得る事はできなかったが、遺物からは天目茶碗を含めた茶関係の資料がまとまって発見され、禅宗寺院に於ける喫茶の盛行を窺い知ることができた。また瓦質香炉が多く出土し、寺院の一画である事が証明できたのではないかと思う。

出土遺物はほぼ前述している様に14世紀後半～15世紀後半にかかるが、13～14世紀段階のものも若干出土している。これもほとんど破片であったが寺院跡を想像させる大型の青磁製品がある。劃花之盤、双魚之鉢、貼付文花瓶、壺など建長寺伝世品を想起させる製品があり、遺構からは寺院址とは判断できる資料を得る事はできなかったが、遺物からはそれが証明されよう。

鎌倉が元弘三(1333)年に鎌倉幕府が滅亡するが、康正元(1445)年に鎌倉御所足利成氏が古河に逃走するまでは約100年の期間があり徐々に衰退していったのであろう。今日まで続く大寺院やその末寺塔頭などは盛時より衰退したとはいえ、明代の舶載陶磁も割と多く出土し、当時の大寺院の末寺、塔頭の姿がしのばれる。

保寧寺の調査では建築址は発見できず、現在の鎌倉街道の位置と谷戸の規模から考えると調査地点は寺の表門に当り中枢地区ではないように思われる。延宝古絵図によると寺（この時期には華蔵院が移っている）は一番奥まった所に描かれ、寺の前面は空間地になり、街道に近い所に民家らしい萱葺状の建物が描かれている。この時期寺は衰退し、寺域の一部を借していたのであろう。

註

註１　三浦勝男「鎌倉の古絵図」鎌倉国宝館1992年

註２　河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古21号』神奈川考古同人会1986年

参考文献

高柳光寿　「鎌倉市史総説編」　鎌倉市教育委員会　1959年

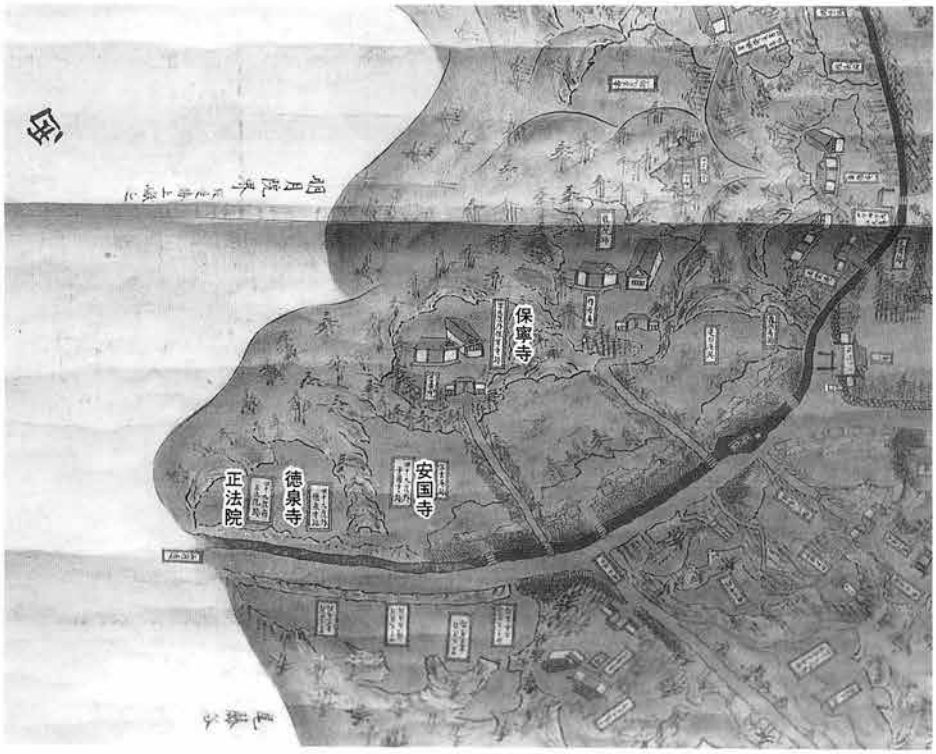
佐脇栄智、川副武胤、貫達人　「鎌倉市史社寺編」鎌倉市教育委員会　1959年

貫達人、川副武胤　「鎌倉廃寺辞典」　有隣堂　1980年

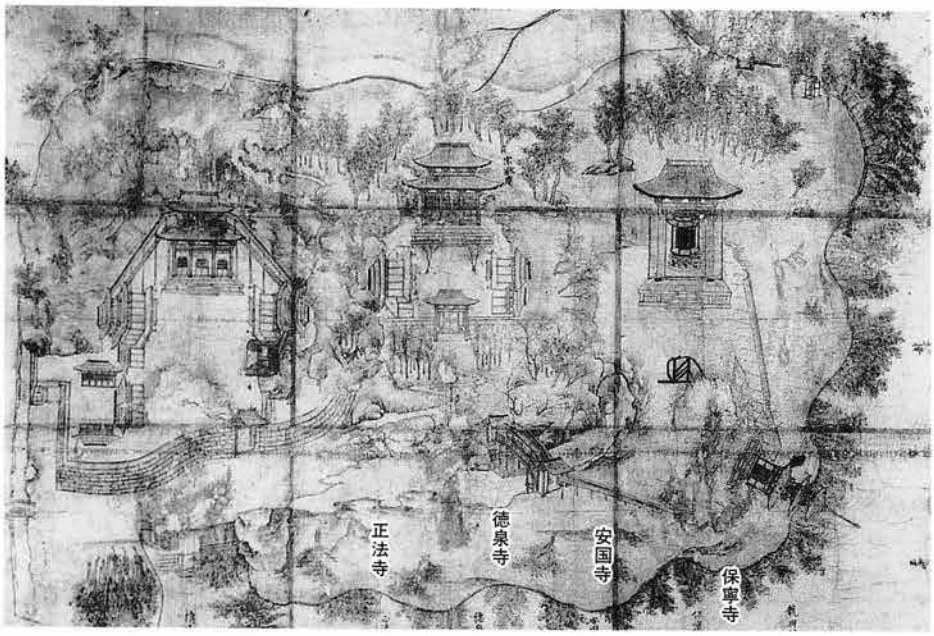
白井永二編　「鎌倉事典」　東京堂　1976年

河野真知郎、関口欣也　「巨福山建長寺境内遺跡」　建長寺境内遺跡発掘調査団　1991年

愛知県教育委員会　「愛知県古窯跡群分布調査報告(IV)瀬戸・藤岡」　1985

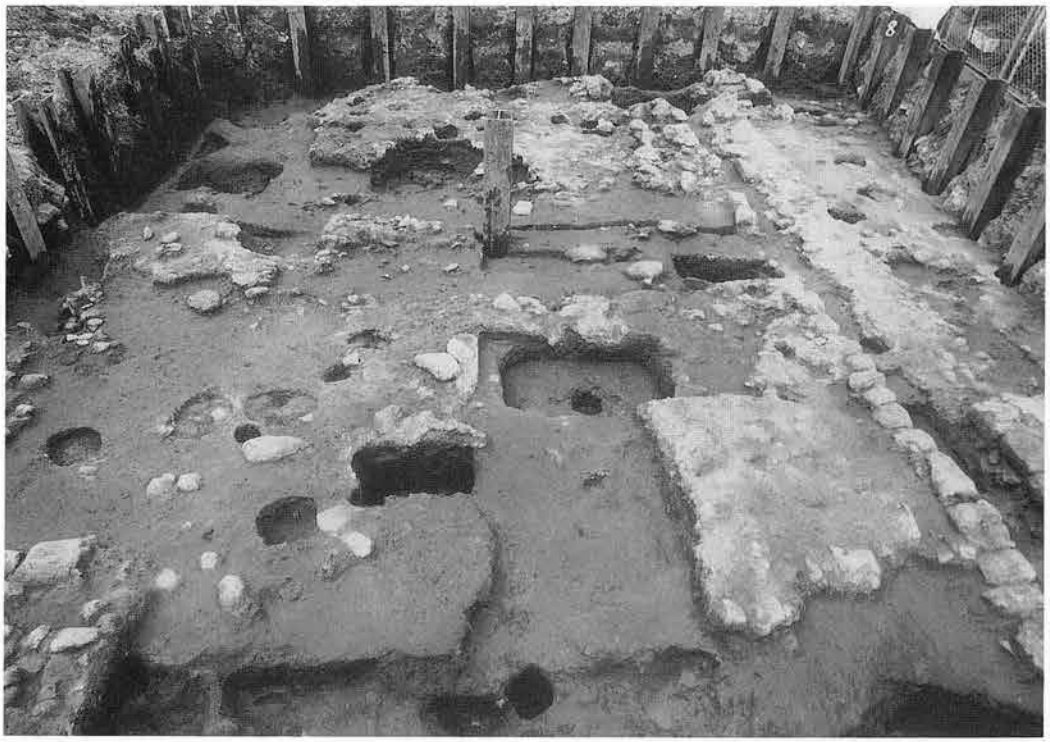


1　建長寺延宝古絵図



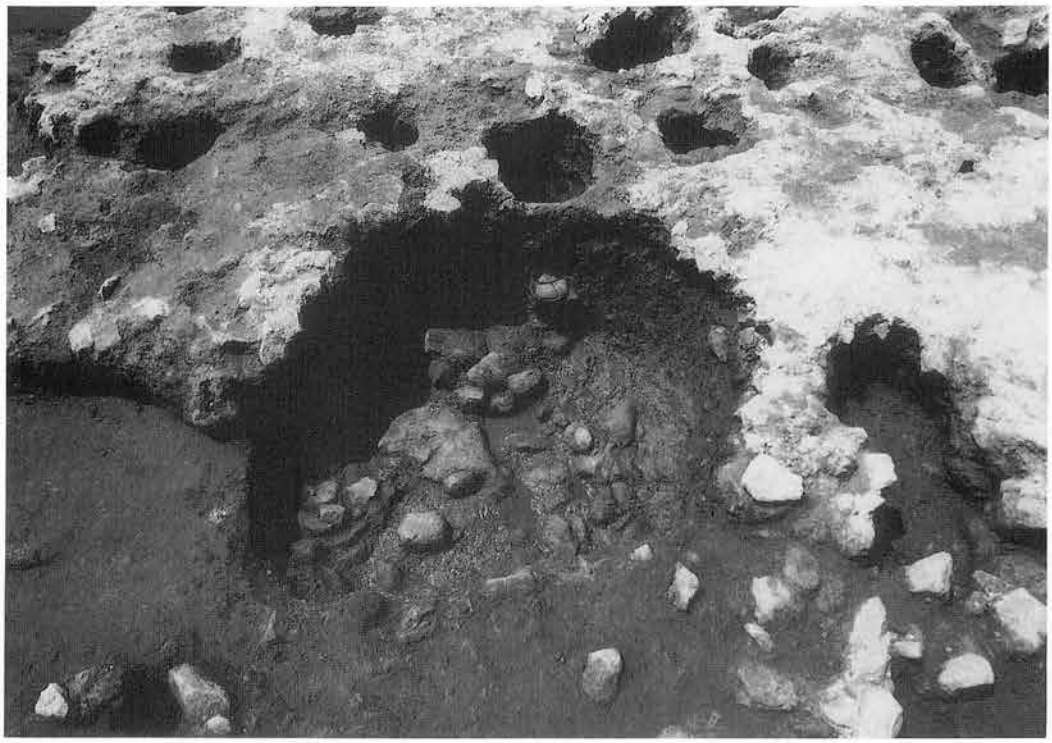
2　明月院古絵図

1　第１面全景（南から）

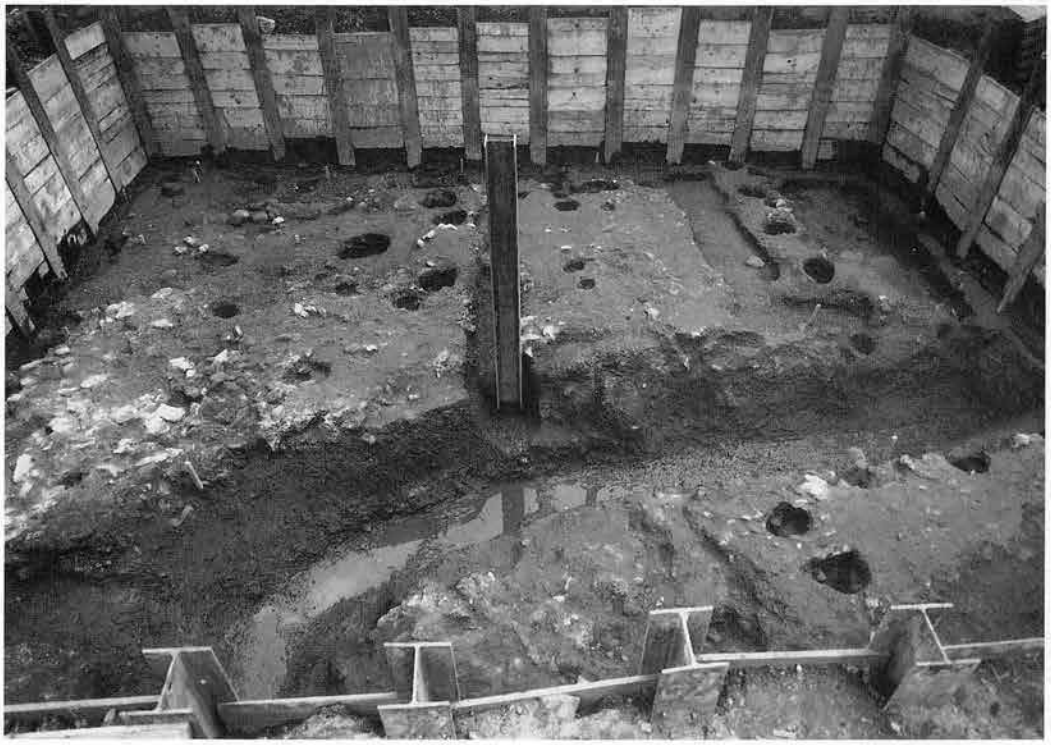


2　第１面全景（東から）

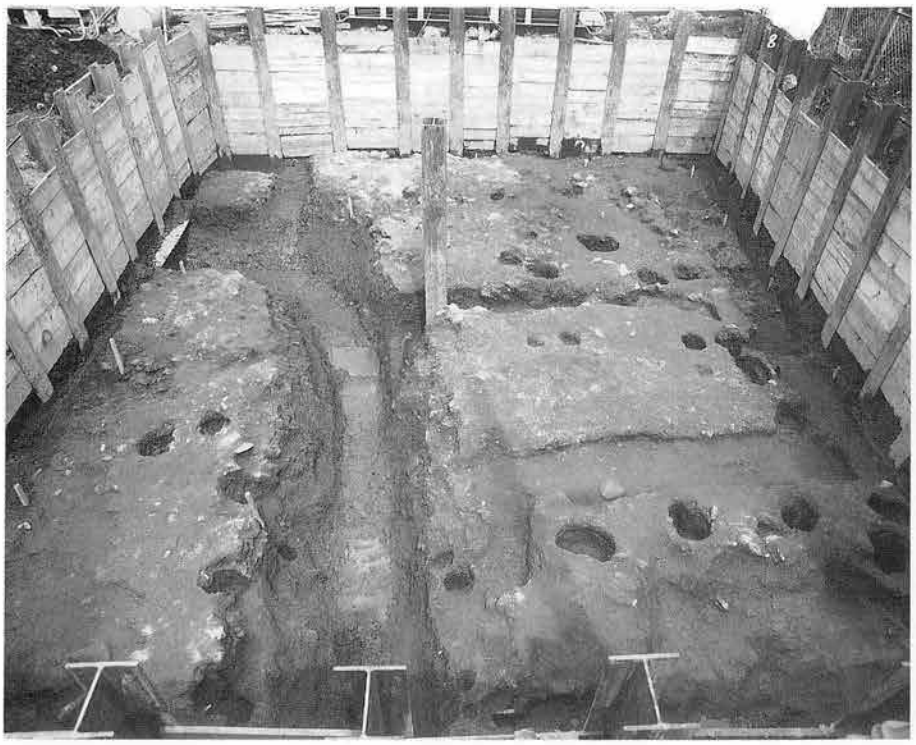
1　第1面溝1（南から）



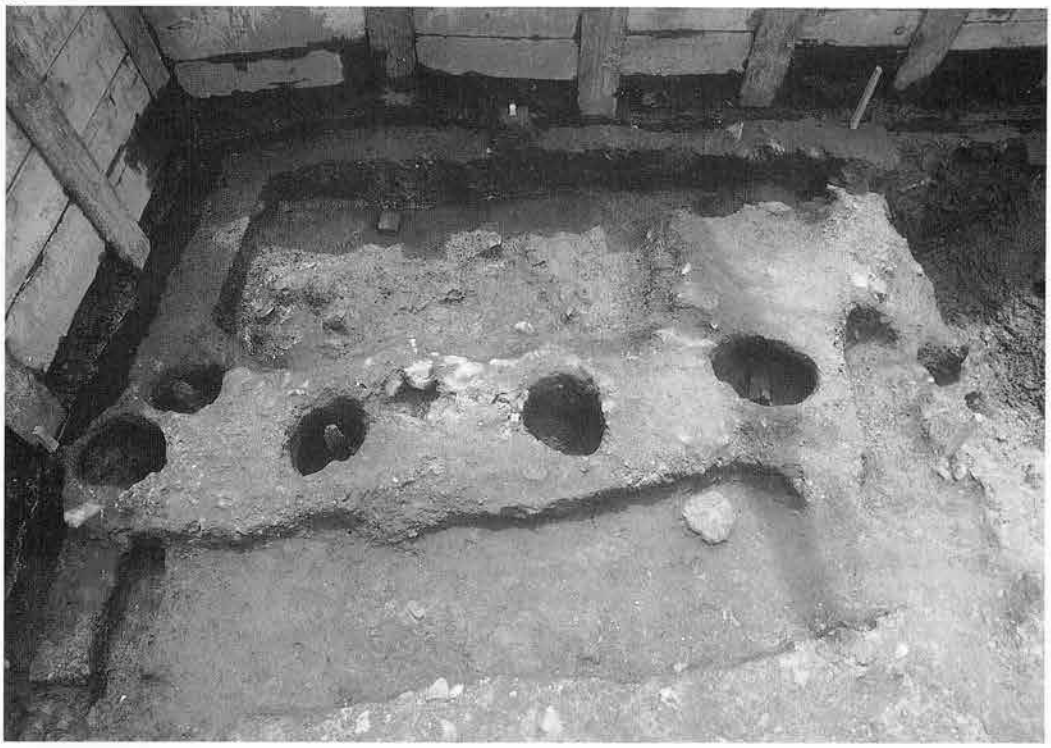
2　第1面土壙2



1　第 2 面全景（南から）



2　第 2 面全景（東から）



1　第２面柵列１（北から）

2　第２面河川東（南から）

1　第 2 面北地区（北から）

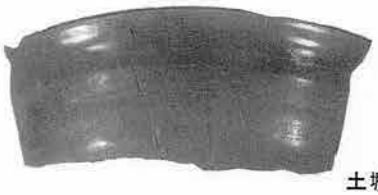
2　第 2 面北西地区（南から）

溝１

土壙２

土壙３

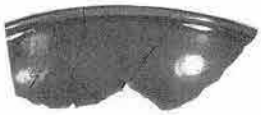
土壙３



土壙３

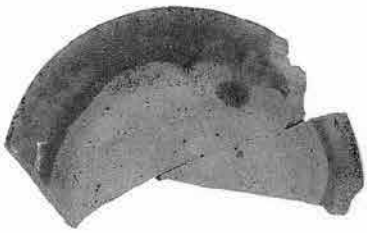
土壙３

土壙７

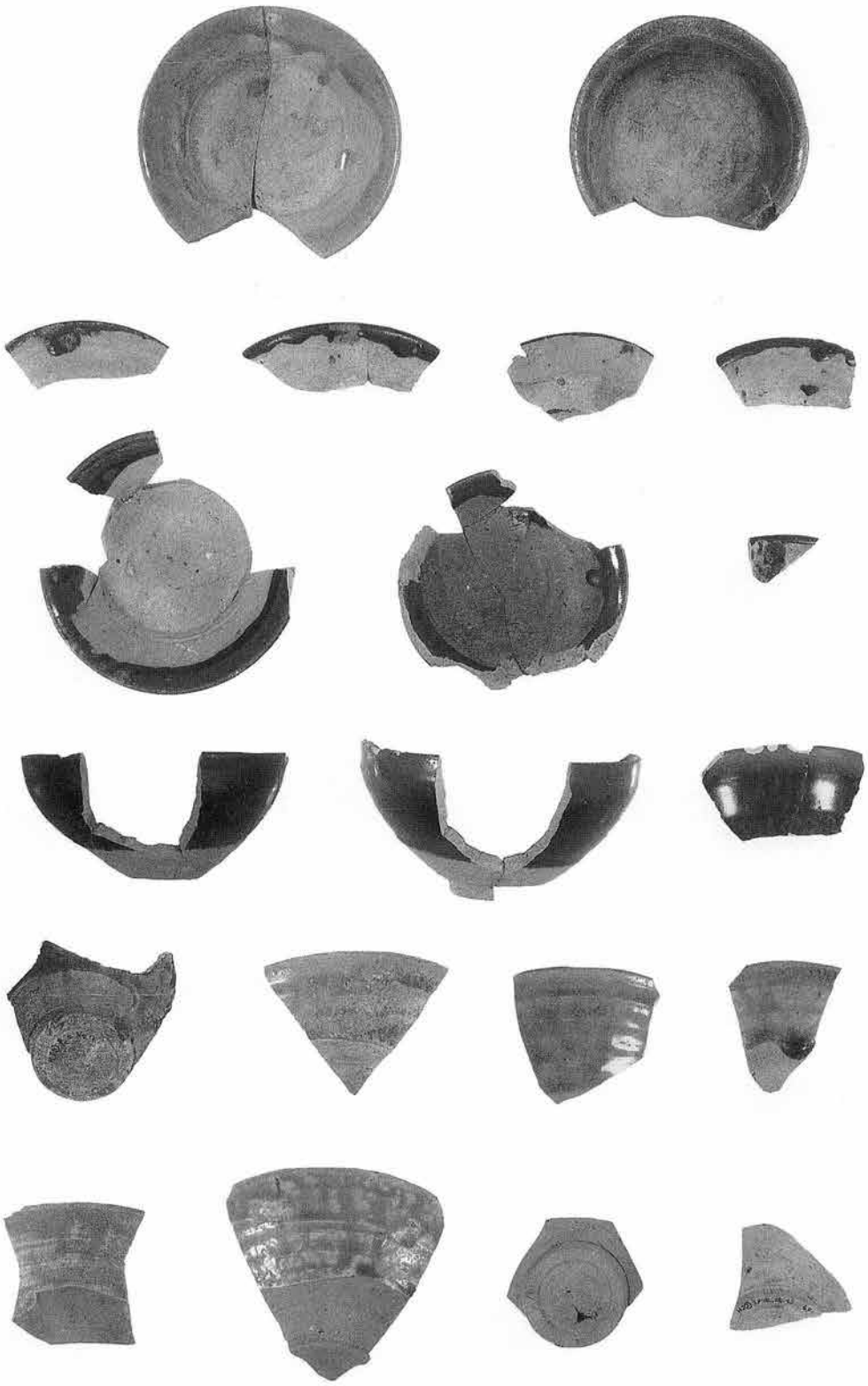


土壙９

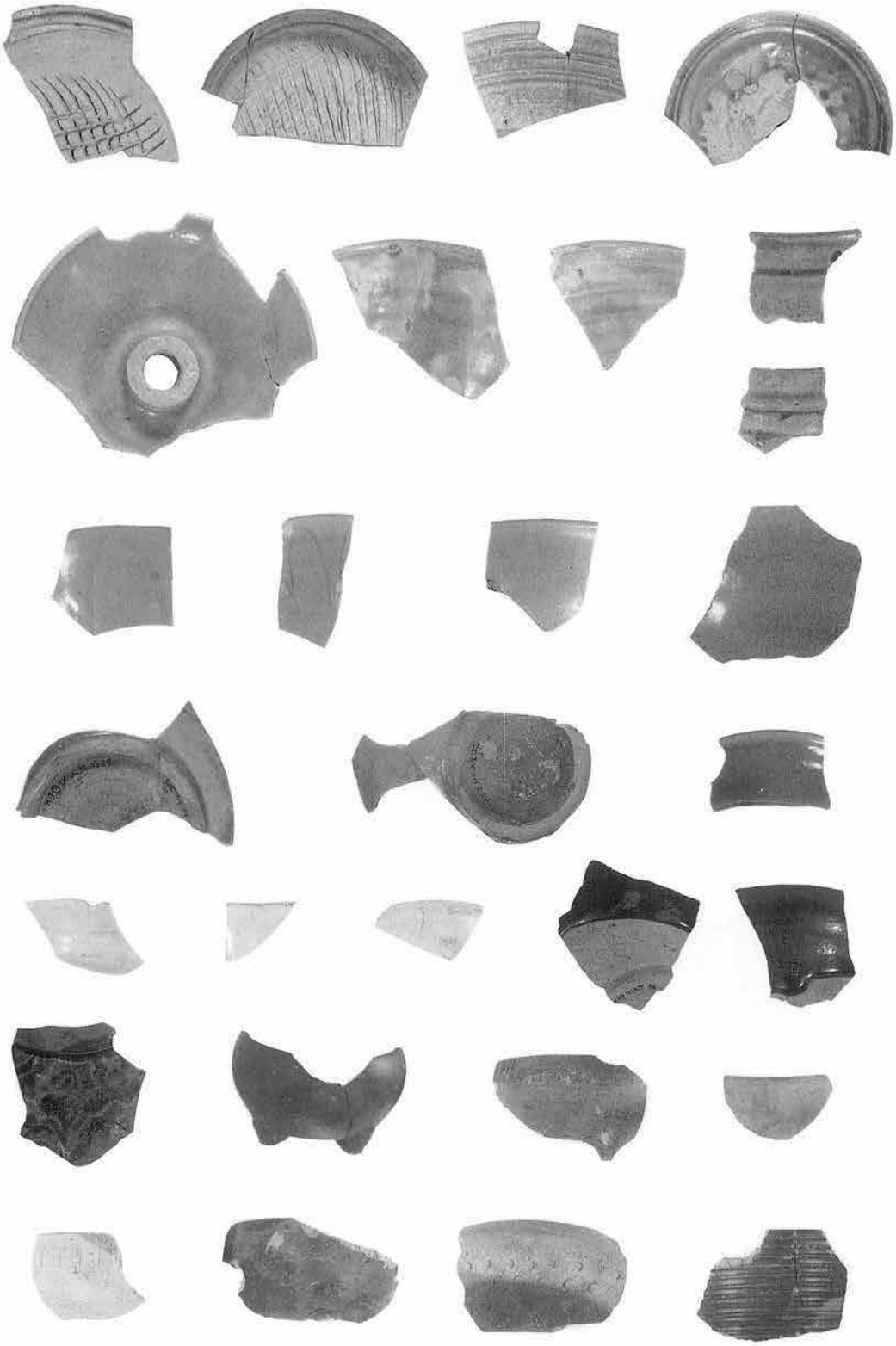
土壙９



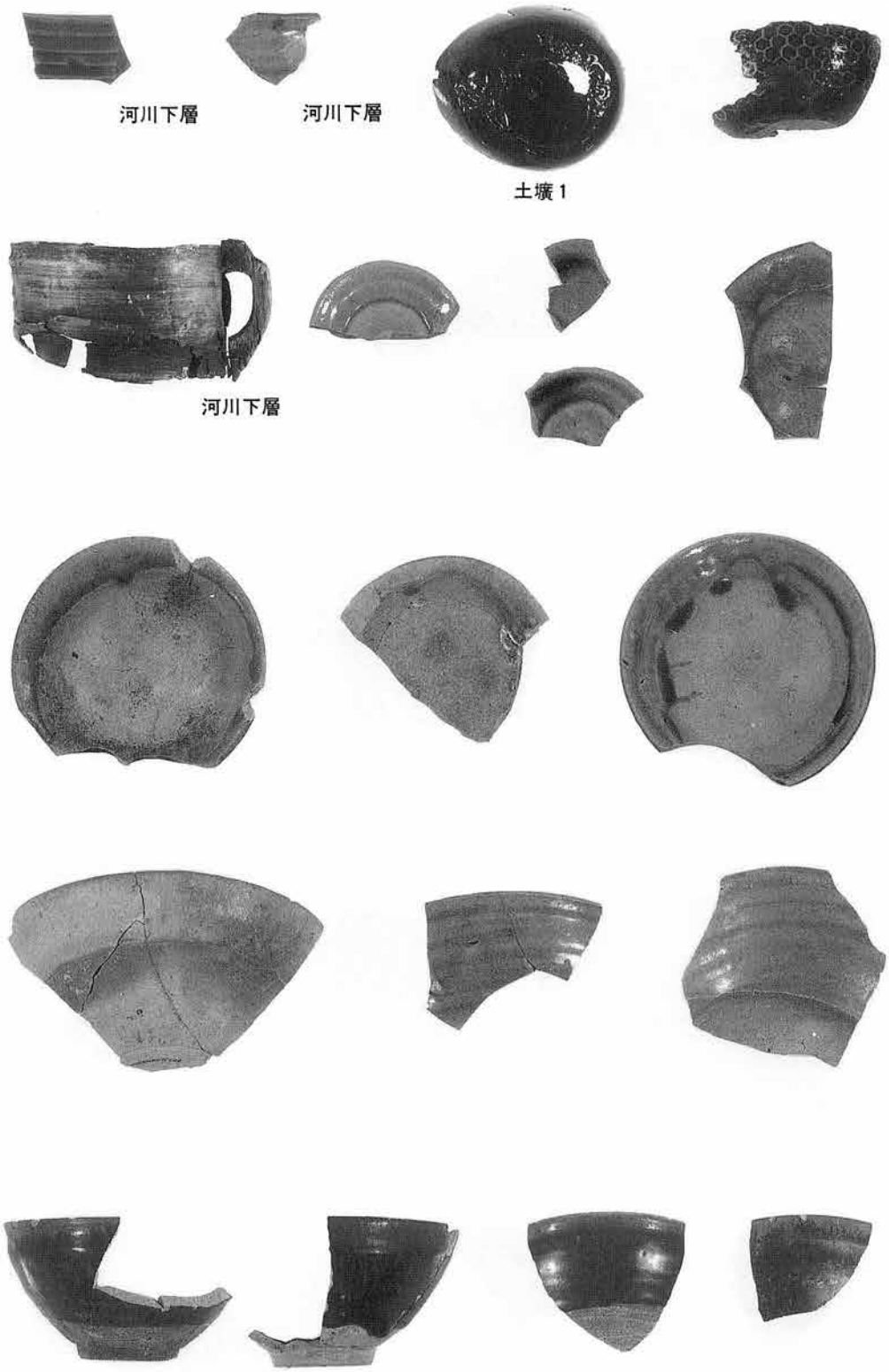
第１面遺構・包含層出土遺物



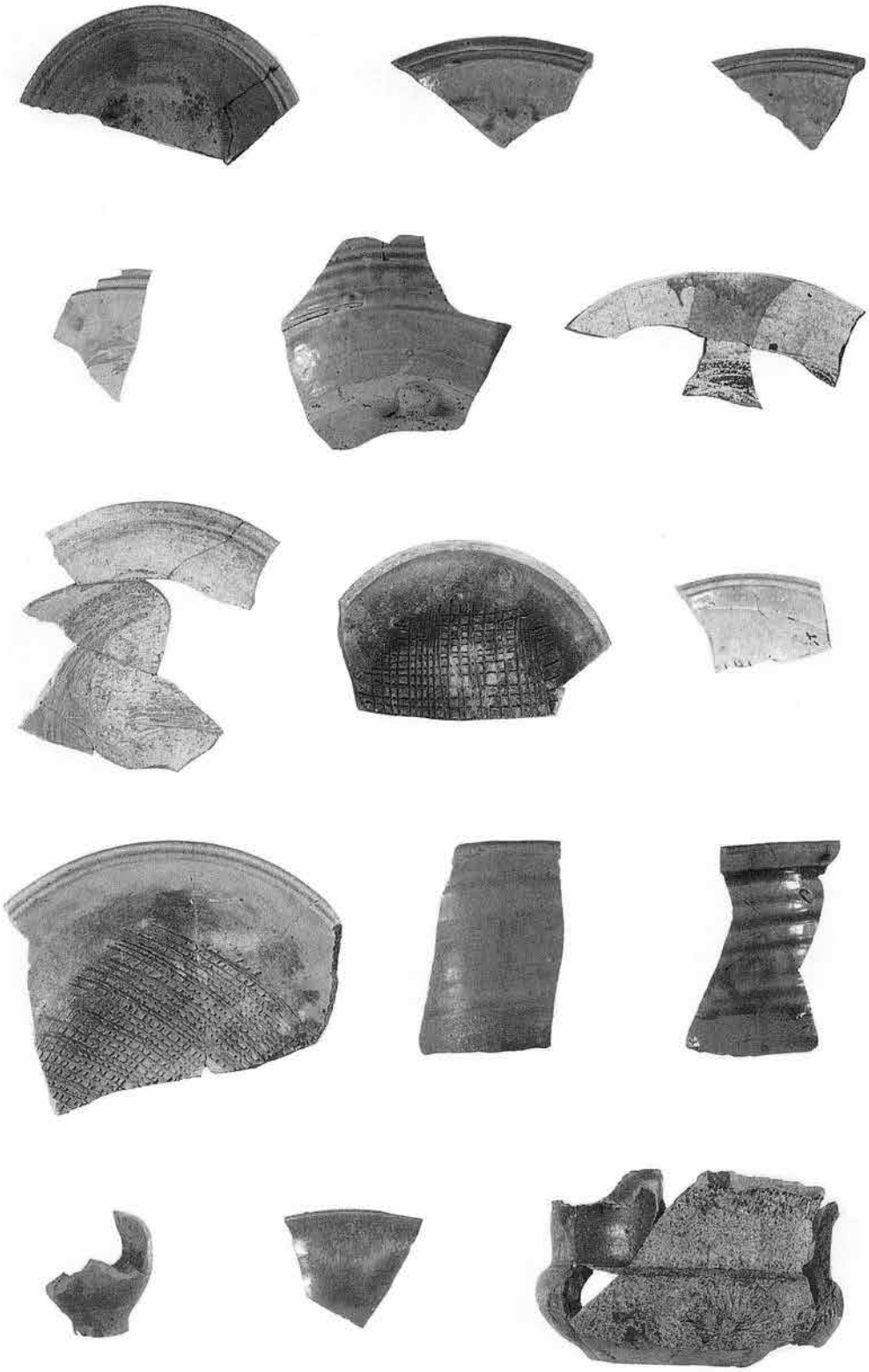
第１面包含層出土遺物



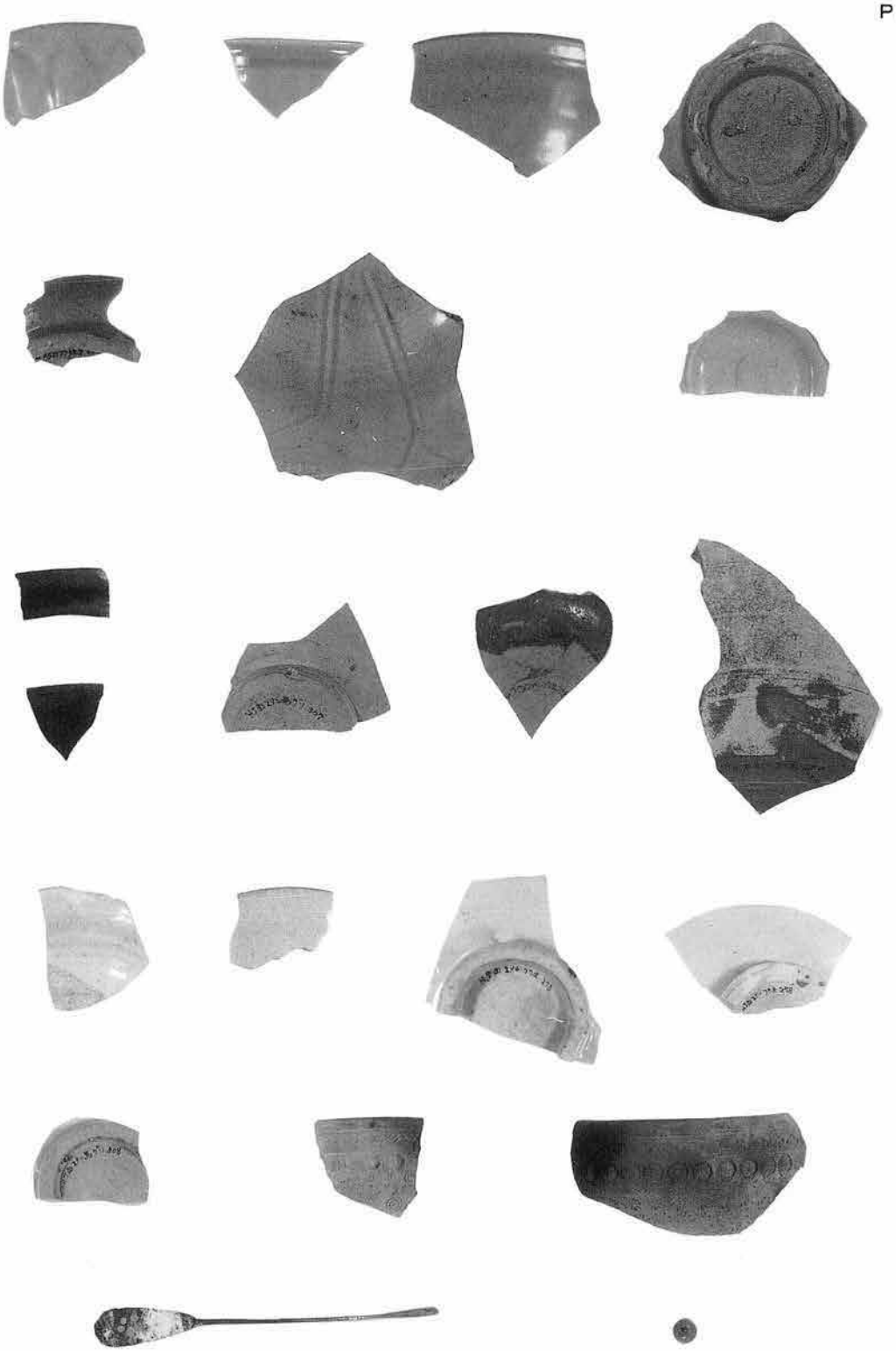
第1面包含層出土遺物



第２面遺構・包含層出土遺物



第2面包含層出土遺物



第 2 面包含層出土遺物

5．多　宝　寺　跡（No.187）

扇ケ谷二丁目250番６外地点

例　言

1. 本報は鎌倉市扇ケ谷二丁目250番6・7地点に所在する遺跡の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。
3. 調査期間は平成3年7月1日～8月15日まで、調査面積は約140㎡である。
4. 本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物の実測は長田、樋口、石丸に依頼した。
5. 本報に使用した写真は、遺構・遺物ともに菊川が撮影した。
6. 調査体制は以下の通りである。

   主任調査員　菊川英政

   調査補助員　長田夏子、樋口美江、石丸運人

   協 力 機 関　　㈱斉藤建設
7. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例言……(70)
目次……(71)

本 文 目 次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……(72)
第二章　調査の概要……(73)
　第１節　調査方法……(73)
　第２節　堆積土層……(74)
第三章　検出遺構と出土遺物……(76)
　第１節　第一面の遺構と遺物……(76)
　第２節　第二面の遺構と遺物……(78)
　第３節　第三面の遺構と遺物……(80)
　第４節　第三面下の遺物……(85)
第四章　調査のまとめ……(89)

挿 図 目 次

図１　調査地点位置図……(72)
図２　グリッド設定図……(74)
図３　土層堆積状態図……(75)
図４　溝状遺構……(76)
図５　第一面検出遺構平面図……(77)
図６　鈴・小玉……(78)
図７　石垣遺構……(78)
図８　第二面検出遺構平面図……(79)
図９　土壙２出土遺物……(80)
図10　第二面上包含層出土遺物(1)……(81)
図11　第二面上包含層出土遺物(2)……(82)
図12　地鎮遺構……(82)
図13　地鎮遺構出土遺物……(83)
図14　礎石建物址……(83)
図15　第三面検出遺構平面図……(84)
図16　第三面上包含層出土遺物(1)……(86)
図17　第三面上包含層出土遺物(2)……(87)
図18　第三面上包含層出土遺物(3)……(88)
図19　攪乱壙出土遺物……(85)

図 版 目 次

図版１　調査地点近景……(90)
図版２　窪地内土層堆積状態他……(91)
図版３　Ⅰ区第一面全景……(92)
図版４　Ⅰ区第二面全景他……(93)
図版５　石垣遺構……(94)
図版６　Ⅰ区第三面全景……(95)
図版７　Ⅱ区第二・第三面全景……(96)
図版８　地鎮遺構・土壙２……(97)
図版９　落ち込み遺構他……(98)

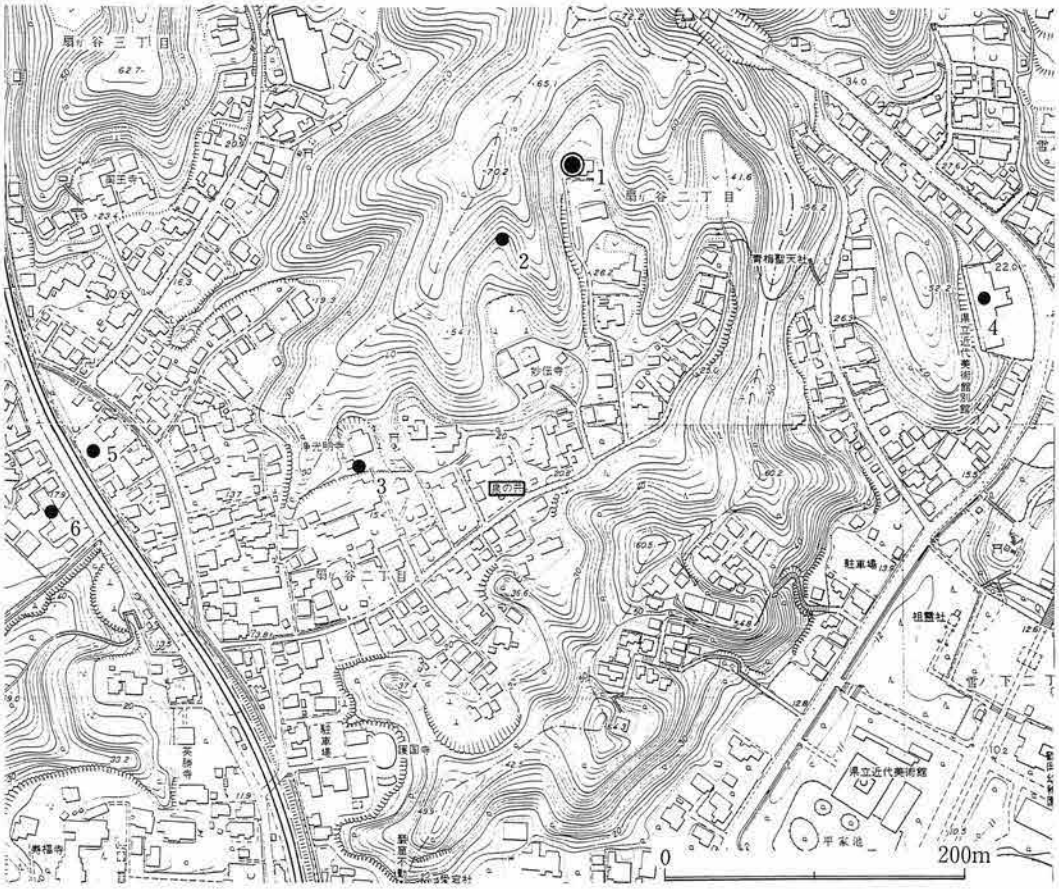


図1　調査地点位置図　（1：調査地点　2：覚賢塔　3：浄光明寺境内遺跡
4：裏八幡西谷遺跡　5～6：智岸寺遺跡）

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

扇ケ谷は鶴岡八幡宮の西方にあり、英勝寺の門前辺りを中心とすれば、丁度、扇を開いたように大小の谷が寄り集まっている地域である。多宝寺跡はこの谷群の東端、通称“泉ケ谷”に所在する。

泉ケ谷の名は、谷中央部に湧く“泉の井”に由来し、この湧水が多宝寺の寺域南限を示すものと考えられている[註1]。現在、泉の井より南には浄光明寺（真言宗・建長三年草創）のみ存するが、その向い側の小谷には東林寺（律宗・詳細不明）があったと言われている。

多宝寺の寺域内は四つの支谷に分かれている。東側および北側の支谷は、多宝寺に属していた確証はないものの、瓦片等が多く採集されており、寺院址に関連する遺跡であることは間違いない。西側の支谷のうち覚賢塔のある谷は、昭和34年から53年にかけて７回の発掘調査が行われ、覚賢塔下の平場に並ぶやぐら群や礎石建物、授戒壇と思しき石造遺構が発見されている[註2]。覚賢塔の北隣の谷、つまり、今回調査を行った谷では、既に平成元年に一部が発掘調査され、スロー

プ状の道路遺構と石垣で区画された小規模な平坦地がみつかっている[註3]。今回調査した地点は、平成元年の調査地点と接する位置にある。

多宝寺は極楽寺・称名寺と並び、鎌倉における西大寺系律宗の拠点寺院として栄えたが、文献上に残された記録は少なく不明な点が多い。

創建年代・開山・開基については、『忍性菩薩略行記』中の「四十五歳弘長元　請鎌倉住釋迦堂……（略）……　四十六歳同二年　光業召請多宝寺　止住五年行僧法」という一文から、弘長二年（1262）頃の創建、開山忍性、開基北条業時ではないかと推定されている[註4]。

廃絶年代も不明であるが、『享徳日記』の享徳元年（1452）十二月の条に「多宝寺」の名があることから、存続年代の下限を示す史料とされている[註5]。更に降って、貞享二年（1685）に刊行された『新編鎌倉誌』では、「多寶寺谷ト云所アリ。寺ハナシ。大ナル五輪アリ。」と記され[註6]、文政四年（1821）頃の様子を写したとされる『扇ケ谷村絵図』（天保三年・1832）では、「多寶寺谷」の名と共に「畑」と記されるだけである[註7]。

火災の記録を拾ってみると、『随聞私記』乾元元年（1302）四月十六日条に「岩屋堂ヨリ出火シ、多宝寺、浄光明寺等悉ク焼亡ス」とあり[註8]、『北条九代記』延慶三年（1310）の条では、安養院から出火し、御所や宿館を含め、東は杉本、西は多宝寺に至るまで、鎌倉のほぼ北半分が焼失した大火の記録が残っている[註9]。

註1　大三輪龍彦　1968　「廃多宝律寺について」『鎌倉』第17巻　鎌倉文化研究会

註2　三上次男他　1976　『多宝律寺遺跡発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会

　　三上次男他　1977　『多宝律寺遺跡第７次発掘調査報告書』　鎌倉市教育委員会

註3　資料整理中、未刊行。

註4　註１に同じ。

註5・註6　『享徳日記』『新編鎌倉誌』の記事に関しては、大三輪龍彦他　1976　『重要文化財浄光明寺五輪塔修理工事報告書』浄光明寺　の38～39頁を引用した。

註7　『鎌倉の古絵図』（２）　鎌倉国宝館図録第十六集　1969　鎌倉国宝館

註8・註9　『随聞私記』『北条九代記』の記事に関しては、沢寿郎　1972　『鎌倉－史蹟めぐり会記録－』　鎌倉文化研究会　の415頁を引用した。

第二章　調査の概要

第１節　調査方法（図２）

遺跡地は、既に宅地分譲用地として４ブロックに区画整備され、平成元年の調査地点は、この造成地への取り付け道路および階段・地下車庫部分となっていた。今回調査した地点は、造成地の西側２ブロックにあたり、調査区は分譲区画の石垣で南北に２分された状態であった。石垣は幅約１ｍ、比高差50cmを測り、北側が一段高く造成されている。

調査にあたり、排土を場内処理する必要上、石垣はそのまま残すこととし、北側Ｉ区から調査

を行い、終了後、南側II区の調査を行うという方法が採られた。I区は平成3年7月1日～7月30日まで、II区は7月31日～8月15日までの期間で調査が行われた。

調査に使用したグリッド軸は、分譲地北限の地界杭(民石161→民石164)ラインを基準とした。同ラインを南に60度振ってグリッド南北軸（A～Eライン）とし、それと直交するように東西軸（0～4ライン）を設定した。グリッドの方眼は5m×5mである。なお、磁北はグリッド南北軸に対して、21度30分東へ傾いている。

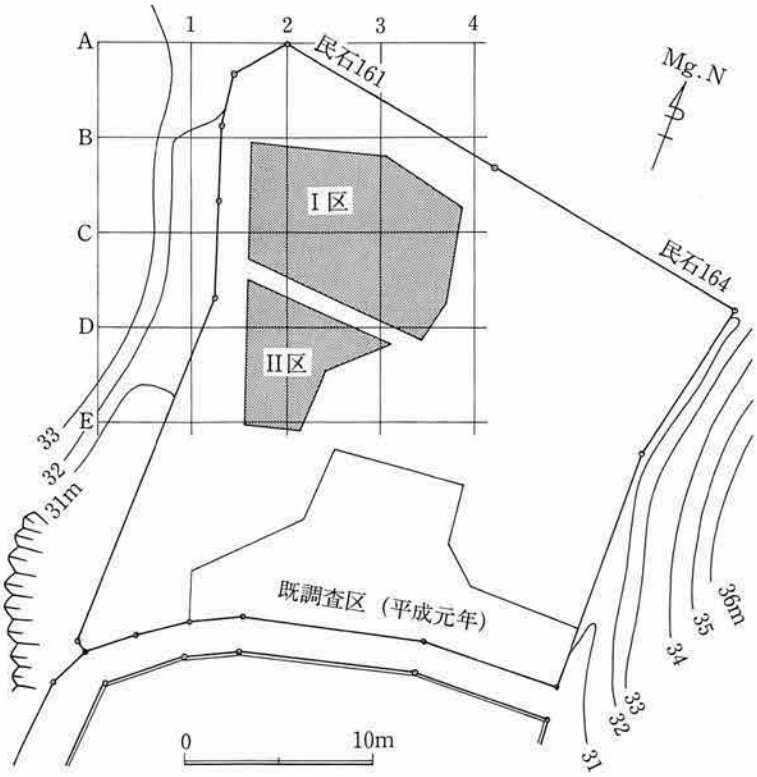


図2　グリッド設定図

第2節　堆積土層（図3）

調査区内での土層は、東および南方向へと緩やかに傾斜し、堆積している。これは調査区が西側山裾寄りに位置していることから、谷の自然地形を反映した結果ではないかと思われる。

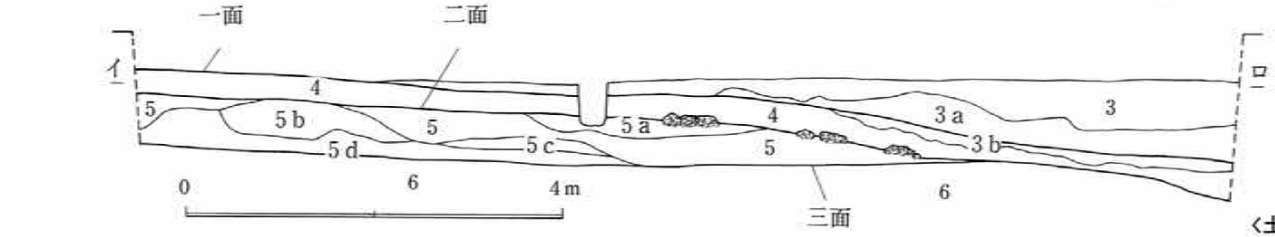
1層は表土層。2層は宝永火山灰（二次堆積）を下部に混入する近世以降の堆積土である。同層は平成元年の調査区内でも確認されており、谷内に広く堆積しているものと考えられる。既に市教育委員会が実施した試掘調査に基づき、1・2層は重機で除去を行った。3層以下が中世遺物を含む地業土層である。遺構との関係を考慮し、I区では調査区中央部の東西方向土層図を作製し、II区では調査区西壁および攪乱壙内壁（西側）の土層図を作製した。

生活面としては、第一面～第三面までを調査した。それ以下の生活面は、工事による掘削深度が及ばないため、攪乱壙（図3・II区攪乱壙西壁土層図）を利用して確認するだけに留めた。ただし、攪乱壙内においても、最古期の生活面は確認されていない。

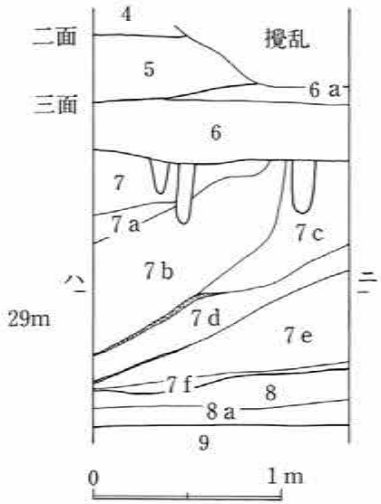
第一面はGL－30～70cm。4層上面にあたり、I区東南部に窪地状の湿地が存在する。

第二面はGL－70～90cm。5層上面。地鎮を伴なう地業がなされ、石垣が存在する。

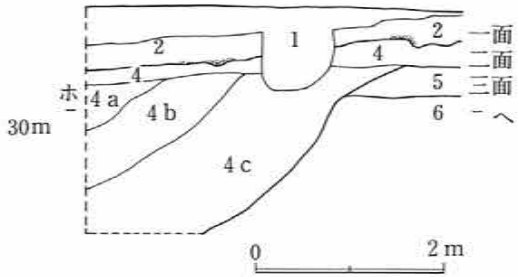
第三面はGL－120cm。6層上面。ほぼ平坦な生活面で、礎石建物が存在する。同面上には薄く炭化物層が堆積しており、火災を受けた可能性が強い。



I区東西方向土層図



II区撹乱壙西壁土層図



II区落ち込み遺構西壁土層図

図 3　土層堆積状態図

〈土層注記〉

1 表土
2 暗茶褐色砂質土・火山灰混入
3 明褐色土
　3 a明褐色土・土丹、黒色粘土混入
　3 b暗灰色粘土
4 暗茶褐色土・小土丹混入
　4 a土丹層・暗茶褐色土混入
　4 b土丹層・褐色粘土混入
　4 c土丹層
5 暗茶褐色土・中形土丹混入
　5 a明茶褐色土・土丹粒混入
　5 b土丹層
　5 c暗灰褐色粘質土・中形土丹混入
　5 d暗褐色粘質土
6 暗褐色粘土
　6 a土丹層
7 土丹層
　7 a暗茶褐色土
　7 b土丹層
　7 c土丹層・灰褐色粘土混入
　7 d土丹層・上下に炭化物層を狭む
　7 e土丹層・中～大形土丹が主体
　7 f暗灰褐色粘土
8 土丹層
　8 a黒灰色粘土・焼土・炭化物混入
9 土丹層

第三章　検出遺構と出土遺物

第１節　第一面の遺構と遺物（図４・５・６）

宝永火山灰を含む茶褐色砂質土（２層）を除去した段階で、Ｉ区東南部に土丹を混入する明褐色土（３・３a層）が堆積していることが判明した。同層を除去すると、数条の溝状遺構と土壙、谷中央部へと落ち込む窪地斜面が検出された。

II区においては、北側部分に石垣埋設時の攪乱を受け、南側部分は重機で掘り過ぎたため、遺構は何も検出できなかった。

検出された遺構は、以下の通りである。

溝状遺構（図４）……南北方向に５条並んで検出された。長さ3.4～4.5m、幅30～50cm、深さ４～８cmの浅い溝である。３層が直接覆土となっており、出土遺物はない。小規模な畑の畝ではないかと思われる。

土壙１（図５）……窪地斜面の北側で検出された。上面は一辺２m程の不正方形を呈す。深さ約25cm。壁面は緩く立ち上がっている。覆土は３層を主体とし、出土遺物はない。

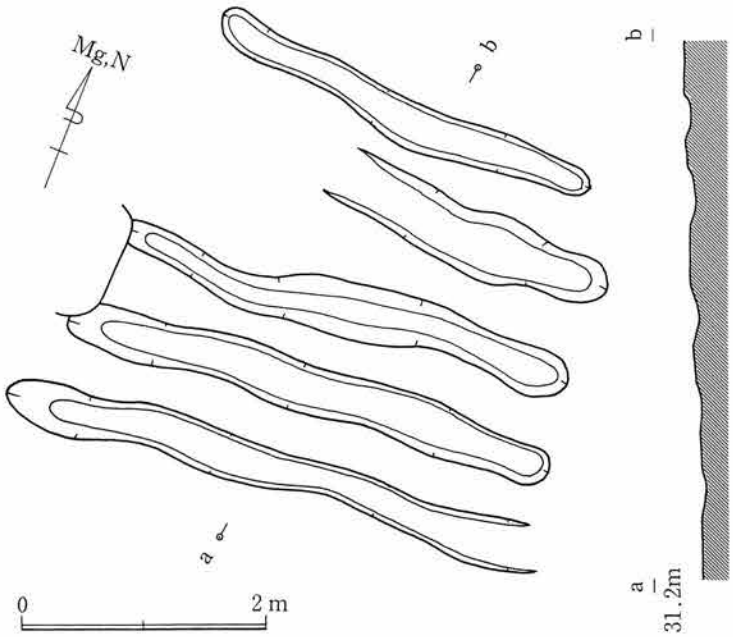


図４　溝状遺構

ピット群（図５）……覆土の状態から、P1・P2以外はすべて近代以降の攪乱と思われる。P1は深さ30cm。瀬戸陶器、かわらけ皿の微細な破片が出土している。P2は深さ10cm。浅い皿状の窪みで出土遺物はない。

窪地斜面（図５）……人為的な遺構とは考え難い。第一面造成時に谷中央部が利用されないまま残り、沢筋の水が集まって湿地化した窪地を形成していたものと考えられる。平成元年の調査地点では確認できず、南側部分の状態は不明である。覆土最下層には暗灰色粘土層が堆積し、下底面は鉄分の固着による凹凸が多くみられた。調査区東壁際での比高差は、上端０に対し、東南部角隅で－105cmを測る。覆土最下層から、ガラス製小玉が出土している。

出土遺物（図６）……３層～3b層に含まれる遺物は極めて少ない。

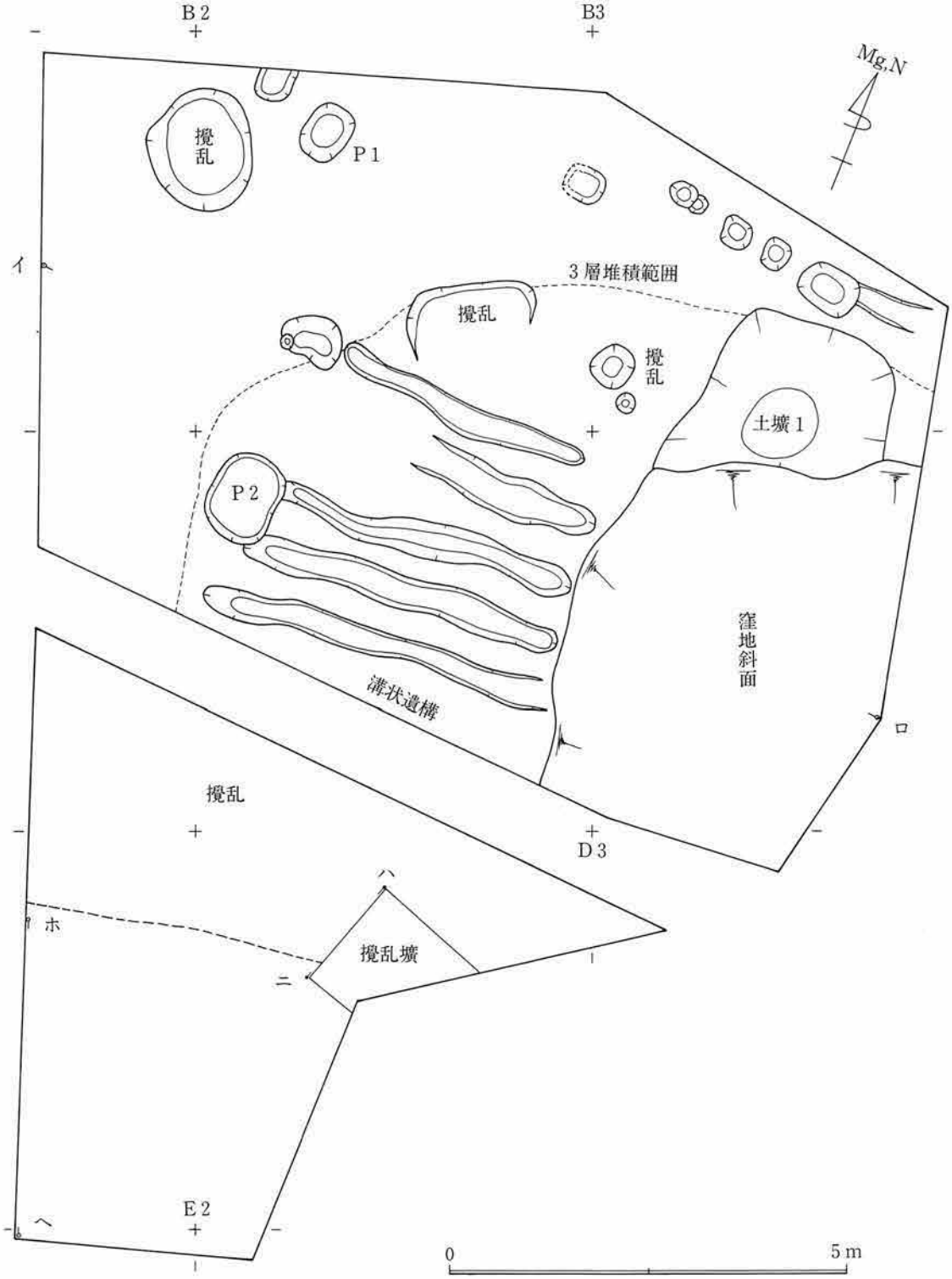


図5　第一面検出遺構平面図

1は青銅製品。鈴と思われるが、天井部が大きく潰れ、鈕はみられない。3層直上の出土。

2・3はガラス製小玉。ともに3b層中から出土した。2は偏平で青緑色を呈し、3は球形で白色を呈している。

他に瀬戸折縁鉢片、内耳土鍋片が3層中から出土したが、整理中に紛失している。

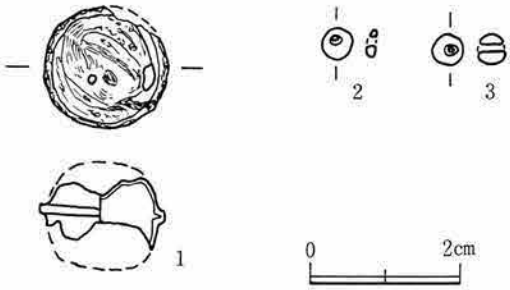


図6　鈴・小玉

第2節　第二面の遺構と遺物（図7～11）

第二面の遺構の特徴は、谷中央部寄りに東西方向の石垣を組み、西側および北側を一段高く造成している点にある。この石垣は第三面上に直接構築しており、また、前面は第三面をそのまま継続して使用していることから、第三面廃絶後、時を経ずに第二面の造成が行われたと考えられる。

石垣遺構の西端から南側へ続く緩斜面は、この一段高く造成された平坦地への登り口とも考えられるが、II区側で確認できず、細かな構造は把めていない。

第二面に伴う遺構には、II区南側の落ち込みと地鎮遺構がある。前者は第二面でプランを確認したが、後者は全く確認できなかった。ともに第二面で発掘していないため、次節で扱う事にする。

第二面検出の遺構は、以下の通りである。

石垣遺構（図7）……挙大～人頭大の土丹塊を東西方向に二段ないし三段に積んで構築する。高さは45cm程度である。調査区東壁寄りの部分は、ピット3に壊され遺存しない。石垣西端から南側は、地業土中の土丹塊が露出した緩斜面となっている。比高差は35～40cmである。

土壙2（図8）……石垣遺構の西端で検出された。長軸1.3m、短軸1m、深さ30cm程の隅丸長

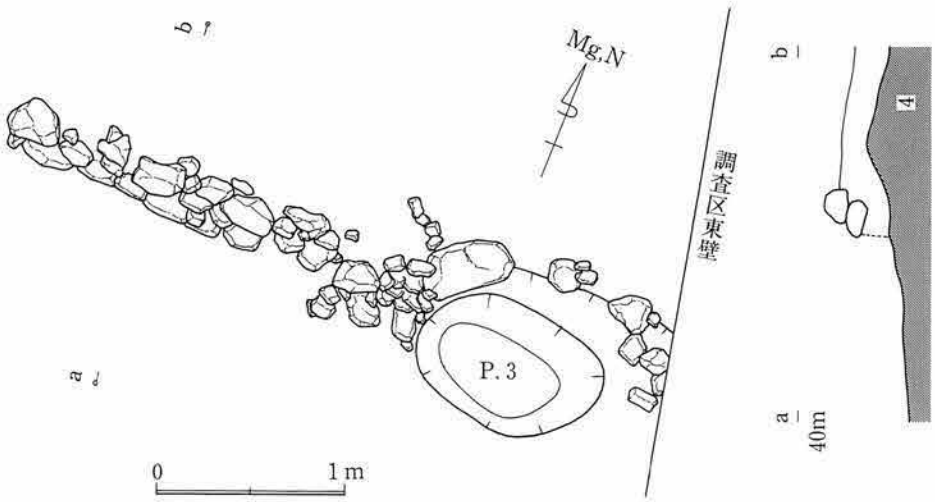


図7　石垣遺構

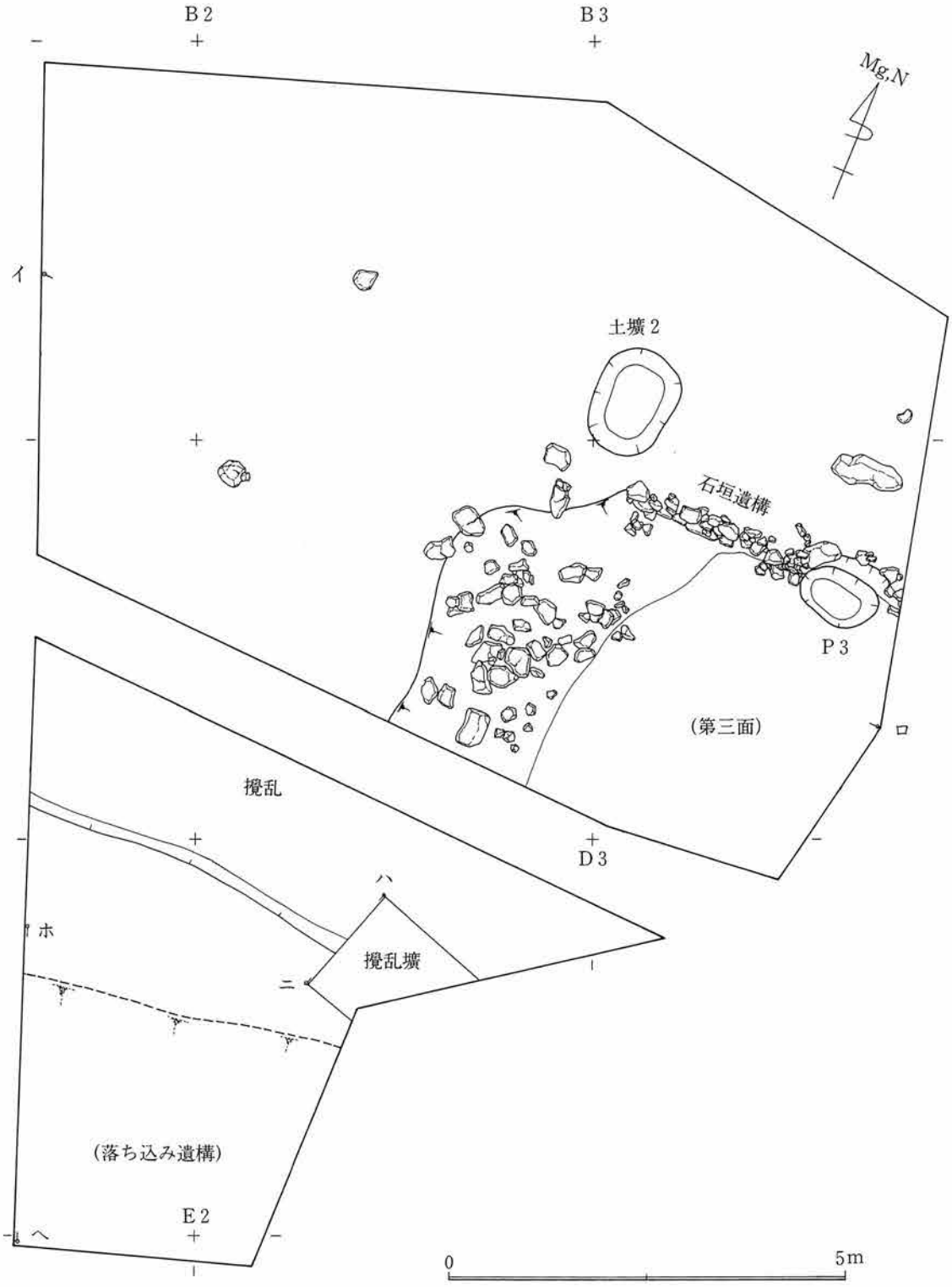


図 8　第二面検出遺構平面図

方形を呈し、主軸はほぼ南北を示している。

土壙２出土遺物（図９）……すべて破片である。１～４はかわらけ皿。２は灯明皿として使用。５は常滑窯産の捏ね鉢。底径17cm前後と思われる。６は常滑窯産の甕底部である。

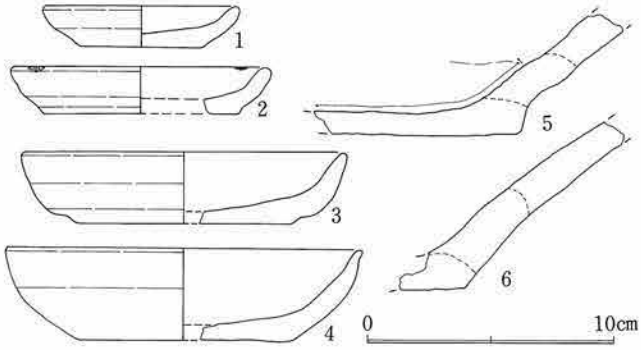


図９　土壙２出土遺物

第二面上包含層出土遺物（図10･11）……かわらけ皿、常滑窯・瀬戸窯産の陶器片など天箱２箱分が出土した。常滑窯製品では甕・捏ね鉢が多く、瀬戸窯製品では折縁鉢の他に香炉も出土している。舶載陶磁器や瓦の出土量は極めて少ないことが特徴といえよう。

１～19はかわらけ皿。10は完形品である。５・９・11･12は灯明皿として使われている。

20～23は舶載磁器。20は青磁折縁鉢。体部外面は鎬蓮弁文を配すが、釉が厚く鎬はみえない。21は青磁碗。口縁部が内彎（ワン）し、体部外面に鎬蓮弁文を配す。22は白磁口兀皿。23は青白磁梅瓶。

24～33は瀬戸窯産陶器。24は行平鍋の把手部分。薄く灰釉がかかる。25は卸し皿。口縁部に灰釉がかかる。26は灰釉香炉。小片からの復元実測である。頸部と体部下位にヘラ描きの蓮弁文を配している。27は鉄釉香炉。外底面にまで鉄釉がかかる。28は皿であろうか。底部糸切り。残存部に釉はみられない。29は灰釉瓶子。頸部近くに３～４条の沈線がめぐる。30は美濃系山茶碗。31～33は折縁皿。いずれも灰釉を刷毛塗りしている。

34～36は土製円盤。かわらけ皿底部を刺突あるいは磨滅させ、円盤状にした製品。用途不明。

37は平瓦。凸面に斜格子の叩き具痕を残す。

38は通称“磨り常滑”常滑窯産の甕体部片を再利用したもので、表面および縁辺部が磨耗する。

39・40は砥石。黄灰白色頁岩製で仕上げ砥に属す。幅3.5cmの規格化された製品である。

41は北宋銭。元豊通宝（初銭1078年）。

42・43は鉄釘と思われる。

44～46は常滑窯産の甕。45は推定口径38cm。46は推定口径56cm。

47～49は常滑窯産の捏ね鉢。47は推定口径34cmを測る。

50～57は手焙り。50～52は近代以降の製品で、混入品である。55は推定口径26cmを測る。

第３節　第三面の遺構と遺物

第三面では、礎石建物址・溝状遺構などが検出された。礎石建物址は谷の西側山裾寄りに位置し、谷中央部の一帯は灰白色の山砂を敷いて整地されている。この整地範囲の北側、丁度、礎石建物址の東側にあたる箇所では、小砂礫が多く出土している。また、第三面上には、ほぼ全域にわたって薄い炭化物層が堆積しており、火災を受けていたことが明かである。

礎石建物址付近に集中する大形の土丹塊は、第三面廃絶後、第二面を造成する際に投げ込まれた

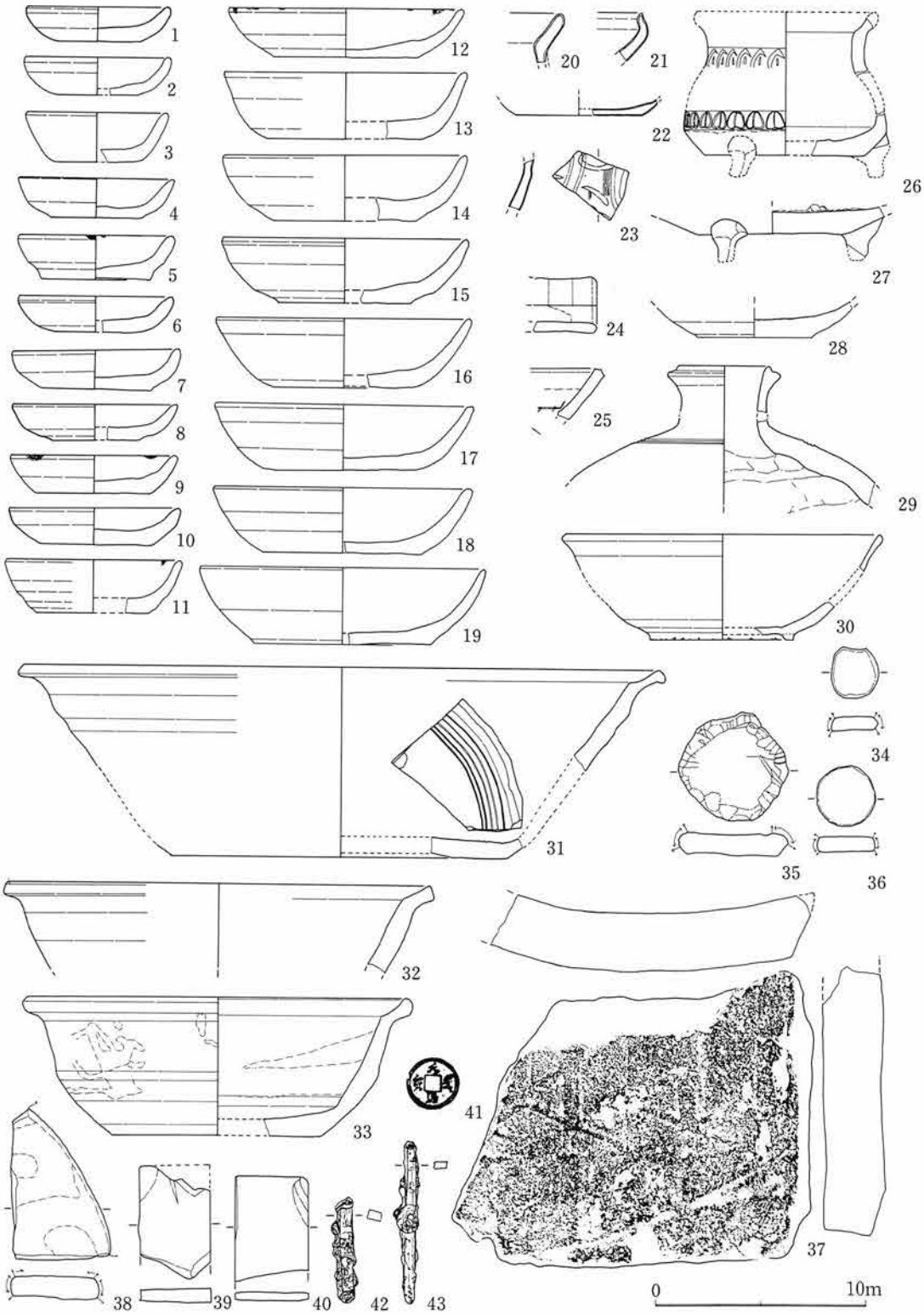


図10　第二面上包含層出土遺物(1)

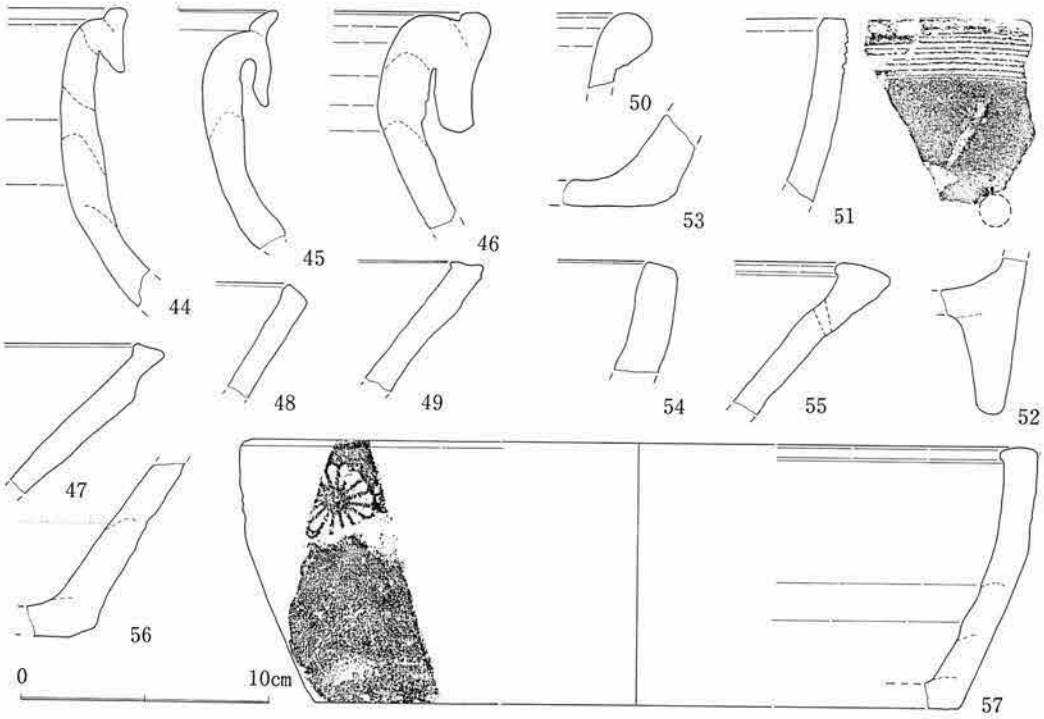


図11　第二面上包含層出土遺物(2)

ものである。長辺70cm、短辺50cm、厚さ30cm程の長方形切石を破砕しており、周辺部に存在した何らかの遺構に使われていた可能性もある。この土丹塊の横で地鎮と思われる遺構が検出されている。

第三面の遺構説明の前に、第二面に伴う地鎮遺構とII区南側の落ち込み遺構について触れておくことにしたい。

地鎮遺構（図12）……礎石建物址の西端、大形土丹塊の横で検出された。第三面より高位にあり、第二面造成に係わる地鎮遺構と考えられる。

確認当初、直径30cm程の円形ピットの中に草木灰が充塡しており、数cm掘り下げた結果、完形のかわらけ皿を埋納していることが判明した。かわらけ皿は6枚あり、5枚が正位で重ねられ、1枚はすぐ横に逆位で出土した。残念なことに、正位で出土した5枚のかわらけ皿のうち、最上位にあった1枚は、調査中に紛失している。

地鎮の方法については不明であるが、ピット内に焼けた箇所はなく、焼土の混入もないことから、別の場所で祭りを行い、かわらけ皿と灰だけをピットに埋納したと考えられる。

地鎮遺構出土遺物（図13）……1～5はかわらけ皿。胎土・器形とも類似している。火熱を受けたためか、いずれの皿も口縁部から体部にかけて黒色化している。

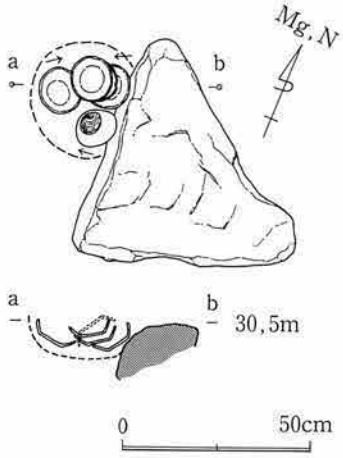


図12　地鎮遺構

落ち込み遺構（図15）……既に第二面でプランが確認さ

れた遺構である。大規模な遺構と思われるが、全容が不明で適当な名称を付けることができない。壁面は約45度の勾配で落ちており、確認面から1.7m下げて完掘を断念した。覆土は破砕した土丹が主体で、土をほとんど混入しない。北側から順次埋められ、短期間のうちに埋没したものと考えられる。出土遺物はない。

溝状遺構（図15）……礎石建物址の東および南側で検出された。規則性はなく、いずれも断面U字形の浅く不明瞭な遺構である。これらのうち、南側にある溝は長さ3.4m、幅20cm、深さ3cm程を測り、周囲の灰白色山砂面は火熱を受けて赤変していた。

礎石建物址（図14）……西側山裾寄りで検出された。第三面の整地状態と谷内の広さを考えた場合、他にも建物が存在する可能性は高く、主体となる建物も別にあったと推測される。

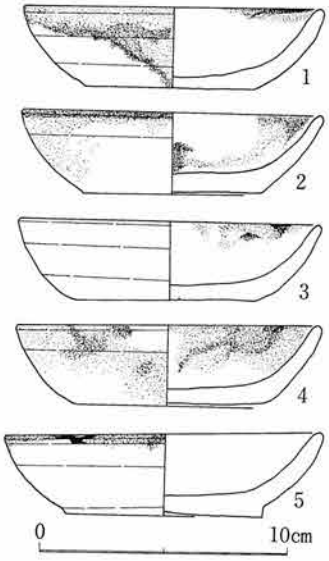


図13　地鎮遺構出土遺物

礎石は偏平な河原石を使用し、東西三間・南北一間分が確認された。伊豆石上面に残された痕跡から、柱は1辺12cmの角材を用い、柱間距離は2mであったと判明した。

第三面上包含層出土遺物（図16～18）……かわらけ皿・常滑甕のほか、捏ね鉢・手焙りの出土量が多く、天箱3箱分が出土した。

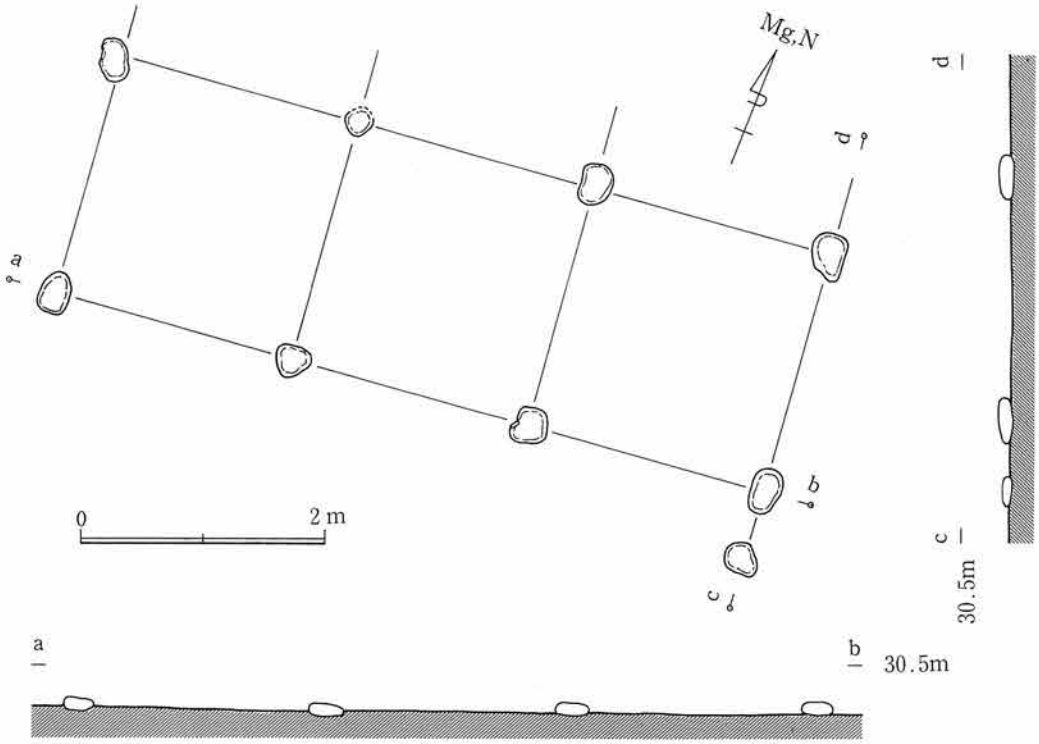


図14　礎石建物址

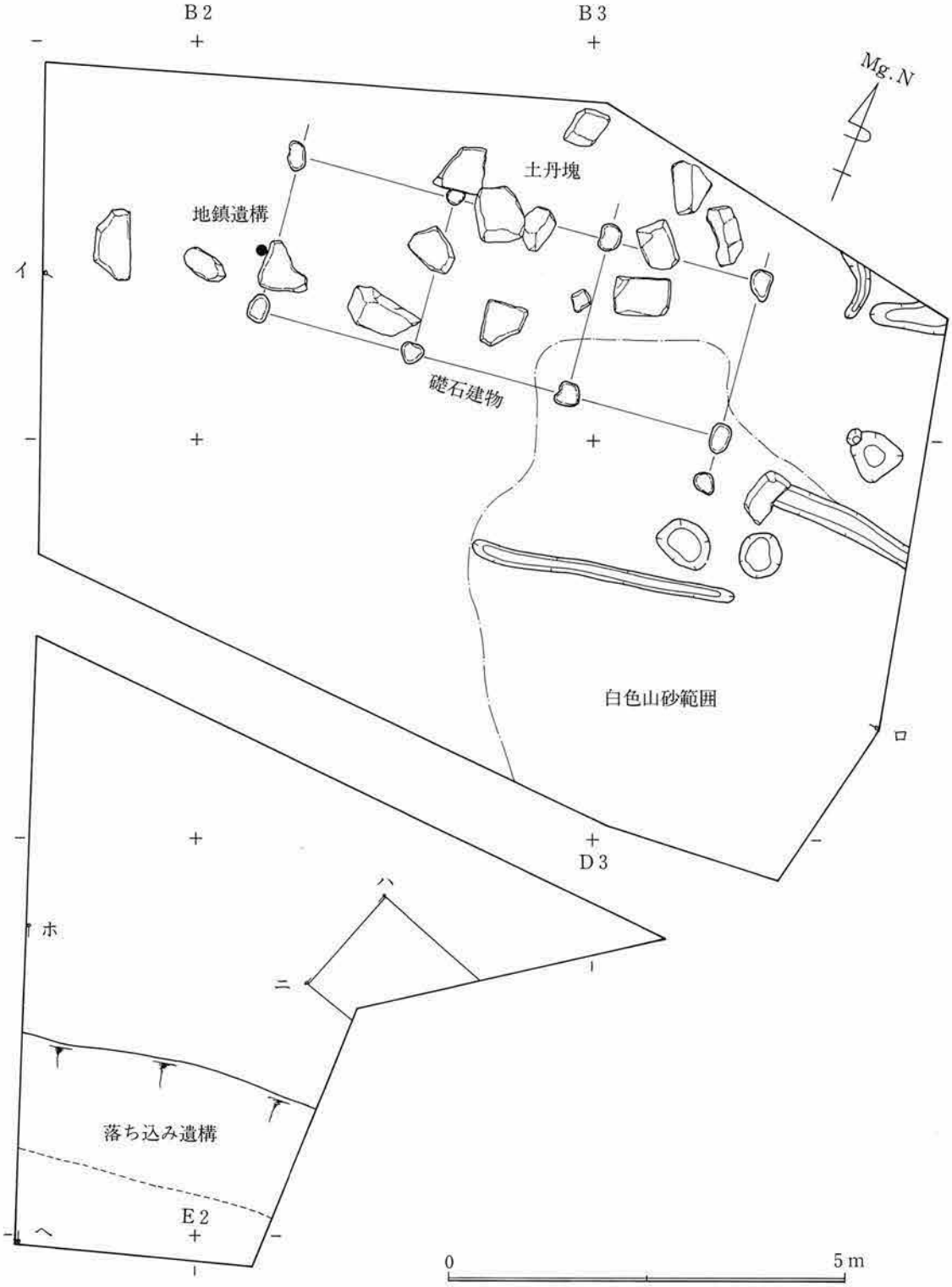


図15　第三面検出遺構平面図

1～23はかわらけ小皿。1は底部中央に穿孔を有す。16～23は灯明皿として使用。

24～39はかわらけ大皿。28は略完形である。

40は白かわらけ。糸切り底である。

41は早島式土器埦。小片である。

42～44は瀬戸窯産陶器。42は入れ子皿であろうか。43は合子蓋。外面と天井部内面に灰釉がかかる。44は卸し皿。

45～50は舶載陶磁器。45は白磁口兀皿。口唇部に炭化物が付着する。46は青白磁梅瓶。47は青磁蓮弁文大皿。48は緑釉陶器壷。胴部に2条の沈線をめぐらせ、上半部に草花文を配す。胎土は灰白色精緻。49は緑釉陶器盤。胎土中に小礫を多く混入する。50は白磁鉄絵盤。小片である。

51～58は常滑窯産の甕。56は推定口径48cm。57は推定口径55cmを測る。

59は常滑窯産の壷。小片からの復元実測である。頸部と肩部に沈線がめぐる。

60～63は山茶碗窯系捏ね鉢。

64～67は常滑窯産捏ね鉢。64は底部を破損し、高台の有無は不明である。

68は東播系の捏ね鉢。口唇端部の磨耗は、二次的使用によるものであろう。

69・70は備前摺り鉢。同一個体と思われる。内面に6条単位の櫛目を施す。

71～76は手焙り。73は近代以降の混入品。74は瓦質。外面に菊花文を押捺する。75は器表が著しく剝落している。

77は平瓦。凸面に格子と花菱の叩き具痕が残る。

78は椀形鉄滓。

79～81は鉄製品。錆化が激しく、原型を留めるものはない。81は角釘である。

82～84は北宋銭。82は祥符通宝（初鋳1008年）、83は政和通宝（初鋳1111年）、84は正隆元宝（初鋳1158年）である。

85・86は砥石。85は黄灰白色、86は淡赤褐色の頁岩製仕上げ砥である。

87は木製品。一端を三角形状に切っている。用途不明。

第4節　第三面下の遺物（図19）

II区攪乱壙の調査によって、第三面下には3枚以上の生活面の存在がわかったが、工事による掘削深度を越えており調査はしていない。攪乱壙より出土した遺物は次の2点である。1は青磁碗。見込みに「金玉満堂」と押捺する。図3－7d層直上の出土である。2は磨り常滑。出土層位は不明。

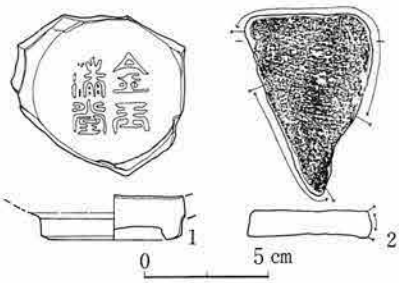


図19　攪乱壙出土遺物

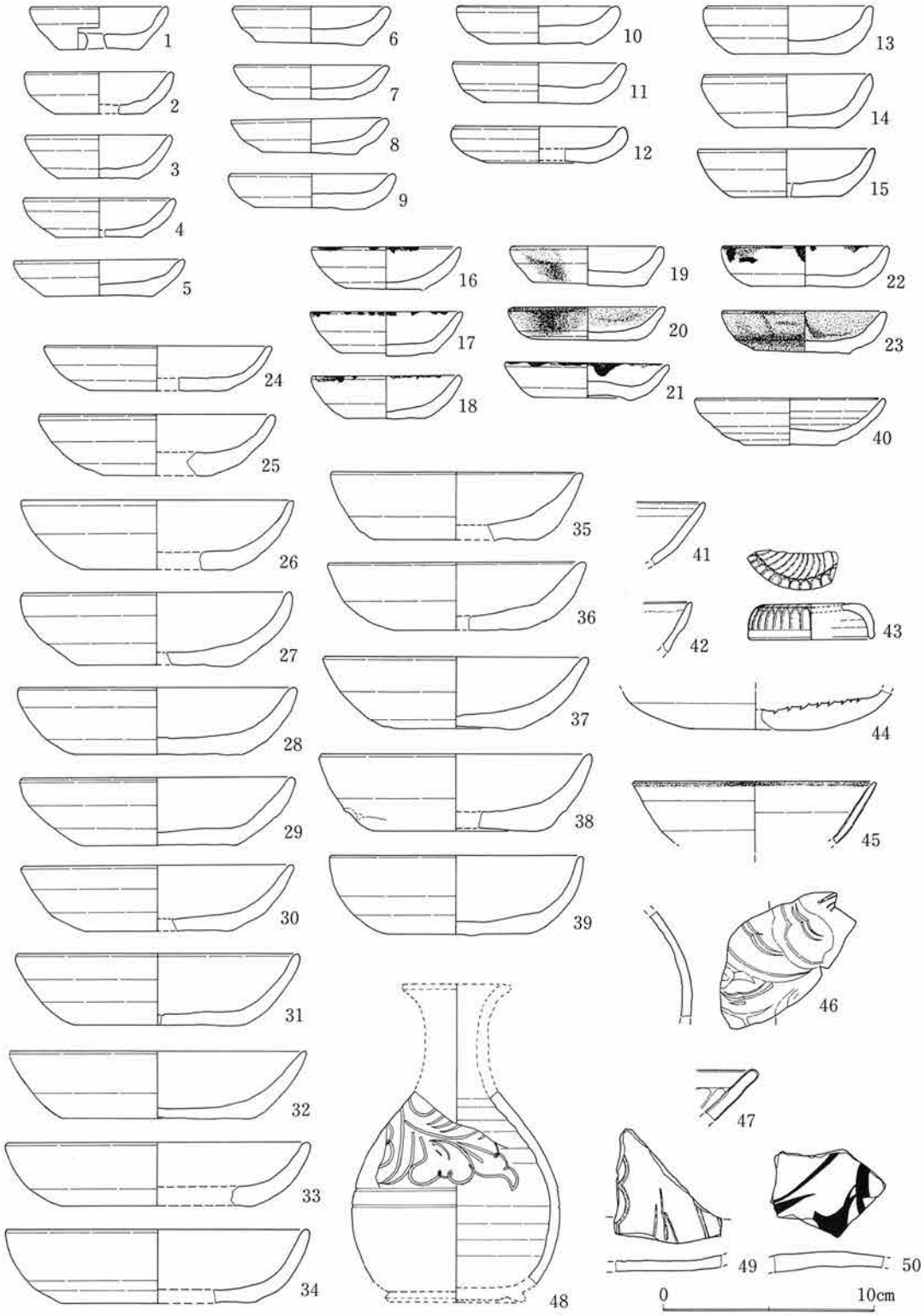


図16　第三面上包含層出土遺物(1)

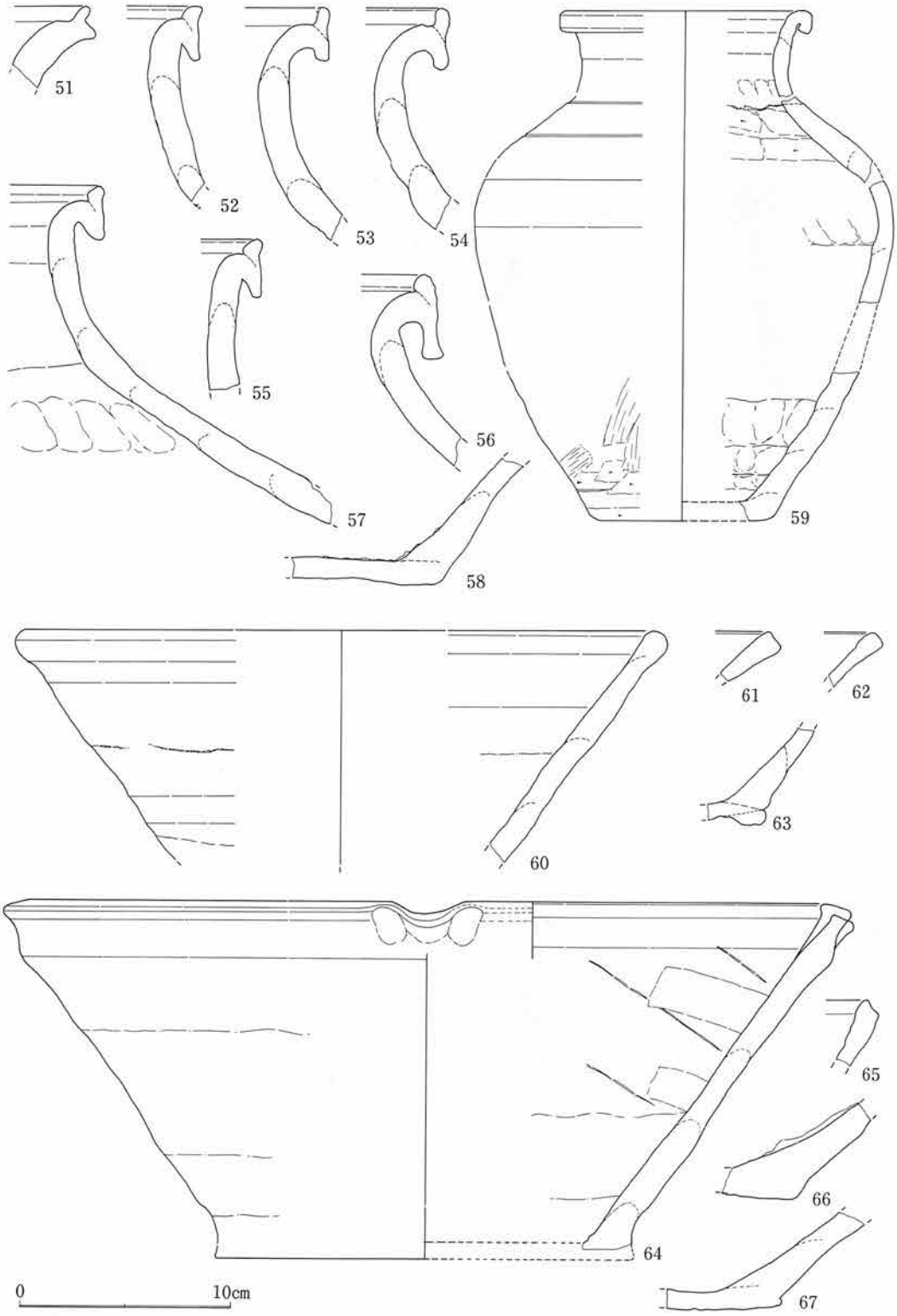


図17　第三面上包含層出土遺物(2)

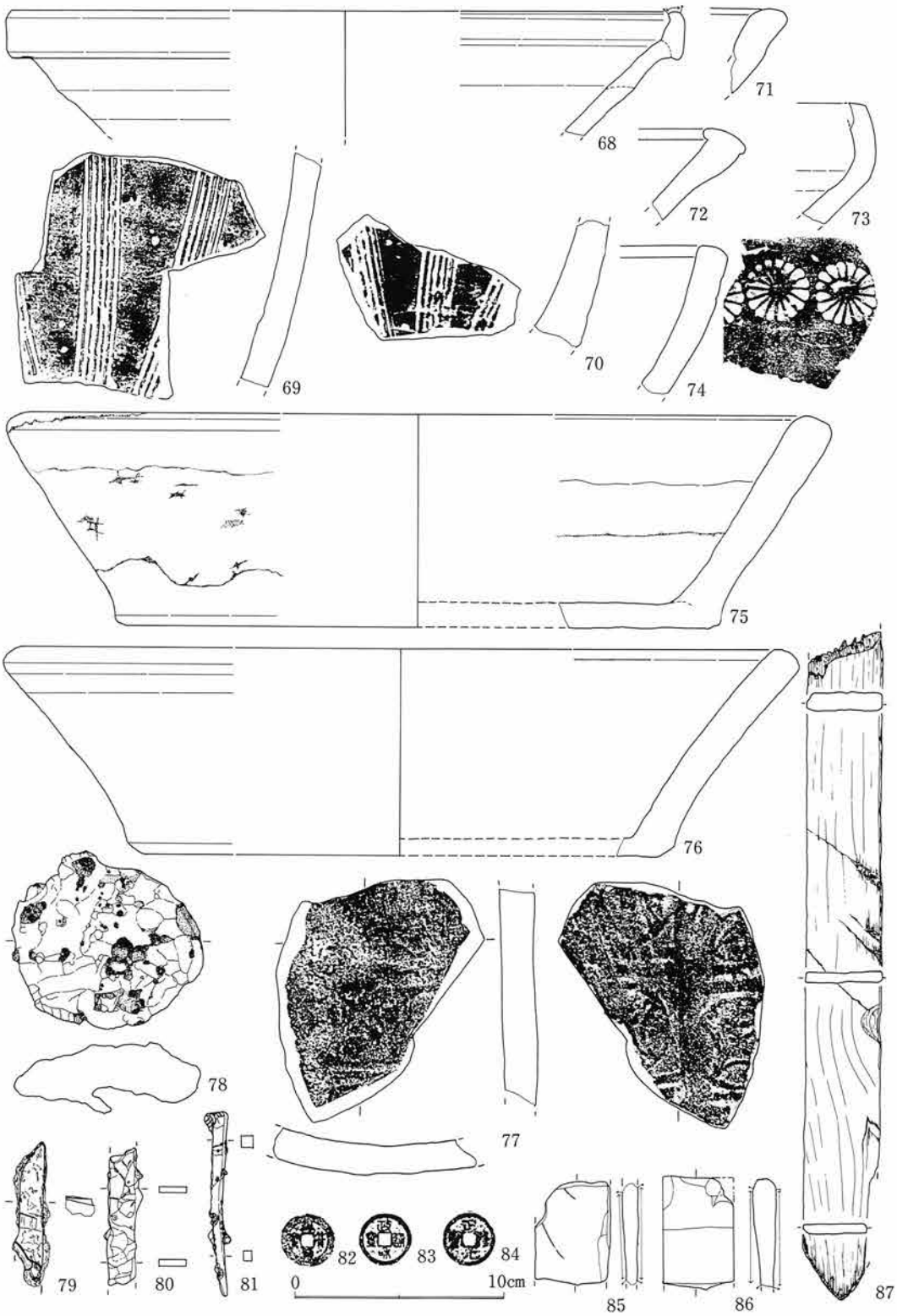


図18　第三面上包含層出土遺物(3)

第四章　調査のまとめ

検出された遺構群から、遺跡地の変遷を簡単に整理すると、まず、第三面では東西三間・南北一間以上の礎石建物が谷の西側山裾寄りに存在する。谷の中央部付近が丁寧に整地されていることを考えれば、谷の東側山裾部ないし谷中央部奥にも建物が存在したと推測される。これら第三面の建物群が火災を受けて廃絶すると、切り崩した大形土丹塊を用いて地業を行い、石垣によって区画された第二面を造成する。その際地鎮が行われている。第二面の遺構は、既に平成元年の調査で検出された遺構と一連のもので、谷中央部にスロープ状の道路を通し、その左右（東西）を雛段状に石垣で区画している。残念ながら、第二面での建物址は検出されていないが、僧坊的性格の建物群が存在したものと考えられる。第一面になると谷中央部は利用されず、沢筋の水が集まる窪地状の湿地となり、その脇には畑の畝と思しき溝状遺構が発見されている。おそらく、第二面廃絶後、谷内の利用は急に衰退し、わずかに小規模な畑が営まれるだけとなったのであろう。

第三面から第一面に至るまで、各遺構面に共通する特徴としては、構築物に対して常に磁北が意識され、強い規則が働いていたことがあげられる。現在の地形（図１）を見てみると、泉の井の横を通り谷奥へのびる道が、当支谷へと分岐した地点では、道は支谷中央部へ向かってほぼ南北方向を指しており、中世からの道を踏襲している可能性が考えられる。ただし、支谷内へ入ってからの道は西側山裾を通っており、この部分は平成元年の調査結果からみても、後世の付け替えであることは明かである。

遺跡の年代観に関しては、常滑窯址編年[註1]を用いた場合年代観は新しいものとなってしまうが、瀬戸窯址編年[註2]やかわらけ皿を主体とした河野編年[註3]から見れば、第二面・第三面とも14世紀代に納まるものと考えて間違いはない。第二面に伴う地鎮遺構出土のかわらけ皿が、河野編年でいう鎌倉Ⅳ期（13世紀末～14世紀中葉）の特徴を備えていることは重要で、『随聞私記』『北条九代記』に記された二度の火災（1302年・1310年）のどちらかが、第三面で確認された火災面に相当するのではなかろうか。なお、第一面の年代観は出土遺物が極端に少なく明確ではないが、窪地部分の埋土中から出土した内耳鍋片によって、15世紀代には第一面が埋没し、遺跡は廃絶してしまったと考えられよう。

今回の調査では、発掘面積の狭少さや深度規則の問題があったにも係わらず、谷内の利用状況を知る各種の遺構が発見され、文献に残された多宝寺史と同様の経過を遺跡がたどっていたことも明かとなった。このことは、中世律宗寺院の構造を考えるだけでなく、入り組んだ谷をもつ鎌倉での開発状況を知る上でも非常に大きな成果であったと考えている。

註１　赤羽一郎　1984　『常滑焼』考古学ライブラリー23　ニューサイエンス社

註２　井上喜久男　1992　『尾張陶磁』　ニューサイエンス社

註３　河野真知郎　1986　「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号　神奈川考古同人会

図版 1

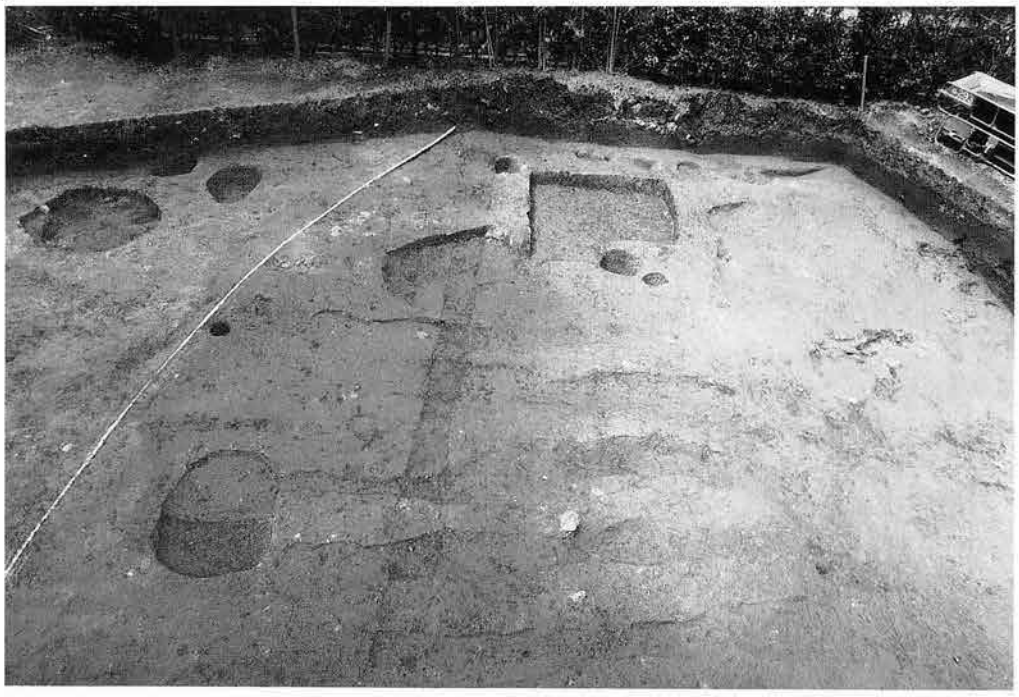
調査地点より谷奥を望む

調査地点近景

調査区の状態

Ⅰ区　窪地内の土層堆積状態

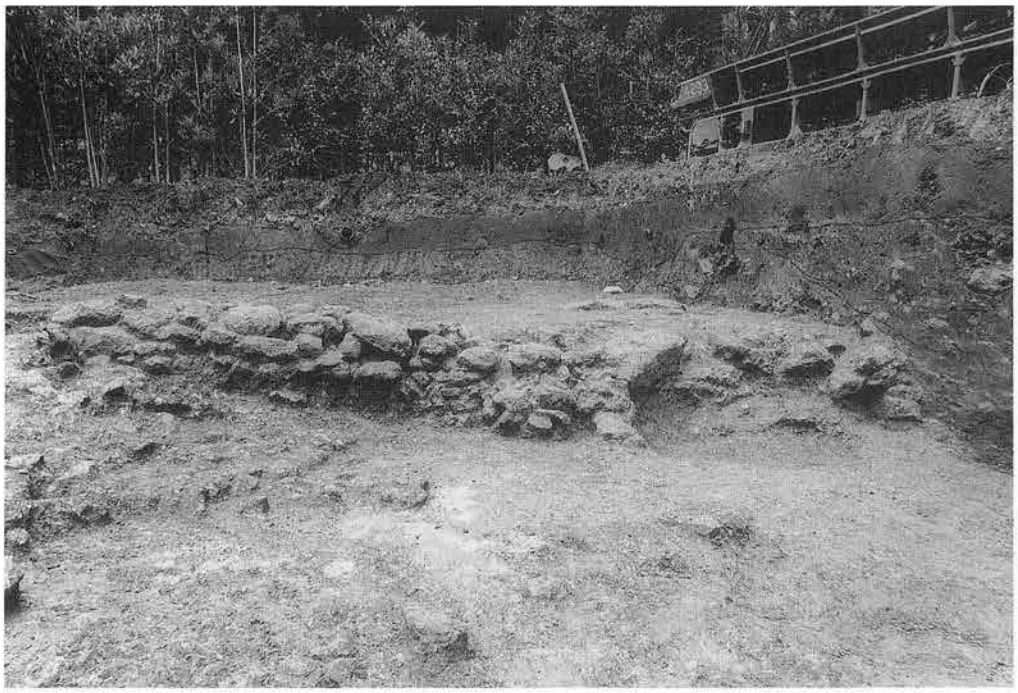
図版 3



Ⅰ区第一面全景（南から）

同（西から）

Ⅰ区第二面全景（南から）



石垣遺構（正面・南から）

図版 5

石垣遺構（西南から）

同（東から）

Ⅰ区第三面検出状態

Ⅰ区第三面全景（南から）

図版 7

II 区第二面全景（南から）

II 区第三面全景

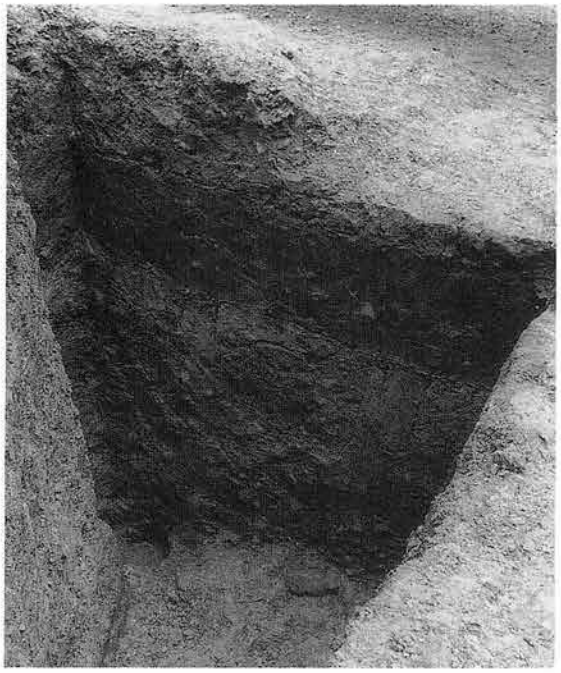
地鎮遺構（Ⅰ区第二面）

土壙2（Ⅰ区第二面）

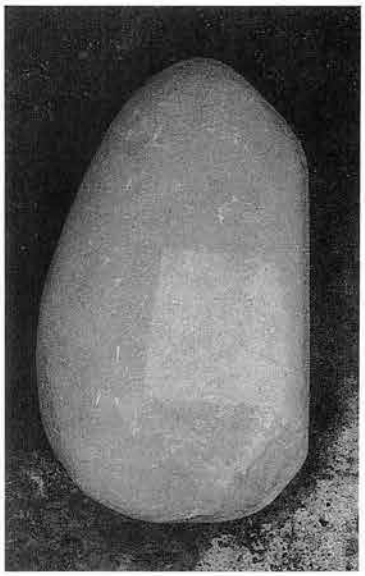
図版 9

落ち込み遺構（Ⅰ区第二面）

遺物出土状態（第三面上包含層）



攪乱壙内部（Ⅱ区）



礎石に残る柱痕

かわらけ

土製円盤

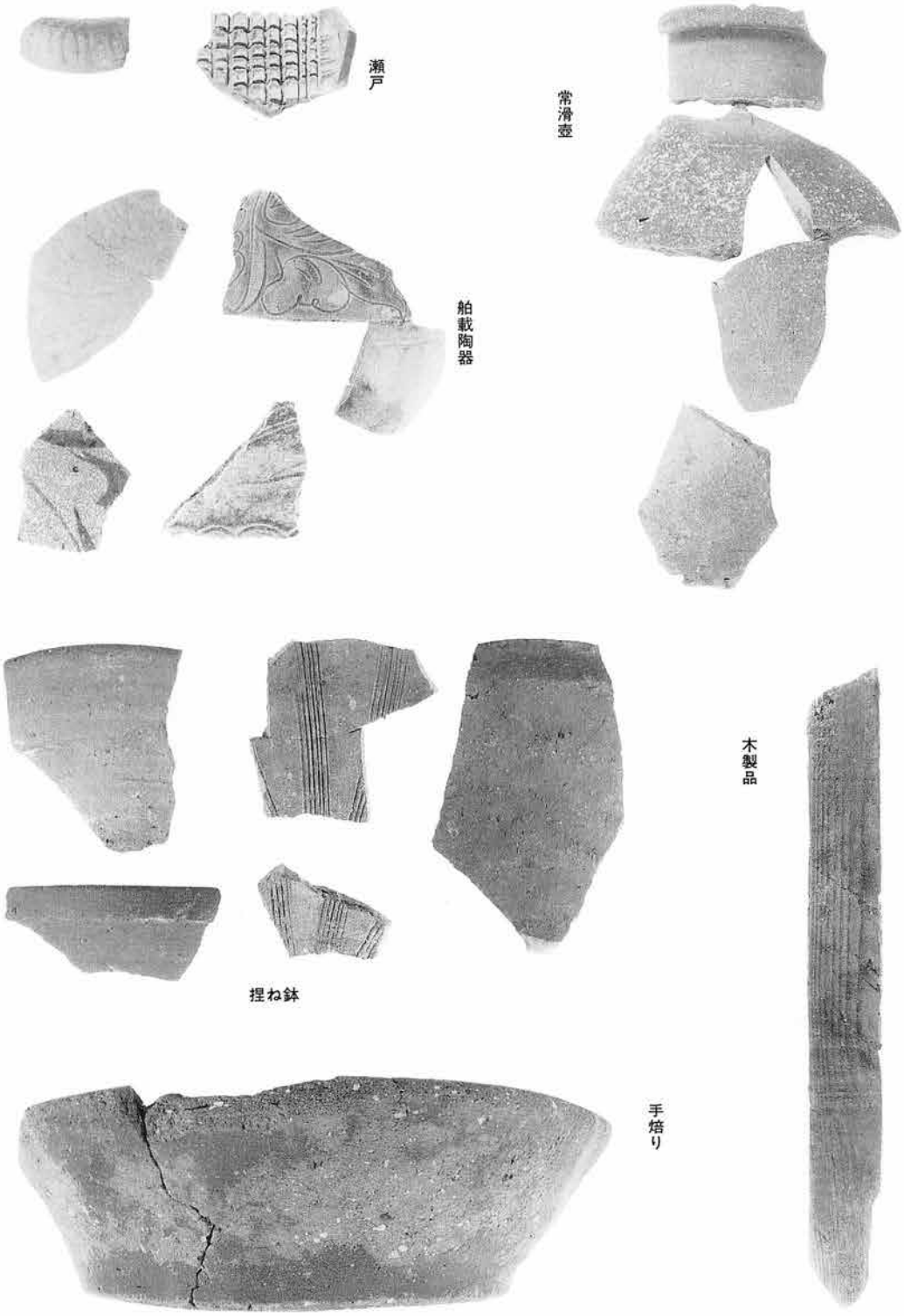
手焙り

瀬戸製品

常滑甕

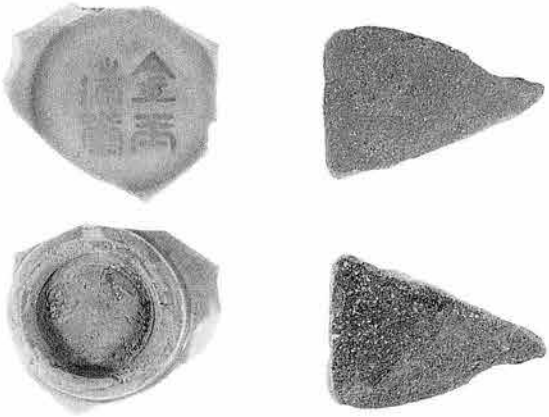
第二面上包含層出土遺物

図版11



第三面上包含層出土遺物

地鎮遺構出土遺物　かわらけ



青磁　　磨り常滑

II区攪乱壙出土遺物

6． 宇津宮辻子幕府跡（No.239）

小町二丁目354番12外地点

例　言

1. 本報は、鎌倉市小町二丁目354番12外に所在する住居併用共同住宅建築に先立つ発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、平成３年９月25日から平成３年10月31日にかけて実施した。
3. また、宇津宮辻子幕府跡発掘調査団(団長　田代郁夫)により、隣接した地点の発掘調査が実施されている。両調査は検出遺構などが不可分の関係にあるが、本報では国庫補助事業分の調査成果のみを記載する。調査団分の調査成果については近く刊行予定の調査団発行の報告書を参照されたい。
4. 現地調査体制は下記のとおりである。
   主任調査員　田代　郁夫
   調　査　員　武　淳一
   協力機関　　シルバー人材センター
5. 資料整理体制は下記のとおりである。
   担　当　者　田代　郁夫
   調　査　員　継　実
   協力補助員　山田健二・熊谷洋一・浜野洋一・佐々木靖・遠藤雅一・新山久美子
   協　力　者　原廣志・佐藤仁彦・小林重子・須佐直子・田代幸子・早野慈子・土屋浩美・丸井宏子
6. 本報の執筆は熊谷洋一・浜野洋一が行い、これを田代郁夫・継　実が編集した。尚、第１章については佐藤仁彦氏の協力を得た。
7. 本報に使用した写真は、遺構を武淳一が、遺物を山田健二・佐々木靖が撮影した。
8. 出土遺物は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　次

例言……104
目次……105

本文目次

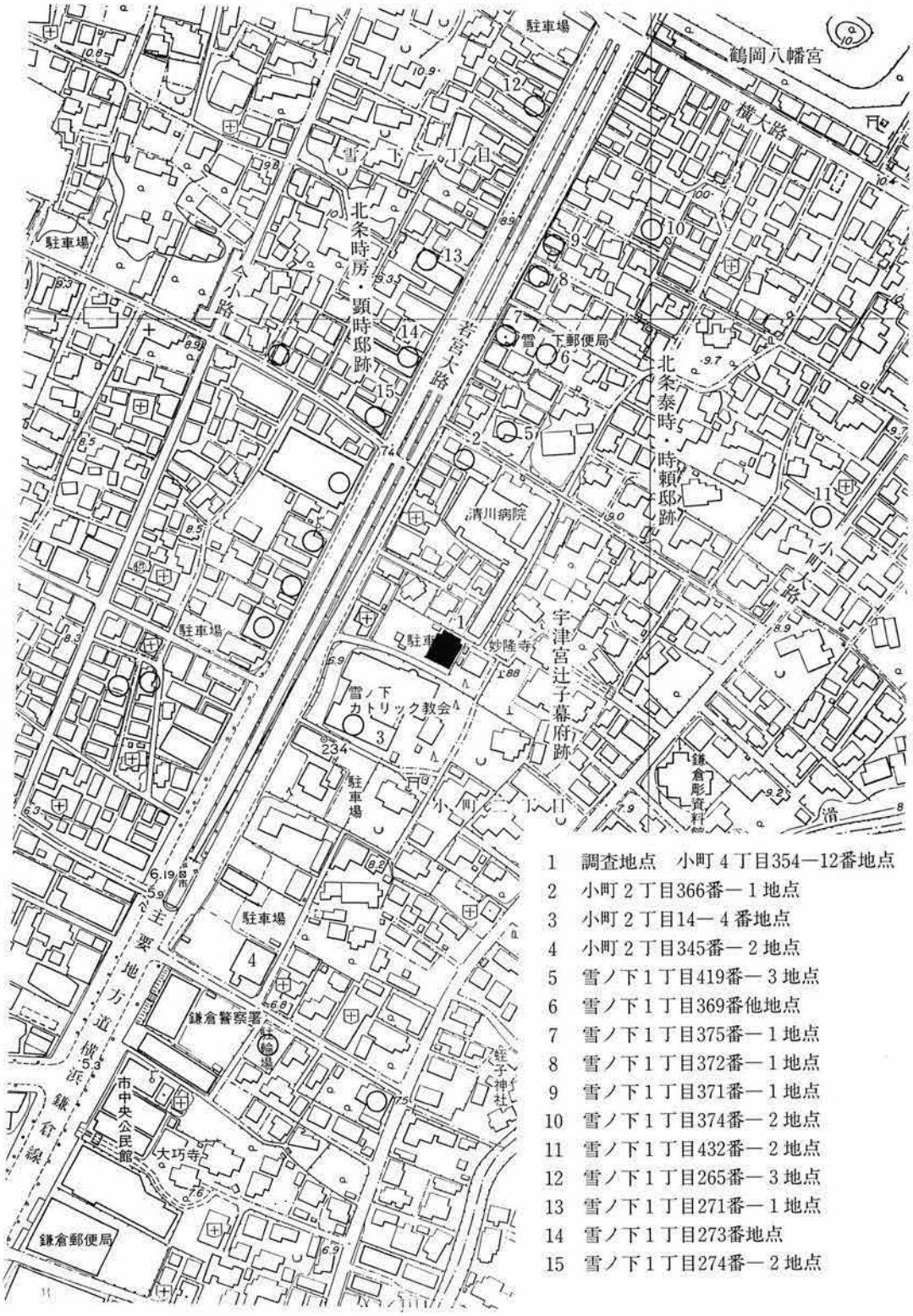
第一章　遺跡の位置と歴史的環境……107
第二章　調査経過と概要……108
第三章　検出した遺構と遺物……109
(1)遺構……109
a 堀立柱建物址……109
b 柱穴列……110
c 井戸……110
d 土壙……114
(2)遺物……115
第四章　まとめ……124

挿図目次

図 1　調査地点周辺図……106
図 2　調査区グリッド配置図……108
図 3　遺構全測図……109
図 4　建物 1 ……111
図 5　柱穴列……110
図 6　井戸 1 ……113
図 7　井戸 2 ……114
図 8　土壙……115
図 9　出土遺物(1)遺物包含層中……119
図10　出土遺物(2)遺物包含層中（中～下層）·120
図11　出土遺物(3)遺構内出土遺物（井戸 1 ）·121
図12　出土遺物(4)遺構内出土遺物……122
図13　出土遺物(5)遺構内出土遺物……123

図版目次

図版 1 ……125
図版 2 ……126
図版 3 ……127
図版 4 ……128
図版 5 ……129
図版 6 ……130



1　調査地点　小町４丁目354―12番地点
2　小町２丁目366番―１地点
3　小町２丁目14―４番地点
4　小町２丁目345番―２地点
5　雪ノ下１丁目419番―３地点
6　雪ノ下１丁目369番他地点
7　雪ノ下１丁目375番―１地点
8　雪ノ下１丁目372番―１地点
9　雪ノ下１丁目371番―１地点
10　雪ノ下１丁目374番―２地点
11　雪ノ下１丁目432番―２地点
12　雪ノ下１丁目265番―３地点
13　雪ノ下１丁目271番―１地点
14　雪ノ下１丁目273番地点
15　雪ノ下１丁目274番―２地点

図１　調査地点周辺図

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は、JR鎌倉駅北東360mに位置し、現在の若宮大路東辺にほぼ面する。遺跡地周辺は、遺跡名称からも分かるように、宇津宮辻子幕府の置かれた場所ではないかとされている。

『吾妻鏡』によれば、嘉禄元（1225）年10月に大倉から宇津宮辻子への幕府（御所）移転が北条泰時らによって発議・決定され、同年12月には将軍頼経の移徙が実現している。しかし、僅か11年後の嘉禎二（1236）年には、土公の祟りを忌避して「若宮大路幕府」への移転がなされるのである。

「宇津宮辻子幕府」及び「若宮大路幕府」に関しては、高柳光壽『鎌倉市史総説編』がこれまで通説的な位置を占めてきた。即ち、北条泰時邸（横大路を北辺、若宮大路を西辺とする）規模を南北百間ほどと推定し、それに南接する形で東西56丈５尺（約171m、『吾妻鏡』の記述256丈５尺＝約774mを誤謬とする）、南北61丈（約184m）の区画を「宇津宮辻子幕府」に比定するのである。そして、嘉禎二年の移転についても、北接する泰時邸の移・改築等の記録が見えないことから、同一郭内における移転であり、各々宇津宮辻子・若宮大路を主として呼称を変えたのではないかとしている。

これに対しては、伊藤正義･松尾剛次の両氏の近業が注目されている。伊藤氏は、御所の「破却」と再生の中に人々の心性・意識の世界の解読を試みられ、これが尼将軍政子の死を契機に泰時・時房によって発案・計画された鎌倉政権草創の故地大倉（＝源氏三代の霊魂・怨霊の空間）からの絶縁・決別であるとされた。松尾氏は、『市史』が「宇都宮辻子幕府」の規模であるとした『吾妻鏡』の数値が、移転直前の御所（伊賀朝行邸）と予定地の北西隅との位置関係を示すものであることを明らかにされた。また嘉禎二年の移転が土公の祟りを忌避するためのものである以上、同一郭内での移転はありえないとされ、将軍移徙委細の検討を通じて、「若宮大路幕府」は「宇津宮辻子幕府」の北西に位置していたと想定されている。同氏はまた、嘉禄元年の御所移転が鎌倉大番役の成立、平安京の土地制度（丈尺制）・行政制度（保制度）の導入、鎌倉の基本軸の移動（六浦道ライン→若宮大路ライン）という都市鎌倉の質的転換を伴った画期的なものであったことを論証された。

尚、伊藤・松尾両氏とも、宇津宮辻子の位置については大三輪龍彦氏の説に拠られている。

（佐藤仁彦・浜野洋一）

高柳光壽　『鎌倉市　総説編』吉川弘文館　1959年10月

伊藤正義　「鎌倉･大倉幕府から宇津宮辻子幕府へ－御所の破却と政権の再生－」＜　安田元久　『平成元年～三年度科学研究費補助金研究成果報告書「吾妻鏡」の総合的研究』1992年３月＞

松尾剛次　「武家の『首都』鎌倉の成立－将軍御所と鶴岡八幡宮とを中心に－」＜石井進編『都と鄙の中世史』吉川弘文館　1992年３月＞

同　「宇都宮辻子御所考－都市鎌倉論補考－」＜『山形大学史学論叙』第12号1992年２月＞

同　「中世都市・鎌倉」＜五味文彦編『都市の中世』吉川弘文館　1992年11月＞

大三輪龍彦　「中世都市鎌倉の地割制試論」＜『仏教芸術』164号　1985年＞

第二章　調査の経過と概要

本調査は、住居併用共同住宅建設に伴う緊急発掘調査として行われた。調査面積は約310㎡であり、自己用住宅分80㎡を対象に国庫補助事業調査として行い、残りの部分は宇津宮辻子幕府跡遺跡発掘調査団（団長　田代郁夫）が実施した。

平成２年５月７日～８日にかけて、試掘調査を実施し、現地表下85cmほどで中世遺構が良好に遺存していることが確認され、翌平成３年９月25日から本格調査が開始された。まず、現地表下50cmまで堆積する現代の盛土を重機により除去した。その下に堆積する中世の遺物包含層を人力によって40cm掘り下げ土丹による版築地業面（第１面）を検出した。この面に於て検出された遺構は井戸１基、浅い柱穴を僅かに検出したに留まり、全体的な広がりは摑めず黒褐色粘質土(所謂中世地山)上の第２面まで掘り下げた。その結果、堀立柱建物址１棟、柱穴列１組、土壙５基、井戸１基、柱穴多数が検出され、平成３年10月31日に全ての調査を終了した。

調査にあたっては、調査区外南側の任意の一点に基準点を設け、北へ向けて４m間隔で南北軸線を、西へ向けて同じく４m間隔で東西軸線を配し、それぞれに算用数字とアルファベットの名称を付した。グリッドの名称は東西軸、南北軸の各交点杭を使用した。南北軸線は若宮大路と平行なので正南北方向とは一致せず、N-34°-Eである。

（熊谷洋一）

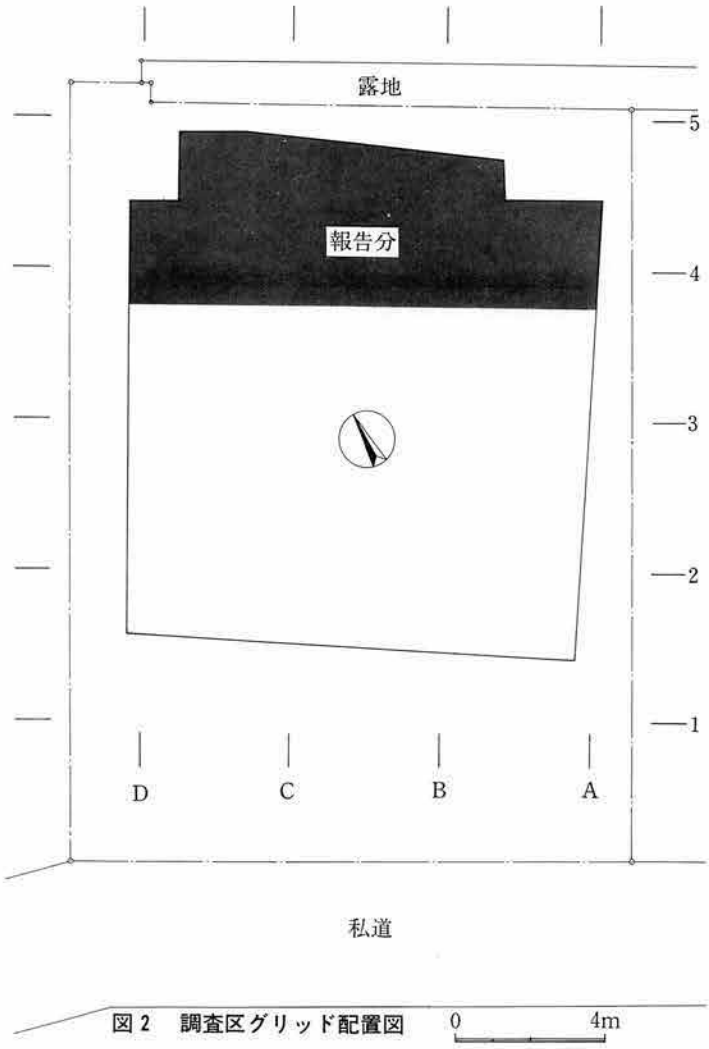


図２　調査区グリッド配置図

第三章　検出した遺構と遺物

（1）遺構

a.堀立柱建物址（建物１）（図－４、図版－２）

調査区北東域（A,C-4グリッド）付近で検出された。東西３間×南北３間の規模をもつ堀立柱建物址である。建物規模は調査範囲内では東西580㎝、南北630㎝の長方形を呈し、調査範囲外に延びる

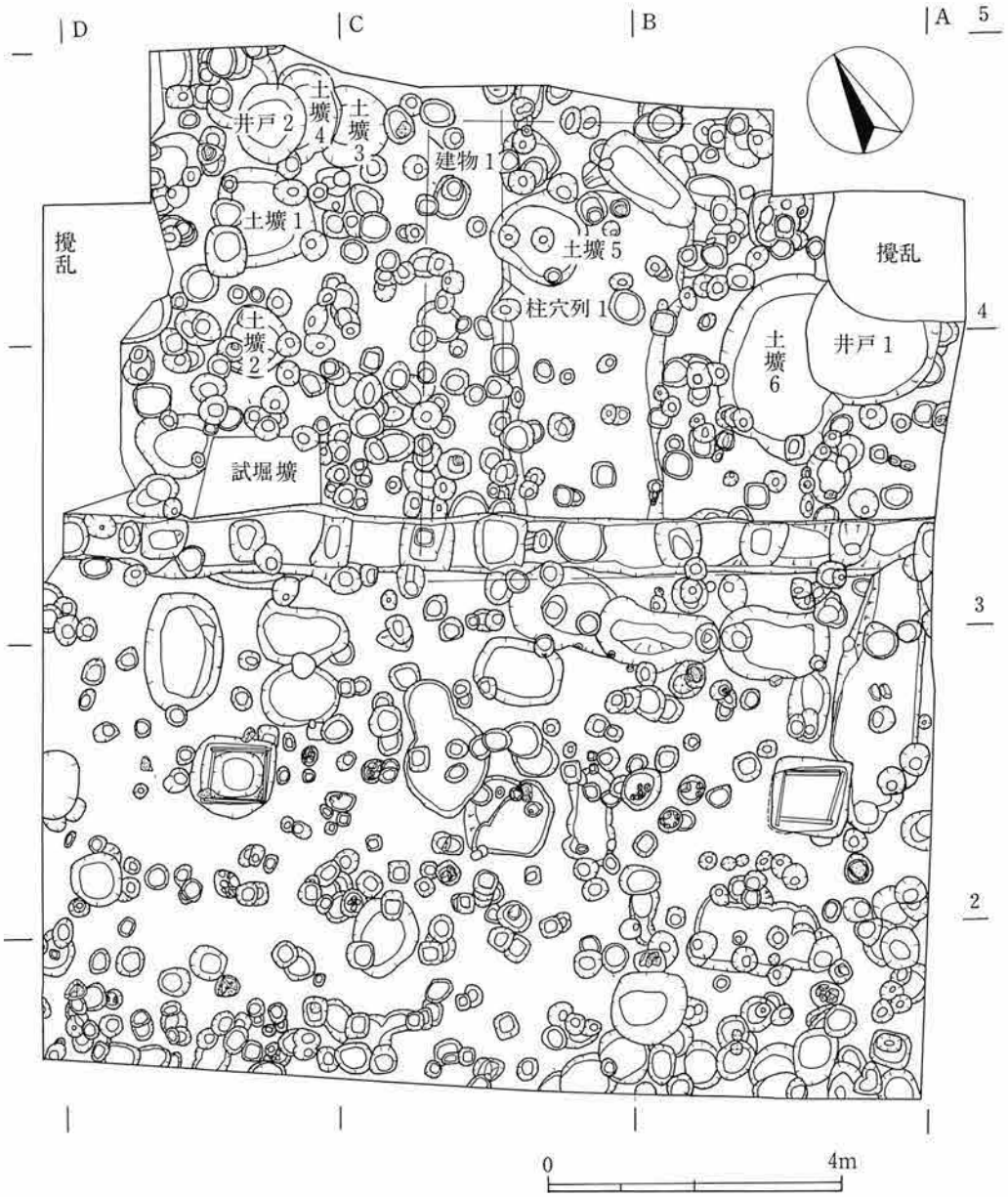


図３　遺構全測図

可能性もある。柱穴は東西方向で西からそれぞれ200cm、180cm、南北方向で各210cmを測る。柱穴は一辺が26cm～36cmで平面形は隅丸方形を呈する。確認面からの深さは35～55cm、底面標高は6.88～7.03mを測る。

今回報告する部分ではないが、原因者負担分の範囲では、布堀り状の遺構が検出されており、これと建物１とは重複関係を持つ。時期的には建物１の方が新しい。建物１は更に後述する土壙５とも重複関係を持ち、こちらの新旧関係は堆積土の観察、検出遺物の比較からは判定し得なかった。主軸方位はN-37°-Eで若宮大路とほぼ直交する。

b.柱穴列（図－５、図版－２）

調査区中央域（B-4,5グリッド）付近で検出された。柱穴は調査範囲内で検出した限りでは、６口であるが、調査範囲外に延びる可能性がある。各柱穴は平面形が楕円形、隅丸方形を呈し、規模は長軸（東西方向）35～40cm、短軸（南北方向）30cmを測る。柱穴列は深い柱穴と浅い柱穴が交互に並ぶ。確認面からの深さは深い柱穴で25cmを測る。底面標高は深い柱穴で6.72m、浅い柱穴で7.12mを測る。柱穴の間隔は100～105cmを測る。主軸方位はN-33°-Eで若宮大路に対してほぼ並行する柱穴列である。

c.井戸１（図－６、図版－１）

調査区北東域（A-4グリッド）付近で検出された。土壙６を切っており、また、北側では近代井戸により攪乱を受ける。検出した遺構の大半は黒褐色粘質土（所謂中世地山）面上で検出されているが、本址および土壙６のみ中世地山面より約15cm上層で確認された土丹による版築地業面上で検出されている。

掘り方は隅丸方形を呈し、一辺が165cm、深さが床板までが204cm、底部までが209cmを測る。井側は確認面から99cm下げたところで検出された。井側は掘り方の中心よりやや西寄りに設けられている。平面形は方形を呈し一辺が91cm、深さは底板までが109cmを測る。井側は（側板、横桟、支柱からなる）方形横桟支柱形である。

支柱はすべて、4.5×4.5cmの断面方形の角材を使用し、横桟と横桟の間に嵌込まれていた。横桟は２段分検出された。上段が４×４cmの断面方形の角材を使用

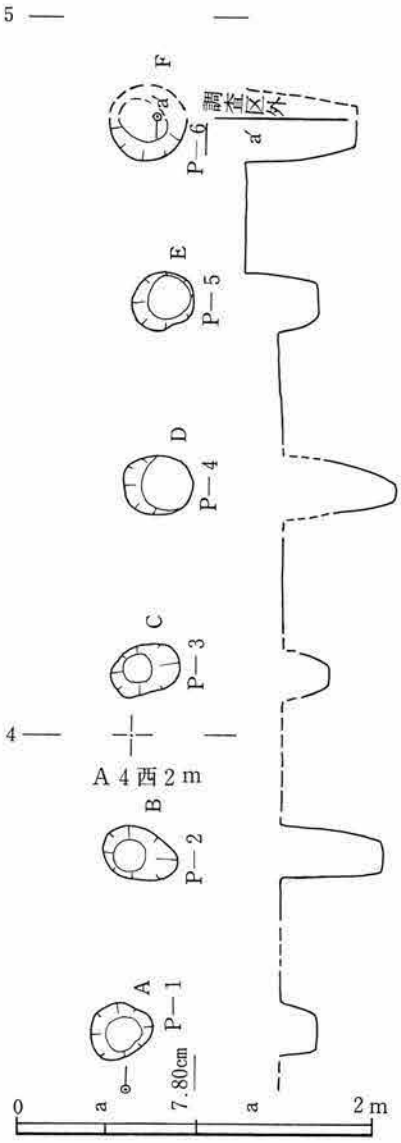


図５　柱穴列

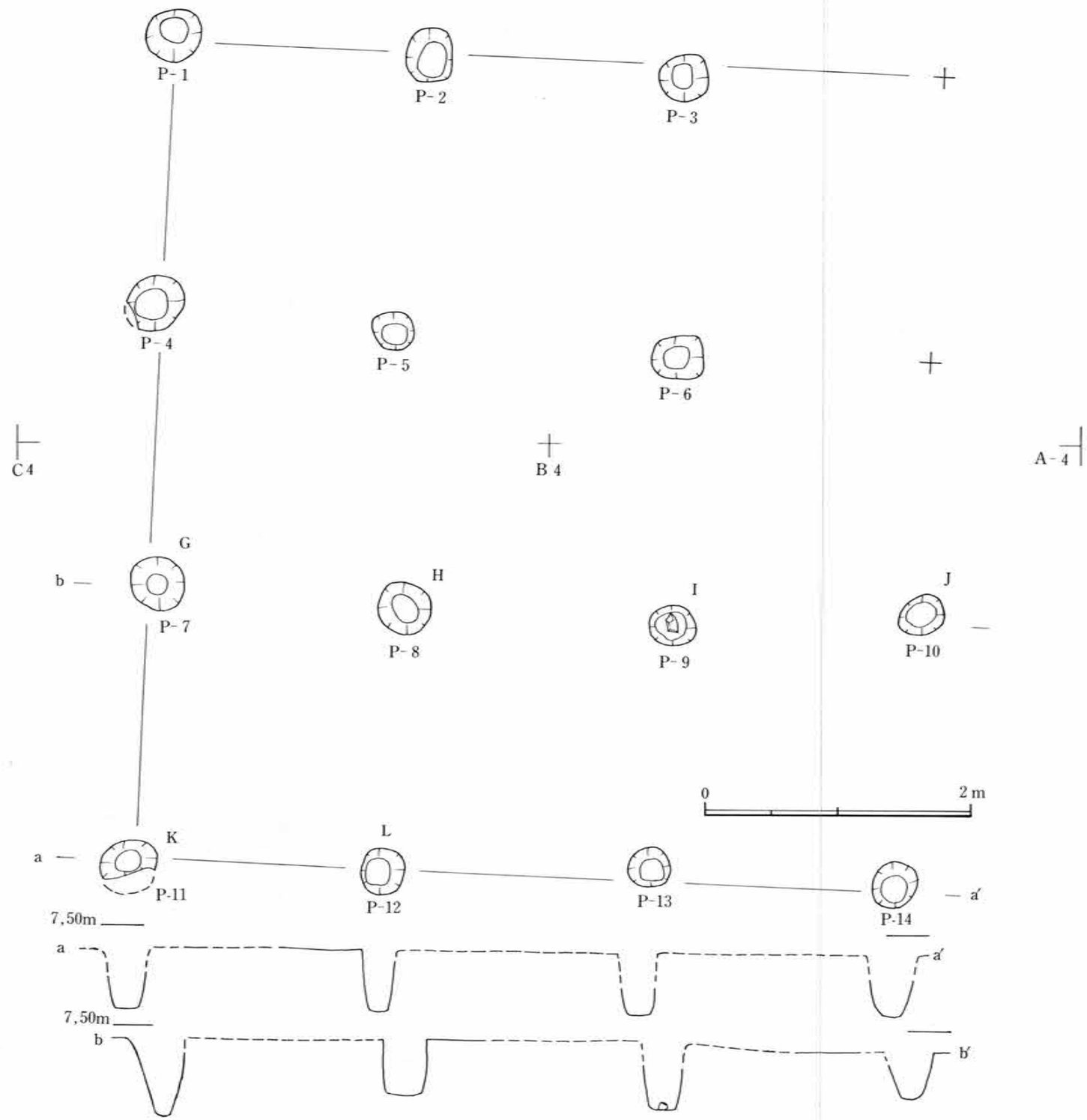

P-1
P-2
P-3
P-4
P-5
P-6
C4
B4
A-4
G
b
P-7
H
P-8
I
P-9
J
P-10
0
2m
K
a
P-11
L
P-12
P-13
P-14
a′
7,50m
a
a′
7,50m
b
b′

図4　建物

し、下段は縦幅７㎝×横幅４㎝の断面長方形の角材を使用している。２段の横桟は、西面で、東面の材を凸に、北面の材を凹に加工して組み合わせる。又、下段の横桟は底板の上に置かれた状態で検出された。横桟の間隔は、内寸で43㎝である。

側板は厚さ0.5～１㎝、幅13～15㎝の板材を使用して二重に立て並べている。各壁とも側板を６枚立て並べてその隙間を埋めるように外側に更に６枚の板材を立て並べている。又、横桟が底板の上に置かれていたのに対して、側板は底面に差し込まれていた状態で検出された。

床板は北面の井側に並行して７枚敷かれていた。床板は長さ88～91.3㎝、幅10.1～12㎝、厚さ0.5～１㎝の板材を使用している。この床板を敷いた形態の井戸は鎌倉市内では初めての検出例である。

覆土は最上層が暗褐色土層で、この層は井戸廃絶後に堆積した土と思われる。井側内の覆土は上層は暗褐色土層で、炭化物を若干含むものである。中層は暗褐色土層裏込め上層と近似しているがしまりに欠ける。下層は暗黄灰色土層でしまりはないが粘性に富む。裏込め上層は暗褐色土層で、凝灰砂地山土ブロックを含み、しまり、粘性共にあり。下層は暗灰褐色土層で地山砂を多く含むが還元している。

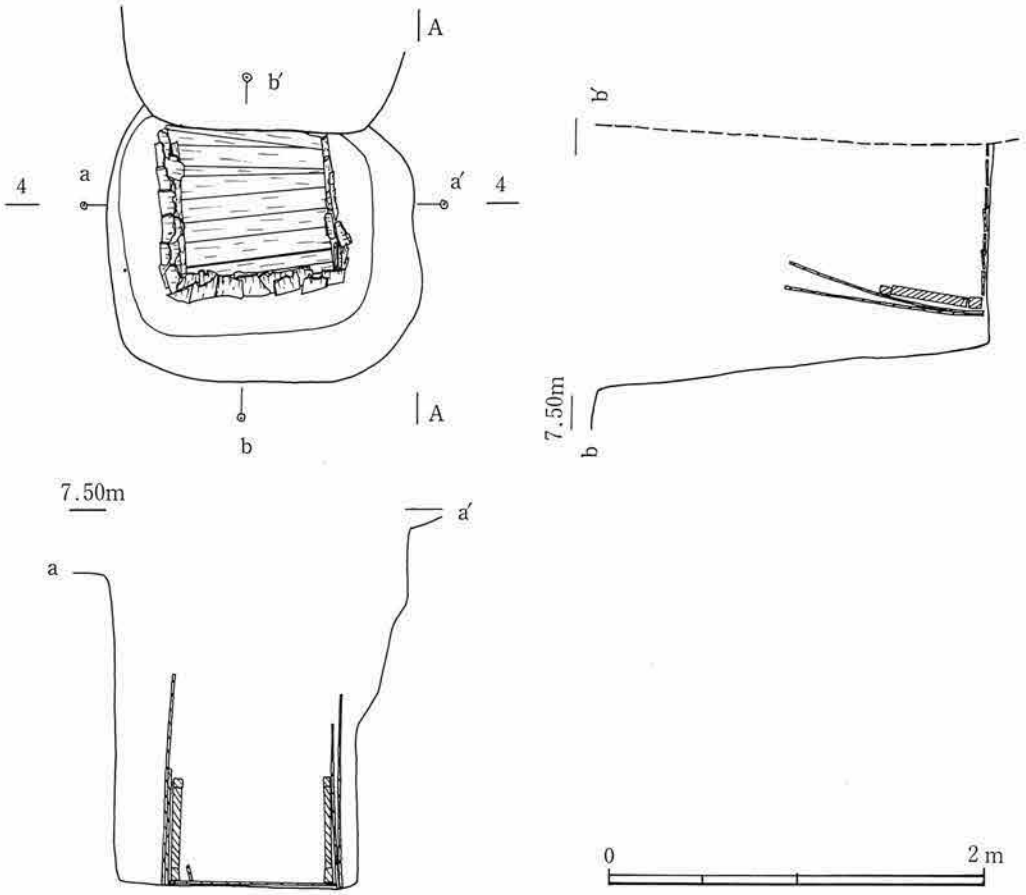


図６　井戸１

・井戸２（図－７、図版－２）

調査区北西域（C-4,5グリッド）付近で検出された。土壙４を切っており、又、南東壁際に於て柱穴に切られている。掘り方は平面楕円形を呈する。上端は南北方向（長軸）106cm、東西方向（短軸）95cm、底面は東西方向（長軸）68cm、南北方向（短軸）60cmを測る。確認面から深さは120cmを測る。底面標高は5.92mである。本址は井側を持たない素堀りの井戸である。

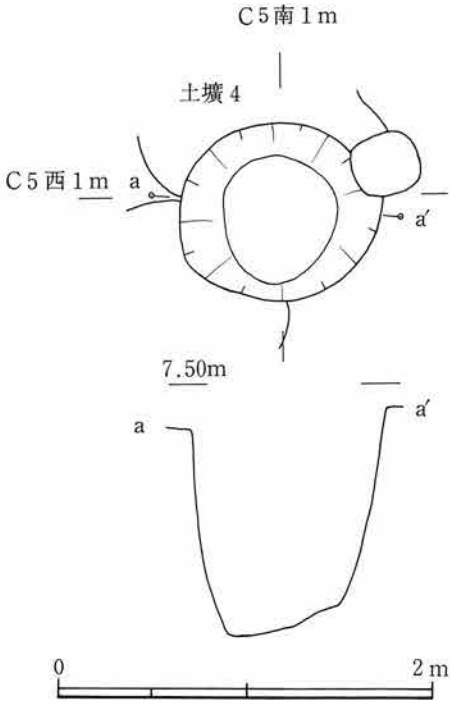


図７　井戸２

d.土壙

・土壙１（図－８）

調査区北西域（C-4グリッド）付近で検出された。北壁、東壁でそれぞれ２基の柱穴に切られている。規模は、南北方向（長軸）136cm、東西方向（短軸）125cmの平面隅丸方形を呈する。確認面からの深さは26cmを測る。底部は平坦で逆台形の断面を呈する。底面標高は7.06mである。

・土壙２（図－８、図版－２）

調査区西側（C,D-4グリッド）付近で検出された。西壁、東壁で各１基の柱穴に切られている。規模は東西方向（長軸）99cm、南北方向（短軸）87cmの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは25cmを測る。底面標高は7.17mである。

・土壙３、４（図－８、図版－２）

調査区北西域（C-4グリッド）付近で検出された。２基が重複した格好になっており土壙４は土壙３に切られる。土壙４は井戸２を切る。土壙３、４は共に本来平面楕円形を呈していたものと思われる。

土壙３は南北方向（長軸）107cm、東西方向（短軸）64cm以上を測る。確認面からの深さは39cmを測る。底部は平坦で断面逆台形を呈する。底面標高は7.01mである。

土壙４は南北方向（長軸）118cm、東西方向（短軸）55cm以上を測る。確認面からの深さは56cm、底面標高は6.53mである。

・土壙５（図－８、図版－２）

調査区北側（B-4グリッド）付近で検出された。西側で柱穴列のP－４を切っており、南側で建物１のP－10と切り合っているが、切り合い関係は不明である。

規模は南北方向（長軸）128cm、東西方向（短軸）115cmを測る平面隅丸方形を呈する。確認面からの深さは36cm。底部は平坦で断面逆台形を呈する。底面標高は7.12mである。

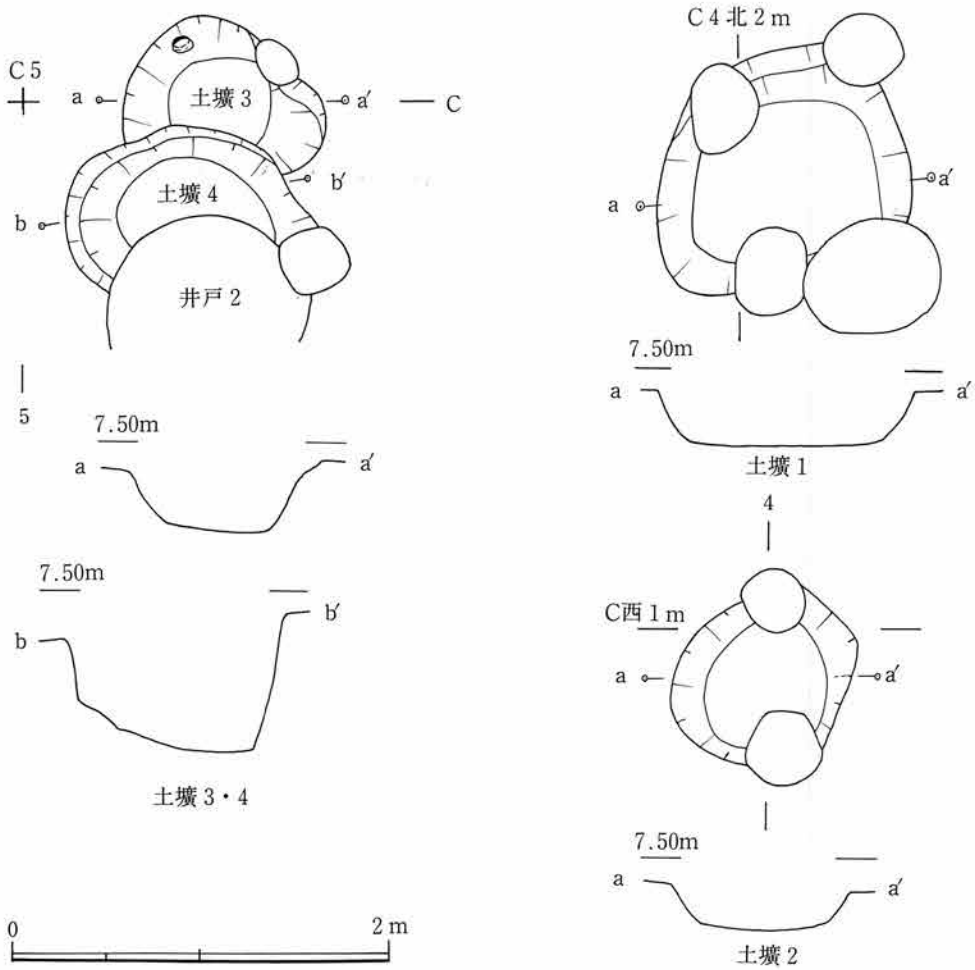


図8　土壙

・土壙6（図－8、図版－2）

調査区北東域（A-4グリッド）付近で検出された。井戸1に切られており、又、南壁、西壁で3基の柱穴と切り合う。

規模は南北方向（長軸）211cm、東西方向（短軸）120cm以上を測る平面楕円形を呈していたものと思われる。確認面からの深さは、北側41cm、南側49cmを測る。底面は北から南へと緩やかに下っている。底面標高は7.00～7.10mである。

（熊谷洋一）

（2）遺物（図－9～13、図版－3～6）

1～32はかわらけ、33は白かわらけで、包含層上層出土。（尚、紙数の関係で、かわらけについては、以下法量のみを掲載し、胎土、焼成等についての説明は省いた。）34は渥美壷の口縁部片。復元口径12.3cm。色調は黒灰色、頸部内面に自然釉が付着。胎土は黒灰色、砂目。長石、石英微粒を含

む。包含層上層出土。35は常滑の無頸壷。復元口径14.0cm。色調は内外面共に暗褐色、外面に自然釉が付着。胎土は灰褐色で長石、石英を多量に含む。
包含層上層出土。36、37は常滑の甕口縁部片。36は口縁端部が上方にのめ引き出される。色調は灰色。37は口縁部N字状を呈す。色調は灰褐色。頸部には自然釉が付着する。いずれも胎土は緻密で長石、石英を少量含む。共に包含層上層出土。38、39は常滑の鉢口縁部片。38は内面下方が摩滅する。所謂捏ね鉢で、口縁端部は内外方向に引き出される。色調は褐色。胎土は長石、石英微粒を多く含む。39は色調外面褐色、内面白灰色を呈す。胎土は白灰色で、密。長石微粒を極少量含む。いずれも包含層上層出土。40は常滑の鳶口胴部片。色調は灰黒色、内底面には自然釉が付着。胎土は灰色で長石、石英微粒を含む。包含層上層出土。41は渥美の甕口縁部片。内外面に薄く灰釉が刷毛塗りされる。胎土は灰褐色、砂目。包含層上層出土。42は瀬戸折り縁鉢の口縁部片。釉は淡緑色で、やや厚い。胎土は灰白色、緻密である。包含層上層出土。43は青白磁の合子。復元口径5.2cm。底径4.7cm。器高2.2cm。釉は淡青白色、口縁部内外及び胴部下位から外底面にかけ露胎。胎土は白色、緻密である。包含層上層出土。44は明染付の鉢口縁部片。釉は淡青白色で、口縁端部、口縁内側は露胎。文様は、薄い群青色を呈す。素地は乳白色、密である。包含層上層出土。45、46は劃花文系青磁碗。釉はいずれも淡灰緑色、やや失透。素地は白灰色で粘り強い。46は高台径6.0cm。高台内中程まで釉が及ぶ。47は高台径5.8cm。畳付けから高台内は露胎。いずれも包含層上層出土。47は黄釉鉄絵の盤。復元口径30.0cm。口縁は玉縁である。釉は黄灰色で、内外面に斑点状に鉄釉が飛ぶ。外面下半は露胎で褐色を呈す。内面に緑褐色の鉄絵が見られる。胎土は白灰色。長石粒を多く含む。包含層上層出土。

48～90は包含層中下層出土のかわらけである。

91～115は井戸１覆土中出土のかわらけ。116～119は土製円盤。116を除き、全てかわらけ底部片（糸きり）を再利用している。116は直径2.5cm。厚さ1.0cmでボタン状を呈す。全面を、良く研磨している。井戸１上層出土。117は直径5.7cm。厚さ1.3cm。外周を、粗く研磨している。井戸１上層出土。118は直径6.4cm。厚さ1.3cm。外周を粗く研磨しているが、円く整えられていない。拓本で図示したが、外底面糸切りを繰り返した痕跡が認められる。また内面のナデ調整は中心の極小範囲にのみ施される。井戸１中層出土。119は直径10.2cm。厚さ1.0cm。外周に丁寧な研磨を施すが、表裏面の研磨は粗い。井戸１中層出土。

120は劃花文系青磁碗の口縁部片。釉は淡灰緑色で、気泡がやや多く失透。素地は灰色を呈し、粘り強い。井戸１中層出土。121は櫛掻文系青磁皿の底部片。復元底径は5.4cm。釉は灰緑色、白濁気味に失透。外底部は露胎。素地は黄灰色で、粘性は弱く亀裂が横走する。井戸１覆土中出土。122は櫛掻文系青磁碗の口縁部片。釉は透明な淡灰緑色で薄く、微細な気泡を含む。素地は黄灰色を呈し、粘り強い。井戸１底板上出土。123、124は渥美甕口縁部片。いずれも口縁端部は水平に引き出される。123は色調褐色、口縁内面に自然釉が付着。胎土は黄灰色、砂目。124は器表面に黒釉が刷毛塗りされる。頸部外面は露胎。胎土は灰色、砂目。123は井戸１中層出土。124は井戸１上層出土。

No.		口径(cm)	底径cm)	器高(cm)		No.		口径(cm)	底径cm)	器高(cm)	
図9	1	7.5	4.6	2.1			84	(13.4)	(8.6)	3.0	
	2	7.1	4.4	2.1			85	(13.2)	(7.5)	2.9	
	3	7.8	4.9	1.8			86	13.9	9.9	3.2	
	4	8.0	6.9	1.7			87	8.8	—	1.9	
	5	8.0	4.3	1.8			88	10.0	—	2.1	
	6	(8.8)	(6.0)	2.1			89	8.6	—	2.2	
	7	8.4	6.3	2.1			90	(13.0)	—	3.0	
	8	(8.4)	(6.0)	1.7		図11	91	(7.8)	(6.3)	1.6	
	9	8.1	4.9	1.8			92	(8.2)	(7.0)	1.6	
	10	(9.0)	(6.3)	2.2			93	(9.6)	(8.1)	1.4	
	11	9.0	5.5	1.8			94	(9.8)	(7.8)	1.7	
	12	(8.5)	(6.5)	1.9			95	(9.6)	(6.9)	1.6	
	13	(8.2)	(6.2)	1.5			96	(9.6)	(7.9)	1.7	
	14	(8.6)	(6.7)	1.9			97	(9.6)	(7.6)	1.8	
	15	(7.9)	(6.8)	1.8			98	(12.8)	(8.8)	3.3	
	16	9.4	7.7	2.0			99	(12.4)	(9.8)	3.1	
	17	(9.0)	(6.9)	1.9			100	(12.8)	(8.0)	2.9	
	18	9.2	7.1	1.3			101	(13.1)	(9.8)	3.2	
	19	8.6	7.0	1.9			102	(13.2)	(9.0)	3.0	
	20	9.2	6.7	1.5			103	(9.2)	—	1.9	手づくね
	21	11.9	6.8	2.9			104	(9.0)	—	1.9	〃
	22	12.3	7.8	3.2			105	(10.4)	—	1.8	〃
	23	11.3	7.4	3.3			106	(8.8)	—	2.0	〃
	24	(12.4)	7.9	3.5			107	(9.3)	—	1.9	〃
	25	(13.2)	(8.7)	3.6			108	(9.5)	—	1.9	〃
	26	(12.9)	(9.0)	3.5			109	(8.2)	—	1.6	〃
	27	13.3	8.8	3.5			110	(9.3)	—	1.7	〃
	28	(12.8)	(8.1)	3.2			111	(9.0)	—	1.7	〃
	29	(13.4)	(9.9)	3.2			112	(10.2)	—	1.6	〃
	30	(9.2)	—	2.0	手づくね		113	(14.4)	—	—	〃
	31	(13.2)	—	3.6	〃		114	(14.0)	—	—	〃
	32	6.6	—	1.2	〃		115	(14.2)	—	—	〃
図10	48	7.6	4.4	2.8		図12	140	(8.6)	(7.0)	1.6	
	49	7.5	4.6	2.1			141	9.8	7.6	1.9	
	50	(8.4)	(5.4)	2.2			142	(12.5)	(8.4)	3.0	
	51	7.2	4.4	1.9			143	14.0	9.2	3.4	
	52	(8.0)	(5.4)	2.3			144	13.5	8.5	3.6	
	53	7.0	3.7	2.3			145	14.4	9.3	3.1	
	54	7.2	5.0	2.0			146	14.6	9.6	3.2	
	55	(7.8)	(5.4)	2.2			147	14.7	9.9	3.0	
	56	(8.5)	(6.8)	1.6			148	(8.3)	—	1.7	手づくね
	57	(8.4)	(7.1)	1.5			149	9.9	—	2.2	〃
	58	(8.0)	(4.8)	2.1			150	10.1	—	2.1	〃
	59	(9.0)	(5.3)	2.2			151	(12.5)	—	3.4	〃
	60	7.7	4.1	2.0			152	14.0	—	—	〃
	61	(10.2)	(6.3)	2.3			153	14.0	—	3.3	〃
	62	7.7	4.8	1.8			154	14.4	—	4.7	〃
	63	13.9	9.9	3.2			155	14.4	—	3.4	〃
	64	(6.9)	(4.2)	1.3			156	14.0	—	3.5	〃
	65	7.2	4.4	1.9		図13	177	9.6	—	2.1	
	66	(8.8)	(6.1)	1.8			178	(12.3)	(7.7)	2.8	
	67	(8.5)	(6.8)	1.6			180	(9.0)	(7.0)	1.7	
	68	(8.8)	(6.1)	1.6			181	(8.6)	(6.8)	1.5	
	69	(8.4)	(7.1)	1.5			182	8.1	—	1.7	手づくね
	70	(8.2)	(5.6)	1.3			183	(9.6)	—	2.0	〃
	71	(11.0)	(6.4)	3.3			184	12.7	—	3.4	〃
	72	(12.6)	(6.3)	3.5			185	13.4	—	3.0	〃
	73	13.0	7.8	3.6			186	(9.2)	(7.0)	1.8	
	74	(13.1)	(8.2)	3.4			187	(9.8)	(7.7)	1.9	
	75	13.6	7.9	3.9			198	(9.2)	7.7	1.5	
	76	13.6	8.3	3.9			189	8.4	6.8	1.7	
	77	13.0	7.0	4.0			190	13.0	—	—	手づくね
	78	(13.2)	(6.9)	3.5			191	14.2	—	3.8	〃
	79	11.9	6.7	3.3			192	13.6	—	3.0	〃
	80	(12.5)	(7.4)	3.3							
	81	13.5	7.3	3.4							
	82	(14.6)	(8.8)	3.8							
	83	(13.4)	(7.0)	3.5							

かわらけ計測表　　※(　)は復元値を表す

125、126は漆器皿。125は復元口径9.6cm。底径6.9cm。器高1.6cmである。無文。体部下方に強い屈曲を持ち、口縁は直線的に外反する。底部は平高台である。126は底部片。平高台をなす。内底面には、朱漆で秋草文が施文される。いずれも井戸1中層出土。127は棒状木製品。用途不明。全長9.7cm。直径1.5cm。板目材使用。下方端部をくさび状に作り出し、上端は細かく切り整えている。井戸1覆土出土。128は用途不明木製品。薄い板目材を円く切り出したものである。最大長7.9cm。厚さ0.9cm。形状は、本来円形を呈していたのであろうか。中央部分に長方形の切り抜きを施している。井戸1中層出土。129はヘラ状木製品。柾目材使用。残存長9.0cm。幅2.3cm。厚さ0.2cm。先端部は薄く、鋭利に加工されている。井戸1覆土中出土。130は小型草履芯。残存長15.6cm。側面の切り込みが、辛うじて確認される。井戸1覆土中出土。131はヘラ状木製品。全長23.7cm。幅1.7cm。厚さ0.5cm。用材は薄い柾目材。面取加工はされておらず、木口未調整。胴部から先端部にかけて、厚みは一定である。井戸1覆土中出土。132～139は井戸1覆土中出土の箸状木製品(計測表を参照)。140～156は井戸2覆土中出土のかわらけ。157は劃花文系青磁碗。復元口径14.0cm。釉は透明で淡緑灰色を呈し、気泡を含む。素地は灰色、緻密で粘り強い。井戸2下層出土。158～172は井戸2覆土出土の箸状木製品。

173は山茶碗窯系捏ね鉢。色調は暗紫灰色、胎土は灰色を呈しザックリしている。内面下方は使用の為、摩滅。外面下方は回転ヘラ削りを施す。建物1・P-12出土。175、176は建物1・P-1出土のかわらけ。174は柱穴列P-1出土のかわらけ。

177は土壙2出土のかわらけ。178は土壙3出土のかわらけ。179は渥美の鉢口縁部片。口縁端部は、外側へ僅かに引き出される。色調は暗灰色。破片からは自然釉の付着は見られない。胎土は暗灰色、砂目でやや粗。土壙3出土。180～185は土壙5出土のかわらけ。186～192は土壙6出土のかわらけ。193は櫛掻文系青磁碗の体部片。復元口径15.1cm。釉は淡灰緑色で薄く、微気泡を含む。素地は灰色、緻密で粘り強い。土壙6下層出土。194は同安窯系青磁碗。復元口径5.2cm。外面に4本単位の縦方向削りが放射状に施される。釉は透明な淡緑灰色。微細な気泡を含む。体部外面下位は露胎。素地は明灰色、気孔を多く含み粘り強い。土壙6下層出土。195は劃花文系青磁碗の口縁部片。釉は淡灰緑色で、気泡を多く含み失透。素地は灰色、緻密で粘り強い。土壙6上層出土。196、197は特殊かわらけ。(ここで言う［特殊］とは一般のかわらけと比較しての場合であり、この製品自体の特殊性によるものではない。こういった製品自体、他遺跡でも出土しているが、一応、一般的なかわらけと分けて述べるのが妥当であろう。)体部はいずれも内湾しながら口縁部にいたる。口縁端部はやや内側に入り込み、稜を持たない。胎土は密で砂を含み、調整は内外共に不整な指頭ナデを施す。196は復元口径11.0cm。色調は淡黄灰色。197は復元口径8.0cm。色調は灰褐色。196は土壙6下層出土。197は土壙6中層出土。198は渥美の甕口縁部片。口縁端部上面に、一条の沈線が巡る。色調は黒灰色、口縁端部上面に自然釉が付着。胎土は砂目で長石、石英微粒子を少量含む。土壙6中層出土。199は砥石。残存長3.3cm。幅3.2cm。厚さ1.0cm。黄灰色を呈す泥岩製で、仕上げ砥と思われる。表裏面共に良く使用され、平滑。側面には、擦り切り跡が残る。土壙6上層出土。

(浜野　洋一)

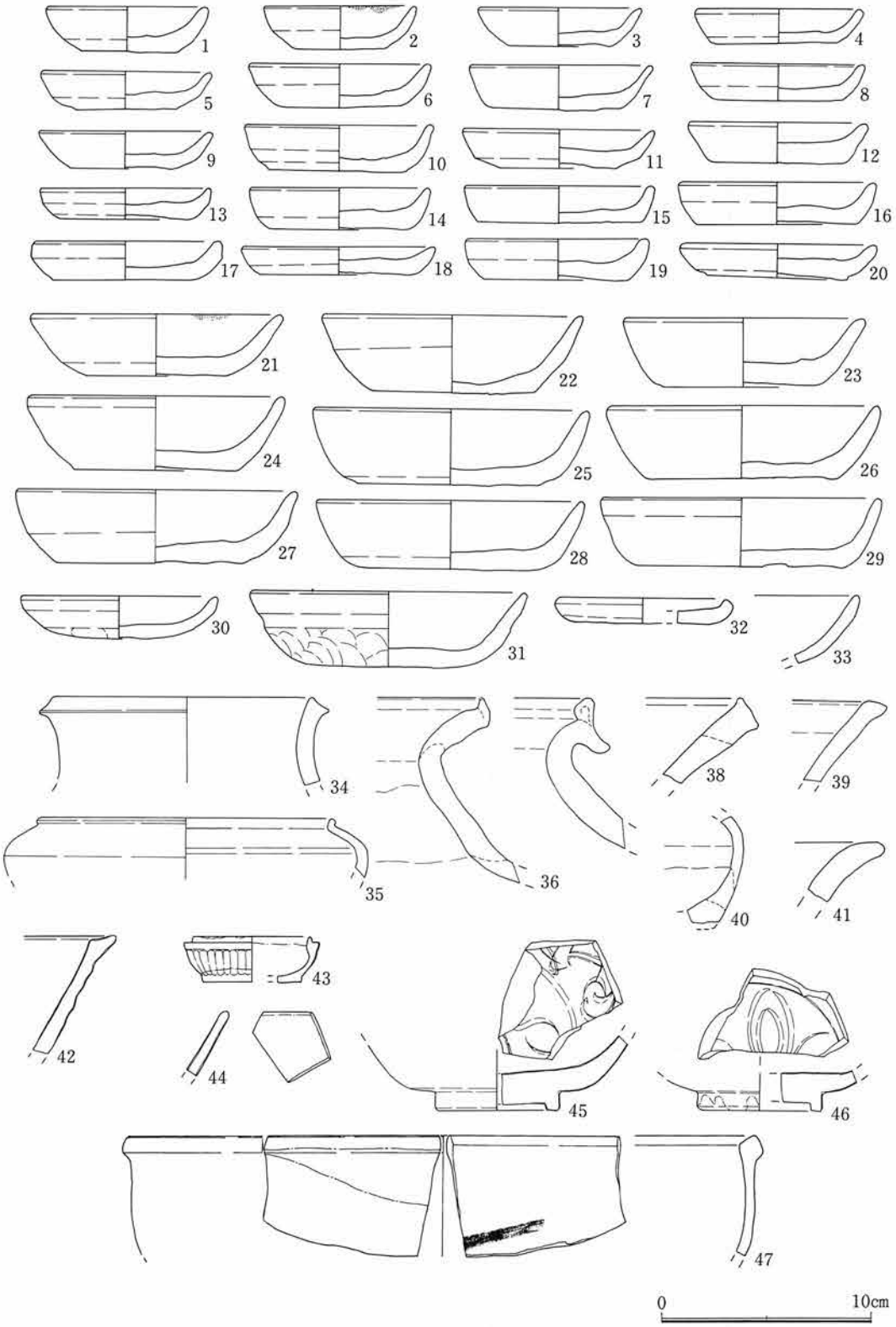


図 9　出土遺物(1)遺物包含層中

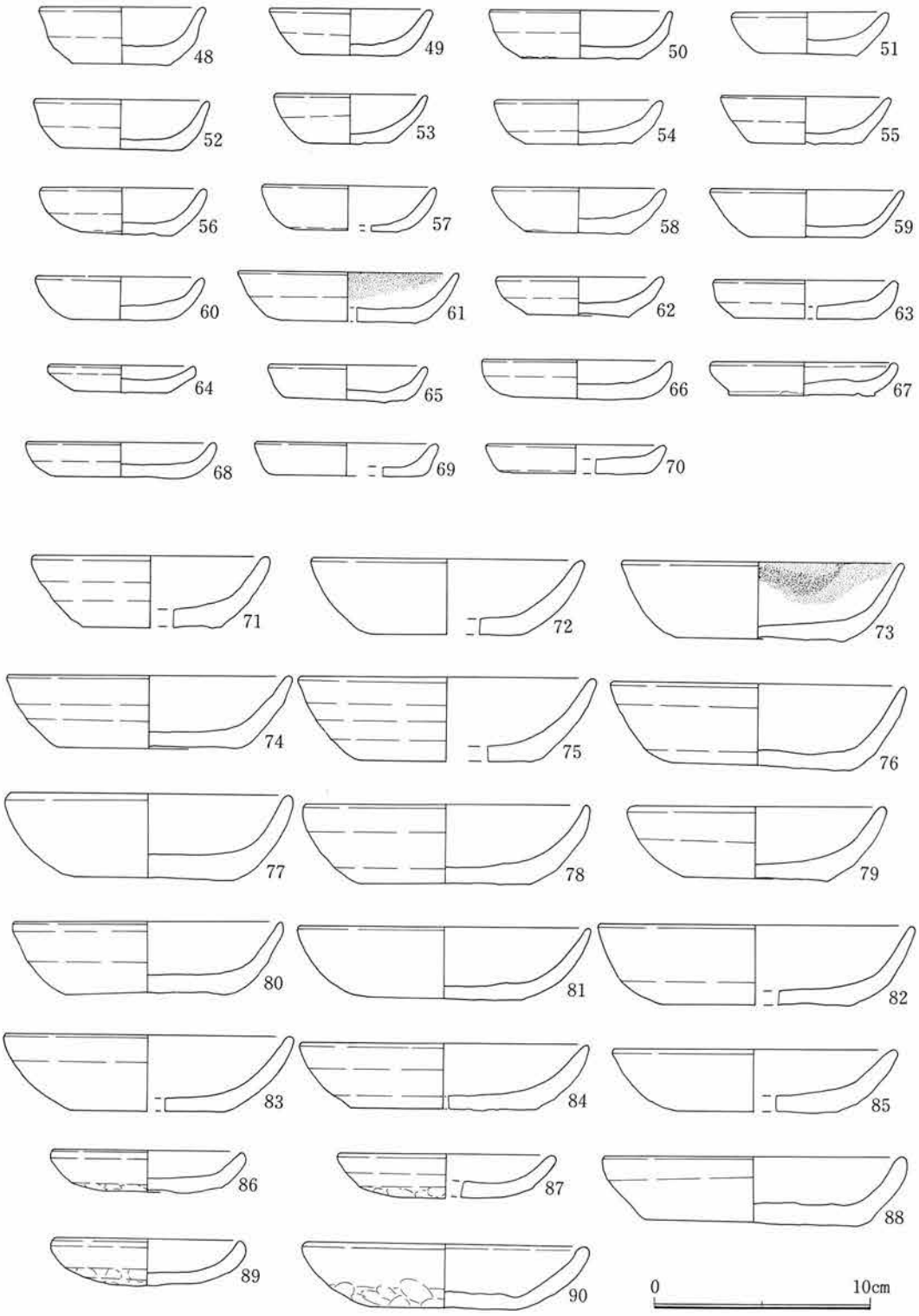


図10　出土遺物(2)遺物包含層中(中～下層)

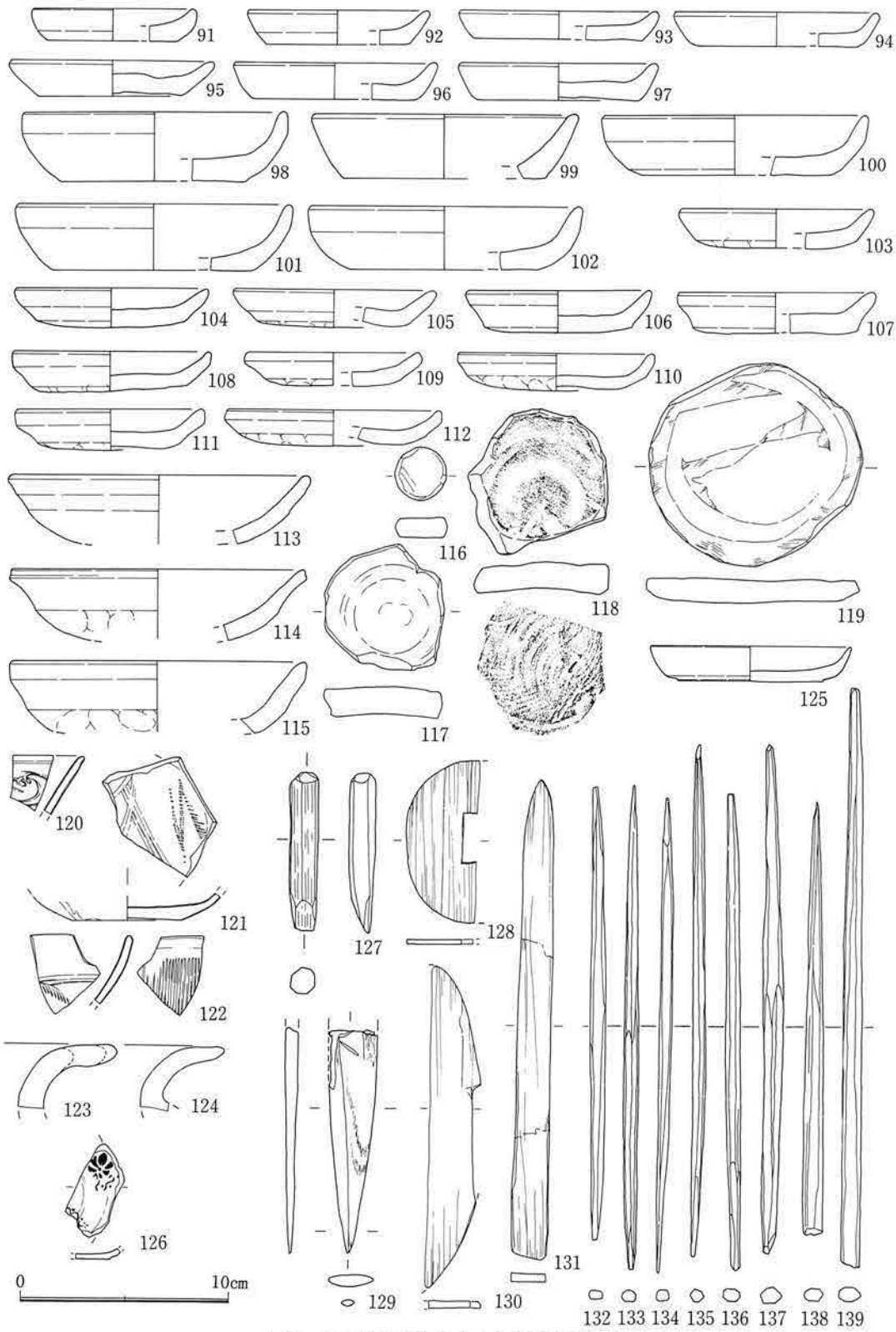


図11　出土遺物(3)遺構内出土遺物(井戸１)

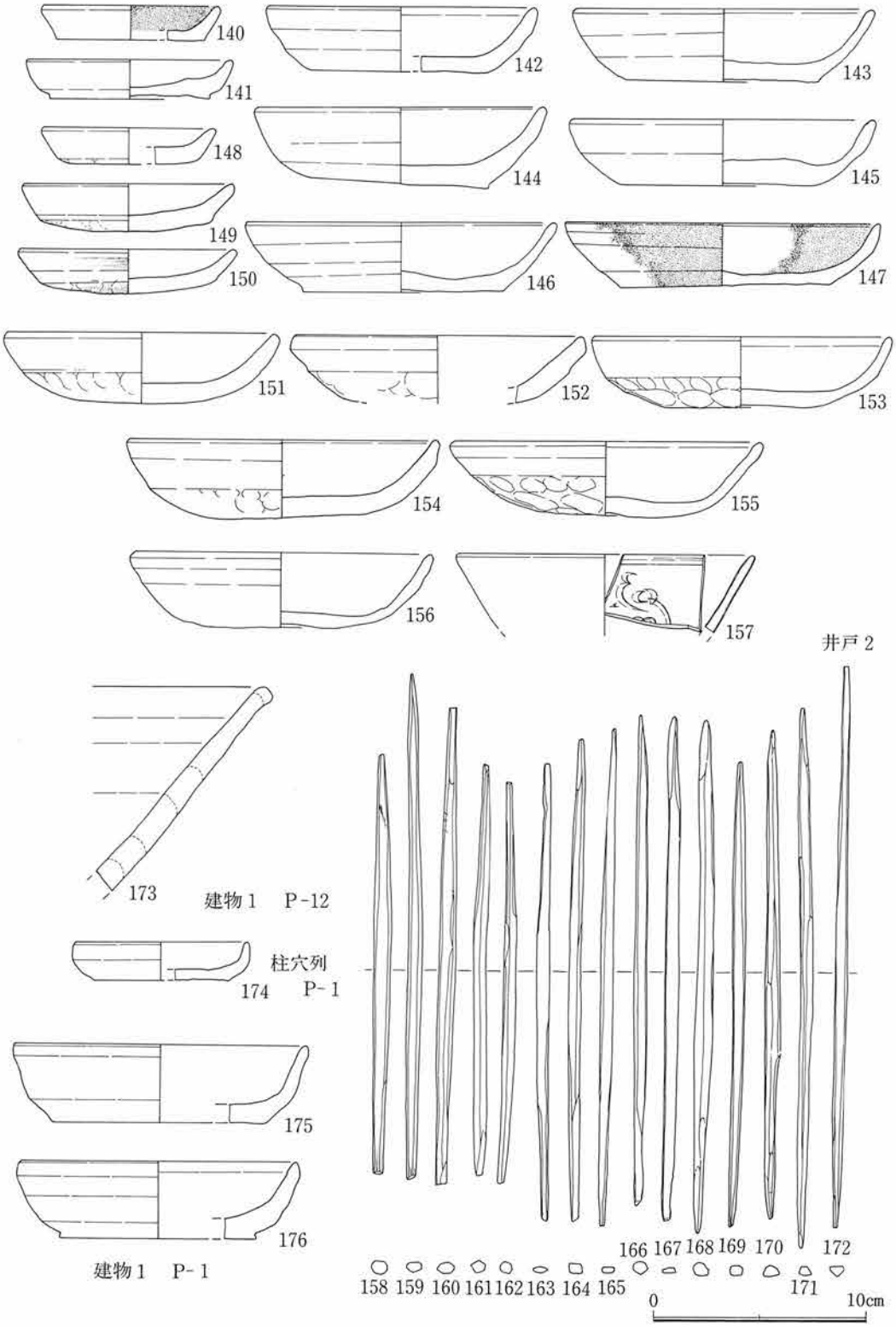


図12　出土遺物(4)遺構内出土遺物

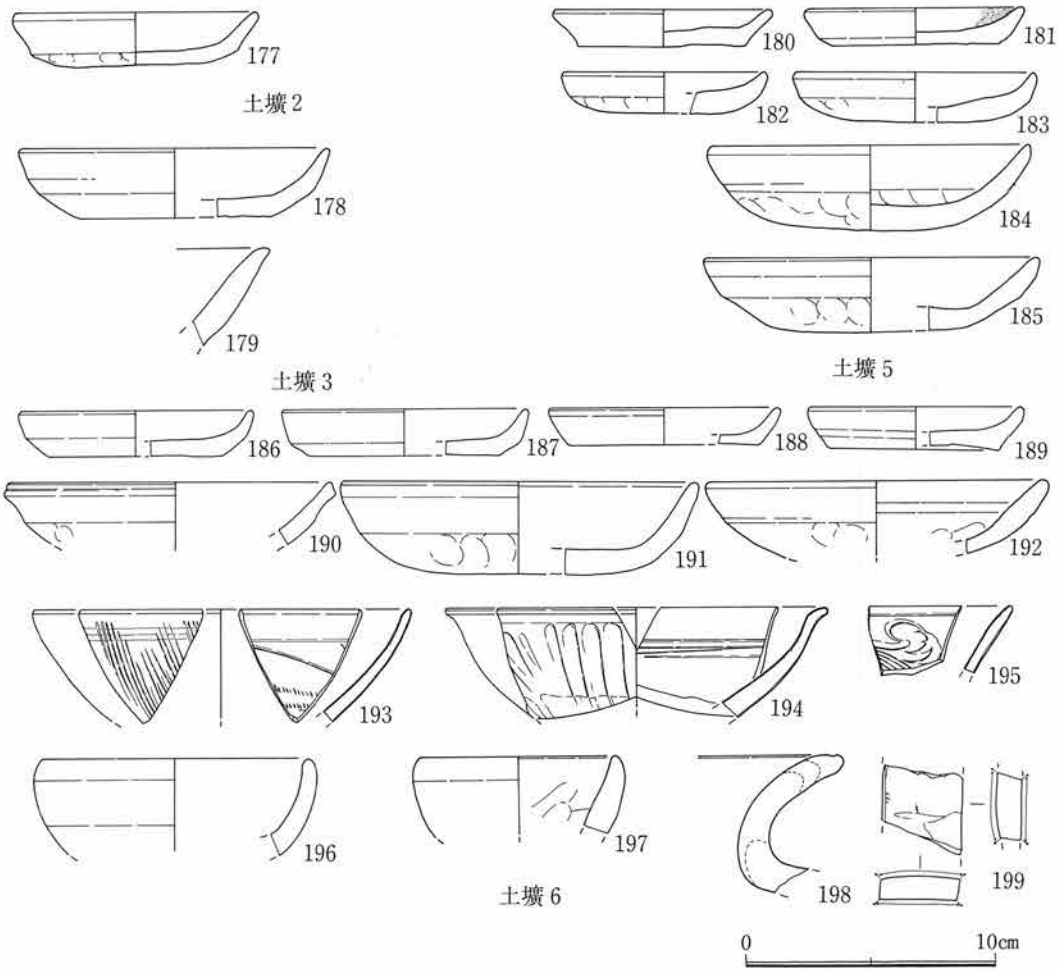


図13　出土遺物(5)遺構内出土遺物

	No.	長さ(cm)	最大幅(cm)		No.	長さ(cm)	最大幅(cm)	No.	長さ(cm)	最大幅(cm)
図11	132	21.9	0.6	図12	158	19.8	0.8	166	23.1	0.6
	133	23.4	0.5		159	23.9	0.7	167	23.6	0.6
	134	23.0	0.5		160	22.5	0.8	168	24.2	0.7
	135	24.7	0.6		161	19.5	0.6	169	22.0	0.6
	136	23.1	0.8		162	19.0	0.6	170	23.0	0.8
	137	29.6	0.9		163	21.6	0.7	171	25.4	0.5
	138	20.9	0.8		164	22.8	0.6	172	26.5	0.8
	139	27.9	1.0		165	23.5	0.6			

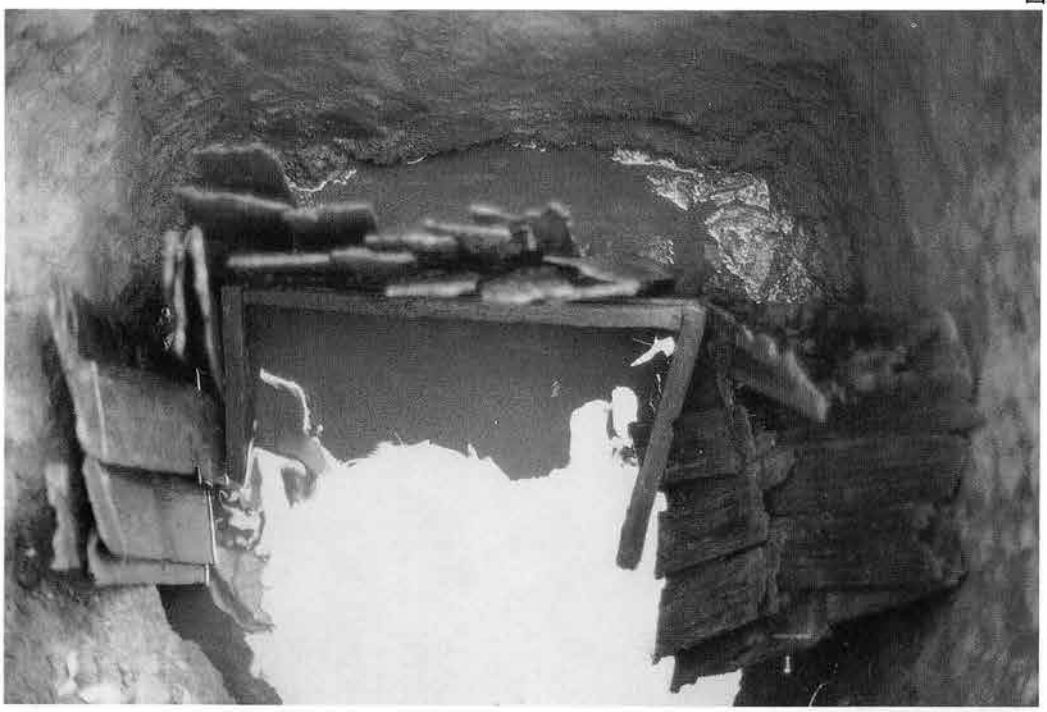
箸状木製品計測表

第四章　まとめ

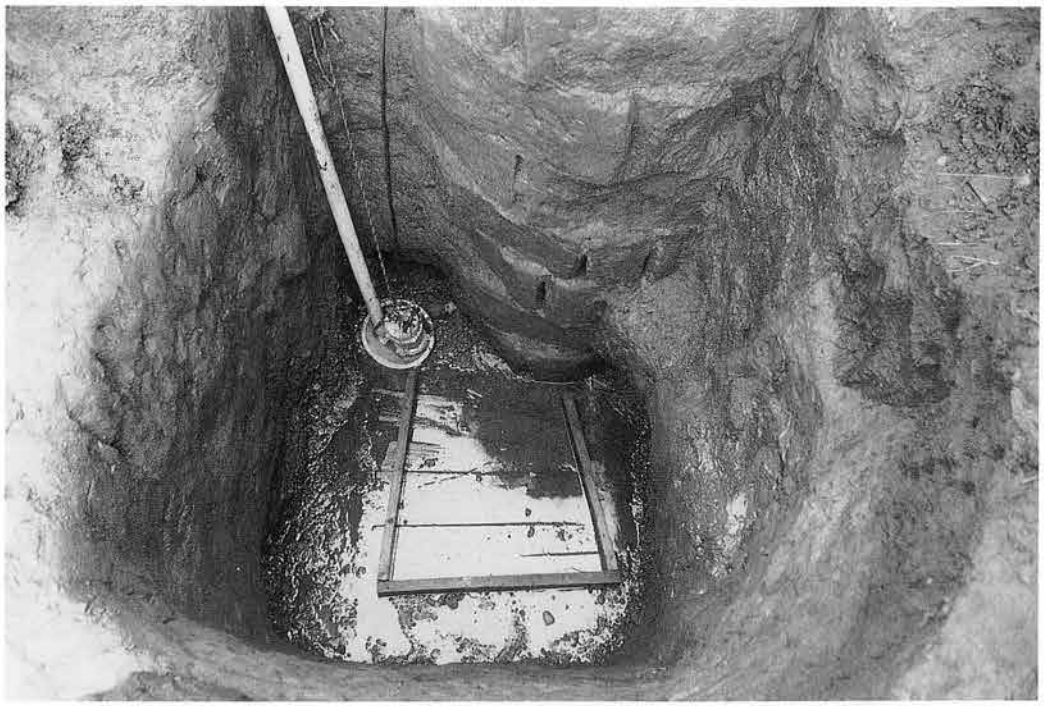
今回の調査では、２面からなる遺構確認面を検出した。第１遺構確認面は、土丹による版築地業面で、第２遺構確認面は中世地山面上である。遺構の項でも述べているように、土丹による版築地業面の残存状況は極めて悪く、この面上ではわずかに井戸１等を検出したに留まった。従って、検出した遺構の殆どは第２遺構確認面上で検出、調査した。調査範囲が狭く、堀立柱建物址等の規模については全貌を把握し得なかったが、これらの建物址の軸方向は若宮大路とほぼ平行する。

遺跡の年代については、おおよそではあるが、井戸１が13世紀から14世紀中頃までが考えられる。各遺構については、おおよそではあるが、井戸１が13世紀中～後半、井戸２が13世紀前～中葉、土壙２、３、５、６が13世紀中～後半、建物１及び柱穴列１が13世紀中～後半にはそれぞれ埋没していったものと考えられる。これらからみて、第１面には13世紀中～14世紀中葉、第２面には13世紀前～中葉の時期が充てられよう。

（田代郁夫、熊谷洋一）

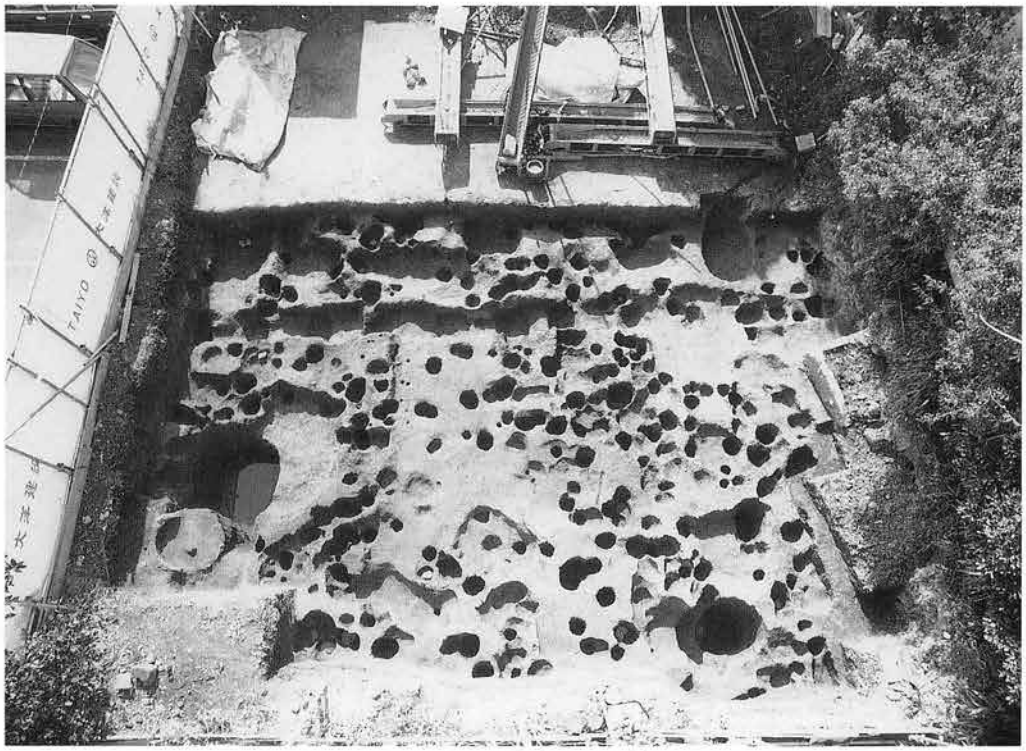


▲1．1号井戸井側木材検出状況



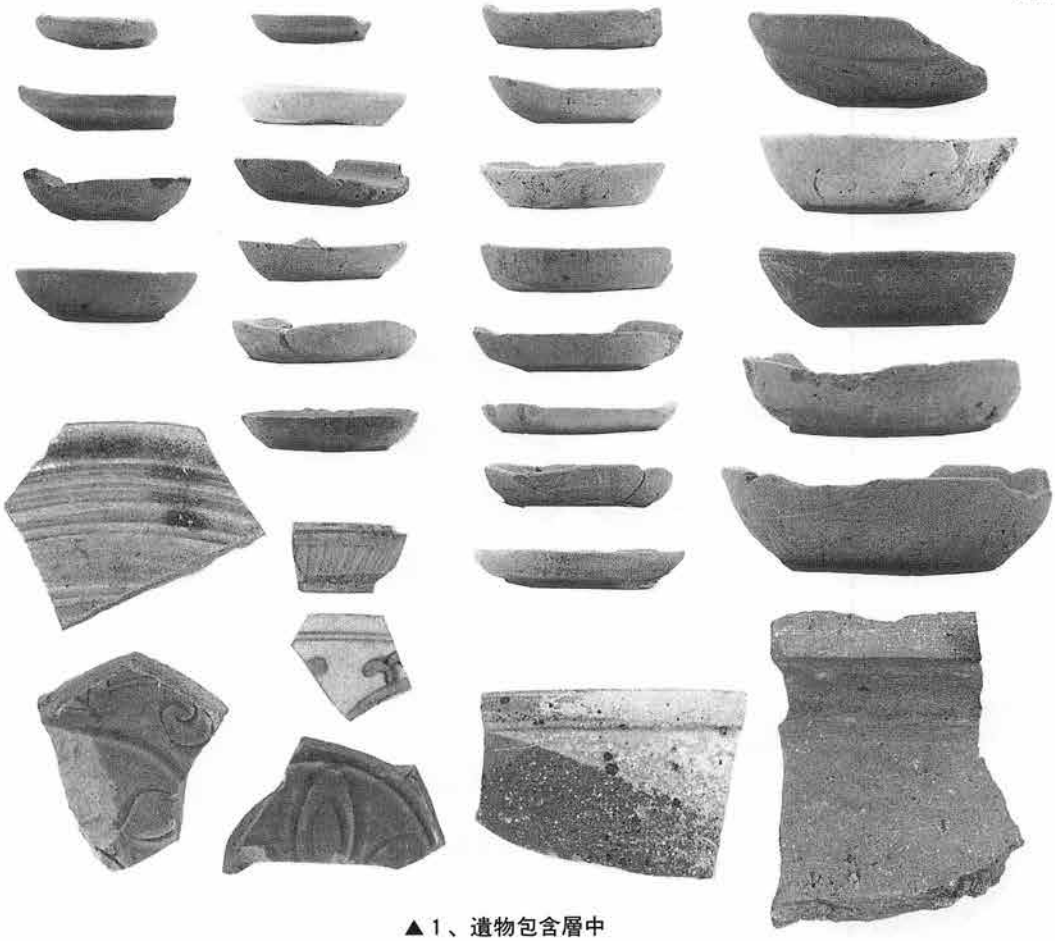
▲2．1号井戸底検出状況

図版 2

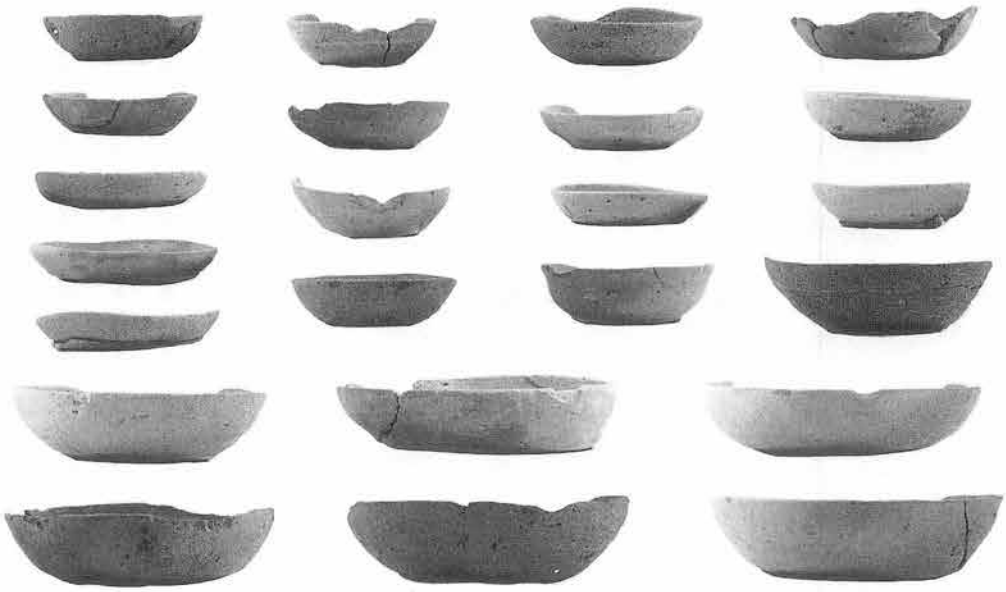


▲ 1 .遺跡全景（手前が北）

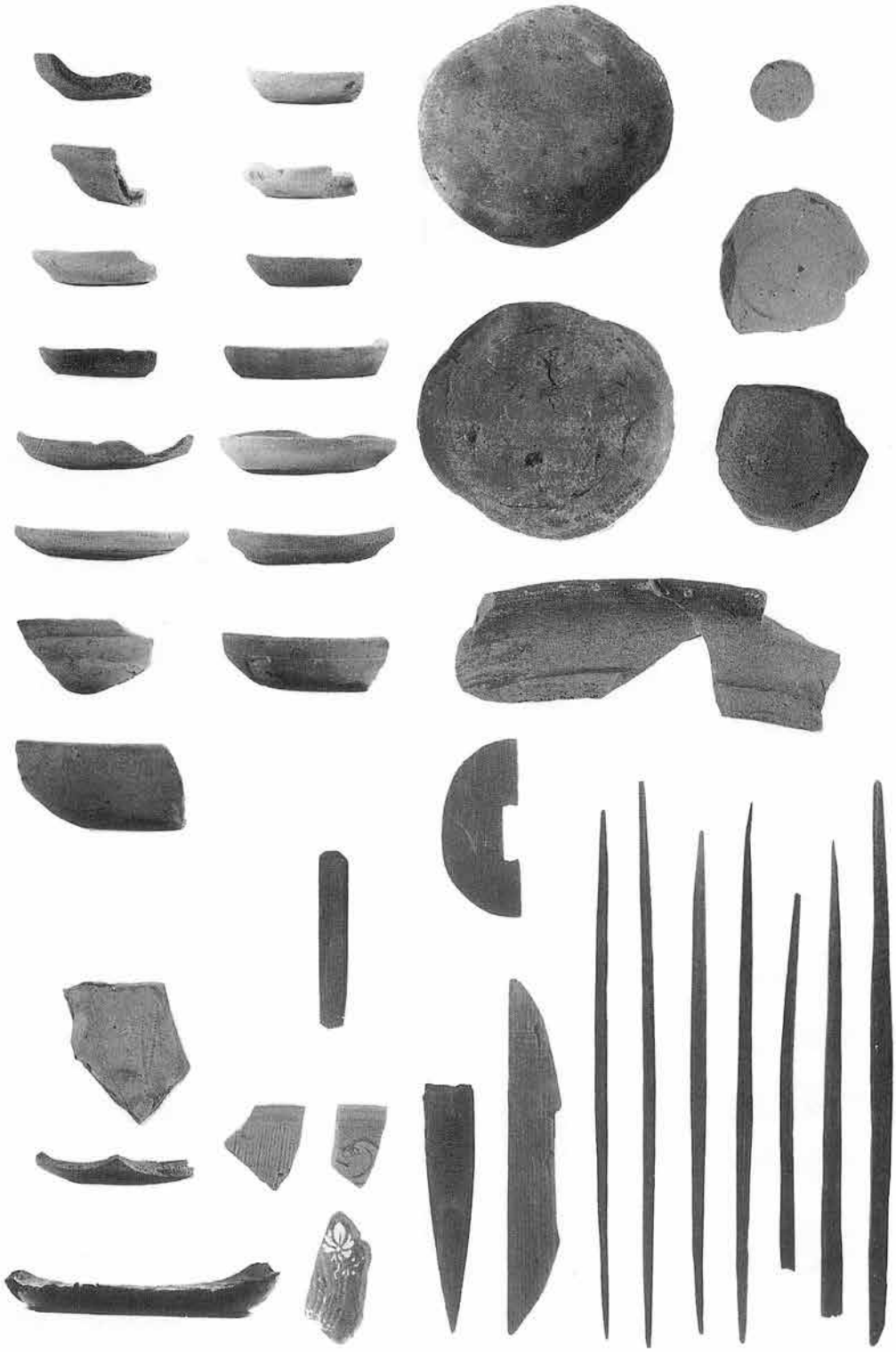
▲ 2 . 2 号井戸完掘状況



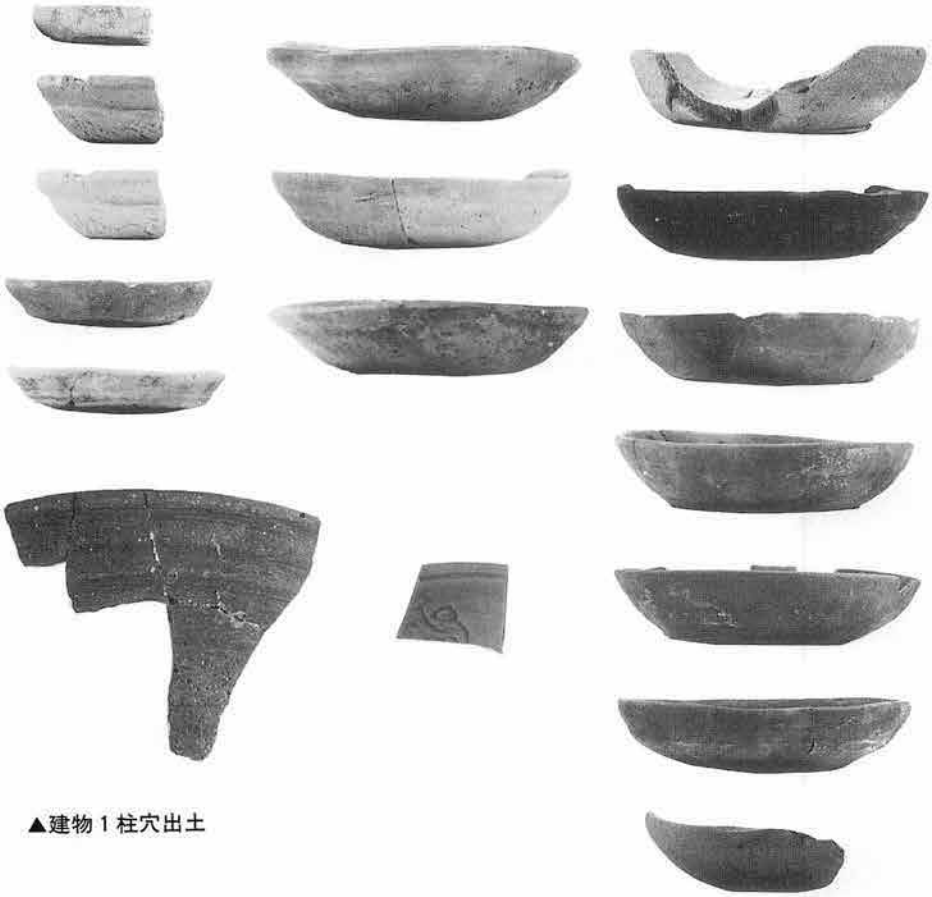
▲1、遺物包含層中



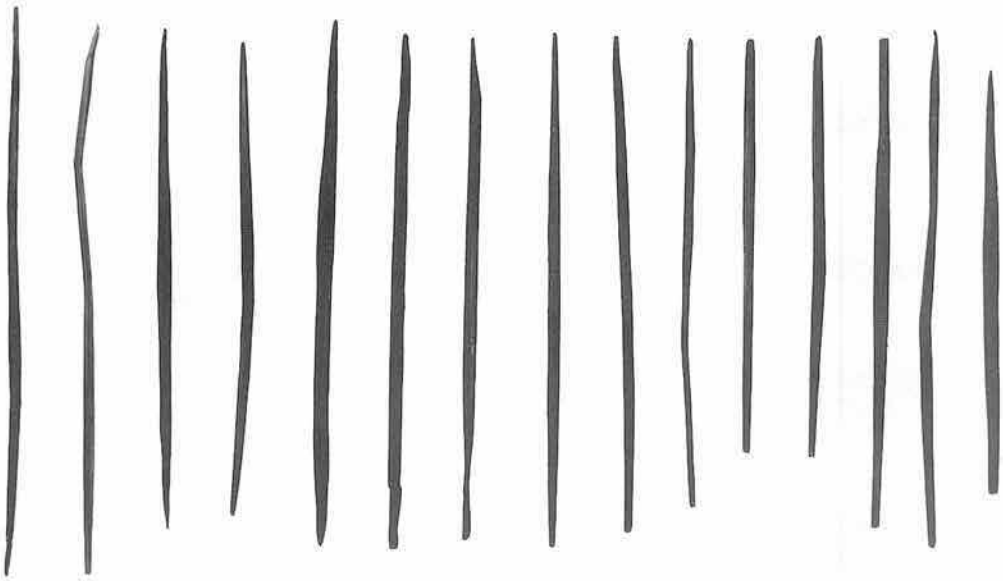
▲2、遺物包含層中(中～下層)



▲　井戸 1　出土遺物



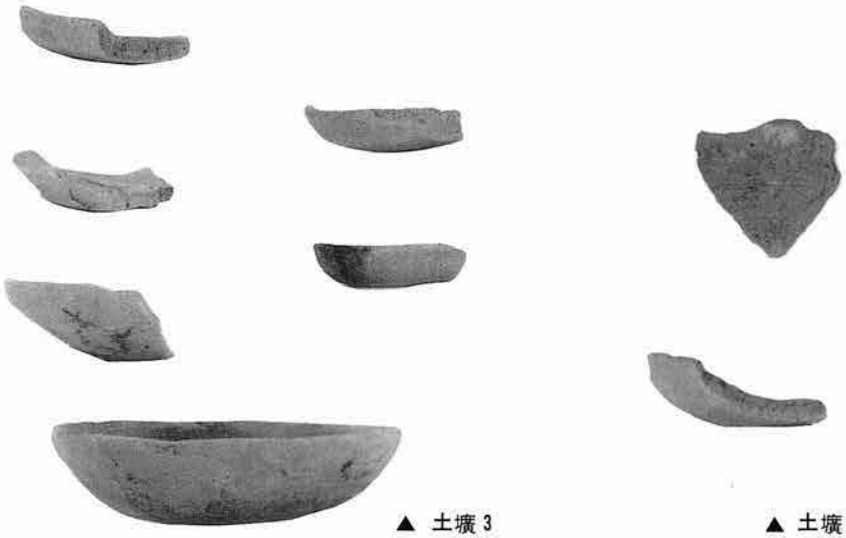
▲建物 1 柱穴出土



▲　井戸 2 出土遺物

図版 6

▲ 土壙 2　　▲ 土壙 6



▲ 土壙 3　　▲ 土壙 5

7．大倉幕府周辺遺跡群（No.49）

雪ノ下三丁目606番１地点

例言

1. 本報は、鎌倉市雪ノ下三丁目606番1地点における、住居併用共同住宅建設に伴う発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、320㎡対象地の内自己用住宅分120㎡を国庫補助事業として、鎌倉市教育委員会が実施した。調査期間は、平成3年8月19日～12月17日までである。
3. 本報の執筆・編集は菊川が行い、遺物実測は片岡、長田、樋口、石丸が担当した。また、図版作製には石丸の協力を得た。
4. 本報に使用した写真は、遺構・遺物ともに菊川が撮影し、空中撮影は（株）サンシャイン工業に依頼した。
5. 調査体制は以下の通りである。

   主任調査員　菊川英政

   調　査　員　片岡睦枝

   調査補助員　長田夏子、樋口美江、石丸運人、大滝洋介、井上幹夫、浅田予理子、長田早苗、

   協力機関　㈱斉藤建設

   ㈱ダイワ建設

   ㈱サンシャイン工業
6. 出土品等発掘調査資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

例言……(132)
目次……(133)

本文目次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……(135)
第二章　調査の概要……(136)
第三章　検出遺構と出土遺物……(137)
第四章　まとめ……(151)

挿図目次

図１　遺跡周辺地図……(134)
図２　明治期の筋違橋……(135)
図３　調査区設定図……(136)
図４　試掘壙土層堆積図……(137)
図５　柵列ピット土層図……(137)
図６　検出遺構全図……(138)
図７　遺構概念図……(139)
図８　柵列エレベーション図……(139)
図９　柵列ピット出土遺物……(140)
図10　溝土層堆積図……(141)
図11　溝４出土遺物……(142)
図12　溝５～10・13出土遺物……(144)
図13　溝11出土遺物（上層）……(146)
図14　溝11出土遺物（上層）……(147)
図15　溝11出土遺物（下層）……(148)
図16　溝11出土遺物（下層）……(149)
図17　近隣地点遺構対比図……(153)

図版目次

図版１　調査地点周辺……(154)
図版２　検出遺構全景……(155)
図版３　Ⅰ区全景他……(156)
図版４　柵列ピット……(157)
図版５　溝４完掘状態他……(158)
図版６　溝５・６・９・10完掘状態……(159)
図版７　溝11完掘状態他……(160)
図版８　Ⅱ区全景他……(161)
図版９　出土遺物……(162)
図版10　出土遺物……(163)

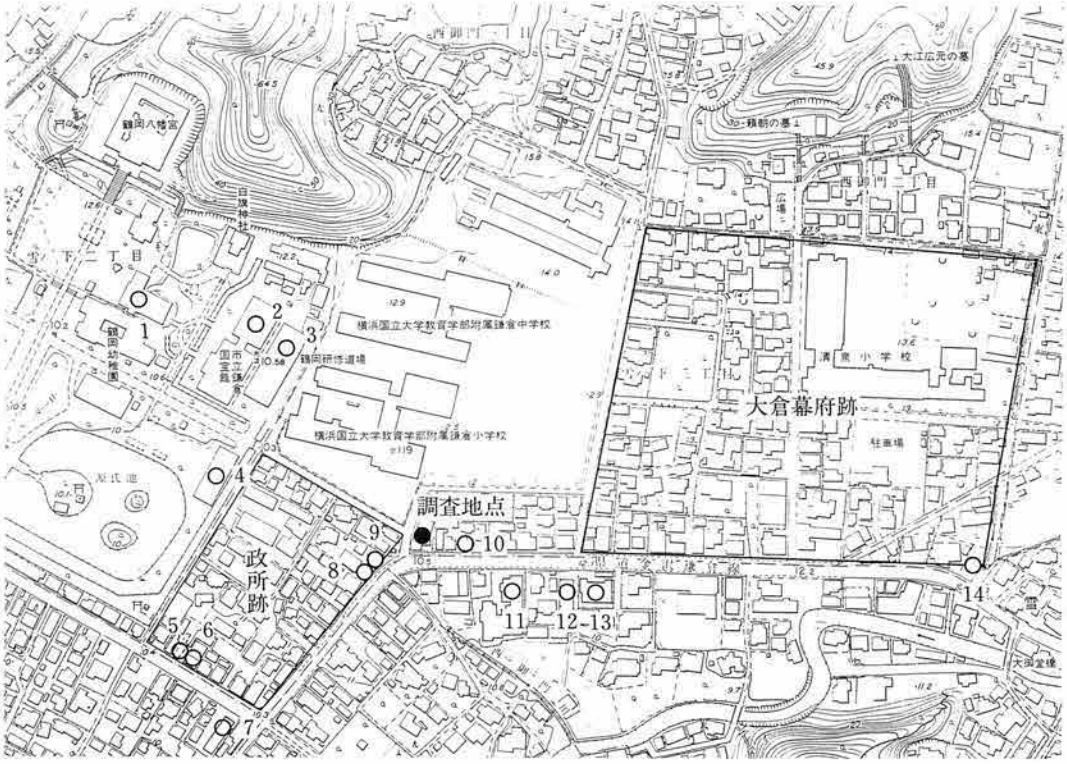


図１　遺跡周辺地図（1/5000）

既調査地点の文献一覧

1．『直会殿用地発掘調査報告書』　直会殿用地発掘調査団　1993

2．『鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書』　鶴岡八幡宮境内発掘調査団　1985

3．『研修道場用地発掘調査報告書』　研修道場用地発掘調査団　1983

4．未報告

5．『政所跡』　政所跡発掘調査団　1991

6．本報告書所収

7．『鎌倉市理蔵文化財緊急調査報告書５』　55 頁　鎌倉市教育委員会　1989

8．『鎌倉市理蔵文化財緊急調査報告書８』　11 頁　鎌倉市教育委員会　1992

9．『鎌倉市理蔵文化財緊急調査報告書８』　133 頁　鎌倉市教育委員会　1992

10．平成４年に発掘。未報告

11．未報告

12．未報告

13．未報告

14．『大倉幕府周辺遺跡群』　大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団　1990

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

調査地点は、鶴岡八幡宮の東方約120m程の所にあり、筋違橋（暗渠）を六浦側へ渡ってすぐ北の地点にあたる。

筋違橋の名は、『吾妻鑑』宝治元年（1247）六月十二日条が初見で“筋替橋”と表記され、その後、同地に町免許がおりた文永二年（1265）三月五日条では“須地賀江橋”となり、更に降って、文政十二年（1829）に編纂された『鎌倉攬勝考』では、現在と同じ“筋違橋”の名になっている。

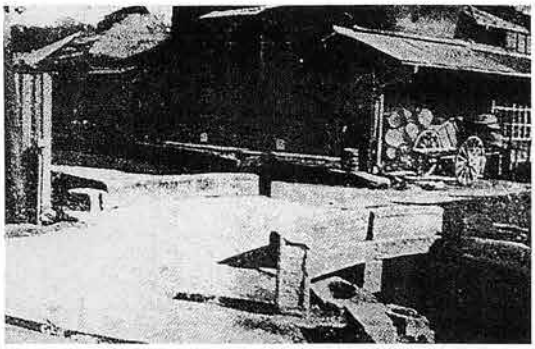


図２　明治期の筋違橋 註1

現在、橋は暗渠となり往時の姿を想像する事さえ難しいが、もと木橋であったのが、明治に至り長さ二間（約3.6m）、幅一間三尺（約2.7m）の石橋（図２）に架け替えられたようである。[註2]また、それ以前の様子は、寛永十九年（1642）～元禄十六年（1703）の間に製作された『相州鎌倉之本絵図』（東北大学図書館蔵）[註3]をみると、他の橋の表現と異なり、橋を斜めに渡して描かれている点が興味深い。

筋違橋下を流れる西御門川は、鶴岡八幡宮の東北方、白旗谷から南下して滑川へ注ぐ小河川であるが、明治初期に編纂された『相模国鎌倉郡村誌』には、鶴岡八幡宮の西北方、御谷から流れでる川を“御谷堀”と称すのに対し、西御門川は“大倉堀”と称していたようである。勿論、これは明治という時代柄、八幡宮に重きを置いた呼称とも考えられるが、中世に遡ってみても幕府中枢機関の集中する当地域にあっては、河川・橋梁を軽視することはできないであろう。

さて、筋違橋を中心とした道路は、非常に複雑な５叉路（図１）であり、中世期の道をどれだけ踏襲しているかが問題となる。筋違橋以東の六浦路は、沿道部の調査地点（図１－10～14）では道路遺構が検出されず、現在の県道と同じか若干南北どちらかに主軸を傾けていた可能性がある。筋違橋から南下する小町大路は、政所跡の調査地点（図１－８・９）で検出され、13～14世紀段階では今より西側を通っていたことが判っている。[註4]調査地点のすぐ西隣を北へ向かう道については、旧師範学校（横浜国立大学附属小・中学校）が当地へ移転した明治25年に分断されたが、それ以前は北方の白旗谷へと通じていたことが近世の絵図により明らかで、白旗谷の来迎寺・報恩寺（廃寺）・太平寺（廃寺）等の存在からみても、この道の起源は中世にまで遡るものと思われる。鶴岡八幡宮の馬場路を延長し、推定政所跡の北限に沿う道と筋違橋の南から出て、西御門川沿いに滑川まで続く道に関しては、近世の絵図にもみえず不明と言わざるを得ない。しかし、後者については、滑川の左岸に沿う田楽辻子の一部とする説[註5]もあり注意を要する。

註１　『図説・鎌倉回顧』鎌倉市　1969より転載。橋向こうの土蔵の建つ辺りが調査地点にあたる。

註２　『相模国鎌倉郡村誌』神奈川県郷土資料集成第十二輯　神奈川県図書館協会1991

註３　飯島秀民　「東北大学附属図書館蔵『相州鎌倉之本絵図』」『三浦古文化』第34号三浦古文化研究会　1983

註４　瀬田哲夫　「政所跡一雪ノ下三丁目966番ノ地点－」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』鎌倉市教育委員会　1992

註５　高柳光寿　『鎌倉市史　総説編』吉川弘文館　1972
これに対し、貫達人氏は「北条氏亭址考」（『金沢文庫研究』第８号　金沢文庫　1971）の中で、「田楽辻子は宇津宮辻子より南方で、若宮大路と小町大路を結ぶ辻子の一つである」と述べている。

第二章　調査の概要

発掘調査は、排土置場を確保する必要上、調査区を南北に２分して行われた。北側Ｉ区は平成３年８月22日～11月14日まで、南側II区は11月15日～12月17日までの期間で調査された。

調査に使用したグリッド軸は、地界杭Ａ－Ｂラインを基準とした。地界杭Ａから8mの地点をＨ１とし、同点からＡ－Ｂラインと直交するラインを設定し、8m間隔でH0～H4までの点を落した。H0～H4ラインは磁北に対し、21度30分東へ傾いている。（図３）

遺構面の検出は、鎌倉市教育委員会が行った試掘調査結果（図４）をもとに進められた。地表下30～70cmまでは近代以降の地業土層（表土）であるため、平均50cmの深さまでを重機で除去し、以下は手掘りで調査を行った。第一面としたのは４層あるいは５層上面であるが、II区側では削平され、Ｈ１杭の東側に地山の露呈している部分も認められた。検出された遺構には、溝状遺構・土壙の他に浅く不明瞭なピット群がある。また、幕末？～明治あるいはそれ以降と考えられる大形の土壙（撹乱壙）はII区側に集中してみられた。また、H4杭の西（調査区西壁際）では、第一面下10cm程の所で小規模な土丹版築面がみつかっており、同レベルを第二面として調査したが広がりはつかめず、第一面・第二面で検出された遺構をまとめて上層遺構群とした。

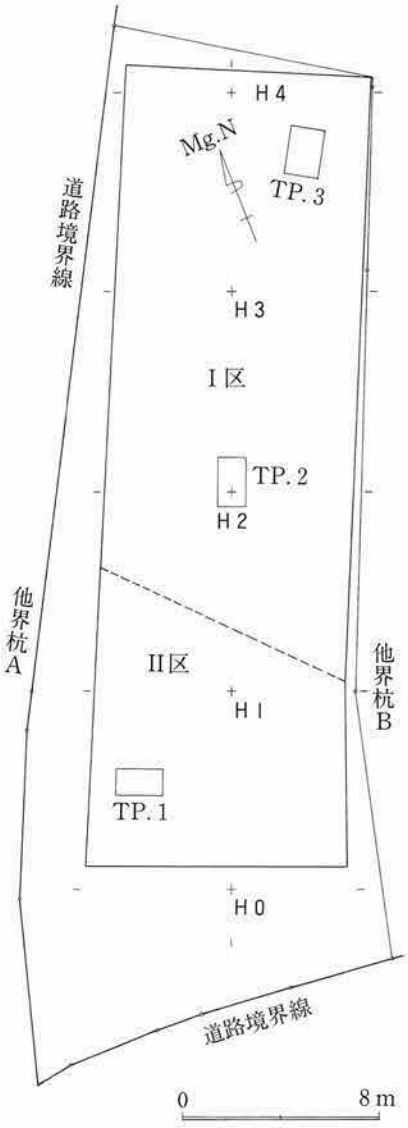


図３　調査区設定図（1/300）

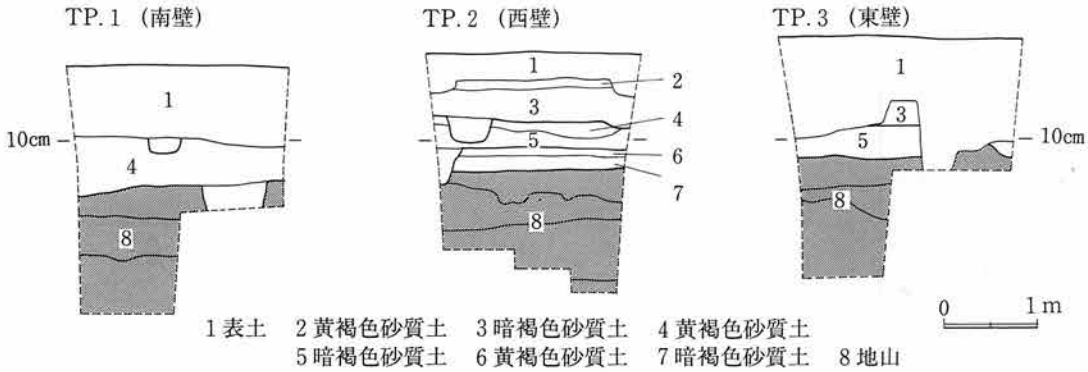


図4　試掘壙土層堆積図(1/80)

下層遺構群としたのは地山面上で検出された遺構である。柵列・溝・土壙・柱穴・杭穴の他、窪地状の部分も認められた。図4－6、7層は窪地覆土にあたる。遺構相互の切り合い関係や主軸方位の相異からみて、少なくとも2～3時期の重複が考えられる。

出土遺物には、かわらけ皿・国産陶磁器・舶載陶磁器・瓦・金属製品の他石塔類も出土し、その総量はテンバコ70箱を数える。

第三章　検出遺構と出土遺物

検出された遺構と出土遺物の概要は、既に第二章で簡単に触れておいた。いまだ整理途中であるため、すべての遺構・遺物について詳述することはできないが、本報においては、国庫補助事業分として、下層遺構群のうち柵列と溝について取りあげ、以下に説明を加えることとした。

柵列……調査区西壁沿いで検出され、北から順にA～Sまでの符号をつけた。いずれも2個の柱穴が連続した形態をとるが、切り合い関係は認められず、布掘り状に長く連なるものもみられた。（図5）1個の柱穴は1辺40cmの方形を呈し、地山面から40cm程掘り込まれている。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は平坦であるが、Mの南側底面には土丹塊が詰められていた。（図版4）

各柱穴の中心距離は、北側と南側の両方で計測した。（図8）およそ1.5mを標準値とするが、1.7m、2m、2.4mなど変則的な数値となる箇所もある。大きく変化するE～Gの柱穴は、形態的にも他

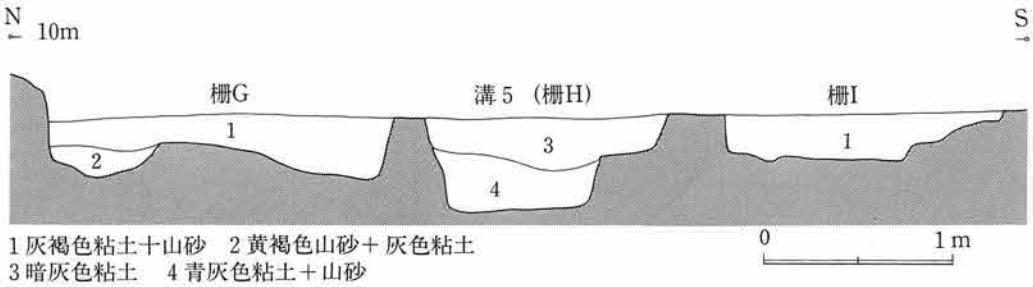


図5　柵列ピット土層図（1/40）

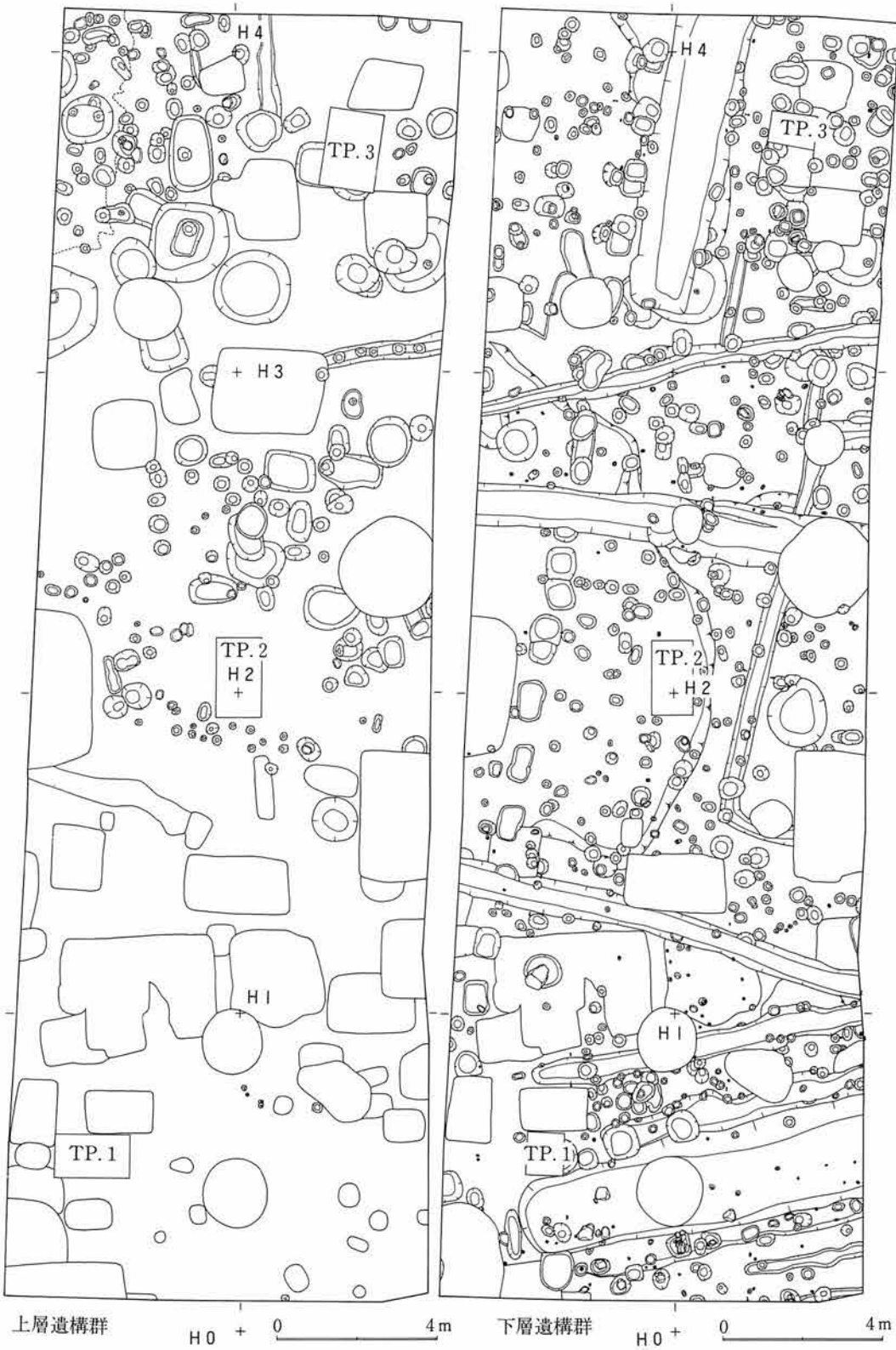


図6　検出遺構全図（1/60）

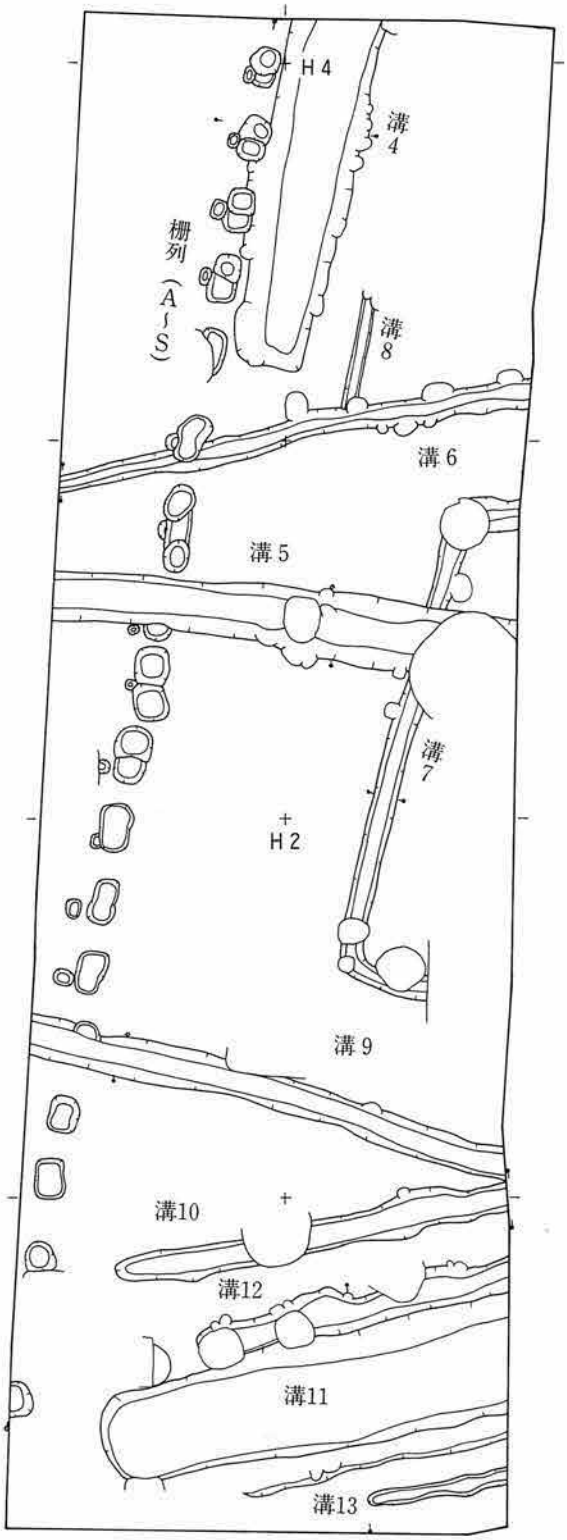


図7　遺構概念図

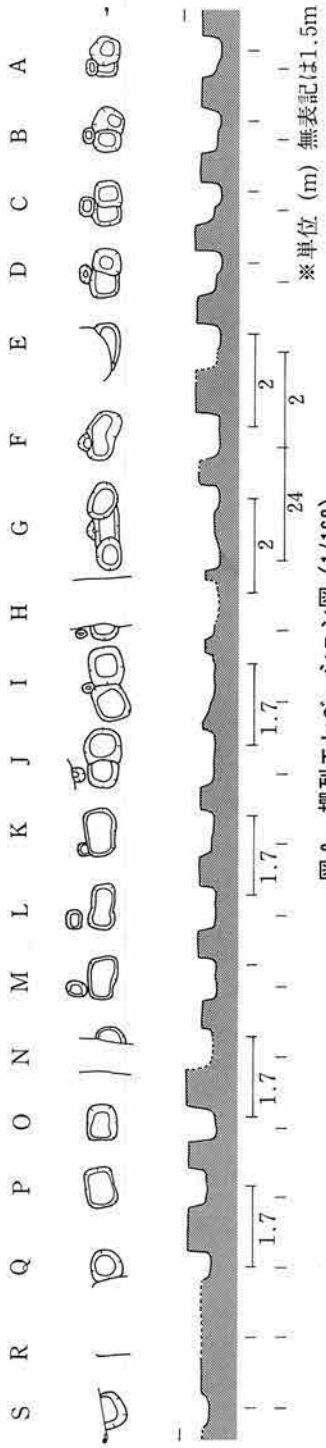


図8　柵列エレベーション図（1/160）

の柱穴とは異っており、溝4が止まる地点にあることを考えれば、何か特別な施設が存在した可能性もある。

また、A～Mまでの柱穴横（西側）には、20×30cmの長方形を呈し、深さ30cm程の小柱穴が伴う。N以下にもあったと思われるが、調査区西側に近く、他遺構にも切られて判然としない。この小柱穴は、本柵列に伴う補助的な構造物ではないかと考えられる。

他遺構との関係では、溝4と同時期か溝4が新しく、溝6は柵列よりも新しい。溝5・9は不明瞭ではあるが、両溝の方が古いようにみえた。

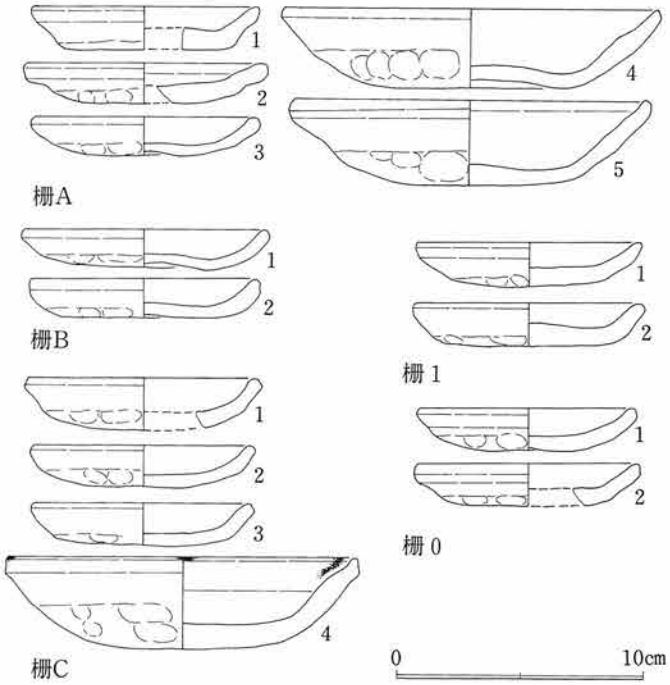


図9　柵列ピット出土遺物

柵列の主軸方位はN－32.5°－Eである。

柵列ピット出土遺物……溝4に接した柱穴からは、比較的多くの遺物が出土している。

1～5はA柱穴から出土。手捏ね整形のかわらけ皿で、¼～½程度が遺存する。出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り2点・手捏ね10点）。常滑甕片1点。

6～7はB柱穴から出土。手捏ね整形のかわらけ皿で、ともに⅔程度が遺存する。出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り3点・手捏ね44点）、常滑甕片1点。

8～11はC柱穴から出土。手捏ね整形のかわらけ皿で、¼程度が遺存する。11は灯明皿として使用。出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り2点・手捏ね34点）。

12～13はI柱穴から出土。手捏ね整形のかわらけ皿で、⅔程度が遺存する。出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り0点・手捏ね8点）、土師器片6点。

14～15はO柱穴から出土。手捏ね整形のかわらけ皿で¼程度が遺存する。出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り0点・手捏ね15点）。

溝4……上面幅約2.2m、底面幅約1.1m、確認面からの深さ約50cmを測る大形の溝である。柵列と並行して検出されたが、調査区北側から7.5m程で終わっている。溝の東側壁面は急角度で立ち上がるのに対し、西側壁面は穏やかな傾斜となり、底面は凹凸を有すがほぼ平坦となっている。なお、溝東肩部の柱穴は、本址に伴うものではない。

溝の覆土は大きく3層に区分され、掘り直しの痕跡はない。上層は貝殻粒子を多量に混入する砂

質土で、ほとんどの遺物が同層から出土している。中層は灰色粘土層である。同様の堆積状態は溝11においてもみられ、ある時期に貝殻粒子を混入する土を用いて地業が行われた結果と考えたい。

溝4出土遺物……上層・下層にわけて取り上げたが、厳密な層序区分はしていない。1から5までが上層出土遺物。16～29までが下層出土遺物である。

1～10はからわけ皿。1・7は完形品である。このうち、1・2・8は糸切り底を呈すが、1は

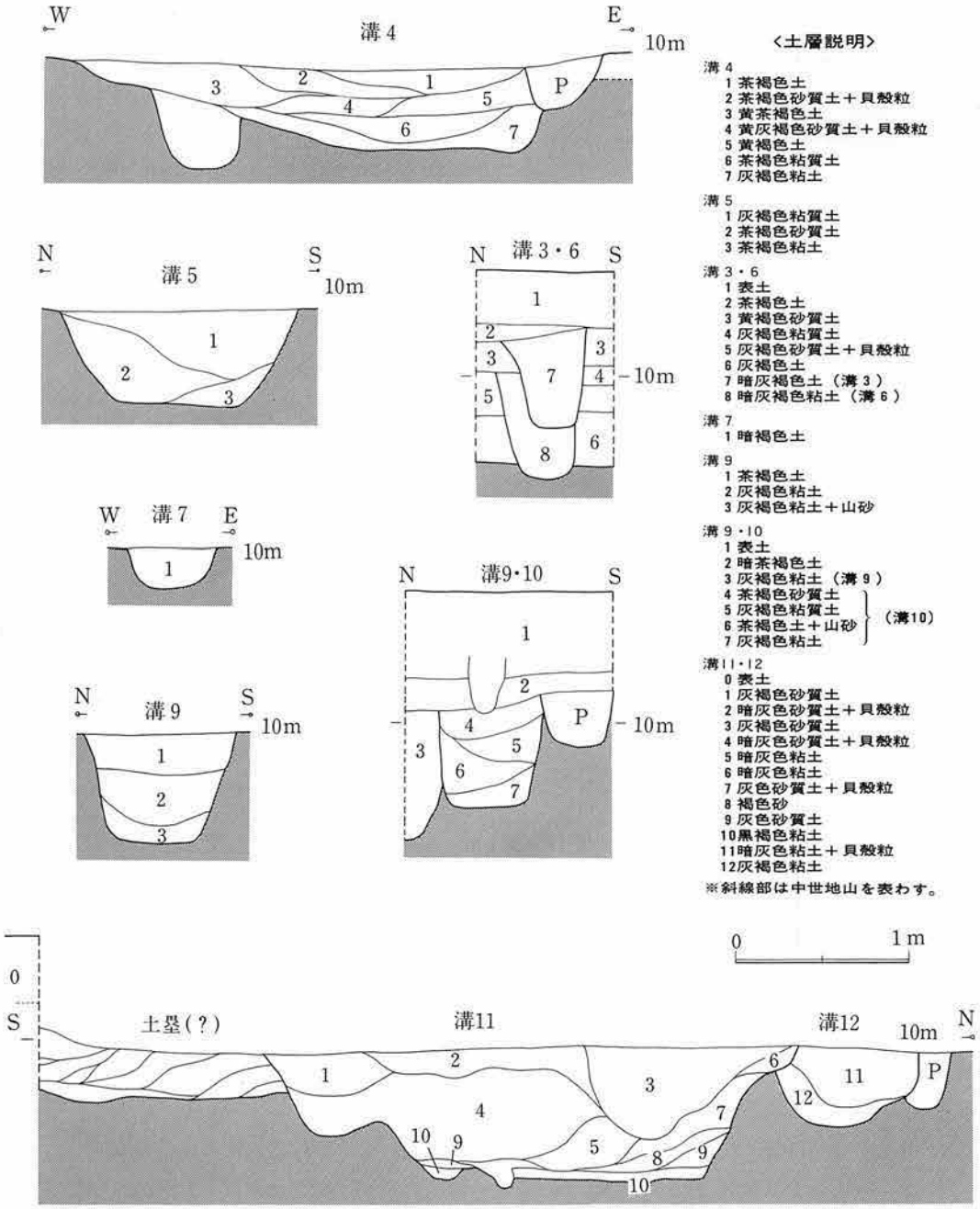


図10　溝土層堆積図（1/40）

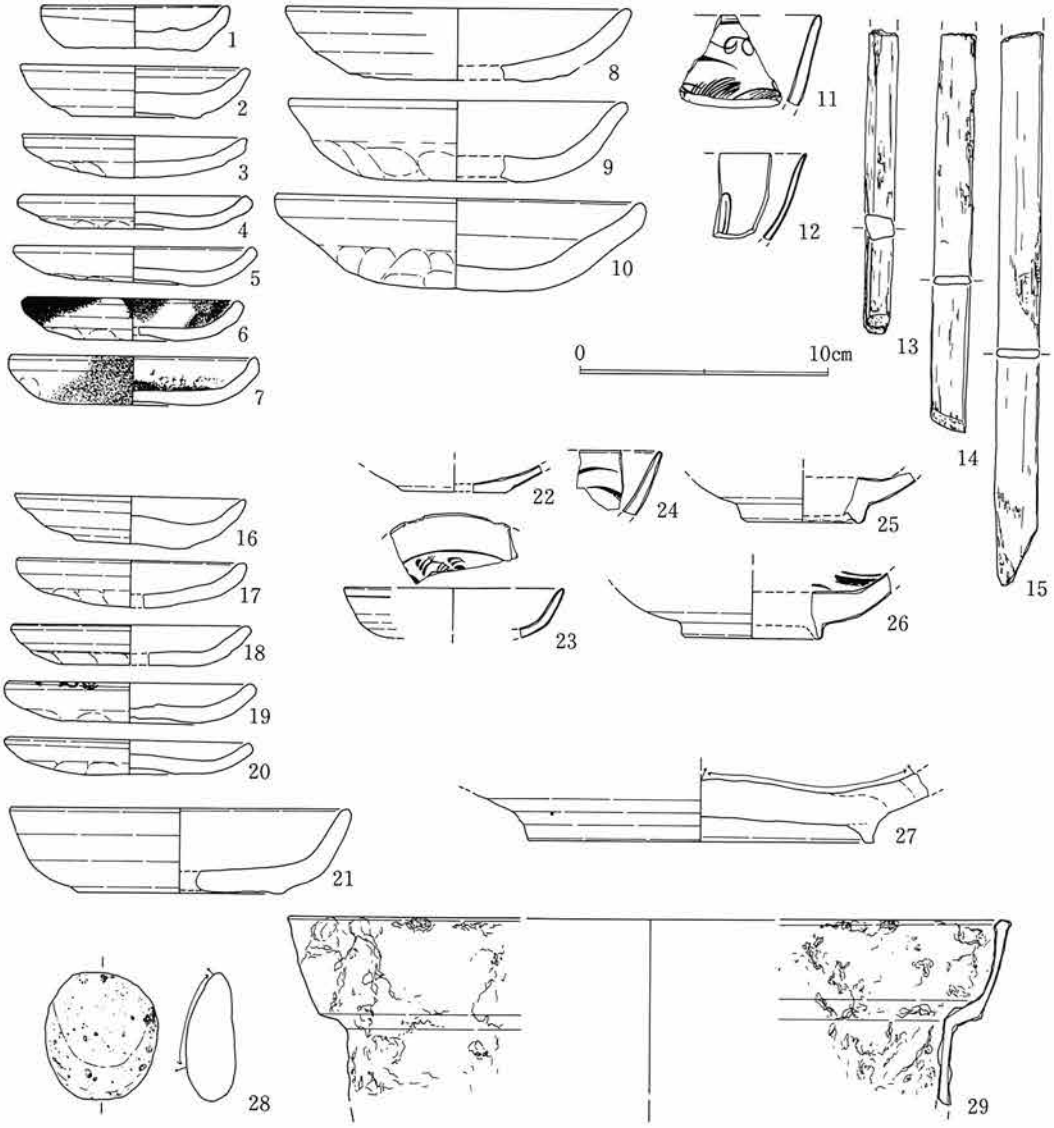


図11　溝４出土遺物

混入品の可能性がある。

11～12は舶載磁器。11は青磁画花文碗。12は青白磁皿で、内面に沈線文様をもつ。

13～15は木製品。13は角柱状、14～15は薄板状を呈し、いずれも先端を斜めに切っている。用途不明。

上層遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り24点・手捏ね113点・不明66点）、舶載磁器３点、常滑３点、瀬戸１点、瓦１点、鉄製品２点、木製品４点。

16～21はかわらけ皿。16・21は糸切り底である。16は完形品で、外底面に回転糸切り痕、内底面にナデ調整痕を残す。底部は厚く、台状に突出した形状を呈す。19は灯明皿として使用。

22～26は舶載磁器。22は青白磁皿。23は青磁画花文皿。24～26は青磁碗で、24・26には画花文が

みられる。

27は渥美窯産の捏ね鉢。内底面は磨耗が著しく、赤褐色の顔料が付着している。

28は自然礫を転用した砥石であろうか。片面に磨耗痕がみられる。凝灰質砂岩。

29は鉄鍋。小片からの復原である。

下層遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り18点・手捏ね99点・不明22点）、舶載磁器８点、常滑11点、渥美１点、瓦３点、鉄製品２点、土師器11点。

溝５……H2杭とH3杭の中間で検出された東西方向の溝で、両端は調査区外へと続いている。

調査区中央部分で土壙に切られ、その東側は掘りすぎのために形が崩れている。最も遺存状況の良い西側では、上面幅1m、底面幅75cm程の箱堀状を呈し、確認面から50cmの深さをもつ。

主軸方位はW－28°－Nである。本址は柵列に切られており、溝７との新旧関係は不明である。

溝５出土遺物……遺物量は多いが、いずれも小片である。

１～３はかわらけ皿。１は糸切り底である。底部は厚く、内底面のナデは軽い。火熱を受けて内面が黒く煤けている。

４～５は舶載磁器。４は白磁壺。５は青磁鎬蓮弁文碗である。

６は軽石。四周に平坦面がみられる。

出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り７点・手捏ね111点・不明13点）、舶載磁器２点、常滑６点、瓦１点、土師器８点、石製品１点。

溝６……H3杭の所で検出された東西方向の溝で、両端は調査区外へ続いている。上面幅50cm、底面幅30cm、確認面からの深さ50～60cmを測る。壁面の立ち上がりは垂直に近く、底面は若干丸味を帯びる。北壁に接する柱穴は、本址に伴うものではない。　溝３（第一面・上層遺構群）の真下で確認され、溝５より新しく、柵列を切っている。溝８との新旧関係は不明である。

主軸方位は、W－9°30′－Nである。

溝６出土遺物……溝３および窪地部分の遺物が混入した可能性が高い。特にかわらけ皿に関しては、窪地部分のものを同時にとり上げており、数量的にも膨大なものとなった。

１～10はかわらけ皿。１～３は糸切り底である。手捏ね整形の大皿は、器高が高く、丸味をもつものが多い。

11～12は舶載磁器。ともに青磁碗であるが12は櫛描画花文を施す。

13は常滑窯産の甕底部。

14は磨り常滑。側縁部に磨耗がみられる。

15は四葉硯。頁岩製。

16は平瓦。凸面に縄目、凹面には離れ砂が付着している。

出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り32点・手捏ね302点）、舶載磁器４点、常滑46点、渥美１点、瓦８点、手焙り１点、硯１点、鉄製品４点、土師器２点。

溝７……調査区の中央、東壁寄りで検出された。南北両端は90度に折れて調査区外へと続いてお

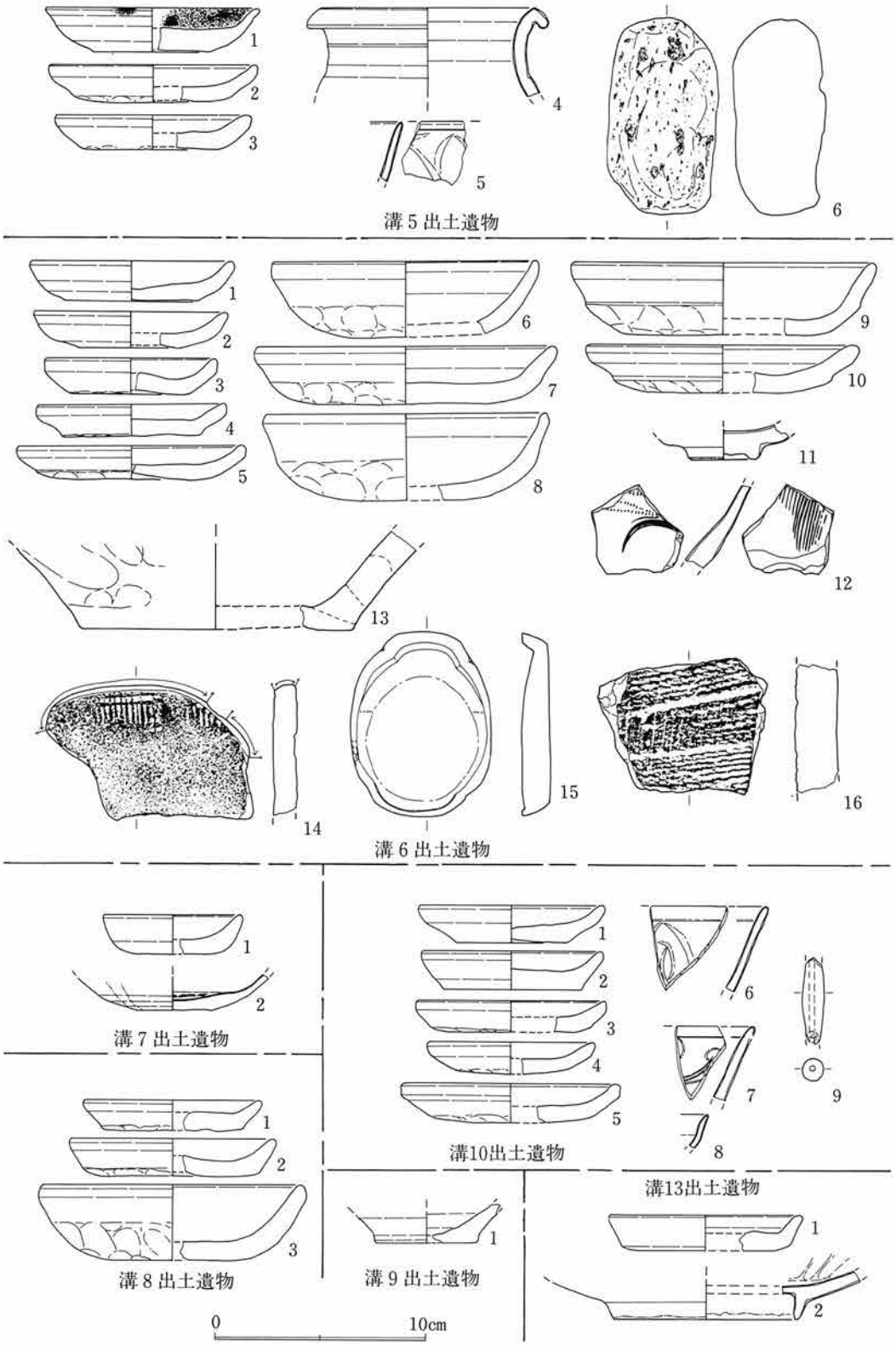


図12　溝5～10・3出土遺物

り、溝の内側を方形に囲んだ区画溝と考えられる。南北方向の１辺は約10m、溝の上面幅50cm、底面幅30cm、確認面からの深さ25cmを測り、断面は浅いＵ字形を呈す。溝５との新旧関係は不明。

主軸方位は、南北方向の一辺で、Ｎ－35°－Ｅを測る。

溝７出土遺物……遺物量は極めて少ない。

１はかわらけ皿。小片。糸切り底である。

２は美濃窯産の灯明皿。内面に鉄釉がかかる。近世以降の製品で、混入品である。

出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り１点・不明２点）、常滑３点、近世陶器１点、土師器１点。

溝８……溝４の東側で検出され、溝４とほぼ平行する浅い溝である。溝６以北に遺存し、確認時には、もう少し北側（TP3付近）まで続いていた。遺存状態の良い部分で、上面幅30cm、底面幅20cm、確認面からの深さ15cmを測り、断面は浅いＵ字形を呈す。

溝６との新旧関係は不明。

溝８出土遺物……実測可能な遺物は少なく、いずれも小片である。

１～３はかわらけ皿。手捏ね整形。

出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り４点・手捏ね19点・不明７点）、舶載磁器１点、常滑10点、手焙り19点、瓦１点、鉄製品１点、土師器３点。

溝９……Ｉ区とII区の境界部分で検出された東西溝で、両端は調査区外へ続いている。溝の上面幅90cm、底面幅45cm、確認面からの深さ65cmを測り、断面形状は箱掘りに近い。

溝10より古く、柵列に切られているようにみえた。

主軸方位は、Ｗ－36°30′－Ｎである。

溝９出土遺物……出土遺物は極めて少ない。

１は白かわらけ。糸切り底である。

出土遺物の内訳：白かわらけ１点、土師器１点。

溝10……H1杭の南で検出された東西溝で、東端は調査区外へ続いている。上面幅60cm、底面幅40cm、確認面からの深さ55cmを測り、断面形状は箱掘りに近い。西端部は調査区内で終わるが、この部分の底面は上がり、除々に浅くなるように作られている。

調査区東壁の土層図では、溝９を切っているようにみえた。

主軸方位は、Ｗ－10°－Ｎを測り、溝11～13と平行する。

溝10出土遺物……小片が多い。

１～５はかわらけ皿。１～２は糸切り底である。

６～８は舶載磁器。６～７は青磁画花文碗。８は青磁皿である。

９は土錘。両端を欠くが、軽く小さな製品である。溝11下層でも同種のものが出土している。

出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り20点・手捏ね95点・不明33点）、舶載磁器７点、常滑６点、鉄製品２点、土師器５点。

溝11……調査区南壁寄りで検出された。東西方向の大形溝で、東端は調査区外へ続いている。確

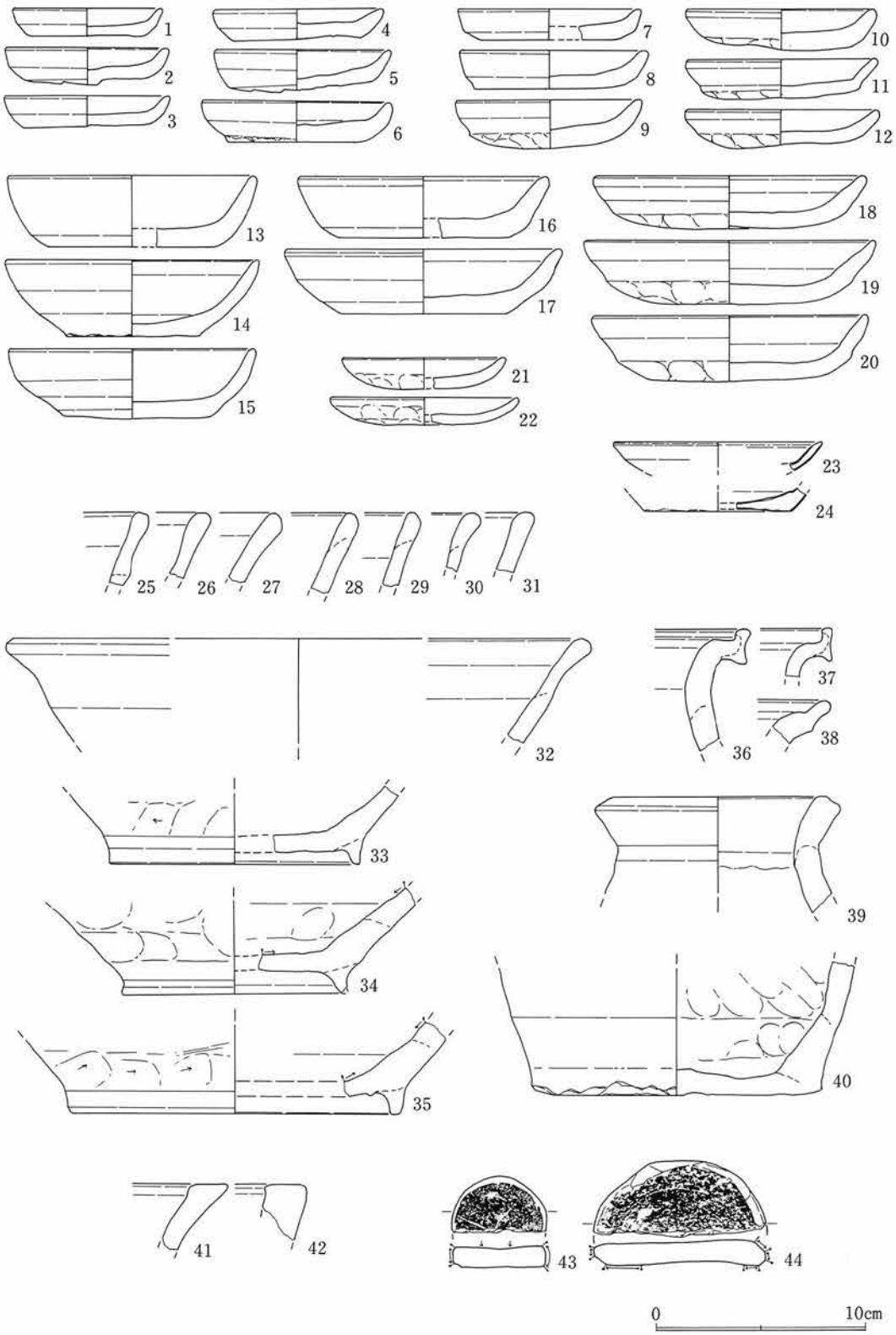


図13　溝11出土遺物（上層）

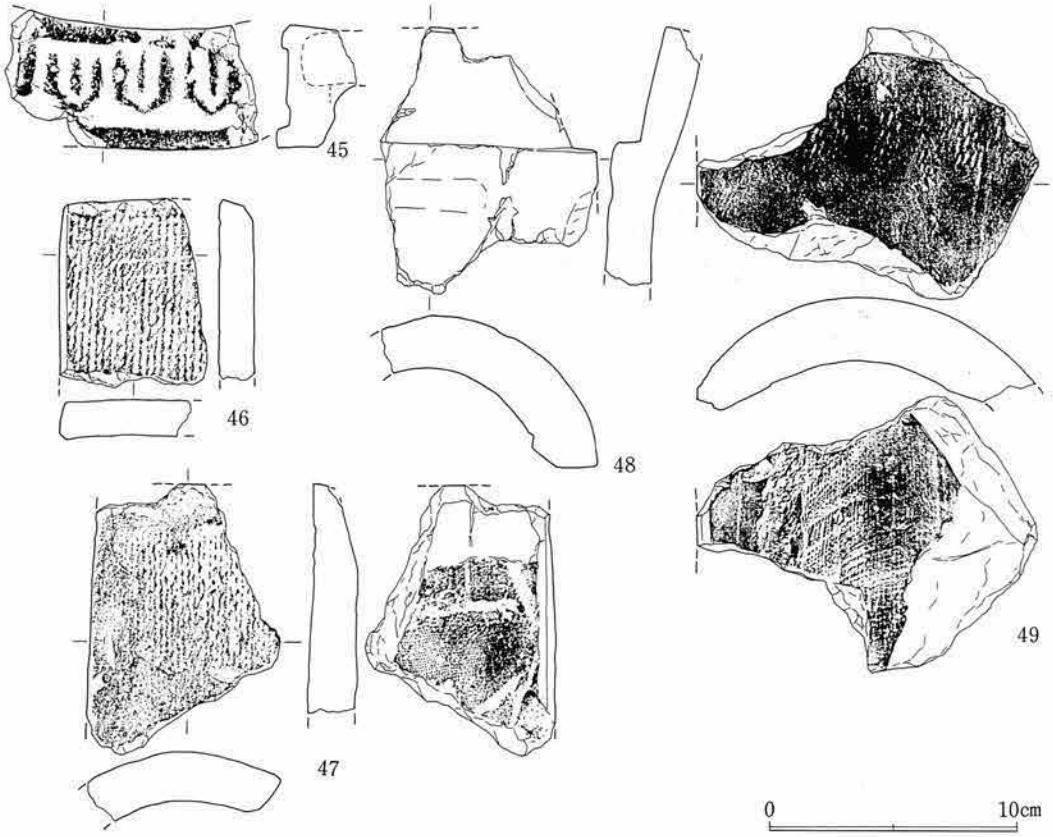


図14　溝11出土遺物（上層）

認面での上面幅3.1m、底面幅1.5m, 深さ75cmを測り、断面形状は逆台形を呈する。北側壁面は直線的に立ち上がり、西端部に３口の大形柱穴を伴なう。西側壁面は中位に段を有し、段上に数口の柱穴が並ぶ。この柱穴列は、溝11の南辺に沿う土塁状遺構に伴なう可能性がある。北壁・南壁の柱穴群に関しては、対応関係等を検討する必要があるため、ここでは扱わない。

溝の覆土は貝殻粒子を混入する砂質土が主体であり、掘り直しは認められない。覆土中からは多量の遺物とともに、人頭大の伊豆石が検出されている。南側壁面近くのものは、壁中段とほぼ同レベルで検出され、北側の１個は溝底面で検出された。据え置かれた可能性もあるが明確ではない。

溝11は溝12を切って構築される。他の溝とは直接の切り合い関係はないが、主軸方位や溝の終わる位置でみれば、溝10と相前後した時期が考えられ、溝の規模と覆土の状態からは溝４と同時期あるいは近接した時期であったと推測される。

溝11の主軸方位はW－10°－Nである。

溝11出土遺物……上層・下層に分けて取り上げたが、層序的に厳密な区分でなく、溝11の南壁中段レベルまでを上層とし、以下を下層としている。

１～20はかわらけ皿。小皿では１～８までが糸切り底。１・７・12以外は完形もしくは略完形品である。大皿では13～17までが糸切り底。15・20が完形品である。

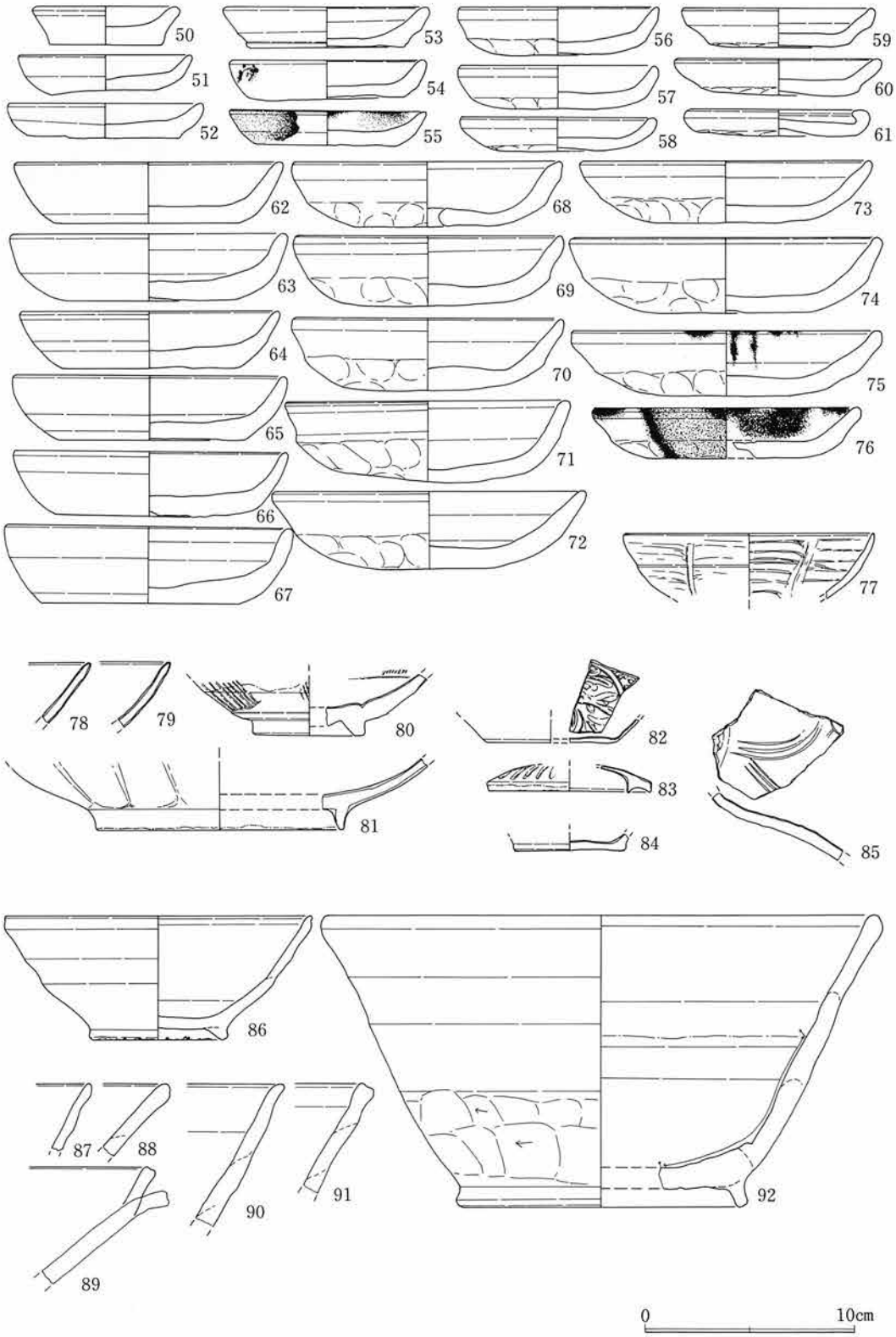


図15　溝11出土遺物（下層）

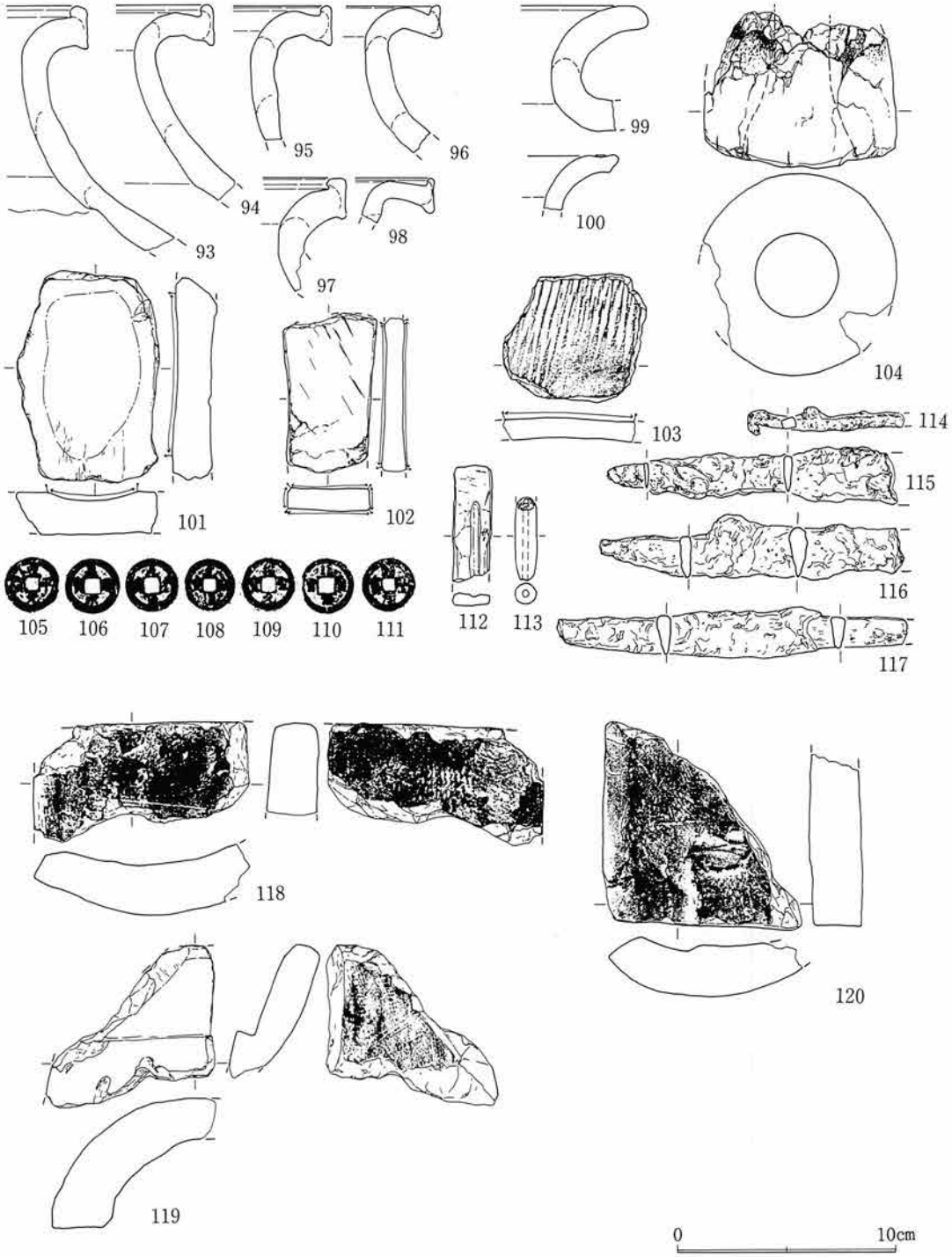


図16　溝11出土遺物（下層）

21～22は白かわらけ。ともに手捏ね整形である。

23～24は舶載磁器。白磁口兀げ皿である。

25～35は山茶碗窯系捏ね鉢。33～35の内面はかなり磨耗している。

36～40は常滑窯産の壷・甕類である。

41～42は手焙り。ともに土器質のものである。

43～44は土製品。44はかわらけ皿底部の周囲を磨って円盤状に再加工するが、43は土師器片を再加工したものである。

45～49は瓦。45は剣頭文軒平瓦。48～49は丸瓦である。

上層出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り510点・手捏ね283点・不明326点）、舶載磁器６点、常滑114点、山茶碗窯系陶器22点、渥美２点、瀬戸４点、手焙り６点、瓦37点、土製品３点、伊勢型土堝１点、土師器４点。

下層出土遺物は以下の通りである。

50～76はかわらけ皿。小皿のうち50～55は糸切り底。51～53・56・58・60は完形あるいは略完形品である。大皿では62～67が糸切り底。70～71が完形品である。68は底部中央に二次的穿孔を行い、75・76は灯明皿として使用されている。

77は瓦器輪花碗。

78～85は舶載陶磁器。78～79は青磁鎬蓮弁文碗。80は青磁櫛描文碗。81は青磁蓮弁文皿。82は白磁皿。83～84は青白磁合子の蓋と身。85は緑釉壷であろうか。外面の釉が沸化し、線刻文様は不明瞭である。

86～87は山茶碗。86は常滑窯産、87は山茶碗窯のものである。

88～92は捏ね鉢。88・92は山茶碗窯産で同一個体と思われる。89・91は常滑窯産。90は渥美窯のものである。

93～98は常滑窯産の甕。93・97は同一個体である。

99～100は渥美窯産の甕。

101は転用硯と思われる。平瓦の凸面を楕円形に窪ませた簡易なものである。

102～103は砥石。102は仕上げ砥。岩石名は不明。103は須恵器片を転用したもの。上面に磨耗痕がみられる。

104はフイゴの羽口。破損面にも火熱を受けている。

105～111は北宋銭。左から順に咸平元宝（初鋳998年）、皇宋元宝（初鋳1039年）、元祐通宝（初鋳1086年）、左同、紹聖元宝（初鋳1094年）、左同（異字）、宣和元宝（初鋳1119年）。

112は骨製品。笄の未製品である。

113は土錘。軽量な小形品である。溝10からも同種の製品が出土した。

114～117は鉄製品。鉄釘、刀子であるが錆化が著しい。

118～120は瓦。118が平瓦、他は丸瓦である。

下層出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り410点・手捏ね689点・不明347点）、舶載陶磁器28点、常滑129点、山茶碗窯系陶器16点、渥美４点、手焙り６点、瓦60点、鉄製品12点、土製品３点、石製品１点、土師器９点、その他少量。

溝12……溝11の北側で検出された東西溝で、東端は調査区外へ続いている。上面幅80cm、底面幅40cm、確認面からの深さ50cmを測り、断面はU字形を呈す。

溝11より古く、主軸方位は、W－10°－Nを測る。

覆土は地山と近似しており、出土遺物はない。

溝13……溝11の南、調査区南壁近くで検出された浅く不明瞭な遺構で、同様の溝の一部は南壁際でも検出されている。上面幅20～50cm、深さ15cm程度であり、断面は浅いU字状を呈す。

土壇状遺構の基底面にあることから、溝11と同時期もしくは古い時期の遺構と考えられる。

主軸方位は、W－10°－Nである。

溝13出土遺物……遺物量は極めて少ない。

１はかわらけ皿。糸切り底である。

２は青磁蓮弁文鉢あるいは皿。体部内面に陰刻の蓮弁文を配している。

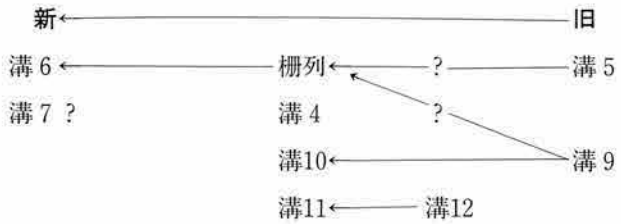
出土遺物の内訳：かわらけ皿（糸切り３点・手捏ね７点）、舶載磁器１点、常滑２点、瓦１点、土師器１点。

第四章　まとめ

近年、中世都市鎌倉の街割りを復原しようとする試みが進みつつあり、若宮大路を中心とした地域での発掘調査資料をもとに、大三輪龍彦氏をはじめとした多くの研究成果が公表されている。[註1] 計画的な都市づくりが行われた場合、建造物は道路によって規制を受け、道路と主軸を合わせている例が多いのは現在も同様と思われる。鎌倉市街地図をみると、本調査地点の位置は若宮大路から遠く、県道金沢・鎌倉線に接している。若宮大路を基準とした街並みは筋違橋で終わり、それより東の地域では、県道を基準とした街並みに変化していることが判る。

中世における筋違橋周辺の様子は、現在とどれ程異っているのか。本調査地点では、六浦路自体の検出はできなかったが、土地区画を示すと考えられる溝が発見され、当時の様子をおぼろげながらも知ることができた。

検出された遺構の切り合い関係を整理すれば、以下のような図式となる。縦に並記した遺構（例えば溝５と溝９）が同時期に存在したかどうかは不明であるが、少なくとも溝４・溝11・柵列に関しては同時存在の可能性が高い。



柵列の主軸方向は、西御門川沿いに白旗谷へ至る道（第一章参照）に平行した結果と推測され、溝11とその南側に接する土塁（築地）は六浦路に沿って設けられたものであろう。溝４と溝11が同時期と仮定すれば、なぜ両溝が接続していないのかが問題となる。おそらく、両溝間に多量のかわらけ皿を破棄した窪地が存在し、特別な意味を持った空間であったためであろう。（土塁・窪地に関しては、現在整理中）溝４・溝11・柵列の年代観は、13世紀初頭～中葉頃と考えられる。

溝６は相対的に新しい時期の遺構である。主軸方向は六浦路と平行するが、六浦路の北側地域が南北の小区画に分割され、前代に柵列で限られた西側へも区画が拡張されている。出土遺物からは13世紀中葉～後葉の年代が考えられる。

溝５・溝７・溝９は切り合い関係が明瞭でなく、出土遺物も少ない。主軸方向は他の東西溝と大きく異なっており、何に起因した区画であったのか現状では不明と言わざるを得ない。

既に発掘調査が行われた政所跡の２地点（雪ノ下三丁目966番１地点・同965番１地点）と本調査との位置関係を図17に示した。政所跡で検出された南北溝（小町大路溝）は少なくとも３回以上の掘り直しが行われ、13世紀初頭～14世紀末までの約200年間にわたって使用されている。本調査地点では100年以上存続した溝はなく、13世紀中葉を境として土地区画も変化している。また、政所跡の南北溝と主軸方向の一致する遺構も本調査地点では検出されていないことから、やはり、中世においても筋違橋を挟んで街割り構造が異っていたと考えられよう。

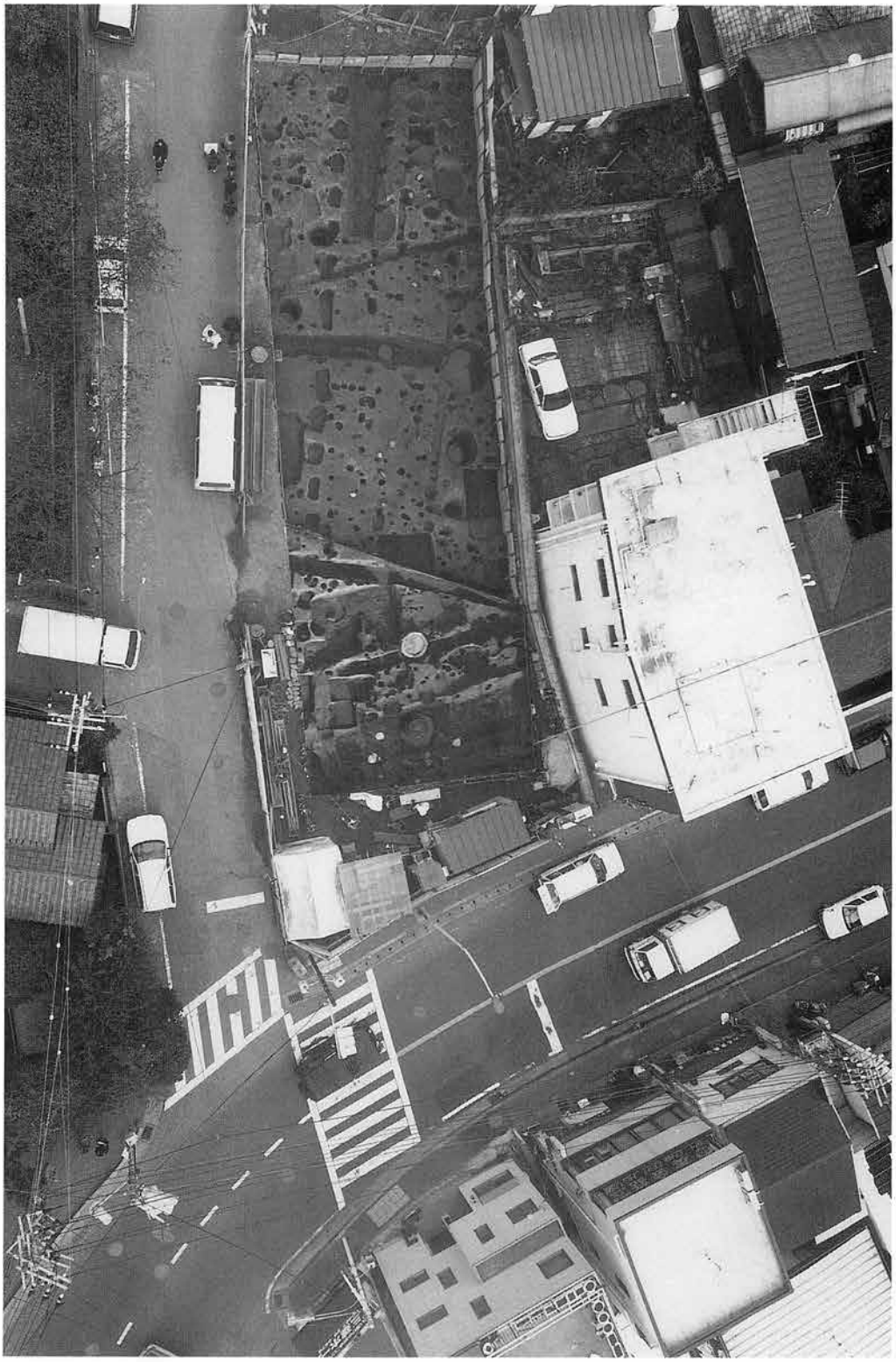
本報では時間的制約もあり、調査成果のごく一部を公表するに留まったことを付記しておく。

註１　大三輪龍彦　1986　「中世都市鎌倉の地割制試論」『佛教藝術』164号　毎日新聞社　斎木秀雄　1989「溝の流れが語る地形と街割」『よみがえる中世３』平凡社　馬渕和雄　1987「北条時房・顕時邸跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書３』鎌倉市教育委員会

註２　瀬田哲夫　1992　「政所跡－雪ノ下三丁目966番１地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』　鎌倉市教育委員会

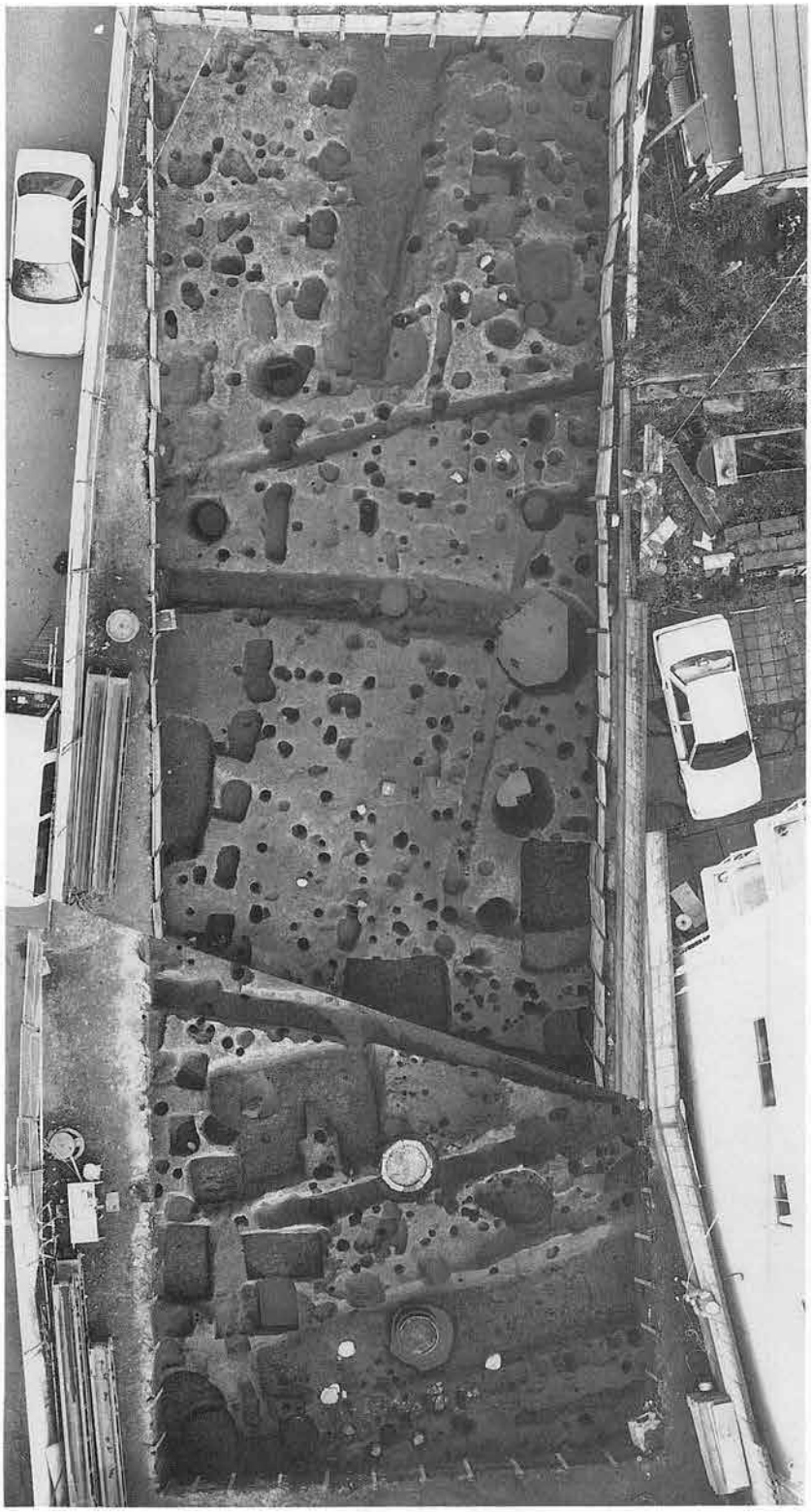
図17　近隣地点遺構対比図（1/500）

図版 1



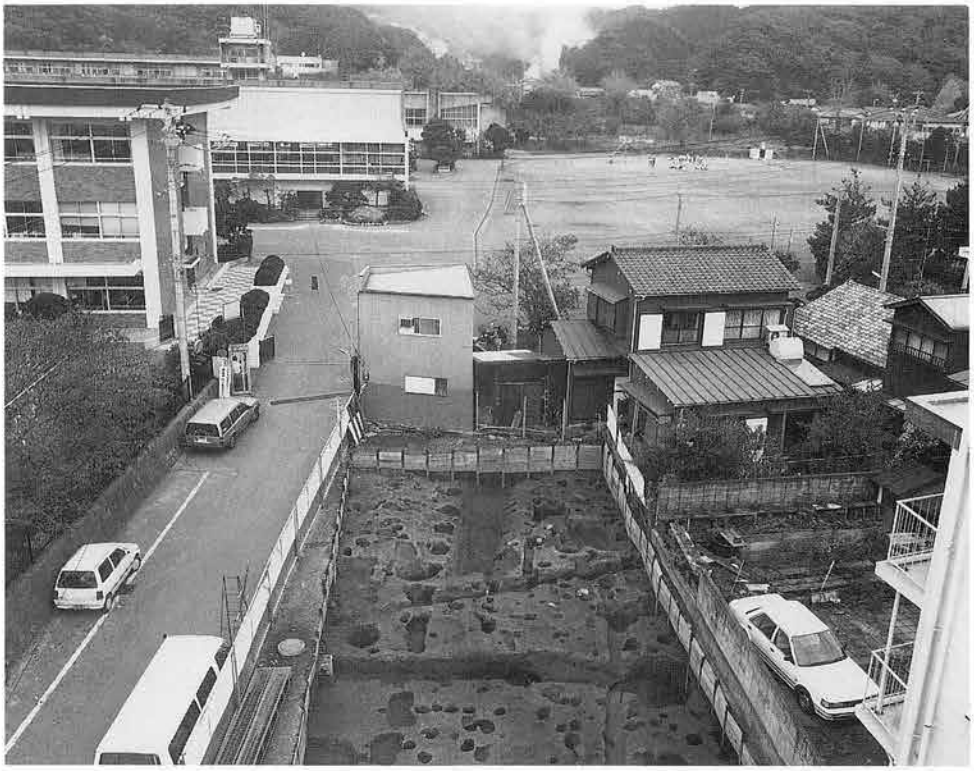
調査地点周辺（空撮・合成）

図版 2



検出遺構全景（空撮・合成）

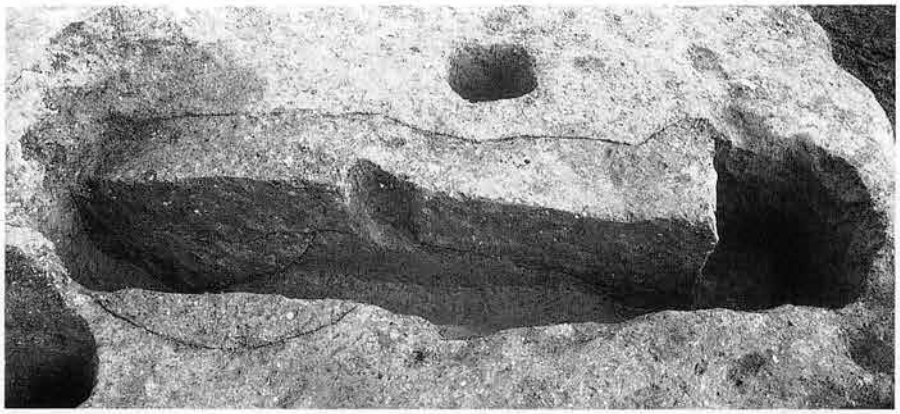
図版 3



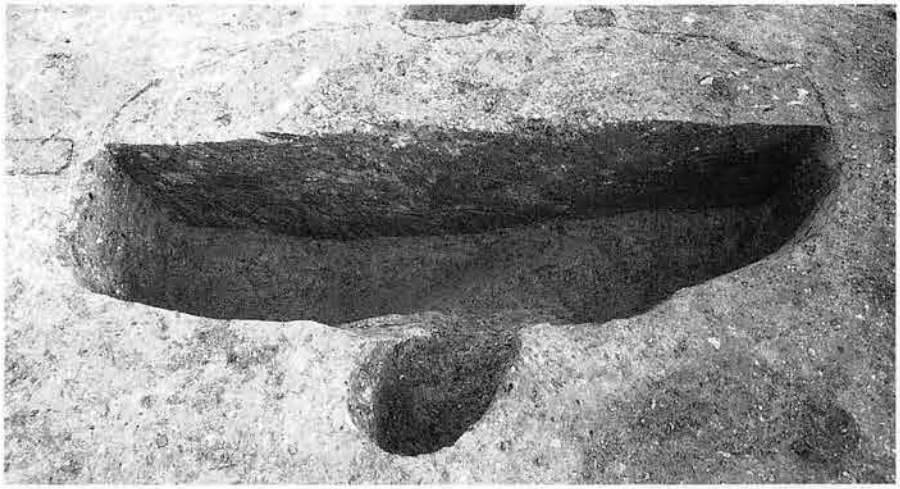
調査地点から北方を望む（空撮）

I 区全景・柵列ほか

図版 4



柵列ピットG



柵列ピットー

柵列ピットM

図版 5

溝 4 土層堆積状態

溝 4 完掘状態（北から）

図版 6

溝5 完掘状態（西から）

溝6 完掘状態（西から）

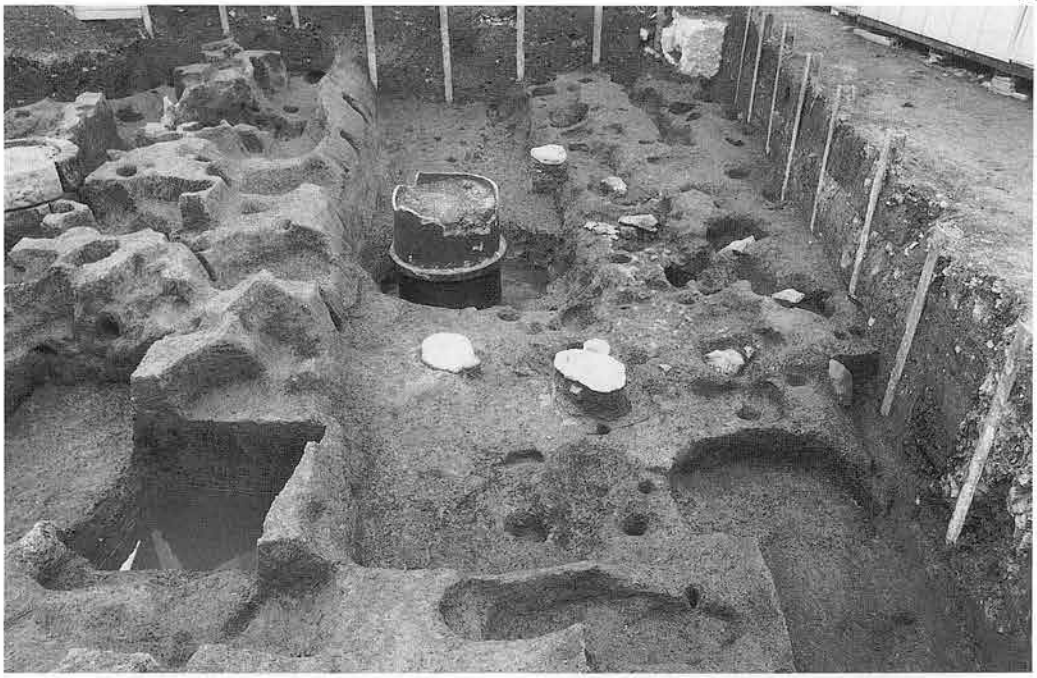
溝9 完掘状態（西から）

溝10 完掘状態（西から）

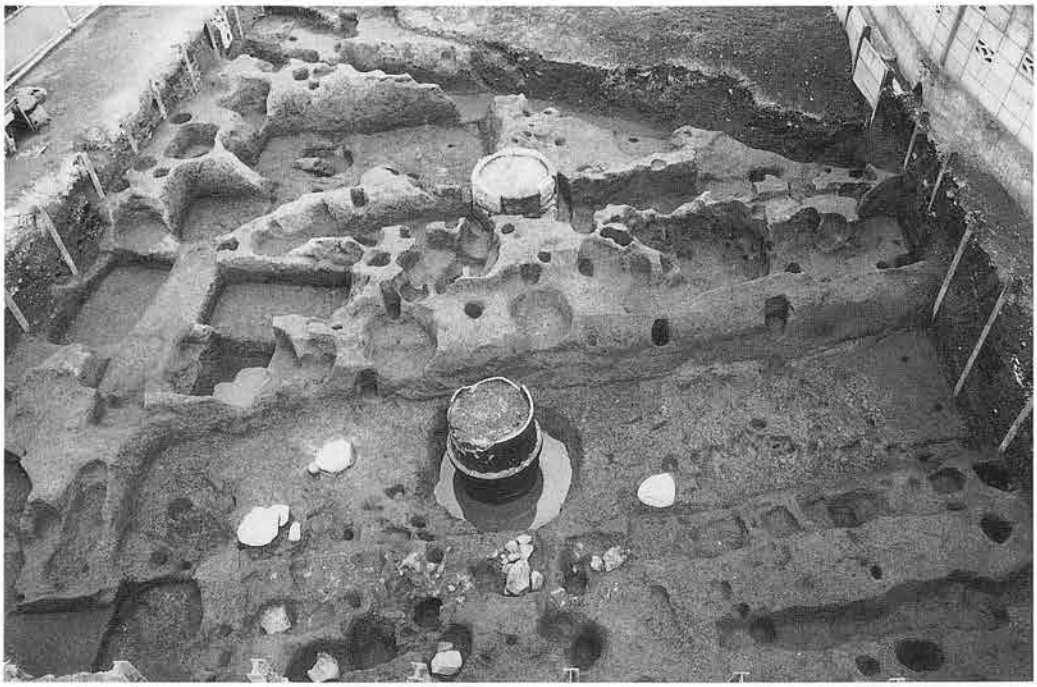
図版 7

溝11　土層堆積状態

溝11　完掘状態（東から）

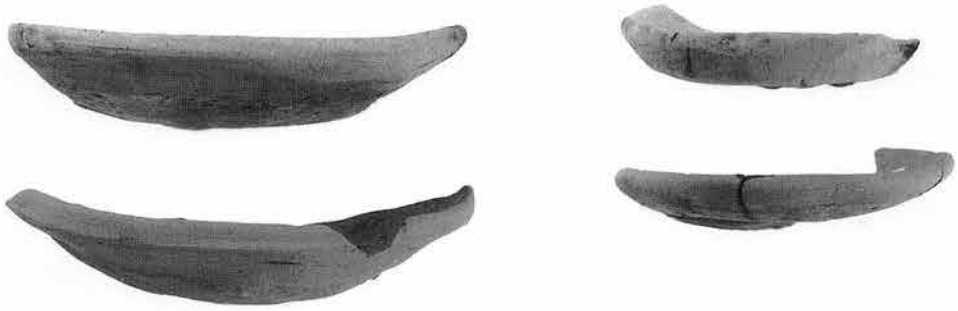


溝11　完掘状態（西から）



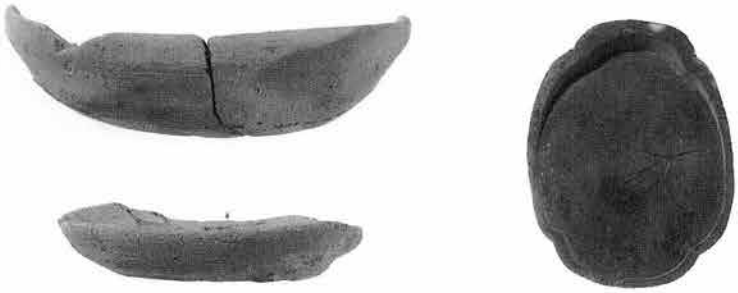
II区全景

図版 9



柵列ピット（かわらけ）

溝 4（かわらけ、鉄鍋）



溝 6
（かわらけ、硯）

溝11
（かわらけ、山茶碗、羽口）

8. 政　所　跡（No.247）

雪ノ下三丁目988番

例　　言

1．本報は鎌倉市雪ノ下三丁目988番（政所跡内）における住居併用店舗・共同住宅建設に伴う発掘調査報告書である。

2．発掘調査は調査対象面積220㎡のうち40㎡を国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施し、残りの面積を政所跡発掘調査団が調査を実施した。

調査期間は平成３年11月５日から平成４年２月17日までである。

3．本報の執筆は第３章第３節を田畑佐和子、その他の章は手塚直樹が分担し、編集は手塚・田畑が行った。

4．本報の資料整理は滝田薫、明木文吾、野本賢二が行った。図版製作は田畑が行い、滝田、明木、小柳津、山崎、大坪、上原の協力を得た。

5．本報に使用した写真は、手塚・田畑が撮影し、全景写真については木村美代治氏に撮影を依頼した。写真図版１の遺跡の航空写真は、政所跡（雪ノ下三丁目966番１地点・雪ノ下三丁目965番）で撮影されたものを借用し掲載した。

6．本報は国庫補助事業の発掘調査報告であるが、遺跡の関連性から遺構全測図に限っては、全調査対象範囲を掲載した。

7．調査体制は以下の通りである。

主任調査員　手塚直樹

調　査　員　田畑佐和子、小柳津シゲ子

調査補助員　滝田薫、野本賢二、上原恵美、明木文吾、山崎理香

協　力　者　菅野五郎、高井富三、（鎌倉市高齢者事業団）宮田真、瀬田哲夫（鎌倉考古学研究所）石丸運人に協力、御教示を賜った。（敬称略）

8．本遺跡の出土品等発掘調査資料は鎌倉市教育委員会が保管している。

目　　次

例　言……(166)
目　次……(167)
第一章　遺跡の位置……(170)
第二章　調査の経緯……(173)
第三章　検出された遺構と遺物……(175)
　第１節　上層で検出された遺構と遺物……(175)
　第２節　第１面で検出された遺構と遺物……(180)
　第３節　第１面かわらけ溜……(185)
　第４節　かわらけ溜内出土遺物……(229)
　第５節　第１面包含層出土遺物……(230)
　第６節　第２面で検出された遺構……(233)
　第７節　第２面の遺構と包含層出土遺物……(236)
第四章　調査の成果と問題点……(238)

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺……(171)
第２図　調査範囲とグリット配置図……(173)
第３図　上層遺構図……(176)
第４図　上層遺構出土遺物……(178)
第５図　第１面遺構全測図……(181)
第６図　第１面遺構出土遺物……(183)
第７図　かわらけ溜１上層検出遺構図……(186)
第８図　Ａ区出土かわらけ……(187)
第９図　Ｂ区出土かわらけ（１）……(188)
第10図　Ｂ区出土かわらけ（２）……(189)
第11図　Ｃ区出土かわらけ……(191)
第12図　Ｄ区出土かわらけ……(192)
第13図　Ｅ区出土かわらけ……(194)
第14図　Ｆ区出土かわらけ（１）……(195)
第15図　Ｆ区出土かわらけ（２）……(196)
第16図　Ｆ区出土かわらけ（３）……(197)

第17図　G区出土かわらけ（1）……(201)
第18図　G区出土かわらけ（2）……(202)
第19図　G区出土かわらけ（3）……(203)
第20図　G区かわらけ溜下層 ……(208)
第21図　G区下層出土かわらけ（1）……(209)
第22図　G区下層出土かわらけ（2）……(210)
第23図　G区下層出土かわらけ（3）……(211)
第24図　G区下層出土かわらけ（4）……(212)
第25図　G区下層出土かわらけ（5）……(213)
第26図　G区下層出土かわらけ（6）……(219)
第27図　G区下層出土かわらけ（7）……(220)
第28図　かわらけ溜2検出図……(224)
第29図　かわらけ溜2出土かわらけ……(224)
第30図　かわらけ溜3検出図……(225)
第31図　かわらけ溜3出土かわらけ……(225)
第32図　かわらけ溜4検出図……(226)
第33図　かわらけ溜4出土かわらけ……(226)
第34図　かわらけ溜内出土遺物……(229)
第35図　第1面包含層出土遺物……(231)
第36図　第2面遺構全測図……(234)
第37図　第2面出土遺物……(235)

表　目　次

表1　A区出土かわらけ法量表……(187)
表2　B区出土かわらけ　〃　（1）……(188)
表3　B区出土かわらけ　〃　（2）……(190)
表4　C区出土かわらけ……(191)
表5　D区出土かわらけ……(192)
表6　E区出土かわらけ……(193)
表7　F区出土かわらけ　〃　（1）……(198)
表8　F区出土かわらけ　〃　（2）……(199)
表9　F区出土かわらけ　〃　（3）……(200)
表10　G区出土かわらけ　〃　（1）……(204)

表11　G区出土かわらけ　法量表　（2）……(205)
表12　G区出土かわらけ　〃　（3）……(206)
表13　G下層出土かわらけ　〃　（1）……(214)
表14　G下層出土かわらけ　〃　（2）……(215)
表15　G下層出土かわらけ　〃　（3）……(216)
表16　G下層出土かわらけ　〃　（4）……(217)
表17　G下層出土かわらけ　〃　（5）……(218)
表18　G下層出土かわらけ　〃　（6）……(221)
表19　G下層出土かわらけ　〃　（7）……(223)
表20　溜2出土かわらけ　〃……(224)
表21　溜3出土かわらけ　〃……(225)
表22　溜4出土かわらけ　〃……(226)

写真図版目次

PL 1　航空撮影・調査地点遠景・調査前状況…(243)
PL 2　第1面かわらけ溜検出状況……(244)
溜1上部出土状況
PL 3　溜1検出状況　溜2検出状況……(245)
溜3検出状況　溜4検出状況
PL 4　溜1（G区）下層出土範囲状況…(246)
溜1（G区）下層出土状況拡大
PL 5　第1面全景（南・東・西方向から)·(247)
PL 6　溝Ⅰ遺構上層……(248)
溝Ⅰ遺構上層と側板痕跡状況
溝状遺構Ⅰ
PL 7　第2面全景（南・東から）……(249)
PL 8　溝Ⅰ遺構下層杭列（西から）……(250)
溝Ⅰ遺構下層杭列（南から）
畝状遺構北側（東から）
PL 9　畝状遺構南側（東から）……(251)
第2面溝Ⅰ（東西溝）（西から）……(252)
PL10　土壙2壁面中間部物曲痕出土状況
布状遺物出土状況
調査区南壁土層状況
PL11　かわらけ溜出土静止糸切りA……(253)
PL12　かわらけ溜出土静止糸切りB……(254)
PL13　近代撹乱土壙出土遺物……(255)
かわらけ溜内出土遺物
PL14　第1面包含層出土遺物……(256)
PL15　第2面遺構・包含層出土遺物……(257)

第一章　遺跡の位置

調査地点は鎌倉幕府の政所跡の一画に位置する。政所は東側を小町大路、西側を鶴岡八幡宮、南側を横大路、北側を八幡宮の唐門から筋替橋に出る路に囲まれた部分と考えられている。政所はこれまで3ケ所調査がおこなわれ、第2次、第3次の調査から、現在の小町大路が当時と比べて東へ移動している事が確認され、当時の路は現在の横大路とほぼ直交すると推定されている。そうすると西側の八幡宮との境がほぼ移動していない事が判っている。そうすると、政所の南側、横大路に面した巾は約90mと推定される。南北の長さは140m余りになる。

政所の初見は「吾妻鏡」文治元（1185）年九月五日の条「小山有高の押妨を停止せしめ、もし山緒あれば政所に参上せしめ」の記載があり、元暦元（1184）年には公文所と共に設置されたと推定される。[註1]

位置についても「吾妻鏡」建暦三（1213）五月二日の条に「和田義盛の兵が大江広元の邸の門に到って矢戦をし、そののち横大路に到った。御所の西南政所の前で御家人らがこれを支えた」とある。そして横大路に注して「御所の南西の道なり」とあり、これにより調査地点を含むこの一画が政所と推定している[註2]。

文治三（1187）年四月十四日の条「雨が降り、雷鳴がして霹靂が政所の因幡前司広元の廏の上りに落ち馬三疋斃れた」

建久二（1192）年正月十五日「政所において吉書始。」

承久元（1219）年二月　郭内一宇も残さず焼失

嘉禄元（1225）年十二月　新御所（宇津宮辻子幕府）上棟と同日に政所及び御倉を破壊。

仁治元（1240）年三月　政所において吉書始。

寛元二（1244）年十二月廿七に政所火事、寛元四（1247）年十一月造営

弘長元（1261）年三月十三日政所の郭内失火。庁屋（政所）、公文所、問注所の屋炎上。

弘長元（1261）年十一月十六日政所庁屋等上棟

正和四（1315）年焼失

正中二（1325）年焼失

元弘三（1333）年5月焼失

嘉禄元年に大蔵から宇津宮辻子への幕府移転に伴い政所及び御倉を破壊したとあり、政所は宮津宮へ移転し、仁治元年に政所で吉書始があり、この間14年間の空白があるが、市史では「政所は元暦以来御所とは域を別にしていたからである。寛元二年十二月二十六日政所はまたも焼けているが、それは経時、時頼の邸が失火したためだとある。そして御所が焼けたことは何等所見がない。政所は依然として元暦以来の地にあったと解すべきである。」と述べている。今回の調査では政所が移動したか、そのまま存続しつづけたかは明らかにすることはできなかった。

1．政所IV（雪ノ下三丁目 988 番地点）
2．政所 I（雪ノ下三丁目 987 番 1.2 地点）
3．政所II（雪ノ下三丁目 966 番 1 地点）
4．政所III（雪ノ下三丁目 965 番地点）
5．雪ノ下一丁目 374 番 2 地点
6．雪ノ下一丁目 371 番 1 地点
7．雪ノ下一丁目 372 番 7 地点
8．雪ノ下一丁目 369 番地点
9．雪ノ下一丁目 369 番他地点
10．雪ノ下一丁目 419 番 3 地点
11．雪ノ下一丁目 395 番地点
12．雪ノ下一丁目 432 番 2 地点
13．雪ノ下一丁目 293 番 1 地点
14．雪ノ下一丁目 271 番 1 地点
15．雪ノ下一丁目 273 番ロ地点
16．雪ノ下一丁目 274 番 2 地点
17．雪ノ下一丁目 233 番 9 地点
18．小町二丁目 366 番他地点
19．雪ノ下一丁目 210 番地点
20．雪ノ下三丁目 606 番 1 地点
21．鶴ヶ岡八幡宮境内遺跡（研修道場用地）
22．鶴ヶ岡八幡宮境内遺跡（源平茶屋）

第 1 図　遺跡の位置と周辺

調査地点周辺ではこれまでに3地点が調査されている。

第1地点では横大路側溝と土塁、掘立柱建物7棟が発見され、このうちの1棟は5間(柱間210cm)×5間以上の大型建物であり、廊状の建物もある。これらの建物の何棟かは今回の調査と関連して来ている。第2地点では小町大路、側溝、柵列溝が発見されている。ここでは調査区が内郭部分の西側のはずれの狭い範囲でしか調査できず掘立建物の規模は確認できていない。第3地点では第2地点の北隣に位置し、小町大路、側溝が発見されている。

政所の中央部分の調査はおこなわれていないが南側では溝と土塁、柵、建物、東側では溝、柵列が発見されている。南側では土塁の跡が確認されているが、東側では確認されていない。第2地点では側溝のすぐ脇までかわらけ溜りが広がり、このかわらけの時期は東側土塁の存在した時期と同じであり、もともと東側には土塁が存在しなかった可能性が高い。また側溝のすぐ脇に柵列が確認されている。本調査では土塁の痕跡を認める事はできなかったが、第1地点の土塁が続くと思われる所には柱穴などの遺溝はほとんどなく空白地になり、更に土塁の裾あたりと考える所でかわらけ溜りが止まっているため土塁が存在した可能性が高いと思われる。横大路を挟んで反対側の北条泰時、時頼邸の調査では横大路南側溝が発見され、政所側の側溝との隔間を測ると横大路の道路巾が約18m（6丈）と推定されている。

註

註1 高柳光寿『鎌倉市史総説編』1959年、吉川弘文館

註2 同上

参考文献

菊川英政「北条泰時・時頼邸跡　雪ノ下一丁目935番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』鎌倉市教育委員会1989年

手塚直樹　宮田真　『政所跡』政所跡発掘調査団1991年

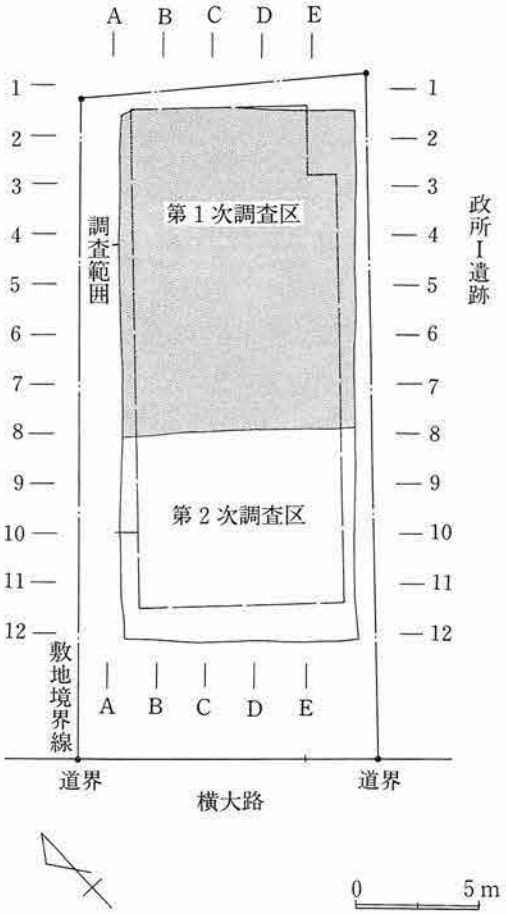
瀬田哲夫「政所跡（No.247）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書8』鎌倉市教育委員会1992年

第二章　調査の経緯

調査は店舗兼用住宅建設に伴う緊急発掘調査としておこなわれた。調査対象面積は180㎡あり、自己用住宅部分を対象に調査面積の1/3を国庫補助事業調査としておこない、残りの部分は「政所跡発掘調査団（団長手塚直樹）が実施した。

本調査をおこなう前に試掘調査を実施している。今回の調査地点の東隣りでは1990年１月４日～２月28日まで調査[注1]がおこなわれ、表土層がから約80㎝あまりの近・現代の埋積層があり、その下約10㎝～20㎝の包含層が存在する事が確認されていたが、試掘調査でも同様の結果を得たため、土砂搬出の関係から第１次調査・第２次調査に分け、北側（奥）から機械により表土を除却した。

測量の基準となるグリッドは道界を基準点とし２ｍ方眼に区画した。（第２図）方位はN45°Eである。



第２図　調査範囲とグリッド配置図

表土除却後に手掘りで包含層を精査したが、予想以上に明治以降の撹乱が多く入っているのが確認された。調査区北側では近世の水田遺構ではないかと思われる落ち込みが発見された。江戸、明治年間の古絵図、地図を見るとどれも道沿いには家が建っているが、家の裏は田、畑地となっている。これは市街地遺跡を調査するとしばしば見られる傾向である。このため第１面上層ではほとんど遺構を発見する事はできず、北側の一部で水田に切られた狭い範囲の土丹敷を発見できただけであった。この第１面上層も４ラインより南側で非常に硬く締った焼土と、大量のかわらけ溜りが発見されているにすぎなかった。

この第１面の焼土の下には砂層と黒色粘質土が入りこみ、第２面を形成しているように思われたが、土層面を詳細に検討してみると第１面で発見される遺構は上層からの彫り込みであり面としては形成しているようには思われずこれを上層面とした。また、かわらけ溜りに関しては第１面に投棄されたものが、火事場整理的に周辺に焼土が捨てられる可能性が高く、かわらけ溜に関しては１面上に捨てられたものが第１面上層を検出中に発見されたと思われる。

第１面では掘立柱建物、横大路側溝、土壙、溝などが発見され、このうち掘立柱建物の何棟かは政所Ⅰの調査で発見された建物の延長に当たると思われる。

第２面でも土壙、掘立柱建物、横大路側溝が発見されている。ここでも政所Ⅰで発見された掘立

柱建物の延長と思われるものが何棟か発見されている。第１面もそうであったが、第２面でも南側の横大路側溝から北側の９ラインの間は遺構が他の地域（北側）と比べて希薄である。この区域は政所Ｉの調査では土塁が存在していたとされる所で、今回は上層からの覚括がひどく土層図を見ても明瞭な積み上げた層を認める事はできなかった。

10ラインの東側に非常に大きな柱痕とそれに関連すると思われる同様の柱穴を発見している。柱は一辺約１尺（30cm）×７寸（21cm）余りあり、これまでに市内で発見された中世の柱としては最大であり、この地点で土塁の痕跡が見い出せなかった事を考えてみると、この柱間は約１尺（３m）あり、門あるいは側溝の上にかかる橋の可能性があり、ここが通路として機能していた可能性もある。

４ラインから６ラインにかけて1.4m×0.3m余りの畝状遺構がある。内からは遺物は発見できず、第２面の時期あるいはそれ以前と考えられるが、同様な遺構は横小路周辺（大蔵幕府南東）から発見されている１例だけであり、ここも遺物は発見されていないが12世紀末かそれ以前としている[註2]。

本調査地点は政所Ｉの隣りにあたり、建物、側溝など関連する遺構が発見された。また更に調査区外に延る遺構もあり政所郭内であることを想像するに足る多くの遺構を発見できた。

今回の報告は国庫補助分のみであるが、同一地域内で連続して調査をしながら区域が分断されるのを防ぐため原因者部分の遺構図もあえて掲載した。原因者区域は８ラインより南側に当る。このため側溝などは今回では詳しくは報告をしない。この地区に関しては今年度中に報告する予定である。

註

1　手塚直樹、宮田真「神奈川県鎌倉市　政所跡」政所跡発掘調査団　1991年３月

2　筆者実見。

第三章　検出された遺構と遺物

隣接の政所Ｉの調査と同様に上層は近・現代の堆積層と撹乱がひどく上層では良好な遺構は発見できず、取りあえず面ではない確実に残る包含層の上層で一回遺構検出作業に入った。ここでは近代～15世紀以降と思われる遺構を発見している。生活面は２枚発見され、これは政所Ｉと同様であった。政所郭内と言った遺跡の性格から日常生活用品などの遺物は少なかった。

政所の性格を表わす製品としては、一括投棄されたと思われる約3000枚のかわらけ溜りである。この他には目立った遺物はなく、横大路側溝から多量のかわらけ、折敷、箸などが発見されている。また最下層からは政所初期と見られる同安窯系の青磁皿、龍泉窯の劃花文碗が出土している。

第１節　上層で検出された遺構と遺物。(第３図)

既に述べている様にここでは目立った遺構は発見されていない。調査区北側で水田状の遺構が発見されただけである。

上層遺構の所でかわらけ溜りの範囲を出しているが、第１面でこの範囲を出すと繁雑になるので上層遺構の所で示している。

1　水田遺構

水田遺構は調査区の北側で発見された。遺構内には床土と思われる青海色に近い粘土が入り、その粘土に混入して、近世～近代の遺物が発見されている。この様な水田遺構は市内の調査では道路より離れた所、家屋の裏側と思われる所からしばしば発見されている。それぞれが狭い範囲であるため１枚がどの程度の広さを持っていたかは確認されていない。深さは約30cm余りである。

2　土丹敷遺構

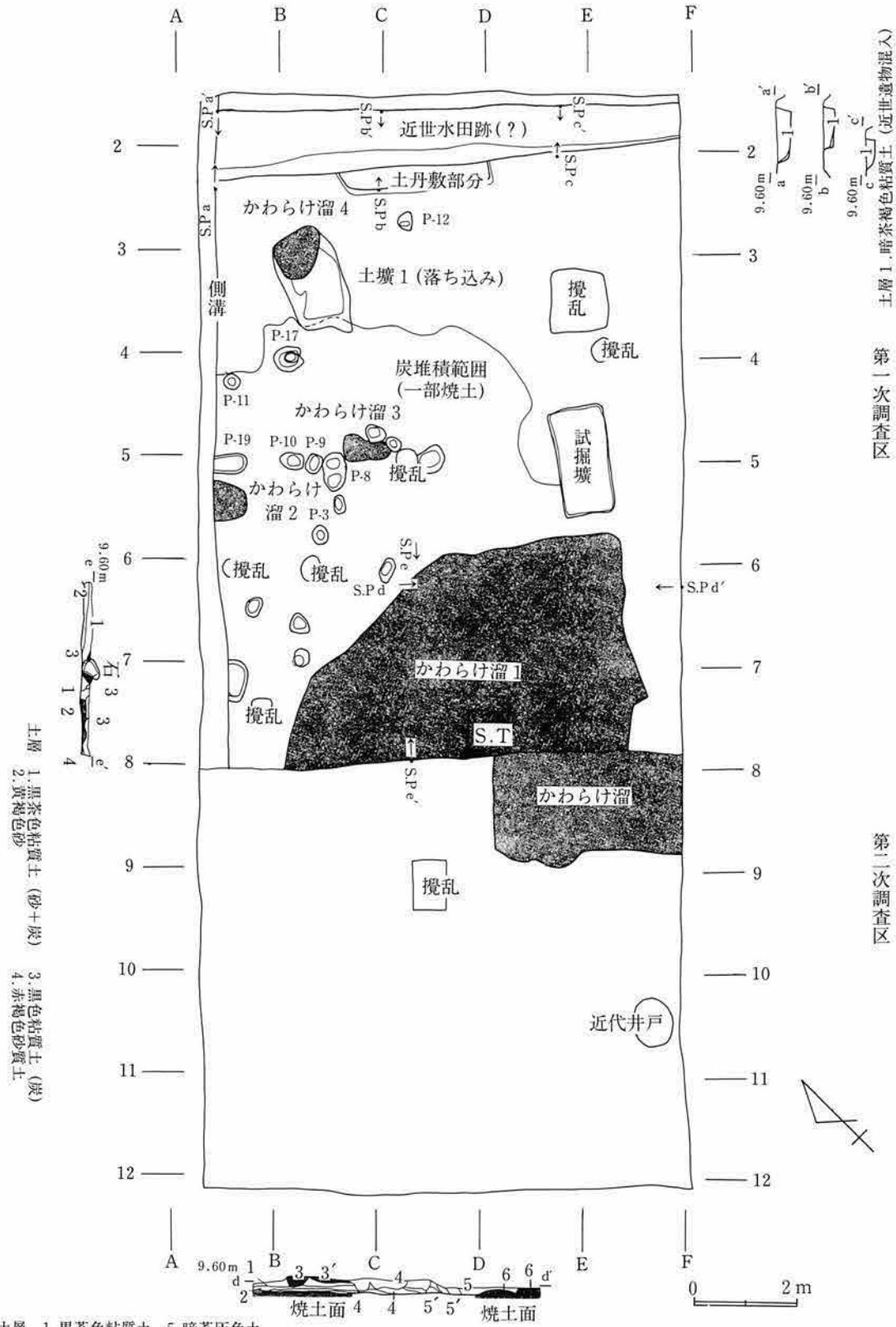
調査区の北側中央付近に位置し、水田遺構に切られている。平面方形を呈する。東西の一辺は約３ｍ余りあり、南北は不明である。割合い多き目の土丹が厚さ約10cmで敷かれている。政所跡のこれまでの調査（Ｉ次～Ⅲ次）では市内で発見されている土丹を叩き締めた厚い整地層は確認されていない。郭内の中心地域を調査していないためかもしれない。いずれにしても政所の調査は周辺部の狭い範囲でしかなく不明な点が多い。

3　土壙１

調査区の北西側に位置する。東西約1.2m、南北約2.2mの南東の隅が突出した長方形を呈する。深さは約20cmであり、底の平面形は不正形をしている。土壙の北側には下層のかわらけ溜りが確認されている。

4　掘立柱建物

調査区の西側に位置する。この面では南東隅の柱穴が図示されていないが、第１面でこの位置に他の柱穴と重複して発見されている。柱穴は切り合関係から、新しい方は上層で発見された柱穴と



土層 1.黒茶色粘質土 5.暗茶灰色土
2.黄褐色砂 6.黒灰色粘質土
3.黒色粘質土 (炭化物+かわらけ粒+焼土)
4.暗茶褐色土 (炭化物+かわらけ粒)

第3図 上層遺構図

覆土など似ているため、同時期と考えてよさそうである。この掘立柱建物は南、北、東方向へは延びない。可能性としては西側であるが、調査区外になってしまう。柱穴は径は大きいもので約70cm、小さいもので約60cmと大きく、深さは約30cmである。柱間は4mと広い。柱穴内の覆土から実測可能な遺物はなく、新しい遺物もなく、小片のかわらけから14世紀後半頃から15世紀代と考えられる。

この他に柱穴は発見されているが建物や柵を構成するものはなかった。

調査区の南東で1960年代まで使用していた凝灰岩の枠を持って丸井戸が発見されている。井戸内からは板ガラス、丸釘が出土している。

出土遺物

かわらけ、瀬戸、有田、唐津、銭、火鉢など中世から近代にかけての遺物が出土している。

1　かわらけ（図1～37）

小型（1～27）と大型（28～37）がある。1～5は器壁が薄く、底部から口縁部にかけて少し丸味を持って立ち上がる近世のかわらけである。6～10は口縁部が少し厚くなり、直立する。11は内底の縁に強いナデが入り、口縁部は少し外反する。12～22は胴部から口縁部にかけて丸く立ち上がる。23～26は静止糸切りである。23は器高が低く内底の周縁部だけへこんでいる。27は手づくねのかわらけである。

28～34は胴部から口縁部にかけて丸く立ちあがる。35～37は静止糸切りである。

上層のかわらけは近世から中世までのかわらけが混存しているが、手づくねのかわらけは27の1点だけであった。

土製品（38）

糸きりかわらけの底部の周辺を丸く磨って加工している。径は約3.6cmである。

瀬戸（39～40）

39は底径8cmの菊皿。内、外面に菊花の稜線が残る。釉は黄色を呈し、胴下部までかかる。胎土は黄白色を呈する。

40は底径5.6cmの皿。現存部は無釉であるが、縁釉の小皿と思われる。胎土は灰白色を呈し、外底は糸切りである。

肥前系染付（41、42）

41は口径11.4cmの染付碗。外面に柏花文をダミ技法で描く。胎土は白色を呈し、いわゆる磁質ではない。42は底径11.8cmの鉢と思われる。内底面に文様を描くが不明。高台外脇に2本の線を引く。釉は畳付を除きかけられ、胎土は41と同じである。

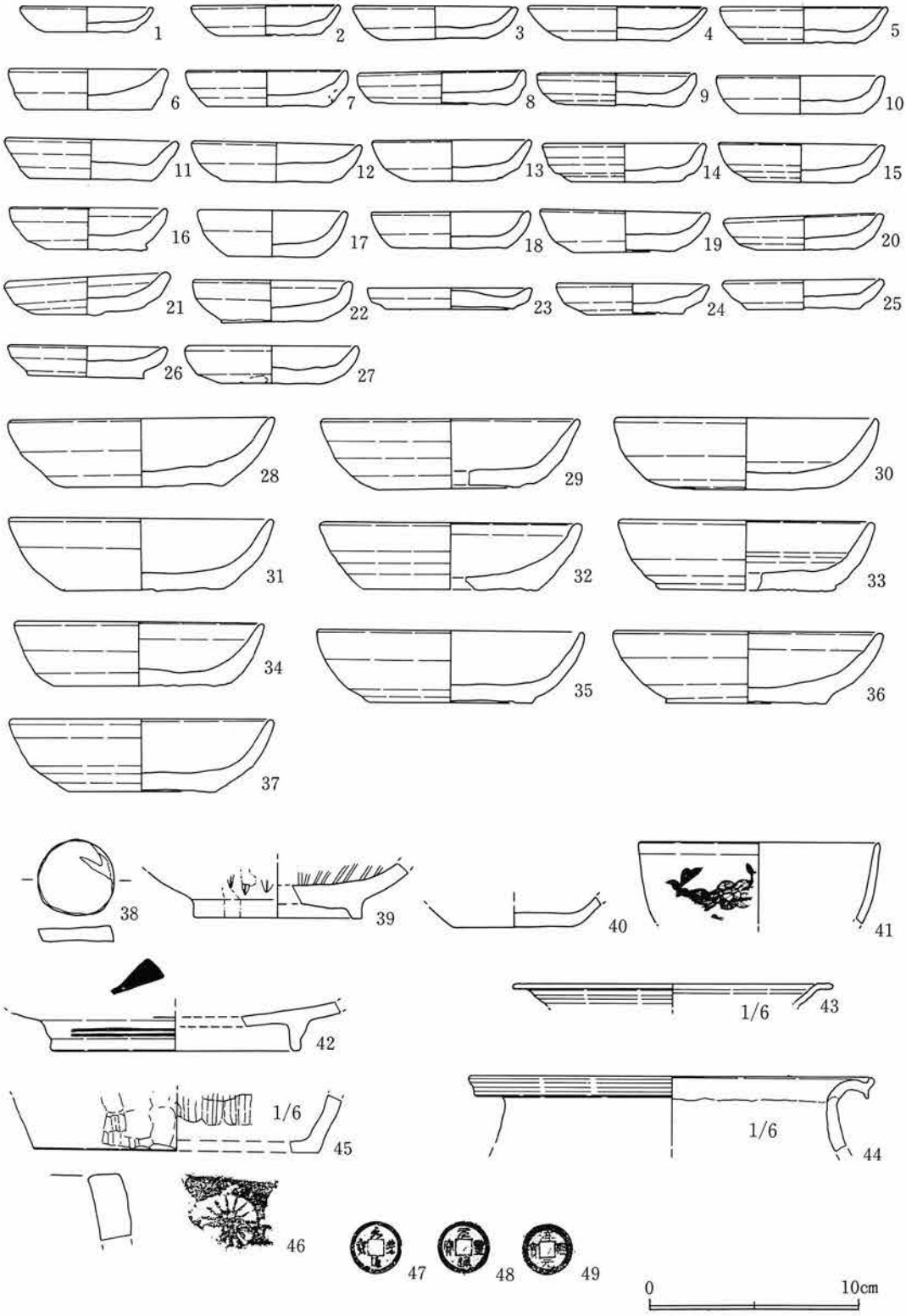
唐津（43）

口径30.2cmの鉢。釉は暗緑色を呈し、部分的に白くなる。胎土は暗灰色を呈する。

常滑（44）

口径39.4cmの鉢。口縁部は大きく外反し、端部はT字状になる。

火鉢（45、46）



第 4 図　上層遺構出土遺物

45は底径32cm。内、外面に木口状工具による調整痕が残る。表面はよく燻されている。

46は口縁部に菊花文を型押しする。

銭（47～49）

47、48は元豊通宝、初鋳、1078年、47は行書、48は楷書。

49は淳熙元通、初鋳、1174年、楷書。

第２節　第１面で検出された遺構と遺物

第１面は上層遺構確認面から50cm前後掘り下げた所から発見された。上層で確認する事ができたかわらけ溜りは大きな広がりを見せ、飛地的に北側と西側にも発見された。第１面までの覆土はほぼ全域で10cm余りの硬い焼土が広がり、その下に砂層、粘質土が広がる。この焼土は表面が非常に硬く、相当強い火災のための地表面が硬化したのではないかと考えていたが、焼土を除却し始めるとボロボロの壁土の様な状態で、とても自然堆積や整地層とは考えられず、郭内の隅にまとめて捨てたと判明した。これは土層図により明らかである。政所Ｉではこの焼土層は確認されていないが、下層の砂層と粘質土は確認されている。

第１面ではまずかわらけ溜りの精査をした。上層はまとまりが悪く、多くは土圧でつぶされた状態であったが、下層は積み重ねて倒れた状態で発見され、一単位がおおよそ何枚であるかがわかった。また溜り内からは銭も多く見つかった。

このかわらけ溜りから鉄製鋤先が一点見つかり、周辺の厚い焼土などから、政所郭内の隅で粘土を採掘し政所専用のかわらけを焼成していたのではないかと考えた。この事はここで発見されたかわらけが政所郭内[註1]でしか多量に発見されていない静止糸切りのかわらけだからである。政所Ｉ次～Ⅲ次の調査でも同様であり、周辺地区の「大蔵幕府周辺地域（図１の20)」[註2]、「北条泰時・時頼邸跡（図１のII)」[註3]からは１点も出土していないからである。非常に特徴ある技法と形態をしている。

遺物はほとんどかわらけだけであり他に瀬戸、常滑、舶載陶磁、金属製品が少数ではあるが出土しているにすぎない。

１　掘立柱建物Ｉ

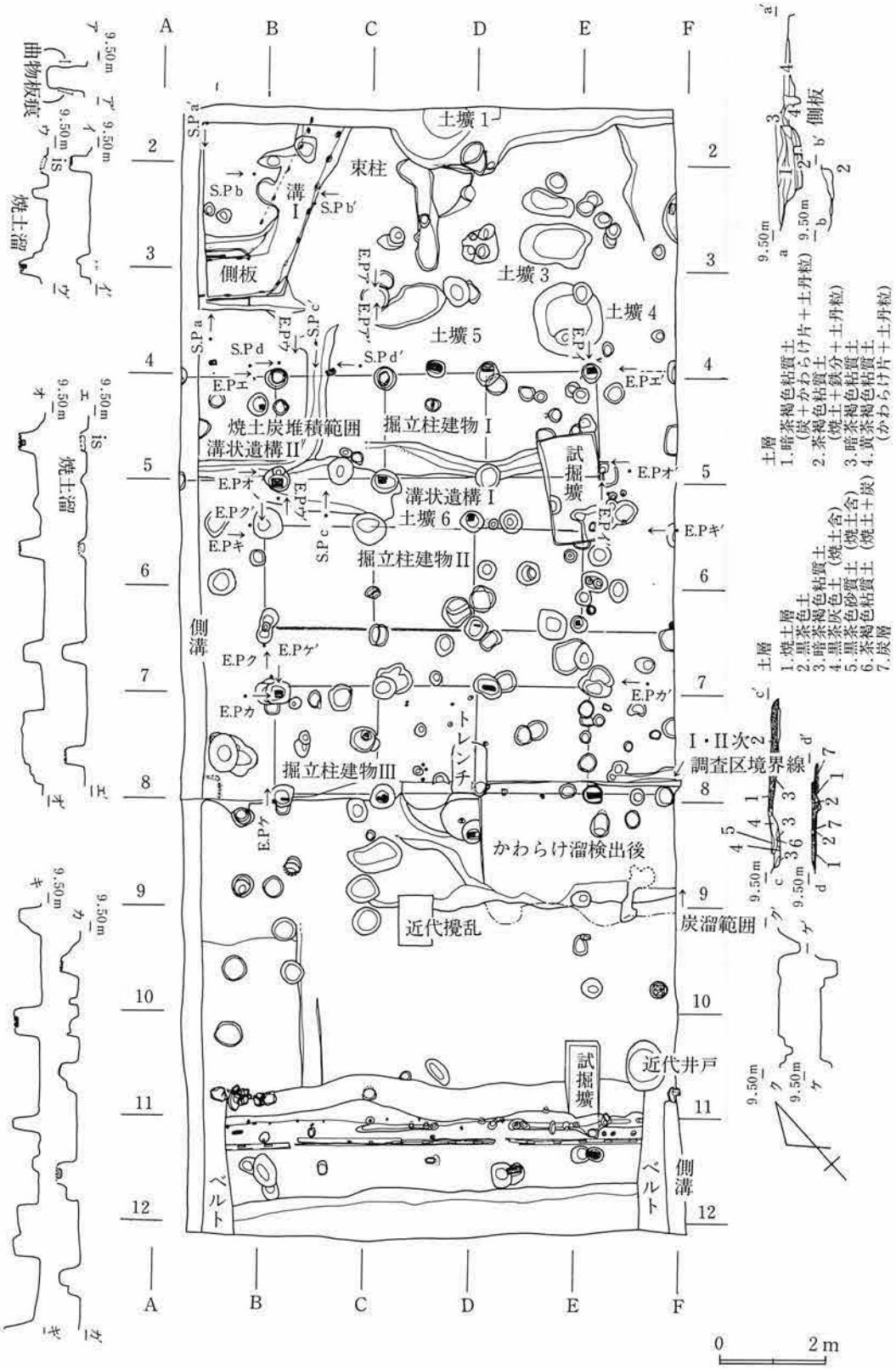
調査区の４ラインから５ラインにかけて東西に延る東西五間以上、南北１間の長い廊状の建物である。この建物は政所Ｉの調査の第１面で発見されている東西４間、南北１間の建物の延長と考えられる。１次調査と今回の調査の未掘地域の距離を計るとここには２間分あり、今回の分と合わせると10間になる。この建物は東西に更に延長するようであるから、長屋あるいは廊として考えた方が良いであろう。

柱間は２ｍあり、径は約40cm～50cm余りあり、深さは約50cmで１次調査とほぼ同じ規模である。それぞれは底に礎板を入れているのも共通している。

この建物は建て代え修理がおこなわれている可能性がある。それは北側柱列の一番西側の柱穴とその東隣りの柱穴内に河原石が置かれていたためである。河原石のレベルは遺構検出面からわずかに下がった所であり、この礎石を取り除いた下からも礎板が発見されているからである。

２　掘立柱建物II

掘立柱建物Ｉの約0.8m南側に平行するように建っている。南北の柱列は少しづれている。柱間は東西３間、南北１間の廊状の建物である。柱間の距離は２ｍあり、柱穴の径は60m～30cmと統一さ



第5図　第1面遺構全測図

れてはいない。この建物が更にＩと同様となるかは１次調査では確認されていないので不明である。

Ｉ次の報告では南側の遺存状態は極めて悪く第１面の南側は図面に載っていない。また遺構が検出された地区の南側も状態が悪かったため、発見されなかった可能性もある。柱穴内には礎板が残るものもあるが、遺存状態は悪い。

3　掘立柱建物Ⅲ

掘立柱建物Ⅱの約１ｍ南側に平行する位置に建っている。南北の柱列は少しづれている。Ⅱと同様に東西３間、南北１間の廊状の建物である。柱間距離はＩ、Ⅱと同じ２ｍであり、柱穴の径は約40cm余り、深さは約40cmと統一している。柱穴の底には礎板が残るものが多い。この建物も第１次調査では発見されていない。

この３棟の建物のうちＩに関しては第１次調査の建物が延びている事を指摘することができるがⅡ、Ⅲに関しては不明である。ＩとⅡに関しては建物間の距離が近すぎ同時存在は考えにくい。ⅡとⅢは約１ｍの距離があり同時存在した可能性があるが、南北軸がずれるので同時存在は無いであろう。ＩとⅢに関しては約４ｍの距離があり可能性はある。

柱穴からはかわらけの小片が発見されているが小片で実測できる製品はなかった。

4　土壙１

調査区の北側壁の所で発見された。東西約２ｍ余りあるが、排水の側溝で壊され正確な径は不明である。底径は約80cmの円形を呈する。深さは約45cmである。

出土遺物(1～7)

かわらけが多量に含まれていた。実測可能な製品は少なくほとんど小片であった。常滑片も含まれていたが、胴部ばかりであり時代判定できるものは少なかった。

１は口径6.6cm、器高1.8cm、底径4.6cm、器壁が厚い。

２は口径9.1cm、器高２cm、手づくねである。

３は口径13.4cm、器高3.7cm、底径８cm。

４は口径12.2cm、器高3.5cm、底径6.1cm。

５は口径12.6cm、器高3.6cm、底径7.6cm。

６は口径14.4cm、器高４cm、手づくねである。

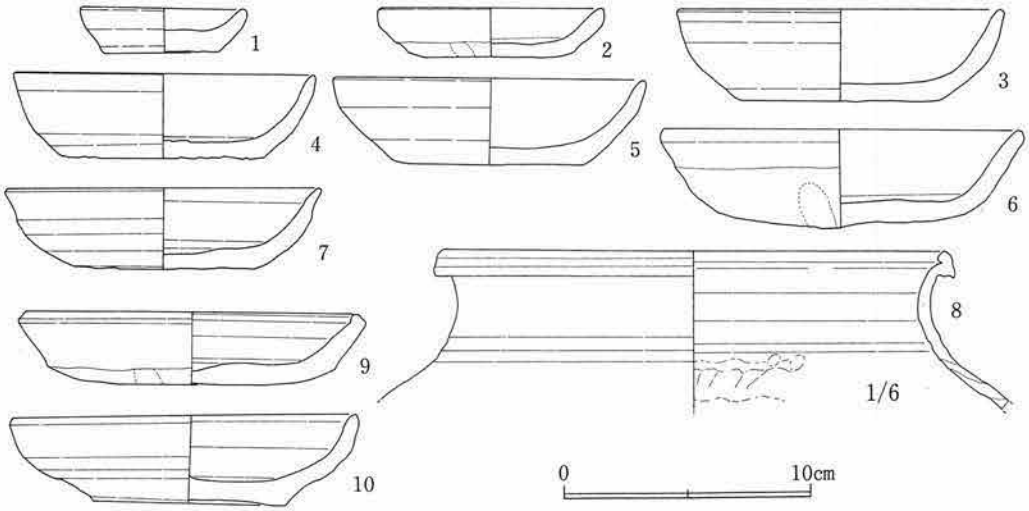
７は口径12.6cm、器高3.3cm、底径7.2cm。

4　土壙２

調査区の北西側、Ｃ－３に位置する。直径50cm、深さ70cmの正円に近い形状である。この土壙には壁に密着して曲物が発見された。曲物は板が薄く、遺存状態が悪かったため取り上げる事はできなかった。高さは約30cmあったと思われる。底板はなかった。土壙のほぼ中間の位置にあたる。

出土遺物（８）

口径40.4cmの常滑甕。口縁端部が上方に折れ曲がる。



第6図　第1面遺構出土遺物

5　土壙3

調査区の北東側、D－2に位置する。東西に長い不整楕円を呈する。東西約1.2m、南北約90cm、深さ約30cm。遺物は出土していない。

6　土壙4

調査区のD－3に位置する。ほぼ円形を呈する。南北1.3cm、東西1.2m、深さ約27cm。柱穴が2ヶ所重複するが土壙に伴うものではない。遺物は出土していない。

7　土壙5

調査区のC－3に位置する。土壙2に切られている。東西約1.4m、南北約80cm、深さ23cmの不整楕円形を呈する。遺物は出土していない。

8　土壙6

調査区のB－5に位置する。形状ははっきりしなく、東側が緩い傾斜で立ち上がる。東西約2.6m、南北約90cm、深さ29cmである。覆土内から小かわらけ、常滑片が出土しているが、実測可能なものはなかった。

溝Ⅰ

調査区の北西隅で発見された。上巾は約1m、下巾は約60cm、深さ約40cm。杭は9cm×3cmの長方形を呈し、杭の間隔は約50cmで打ち込みである。北から西へ110°の角度で曲がり、西へ傾斜する。

溝内からは炭、焼土、かわらけが出土した。この溝内の覆土は大変硬く叩き締めた様な状態であった。覆土中のかわらけはこのため、元形は保っているもののすべて小さく割れていた。西側では状態は良くなかったが、一部側板が残っていた。

出土遺物（9、10）

9は口径13.4cm、器高2.9cm、手づくねである。

10は口径13.8cm、器高3.6cm、底形7.8cm。静止糸切り底。

溝状遺構Ⅰ

溝Ⅰの南側に位置する。上巾は約40cm、下巾は狭く10cm～20cm、深さは約20cmである。北側は浅く、溝の呈をなしていない。西から北へ傾斜している。溝中は溝Ⅰと同様に焼土、炭、かわらけが叩き締めた状態で発見された。

溝状遺構Ⅱ

調査区の東側５ライン付近に位置する。上巾は約40cm、下巾は約20cm、深さ約20cmで西から東へ傾斜する。東はＥライン、西はＣラインまでしか確認されていない。確実に溝とは言えないが、ここでは溝状として取り扱っておく。

第２次調査区域（原因者負担分）

８ラインより南側にあたる。８ラインの東端はかわらけ溜りが９ラインまで約２ｍの巾で広がりＤラインあたりで切れてしまう。

９ラインから10ラインの南１ｍあまりの間は他の地域と比べて遺構の検出が減少し、空間地の様相を呈する。この区域は第１次調査での土塁推定地区になる。かわらけ溜りも９ライン付近で止まり南には広がらない。ここから横大路側溝の落ち際まで約3.5mあり、一次調査の推定基底巾3.5mと一致する。恐らくこの時期に築かれたと思われる。大路側溝の西際に土塁基底部の根堅めと思われる土丹塊が残っている。

当時の大路は現在の横大路に平行し、最も北側の溝は道路より約7.50ｍ余り北になる。この溝中からは多量のかわらけ、木器類が発見されている。詳細は原因者負担分の報告に譲る。

第３節　第１面かわらけ溜

本調査において、かわらけ溜と考えられる遺構は、第１次調査区から４ヶ所(溜１～溜４)、第２次調査区から１ヶ所発見された。第２次調査区から発見されたかわらけ溜は、第１次調査区の溜１と同一遺構と考えられるが、ここでは、第１次調査区から発見された４ヶ所（溜１～溜４）について以下説明を記す。

第１次調査区から発見されたかわらけ溜１～４は、第１面の上層遺構とし、第１面にかぶる状況で検出された。

かわらけ溜１の検出範囲は広く、南北方向はＢライン～Ｆライン間、東西方向は６ライン～８ライン間に発見された。かわらけの堆積状況も厚く重なり、検出状況を考え上層・中層・下層と３分類した。上層は第１面上層掘削時から出土しており、近世遺物が混入している事から、後世に一部撹乱されていると考え、本報においては除外した。中層は上層で覆っている余分なかわらけを取り挙げ良好な状態を検出し、これをかわらけ溜１の上層検出遺構（第７図）とした。説明の都合上、検出遺構をＡ～Ｇの７ブロックに区分し、出土したかわらけもその区分に従い、取り挙げ法量を表にまとめた。下層は中層において出土したかわらけを全部取り挙げた後、Ｇ区域下部においてのみ検出されたかわらけの状況（第20図）を示した。中層から下層のかわらけの検出された標高は約9.60m～9.40m間である。

かわらけ溜２はＡ５グリットに発見された。土壙に伴っていたのではないかと考えられるまとまり方ではあるが明確ではない。かわらけの出土状況は、かわらけ溜１下層に類似している。検出された標高は約9.50mである。

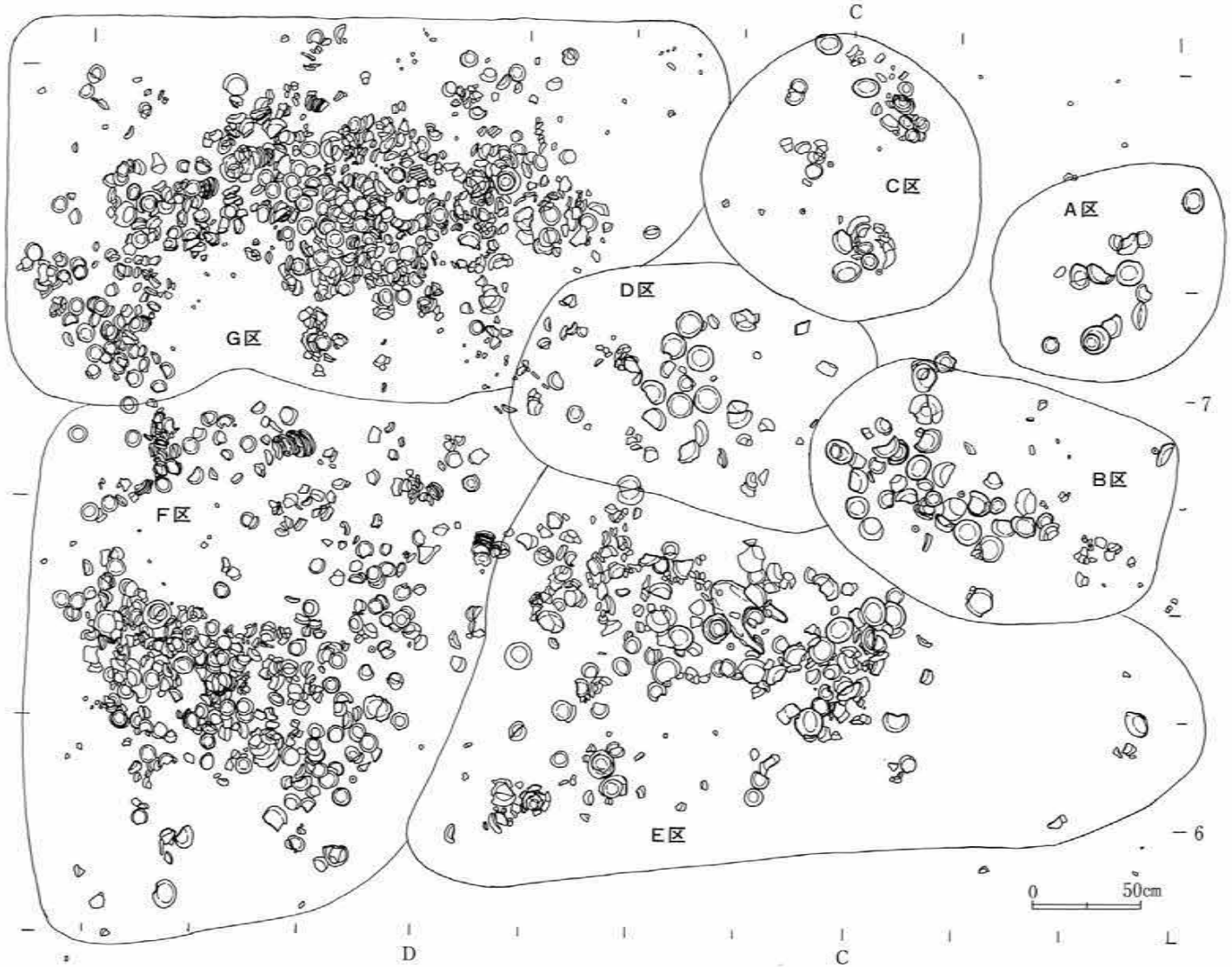
かわらけ溜３はＢ４グリットに発見された。かわらけ溜２と同様に柱穴又は土壙に伴っていたとも考えられるが明確ではない。かわらけの出土数は少ない。検出された標高は約9.55mである。

かわらけ溜４はＢ２・３グリットに発見された。土壙に伴っているのかは明確ではないが、検出部分は土壙と重複しており、検出された標高も約9.20mと他のかわらけ溜の検出レベルより低い。かわらけの出土数は少ない。

かわらけ溜２～４についてもかわらけ溜１と同様に法量を表に示した。溜１の下層、溜2～４については、各かわらけの検出図に示したブロックごとにまとめ、各ブロックの数量、かわらけの成形技法の種別を示した。

器型の頃に関しては、特殊と考えられる静止糸切り底のかわらけについてのみ若干の分類を試みたが、分類方法・結果については以下に示した。

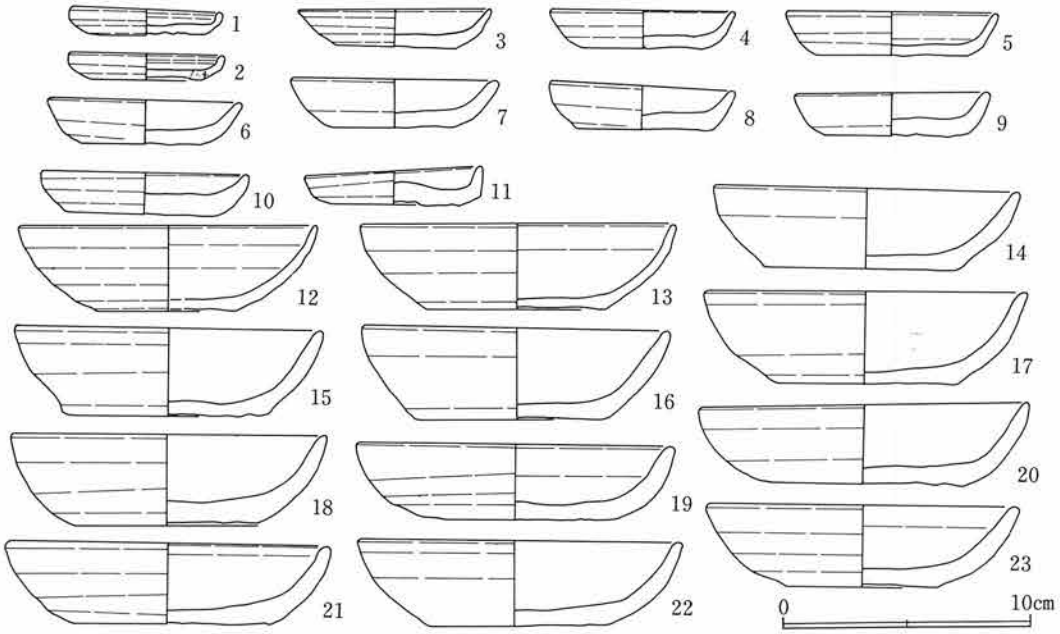
かわらけ溜から出土したかわらけは、多量な数を示した。数量の問題など人為的な選択が加わってしまうが、完形品・½以上残存しているかわらけについては図化し示したが、全てを報告する事は不可能であった事を付け加えておく。



第7図　かわらけ溜1上層検出図（A～G区域を示す）

かわらけ溜上層

(1) A区



第8図　A区出土かわらけ

No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)	No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)
1	5.9	4.3	1.0	回転糸切	18	12.6	7.4	3.7	回転糸切
2	6.1	4.5	1.1	〃	19	12.5	6.8	3.1	〃
3	7.7	4.9	1.5	〃	20	13.1	7.8	3.2	〃
4	7.4	4.8	1.6	〃	21	12.8	7.9	3.3	〃
5	8.4	6.1	1.7	〃	22	13.0	7.4	3.4	〃
6	7.7	4.9	1.8	〃	23	12.4	6.0	3.3	〃
7	8.2	4.8	2.0	〃					
8	7.4	5.5	1.8	〃					
9	7.7	5.0	1.8	〃					
10	8.2	6.0	1,7	〃					
11	7.1	5.2	1.4	〃					
12	11.9	5.6	3.4	〃					
13	12.5	7.2	3.5	〃					
14	12.2	7.7	3.2	〃					
15	12.3	8.3	3.6	〃					
16	12.2	7.5	3.7	〃					
17	12.9	7.4	3.7	〃					

(単位cm)

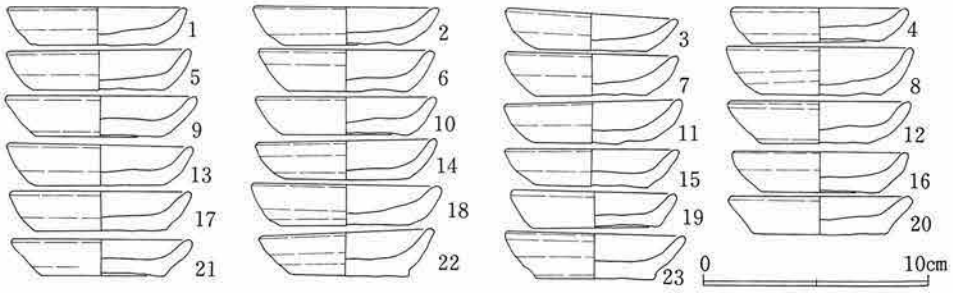
表1．A区出土かわらけ法量

A区出土のかわらけは、全て轆轤成形回転糸切り底のかわらけであった。

法量としては、小型と大型が出土しており、数量もほぼ同一程度である。

全体的に器型は体部が内彎傾向を示すタイプが大部分であり、特に大型はその傾向がある。12、13は特に薄手で体部は内彎する。器高は低いものが多く、小型についても同一傾向を示す。1・2・11は特殊である。1・2は口径が6.0cm前後と極小タイプのかわらけに属し、薄手で口縁部が丸味を有し上方を向く器型は、内折れのかわらけに属すると考えられる。11は口縁部が直上に立ち上がるタイプだが、成形時の行為によるものと考えられ他の一群と同一タイプに入ってくると考えられる。A区では体部が内彎傾向を示す小型と大型のかわらけが、ほぼ同量出土したと考えられる。

(2)B区

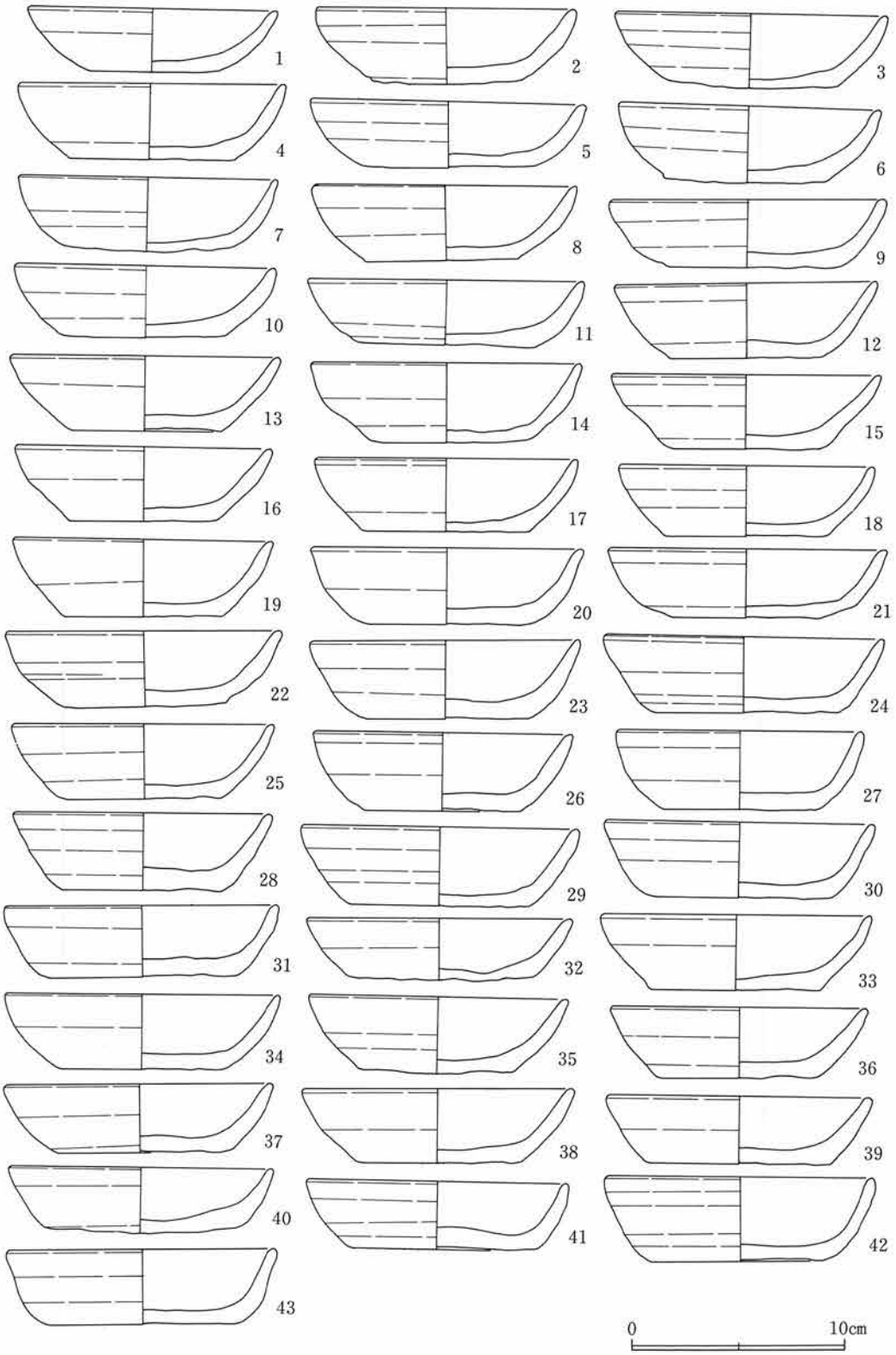


第9図　B区出土かわらけ(1)

No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)	No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)
1	7.8	5.7	1.7	回転糸切	13	8.1	5.8	1.8	回転糸切
2	8.0	5.3	1.7	〃	14	7.8	5.4	1.7	〃
3	7.5	5.0	1.7	〃	15	7.6	5.0	1.6	〃
4	7.7	5.9	1.5	〃	16	7.6	5.1	1.8	〃
5	8.0	5.7	1.8	〃	17	7.8	5.8	1.8	〃
6	7.6	5.2	1.9	〃	18	7.2	5.1	1.8	〃
7	7.5	4.9	1.9	〃	19	7.1	5.6	1.6	〃
8	8.2	5.4	2.1	〃	20	7.9	6.0	1.7	〃
9	8.4	5.5	1.8	〃	21	7.8	5.4	1.6	〃
10	7.8	5.5	1.6	〃	22	7.6	5.3	1.9	〃
11	7.7	5.4	1.8	〃	23	7.8	5.3	2.0	〃
12	7.9	4.7	1.9	〃					

(単位cm)

表2．B区出土かわらけ法量(1)



第10図　B区出土かわらけ(2)

No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)	No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)
1	11.6	6.0	3.0	回転糸切	23	12.5	7.8	3.7	回転糸切
2	12.0	7.2	3.6	〃	24	13.0	8.7	3.6	〃
3	12.1	7.8	3.5	〃	25	12.2	7.5	3.6	〃
4	12.4	7.7	3.6	〃	26	12.0	7.4	3.7	〃
5	12.8	8.1	3.1	〃	27	11.4	7.2	3.7	〃
6	12.1	7.6	3.6	〃	28	12.0	7.5	3.6	〃
7	12.0	8.0	3.5	〃	29	12.9	8.5	3.7	〃
8	12.2	7.2	3.5	〃	30	12.5	8.0	3.6	〃
9	12.7	7.8	3.2	〃	31	12.7	8.6	3.3	〃
10	12.0	7.7	3.4	〃	32	12.3	8.5	2.9	〃
11	12.8	8.3	3.6	〃	33	12.6	8.0	3.5	〃
12	12.2	7.1	3.5	〃	34	12.8	7.5	3.6	〃
13	12.6	7.0	3.5	〃	35	12.0	7.4	3.2	〃
14	12.5	7.4	3.8	〃	36	12.0	7.4	3.3	〃
15	12.5	6.8	3.5	〃	37	12.4	7.8	3.3	〃
16	11.9	6.8	3.5	〃	38	12.6	7.8	3.5	〃
17	12.1	7.8	3.5	〃	39	12.3	8.6	3.2	〃
18	11.8	7.7	3.4	〃	40	12.3	8.4	3.1	〃
19	12.1	7.5	3.6	〃	41	12.1	8.8	3.2	〃
20	12.6	7.4	3.6	〃	42	12.5	8.2	4.0	〃
21	12.9	7.0	3.3	〃	43	12.4	8.5	3.5	〃
22	12.7	7.6	3.5	〃					

(単位cm)

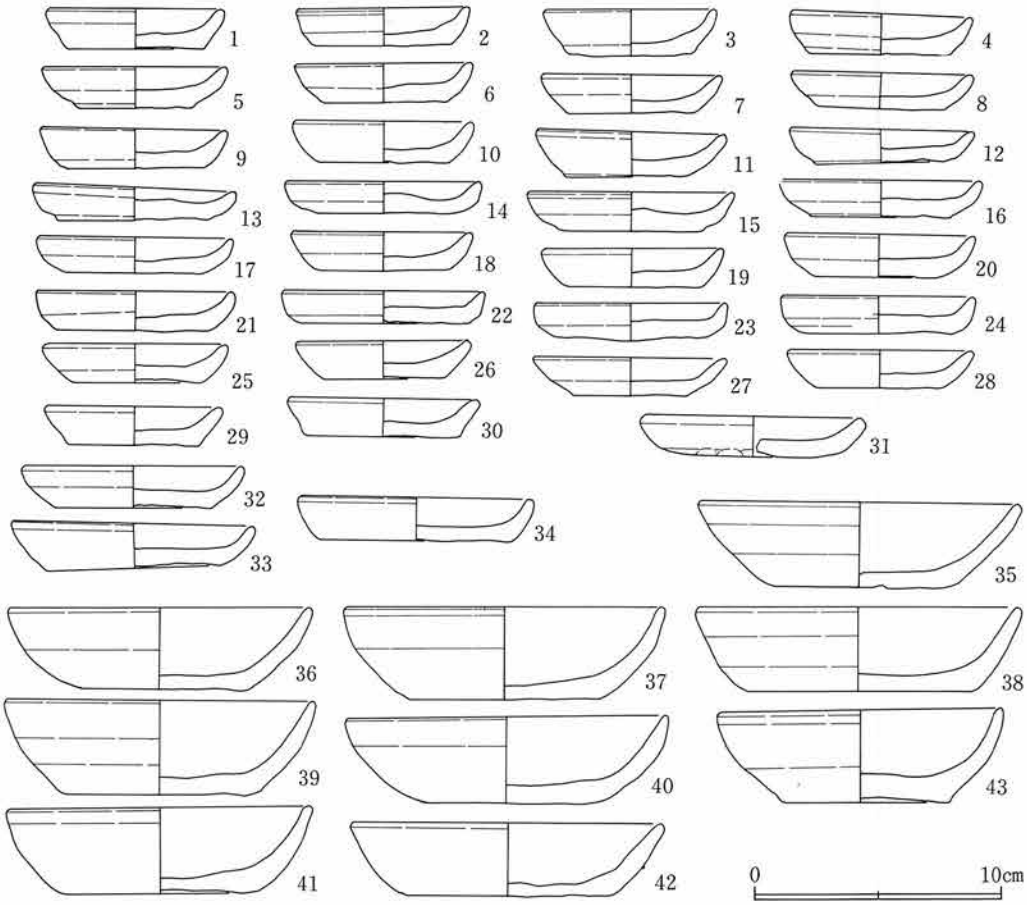
表３．Ｂ区出土かわらけ法量(2)

Ｂ区出土のかわらけは、全て轆轤成形回転糸切り底のかわらけであった。

法量としては、小型と大型が出土しており、数量は大型の方が多い。大型の中には、口径11cm代の中型と考えられるかわらけが４ヶ含まれているが、ここで示す大型の法量は、口径12cm代のかわらけが中心となっている事から、ここでは大型に含むものと考える。

器型は体部が内彎傾向を示すものが大部分であり、大型においては口径・底径の差のあるものとないものとに分かれるが、体部のプロポーションはほぼ同一であると考えられる。小型のかわらけも、体部が内彎傾向を示すものが多いが、体部が直線的に開くものが少々含まれている。又器高がやや高く底部に高台状を示すもの22・23があるが、体部が内彎傾向を示す一群と考える。Ｂ区では体部が内彎傾向を示すかわらけが大部分を占め、体部が直線的に開く小型のかわらけが少々混入している。

(3) C区



第11図　C区出土かわらけ

No.	口径	底径	器高	成形	器形	No.	口径	底径	器高	成形	器形
1	6.8	5.4	1.6	回転糸切り		23	7.7	6.2	1.5	回転糸切り	
2	6.8	5.5	1.5	〃		24	7.7	6.2	1.5	〃	
3	6.7	4.9	1.9	〃		25	7.1	5.1	1.6	〃	
4	7.1	5.0	1.7	〃		26	6.8	4.9	1.5	〃	
5	7.3	4.7	1.7	〃		27	7.6	4.5	1.6	〃	
6	7.0	5.0	1.6	〃		28	7.3	5.1	1.5	〃	
7	7.1	5.0	1.6	〃		29	6.9	5.2	1.6	〃	
8	7.1	5.0	1.5	〃		30	7.4	6.3	1.6	〃	
9	7.3	5.6	1.6	〃		31	8.2	7.5	1.6	手づくね	
10	7.1	5.2	1.3	〃		32	8.7	6.2	1.2	静止糸切り	Ⅰa
11	7.5	4.9	1.8	〃		33	9.6	7.0	1.8	〃	Ⅰa

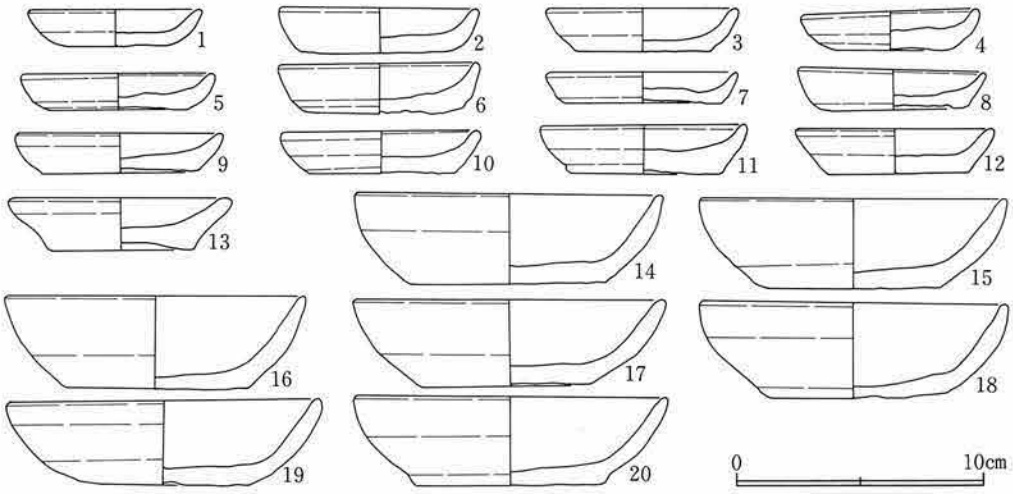
表4

12	7.3	5.1	1.4	回転糸切り		34	9.1	7.2	1.7	静止糸切り	Ⅰa
13	8.0	6.1	1.3	〃		35	12.8	7.4	3.5	回転糸切り	
14	7.8	5.5	1.5	〃		36	12.2	6.8	3.3	〃	
15	8.2	5.8	1.6	〃		37	12.6	7.8	3.7	〃	
16	8.0	5.6	1.5	〃		38	12.9	9.0	3.4	〃	
17	7.7	5.4	1.5	〃		39	12.2	7.2	3.8	〃	
18	7.1	5.3	1.6	〃		40	12.9	6.5	3.5	〃	
19	7.2	5.4	1.5	〃		41	12.1	7.8	3.5	〃	
20	7.4	5.0	1.7	〃		42	12.4	8.2	2.9	〃	
21	7.8	5.8	1.6	〃		43	11.3	6.7	3.8	静止糸切り	Ⅱa
22	8.0	6.8	1.3	〃							

表4　C区出土かわらけ法量　　**単位（cm）**

C区出土かわらけは、轆轤成形回転糸切り底の小型のかわらけが大部分を占めた。静止糸切り底のかわらけは4ヶ含まれているが、器型は体部が内彎傾向を示す糸切り底のタイプに類似した。43の静止糸切り底のかわらけのみ、体部下方に外反傾向が認められた。31の手づくね底のかわらけは混入品と考えられる。

(4)D区



第12図　D区出土かわらけ

No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型	No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型
1	6.9	4.0	1.5	回転糸切り		11	8.2	6.0	2.0	回転糸切り	
2	7.8	6.1	1.8	〃		12	7.9	5.7	1.8	〃	
3	7.5	5.5	1.8	〃		13	8.5	5.2	2.1	静止糸切り	Ⅲb
4	7.0	4.6	1.6	〃		14	12.3	7.8	3.6	回転糸切り	
5	7.2	5.1	1.5	〃		15	12.3	7.2	3.6	〃	

表5

6	7.8	5.5	2.0	回転糸切り		16	12.0	7.4	3.8	回転糸切り
7	7.6	6.4	1.2	〃		17	12.5	6.8	3.5	〃
8	7.4	5.0	1.6	〃		18	12.5	7.2	3.7	〃
9	8.1	6.3	1.6	〃		19	12.5	7.0	3.4	〃
10	7.9	5.9	1.7	〃		20	12.4	7.5	3.6	〃

表5．D区出土かわらけ法量　　**単位(cm)**

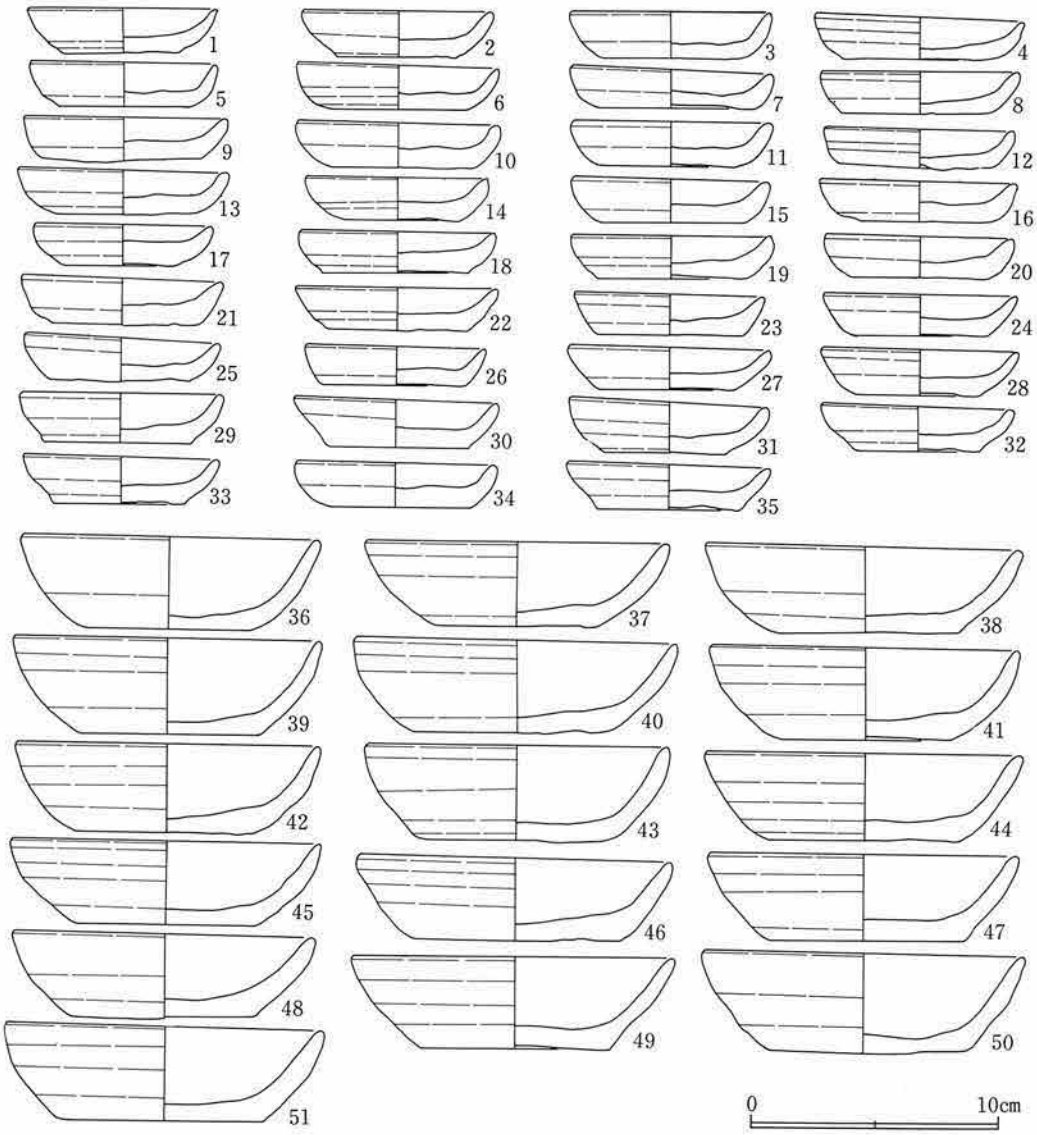
D区出土かわらけは、轆轤成形回転糸切り底のかわらけが大部分を占めた。法量は小型と大型が出土しており、数量は小型が若干多いようである。静止糸切り底のかわらけは13のみであり、体部が外反傾向を示す器型である。

(5)E区

No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)	No.	口　径	底　径	器　高	成形技法(底部)
1	7.5	4.5	1.8	回転糸切	27	8.0	5.4	1.7	回転糸切
2	7.6	4.8	1.8	〃	28	7.9	5.0	1.8	〃
3	8.0	5.6	1.8	〃	29	8.2	5.8	2.1	〃
4	8.3	5.8	1.6	〃	30	8.0	5.6	1.9	〃
5	7.3	5.2	1.8	〃	31	7.9	4.8	2.0	〃
6	8.0	5.5	1.8	〃	32	7.5	4.9	1.8	〃
7	8.0	6.3	1.5	〃	33	7.8	5.4	1.9	〃
8	7.9	6.0	1.7	〃	34	8.0	5.9	2.0	〃
9	8.0	6.4	1.8	〃	35	8.0	5.7	1.8	〃
10	8.0	5.7	1.8	〃	36	11.9	6.6	3.7	〃
11	8.0	5.5	1.9	〃	37	12.1	6.5	3.4	〃
12	7.4	6.1	1.5	〃	38	12.7	7.4	3.5	〃
13	8.7	5.6	1.8	〃	39	12.3	7.3	3.9	〃
14	7.2	4.6	1.7	〃	40	12.8	8.1	3.7	〃
15	8.8	5.7	1.8	〃	41	12.1	6.9	3.7	〃
16	7.6	5.3	1.6	〃	42	12.2	7.3	3.5	〃
17	7.1	4.4	1.7	〃	43	12.0	7.9	3.8	〃
18	7.7	5.9	1.6	〃	44	12.8	7.7	3.5	〃
19	8.0	5.8	1.7	〃	45	12.4	7.4	3.4	〃
20	7.4	5.6	1.6	〃	46	12.5	8.4	3.3	〃
21	7.9	5.8	1.9	〃	47	12.4	8.1	3.5	〃
22	8.0	5.5	1.7	〃	48	12.0	7.4	3.4	〃
23	7.5	5.8	1.6	〃	49	12.9	7.6	3.7	〃
24	7.7	5.4	1.6	〃	50	12.9	8.0	4.0	〃
25	7.7	5.6	1.7	〃	51	12.8	8.4	3.8	〃
26	7.2	5.9	1.5	〃					

(単位cm)

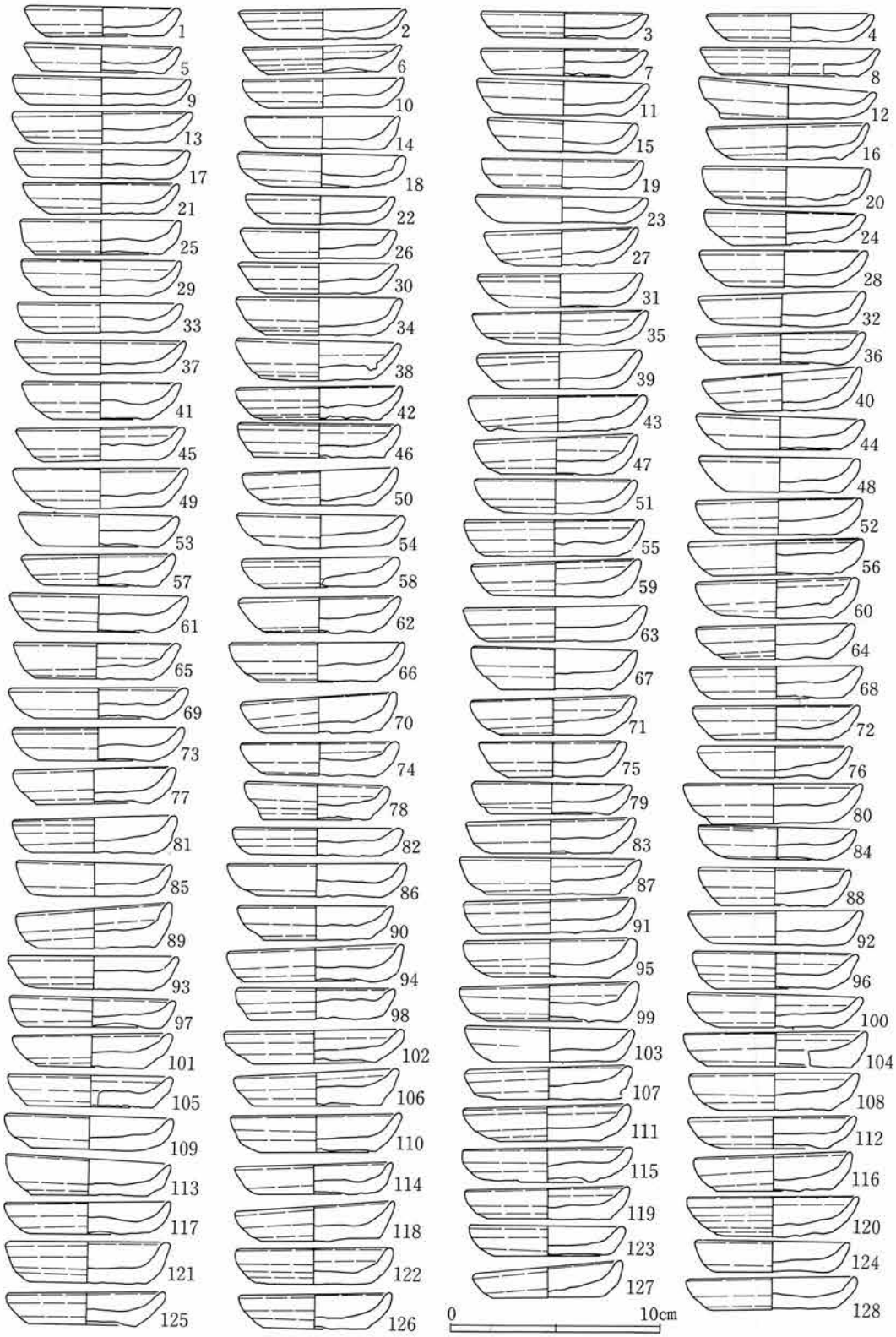
表6．E区出土かわらけ法量



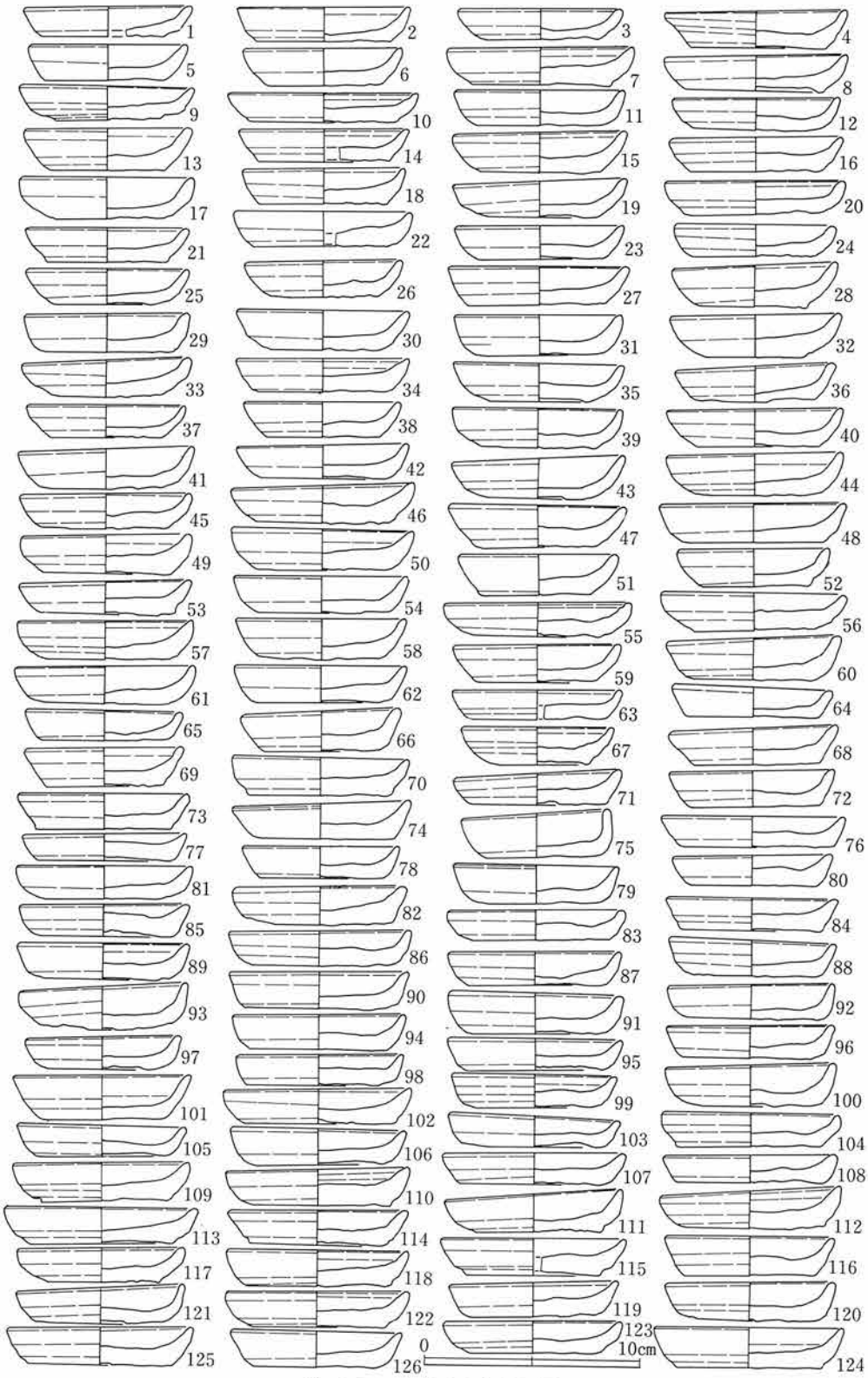
第13図　E区出土かわらけ

E区出土かわらけは、轆轤成形回転糸切り底のかわらけであった。法量は小型と大型が出土しており、数量は小型が多かった。器型は体部が内彎傾向を示すものが大部分であり、いくつかのバリエーションがあるものと考えられる。体部が直線的に開くタイプのものも含まれているが、その傾向は弱い。全体的に薄手であり、大型に関しては若干器高の高いものが大部分である。

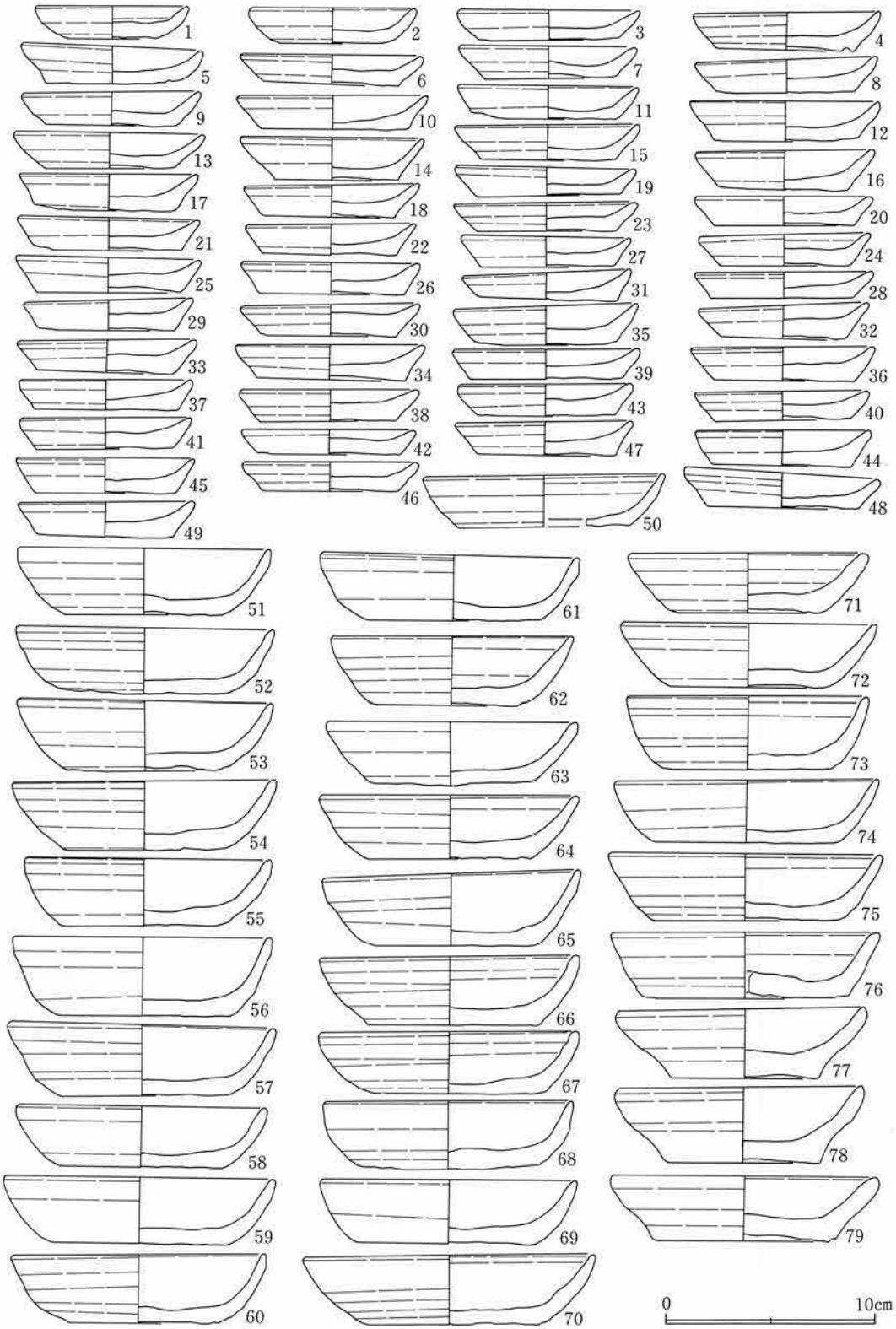
(6)F区



第14図　F区出土かわらけ(1)



第15図　F区出土かわらけ(2)



第16図　F区出土かわらけ(3)

No.	口径	底径	器高	成形	No.	口径	底径	器高	成形	No.	口径	底径	器高	成形
1	7.2	5.2	1.4	回転糸切り	44	7.8	5.5	1.6	回転糸切り	88	7.0	5.1	1.8	回転糸切り
2	8.0	5.6	1.4	〃	45	8.0	5.5	1.6	〃	89	7.3	5.6	1.9	〃
3	7.8	6.0	1.2	〃	46	7.7	6.2	1.6	〃	90	7.3	5.1	1.6	〃
4	7.9	5.8	1.4	〃	47	7.7	5.4	1.7	〃	91	7.9	6.8	1.6	〃
5	7.3	5.9	1.4	〃	48	7.8	5.3	1.7	〃	92	8.1	6.3	1.6	〃
6	7.5	5.3	1.3	〃	49	8.2	5.7	1.9	〃	93	7.9	5.6	1.6	〃
7	7.8	6.2	1.3	〃	50	7.2	4.7	1.7	〃	94	8.3	6.3	1.6	〃
8	8.5	6.6	1.3	〃	51	7.6	5.0	1.6	〃	95	7.9	5.6	1.8	〃
9	8.4	6.6	1.4	〃	52	7.8	5.7	1.7	〃	96	7.7	5.4	1.7	〃
10	7.5	5.4	1.4	〃	53	7.5	5.5	1.5	〃	97	7.7	6.5	1.4	〃
11	8.0	5.4	1.6	〃	54	7.8	6.0	1.6	〃	98	7.4	5.7	1.5	〃
12	8.3	5.6	1.7	〃	55	8.4	6.3	1.8	〃	99	8.3	6.2	1.8	〃
13	8.4	6.8	1.5	〃	56	8.2	6.1	1.7	〃	100	8.0	5.2	1.6	〃
14	7.3	5.4	1.5	〃	57	7.2	5.4	1.5	〃	101	7.3	5.0	1.6	〃
15	7.0	5.2	1.5	〃	58	7.3	5.4	1.4	〃	102	8.5	5.8	1.6	〃
16	7.7	5.1	1.7	〃	59	7.9	5.8	1.7	〃	103	7.9	6.0	1.7	〃
17	8.2	6.5	1.4	〃	60	7.5	5.3	1.8	〃	104	8.6	7.0	1.6	〃
18	7.7	5.8	1.6	〃	61	8.2	5.6	1.8	〃	105	7.7	6.0	1.5	〃
19	7.6	5.7	1.4	〃	62	7.5	5.0	1.6	〃	106	7.6	6.0	1.6	〃
20	7.8	5.5	1.9	〃	63	8.6	6.7	1.6	〃	107	7.6	6.0	1.5	〃
21	7.4	5.2	1.5	〃	64	7.4	4.8	1.6	〃	108	7.9	5.2	1.8	〃
22	7.0	4.7	1.4	〃	65	7.8	5.6	1.7	〃	109	7.8	5.3	1.6	〃
23	8.0	5.7	1.3	〃	66	8.2	5.7	1.9	〃	110	8.0	5.6	1.8	〃
24	7.4	5.0	1.5	〃	67	7.8	5.8	2.0	〃	111	7.8	5.0	1.7	〃
25	7.5	6.0	1.6	〃	68	8.0	6.0	1.5	〃	112	7.9	5.0	1.5	〃
26	7.3	6.0	1.4	〃	69	8.3	6.2	1.4	〃	113	7.7	5.6	1.8	〃
27	7.2	4.7	1.7	〃	70	7.2	5.6	1.7	〃	114	7.4	6.0	1.4	〃
28	8.0	5.0	1.8	〃	71	7.7	5.0	1.8	〃	115	8.0	5.5	1.6	〃
29	7.5	4.6	1.7	〃	72	7.8	5.5	1.6	〃	116	7.3	5.5	1.7	〃
30	7.5	5.0	1.5	〃	73	8.0	5.6	1.6	〃	117	7.8	5.7	1.5	〃
31	7.7	5.1	1.6	〃	74	7.4	5.1	1.6	〃	118	7.5	7.6	1.7	〃
32	7.8	6.1	1.6	〃	75	6.9	4.6	1.7	〃	119	7.7	5.9	1.4	〃
33	7.8	5.4	1.5	〃	76	7.2	5.1	1.5	〃	120	8.0	5.5	1.9	〃
34	7.3	5.2	1.8	〃	77	7.7	5.4	1.7	〃	121	7.5	5.5	2.0	〃
35	8.3	4.7	1.5	〃	78	6.6	5.0	1.7	〃	122	7.2	5.6	1.7	〃
36	7.9	5.1	1.8	〃	79	7.3	5.6	1.5	〃	123	7.2	5.3	1.4	〃
37	8.0	5.7	1.5	〃	80	8.3	5.2	1.9	〃	124	7.2	5.2	1.5	〃
38	7.6	5.4	1.9	〃	81	7.7	5.8	1.7	〃	125	7.4	5.2	1.6	〃
39	7.7	5.1	1.7	〃	82	7.9	5.7	1.3	〃	126	7.2	4.9	1.7	〃
40	7.5	5.0	1.6	〃	83	8.0	5.7	1.6	〃	127	6.7	5.2	1.5	〃
41	7.4	4.8	1.8	〃	84	7.4	4.8	1.5	〃	128	7.9	6.0	1.5	〃
42	7.8	5.6	1.9	〃	85	7.3	5.6	1.6	〃					〃
43	8.3	5.7	1.7	〃	86	8.4	5.9	1.6	〃					〃

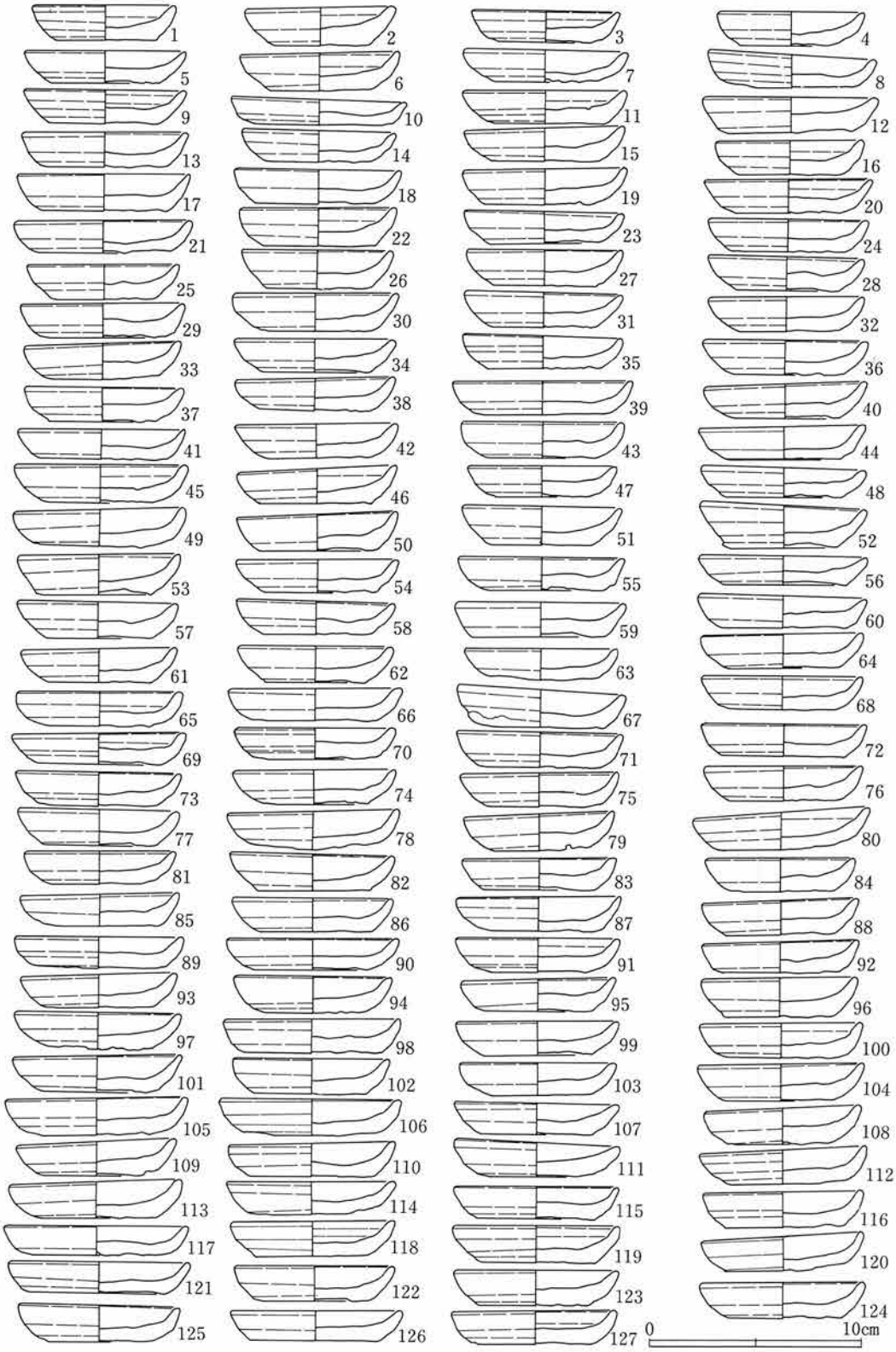
表７．F区出土かわらけ法量(1)―第14図　　単位(cm)

No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)
1	7.1	5.7	1.6	回転糸切	43	7.9	4.4	1.9	回転糸切	85	7.7	6.3	1.5	回転糸切
2	7.9	6.8	1.6	〃	44	8.0	5.8	1.9	〃	86	8.2	6.4	1.6	〃
3	7.4	5.2	1.4	〃	45	7.7	5.9	1.6	〃	87	7.8	6.3	1.6	〃
4	8.3	6.3	1.7	〃	46	8.2	6.2	1.7	〃	88	7.5	5.7	1.7	〃
5	7.1	5.5	1.7	〃	47	8.0	5.5	1.9	〃	89	7.7	5.9	1.7	〃
6	7.2	5.1	1.7	〃	48	8.5	6.3	1.8	〃	90	8.2	6.7	1.7	〃
7	8.5	6.5	1.7	〃	49	7.7	6.0	1.8	〃	91	7.8	6.3	1.9	〃
8	8.4	6.4	1.6	〃	50	8.3	6.4	1.9	〃	92	7.6	6.1	1.5	〃
9	7.9	4.9	1.6	〃	51	7.2	5.2	1.9	〃	93	7.7	6.3	2.0	〃
10	8.8	6.9	1.4	〃	52	6.9	5.0	1.7	〃	94	7.9	6.3	1.6	〃
11	7.7	5.8	1.6	〃	53	7.8	6.3	1.5	〃	95	7.9	6.3	1.5	〃
12	7.7	5.5	1.5	〃	54	7.9	8.2	1.7	〃	96	7.6	6.0	1.5	〃
13	7.5	5.2	2.0	〃	55	8.6	5.9	1.5	〃	97	7.0	4.7	1.5	〃
14	7.7	6.1	1.5	〃	56	8.4	5.7	1.7	〃	98	7.5	6.2	1.4	〃
15	7.9	5.5	1.9	〃	57	8.0	5.8	1.8	〃	99	7.9	5.5	1.5	〃
16	7.8	6.0	1.6	〃	58	7.7	5.7	1.9	〃	100	7.8	5.8	1.9	〃
17	7.9	5.4	2.0	〃	59	7.6	5.1	1.8	〃	101	8.0	5.5	2.1	〃
18	7.3	5.8	1.6	〃	60	7.8	5.7	2.0	〃	102	8.5	7.5	1.6	〃
19	8.1	5.2	1.7	〃	61	8.2	5.8	1.7	〃	103	7.7	6.7	1.5	〃
20	8.2	5.8	1.6	〃	62	7.8	5.7	1.7	〃	104	8.0	6.6	1.6	〃
21	7.4	5.6	1.6	〃	63	7.7	6.0	1.4	〃	105	7.7	6.0	1.5	〃
22	8.0	6.3	1.6	〃	64	7.3	6.1	1.4	〃	106	7.9	5.9	1.7	〃
23	7.7	5.7	1.6	〃	65	7.0	5.8	1.4	〃	107	8.7	6.7	1.5	〃
24	7.2	5.8	1.5	〃	66	7.2	5.3	1.8	〃	108	7.9	6.7	1.3	〃
25	7.4	4.5	1.7	〃	67	6.9	4.5	1.7	〃	109	8.0	5.8	1.8	〃
26	7.1	5.0	1.7	〃	68	7.6	5.8	1.7	〃	110	8.3	6.5	1.7	〃
27	8.3	6.4	1.8	〃	69	7.1	5.4	1.8	〃	111	8.2	5.8	1.7	〃
28	7.5	5.0	1.9	〃	70	8.0	6.5	1.8	〃	112	8.3	6.4	1.7	〃
29	7.4	6.0	1.8	〃	71	7.7	6.4	1.5	〃	113	8.8	6.6	1.7	〃
30	7.8	5.0	1.8	〃	72	7.5	6.0	1.6	〃	114	8.1	6.4	1.6	〃
31	7.6	6.0	1.9	〃	73	7.7	6.3	1.7	〃	115	8.4	6.4	1.8	〃
32	7.8	4.5	2.0	〃	74	8.1	6.3	1.6	〃	116	7.7	6.1	1.9	〃
33	7.7	5.1	1.8	〃	75	6.8	5.0	2.0	〃	117	7.6	5.6	1.6	〃
34	7.9	6.0	1.6	〃	76	8.4	7.0	1.5	〃	118	8.2	6.5	1.7	〃
35	7.8	4.5	1.8	〃	77	7.4	6.2	1.2	〃	119	7.8	5.8	1.6	〃
36	7.2	5.5	1.7	〃	78	7.1	5.7	1.5	〃	120	7.7	5.6	1.8	〃
37	7.2	5.2	1.5	〃	79	7.5	5.8	1.8	〃	121	7.6	6.0	1.7	〃
38	7.1	5.3	1.7	〃	80	7.3	5.8	1.8	〃	122	8.3	6.2	1.7	〃
39	7.8	5.2	1.9	〃	81	7.9	5.4	1.5	〃	123	8.1	6.2	1.5	〃
40	8.0	5.6	1.7	〃	82	7.8	5.5	1.3	〃	124	8.6	6.7	1.9	〃
41	8.0	5.2	1.9	〃	83	8.0	6.4	1.4	〃	125	8.4	6.6	1.8	〃
42	7.7	5.8	1.6	〃	84	7.8	6.5	1.5	〃	126	7.6	5.7	1.7	〃

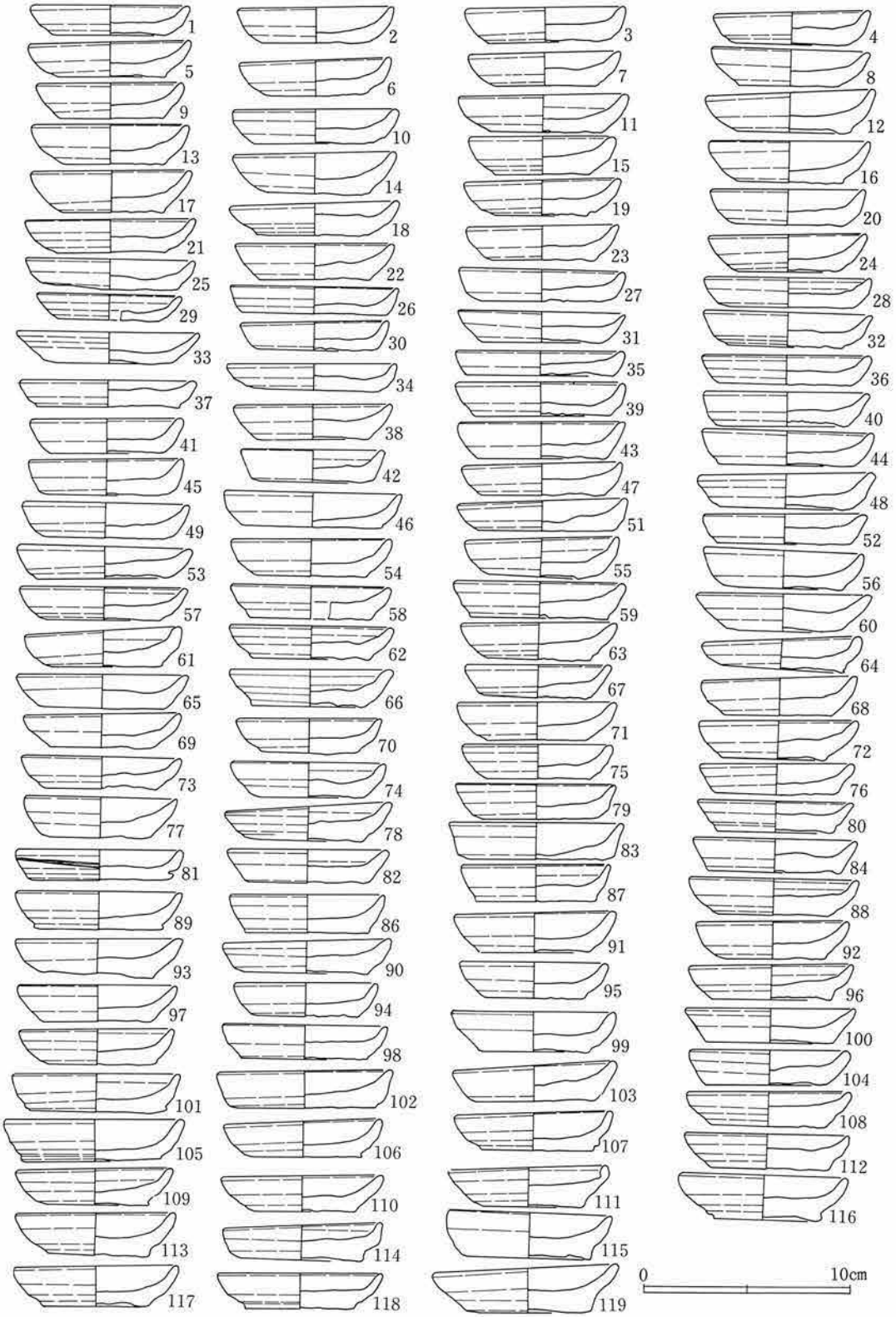
表8．F区出土かわらけ法量(2)—第15図　(単位cm)

No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型	No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型
1	7.1	4.2	1.6	静止糸切り	I	41	8.0	6.5	1.5	静止糸切り	IIb
2	7.7	5.0	1.7	〃	I	42	8.2	6.7	1.7	〃	II
3	8.5	6.8	1.5	〃	II	43	8.1	6.5	1.5	〃	II
4	7.8	6.7	1.8	〃	IIIb	44	8.2	6.6	1.7	〃	II
5	8.5	6.5	1.8	〃	I	45	8.4	6.7	1.7	〃	II
6	8.6	6.5	1.4	〃	IIIb	46	8.2	6.5	1.8	〃	IIIa
7	8.3	6.3	1.5	〃	III	47	8.3	6.6	1.6	〃	III
8	8.5	6.7	1.6	〃	IIb	48	9.1	7.2	1.7	〃	III
9	8.3	6.0	1.6	〃	II	49	8.3	6.5	1.6	〃	III
10	9.0	7.1	1.6	〃	IIIb	50	11.4	8.2	3.5	回転糸切り	I
11	8.5	7.0	1.6	〃	I	51	12.0	7.5	3.2	〃	
12	8.9	7.0	1.9	〃	IIIb	52	12.2	8.0	3.2	〃	
13	9.0	6.3	1.7	〃	IIIa	53	12.1	8.1	3.3	〃	
14	8.7	5.9	2.0	〃	II (III)	54	12.4	7.8	3.4	〃	
15	8.7	6.5	1.7	〃	IIIa	55	11.6	8.0	3.2	〃	
16	8.3	6.2	1.9	〃	II	56	12.3	8.3	3.8	〃	
17	8.4	6.8	1.7	〃	IIIa	57	12.6	8.0	3.4	〃	
18	8.2	6.3	1.6	〃	IIIa	58	11.7	7.7	2.9	〃	
19	8.5	6.9	1.4	〃	II a	59	12.8	8.3	3.2	〃	
20	8.4	6.7	1.4	〃	IIa	60	12.0	7.2	3.3	〃	
21	8.5	7.0	1.6	〃	III	61	12.1	8.5	3.2	〃	
22	8.0	6.4	1.5	〃	III	62	11.5	6.5	3.3	〃	
23	8.6	6.6	1.4	〃	II	63	12.0	7.7	3.1	〃	
24	8.0	6.2	1.5	〃	II	64	12.2	7.8	3.0	〃	
25	8.7	7.0	1.7	〃	II	65	12.2	7.5	3.4	〃	
26	8.3	6.9	1.5	〃	II	66	12.2	8.3	3.3	〃	
27	8.1	6.4	1.7	〃	II	67	12.2	8.0	3.0	〃	
28	8.4	6.9	1.3	〃	II	68	11.8	8.8	3.3	〃	
29	7.9	6.5	1.5	〃	II	69	12.1	8.4	3.1	〃	
30	8.5	6.5	1.5	〃	IIIa	70	13.2	8.2	3.4	〃	
31	7.9	6.7	1.4	〃	IIIb	71	11.4	6.8	2.9	〃	
32	8.0	6.0	1.6	〃	II	72	12.1	6.9	3.1	〃	
33	8.4	6.5	1.5	〃	II	73	11.5	8.2	3.5	〃	
34	8.9	7.1	1.6	〃	III	74	12.5	8.8	3.0	〃	
35	8.3	6.8	1.8	〃	IIa	75	12.8	8.8	3.2	〃	
36	8.7	6.7	1.6	〃	IIa	76	12.7	9.1	3.1	〃	
37	8.1	6.9	1.4	〃	II	77	11.7	7.0	3.4	静止糸切り	IIIa
38	8.4	6.5	1.5	〃	II	78	11.6	7.4	3.7	〃	IIIa
39	8.8	7.3	1.9	〃	II a	79	12.5	8.5	3.2	〃	III
40	8.2	6.5	1.4	〃	I					〃	

表 9．F区出土かわらけ法量(3)—第16図　　単位(cm)

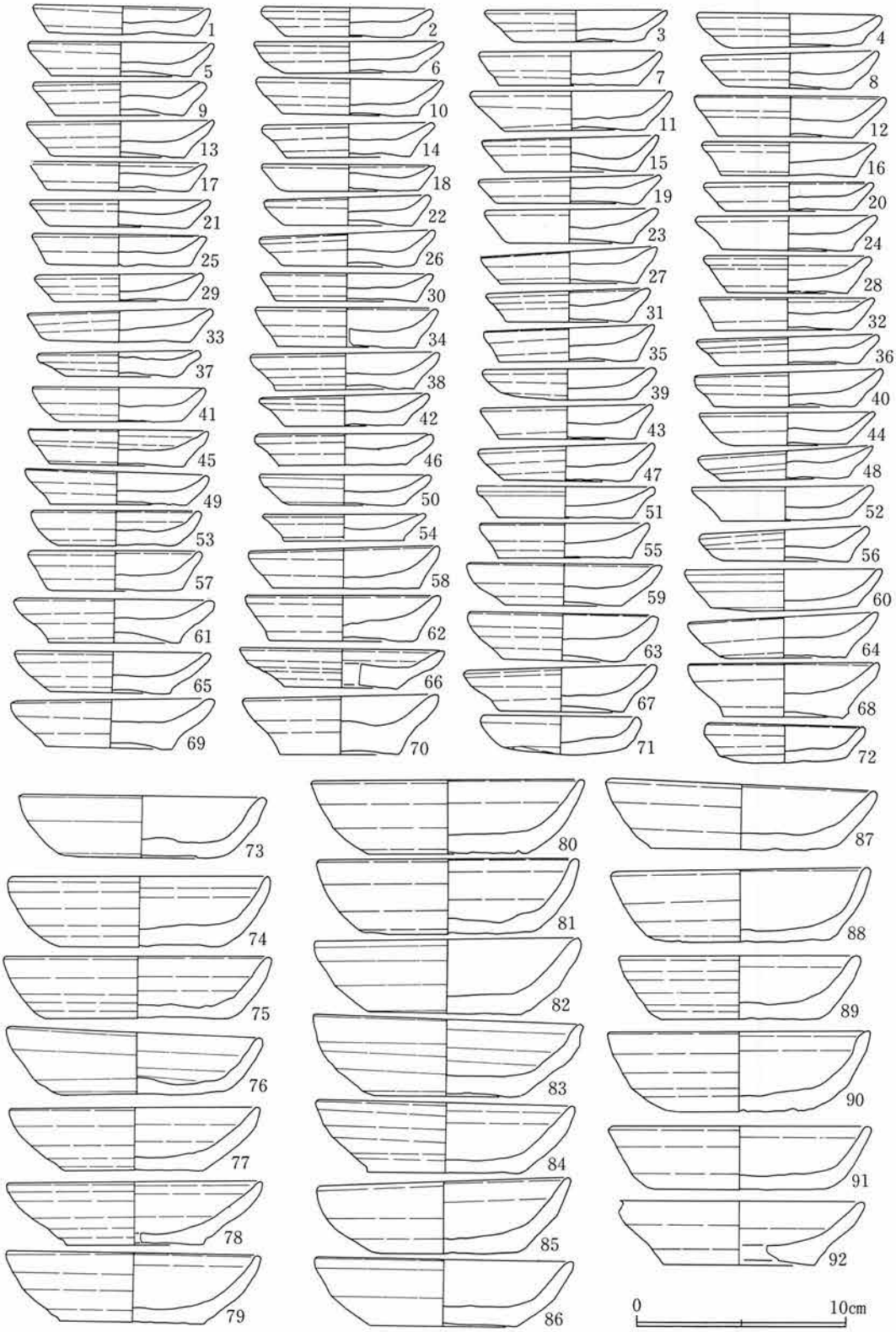


第17図　G区出土かわらけ(1)



第18図　G区出土かわらけ(2)

(7)G区



第19図　G区出土かわらけ(3)

No.	口径	底径	器高	成形	No.	口径	底径	器高	成形	No.	口径	底径	器高	成形
1	6.6	4.7	1.7	回転糸切り	46	7.3	5.3	1.7	回転糸切り	91	7.4	4.6	1.6	回転糸切り
2	6.8	4.4	1.8	〃	47	6.9	4.4	1.5	〃	92	7.3	5.6	1.5	〃
3	6.9	4.4	1.5	〃	48	7.7	5.5	1.6	〃	93	7.2	5.0	1.5	〃
4	6.8	4.3	1.6	〃	49	8.0	6.0	1.7	〃	94	7.2	4.7	1.8	〃
5	7.5	5.2	1.5	〃	50	7.5	5.3	1.7	〃	95	7.1	5.1	1.5	〃
6	7.4	4.8	1.8	〃	51	7.4	4.8	1.8	〃	96	7.2	5.2	1.8	〃
7	7.6	5.0	1.5	〃	52	7.8	5.4	2.0	〃	97	7.7	5.1	1.8	〃
8	7.8	6.0	1.6	〃	53	7.5	5.5	1.8	〃	98	8.2	6.6	1.6	〃
9	7.5	5.2	1.6	〃	54	7.5	5.3	1.6	〃	99	7.5	5.0	1.6	〃
10	8.2	6.0	1.2	〃	55	7.8	5.5	1.6	〃	100	7.5	5.4	1.7	〃
11	7.6	5.1	1.6	〃	56	7.8	5.8	1.4	〃	101	7.9	5.0	1.7	〃
12	8.0	5.7	1.7	〃	57	7.4	5.0	1.7	〃	102	7.3	5.3	1.7	〃
13	7.6	5.9	1.6	〃	58	7.3	5.1	1.6	〃	103	7.2	4.5	1.5	〃
14	7.1	4.9	1.5	〃	59	7.8	6.3	1.6	〃	104	7.7	5.0	1.7	〃
15	7.4	5.0	1.5	〃	60	7.7	5.9	1.5	〃	105	8.4	5.0	1.7	〃
16	6.8	4.8	1.6	〃	61	7.2	5.0	1.6	〃	106	8.5	6.4	1.7	〃
17	8.0	5.9	1.7	〃	62	7.2	4.8	1.7	〃	107	7.7	5.3	1.5	〃
18	7.8	5.7	1.6	〃	63	7.1	5.2	1.5	〃	108	7.3	4.8	1.7	〃
19	7.5	5.2	1.7	〃	64	7.5	5.2	1.6	〃	109	7.4	4.7	1.6	〃
20	7.8	5.0	1.6	〃	65	7.6	4.8	1.6	〃	110	7.8	5.8	1.6	〃
21	8.2	6.3	1.6	〃	66	8.1	6.0	1.5	〃	111	7.6	4.3	1.7	〃
22	7.2	5.3	1.8	〃	67	7.9	6.0	1.8	〃	112	7.8	5.6	1.6	〃
23	7.4	5.3	1.5	〃	68	7.5	5.0	1.6	〃	113	8.0	5.4	1.7	〃
24	7.4	5.3	1.5	〃	69	8.0	5.9	1.5	〃	114	7.8	6.0	1.6	〃
25	7.1	5.0	1.7	〃	70	7.5	6.1	1.5	〃	115	7.6	5.6	1.6	〃
26	7.0	5.0	1.8	〃	71	7.7	5.9	1.6	〃	116	7.4	5.5	1.7	〃
27	7.1	4.9	1.7	〃	72	7.6	5.9	1.5	〃	117	8.5	7.0	1.4	〃
28	7.2	4.8	1.6	〃	73	7.7	5.7	1.6	〃	118	7.7	5.3	1.7	〃
29	7.7	6.0	1.6	〃	74	7.6	5.0	1.6	〃	119	7.7	5.4	1.8	〃
30	7.7	5.0	1.8	〃	75	7.3	5.5	1.6	〃	120	7.4	5.6	1.6	〃
31	7.3	4.8	1.6	〃	76	7.3	5.2	1.6	〃	121	7.5	6.5	1.5	〃
32	7.3	4.8	1.6	〃	77	7.4	5.3	1.7	〃	122	7.5	5.3	1.7	〃
33	7.3	5.1	1.7	〃	78	7.9	6.7	1.8	〃	123	7.6	5.2	1.7	〃
34	7.4	5.2	1.6	〃	79	7.0	4.5	1.7	〃	124	7.6	5.4	1.7	〃
35	7.5	5.4	1.6	〃	80	8.3	5.5	1.8	〃	125	7.4	5.0	1.8	〃
36	7.6	5.3	1.6	〃	81	7.0	4.3	1.6	〃	126	8.1	6.0	1.4	〃
37	7.5	5.0	1.6	〃	82	7.6	5.4	1.7	〃	127	7.6	5.3	1.6	〃
38	7.5	5.3	1.5	〃	83	7.2	5.3	1.5	〃					
39	8.4	5.9	1.6	〃	84	6.9	4.8	1.6	〃					
40	7.6	5.0	1.6	〃	85	7.3	5.0	1.5	〃					
41	7.8	6.1	1.4	〃	86	7.4	5.3	1.6	〃					

表 10

42	7.5	4.9	1.6	回転糸切り	87	7.7	5.5	1.6	回転糸切り					
43	7.5	5.1	1.7	〃	88	7.3	5.1	1.6	〃					
44	7.8	5.4	1.6	〃	89	7.8	6.3	1.5	〃					
45	9.0	5.0	1.8	〃	90	8.0	5.5	1.5	〃					

表10. G区出土かわらけ法量法(1)―第17図 （単位cm）

No.	口径	底径	器高	成形技法（底部）	No.	口径	底径	器高	成形技法（底部）	No.	口径	底径	器高	成形技法（底部）
1	7.5	5.4	1.5	回転糸切り	41	7.2	5.4	1.7	回転糸切り	81	7.9	6.9	1.5	回転糸切り
2	7.3	8.0	1.7	〃	42	6.7	5.1	1.6	〃	82	7.7	5.6	1.6	〃
3	7.5	5.6	1.7	〃	43	7.8	6.3	1.8	〃	83	8.4	6.5	1.8	〃
4	7.4	5.4	1.5	〃	44	8.2	6.6	1.7	〃	84	7.8	6.3	1.6	〃
5	7.7	5.2	1.7	〃	45	7.3	5.8	1.7	〃	85	7.8	6.2	1.8	〃
6	7.2	5.0	1.7	〃	46	7.7	6.3	1.4	〃	86	7.4	6.0	1.9	〃
7	7.2	4.9	1.6	〃	47	7.5	6.0	1.5	〃	87	7.0	5.8	1.8	〃
8	7.5	4.8	1.8	〃	48	8.3	6.2	1.7	〃	88	8.1	5.2	1.8	〃
9	7.0	5.0	1.7	〃	49	7.9	5.7	1.7	〃	89	8.0	5.5	1.7	〃
10	7.7	5.8	1.7	〃	50	8.4	6.7	1.7	〃	90	8.0	6.0	1.6	〃
11	8.0	5.5	1.8	〃	51	8.0	6.5	1.4	〃	91	7.7	5.4	1.9	〃
12	8.0	5.5	1.9	〃	52	7.7	6.5	1.4	〃	92	7.3	5.0	1.9	〃
13	7.4	4.8	1.9	〃	53	8.1	6.2	1.5	〃	93	7.5	5.3	1.7	〃
14	7.7	5.0	2.0	〃	54	7.6	5.3	1.8	〃	94	6.7	4.9	1.6	〃
15	6.9	4.6	1.9	〃	55	7.3	5.4	1.3	〃	95	7.1	4.8	1.8	〃
16	7.5	5.2	2.0	〃	56	7.8	5.8	1.8	〃	96	7.7	5.7	1.6	〃
17	7.5	4.9	2.0	〃	57	7.9	5.5	1.6	〃	97	7.3	5.2	1.7	〃
18	8.1	5.6	1.6	〃	58	7.6	5.9	1.6	〃	98	7.9	8.1	1.6	〃
19	7.5	4.4	1.7	〃	59	8.1	6.7	1.7	〃	99	7.8	5.4	1.9	〃
20	7.4	5.2	1.7	〃	60	8.2	5.6	1.8	〃	100	8.3	6.3	1.7	〃
21	8.1	5.3	1.6	〃	61	7.4	5.4	1.8	〃	101	7.9	6.6	1.4	〃
22	7.6	5.4	1.7	〃	62	7.7	5.7	1.6	〃	102	8.3	6.7	1.8	〃
23	7.3	5.1	1.7	〃	63	7.4	5.0	1.8	〃	103	7.7	5.2	1.8	〃
24	7.5	5.0	1.8	〃	64	7.5	5.9	1.9	〃	104	7.4	5.9	1.7	〃
25	8.1	6.6	1.5	〃	65	8.2	6.0	1.6	〃	105	8.6	6.8	1.8	〃
26	8.1	7.0	1.3	〃	66	7.9	5.5	1.8	〃	106	7.5	5.6	1.8	〃
27	7.9	6.0	1.5	〃	67	7.1	5.2	1.6	〃	107	7.5	5.4	1.8	〃
28	7.9	5.9	1.4	〃	68	7.3	5.2	1.8	〃	108	7.8	5.5	1.7	〃
29	6.9	4.9	1.2	〃	69	7.4	5.0	1.6	〃	109	7.3	5.0	2.0	〃
30	7.0	5.7	1.4	〃	70	6.9	4.7	1.7	〃	110	7.8	4.9	1.8	〃
31	8.0	5.8	1.5	〃	71	7.5	5.0	1.8	〃	111	7.6	5.0	2.0	〃
32	8.1	5.6	1.5	〃	72	7.6	4.9	1.9	〃	112	7.8	5.6	1.7	〃
33	8.1	6.4	1.5	〃	73	7.5	5.4	1.6	〃	113	7.5	4.8	2.0	〃
34	8.1	6.4	1.3	〃	74	7.3	5.1	1.7	〃	114	7.5	5.9	1.7	〃
35	7.9	7.1	1.3	〃	75	7.1	5.0	1.7	〃	115	7.7	6.0	2.8	〃
36	8.1	6.5	1.5	〃	76	7.3	5.9	1.5	〃	116	8.6	5.2	2.2	〃
37	8.3	6.9	1.3	〃	77	7.2	5.3	1.9	〃	117	7.8	5.2	2.0	〃
38	7.4	5.3	1.7	〃	78	8.0	5.1	1.7	〃	118	7.9	5.3	1.7	〃
39	8.0	6.6	1.6	〃	79	7.7	5.2	1.7	〃	119	8.8	6.2	2.2	〃
40	7.9	6.3	1.6	〃	80	7.4	5.6	1.5	〃					

表11. G区出土かわらけ法量(2)―第18図 （単位cm）

No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型	No.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型
1	8.4	7.4	1.3	静止糸切り	II	42	7.9	5.8	1.4	静止糸切り	IIIa
2	8.0	6.2	1.4	〃	IIIa	43	8.2	6.6	1.5	〃	III
3	8.6	6.4	1.5	〃	IIIa	44	8.2	6.0	1.5	〃	II
4	8.7	6.2	1.6	〃	IIIa	45	8.5	6.4	1.7	〃	IIIa
5	8.8	6.7	1.6	〃	IIIa	46	7.3	6.1	1.5	〃	IIIa
6	9.0	6.4	1.5	〃	IIIa	47	8.2	6.0	1.7	〃	II
7	8.5	6.6	1.6	〃	II	48	8.1	6.1	1.4	〃	IIa
8	8.3	6.0	1.7	〃	II	49	8.6	6.5	1.5	〃	IIIa
9	8.0	6.1	1.6	〃	III	50	8.0	5.9	2.0	〃	IIIa
10	8.8	6.5	1.7	〃	IIIa	51	8.5	6.5	1.5	〃	II
11	9.5	6.7	1.9	〃	II	52	6.6	6.2	1.6	〃	I
12	9.0	6.5	1.9	〃	II	53	7.9	5.6	1.7	〃	III
13	8.8	6.5	1.7	〃	IIIa	54	7.5	5.8	1.5	〃	III
14	8.0	6.0	1.6	〃	III	55	8.0	6.5	1.7	〃	IIIa
15	8.3	6.3	1.6	〃	II	56	7.8	6.0	1.6	〃	IIIa
16	8.0	6.5	1.6	〃	III	57	8.1	6.5	1.9	〃	IIIa
17	8.3	6.8	1.3	〃	II	58	9.0	7.0	1.9	〃	IIIa
18	8.2	6.7	1.3	〃	II	59	9.1	5.6	2.0	〃	IIa
19	8.6	6.0	1.7	〃	II	60	9.4	7.1	2.0	〃	II
20	8.6	6.6	1.4	〃	II	61	9.3	6.3	2.2	〃	III
21	8.5	5.7	1.3	〃	II	62	9.2	7.1	2.1	〃	III
22	8.1	6.0	1.7	〃	IIIa	63	8.9	5.8	2.3	〃	IIIa
23	8.2	6.2	1.7	〃	IIIa	64	9.0	5.7	2.0	〃	IIIa
24	8.4	7.0	1.7	〃	IIIa	65	9.2	5.7	2.0	〃	IIIa
25	8.2	5.9	1.5	〃	III	66	9.7	5.5	1.8	〃	IIIa
26	7.7	6.5	1.6	〃	III	67	9.0	6.0	2.1	〃	IIIa
27	8.3	5.8	1.5	〃	III	68	9.0	6.0	2.5	〃	IIIa
28	7.9	6.5	1.8	〃	II	69	9.4	6.0	2.3	〃	IIIa
29	7.8	6.6	1.3	〃	II	70	9.2	5.8	2.8	〃	IIIa
30	8.1	5.8	1.3	〃	IIc	71	7.4	6.0	1.8	手づくね	
31	7.7	7.5	1.5	〃	III	72	7.4	6.6	1.8	〃	
32	8.2	6.9	1.5	〃	II	73	7.5	8.0	2.9	回転糸切り	
33	8.7	6.6	1.5	〃	III	74	12.3	8.0	3.3	〃	
34	8.5	6.7	1.9	〃	IIIa	75	12.6	8.8	2.9	〃	
35	8.1	5.3	1.6	〃	II	76	12.0	8.2	3.3	〃	
36	8.5	6.6	1.3	〃	II	77	11.9	6.6	3.0	〃	
37	7.5	6.4	1.2	〃	Ic	78	12.0	6.7	3.0	〃	
38	8.8	6.6	1.7	〃	IIIa	79	12.0	7.0	3.3	〃	
39	8.0	6.4	1.5	〃	IIIa	80	13.0	7.6	3.5	〃	
40	8.9	6.9	1.7	〃	IIIa	81	12.3	8.0	3.6	〃	
41	8.2	6.1	1.6	〃	II	82	12.1	7.4	3.5	〃	

表 12

83	12.7	7.0	3.8	回転糸切り		88	12.2	8.4	3.5	回転糸切り	
84	12.2	7.5	3.4	〃		89	11.4	7.5	3.0	〃	
85	11.9	7.0	3.5	〃		90	12.5	7.0	3.8	〃	
86	12.2	7.0	3.2	〃		91	12.2	7.0	3.1	〃	
87	12.2	8.9	3.1	〃		92	11.8	8.9	3.0	静止糸切り	IIIa

表12．G区出土かわらけ法量(3)—第19図　**（単位cm）**

F・G区はかわらけ溜１の上層検出状況で、最もかわらけが密集して出土したブロックである。かわらけ溜１の中で東側に位置し、全体の範囲の½の面積を占めている。

北半分を占めるF区から出土したかわらけは、大部分が轆轤成形回転糸切り底の小型のかわらけで占めており、小型の静止糸切り底のかわらけとの比率は５：１の差となる。中型・大型のかわらけについても圧倒的に、轆轤成形糸切り底のかわらけの占める割合が大きい。

法量については、大型・小型と分類できるが、大型の中で、口径11cm代のかわらけがやや多く含まれている。

器型は回転糸切り底のかわらけについては、体部が内彎傾向を示すものが大部分を占める。大型のかわらけの中には、薄手の傾向を示すものが少々含まれる。又体部が直線的に開き、側面観逆台型を示すようなものも若干含まれる。小型のかわらけについてもバリエーションはあるが、体部が内彎傾向を示すものが大部分を占める。静止糸切り底のかわらけは、回転糸切り底のかわらけとは逆に、体部が直線的に開くタイプ、体部が外反傾向を示すタイプが大部分を占め、体部が内彎傾向を示すものが少ない。大型に関しては体部の中程まで外反し、口縁部は内彎する器高の高いタイプが注目される。

南半分を占めるG区から出土したかわらけについては、F区と同様に回転糸切り底の小型のかわらけが大部分を占めている。

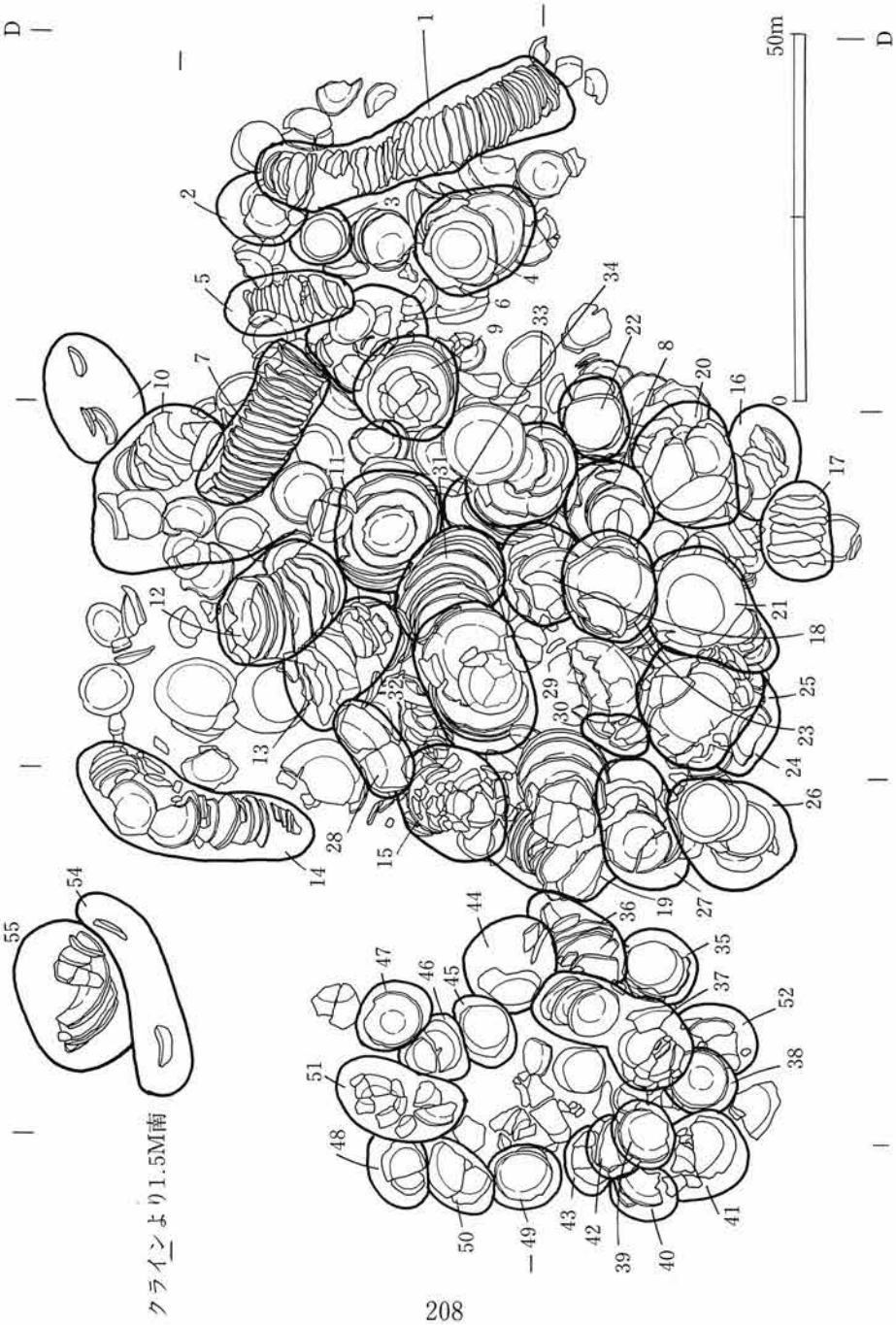
器型は回転糸切り底のかわらけについては、体部が内彎傾向を示すものが多いが、F区に比べ体部が直線的に開くもの、静止糸切り底のように体部下方がやや外反傾向を示し、高台状を呈するものなどが目立つ。静止糸切り底のかわらけについては、F区と同様に体部が直線的に開くタイプ、体部が外反傾向を示すタイプが多いが、体部が内彎傾向を示すものも若干含まれている。この他、体部が外反傾向が強く、器高の高い口径9.0cm代のかわらけの存在が目立つ。手づくねかわらけが２ヶ出土しているが、外面の稜のはっきりしないタイプである。

かわらけ溜１の上層から検出されたかわらけは、圧倒的に回転糸切り底の小型のかわらけの出土数が大部分を占めた。静止糸切り底のかわらけに、関しては、かわらけ溜１の東側部分にあたるG・F区からの出土数が大部分を占め、西側部分については、全体のかわらけの出土数も少ないが、静止糸切り底のかわらけに関しては、ほとんど出土しなかった事を考えると、ある程度の範囲によるかわらけのタイプのまとまりがあるのではないかと考えられる。

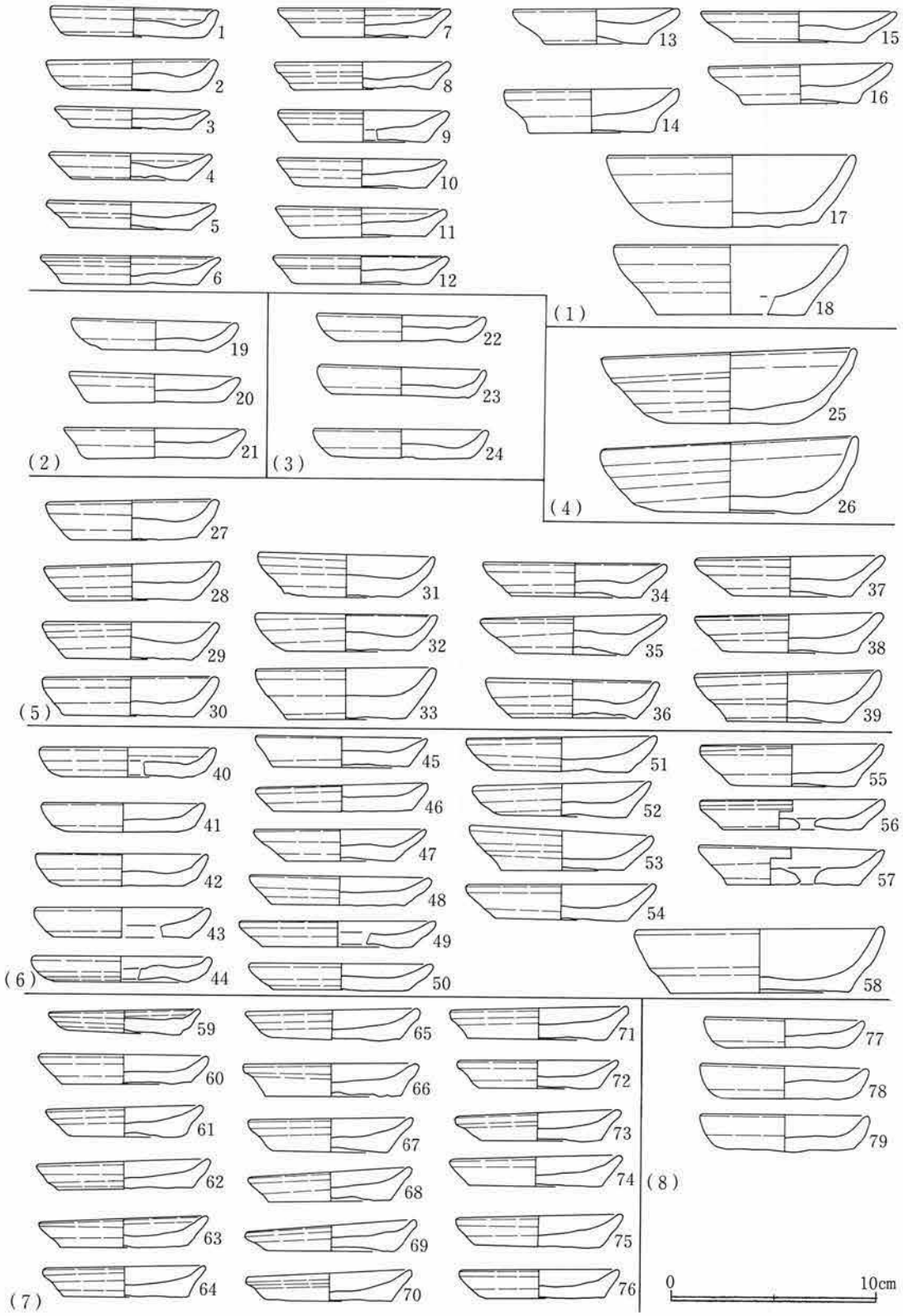
G区下層検出遺構

かわらけ溜１の下層検出遺構は、かわらけ溜の範囲の東南側、上層遺構においてはG区の下部に位置する。よってかわらけ溜１下層検出かわらけは、G区下部出土かわらけと同一意味を示す。

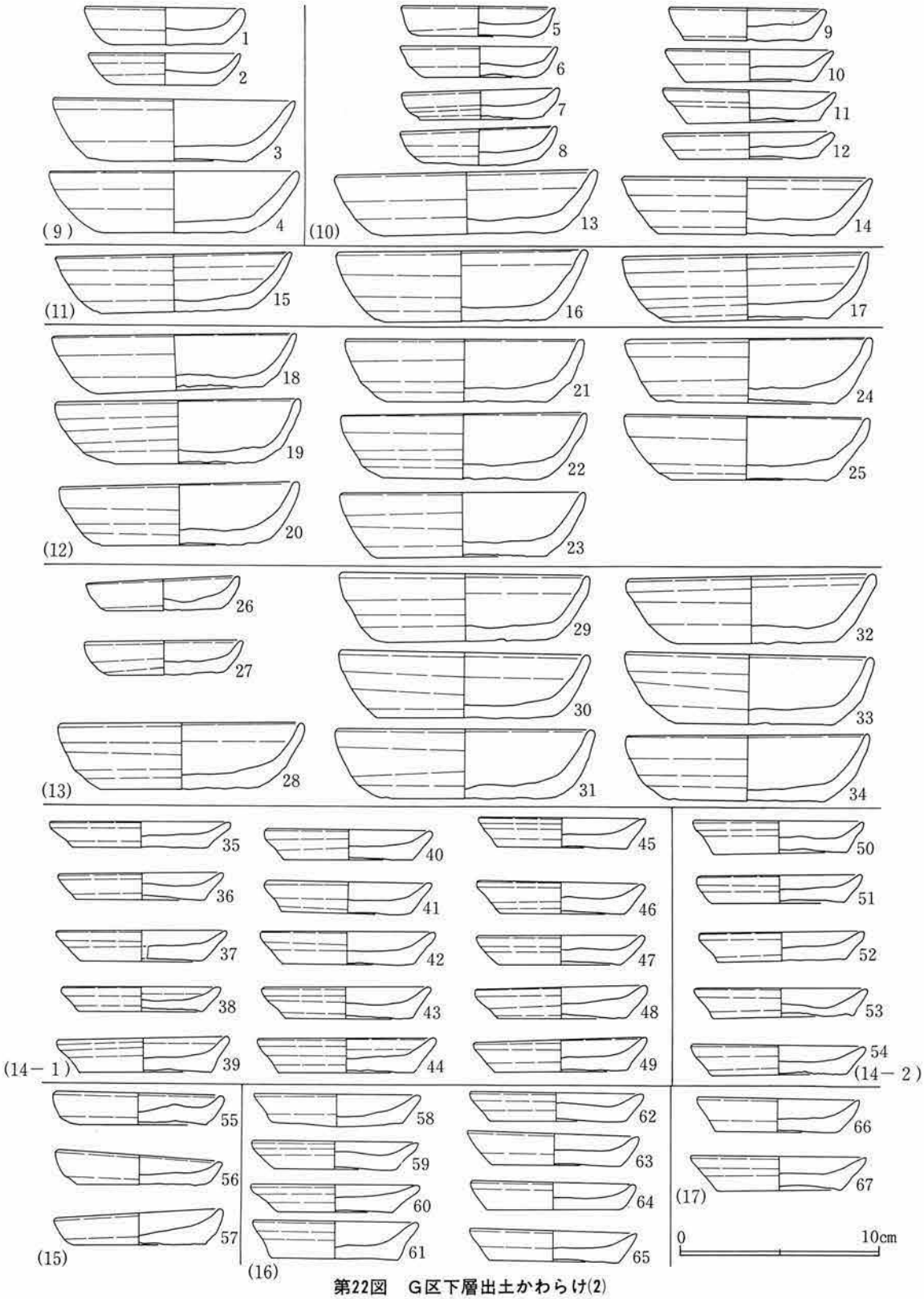
下層から検出されたかわらけは、上層で検出されたかわらけの状況とは異なり、同一タイプと考えられるかわらけが何枚にも重なり廃棄されていた。これを検出出来る範囲で取り挙げ、検出図と対応させブロックごとに出土かわらけをまとめて示した。又法量に関しても図に対応させ示した。



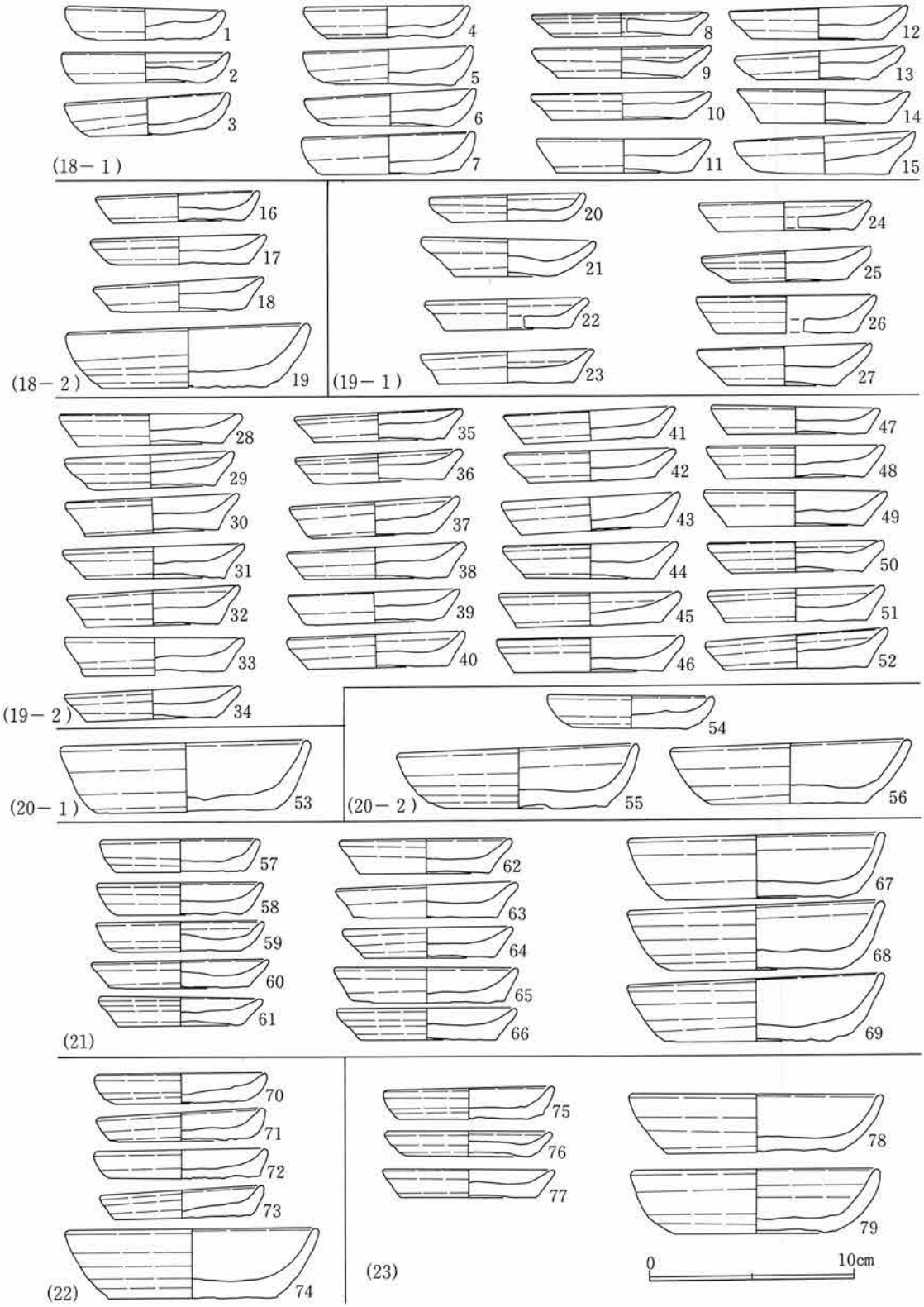
第20図　G区下層かわらけ溜



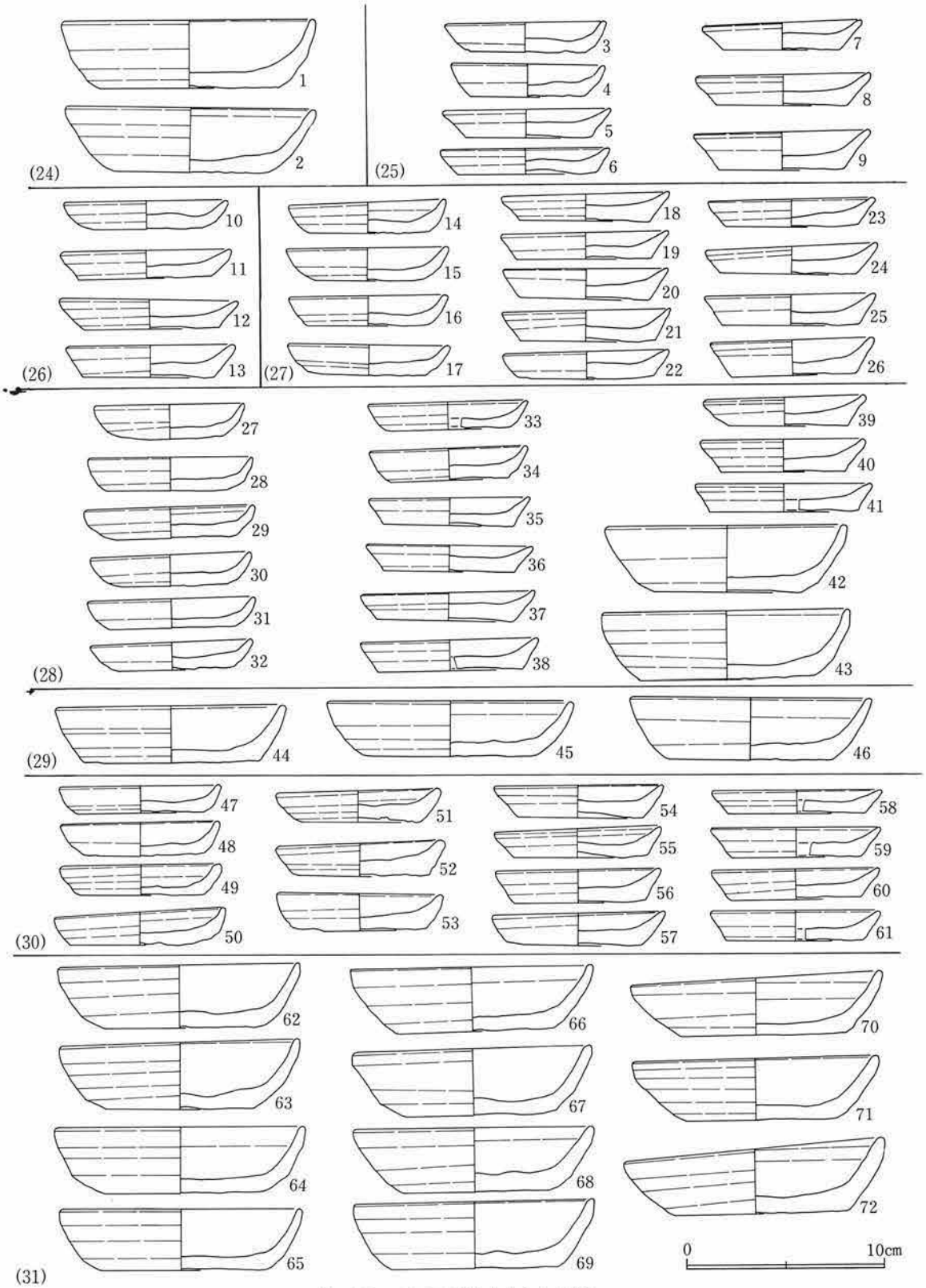
第21図　G区下層出土かわらけ(1)



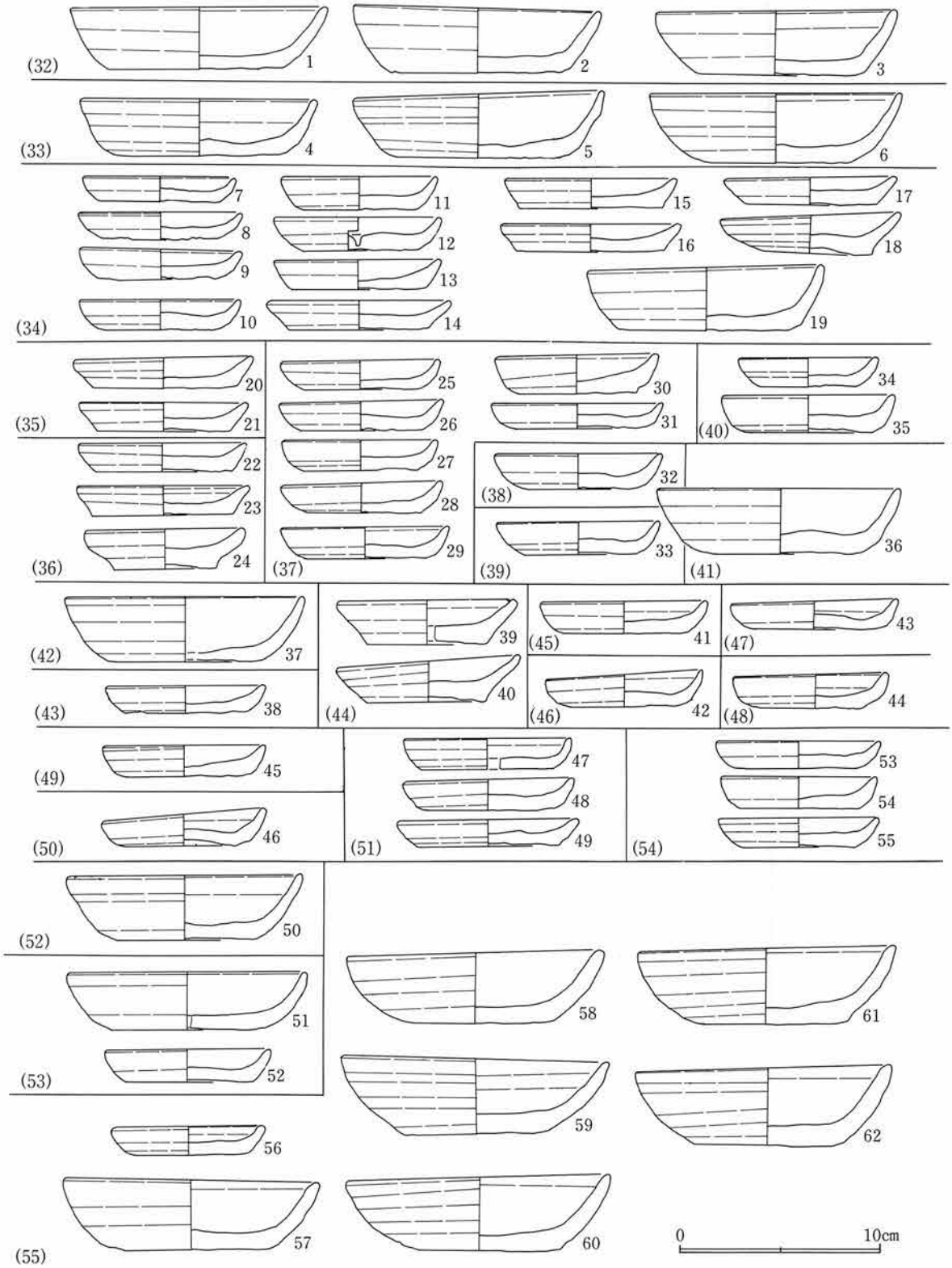
第22図　G区下層出土かわらけ(2)



第23図　G区下層出土かわらけ(3)



第24図　G区下層出土かわらけ(4)



第25図　G区下層出土かわらけ(5)

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1		8.0	6.8	1.4	回転糸切り		41		7.7	5.4	1.4	回転糸切り	
2		8.1	6.3	1.5	〃		42		8.2	6.0	1.6	〃	
3		7.2	5.8	1.0	静止糸切り	II	43		8.4	6.6	1.5	〃	
4		7.8	5.6	1.3	〃	II	44		8.5	6.5	1.3	〃	
5		8.0	6.0	1.3	〃	IIIa	45		8.3	6.6	1.5	静止糸切り	II
6		8.5	6.1	1.4	〃	III	46		8.2	6.8	1.2	〃	II
7		8.3	6.1	1.4	〃	IIc	47		8.3	5.3	1.5	〃	IIIa
8		8.4	6.7	1.3	〃	IIIa	48		8.7	6.5	1.4	〃	II
9	1	8.0	6.2	1.5	〃	II	49	6	9.5	7.4	1.3	〃	IIIa
10		8.0	6.5	1.4	〃	II	50		8.8	6.6	1.3	〃	II
11		8.0	6.4	1.4	〃	IIc	51		9.2	6.5	1.7	〃	I
12		8.3	6.5	1.4	〃	IIc	52		8.6	6.2	1.6	〃	II
13		8.0	5.0	1.7	〃	III	53		8.8	6.0	1.9	〃	II
14		8.4	6.1	2.0	〃	IIIa	54		9.0	6.5	1.7	〃	II
15		9.9	6.2	1.5	〃	IIIa	55		8.8	6.1	1.9	〃	IIIa
16		8.8	5.6	1.9	〃	IIIa	56		8.8	6.8	1.5	〃	IIIa
17		12.0	8.0	3.5	回転糸切り		57		8.9	6.9	1.8	〃	II
18		11.2	7.2	3.4	静止糸切り	IIIa	58		12.4	8.7	2.8	〃	IIIa
19		8.0	5.3	1.4	回転糸切り		59		7.3	5.5	1.1	回転糸切り	
20	2	8.2	6.7	1.3	静止糸切り	II	60		8.0	6.4	1.4	静止糸切り	II
21		8.8	7.0	1.4	〃	II	61		7.5	5.8	1.4	〃	III
22		8.1	6.4	1.2	回転糸切り		62		8.0	6.6	1.4	〃	II
23	3	8.0	6.6	1.4	〃		63		8.0	7.8	1.4	〃	II
24		8.4	6.8	1.4	〃		64		7.8	6.1	1.5	〃	III
25	4	12.2	6.0	3.5	回転糸切り		65		8.3	6.3	1.5	〃	IIIa
26		12.4	7.1	3.4	〃		66		8.3	6.6	1.6	〃	IIIa
27		8.2	6.2	1.9	回転糸切り		67		7.9	5.6	1.6	〃	III
28		8.4	6.0	1.8	〃		68	7	7.8	6.0	1.4	〃	III
29		8.4	6.2	1.8	〃		69		8.2	6.2	1.3	〃	II
30		8.3	6.5	1.9	〃		70		8.0	6.2	1.4	〃	II
31		8.5	5.7	2.0	〃		71		8.5	6.8	1.5	〃	IIa
32		8.8	6.2	1.8	〃		72		7.6	5.8	1.4	〃	IIa
33	5	8.5	6.0	1.5	〃		73		7.9	5.9	1.4	〃	IIc
34		8.8	6.4	1.6	静止糸切り	IIIa	74		8.1	6.4	1.5	〃	II
35		8.9	5.4	1.8	〃	IIIa	75		7.9	6.1	1.5	〃	II
36		8.3	6.0	1.8	〃	IIa	76		7.5	5.8	1.4	〃	II
37		9.0	5.7	1.9	〃	III	77		7.7	5.8	1.4	回転糸切り	
38		9.0	6.7	1.9	〃	IIIa	78		8.0	6.0	1.6	〃	
39		9.0	5.8	2.4	〃	IIIa	79	8	8.0	6.8	1.8	〃	
40	6	8.4	6.4	1.4	回転糸切り								

表13．G区下層出土かわらけ法量(1)　単位（cm）

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	9	7.8	5.6	1.8	回転糸切り		35	13	9.0	6.8	1.4	静止糸切り	IIIa
2		7.5	4.9	1.6	〃		36	14-1	8.1	6.5	1.3	静止糸切り	II
3		12.0	8.0	3.1	〃		37		8.5	6.1	1.5	〃	II
4		12.3	7.5	3.1	〃		38		7.9	6.3	1.2	〃	II
5	10	7.5	5.8	1.5	回転糸切り		39		8.6	6.7	1.6	〃	IIIa
6		7.8	5.7	1.5	〃		40		8.2	6.5	1.5	〃	II
7		7.8	6.2	1.5	〃		41		8.2	6.5	1.6	〃	II
8		7.7	5.8	1.8	〃		42		8.6	6.5	1.7	〃	II
9		7.8	6.4	1.6	〃		43		8.4	6.4	1.6	〃	II
10		8.3	6.4	1.6	静止糸切り	II	44		8.8	6.8	1.7	〃	II
11		8.6	6.8	1.6	〃	IIIa	45		8.3	6.6	1.5	〃	II
12		8.4	7.0	1.3	〃	II	46		8.2	6.3	1.7	〃	II
13		12.9	9.6	3.1	回転糸切り		47		8.3	6.2	1.5	〃	IIa
14		12.4	8.9	2.9	〃		48		8.4	6.5	1.5	〃	IIa
15	11	11.8	7.4	2.9	回転糸切り		49		8.6	6.7	1.6	〃	IIIa
16		12.4	8.6	3.5	〃		50	14-2	8.3	6.7	1.6	静止糸切り	IIa
17		12.1	8.1	3.3	静止糸切り	I	51		8.0	6.7	1.4	〃	IIa
18	12	12.2	8.5	2.8	回転糸切り		52		8.2	6.5	1.4	〃	IIa
19		12.2	7.7	3.2	〃		53		8.5	7.0	1.4	〃	II
20		12.1	7.9	3.1	〃		54		8.6	6.8	1.5	〃	IIa
21		11.8	8.3	3.1	〃		55	15	8.2	6.5	1.5	回転糸切り	
22		12.3	8.0	3.2	〃		56		8.4	7.0	1.6	〃	
23		12.2	8.7	3.2	〃		57		8.2	6.7	1.6	〃	
24		12.2	9.1	3.2	〃		58	16	8.3	6.7	1.6	静止糸切り	II
25		12.2	8.0	3.2	〃		59		8.3	6.2	1.4	〃	III
26	13	7.5	5.7	1.6	回転糸切り		60		8.3	5.8	1.4	〃	III
27		7.7	5.7	1.7	〃		61		8.1	6.4	1.4	〃	III
28		12.1	8.0	3.3	〃		62		8.6	6.8	1.5	〃	II
29		12.3	8.5	3.4	〃		63		8.5	6.4	1.6	〃	II
30		12.4	8.8	3.3	〃		64		8.2	6.7	1.4	〃	II
31		12.7	8.7	3.5	〃		65		8.3	6.5	1.6	〃	II
32		12.3	8.2	3.4	〃		66	17	8.0	6.2	1.7	静止糸切り	II
33		12.2	8.0	3.5	〃		67		8.8	6.2	1.7	〃	III
34		12.0	8.0	3.3	〃								

表14．G区下層出土かわらけ法量(2)　単位（cm）

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	18-1	7.5	5.2	1.4	回転糸切り		41	19-2	8.2	6.5	1.5	静止糸切り	II
2		8.1	6.3	1.4	〃		42		8.2	6.2	1.5	〃	II
3		7.9	5.6	1.8	〃		43		8.6	7.0	1.7	〃	II
4		7.8	5.6	1.6	〃		44		8.4	6.3	1.7	〃	II
5		8.1	6.4	1.6	〃		45		8.6	7.1	1.6	〃	II
6		8.2	5.8	1.6	〃		46		9.0	7.3	1.7	〃	IIa
7		8.3	6.5	1.4	〃		47		8.1	6.8	1.3	〃	II
8		8.5	6.6	1.1	静止糸切り	II	48		8.5	6.8	1.6	〃	II
9		8.5	6.0	1.5	〃	II	49		8.8	6.7	1.7	〃	II
10		8.6	6.6	1.3	〃	IIa	50		8.4	6.3	1.5	〃	II
11		8.3	6.6	1.6	〃	II	51		8.4	6.9	1.6	〃	II
12		8.5	6.4	1.5	〃	IIa	52		8.8	7.0	1.6	〃	II
13		8.0	5.8	1.4	〃	I	53	20-1	11.9	8.7	3.3	回転糸切り	
14		8.3	6.2	1.6	〃	II	54	20-2	7.9	5.5	1.6	回転糸切り	
15		8.7	6.6	1.8	〃	IIIa	55		11.6	8.0	2.9	〃	
16	18-2	7.8	6.4	1.4	回転糸切り		56		11.5	7.5	2.9	〃	
17		8.3	6.5	1.4	静止糸切り	II	57	21	7.6	6.3	1.6	回転糸切り	
18		8.1	6.4	1.7	〃	III	58		8.0	6.0	1.6	〃	
19		11.7	8.0	2.9	回転糸切り		59		8.0	6.0	1.4	〃	
20	19-1	7.5	5.6	1.4	回転糸切り		60		8.5	6.8	1.3	静止糸切り	II
21		8.3	5.0	1.8	静止糸切り	I	61		7.8	6.1	1.4	〃	II
22		7.7	6.1	1.5	〃	III	62		8.3	6.3	1.7	〃	III
23		8.2	6.6	1.5	〃	III	63		8.6	7.0	1.6	〃	IIc
24		12.2	6.6	1.4	〃	II	64		8.1	6.4	1.5	〃	II
25		8.0	5.7	1.5	〃	IIIa	65		8.8	7.4	1.7	〃	II
26		8.7	6.8	1.8	〃	IIIa	66		8.6	6.7	1.5	〃	II
27		8.4	5.3	1.9	〃	IIa	67		12.2	8.5	3.1	回転糸切り	
28	19-2	8.2	7.1	1.5	回転糸切り		68		12.4	8.3	3.1	〃	
29		8.0	6.2	1.6	〃		69		12.4	8.0	3.1	〃	
30		8.4	6.	1.7	静止糸切り	III	70	22	8.1	7.6	1.5	回転糸切り	
31		8.3	6.7	1.6	〃	III	71		8.0	7.5	1.4	〃	
32		8.3	6.5	1.7	〃	III	72		8.3	7.3	1.4	〃	
33		8.6	6.8	1.8	〃	II	73		7.9	6.7	1.4	〃	
34		8.4	6.2	1.9	〃	II	74		12.1	8.2	3.4	〃	
35		8.1	6.4	1.4	〃	II	75	23	8.1	7.0	1.5	回転糸切り	
36		8.1	6.4	1.4	〃	II	76		8.0	6.0	1.5	〃	
37		8.1	6.1	1.6	〃	II	77		8.3	6.7	1.2	静止糸切り	II
38		8.5	7.0	1.5	〃	II	78		12.2	8.6	2.8	回転糸切り	
39		8.3	6.7	1.5	〃	II	79		11.8	8.0	3.1	〃	
40		8.5	6.9	1.6	〃	II							

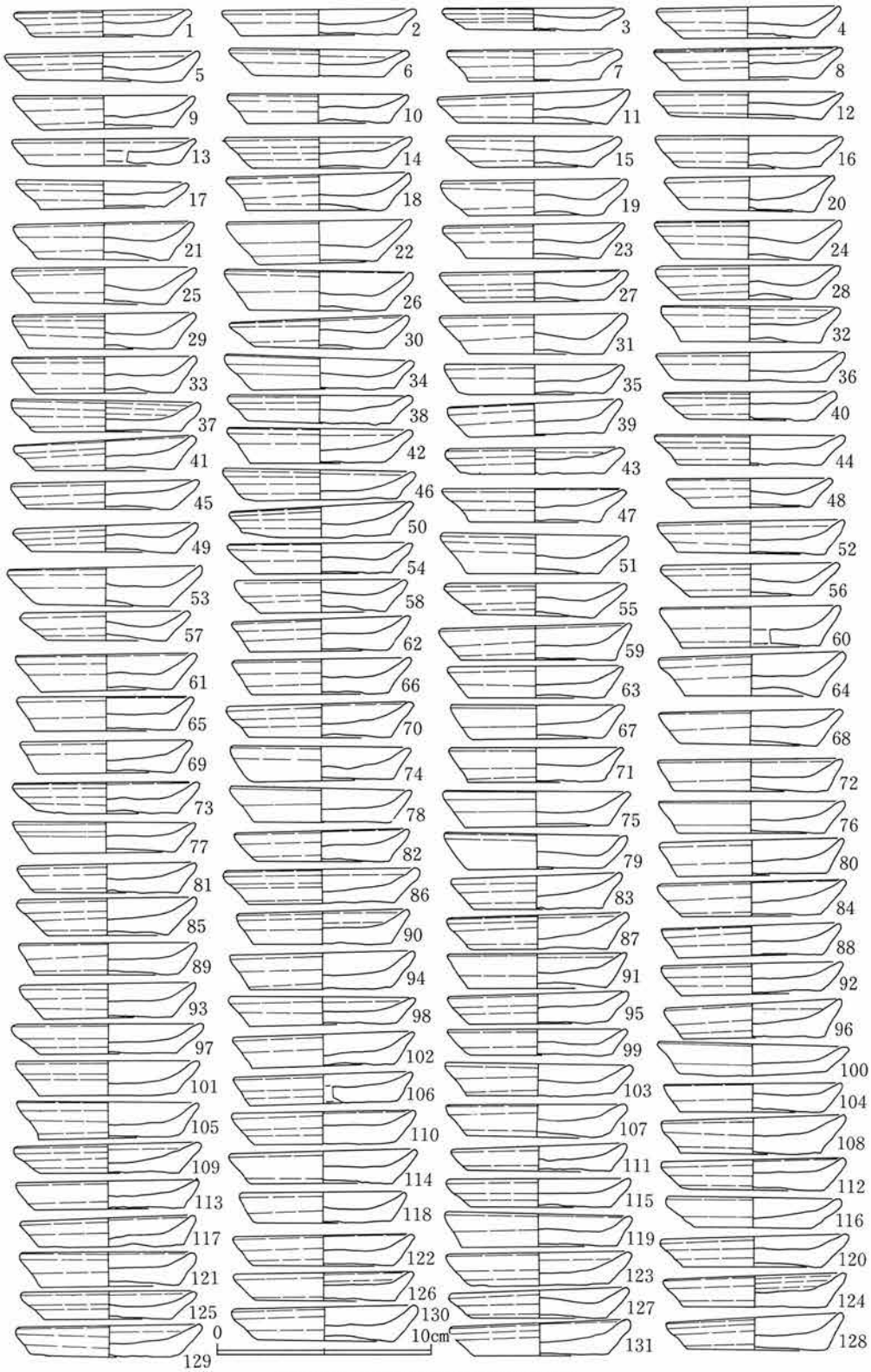
表15. G区下層出土かわらけ法量(3)　単位（cm）

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	24	12.5	9.0	3.4	回転糸切り		37	28	8.7	6.9	1.4	静止糸切り	IIa
2		12.5	7.8	3.3	〃		38		8.8	7.3	1.5	〃	II
3	25	8.0	5.8	1.5	回転糸切り		39		7.9	5.9	1.4	〃	IIc
4		7.5	5.8	1.5	〃		40		8.0	6.3	1.6	〃	III
5		8.4	6.4	1.4	静止糸切り	II	41		8.7	7.5	1.4	〃	II
6		8.4	6.9	1.3	〃	II	42		11.9	7.4	3.4	回転糸切り	
7		7.9	5.8	1.4	〃	II	43		12.3	8.8	3.4	〃	
8		8.5	6.5	1.6	〃	II	44	29	11.4	8.9	2.9	回転糸切り	
9		8.8	6.3	1.9	〃	II	45		12.2	8.7	2.8	〃	
10	26	8.1	5.5	1.4	回転糸切り		46		12.0	8.3	3.1	〃	
11		8.4	6.7	1.4	静止糸切り	IIa	47	30	8.0	6.4	1.4	回転糸切り	
12		8.8	6.8	1.5	〃	III	48		7.9	6.0	1.7	〃	
13		8.2	6.6	1.6	〃	III	49		7.8	6 4	1.5	〃	
14	27	7.8	6.0	1.6	回転糸切り		50		8.4	7.1	1.6	〃	
15		8.0	6.4	1.6	〃		51		8.1	6.0	1.5	〃	
16		7.8	6.2	1.6	〃		52		8.1	6.9	1.6	〃	
17		8.0	6.0	1.5	〃		53		8.2	6.9	1.9	〃	
18		8.3	6.5	1.3	静止糸切り	II	54		8.6	6.3	1.6	静止糸切り	II
19		8.4	6.8	1.3	〃	III	55		8.3	6.7	1.4	〃	II
20		8.2	6.5	1.5	〃	II	56		8.1	6.6	1.7	〃	II
21		8.4	6.8	1.6	〃	II	57		8.6	6.8	1.6	〃	II
22		8.2	6.8	1.4	〃	II	58		8.4	6.9	1.2	〃	II
23		8.3	6.7	1.4	〃	II	59		8.5	6.5	1.5	〃	II
24		8.6	6.9	1.4	〃	II	60		8.3	6.5	1.5	〃	II
25		8.6	6.9	1.5	〃	II	61		8.3	6.9	1.5	〃	II
26		8.0	6.4	1.8	〃	II	62	31	12.0	7.8	3.1	回転糸切り	
27		7.5	5.5	1.8	回転糸切り		63		11.9	7.5	3.4	〃	
28		8.2	6.0	1.7	〃		64		12.3	8.2	3.3	〃	
29		8.4	5.8	1.6	〃		65		12.0	8.0	3.1	〃	
30		8.0	5.5	1.6	〃		66		12.0	7.9	3.2	〃	
31		8.3	6.4	1.5	〃		67		11.8	7.9	3.4	〃	
32		8.0	5.9	1.4	〃		68		11.8	7.4	3.3	〃	
33		8.0	6.3	1.4	〃		69		11.9	8.4	3.4	〃	
34		7.8	6.0	1.6	〃		70		12.5	8.4	2.8	〃	
35		8.0	6.6	1.4	静止糸切り	III	71		12.2	7.7	3.1	〃	
36		8.3	6.7	1.3	〃	III	72		12.9	8.8	3.3	〃	

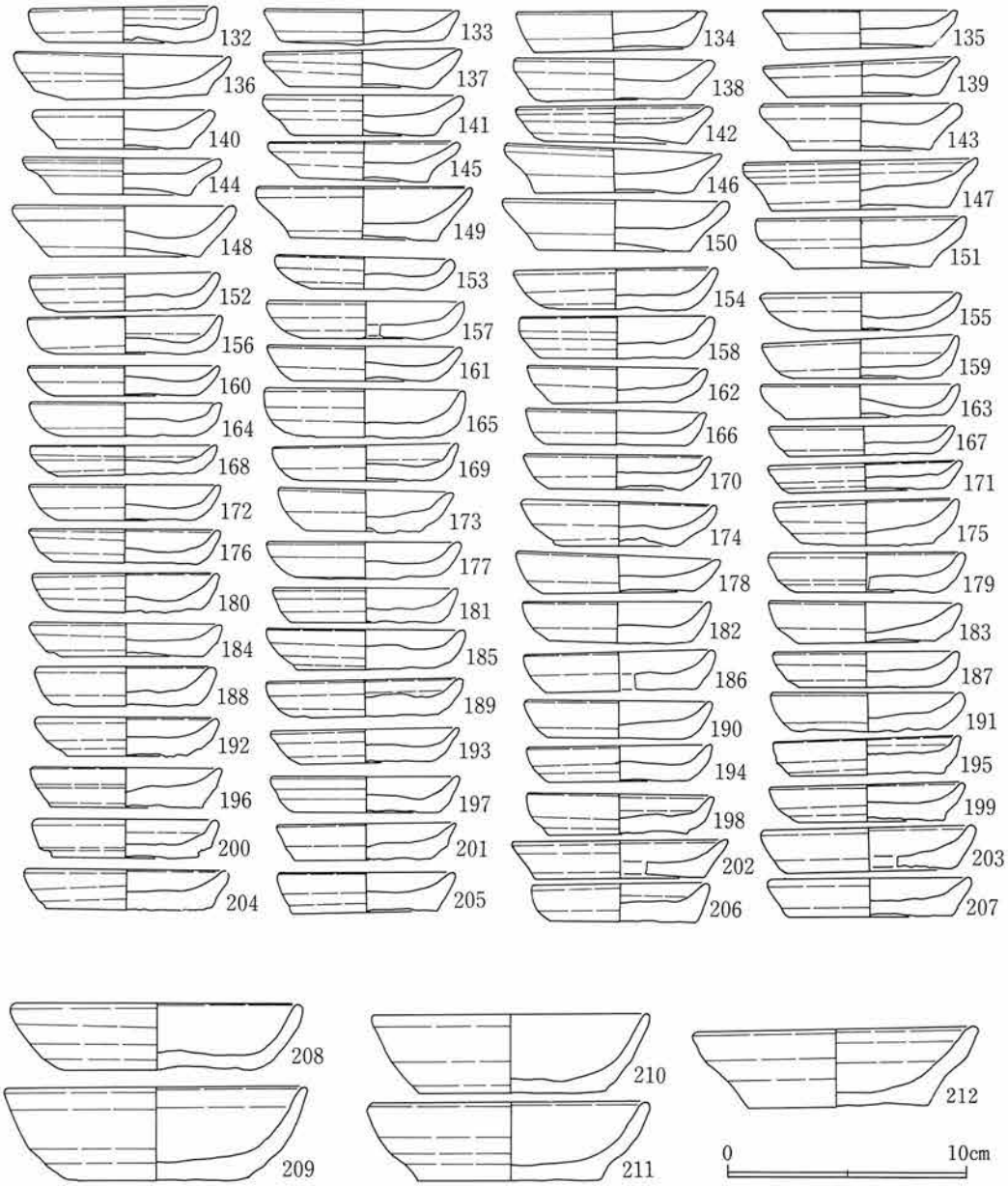
表16．G区下層出土かわらけ法量(4)　単位（cm）

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1		12.6	8.8	3.1	回転糸切り		32	38	8.3	5.0	1.8	回転糸切り	
2	32	12.2	8.5	3.2	〃		33	39	9.0	5.6	1.6	〃	
3		11.8	8.2	3.2	〃		34	40	6.8	4.9	1.5	〃	
4		11.6	8.4	3.8	〃		35		8.4	6.4	1.9	〃	
5	33	12.3	8.3	3.2	〃		36	41	11.9	7.0	3.3	〃	
6		12.9	7.0	3.5	〃		37	42	11.8	7.4	3.2	〃	
7		7.5	6.0	1.2	回転糸切り		38	43	7.7	6.1	1.4	〃	
8		8.0	5.8	1.4	〃		39	44	8.6	6.0	2.2	静止糸切り	II
9		7.8	6.0	1.5	〃		40		9.0	5.9	2.0	〃	IIIb
10		7.9	5.4	1.5	〃		41	45	8.2	6.0	1.6	回転糸切り	
11		7.6	5.8	1.7	〃		42	46	7.7	6.1	1.6	〃	
12		8.2	5.7	1.7	〃		43	47	8.2	6.7	1.4	〃	
13	34	8.3	6.8	1.5	〃		44	48	7.5	5.2	1.7	〃	
14		9.0	7.1	1.5	〃		45	49	8.0	6.4	1.5	〃	
15		8.4	7.2	1.5	静止糸切り	II	46	50	8.0	6.0	1.5	〃	
16		8.8	7.4	1.4	〃	II	47		8.2	6.5	1.5	〃	
17		8.3	6.5	1.4	〃	II	48	51	8.4	6.4	1.5	〃	
18		8.8	5.5	1.9	〃	IIIa	49		8.9	7.1	1.3	〃	
19		11.6	9.1	3.1	回転糸切り		50	52	11.5	7.0	3.2	〃	
20	35	8.8	7.2	1.5	静止糸切り	II	51	53	11.7	7.5	2.9	〃	
21		8.2	6.6	1.4	〃	II	52		8.0	6.3	1.6	〃	
22		8.2	6.8	1.4	〃	II	53		8.1	6.0	1.4	〃	
23	36	8.5	7.0	1.5	〃	III	54	54	7.7	6.0	1.6	〃	
24		7.2	5.0	2.0	〃	IIIa	55		8.0	5.6	1.4	〃	
25		7.8	5.8	1.4	回転糸切り		56		7.3	5.8	1.5	〃	
26		8.0	6.0	1.5	〃		57		12.5	8.0	3.5	〃	
27		7.6	5.8	1.5	〃		58		12.6	7.4	3.5	〃	
28	37	7.8	5.7	1.5	〃		59	55	13.1	7.2	3.8	〃	
29		8.3	6.0	1.6	〃		60		12.9	7.7	3.7	〃	
30		7.8	6.9	1.9	〃		61		12.6	7.5	3.8	〃	
31		8.4	6.0	1.8	〃		62		12.5	7.2	3.8	〃	

表17．G区下層出土かわらけ法量(5)　単位（cm）



第26図　G区下層出土かわらけ(6)



第27図　G区下層出土かわらけ(7)

No.	図版No.	口径	底径	器高	成　型	成形技法（底部）	No.	図版No.	口径	底径	器高	成　型	成形技法（底部）
1	図版6	7.9	6.4	1.2	静止糸切り	Ⅲ	42	図版6	8.5	6.3	1.6	静止糸切り	Ⅰb
2		9.0	7.3	1.2	〃	Ⅲ	43		8.0	6.8	1.2	〃	Ⅱ
3		8.3	6.3	1.0	〃	Ⅱ	44		8.6	6.8	1.4	〃	Ⅲ
4		8.3	6.2	1.5	〃	Ⅱ	45		8.6	6.9	1.3	〃	Ⅱ
5		8.9	7.3	1.3	〃	Ⅱ	46		8.8	7.0	1.4	〃	Ⅱ
6		8.2	6.0	1.2	〃	Ⅲ	47		8.3	6.2	1.5	〃	Ⅲ
7		7.9	6.1	1.5	〃	Ⅲ	48		7.4	5.5	1.4	〃	Ⅲ
8		8.6	6.3	1.5	〃	Ⅱ	49		8.4	6.8	1.2	〃	Ⅲa
9		8.3	6.1	1.5	〃	Ⅱb	50		8.5	7.0	1.4	〃	Ⅲ
10		8.3	6.7	1.4	〃	Ⅱ	51		8.5	6.2	1.8	〃	Ⅲa
11		8.8	7.0	1.4	〃	Ⅱ	52		8.6	6.9	1.5	〃	Ⅱ
12		8.7	7.2	1.2	〃	Ⅲ	53		8.8	6.2	1.8	〃	Ⅱa
13		8.5	7.2	1.2	〃	Ⅲ	54		8.5	6.4	1.4	〃	Ⅱ
14		8.6	6.2	1.4	〃	Ⅲ	55		8.2	5.5	1.5	〃	Ⅱ
15		7.8	5.5	1.4	〃	Ⅱ	56		8.0	5.7	1.5	〃	Ⅱ
16		8.5	6.7	1.5	〃	Ⅱ	57		7.5	5.5	1.4	〃	Ⅲ
17		7.9	5.8	1.3	〃	Ⅱ	58		7.8	5.8	1.5	〃	Ⅱ
18		8.4	6.5	1.7	〃	Ⅲa	59		8.8	7.2	1.6	〃	Ⅱ
19		8.4	6.3	1.7	〃	Ⅲa	60		8.3	6.4	1.4	〃	Ⅱ
20		8.1	6.3	1.6	〃	Ⅲa	61		8.3	6.2	1.7	〃	Ⅱ
21		8.0	6.1	1.7	〃	Ⅱ	62		8.3	6.5	1.5	〃	Ⅱ
22		8.5	5.7	2.0	〃	Ⅱ	63		8.1	6.4	1.5	〃	Ⅱ
23		8.3	6.3	1.6	〃	Ⅱ	64		8.4	6.3	1.9	〃	Ⅲa
24		8.6	4.4	1.8	〃	Ⅱ	65		8.0	6.6	1.6	〃	Ⅲ
25		8.4	6.3	1.7	〃	Ⅲ	66		8.2	6.4	1.6	〃	Ⅲ
26		8.5	6.4	1.8	〃	Ⅱa	67		8.0	6.2	1.6	〃	Ⅱ
27		8.5	6.5	1.4	〃	Ⅱ	68		8.3	6.4	1.6	〃	Ⅱc
28		8.2	6.3	1.6	〃	Ⅱa	69		7.8	6.4	1.5	〃	Ⅱc
29		8.3	6.8	1.6	〃	Ⅱ	70		8.4	6.7	1.6	〃	Ⅲ
30		8.2	6.1	1.4	〃	Ⅱ	71		8.0	6.4	1.6	〃	Ⅱ
31		8.4	6.3	1.8	〃	Ⅱ	72		8.4	7.2	1.5	〃	Ⅱ
32		8.1	6.5	1.6	〃	Ⅲa	73		8.5	6.7	1.4	〃	Ⅲ
33		8.3	6.5	1.7	〃	Ⅱ	74		8.3	6.5	1.6	〃	Ⅱ
34		8.6	6.6	1.5	〃	Ⅱ	75		8.5	6.8	1.7	〃	Ⅲ
35		8.3	6.9	1.4	〃	Ⅱ	76		8.5	6.8	1.5	〃	Ⅱ
36		8.8	7.0	1.4	〃	Ⅲa	77		8.4	6.7	1.4	〃	Ⅱ
37		8.5	6.9	1.4	〃	Ⅱ	78		8.3	6.4	1.6	〃	Ⅱ
38		8.3	6.7	1.3	〃	Ⅱ	79		8.4	6.4	1.6	〃	Ⅱ
39		7.9	6.4	1.5	〃	Ⅱ	80		8.4	7.0	1.6	〃	Ⅱ
40		7.8	6.0	1.3	〃	Ⅲ	81		8.1	6.8	1.3	〃	Ⅱ
41		8.2	6.5	1.4	〃	Ⅱ	82		8.0	6.2	1.4	〃	Ⅱ

No.	図版No.	口径	底径	器高	成　形	器型	No.	図版No.	口径	底径	器高	成　形	器型
83	図版6	8.8	6.0	1.5	静止糸切り	IIIa	108	図版6	8.6	6.6	1.7	静止糸切り	II
84		8.5	6.5	1.6		II	109		8.4	6.5	1.4	〃	II
85		7.7	6.0	1.4		II	110		8.4	6.6	1.5	〃	II
86		8.9	6.8	1.6		II	111		8.1	6.7	1.2	〃	II
87		8.2	6.4	1.6		III	112		8.4	6.6	1.4	〃	II
88		8.2	6.7	1.4		II	113		8.3	7.0	1.3	〃	II
89		8.1	6.7	1.5		II	114		8.6	6.8	1.5	〃	II
90		7.9	6.4	1.5		II	115		8.5	6.6	1.3	〃	II
91		8.2	6.5	1.6		II	116		8.0	5.4	1.4	〃	II
92		8.3	6.5	1.4		II	117		8.0	6.8	1.4	〃	II
93		8.1	6.0	1.6		IIIa	118		7.6	6.4	1.4	〃	II
94		8.4	7.5	1.6		II	119		8.5	7.2	1.5	〃	II
95		8.3	6.5	1.4		IIIa	120		8.5	6.5	1.4	〃	II
96		8.2	6.5	1.6		II	121		8.0	6.4	1.6	〃	II
97		8.5	6.4	1.4		III	122		7.4	6.5	1.4	〃	II
98		8.5	6.8	1.3		IIc	123		8.4	6.5	1.5	〃	II
99		8.2	6.6	1.2		III	124		8.3	6.6	1.5	〃	II
100		8.6	7.0	1.5		II	125		8.4	6.8	1.3	〃	II
101		8.3	6.4	1.7		II	126		8.2	6.5	1.3	〃	II
102		8.3	6.7	1.5		III	127		8.0	6.3	1.3	〃	II
103		8.5	6.9	1.5		II	128		8.0	6.5	1.5	〃	II
104		8.1	6.5	1.3		II	129		8.3	6.9	1.5	〃	II
105		8.2	6.2	1.7		Ic	130		8.4	6.5	1.5	〃	II
106		8.2	6.9	1.4		II	131		8.2	6.3	1.5	〃	II
107		8.1	6.5	1.5		Ic							

表18　G区　下出土かわらけ法量(6)　　**単位(cm)**

かわらけ溜の下層出土かわらけは、上層で検出されたかわらけに比べ統一的な傾向を示した。検出状況にまとまりが認められ、一定方向にまとまった個数のかわらけが重複していた事から、取り挙げた各ブロックのかわらけのタイプはほぼ同一傾向を示し、法量においても一定傾向を示すと考えられる。

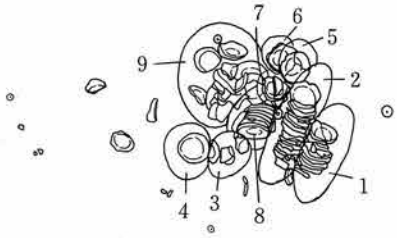
各ブロックのかわらけは、同一タイプのかわらけのみでまとまっているもの、２種類又は３種類のタイプのかわらけが数枚づつまとまっているものなど、各ブロック内のまとまり方はそれぞれ違うが、遺物取り挙げ時の困難な状況を考慮すると、数種類のタイプのかわらけが含まれていたとしても、各ブロックのかわらけのタイプが同一傾向を示す事は大きな意味を有するものと考えられる。又数量に関しても同ブロック内において全て図化する事は不可能であったため、同一ブロック内における、同一種類の枚数はそれぞれ一定ではなかった。その中で19－２ブロックは、若干の法量差があるものの、23ヶ全てが同一器型を示す静止糸切り底のかわらけであり、その他２ケは回転糸切り底のかわらけであるが同一器型を示した事は、図化した中では最大25枚のまとまりがあり、実際にはそれ以上の数量のまとまりがあったと考えられる。

No.	図版ブロック	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型	No.	図版ブロック	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器型
132	図版6	7.7	6.7	1.5	静止糸切り	Ⅰb	173	図版6	7.1	4.7	1.6	回転糸切り	
133		8.1	6.8	1.5	〃	Ⅱ	174		7.8	6.0	1.4	〃	
134		7.8	6.5	1.6	〃	Ⅱ	175		7.8	5.8	1.6	〃	
135		8.0	6.1	1.6	〃	Ⅱa	176		7.9	6.1	1.4	〃	
136		8.8	7.2	1.9	〃	Ⅱ	177		8.0	6.0	1.5	〃	
137		8.1	6.0	1.6	〃	Ⅱ	178		8.5	6.4	1.5	〃	
138		8.0	6.3	1.8	〃	Ⅱ	179		8.1	5.8	1.7	〃	
139		8.0	6.4	1.5	〃	Ⅱ	180		7.6	6.0	1.6	〃	
140		7.4	5.5	1.6	〃	Ⅲa	181		7.5	6.3	1.5	〃	
141		8.2	6.1	1.7	〃	Ⅲa	182		7.7	6.0	1.7	〃	
142		8.0	6.0	1.5	〃	Ⅱ	183		7.9	5.8	1.7	〃	
143		8.0	5.8	1.8	〃	Ⅲ	184		7.7	4.9	1.4	〃	
144		8.0	5.7	1.5	〃	Ⅲ	185		8.1	5.8	1.7	〃	
145		7.9	5.5	1.6	〃	Ⅲ	186		7.8	6.3	1.7	〃	
146		9.0	6.7	1.8	〃	Ⅲ	187		7.6	5.6	1.5	〃	
147		8.6	7.5	2.0	〃	Ⅱb	188		7.3	6.1	1.7	〃	
148		9.1	6.3	2.1	〃	Ⅱ	189		8.0	6.0	1.5	〃	
149		9.0	6.2	1.7	〃	Ⅱa	190		7.7	5.7	1.6	〃	
150		9.3	6.4	2.1	〃	Ⅲa	191		7.9	6.2	1.6	〃	
151		8.7	5.8	2.1	〃	Ⅲa	192		7.9	6.2	1.6	〃	
152		7.8	5.8	1.5	回転糸切り		193		7.8	5.5	1.4	〃	
153		7.3	5.0	1.4	〃		194		7.6	5.8	1.5	〃	
154		8.3	5.4	1.7	〃		195		7.8	6.5	1.5	〃	
155		8.1	5.5	1.6	〃		196		7.8	6.4	1.6	〃	
156		8.0	6.1	1.5	〃		197		7.7	6.0	1.5	〃	
157		8.0	6.0	1.5	〃		198		7.7	5.8	1.7	〃	
158		7.9	6.1	1.7	〃		199		8.1	6.2	1.5	〃	
159		8.1	5.3	1.6	〃		200		7.5	6.2	1.6	〃	
160		7.8	5.8	1.3	〃		201		7.4	5.7	1.5	〃	
161		8.0	5.9	1.4	〃		202		8.9	7.0	1.6	〃	
162		7.4	5.3	1.5	〃		203		8.7	7.0	1.8	〃	
163		8.3	6.9	1.4	〃		204		8.3	7.2	1.7	〃	
164		7.8	5.6	1.4	〃		205		7.2	6.1	1.7	〃	
165		8.1	6.5	2.0	〃		206		7.3	6.2	1.6	〃	
166		7.5	6.0	1.4	〃		207		8.4	7.0	1.6	〃	
167		7.8	6.2	1.2	〃		208		12.0	8.0	2.8	〃	
168		7.7	5.8	1.2	〃		209		12.5	7.8	3.9	〃	
169		7.6	6.0	1.5	〃		210		11.4	7.3	3.3	静止糸切り	Ⅰ
170		7.7	5.7	1.4	〃		211		11.5	7.6	3.2	〃	Ⅲa
171		8.0	6.5	1.1	〃		212		11.8	7.5	3.2	〃	Ⅲa
172		7.9	5.6	1.5	〃								

(単位cm)

表19. G区下出土かわらけ法量(7)

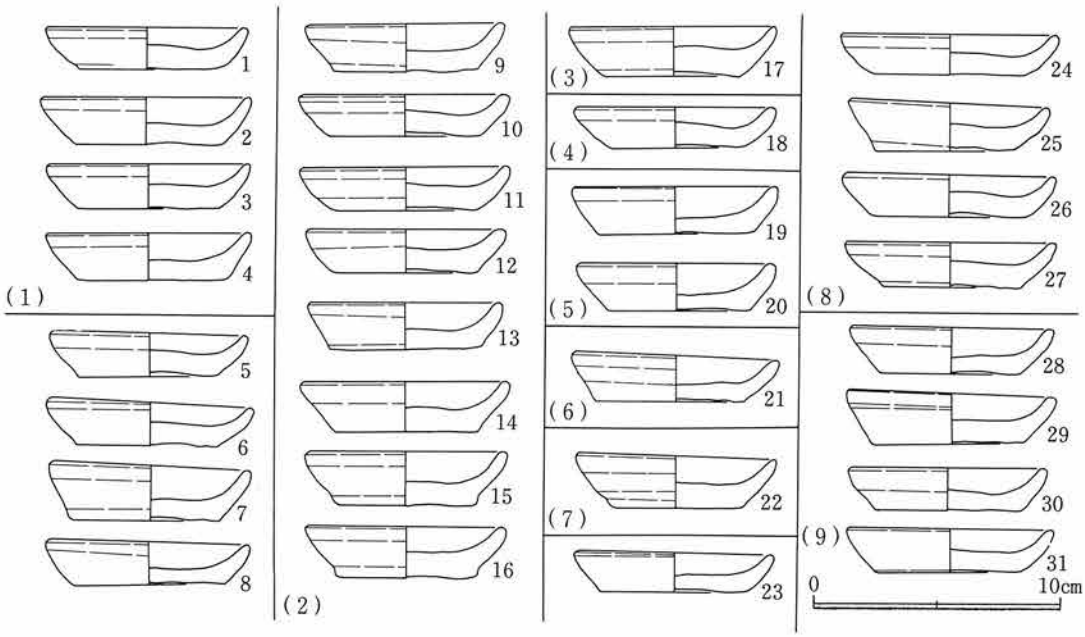
かわらけ溜 2



かわらけ溜２の検出状況も、かわらけ溜１下層と同様にかわらけが何枚にも重なった状態で発見された。溜２においても溜１下層と同様に、可能な限りブロックごとに取り挙げ図化し、図・表をそれぞれ対応させ以下に示した。

0　50cm

第28図　かわらけ溜２検出図



第29図　かわらけ溜２出土かわらけ

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	1	8.0	5.3	1.7	静止糸切り	I	17	3	8.3	5.4	2.0	静止糸切り	I
2		8.3	5.8	2.0	〃	I	18	4	7.8	5.0	1.7	〃	I
3		8.0	5.6	1.8	〃	I	19	5	8.0	6.4	1.9	〃	IIIa
4		8.2	6.0	1.9	〃	II	20		7.7	5.7	1.9	〃	IIa
5	2	7.7	5.6	1.8	静止糸切り	I	21	6	8.2	6.0	1.9	〃	I
6		8.0	5.6	1.8	〃	I	22	7	7.0	5.3	2.1	〃	IIa
7		7.8	6.0	2.2	〃	IIa	23	8	7.8	6.0	1.6	〃	I

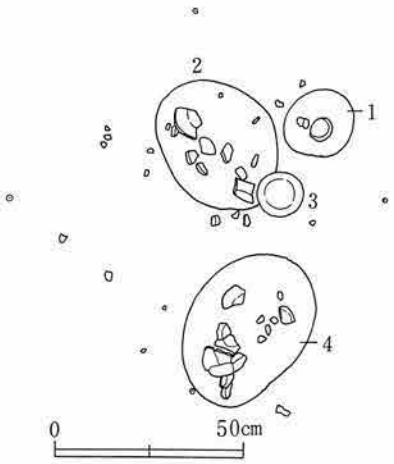
表 20

8		7.9	6.1	1.8	静止糸切り	I	24		8.6	6.0	1.6	静止糸切り	I
9		7.7	5.8	1.9	〃	I	25	8	7.8	5.6	2.0	〃	IIa
10		8.0	6.0	1.7	〃	IIa	26		8.2	6.1	1.7	〃	I
11		8.2	5.7	1.7	〃	I	27		8.3	5.6	1.8	〃	IIIa
12	2	7.7	5.7	1.8	〃	II	28		8.1	5.6	1.8	〃	IIa
13		7.5	6.2	1.9	〃	IIIa	29		8.4	6.1	2.1	〃	IIa
14		8.1	5.8	2.0	〃	IIa	30	9	7.7	5.9	1.7	〃	IIa
15		7.8	5.6	2.2	〃	IIIa	31		8.1	5.8	1.8	〃	I
16		7.8	5.7	2.1	〃	IIIa							

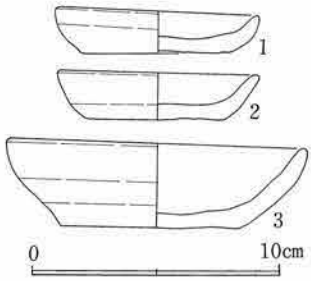
表20．溜２．出土かわらけ法量(1)　　単位（cm）

かわらけ溜２出土かわらけは、全て小型の静止糸切り底のかわらけであった。各ブロックの器型は、ほぼ同一傾向を示していると考えられる。

かわらけ溜３



第30図 かわらけ溜３かわらけ検出図



第31図かわらけ溜出土かわらけ

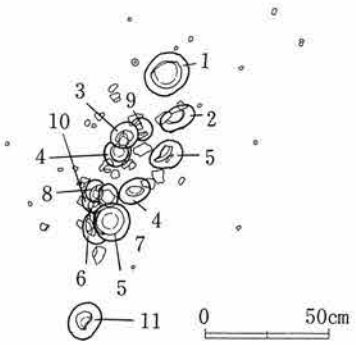
かわらけ溜３は、溜１、２とは検出状況が若干異なり面上に数枚まとまって発見された。図化可能なものに関しては取り挙げ、図・表と対応させ以下に示した。

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	1	8.1	6.0	1.7	回転糸切り		3	3	12.0	7.3	3.4	回転糸切り	
2	2	8.1	5.5	1.9	〃								

表21．溜３．出土かわらけ法量(1)　単位（cm）

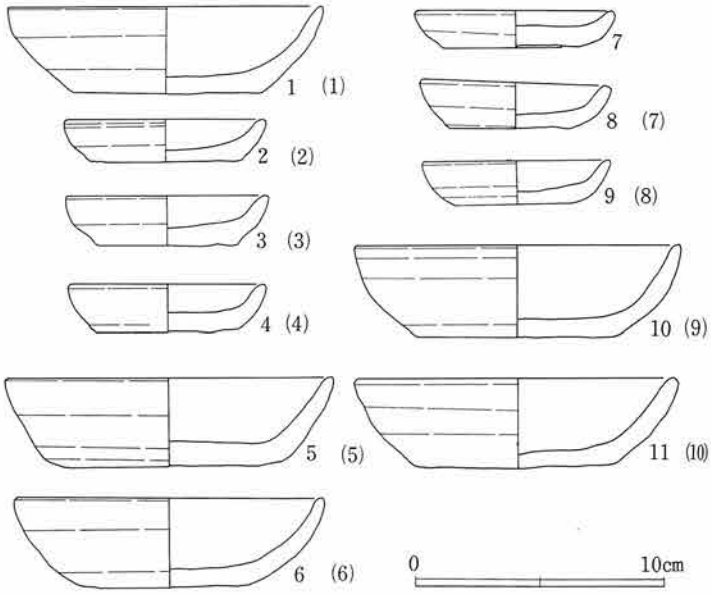
かわらけ溜３出土かわらけは、回転糸切り底のかわらけであり、法量は小型と大型のかわらけが出土したが、器型には若干のバリエーションがあり、特に意味を持つまとまりとは考えられない。

かわらけ溜4



第32図　かわらけ溜4検出図

かわらけ溜4は、他のかわらけ溜の検出地域から少々離れており、土壙と重複している状況で発見された。検出されたかわらけは少数であり、図化可能なものに関しては取り挙げ、図・表と対応させて以下に示した。



第33図　かわらけ溜4出土かわらけ

かわらけ溜4出土かわらけは、回転糸切り底のかわらけであり、法量は小型と大型のかわらけが出土した。器型はほぼ同一傾向であり、体部が内彎傾向を示すかわらけであったが、この検出状況に意味があるかどうかは分からない。

No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型	No.	ブロックNo.	口径	底径	器高	成形技法(底部)	器　型
1	1	12.5	7.6	3.5	回転糸切り		7	7	7.8	5.5	1.5	回転糸切り	
2	2	7.9	6.1	1.7	〃		8		7.4	4.9	1.9	〃	
3	3	8.1	5.6	2.0	〃		9	8	7.4	5.0	1.8	〃	
4	4	7.8	5.8	2.0	〃		10	9	12.9	8.0	3.7	〃	
5	5	13.0	9.1	3.5	〃		11	10	12.8	7.7	3.7	〃	
6	6	12.2	6.7	3.6	〃								

表22．溜4．出土かわらけ法量　　(単位cm)

まとめ

①政所Ⅳのかわらけ溜について

第１次調査区から検出された４ヶ所のかわらけ溜を考えてみると、溜１・２と溜３・４は検出状況などから若干の違いがあると考えられる。本遺跡の中心と考えられる遺構は、かわらけ溜１であり、かわらけの出土状況については多くの意味が含まれていると考えられる。

かわらけ溜１は、上層（中層）においては、広範囲から多量のかわらけが検出されたが、中心と考えられる地域は、Ｆ・Ｇ区のかわらけ溜の東側半分に集中していた。出土かわらけのタイプも、回転糸切り底のかわらけが大部分を占めたが、東側のＦ・Ｇ区については、静止糸切り底のかわらけを多く含んでいた。その後、上層（中層）のかわらけを取り挙げた後に、Ｇ区下部のみからまとまりを持ったかわらけを大量に発見した。下層出土かわらけは、静止糸切り底のかわらけが多く、各ブロックのかわらけは、ほぼ同一傾向を示した。かわらけ溜１は、上層（中層）においても東側から密集して検出された事から、東側、特にＧ区を中心として廃棄又は、何らかの行為を行った痕跡と考えてよいであろう。Ｇ区・Ｇ区付近に関しては、下層同様上層においても厳密に分類すれば、ある程度のまとまりが確認出来る可能性はあるだろう。

かわらけ溜を構成する堆積土層においては、かわらけの他に、炭・焼土などを大量に含んだ土層が確認出来る事は、密集しまとまって検出したかわらけ溜の存在に係わる可能性があると思われる。又、かわらけ溜から発見された鉄の鋤先、炭層中から発見された鋳物関係の遺物など、何らかの係わりがあるものと考えられるが、かわらけ溜の存在理由は断定できない。

かわらけの年代に関しては、断定は出来ないが回転糸切り底のかわらけのタイプを検当してみると、器高の低い体部が内彎傾向を示すものと、内彎傾向を有し直線的に開く、13世紀末頃～14世紀前半のかわらけが大部分を占めると考えられる。一部には、底径の大きい13世紀中頃～13世紀後半に入ると考えられるもの、又体部が内彎する薄手の14世紀中頃～末頃の傾向を、示すと考えられるかわらけが含まれているが、かわらけ溜の中心となる時期は13世紀末頃～14世紀前半と考えられる。かわらけ溜の存在期間、存在状況については今後の検当が必要と考えられる。

政所跡のかわらけ溜は、本遺跡の他に政所Ⅱにおいても発見されている。政所Ⅱにおいては手づくね底のかわらけが中心となり本遺跡とは、かわらけの年代に差があると考えられるが、検出状況は、本遺跡の溜１と同様に広範囲にわたり、大量のかわらけを出土している事から、今後、政所跡におけるかわらけ溜の存在理由とかわらけについては、大きな課題であり、すべての調査結果を考慮し考えていかねばならないであろう。

②静止糸切り底のかわらけについて。

かわらけ溜からは、大量な回転糸切り底のかわらけと供伴し、大量な静止糸切り底のかわらけの出土事例を得た。静止糸切り底のかわらけに関しては、隣接する政所Ⅰからも出土しており、少数ではあるが、政所Ⅱからも出土している。

鎌倉市内でも、静止糸切り底のかわらけは珍しく、政所跡においての検出事例が特に目立つよう

である。

この静止糸切り底のかわらけを観察するために、第１次調査区出土のかわらけ溜の法量表において、静止糸切り底のかわらけに限り、器型の分類を試みた。

体部については

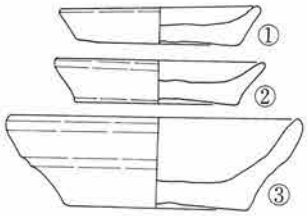
Ⅰ　内彎傾向を示す　Ⅱ　直線的に開く　Ⅲ　外反傾向を示す

口縁部については

ａ．内彎する　　ｂ　真上に立ち上がる　　Ｃ　外反する

を基本とし、それぞれのかわらけの器型を記号で示した。

結果は筆者の個人的な判断により完全な分類とは考えられないが、Ⅱ（図①）・Ⅲ（図②）タイプのかわらけが大部分を占めたと考えられる。又大型のかわらけについては、これらの傾向が強く現われると考えられ、特に外反傾向を示すものは、外反度は強く口縁部は内彎しようとする器高（図③）の深いタイプが目立つようだ。



静止糸切りかわらけの器型

静止糸切りの種類

溜１の結果から、静止糸切り底に関しても、大別して２種類に分類され、Ａ、平行糸切り、Ｂ、楕円状糸切り底の方法が認められた。かわらけ溜出土の静止糸切り又、ＡとＢのタイプは混在して出土している。底の個々の種類に関してはＡの糸切り方法が大部分を占めた。

政所Ⅳ出土の静止糸切りかわらけの特徴を示すものは図①～③に示したが、この静止糸切り底の年代観に関しては、供伴して出土した回転糸切り底のかわらけの年代観を与えるしかない。本遺跡においては13世紀末頃～14世紀前半代を示したと考えるが、今後の課題として考えていきたいと思う。

参考文献　河野真知郎「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古21号』神奈川考古同人会1986年

手塚直樹、宮田真「政所跡」政所跡発掘調査団　1991年

第４節　かわらけ溜内出土遺物（第34図）

ここでは前節でかわらけについて述べているのでかわらけ溜り内から出土した他の遺物に付いて述べる。

1　常滑甕（1）　口径45.8cm。口縁部がN字状になり、頸部へは接続していない。溜２の西方より出土。他に同一個体の破片はなかった。

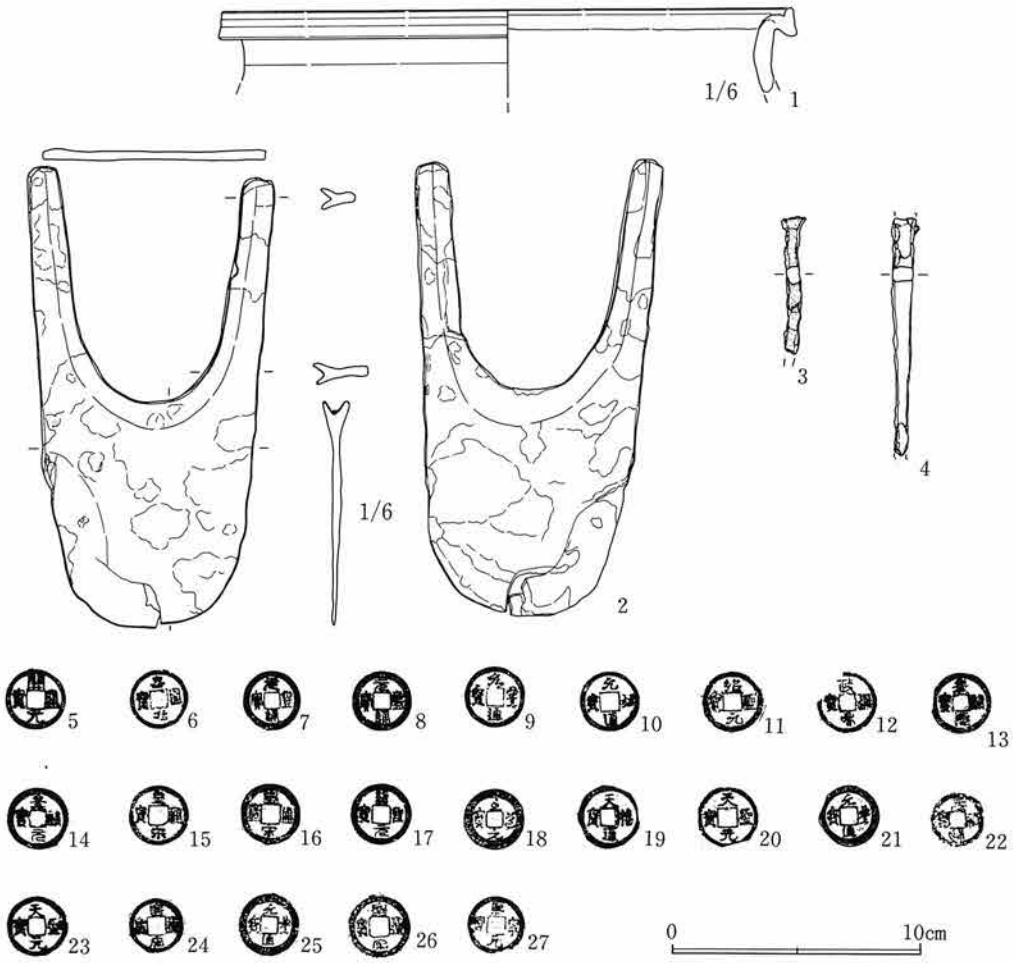
2　鉄製鋤（2）　全長36.4cm。最大巾19.9cm。耳部巾2.8cm。刃部厚0.1cm。耳部厚0.2cm。残存状態は良好で、刃部先端が少し欠けているが、ほぼ完全な状態である。木台挿入部の断面は明瞭なY字状を呈する。鎌倉市内では古代の鋤先は発見されているが中世の時期は初めてである。

3　鉄釘（3、4）

3は頂部が台形状になる。先端が欠損している。全体に錆がひどい。

4は頂部と先端を欠損している。巾が広く0.8cm余りある。

4　銭（5～27）



第34図　かわらけ溜内出土遺物

かわらけ溜からは銭を撒いた様な状態で点々と発見されているが、ブロックごとに分けられる。

溜りB（5～12）　5は開元通宝、初鋳621年、楷書。6は嘉祐通宝、初鋳1056年　楷書。7～9は元豊通宝、初鋳1078年、7、8は篆書。9は行書。10は元祐通宝、初鋳は1086年、行書。11は紹聖元宝、初鋳1094年、楷書。12は政和通宝、初鋳1111年、篆書。

溜りC（13～17）　13～14は景祐元宝、初鋳は1034年篆書。15、16は皇宋通宝、初鋳1039年、楷書。17は紹聖之宝、初鋳1094年、篆書。

溜りE（18）　至道元宝、初鋳995年、行書。

溜りC（19～22）　19は天禧通宝、初鋳1017年、楷書。20は天聖元宝、初鋳1023年、楷書。21は元豊通宝、初鋳1078年、行書。22は元祐通宝、初鋳1086年、篆書。

溜りG（23～25）　23は天聖元宝、初鋳1023年、楷書。24は皇宋通宝、初鋳1039年、篆書。25は元豊通宝、初鋳1078年、行書。

その他、溜2から26の皇宋通宝、初鋳1039年、篆書と溜4から27の熙寧元宝、初鋳1068年、楷書が出土している。

市内の調査で銭は多く出土しているが、政所郭内の調査では大路側溝を除き1点も出土していない。このかわらけ溜り内から27点の出土はかわらけ溜りのあり方に何か特別な意味があるのかもしれない。また鋤先がかわらけ溜り内から発見され、まったく異った物が捨てられる状況も特別な意味があるのかもしれない。

第5節　第1面包含層出土遺物

第1面の包含層は焼土、炭、砂層が投棄された様な状態でかわらけ溜りの周辺に堆積していた。特に焼土、砂層からの出土遺物が多かった。かわらけが最も多くその他に瀬戸、常滑、青磁、金属製品が出土しているが、実測できた製品は少なかった。

かわらけ（1～38）

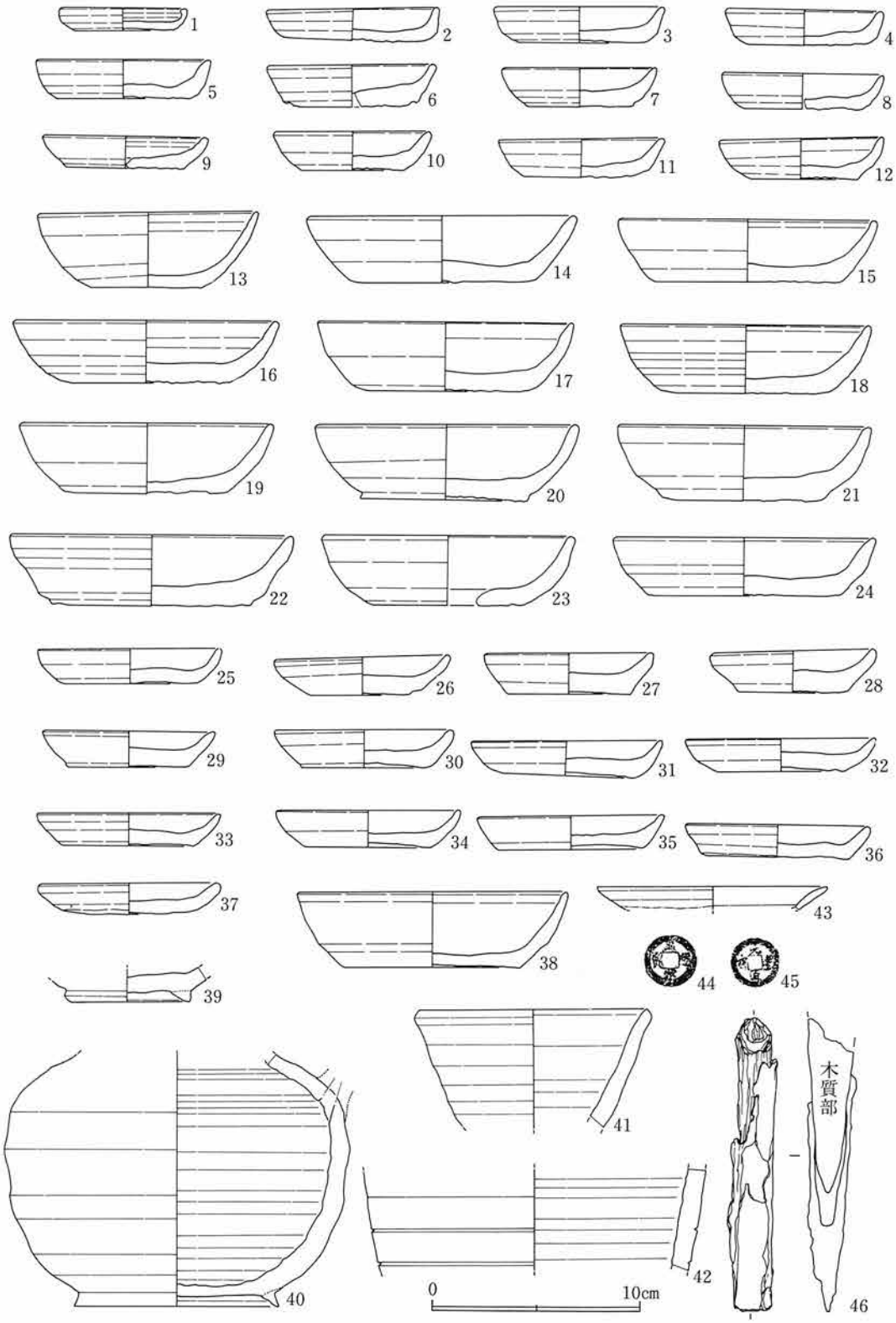
1は内折れかわらけ。口径6.1cm、器高1.1cm、底径4.4cm、内折れかわらけとしては器高が高い。

2～6は底部から口縁部にかけて立直気味に立ち上がる。2は口径8.2cm、器高1.5cm、底径6.8cm。3は口径8cm、器高1.8cm、底径6cm。4は口径7.4cm、器高1.7cm、底径5.6cm。5は口径8.2cm、器高1.9cm、底径6.4cm。6は口径7.8cm、器高2.1cm、底径5.6cm。

7～14は口縁部が底部から丸みを持って立ち上がる。7は口径7.3cm、器高1.9cm、底径5cm。8は口径7.6cm、器高1.7cm、底径5.4cm。9は口径7.6cm、器高1.6cm、底径5.6cm。10は口径7.4cm、器高1.9cm、底径4.8cm、11は口径7.9cm、器高1.9cm、底径5.4cm。12は口径7.8cm、器高2cm、底径5.1cm。

すべて回転糸切り底である。

13は器高が高く、底部から口縁部にかけて、丸味を持って立ち上がる中型のかわらけである。中型のかわらけは1点だけであった。口径10.4cm、器高3.6cm、底径5.4cm。



第35図　第１面包含層出土遺物

14～24は大型のかわらけである。

14は底部から口縁部にかけて直行する。口径12.6cm、器高3.2cm、底径8.8cm

15～19は底部から口縁部にかけて丸味を持ち立ち上がる。15は口径12.2cm、器高３cm、底径8.8cm。16は12.6cm、器高３cm、底径7.6cm。17は口径12.2cm、器高3.3cm、底径7.6cm。18は口径11.8cm、器高3.3cm、底径6.8cm。19は口径12cm、器高3.4cm、底径7.8cm。

20～21は底部が高台状になり器高が高い。20は口径12.4cm、器高3.6cm、底径8.1cm。21は口径11.9cm、器高3.6cm、底径6.6cm。胴下部が少しへこむ。

22は口径13.4cm、器高3.4cm、底径9.4cm。胴中程がへこみ、胴下部に強い稜線がでる。

23は口縁部が少し外反する。口径11.8cm、器高3.3cm、底径7.2cm。

24は口縁部が直立気味になる。口径11.8cm、器高3.6cm、底径6.8cm。

すべて回転糸切り底である。

25、26は器壁が薄く、口縁部が直立気味になる。25は口径8.6cm、器高1.7cm、底径6.4cm。26は口径8.3cm、器高1.8cm、底径4.8cm。

27～29は器壁が厚く、口縁部が直立気味に立ち上がる。27は口径7.9cm、器高２cm、底径5.8cm。28は口径7.6cm、器高２cm、底径5.2cm。29は口径8.4cm、器高1.9cm、底径６cm。

30～38は底部から口縁部にかけて丸味を持って立ち上がる。30は口径９cm、器高1.7cm、底径6.4cm。31は口径９cm、器高1.6cm、底径６cm。32は口径8.6cm、器高1.6cm、底径6.2cm。33は口径8.6cm、器高1.8cm、底径６cm。

34～36は底部から口縁部にかけて直行する。34は口径8.8cm、器高1.6cm、底径6.8cm、35は口径8.6cm、器高1.6cm、底径6.8cm。36は口径８cm、器高1.8cm、底径5.6cm。

すべて静止糸切り底である。

37は手づくねである。口径8.4cm、器高1.5cm。手づくねの小型かわらけは少なく、実測できたのもこの一点だけであった。

38は大型の静止糸切り底のかわらけ。口径12.8cm、器高3.7cm、底径8.4cm。

山茶碗（39）

底径5.7cm、胎土は灰色を呈し、粗い。高台は付け高台である。

水注（40）

底径9.8cm。現存高12.1cm、最大径は16.4cm。肩部に孔があき、水瓶と思われる。孔の反対側には把手を接続した痕跡はない。内外面に轆轤成形痕が明瞭に残る。胎土は白色に近く、粗い。山茶碗などの胎土とは異なる。いままで類例がない。東海地方の産と思われる。無釉。

壷（41、42）

41は口径11.4cm。口縁部が八の字状に開く。常滑のこね鉢の胎土に似ているが、より精製されている。内外面に轆轤成形痕が明瞭に残る。無釉。

42は現存の胴部に２本の沈線を配する。内側は轆轤成形痕が明瞭に残る。胎土は白色に近く、水

注の胎土に似ている。これも東海地方の産と思われる。無釉。

青磁（43）

口径11cm。同安窯形の青磁皿である。胎土は灰釉、紬は青緑色を呈する。

金属製品（44～46）

銭（44、45）　44は皇宋通宝、初鋳1039年、楷書。45は元豊通宝、初鋳1078年、行書。

不明製品（46）

先端が扁平になり、基部は円形になり木製の柄を差し込んでいる鉄製品。全長12.1cm、刃部巾1.8cm、厚さ0.1cm。ノミの可能性がある。

第6節　第2面で検出された遺構

第2面は第1面下約50cmにあたる。この面は湧水が多く、第1次調査と同様に暗褐色粘質土が広がり、遺構検出作業に入ったが明確な遺構が発見しづらく、更に地山上まで下げる作業に入った。この最下層の遺構確認面は黄色、灰色の砂と暗褐色粘質土が混じった様な状態でここで始めて遺構を確認する事ができた。この確認面はそのため実際の生活面より下げている。GLから約120cm下の標高約9m余りになる。

第1面では廊状の細長い掘立柱建物ばかりであったが、第2面では4棟の掘立柱建物と2列の柵列状建物、溝、畝状遺構など第1面よりかなり密に遺構が発見された。

これらの遺構は当然第1次調査と関連するものとそうでないものがあり、連続して捉えられるものと独自のものがある。

建物群は大路、土塁などの軸線にほぼ平行して何回も建て代えがおこなわれ、柱穴の規模、間隔が似かよっているため、重複がかなり多く認められる。

調査区北側では東西方向の溝が発見され、この溝の北側と南側では建物の軸線がづれてくる。この溝は横大路側溝とは平行関係にはない。溝の南側で発見された掘立柱建物は横大路側と平行関係が認められるが、北側の掘立柱建物は溝の軸線と平行し、この溝を境として方位がずれてくる。これは同一面で検出されているが、時期が異なるのではないかと思われる。

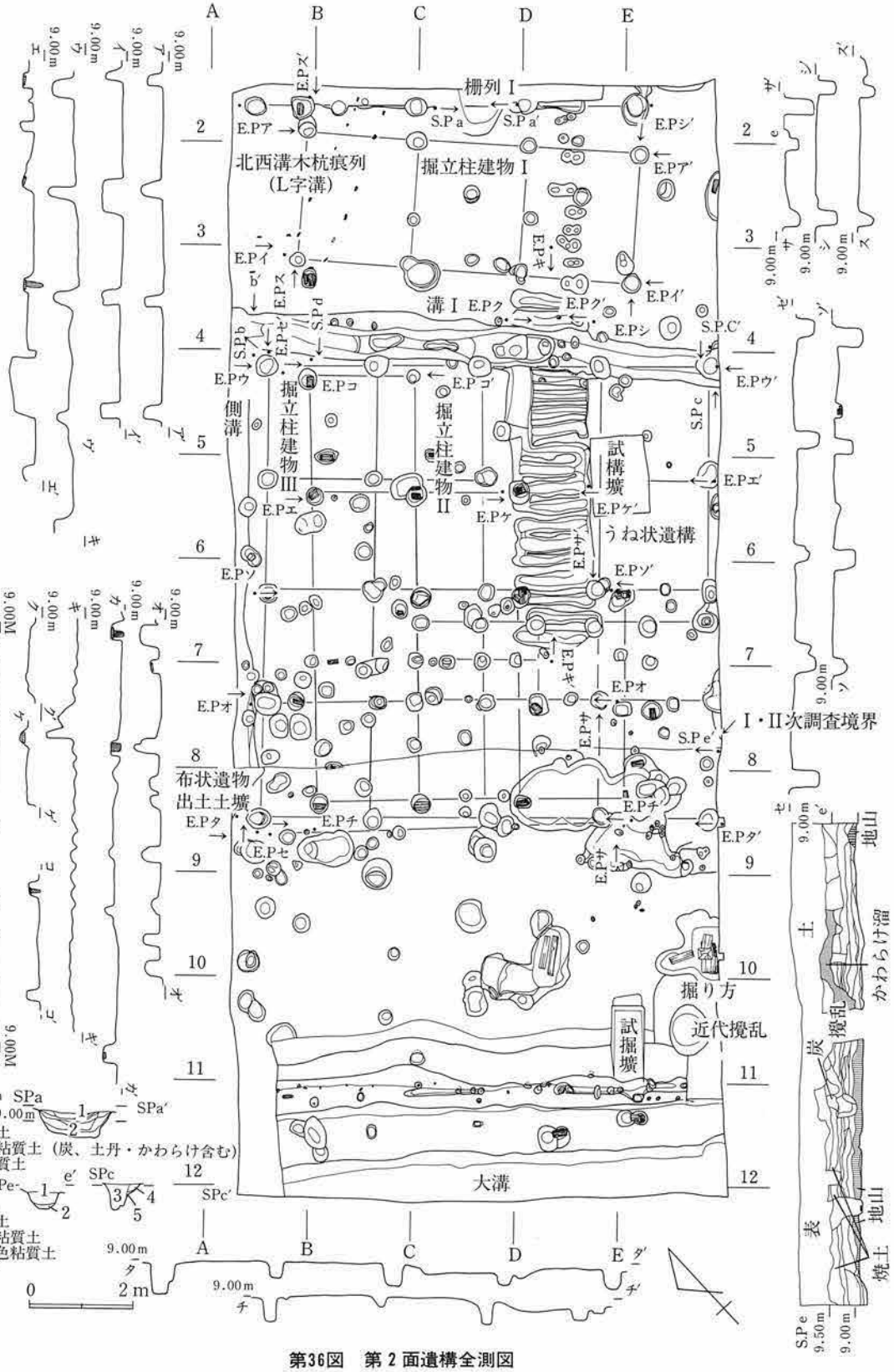
掘立柱建物Ⅰ

調査区の北側で発見された。東西3間、南北1間である。柱間の距離は東西2.20m、南2.50mと南北方向が30cm長い。柱穴の径は40cm～30cm、深さは約30cmである。この建物は横大路の側溝とは平行にはなく、北側へ少し振れている。

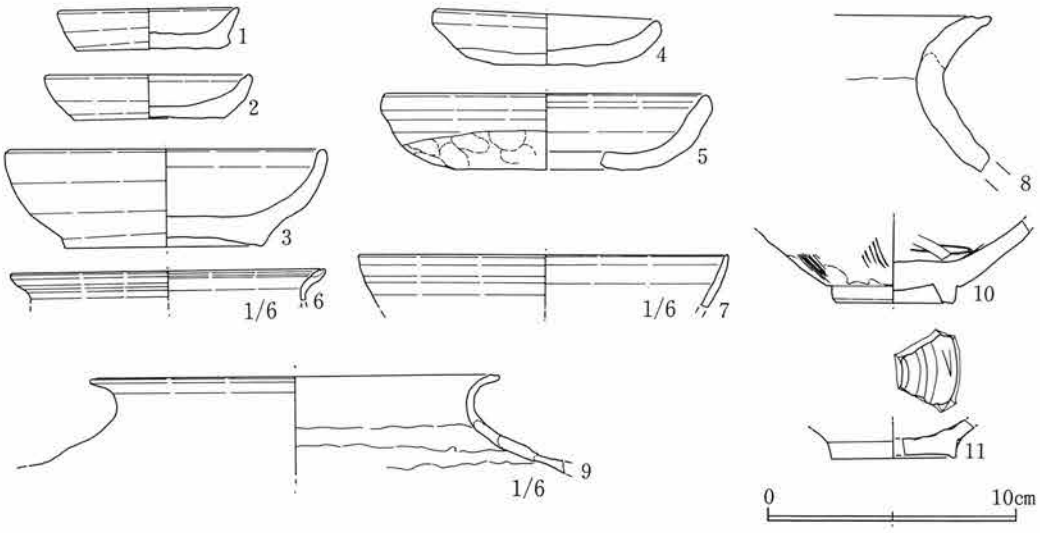
柱穴内から遺物は出土してない。

掘立柱建物Ⅱ

調査区の中央、掘立柱建物Ⅱに重複するように一回り大きな規模を持っている。東西4間、南北4間、柱間の距離は2.20m、柱穴の径は40cm～50cm、深さは20cm～50cmとまちまちである。礎板は入っていない。横大路側溝と平行する。この建物は第1次調査の区域までは延びていない。対応す



第36図　第2面遺構全測図



第37図　第2面出土遺物

る建物は発見されていない。

柱穴内から遺物は出土していない。

掘立柱建物III

調査区の中央に位置する。東西3間、南北3間で北西の隅に張り出しが付く。この張り出しは中門の可能性がある。東西、南北の柱間の距離は2m、柱穴の径は30cm～40cmで礎板の残るものが多い。また1穴だけ土丹を入れているものがある。

北西側の張り出しは東西2m、南北約2.20mと南北方向が広くなる。この建物は第1次調査区域まで延びて建物3に対応する可能性がある。この建物は横大路側溝と平行する。柱穴内から遺物は出土していない。

掘立柱建物IV

調査区中央の7ライン付近に位置する小さな建物である。東西4間、南北2間、柱間の距離は東西1.2m.南北70cmあり、東側の2穴は発見できなかった。あるいは南北の柱間は1間かもしれない。柱穴の径は約30cm、深さは15cm～30cmあり、柱穴の1つに礎板が残っている。

柱穴内から遺物は出土していない。

柵列I

調査区の一番北側、掘立柱建物Iの北側に平行して位置する。柱間は3間、柱穴の距離は2.20m、柱穴径は約40cm～50cm.深さ20cm～30cmと浅い。この並びを柵としたが、柱穴が浅いためあるいは軒の様な施設を考えても良いかもしれない。

柱穴内から遺物は出土していない。

柵列II

調査区の南側、掘立柱建物IIの南側に平行する位置にある。柱間は4間確認されている。柱間の距離は2.2m、径は30cmと小さく、深さは約20cm～30cmである。第1次調査ではこの並びは発見され

ておらず東へは延びていない。

柱穴内から遺物は出土していない。

溝Ⅰ

調査区の北側、４ライン付近を東西に走る。上巾は70cm～90cm、底巾は20cm～30cm、深さは30cm～40cmで、東から西へ傾斜している。この溝は南側の建物群・横大路とは軸線が少しずれ、北側の建物とは一致する。この溝を境として南と北では遺構の性格が異なるのか、あるいは同一面上で発見されているが時期が異なる可能性がある。遺物はほとんど発見されず、実測はできなかった。

畝状遺構

調査区の７ラインより北、ＤラインとＥラインの間を南北に延びている。東西約1.4m、南北20cm～30cm、深さ約10cmの窪地が２ラインまで発見された。溝Ⅰの北側までは明確になっているが、それより北側は２穴重複した柱穴状のものが続く、これも同一と見てよいだろう。同様の遺構は大蔵幕府周辺遺跡群から発見されている。この遺構は溝Ⅰより古く、遺物は一点も出土していない。覆土はこの面で発見された中世の覆土とは異なり、この時期では最も古いか、あるいは古代の遺構かとも思われる。確証はない。

第７節　第２面遺構と包含層出土遺物（第37図）

第２面の遺構から出土した遺物はほとんどない。第１面ではかわらけ溜などかわらけをはじめ、実測可能な遺物は割合多かったが、第２面では極端に少なくなっている。遺構が多く発見された割には少なく、また包含層中からも非常に少なく、政所郭内の調査では最も少なかった。

(1)　遺構出土遺物（９）

柱穴35から常滑甕が出土している。口径33cm。口縁部が大きく外反し、端部に浅い沈線を配する。内面に輪積成形痕が残る。

柱穴、溝等からはかわらけ小片が出土しているが実測可能なものはなかった。

(2)　地山上出土遺物（１～11）

かわらけ、土鍋、渥美の甕、鉢、青磁、青白磁が出土している。包含層中も大変遺物が少なく実測可能なものは大変少なかった。大溝内からの多量の遺物と比べると、すべて清掃して溝に捨ててしまったのではないかと思われる。

１　かわらけ（１～５）

１は口径7.3cm、器高1.6cm、底径5.8cm。２は口径8.3cm、器高1.8cm、底径６cm。底はいずれも回転糸切り底である。３は口径12.6cm、器高3.9cm、底径8cm。静止糸切り底。４は口径9.2cm、器高３cm。手づくねである。５は口径13.4cm、器高３cm。手づくねである。

２　土鍋（６）

口径25.2cm。口縁部は大きく外反し、折り返している。胴部は広からず、長甕状の形になるようである。胎土は粗い。伊勢系の土鍋である。

3　常滑（7、8）

7は口径30cmのこね鉢。口縁部は直行気味に立ち上がる。胎土は灰黒色に近く、砂っぽい。無釉。

8は甕の口縁部である。小片のため径は不明。口縁端部に浅い沈線が巡る。

4　青磁（10）

同安窯系の櫛掻文碗。底径4.7cm。胎土は灰白色、釉は透明な黄色を呈し、胴下部までかけている。

5　青白磁（11）

景徳鎮窯の碗。底径5cm。内底面から胴部にかけて3本の沈線を配する。胎土は白色、釉は透明な水色を呈し、貫入があり、高台外脇までかけている。高台はわずかに削り出している。

第四章　調査の成果と問題点

今回を含めてこれまで政所郭内の調査は４回おこなわれている。それぞれ横大路、小町大路に面した店舗の改築工事に伴う調査のため、側溝の一部、道路、郭の縁辺部であり、中枢区域は未調査である。これまでの調査で南側の軸線。東側の軸線を捉へる事ができた。

今回の調査は第１次の西隣に位置し、その関連が明らかになった所と不明の部分が残った。

(1)　上層の遺構と遺物

遺構

１次調査でも報告されているようにここでも同じように近世の遺構が発見されている。本調査では水田遺構、１次では井戸跡である。しかし両方とも遺構上面は近代での撹乱を受けたためか、深い遺構しか発見されていない。

出土した遺物から概ね18世紀以降の製品が多くこの時期以降、八幡宮周辺から朝夷奈へ向う金沢道沿いに茶店などが立ち始めているのだろう。こうした店の裏にはまだ畑や水田が存在していた事は幕末から明治初年の絵図や写真を見るとその情景がわかる。

鎌倉が衰退する室町末期～江戸初期にかけては除り良くわかっていない。

第２章で触れた様に上層の撹乱、盛土などの表土を除去した後の安定した面を一度精査した状態がこの上層遺構である。このためこの面は中世以降近代までの遺構になる。しかし、削平、あるいは開墾などにより上層ではほとんど遺構は発見されていない。鎌倉の衰退以降の状況が見てとれる。水田遺構は出土遺物から18世紀以降に造成されたものと思われる。他は出土遺物がないため時期は不明である。

調査区のＣラインより西、８ラインより北側に遺構が片寄っている。８ラインより南側ではまったく遺構が発見できず、第１次調査と同じ結果であった。

包含層中からの出土遺物を見ると13世紀中頃～15世紀前半代までの製品と、18世紀以降の遺物が多く、市内の状況を良くあらわしていると言へよう。

(2)　第１面の遺構と遺物

遺構

第１面は多数の遺構が発見された。土壙、溝、掘立柱建物がある。

第１次調査で発見された掘立柱建物２は今回の調査の掘立柱建物Ｉと同一である。この建物は両地域で東西に10間以上はあると思われる。南北１間の大変細長い建物になる。建物の可能性としては政所が公的機関である事を考えると回廊のような施が考えられないだろうか。あるいは創造をたくましくして、吾妻鏡文治三年四月十四日の条に政所の因幡前司広元（大江広元）の廐の上に雷が落ち馬三匹が斃れたとある。廐の可能性はないであろうか。当時の馬は現在の馬と比べても大変小さかったと言われ、木曽馬は体高が120㎝～140㎝前後であったといわれる。そうすると２ｍの巾と

長さがあれば良いかもしれない。

この同じ細い建物が南側に平行して存在している。この建物は一次調査では第２面で発見されている。今回の調査では第１面で発見され１次調査の第２面の建物と方位、柱間延長線ともに一致する事から同一と思われる。

本調査で発見された掘立柱建物Ⅰ～Ⅲはそれぞれ柱間は２ｍで南北１間、東西は３間以上あり、東西に平行する。しかし南北の柱間はⅠ、Ⅲではづれている。建物ⅠとⅡは柱の距離が0.8m、建物ⅡとⅢでは１ｍと狭くやはり同時存在は無理かもしれない。ただし、建物ⅠとⅢは南北軸が一致し、建物間の距離も４ｍと十分な間隔があり同時存在が考えられる。

今回の調査の掘立建物Ⅱ、Ⅲは第１次調査第２面で発見された建物２と、建物７と対応するものと思われる。

第１面での建物は南北１間以上の建物はなく、東西に長い建物しか発見できなかった。

土壙は６基確認されている。土壙２は最も深く約80㎝余りあり、中に曲物が入っていた。この曲物は壁との間にほとんど隙間なく置かれていた。用途は不明である。

溝でははっきり溝と確認できたのは調査区北西隅の溝だけであり、溝巾は杭の内側で80㎝と一定で杭の間隔も60㎝と一定である。西側に向って傾斜し、八幡宮側へ流れる。八幡宮境内は北側の山を背にして南東西は土塁と堀りに囲まれていた。その跡は境内の調査で確認されている。八幡宮と政所の間には現在も南北に通じる道が走り、昔も今と同じ位置に存在したであろうことは想像できる。この道の側溝へ流れ込んだのであろう。

溝状遺構Ⅰ、Ⅱは途中で消えてしまい不明である。Ⅰは溝Ⅰの南側に位置し、角度は異なるが、同じように西側に直角に曲がる。同じような目的を持っていたのかもしれない。炭、焼土、かわらけ片が入っていたか、下層は粘質土があり水が流れていたような感じではない。

溝状遺構ⅡもＣラインからＤラインまでしかなく途中で消えてしまい不明である。第１次調査との関係を求めれば溝状４と対応すると思われる。

遺物

第１面に直接かかわる遺物は少なく、かわらけ溜りの遺物があげられる。

かわらけ溜りかわらけに付いては既に述べており割愛するが既そ13世紀の第４四半期前後と考えられる。一緒に出土した常滑甕の口縁部も縁帯が狭く、Ｎ字状口縁となる直前ぐらいであり時期的にも一致すると思われる。包含層から出土したかわらけ、その他陶磁器類も同時間の様を示している。

第１面の時期は13世紀第４四半期～14世紀第１四半期頃に当てはまるのではないかと思う。

第１面上の非常に強い火災にあったと思われる焼土、炭層の位置付けであるが、記録上では吾妻鏡の承久元（1219）年二月に郭内一宇も残さず焼土、弘長元（1261）年三月に庁屋、公文所、門注所炎上、正和四（1315）年にも炎上とある。

出土遺物の年代を見ると承久の火災では古すぎる。弘長の火災では古く、近い所では正和四年の

火災が最も近くなる。記録上残らなかった記述もあろう。いずれにしても13世紀第４四半期以降、14世紀第１四半期までと考えたい。

ここで付け加えておきたいのはかわらけ溜りに積み重ね、倒れた状態のかわらけが発見され、多量の焼土、炭が発見され、かわらけ溜り内から鉄製鋤が発見された点が調査中に問題となった。ここで発見される静止糸切り底かわらけは政所郭内でしかほとんど発見されないため、溝状遺構Ｉがかわらけ焼成遺構ではないかと考えた。鉄製鋤先も発見され、位置的に郭内の隅に当り、郭内消費のため郭内で粘土を採取し、郭内消費のためここで焼成し、貯蔵した所と考えたためである。青梅市教育委員会の久保田正氏と陶磁研究家の関口広次氏に見てもらったが、焼成遺稿ではないとの御教示をいただいた。

(3) 第２面の遺構と遺物

遺構

第１面と同じように多数の遺構が発見されている。いくつか重複する遺構があり、これまで横大路の側溝と東西の軸線が一致する建物ばかりであった。初めてこの軸線と異なる溝と建物が発見された。

掘立柱建物Ｉは第１面で発見された東西に長い建物と同じと思われる。ただし柱間は異なり、東西間は２ｍと同じであるが、南北間2.4ｍと40㎝広くなり、横大路の東西軸やその他掘立柱建物か同じ方位を取るのに対してこの建物は約５°北へ振れる。この建物こそ第１面で回廊か廐かと悩んだ廐の可能性が高そうである。南北方向に2.4ｍと長く長方形を呈するからである。またこの建物は第１次調査区まで延びず適度な規模と言えよう。この建物の60㎝～70㎝北側にほぼ平行する柵列Ｉがある。この柵列が掘立柱建物の下屋になるのか、それとも調査区外北側の他の建物なのかは不明である。別々だとすれば建物の距離が近すぎ、時期が異なる可能性がある。

これらの建物と東西軸が一致するのは南側にある溝である。この溝は調査区外に延び第１次調査の溝状４なる可能性がある。溝と建物の間は約１ｍある。溝は西へ向かって傾斜し、調査で発見された溝はすべて西へ流れる。溝の南ではこの軸線と一致する建物は発見されていない。溝内からは時期を決定できる遺物は出土していない。かわらけの小片が数片出土したにすぎなく口縁部などはなかった。

溝の断面は逆台形状を呈し、第１面の溝は等間隔に杭を打ち側板を留める木組の構造を持っているが、この溝は木組構造の跡をまったく留めず、素掘りであった可能性が高い。

掘立柱建物IIは溝のすぐ南側に位置する。東西、南北４間の大型建物である。これに対応する建物は第１次調査では発見されず、東へ延びたとしてもあと２間分である。北と南は延長しないので可能性としてはあと西側に広がる可能性だけである。柱間は2.2ｍある。

第１次調査でもそうであるが、建物１は東西４間、南北５間はあるとしているが、この建物の柱間も2.2ｍあり、この地域では大型の建物に巾の広い間隔を取る可能性がある。廊状の細長い建物は第２面の掘立柱建物Ｉを除き、第１次も今回もすべて柱間は２ｍである。

掘立柱建物IIIは建物IIの内側に位置する。東西４間、南北３間が北西隅に１間の張り出しが付く。この建物は第１次調査の建物３と対応して来る。柱穴に礎板が入り、柱間も２ｍと同じである。しかし余りにも東西に長すぎるかもしれない。現状では10間になってしまう。もっと東西に延びる可能性もある。北西隅の張り出しは中門であろうか？良くわからない。

掘立柱建物IVは中央に位置する。東西の柱間は約1.2m、南北70cmある。柱間は他の建物のように完全に等しくはない。建物としては成立しないかもしれない。

柵列IIは掘立柱建物II、IIIの南側に接するように東西に延びる。建物IIにはあまりにも接近しすぎ、同時存在はしないだろう。建物IIとの距離は約50cmあり同時存在してもおかしくない。第１次調査ではこの柵列に対応する柱列は発見されていない。

第１次調査との関連を見ると廊状の建物、掘立柱建物などそれぞれ対応する建物としない建物が存在し、政所の性格を考えると当然規則正しい形で建物が配列されていただろう事は考えられ、今回と第１次の建物群に方向性、柱穴距離が同じであるからと言っても２遺跡の空白の地域（未調査区）は狭い所で２ｍ、広い所で５ｍもあり、建物が整然と建てられていたら同一視する可能性がある。これまで述べて来たように余りにも大きい掘立柱建物は二棟あるのかもしれない。あるいは政所といった場所だからこそ、大型建物が存在しても良いといった可能性もある。今少し検討を加えてみたい。

畝状遺構は調査区の中央から北側へ延びる。遺構面を若干下げた状態で発見された。遺物はまったく含まれず、畝の両端が若干深くなる傾向がみられた。図面では表現できなかった。この両端の深い痕跡が北側に連続してみられる二重ピットであろう。これと同様の遺構は大蔵幕府周辺遺跡群の中で見たが古い時期（鎌倉時代初期）らしく、良くわからない。この覆土を観察しても、第２面での柱穴群の覆土と異なり、古い感じがする。これからの類別を待ちたい。

遺物

ほとんど出土していない。こんなに少ない所も珍しい。第１次調査ではこれよりも多い。多いと言っても他から比べるとやはり少ない。

遺構から出土したのは常滑の甕だけである。口縁部の形態から13世紀中頃の製品である。包含層から出土した数少ないかわらけからは13世紀中頃の製品であり、渥美の甕なども同様である。伊勢系土鍋も市内で一般的に発見される製品よりも一段階古いと考えられる。　同安窯系の青磁櫛掻文碗や景徳鎮窯青白磁碗なども同時期を示すものと思われる。

第２面は数少ない遺物から考えてみると13世紀の第２四半期～第３四半期の時期ではないかと考えられる。

政所は12世紀の後半には既に成立している事は記録からは明らかである。場所も本調査地点から移動していないと推定されている。現在までの調査でそこまで遡る資料を我々は今まで持っていない。どこか違う場所を考えた方が良いのだろうか。今回の調査では初期の遺構を確認する事はできなかった。

原因者部分と別々に報告する事になったが全測図だけは遺構の関連で掲載した。この区域に関しては後の報告に譲る事をお断りしておく。なお第１次調査と関係させた図面も原因者報告にのせる予定である。

註

註１　伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世工人」『研究絶要』第１号
1992年　三重県埋蔵文化財センター

参考文献

高柳光寿　『鎌倉市史総説編』1959年吉川弘文館
菊地英政　「北条泰時・時頼邸雪ノ下一丁目935番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書５』
1989年　鎌倉市教育委員会
手塚直樹、宮田真『政所跡』1991年　政所跡発掘調査団
瀬田哲夫　「政所跡（No.247）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書８』1992年　鎌倉市教育委員会

航空撮影　1.調査地点 2.政所Ⅰ 3.政所Ⅱ 4,政所Ⅲ

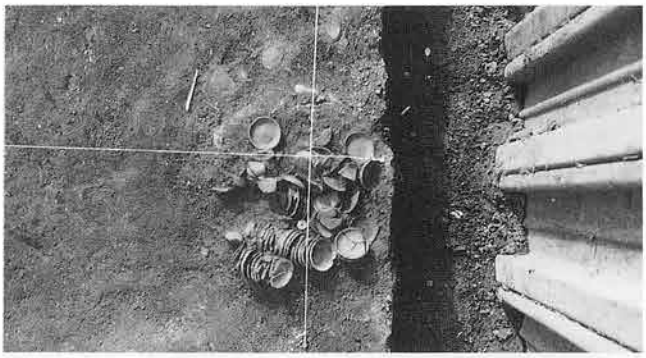
◀調査地点遠景（北側をのぞむ）

調査前状況▶

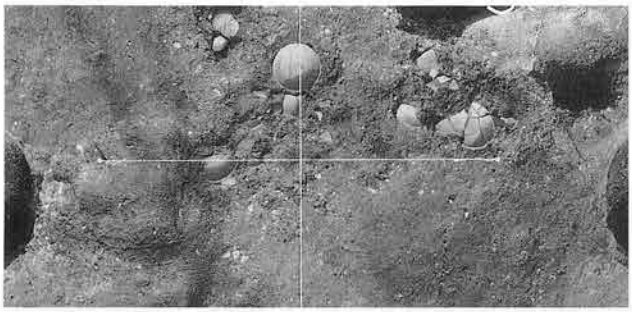
第１面　かわらけ溜検出状況

溜１　上部・出土状況（検出作業区分）

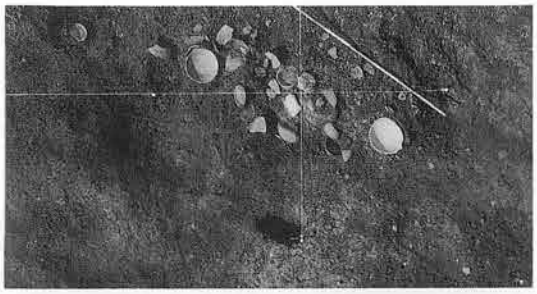
◀溜 1



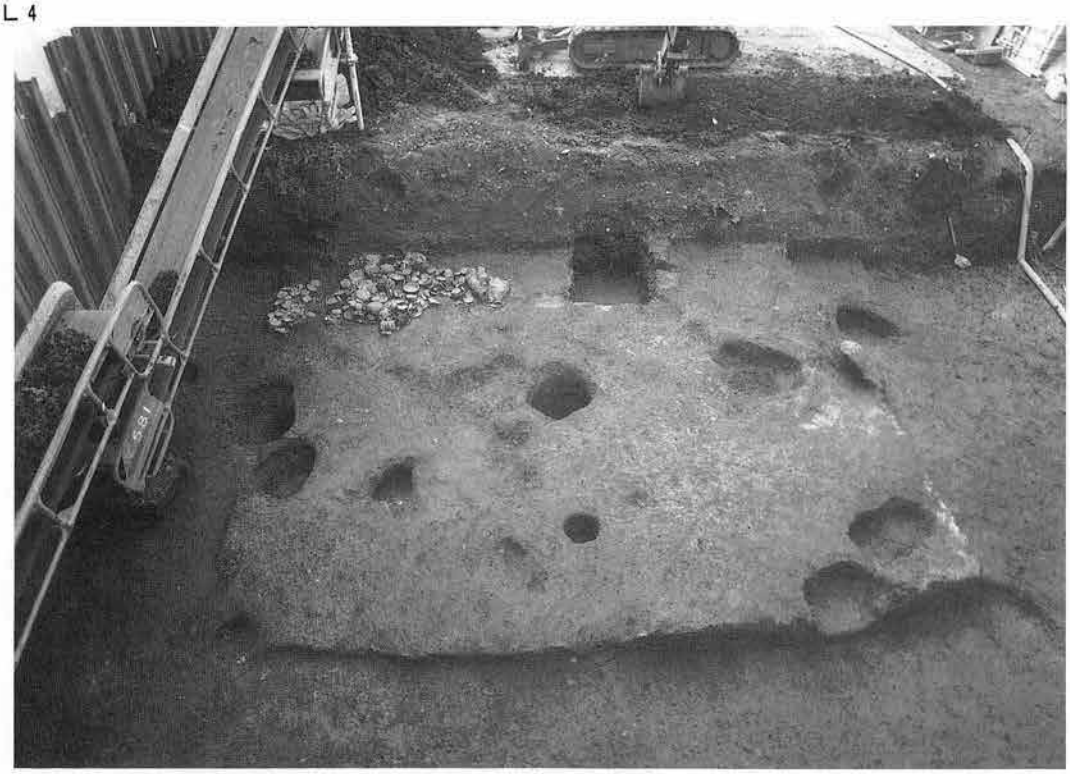
溜 2 ▶



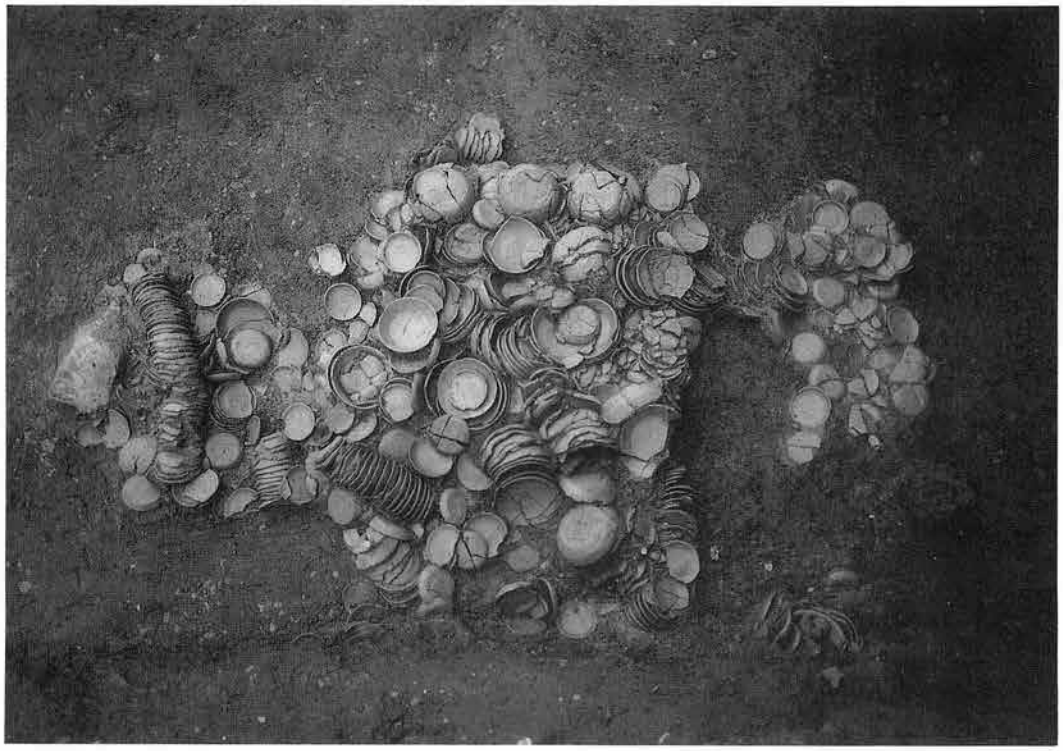
◀溜 3



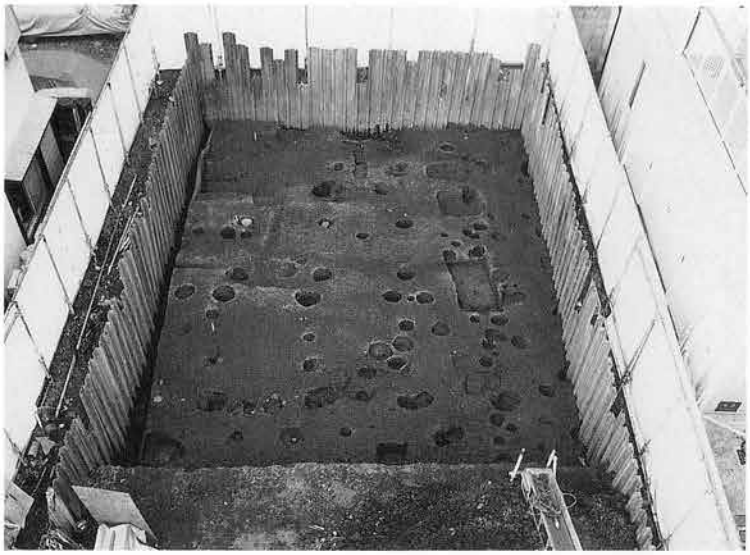
溜 4 ▶



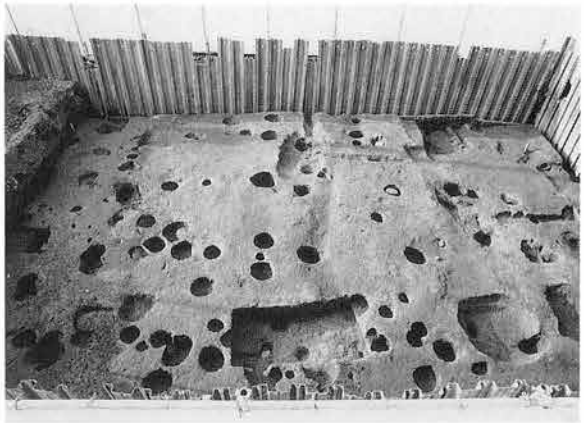
溜１（Ｇ区）下層出土範囲状況



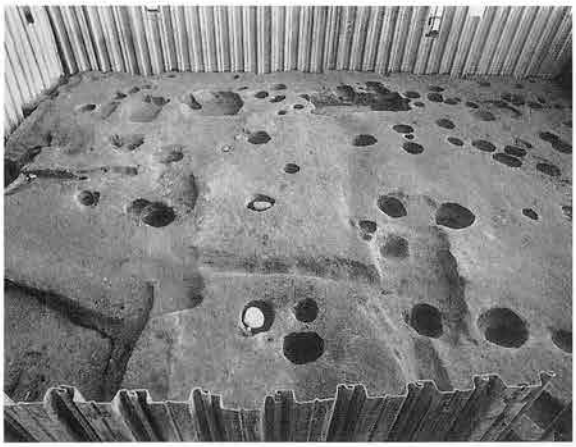
溜１（Ｇ区）下層出土状況拡大



◀第１面全景（南から）



▶第１面全景（東から）

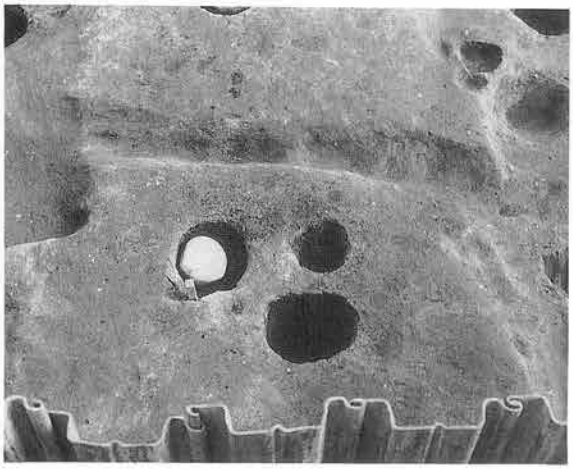


◀第１面全景（西から）

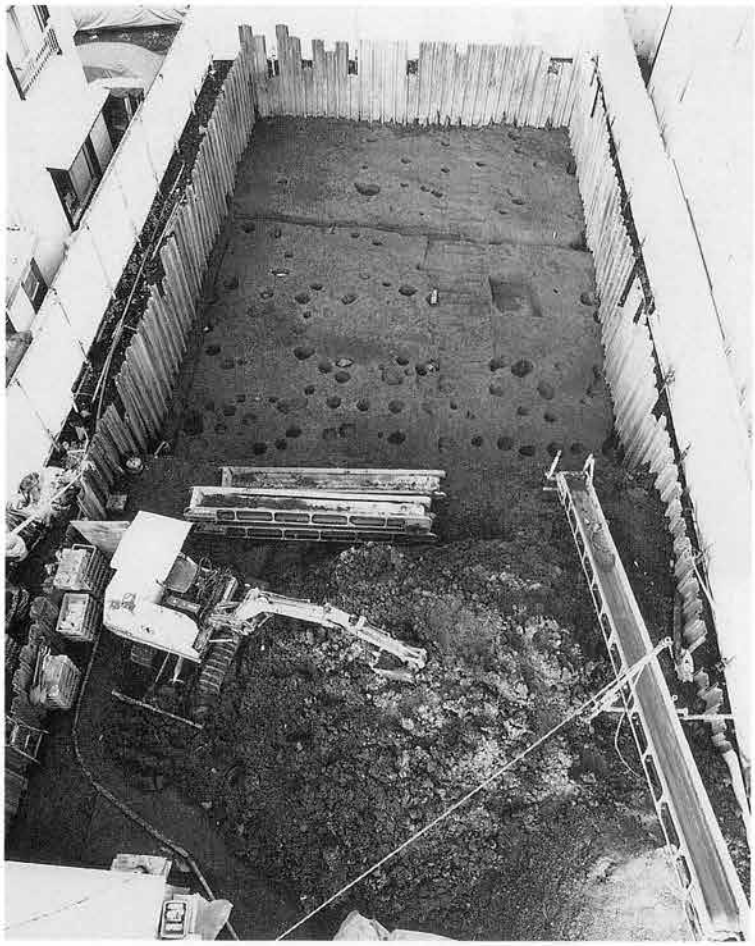
PL 6

◀溝Ⅰ遺構上層（南から）

▶溝Ⅰ遺構上層と側板痕跡状況



◀溝状遺構Ⅱ



◀第2面全景（南から）

第2面全景（東から）

◀調査区北側部分（西から）
溝Ⅰ遺構下層杭列

▶溝Ⅰ遺構下層杭列（南から）

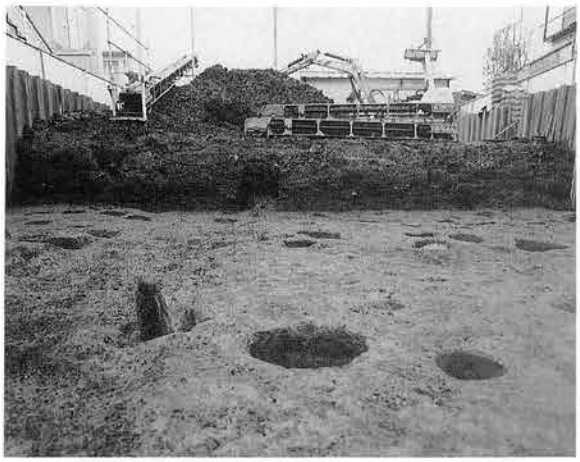
◀調査区北側部分（東から）
畝状遺構（北側）

◀調査区南側（東から）
畝状遺構（南側）

◀溝Ⅰ（西から）

◀土壙2　壁面中間部曲物痕出土状況

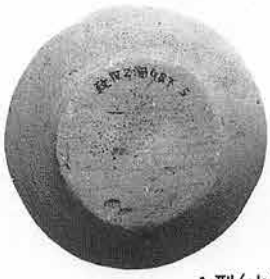
▶土壙　布状遺物出土状況



◀調査区南壁土層

A型(小)

A型(小)



A型(小)

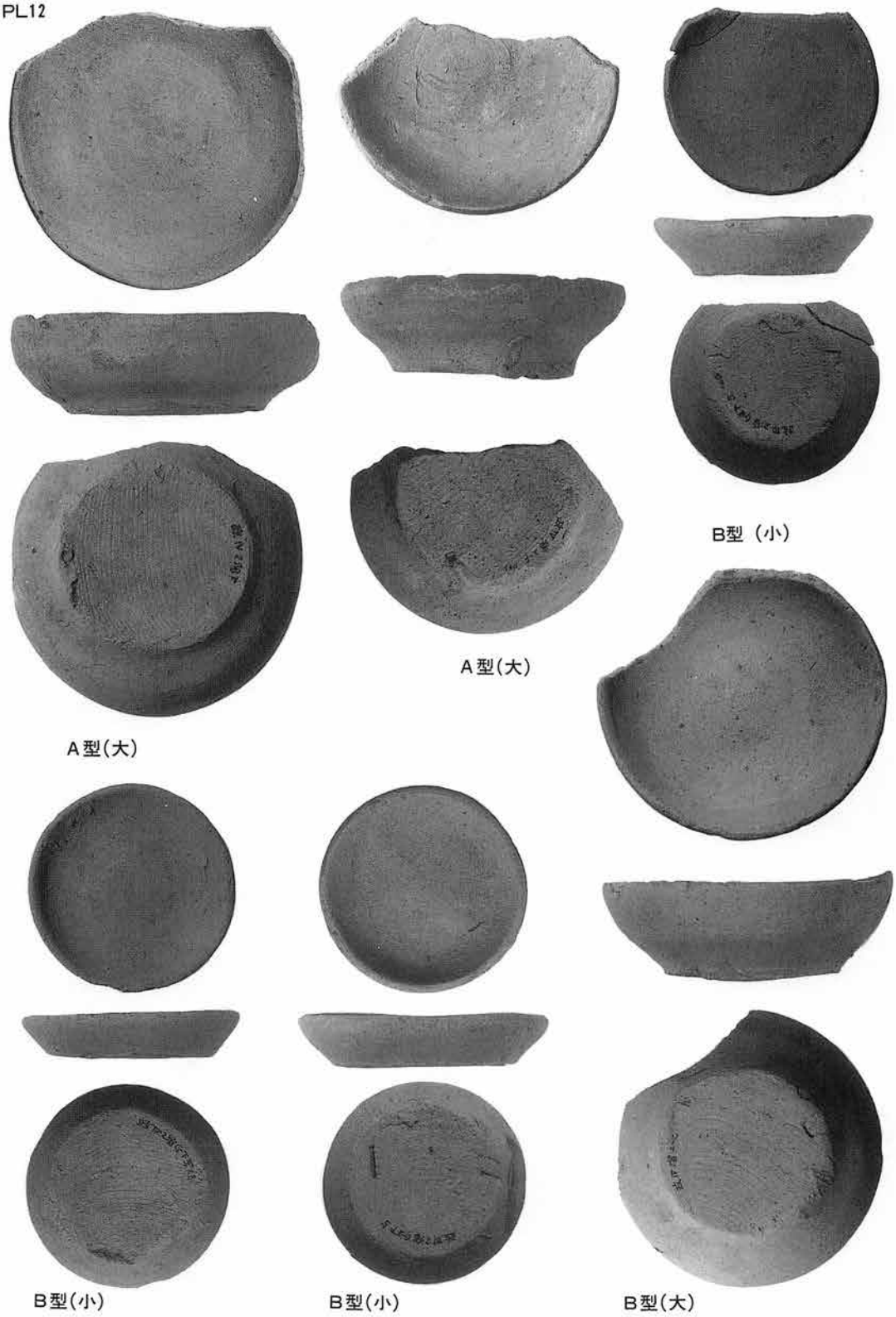
A型(中)

A型(中)

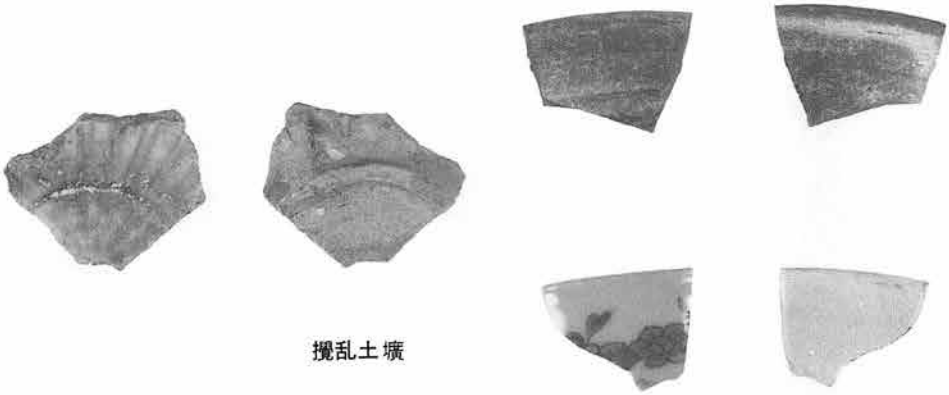
A型(大)

かわらけ溜出土かわらけ（静止糸切りAタイプ）

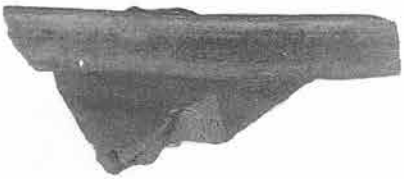
PL12



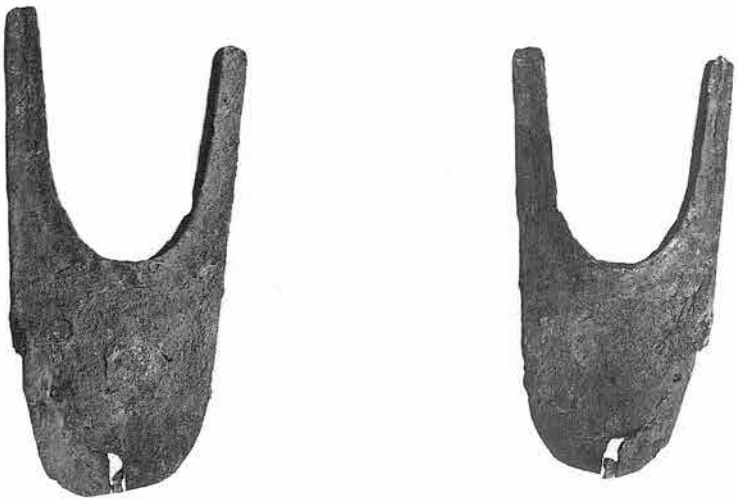
かわらけ溜出土かわらけ（静止糸切りA・Bタイプ）



攪乱土壙



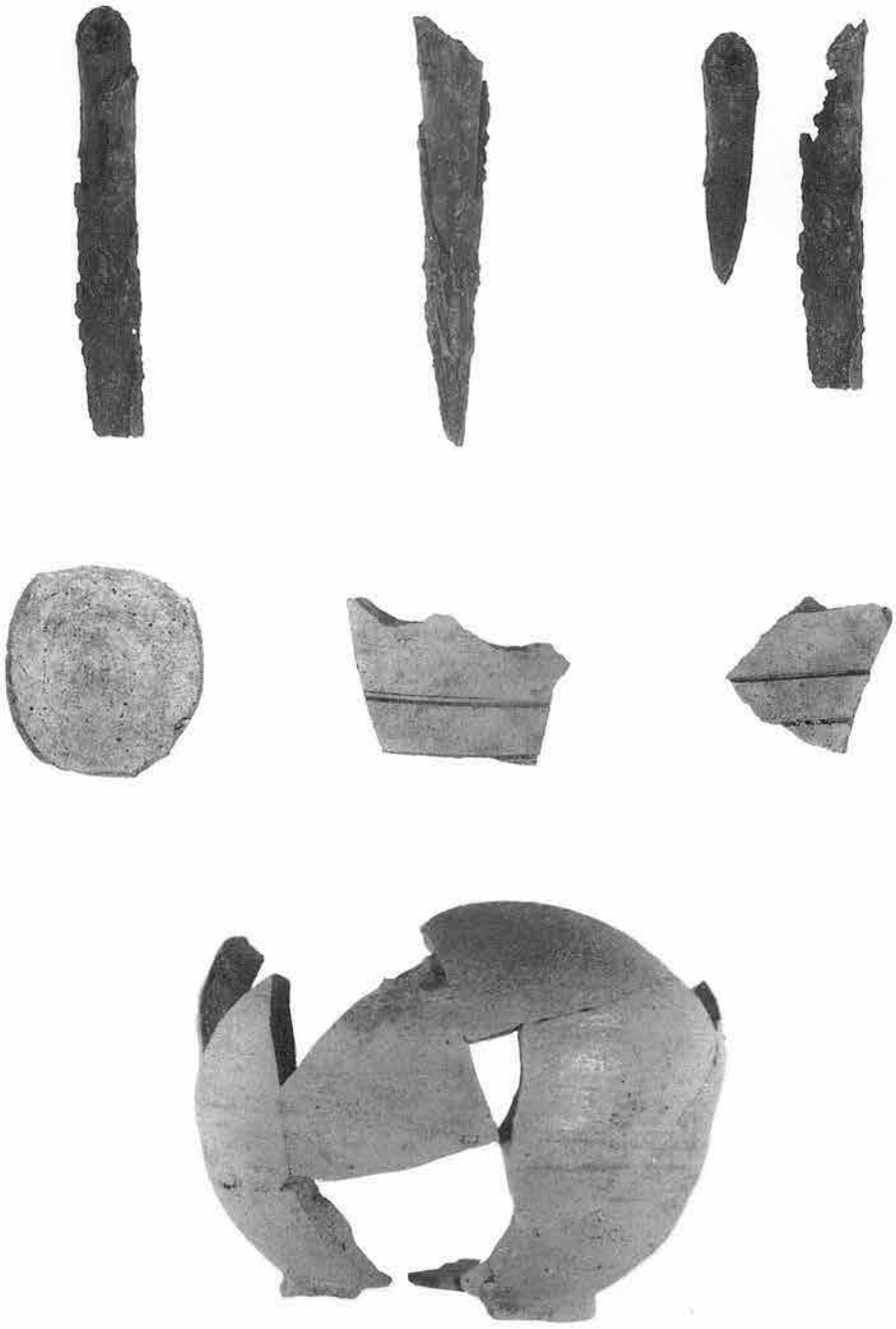
かわらけ溜



かわらけ溜

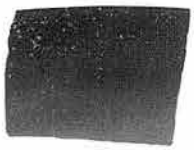
かわらけ溜内出土

近代攪乱土壙・かわらけ溜内出土遺物



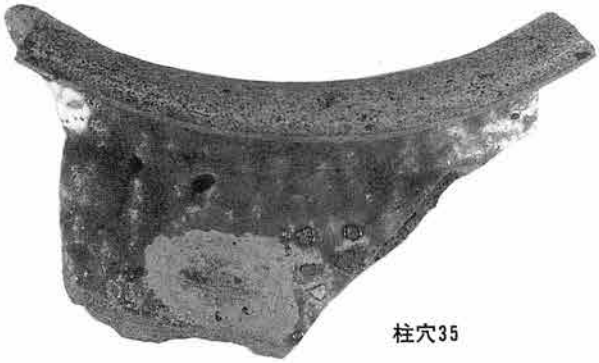
第1面包含層出土遺物

地山



地山

地山



柱穴35

地山

地山

第 2 面遺構・地山包含層出土遺物

9. 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

御成町811番地点

例言

1. 本報は若宮大路周辺遺跡群内の御成町811番における緊急発掘調査報告である。
2. 調査は自己用住宅区域相当の60㎡を対象として、平成３年11月１日から12月29日にかけて、鎌倉市教育委員会によって実施された。
3. 現地調査体制は下記のとおりである。

   担　当　者　大上周三　松尾宣方

   調　査　員　田代郁夫　原　廣志　福田　誠
   木村美代治　菊川英政　菊川　泉
   渡部律子

   調査補助員　丸屋秦子

   協 力 機 関　（株）斎藤建設
4. 資料整理体制は下記の通りである。

   担　当　者　松尾宣方

   調　査　員　継　実

   調査補助員　山田健二　熊谷洋一　浜野洋一
   佐々木靖　遠藤雅一　新山久美子

   協力者　原　廣志　佐藤仁彦　小林重子　須佐直子
   田代幸子　土屋浩美　早野慈子　丸井宏予

   協 力 機 関　（社）シルバー人材センター
5. 本報の執筆・編集・図版作成は松尾宣方と継　実が担当し、文末に文責を明記した。
6. 本報に使用した写真は遺構を木村美代治が、遺物を山田健二が撮影した。
7. 出土品・記録図面・写真類は、鎌倉市教育委員会が保管している。

目次

例言……(260)
目次……(261)

本文目次

第一章　遺跡の位置と歴史的環境……(263)
第二章　調査の経過と概要……(264)
第三章　検出された遺構と遺物……(266)
(1)遺構……(266)
(a) 方形竪穴建物……(267)
(b) 土壙……(267)
(c) 井戸……(269)
(d) 柱穴……(269)
(2)遺物……(270)
第四章　まとめ……(272)
図1　調査地点周辺図……(262)
図2　遺構配置及びグリッド設定図……(265)
図3　遺構全体図……(266)
図4　方形竪穴建物土壙(1)……(268)
図5　土壙(2)……(269)
図6　出土遺物……(271)

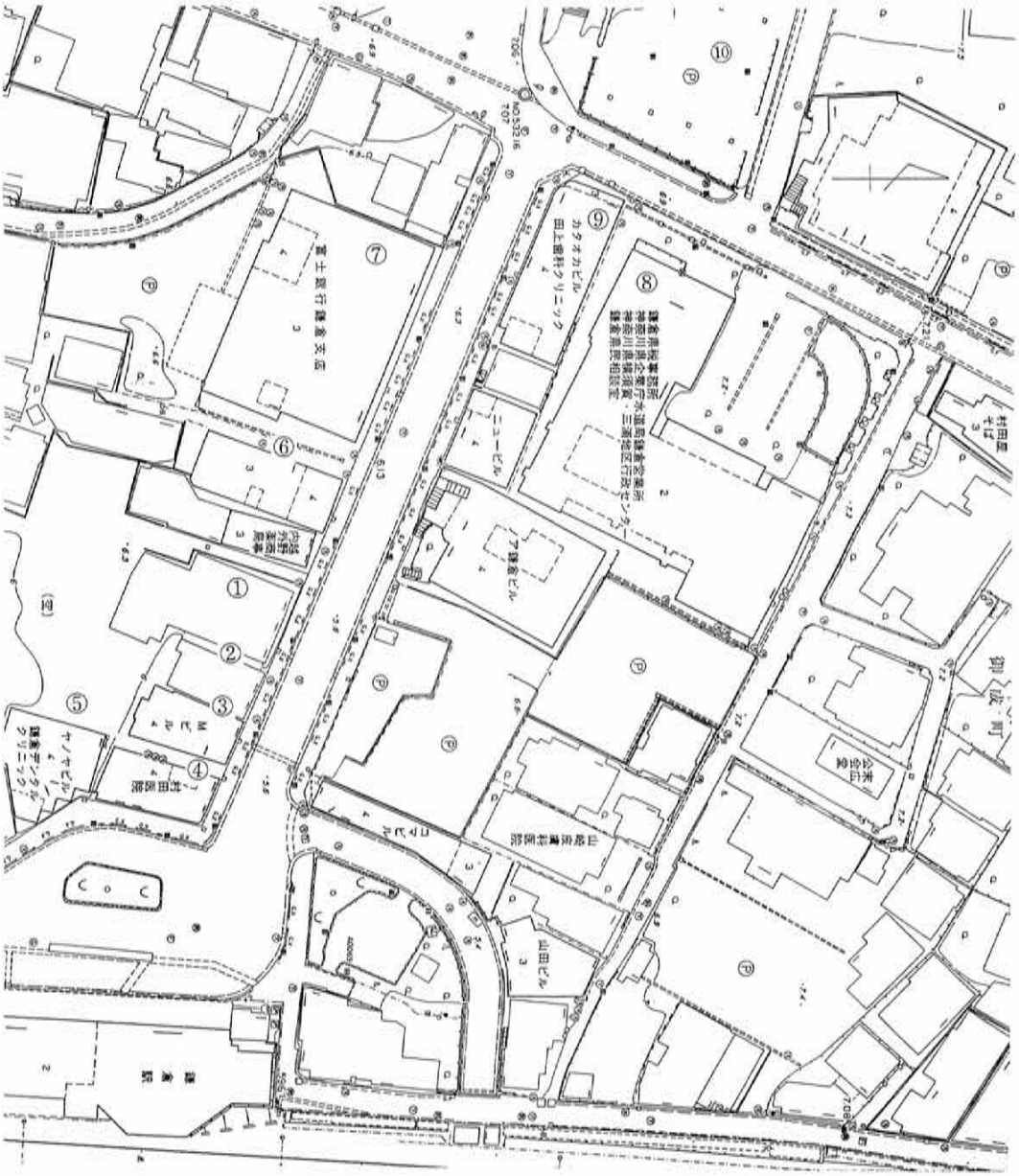


図１　調査地点周辺図

①御成町811番
②御成町818番１地点
③Mビル
④御成町819番-１地点
⑤御成町11番-２地点
⑥御成町806番-３地点
⑦諏訪東遺跡
⑧千葉地東遺跡
⑨千葉地東遺跡
（御成町228番－２番地点）
⑩千葉地遺跡

第一章　遺跡の位置と歴史的環境

遺跡地は鎌倉駅西口、通称裏駅の西側約60mに所在する。地番は鎌倉市御成町811番。遺跡地は駅前ロータリから西に向かって延びている道路の南側に面している。この道路は、今小路と交差し鎌倉市役所脇を抜け、常盤へと向かう。今小路と交差する北西部一帯は「千葉地」、「地蔵屋敷跡」などと呼ばれており、源頼朝の重臣千葉常胤（1118～1201）以来、千葉氏が居住した所と伝っている。又、南西部一帯、現鎌倉市役所、御成小学校付近は「諏訪屋敷跡」と云われており、今小路西遺跡の調査では広大な武家屋敷が検出されている。今小路は、若宮大路の西側に並行して走る主要街路で、『快元僧都記』天文８年（1539）十月の条に、扇ヶ谷今小路の番匠主計助が荒神宮を補修したとあるのが初見で、それ以前は「今大路」と呼んだとする説、「武蔵大路」と呼んだとする説がある。

遺跡地の周辺は、これまでに数多くの調査が行われている(図－１参照)。以下に各々の概略を述べておく。(文頭の番号は図－１と同一)

・3.Mビル用地遺跡：報告書は未刊行。遺跡が営まれた時期は14世紀である。検出されている遺構は方形竪穴建築址、井戸などである。

・5.御成町11－２地点遺跡（ヤノヤビル用地）：遺跡が営まれた時期は14世紀。検出されている遺構は方形竪穴建築址、木組の溝、土壙、柱穴などである。この他に古代の土師器片が出土している。

・6.御成町896－３地点遺跡：遺跡が営まれた時期は14世紀である。検出されている遺構は、方形竪穴建築址、土壙などの中世の遺構とこの周辺では唯一検出された古代の竪穴住居址がある。

・7.諏訪東遺跡：遺跡が営まれた時期は13世紀末～15世紀前半である。検出されている遺構は方形竪穴建築址、木組・石組の溝、土壙、井戸などである。この他に縄文、弥生、古墳時代の土師器片などが出土している。

・8.千葉地東遺跡：遺跡が営まれた時期は13世紀中葉～14世紀後半である。検出されている遺構は方形竪穴建築址、溝、基壇状遺構、土壙、井戸などである。

・9.御成町228－２地点遺跡（片岡ビル用地）：遺跡が営まれた時期は13世紀中葉～15世紀前半である。検出されている遺構は方形竪穴建築址、井戸、土壙、溝。他に河川の一部が検出されている。

・10.千葉地遺跡：遺跡が営まれた時期は13世紀中葉～14世紀後半である。検出されている遺構は方形竪穴建築址、溝、基壇状遺構、土壙、井戸、道路状遺構などである。　　（継　実）

(参考文献)
『鎌倉市史・総説編』吉川弘文館　1959
『御成町806－３番地地点（附編：御成町11－２番地地点)』鎌倉考古学研究所研究報告第２集　1982
『諏訪東遺跡』諏訪東遺跡調査会　1985
『御成町228番－２他地点遺跡』千葉地東遺跡発掘調査団　1987
『千葉地東遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10　1986
『千葉地遺跡』千葉地遺跡発掘調査団　1982

第二章　調査の経過と概要

本調査は鎌倉市御成町811番に所在する店舗併用住宅建設用地の内、自己用住宅区域約60㎡を対象にして実施された緊急発掘調査である。

調査に先立つ事前協議の過程で平成３年７月17日～18日に試掘調査を行い、地表下100cm程で遺構面等が検出された。これにもとづく協議調整を経て同年11月１日から12月29日にかけて、若宮大路周辺遺跡群発掘調査団（団長吉田章一郎氏）と協力して本調査を実施したのである。

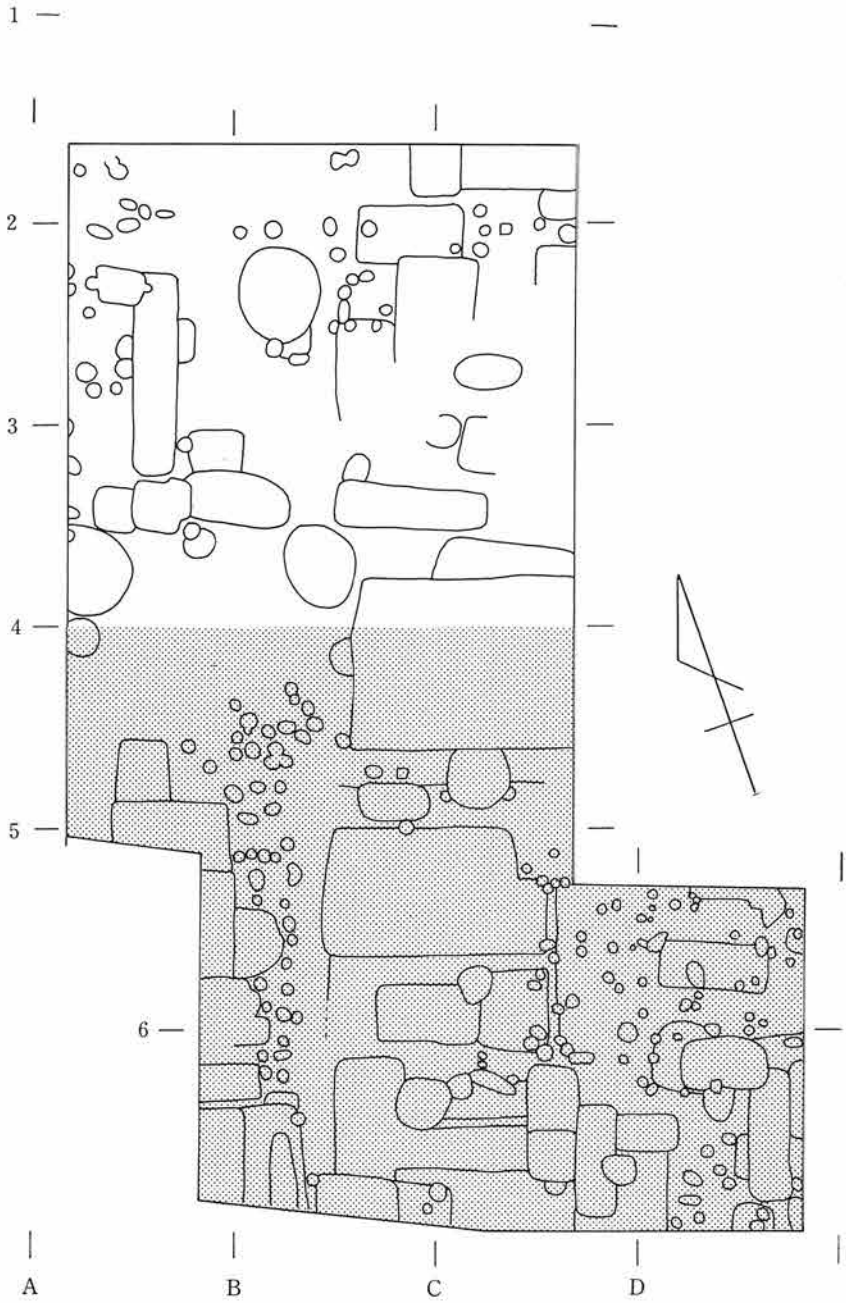
調査区域は全体面積が230㎡で南北に長い鍵型の敷地形状を呈している。このため、南半部（奥側）を第一次、北半部（道路側）を第二次調査区とした。また、調査区設定方法は北側道路縁石南辺を基軸線とし、平行軸線にはアルファベット、直交軸線には算用数字を各々北西隅を起点として4mピッチで付し発掘区を4m方眼で区画した。各グリッドの名称は北西隅の交点を以って命名した。なお、基軸線は諏訪東遺跡（⑦）と共通している。

第一次調査は11月１日から12月13日まで、第二次調査は12月14日から29日までの期間で各々行われた。両次調査の区域境は４ラインである。当該地一帯は近代における地盤削平のため、表土下が中世遺構検出面（暗褐色粘質土層）となり地表下130cm程で地山層の黄褐色砂質土層に到達する。

調査で検出された主な遺構は、中世では方形竪穴建物・円形土壙・方形土壙・井戸・柱穴等で、注目すべき出土遺物には発掘区中央部に位置する大型方形土壙から出土した桐紋を墨書した折敷板がある。また、古代では竪穴住居・方形柱穴列等を検出した。年代観としては中世遺構は13世紀中半から14世紀後半、古代遺構は８世紀代と考えられる。

調査によって得られた成果は刮目すべきものが多いが、本稿では第二次調査区域における中世遺構を中心にした報文を国庫補助事業調査分として掲載する。残余の区域及び古代遺構については近いうちに刊行される調査団編集による報告書を参照されたい。

（松尾宣方）



※図中白ヌキが今回報告分

図 2　遺構配置及びグリッド設定図

第三章　検出された遺構と遺物

(1)遺構（図３～５、図版１）

本報で紹介する遺構の多くは土壙であり、他は方形竪穴建物・井戸・柱穴である。遺構群上の掘り込み面は削平によって消失しているため、深度の計測値は調査時の確認数値である。また、各遺

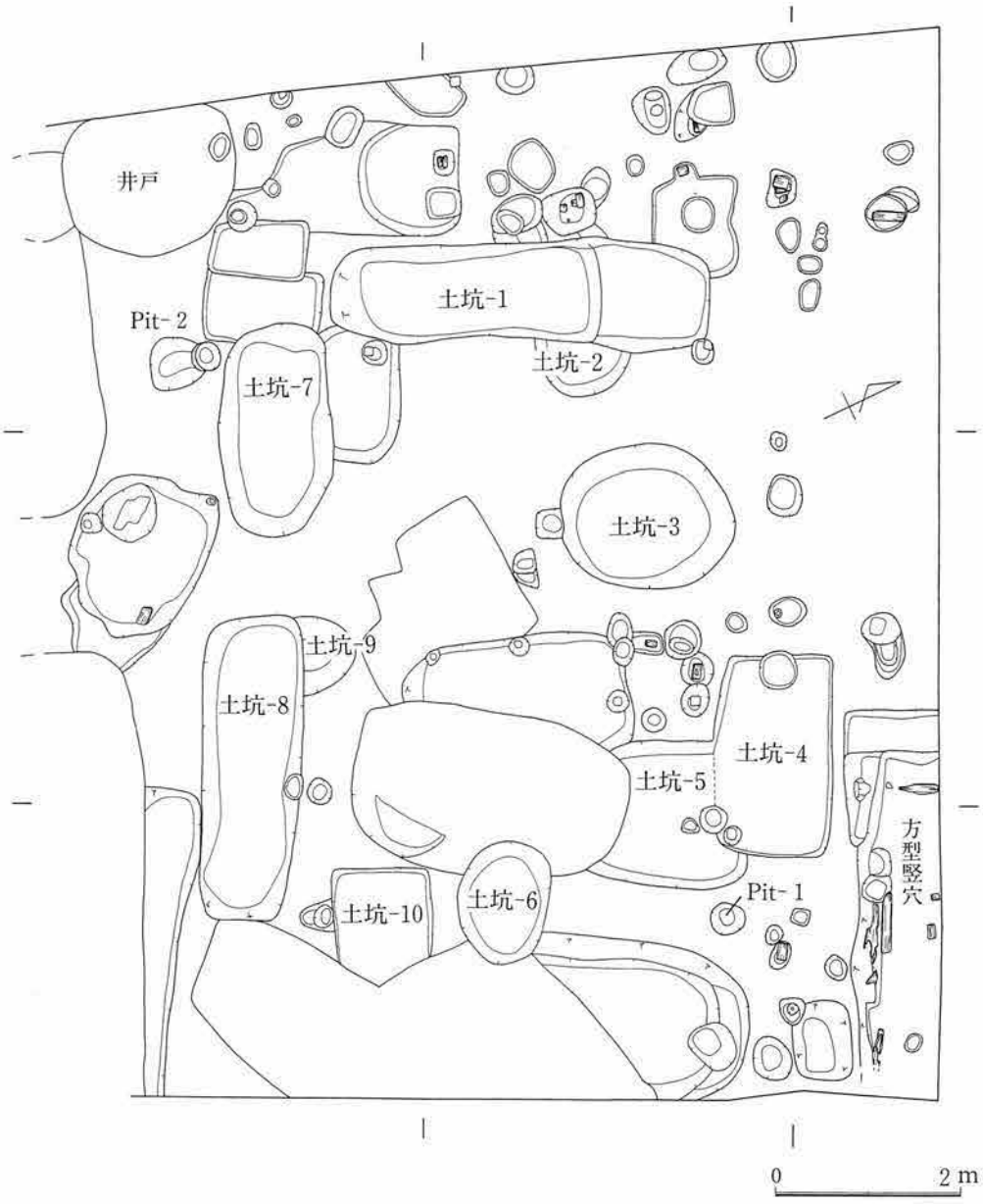


図３　遺構全体図

構の前後関係の把握は困難であったが、切り合い関係や出土遺物の年代観によって推定した。

（a）方形竪穴建物（図－4、図版－1）

調査区北東隅に位置し、主軸は東西方向。方形竪穴建物跡と判断し得るのは同遺構のみであったが、調査区外に範囲が及ぶため或は別種の遺構である可能性も否定し得ない。調査区内で長辺330cm、短辺80cm、深さ40cm（標高数値4.8M・以下同）を測る。南壁側に柱穴と壁板材を残し、床面上には柱穴と礎板が認められる。図7（以下同）1～3出土。14世紀中・後半期。

（b）土壙（図－4・5、図版－1）

土壙は11基検出された。何れも床面上遺構は確認できない。形状は円形・長円形・長方形・方形の4タイプに分類されるが、遺構番号11のみは不整円形状を呈し他の土壙と性格を異にすると思われる。

1は調査区西側に位置し、主軸は南北方向。長辺410cm、短辺100cmで長方形を呈す。床面は北側が一段高くなり、深さは低い側で40cm（4.9M）高い側で25cm（5.05M）を測る。4～9出土。14世紀中・後半期。

2は円形土壙で1に東半部を切られ、径100cm、深さ25cm（5.0M）を測る。出土遺物なし。

3は2の東側に位置する円形土壙で、長径190cm、短径160cm、深さ15cm（4.8M）をはかる。10～12出土。13世紀後半期。

4は調査区北辺側に位置し、主軸は東西方向。長辺220cm、短辺130cm、深さ15cm（5.15M）を測る長方形土壙。13出土。14世紀中・後半期。

5は4と攪乱穴とに南北壁を切られた方形土壙で、一辺約160cm、深さ15cm（5.2M）を測る。14、15出土。14世紀中・後半期。

6は調査区東側に位置する円形土壙で、長径130cm、短径100cm、深さ90cm（4.35M）を測り、東端部は攪乱による削平を受けている。16、17、33、37出土。13世紀中・後半期。

7は1の南側に位置する長円形土壙で主軸は東西方向。長辺220cm、短辺130cm、深さ30cm（4.9M）を測る。本土壙に切られる形で北東側に土壙状の落ち込みがあるが、明確に確認し得なかった。22～25出土。13世紀中・後半期。

8は7の東側に位置する長方形土壙で、主軸は東西方向。長辺320cm、短辺110cm、深さ50cm（5.0M）を測る。29出土。14世紀前半期。

9は8の東北隅に接し同土壙によって西半部を切られた円形土壙である。径60cm、深さ25cm（5.2M）を測る。30、31出土。13世紀末期か。

10は6の南側に位置する長方形土壙であるが、攪乱により東側の大半を欠失している。主軸は東西方向。長辺120cm以上、短辺110cm、深さ40cm（4.95M）を測る。32、34、35出土。14世紀前半期。

11は7・8の南側に位置する不整円形土壙で平均径約160cm、深さ20cm（5.05M）を測る。26～28出土。14世紀中・後半期。

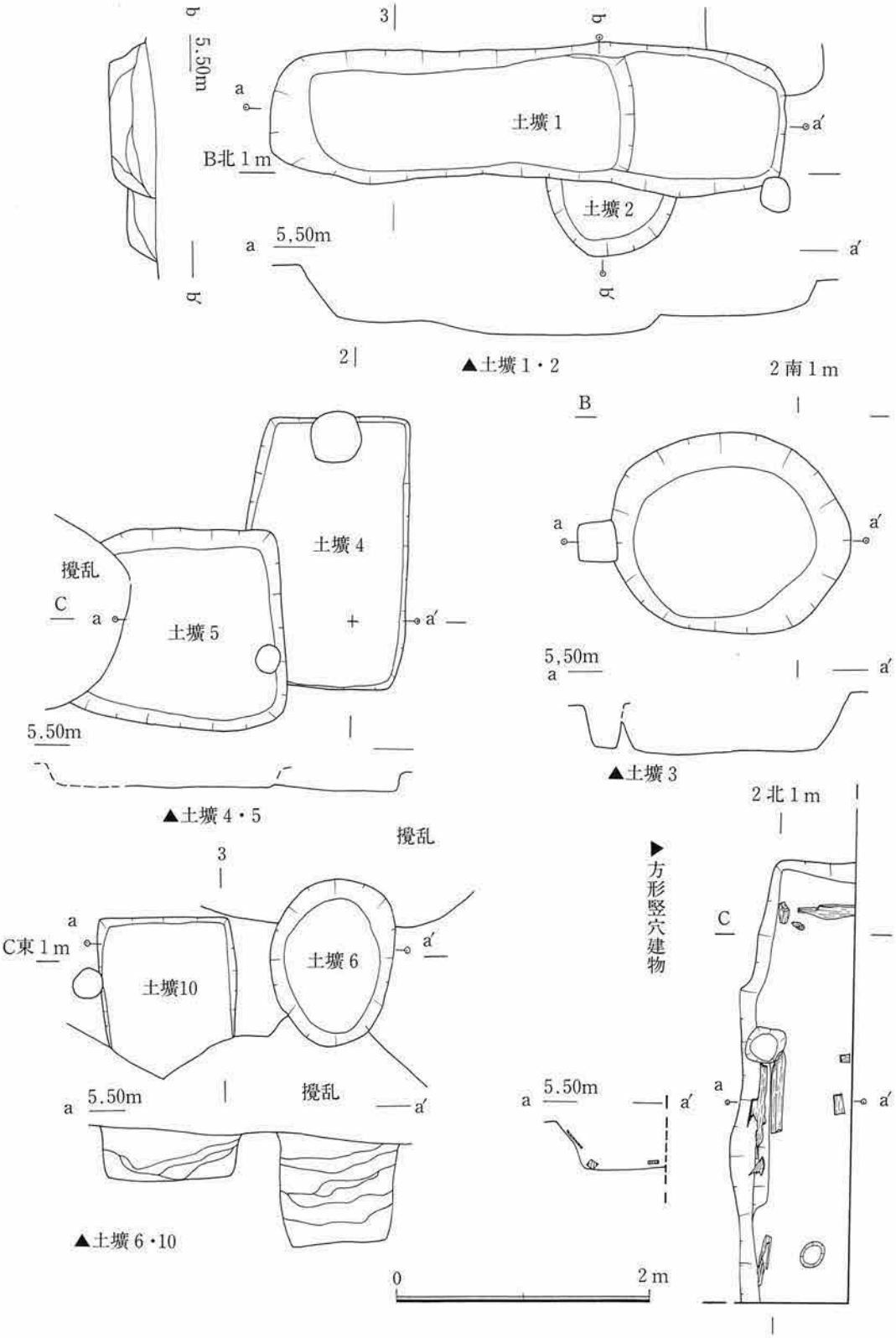


図4　方形竪穴建物・土壙(1)

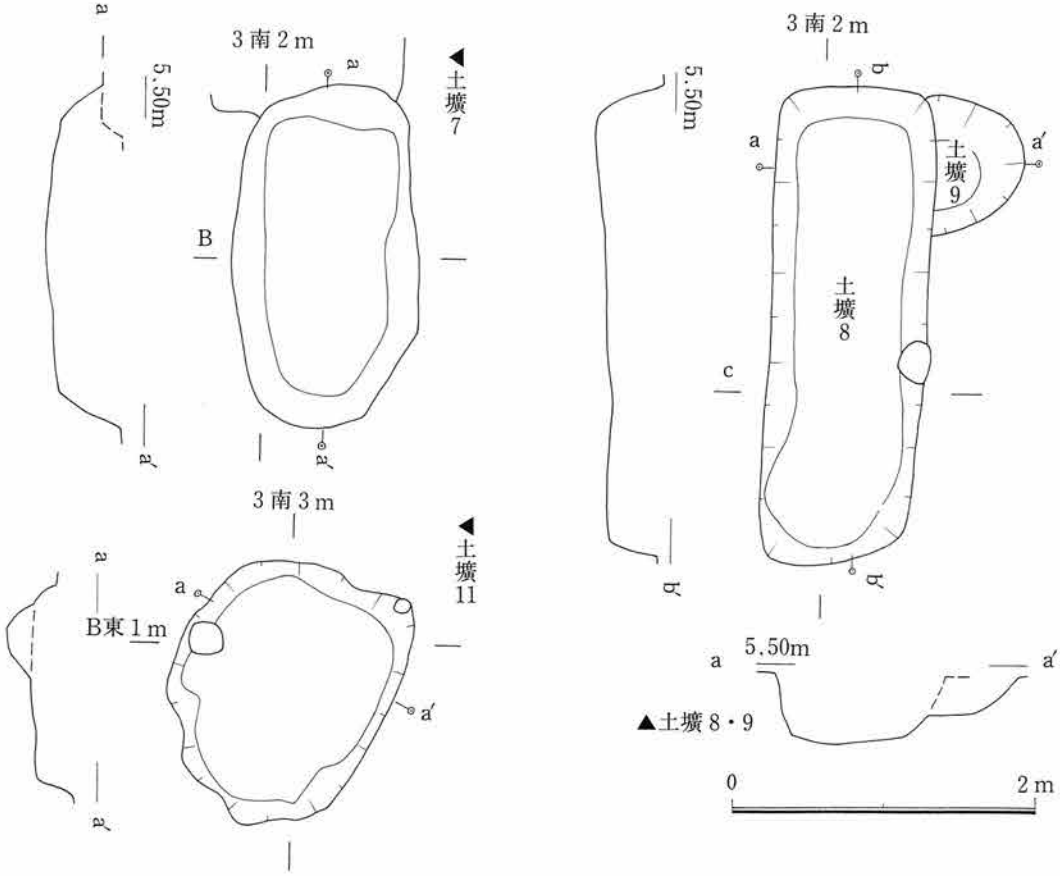


図5　土壙(2)

（c）井戸（図－3、図版－1）

調査区西辺部に位置する。径約110cmの円形素掘井戸であるが、覆土上層部に近代の整地用石材が充塡され、また覆土自体も軟弱であった。これらの状況から推して、本井戸の築造時期は近代の所産と判断し得る状況であった。

（d）柱穴（図－3、図版－1）

検出されたピット群の内、出土遺物の項で掲載したもののみに1～2の番号を付した。1は13世紀代、2は13世紀末14世紀初頭の所産と考えられる。礎板が残存するピットや、形状から柱穴と判断し得るピットを柱穴群としてグルーピングを図ったが、建物としての規模等を確定することはできなかった。事業区域の調査結果と併せて再検討したい。

（松尾宣方）

（2）遺物（図－7、図版－3）

遺物包含層中・各遺構中からかわらけを主として国産陶器・舶載陶磁器・瓦・鉄製品・木製品・石製品などが出土しているが、図示し得たものは図－7の39点のみである。かわらけの法量については表－1を参照されたい。又、それぞれの年代観については遺構の項を参照されたい。

4～9は土壙1出土である。掲載し得たのはかわらけのみである。いずれもロクロによる成形品である。7は口唇部に煤の付着が見られ、灯明皿としても使用された様子が窺える。胎土はいずれもきめ細かいものである。

10～12はかわらけで土壙3出土である。12は所謂内折れのかわらけである。胎土はいずれもきめ細かいものである。

13はかわらけで土壙4出土である。胎土はきめ細かいもので非常によく焼き締まる。

14、15はかわらけで土壙5出土である。いずれも胎土はきめ細かいものである、15は口唇部に煤の付着が見られ、灯明皿として使用された様子が窺える。

16、17、33、37は土壙6出土である。16、17はいずれも手捏ねかわらけである。胎土はいずれもきめ細かいものであるが、16は非常によく焼き締まり硬質な焼き上がりを見せる。33は白磁玉縁碗である。復元口径は15.2cm。素地は淡灰白色で黒色微粒子を少量含む。釉は白濁色で薄くかかる。口縁折り返し部分の端部は部分的に隙間が見られる。37は下駄である。右半分は欠失。全長は14.5cmと小型である。歯は削り出しである。鼻緒の穴は直径1cm。材は痩せており、表面の状況から使用頻度は観察し得なかった。

22～25は土壙7出土である。いずれも手捏ねかわらけである。22、23、25は胎土非常にきめ細かく、よく焼き締まる。

29はかわらけで土壙8出土である。胎土はきめ細かい。

30、31は土壙9出土である。30はロクロ成形のかわらけである。胎土はきめ細かい。31は軒丸瓦である。瓦当文様は三巴文で、右回りである。瓦当面には細かい砂粒が付着するが、巴の表面には砂は付着しておらず、指頭によるナデが認められる。胎土は細かい砂粒を含むが良好なものである。焼成は比較的軟質で、色調は灰白色を呈する。

32～35は土壙10出土である。32はロクロ成形のかわらけである。胎土は細かい砂粒を含むやや荒いものである。34は青磁折縁鉢である。小片のため法量は不明。素地は灰白色で粘性強い。釉は黄緑色で気泡多く入る。35は常滑甕である。小片のため法量は不明。素地は長石・石英などを多く含む粘性の強い灰白色を呈するものである。口縁部は外反し、口縁端部は上下に少しずつ引き伸ばされ縁帯を形成する。外面胴部に黄緑色の自然降灰がみられる。

26～28は土壙11出土である。いずれもロクロ成形のかわらけで、胎土は細かい砂粒を含むやや荒いものである。

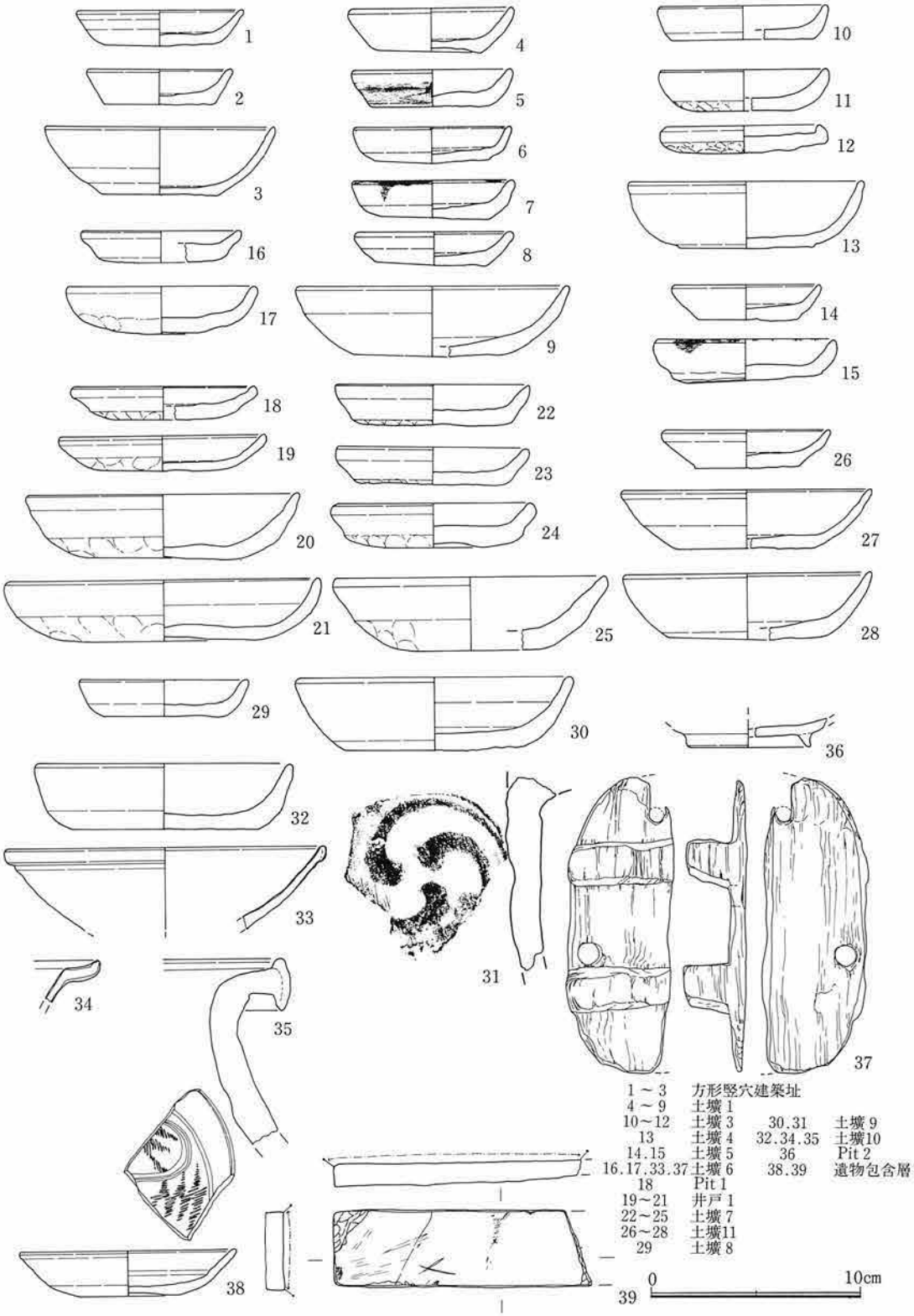

1～3　方形竪穴建築址
4～9　土壙1
10～12　土壙3
13　土壙4
14.15　土壙5
16.17.33.37　土壙6
18　Pit 1
19～21　井戸1
22～25　土壙7
26～28　土壙11
29　土壙8
30.31　土壙9
32.34.35　土壙10
36　Pit 2
38.39　遺物包含層
0
10cm

図6　出土遺物

18はかわらけでPit1出土である。胎土は非常にきめ細かく焼き締まって硬質である。
36はPit2出土である。吉備系土師質土器(早島か？)の底部である。胎土は黒色微粒子を含み薄肌色を呈す。外底面には高台が付される。

19～21は井戸１出土であるが、周辺から流れ込んだものである。近代遺物に関してはここでは図示しない。いずれも手捏ねかわらけで、体部ほぼ中央から下に指頭圧痕が見られる。

１～３は方形竪穴建物出土である。いずれもよく焼き締まっている。１、２は胎土きめ細かく、より硬質な焼き上がりを見せる。

38～39は包含層中出土である。38は青磁の皿。素地は黒色微粒子を含む灰白色である。内底面には櫛掻文が施される。39は泥岩製の仕上げ砥である。

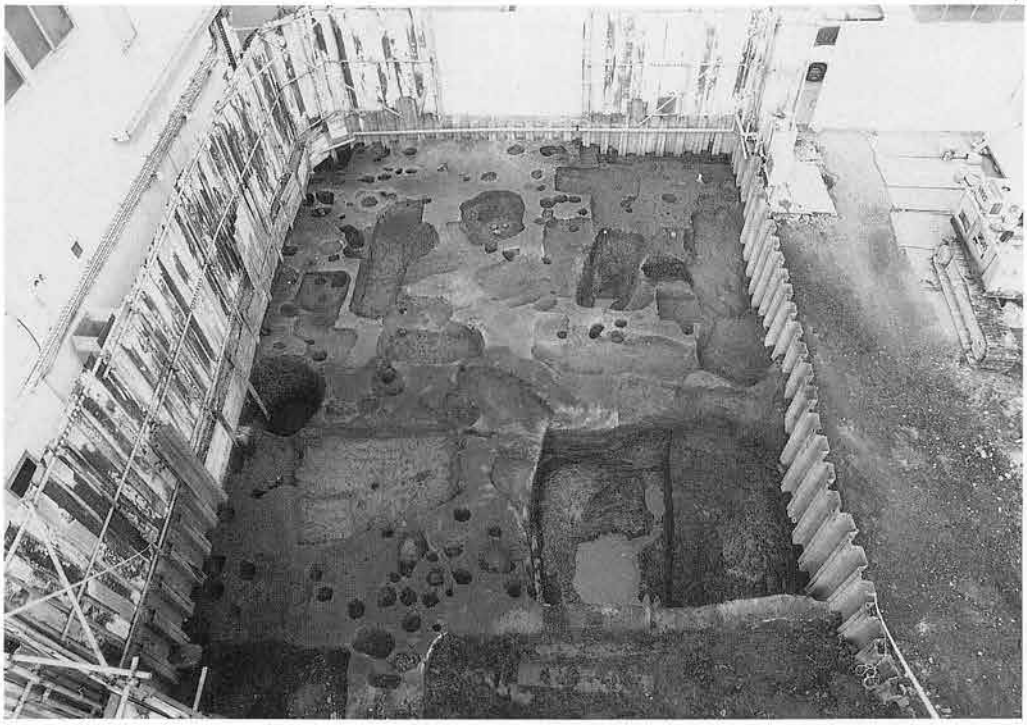
以上各遺物について概説を述べたが、出土遺物にはかわらけが目立つ。胎土は既に触れたように、白色骨針状物・黒色微粒子などを含むきめ細かい粉質のものが主体的である。このうち16、18、22、23、25の手捏ねかわらけは胎土が特に精製されており、雑挟物を含まないものである。ロクロ成形品については、大まかにいって体部中程に強い稜をもつ器肉やや肉厚のものと底部から内彎しながら立上がる比較的器肉の薄手のものがある。図示した舶載磁器については、白磁玉縁碗を筆頭にいずれも鎌倉市内の中世遺跡では比較的古い段階で検出されるものである。

（継　実）

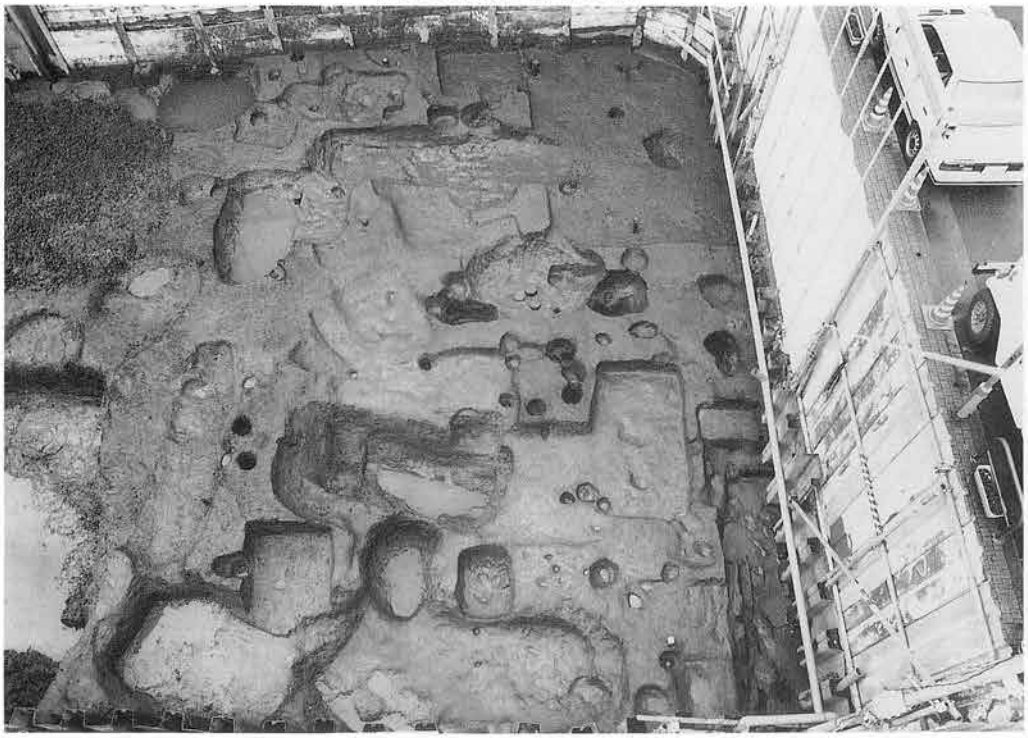
第四章　まとめ

今次調査で発見された中世遺構の特徴は、土壙群の存在である。事業区域分の調査では30基以上の土壙が検出され、本報と併せて40基を超える数が得られた。土壙群は両調査区を跨ぐ大型土壙を中心に展開し、密集度は事業区域側の方が多いようであるが、本報区域の攪乱域を考慮すればそれほどの大差はないようである。土壙の基本型は方形系と円形系とに大別され、また長方形土壙の主軸方向は東西と南北に二分し、整然たる様相を呈する。本報区域の土壙群は円形（２．３．６．９）と長円形（７）のグループと長方形（１．４．８．10）と方形（５）及び不整円形（11）のグループとに分かれ、前者は13世紀代、後者は14世紀代の年代に属する。土壙の機能は貯蔵或はゴミ投棄施設と考えられているが、今次調査で検出した方形系土壙のように、居住性を示唆する遺構的兆候は認められないものの、配置上で一定の規範性の存在を窺わせる在り方は、独自の用途を考えなければならないといえよう。現在までに同種の遺構は市内の各調査地点で散見され、溝状ないしは貯蔵用施設として扱われているが、笹目遺跡では便所施設ではないかと推定している（大河内1991）。本調査地点周辺では御成町819番１地点（④平成元年度実施）で同傾向の出土状況が知られており（調査担当菊川英政の教示による）、今後両地点の事業区域分調査報告書の中で更に考察を深めて行きたい。

（松尾宣方）



▲1.遺跡全景（手前が南）

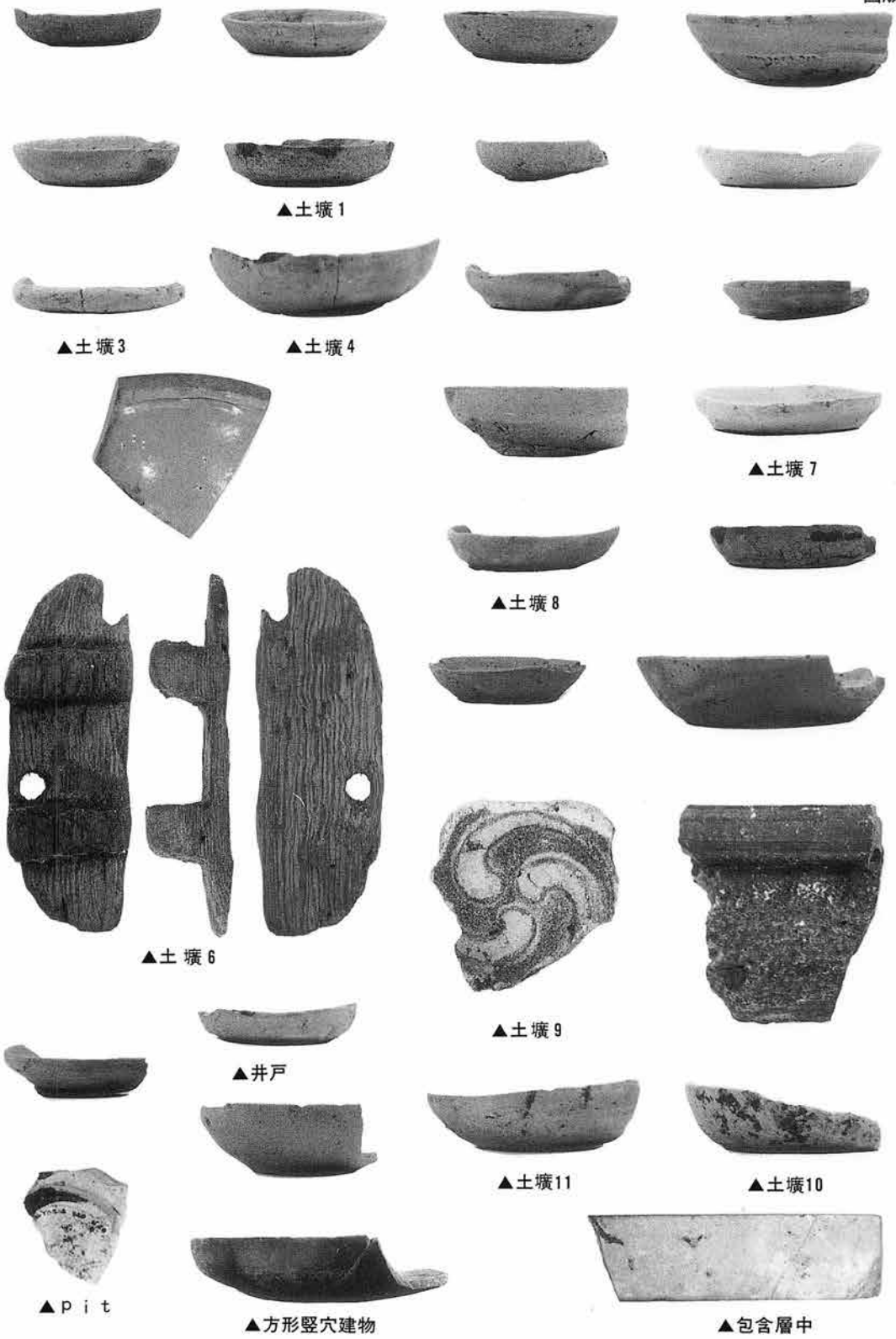


▲2.遺構検出状況（手前が東）

図版 2

▲1.遺物出土状況（烏帽子）

▲2.遺物出土状況（曲物）



出土遺物

10. 若宮大路周辺遺跡群（No.242）

小町二丁目63番３地点

例言

1. 本文は鎌倉市小町二丁目63番3地点の店舗併用住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、国庫補助事業にかかる部分の発掘調査報告である。
2. 本文の執筆は下記の分担で行い、編集は斉木秀雄が行った。又、遺物の実測・トレースには執筆者の他に石元道子・根本志保・松原康子らがあたった。

   斉木秀雄　第1章、第3章、第4章I
   　　第5章
   伊丹まどか　第4章II
   福田　誠　第2章
3. 本文中で使用した写真は遺構・遺物を斉木と伊丹が全景（ポール写真）を木村美代治が撮影した。
4. 本遺跡で使用している調査グリット軸は鎌倉市4級基準点を基に作成した。これには鎌倉市教育委員会嘱託の福田誠があたった。
5. 調査体制

   主任調査員　斉木秀雄
   調　査　員　伊丹まどか、稲田桂子、赤堀祐子
   調査補助員　清水顕史、本城裕、谷下田厚子、増永佐代子、宮本宣子、安達澄代、辻きよ子、八杉陽子、酒井麻子、水野僚子、
   　　菅野五郎、高井富三、高橋健一郎、(鎌倉市シルバー人材センター)

目次

本文目次

第一章　調査地の位置と環境 ……(281)
第二章　調査軸線の設定 ……(284)
第三章　調査の経過と堆積土層 ……(285)
　Ⅰ．調査の経過 ……(285)
　Ⅱ．堆積土層 ……(286)
第四章　遺構と遺物 ……(288)
　Ⅰ．調査概要 ……(288)
　Ⅱ．遺構と遺物 ……(288)
第五章　まとめと考察 ……(306)
　Ⅰ．検出遺構の年代 ……(306)
　Ⅱ．遺構15について ……(307)
　Ⅲ．遺構の変遷について ……(309)

図版目次

Fig. 1　周辺の調査地点 ……(282)
Fig. 2　グリッド軸設定図 ……(284)
Fig. 3　調査区設定図 ……(285)
Fig. 4　堆積土層模式図 ……(286)
Fig. 5　上層遺構群 ……(289)
Fig. 6　下層遺構群 ……(291)
Fig. 7　遺構15 ……(293)
Fig. 8　遺構15出土遺物（1） ……(295)
Fig. 9　かわらけ計測模式図 ……(269)
Fig. 10　遺構15出土遺物（2）……(297)
Fig. 11　遺構15出土遺物（3）……(299)
Fig. 12　遺構15出土遺物（4）……(300)
Fig. 13　遺構15出土遺物（5）……(301)
Fig. 14　遺構15出土遺物（6）……(302)
Fig. 15　方形竪穴類例 ……(308)

表 目 次

表１．遺構15上層かわらけ法量表 ……(294)
表２．遺構15下層かわらけ法量表 ……(296)

写真目次

PL.１　1.1区上層遺構群全景
　　2.1区下層遺構群全景
PL.２　1.遺構15（西より）　2.遺構15(東より)　3.遺構15東西土層断面(西より)
PL.３　1.旧河川堆積土層(西より)　2.1区上層東側遺構群獣骨出土状況　3.遺構184手づくね土状況
PL.４　1.溝３(南から)　2.遺構15南側柱穴列(東より)　3.遺構15東側遺構群(北より)　4.旧河川の状況(北西より)

第一章　調査地の位置と環境

調査地（小町２丁目63－３地点）は若宮大路周辺遺跡群（神奈川県遺跡台帳No. 242）に含まれている。若宮大路周辺遺跡群は北条時房邸あるいは幕府跡域を除く今小路、小町大路、車大路、国道134号線に囲まれた広大な地域を含むが、調査地は若宮大路の西に位置する。

調査地点は若宮大路二ノ鳥居前と西の今小路を結ぶ道路の北側、観光客で賑わう小町通りとJR横須賀線との中間に位置する。現状面の海抜は6.5m前後。調査地の北には扇ヶ谷から流れ出た河（扇ヶ谷水路）が東に向って流れている。現状ではほぼ平坦な市街地の一画にあたる。

中世における調査周辺の状況はほとんど明らかにされていない。これはこの辺りが中世にどのように呼ばれていたか把めていないことにも因る。中世の中心路である若宮大路と今小路との中間辺にあたることもあり、おそらくは所謂「町屋」といわれるような区域であったと思われる。

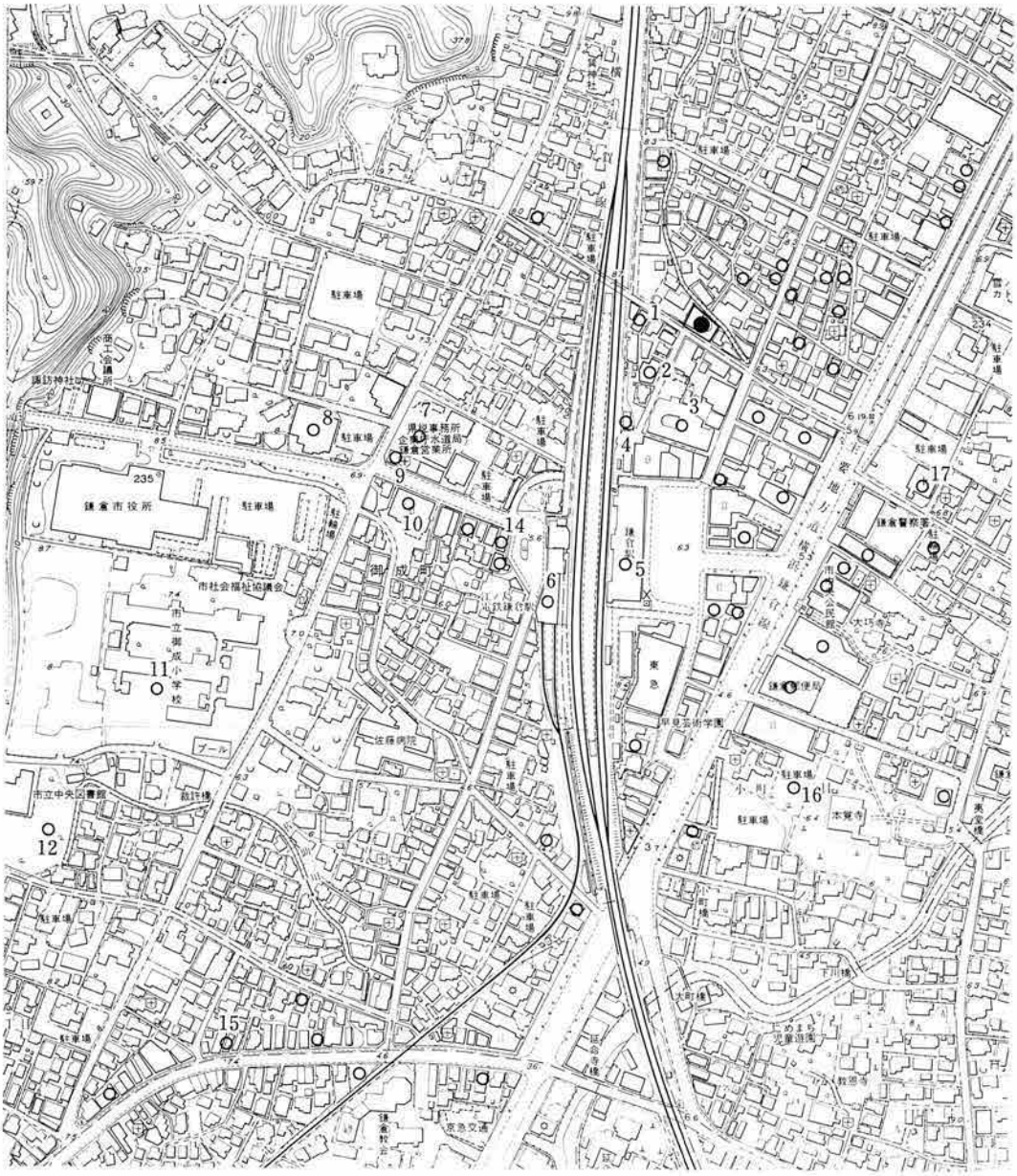
本調査地点周辺での発掘調査は、市街地の中心部であるということもあって、多くの地点で実施されている。しかし、調査面積が狭いために様相を明確にし得てはいない。地表にでた点と点とを結んで地中に描かれている絵を復元するようなものであり、非常に困難である。

地点１[註1]では現在の道路にほぼ平行する東西方向へ「河川」が、地点４[註2]ではこれと方向の異なる道路と溝が検出されている。調査面積の広い地点３[註3]では居住区画と建物群が数期にわたって構築され、多量の木製品が出土している。これに対して地点５では中世の地山である暗褐色粘質土のレベルが高く、井戸、溝、建物等は多く検出されているものの、木製品の遺存は少ない。中世地山の高低差が考えられる。

JR横須賀線の西の同一遺跡群内では地点７[註4]と地点10[註5]で比較的広面積の調査が実施されている。地点７では12世紀後半から15世紀前半頃にかけての住居群と溝の他に今小路の東に沿って流れる河川も確認されており、地点10では溝によって区画された「居住空間」と建物、井戸、方形竪穴建築址が確認されている。又、この辺りの中世地山が地点５をトップとして、地点10に向って低くなる傾向が確認されている。これは、地点５辺りが高台で、地点７、10辺りの河川に向って地形が低くなっていることを示している。

若宮大路周辺遺跡群の西に接する今小路西遺跡では地点８[註6]と地点11[註7]で調査報告書が刊行され、中世の様相が明らかにされている。地点11は通称「御成遺跡」と呼ばれ、現在検出された遺構の保存問題で話題を提供している。検出されているのは２つの屋敷地（のほぼ全域）とその前に広がる居住区（道路も含めて）であり、これほどに中世の様相が把める広さの遺跡は他に例がない。地点８では今小路に斜交する規模の大きい道路と区画された居住区が検出されている。状況は今小路を挟んだ地点７・10等と同様である。

中世以前では、地点11の中世の屋敷の下から鎌倉郡衙と考えられる遺構群が検出され、「中世以前は東国の一寒村であった」という定説を覆した。これは、源頼朝が入ってくる以前の「ほんの一時



1 『小町一丁目120番－1地点遺跡』 風門社ビル発掘調査団 1989年
2 『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』 鎌倉市教育委員会 1986年
3 小町1－106地点 未報告
4 未報告
5 『蔵屋敷遺跡』鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会 1984年
6 『蔵屋敷遺跡』 同調査団 1983年
7 『千葉地東遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター 1986年
8 『千葉地遺跡』 同調査団 1982年
9 『御成町228番－2地点遺跡』 同調査団 1987年
10 『諏訪東遺跡』 1985年
11 『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』 1990年
12 中央図書館内 未報告
13 『鎌倉考古学研究所調査調査研究報告第2集』 鎌倉考古学研究研究所 1982年
14 未報告
15 未報告
16 『(推定）藤内定員邸跡遺跡』 鎌倉市教育委員会 1985年
17 『小町2丁目345番2地点遺跡』 同調査団 1985年

Fig 1　周辺の調査地点

期の様相」であって、それ以前でも周辺を含めた中心であったのである。

中世以前の様相は、中世に比べて進展が遅れていることもあって、あまり明確ではないが、地点2[註8]と13[註9]で竪穴住居址が検出されている。又、やや規模の大きい掘立柱建物の一部が地点14[註10]と地点12[註11]で検出されており、鎌倉市内に平面的な広がりがあったことを裏付けている。

本調査地点の周辺の発掘調査は多く実施されているものの、発掘調査が激増しているために、資料整理がなされていないものが多い。そのために中世の様相にも不十分な点が多い。さらに、中世以前については、ほとんど研究が始まったばかりであり、資料の蓄積が必要であろう。

註

註1　『小町一丁目120番－1地点遺跡』1989年　風門社ビル発掘調査団

註2　1989年調査。未報告

註3　1987年調査。未報告

註4　『千葉地東遺跡』　1986年　神奈川県立埋蔵文化財センター

註5　『諏訪東遺跡』　1985年　諏訪東遺跡調査会

註6　『千葉地遺跡』　1982年　千葉地遺跡発掘調査団

註7　『今小路西遺跡（御成小学校内）発掘調査報告書』　1990年　鎌倉市教育委員会

註8　「小町1丁目116番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書・3』　1987年　鎌倉市教育委員会

註9　「御成町806－3番地地点」『鎌倉考古学研究所調査研究報告第2集　1982年　鎌倉考古学研究所

註10　1987年調査。未報告

註11　1990年調査。未報告

第二章　調査軸線の設定

当遺跡は若宮大路周辺遺跡群の小町二丁目63番地点に位置する。

調査にあたり、調査地を方眼に区画した。敷地の南辺、東西方向に走る公道際にある２点の地境杭を結んだ線を基本に東西方向のラインを定めた。

鎌倉市内は現在いくつもの遺跡（群）に分けられ、あたかも別な遺跡のように扱われているが本来、中世都市遺跡として一体のものである。年間を通して数多くの調査が行われている現在、個々の調査地点のみの成果だけでなく、数多くの調査成果の積み重ねが中世都市の姿を明らかにするものと思われる。道路や町割りの問題をとっても、離れた調査地点間で検出された遺構が一体のものなのかを確認する必要がある。そのために市内全体に国土座標に載せた共通の測量基準点を設け、正確な三角測量をする必要がある。現在市内には文化財独自の測量基準点は設置されていない。

そこで鎌倉市道路管理課が設置した鎌倉市４級基準点を共通の座標として使用した。この４級基準点の座標と各遺跡のグリット設定との関係を測量すれば、国土座標上に遺跡の位置を正確に載せることができる。

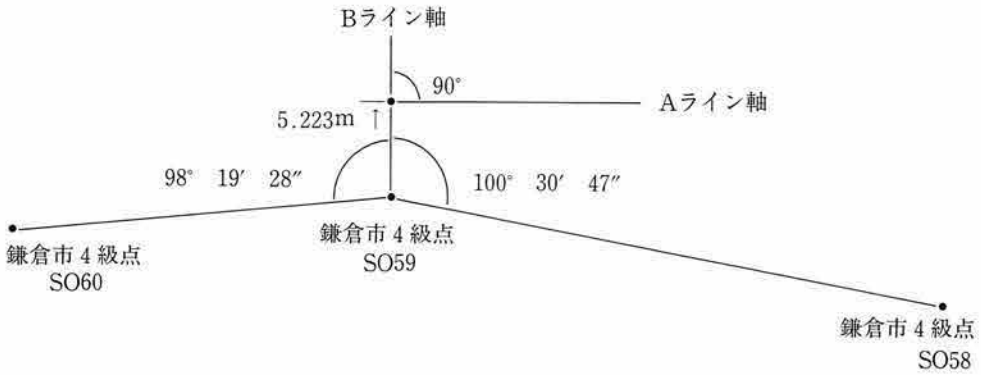


Fig 2　グリッド軸設定図

調査地点の脇にある４級点S059（X軸－757421.554、Y軸－25365.737）を基準に、道路上で見通せる４級点のS060（X軸－75712.477、Y軸－25389.618）、S0588（X軸－75746.450、Y軸－25335.699）の３点を使用した。基準にしたS059から東側にあるS058を見通し、北に角度を100°30′47″振った方向を、南北方向の基軸線（Aライン）とした。西側にあるS060と基軸との関係は基軸線より西に98°19′28″である。基準のS059から、基軸線上を北に5.223mの地点（X－75722.310、Y－25360.567）をグリットの原点（Aラインと４ラインの交点）とした。方眼は4mグリットとして、南北方向にアルファベット、東西方向に算用数字を付した。

第三章　調査の経過と堆積土層

1　調査の経過

本地点の発掘調査は、国庫補助事業分、原因者負担分を合わせ、平成４年４月１日から同年５月23日の間に実施した。なお、原因者負担分調査は若宮大路周辺遺跡発掘調査団（団長・斉木秀雄）が実施した。この原因者負担分調査区の発掘調査報告書は、現在整理作業中であるが、平成５年３月末刊行を予定している。

調査は鎌倉市教育委員会文化財保護課が実施した試掘調査の結果を受けて、実施された。調査面積は60㎡（原因者負担分は190㎡）である。

調査にあったては、まず建設予定範囲にＨ鋼材を打ち込んだ、これは、調査に関わる掘り下げ等で、周辺の現地表が崩壊するのを防ぐ目的もある。そののち、現地表下約1mの攪乱層（現代埋土を

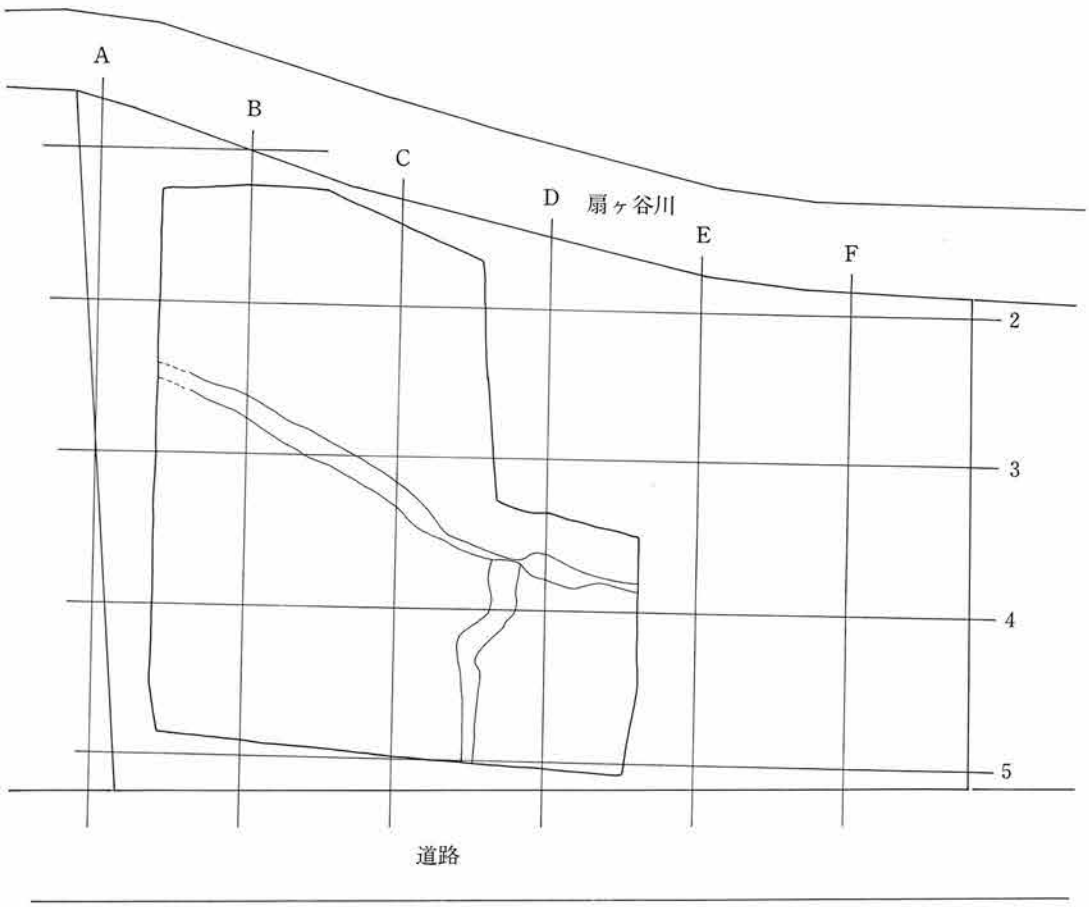


Fig 3　調査区設定図

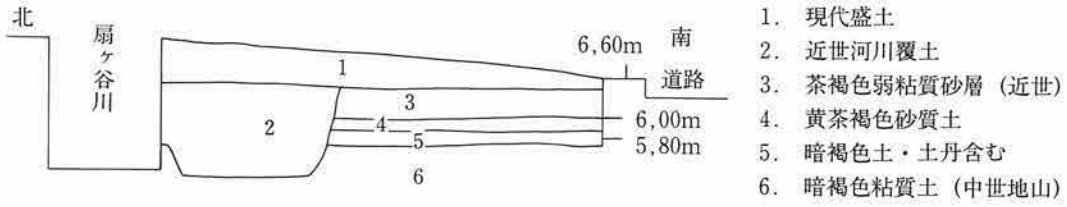


Fig 4　堆積土層模式図

中心とする土層）を機械により取り除くことから開始した。現地表下1mというのは試掘調査の結果から導き出した数値である。しかし、これに返して、調査を南側では、現地表下30cmで良好な中世遺構面が検出されてしまった。そのため、機械による表土層の掘削は、最大70cm（北側）と修正した。

発掘調査は３回に分けて実施した。これは小面積ではあるが、調査に関わる排土の搬出用の車幅・重機が道路上に置けないことが原因である。

第１次調査区は敷地西半分であり、本来ならば東半分が第二次調査区であるが、ほぼ中央部に在った排土ストックスペースを第二次調査区としたため、東半分は第三次調査区となった。本報告分は第一次調査区南側に位置する。

調査用グリットは前章で述べたように鎌倉市４級基準点から作成し、敷地内は東西4m、南北4mで設定した。各杭の番号は東西軸は西から東に向ってアルファベット、南北軸は北から南に向って数字を附し、杭名はこれを組み合わせて使用し、グリット名は北東隅杭名を用いた。

調査は敷地北側を西から東に向って流れる扇ヶ谷川の湧水に悩まされながら中世を終了し、中世以前の溝を掘り上げて終了した。

II　堆積土層

本地点の調査で確認した堆積土層は、おおまかに６層に区分できる。この様相は、周辺の中世地山（暗褐色粘質土）の海抜レベルの高い地点の様相と似ている。しかし、本地点のやや南の調査地（Fig. 1－地点）では中世地山のレベルが深く、堆積土も大きく異なっている。中世（特に鎌倉初期）においては本地点周辺の地形がかなり起伏に富んだものであったことが十分に推定できる。堆積模式図はFig.4に示した。

第１層　“現代盛土”敷地内北側の扇ヶ谷川南岸から南側の道路に向って低くなる傾斜をもっている。

第２層　旧扇ヶ谷川の河川埋土。大型土丹、石などを多く含んでいる。現代遺物は含んでいない。

第３層　茶褐色弱粘質砂層。近世の水田埋土と考えられる。若宮大路周辺の調査では近世遺構等の覆土として確認され、地点によってはこの層内に宝永七年の富士山の火山灰を含んでいる。

第４層　黄茶褐色砂質土。上面を砂、貝片を多く含み「版築」されている。上層遺構群構成土。

第５層　暗褐色土。中世地山の直上に薄く堆積している土層。

第６層　暗褐色粘質土。中世地山。

第６層の上面レベルは海抜5.80m前後であり、周辺よりはかなり高台となる。第６層の下には青灰色砂質粘土層が厚く堆積しており、中世以前の遺構は第６層内から検出されている。

第四章　遺構と遺物

Ⅰ．調査概要

本地点の調査（原因者負担分も含めて）では、試掘調査の結果からの予測に反して、多くの遺構が検出された。これらの遺構は検出面あるいは検出状況から、おおよそ４時期に区分できる。しかし、今回報告分調査区に限っていえば、２時期に限られてしまう。又、これら２時期の遺構群も調査区内で完結するものはほとんどなく。調査区を限定してしまうと、ほとんど遺構として把握することが困難となってしまう。

そのため、今報告では調査区内で２時期に区分した遺構群は簡単な説明を行うにとどめ、遺構としては上層遺構群に含まれる「遺構15」と呼称した方形竪穴建築址様の竪穴のみを扱い、出土遺物も同遺構出土のものに限って図示した。今回報告文も含む本地点の発掘調査報告書も作成中であるため詳しくはそれを参照されたい。

〈上層遺構群〉

調査区南側では現地表下約30㎝で確認された。黄茶褐色砂と貝の細片とを混入し、固く版築した地行面上で確認された遺構を本群に含めた。第１次調査区内の原因者負担分調査区はほとんどが近世の扇ヶ谷川である。

本遺構群で検出された遺構は遺構15の他には土壙２基と20口前後の柱穴である。平坦かつ良好な版築面上としては、やや少ない。柱穴から建物は復元できなかった。

面上からはほとんど遺物が出土していないため版築面の時期は把めないが、遺構15覆土上層から出土した遺物では14世紀前半頃が考えられる。

〈下層遺構群〉

中世地山（暗褐色粘質土）上で検出された遺構群である。さらに詳しくみると本群内にも「新・旧」が考えられるが、ここでは触れていない。

検出されたのは今回調査区の東限となる溝（２条）と100口以上の柱穴である。これらの柱穴からは並びは把めたものの、建物としては把めなかったが、建物の軸線は上層の遺構15のそれと同一である。検出された溝は北に向って流れており、このことからすると北に何らかの水路が在ったものと考えられる。

Ⅱ．遺構と遺物

〈遺構15〉

平面形は東西に長軸、上端で約5m、下端で約4.3m。南北に短軸、上端で約2.4m、下端で約1.7m。壁高、約1.10m。床面レベル、海抜4.8mをはかる長方形を呈している。南北軸N－33°－W。

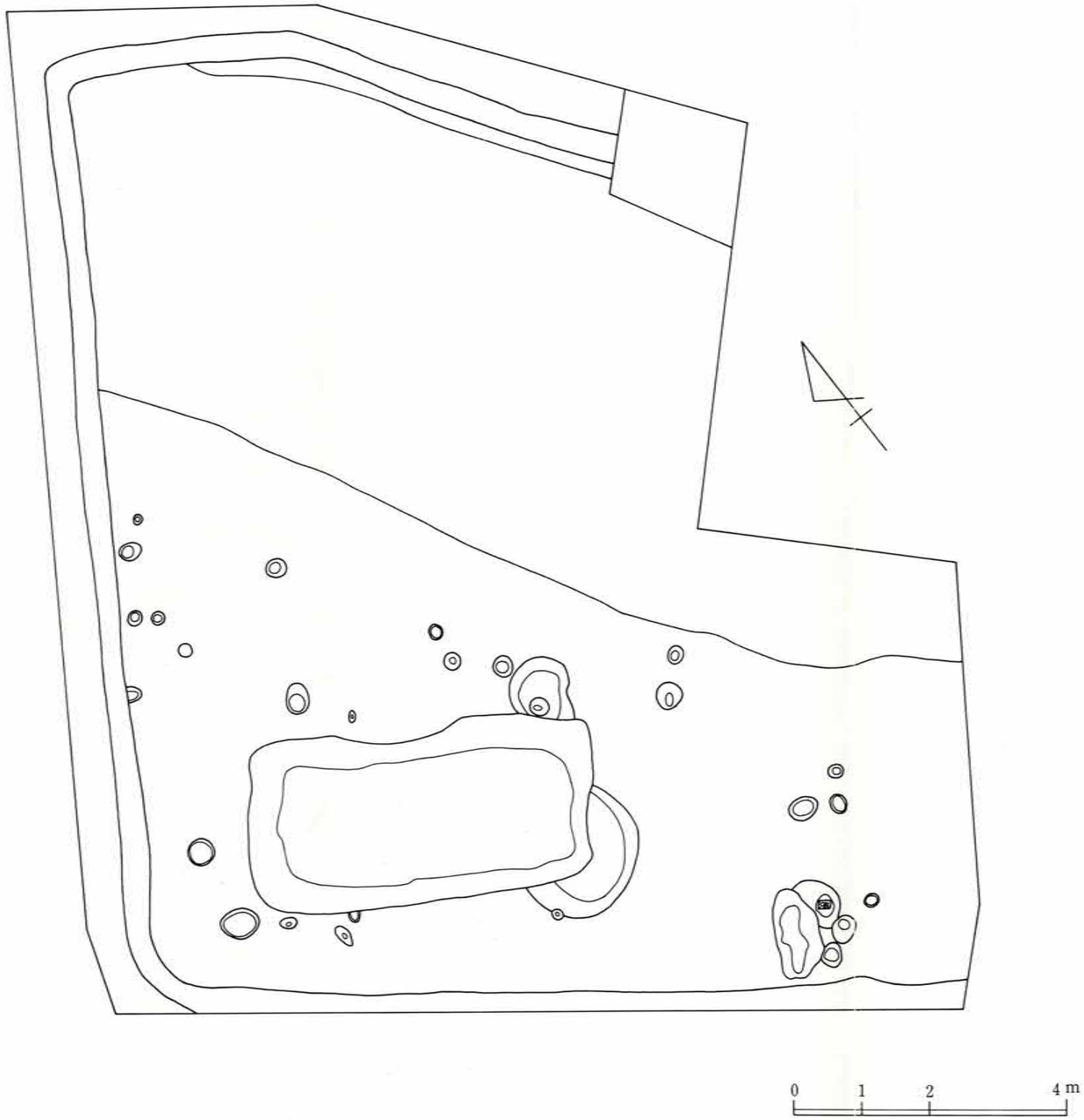


Fig 5　上層遺構群

Fig 6　下層遺構群

図版	No.	口径	底径	器高	器厚	備　考	図版	No.	口径	底径	器高	器厚	備　考
Fig 8	1	80	70	18	9	炭化物付着	Fig 8	15	74	54	15		
	2	78	54	14	(7)			16	80	60	19	6	
	3	78	60	16	(4)			17	76	52	13	6.5	
	4	72	52	15	7			18	84.5	57	18	(8)	
	5	81	58	20	8.5			19	90	68	16.5		
	6	78	56	16	8			20		58			精良な胎土
	7	82	58	17	(8)			21	82	74	32.5	7	静止糸切り
	8	84	52	18				22	106	92	30		静止糸切り
	9	78	57	19				23	126	88	31	(6)	
	10	86	66	16	4			24	126.5	84.5	33.5	7.5	
	11	88	74	15		炭化物付着		25	123.5	82	28	7.5	
	12	78	56	14				26	124	84	29		積み上げロクロ成型
	13	84	60	15				27	120	86	30	8	
	14	83	66	16	7			28		86		10	

表1　遺構15　上層かわらけ法量表

Fig. 8,1～33までは上層の遺物である。

1～28は、かわらけ皿。1は手づくね成型のかわらけ皿である。灰褐色で、外面胴下部に稜が見られる。2～28は、ロクロ成型のかわらけ皿である。小型のもので、口径72mm～88mm。器高14mm～20mm。大型のもので口径106mm～127.5mm。器高28mm～35mm。21は中型の様を呈し、口径82mm、器高32.5mmを測る。器形は、器壁が内湾するもの、外反するもの、様々なタイプが混在する。年代的にも、13世紀末～14世紀前半に出土するかわらけ皿が混在している。これは、遺構が廃絶後にゴミ穴として扱われ、遺物を破棄したために、年代差に幅が出たものとおもわれる。

成型方法は、26のみ底部に粘土盤を巻きつけた痕があり、積み上げロクロ成型と推察される。底部の処理は、殆んどが回転糸切りであったが、21、22は、静止糸切りであった。

29は、平瓦である。灰褐色を呈し、焼成は硬質である。凸面に縄目叩き文痕、凹面にはハナレ砂が付着し、模骨痕が残る。側面は篦削りの後、ナデが施される。

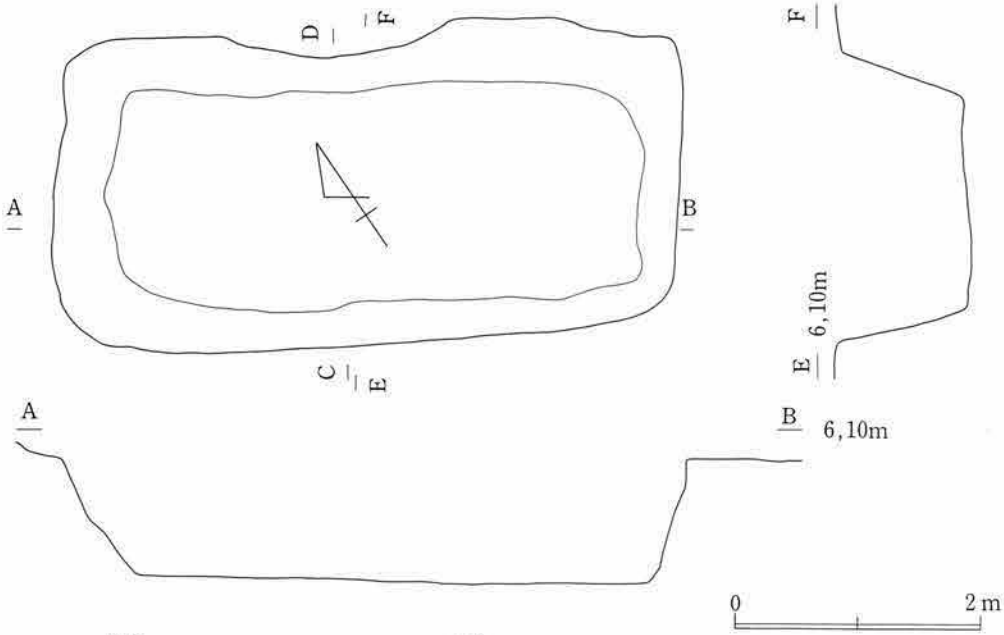
30は、かわらけ片の周囲を研磨したものである。通常、円盤状であるがこれは方形を呈している。約3cm×3cm。厚さ5mm。

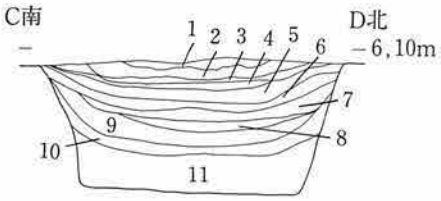
31は、常滑の捏鉢の口縁部片である。胎土は粘性が強く、白色粒を含む。

32は、青磁の碗の底部である。底径34mm、高台高8mm。釉薬は淡水青色で失透。胎土は灰白色で粗い。

33は、鏡の鋳型と思われる。[註1]両面とも研磨されており、緩やかな曲面を呈する。直径約7.1cm、厚さ約1.6cm。

上層からは、この他に白磁の壷の小片が出土している。釉薬は灰色透明。胎土は灰白色できめ細かい。内側にロクロ成型痕が残る。





〔注記〕
1．土丹層
2．茶褐色砂質土
3．黒色粘質土
4．明茶色砂質土・貝片を多量に含み固い
5．黒色粘質土・小型土丹を含みしまりが良い
6．小土丹層
7．灰褐色砂質土
8．黄褐色砂質土
9．灰白色砂質土・貝片を多く含む
10．青灰色粘質土
11．暗褐色粘質土・密に木片・植物遺存体を含む

Fig 7　遺構15

掘り込み壁は、緩やかな傾斜で立ち上がる。壁板の検出は出来なかったが、北側壁面に僅かに木痕が残っていた。床面は、ほぼ平坦な面を呈していたと推察される。床面直上には、藁と思われる植物遺体が全面に堆積していた。その堆積層の上には、多量の木製品遺物が堆積しており、箸、箆、下駄、草履芯、部材、漆器皿等が出土している。陶土器類は若干のてづくねを含むかわらけ皿、舶載磁器片、常滑鉢片等が出土している。

土層断面の観察から、本遺構は廃絶後に、人為的に突き固めて埋め戻され、最上層は土丹塊が、投げ込まれていた。本遺構からは、土丹塊が投げ込まれる前に堆積した上層部と、床面上の堆積からのみ遺物が検出された。

以下、図示した遺物について若干の説明を加える。

なお、かわらけ皿の法量については、別表に記した。法量の計測は、完形品と、口縁部、あるいは底部が全体の３分の１以上残るものを実測し、計測した。器形の歪みなどで、計測値に差の出るものは平均を出し、表には、（　）で呈示してある。計測は、別図（Fig. 9）に従って行った。

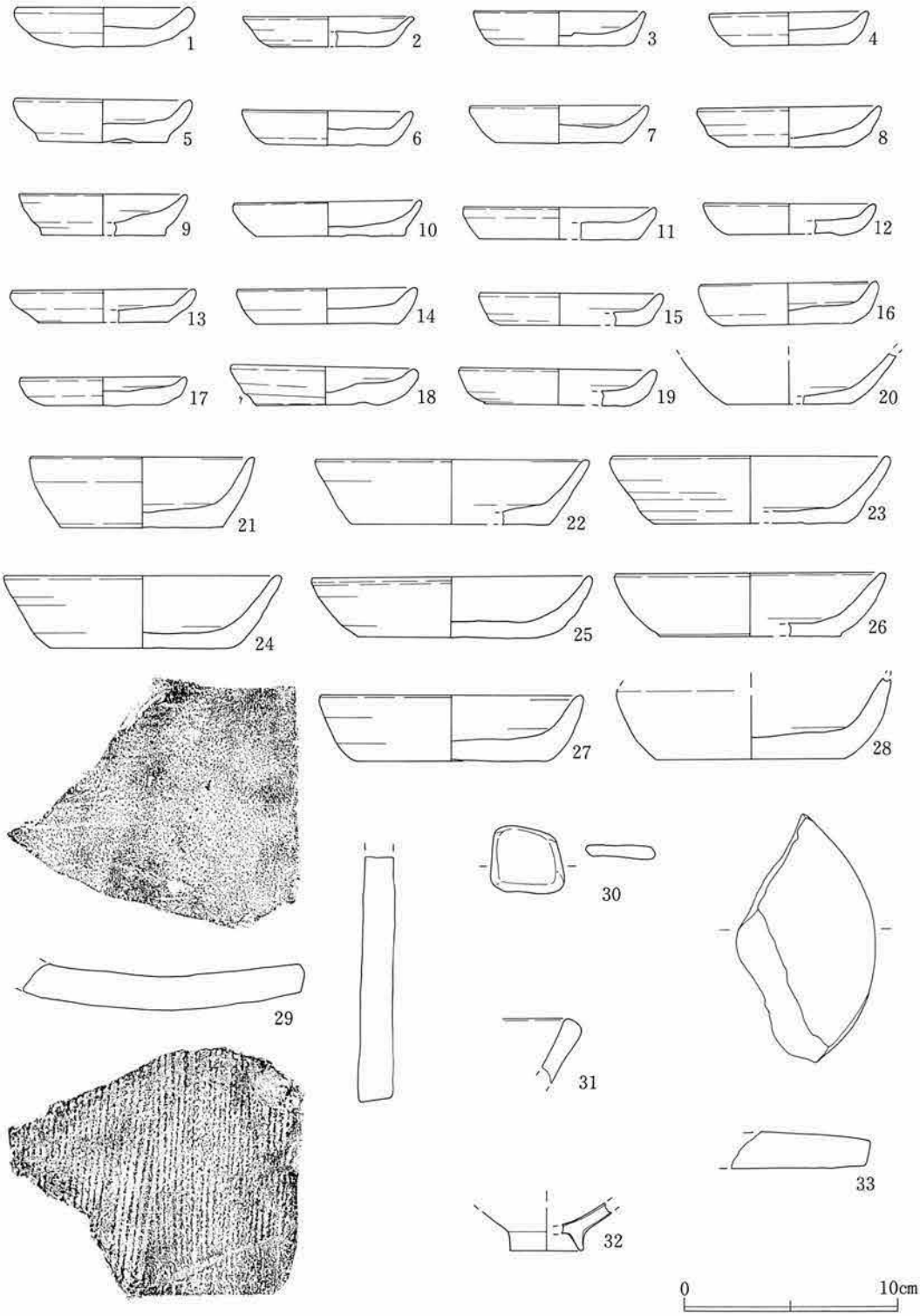


Fig 8　遺構構15出土遺物(1)

図版	No.	口径	底径	器高	器厚	備　　考	図版	No.	口径	底径	器高	器厚	備　　考
Fig 10	1	74	67			外面胴部に強い稜	Fig 10	29	90	66	19.5	7	
	2	74	60			外面胴部に稜		30	84	61	19	5	
	3	90	70	22	8	粗い土。外面胴部に稜		31	102	85	19		
	4	90	83	17.5	5	外面胴部に強い稜		32	103	63.5	30	11	内側面タール付着
	5	96	82	20.5	7			33	130	99	31	9	積み上げロクロ成型
	6	90	71	21	8			34	135	94	31		粗い胎土
	7	85	70	18	9			35	81	60	16	(6)	
	8	79	47	14	5	積み上げロクロ成型		36	130.5	97	31	7	積み上げロクロ成型
	9	84	64	14.5	9			37	118.5	76	32		積み上げロクロ成型
	10	67	54	15	5			38	130	96	29	(8)	全体に磨耗
	11	74.5	55	14	7.5	外側面タール付着		39	128	80	30		
	12	80	60	16.5	(5)			40	135	96	34.5		
	13	80	60	18.5	7	積み上げロクロ成型		41	130	88	29		
	14	81	60	16	(6)			42	127				
	15	78.5	61	18	7			43	116	88	28		外側面ロクロ痕強
	16	78	57	15	4.5			44	128	78	30		
	17	82	66	16	6	積み上げロクロ成型		45	128	92	30.5		積み上げロクロ成型
	18	84	62	16				46	120	78	28	(10)	外側面ロクロ痕強
	19	87	66	18				47	128				
	20	94	74	20.5	(7)			48	128	90	29		全体にすす付着
	21	85	66	18	5			49	132	93	31	7	
	22	90	69	18		炭化物付着		50	136	97	30	8	
	23	84	62	15.5	7			51	130	92	31		積み上げロクロ成型
	24	86.5	73	17	6	積み上げロクロ成型							
	25	86	64	16		積み上げロクロ成型							
	26	80	56	16									
	27	84	62	16		糸切りの回転緩い							
	28	86	63	17.5	7.5								

表 2　遺構15　下層かわらけ法量表

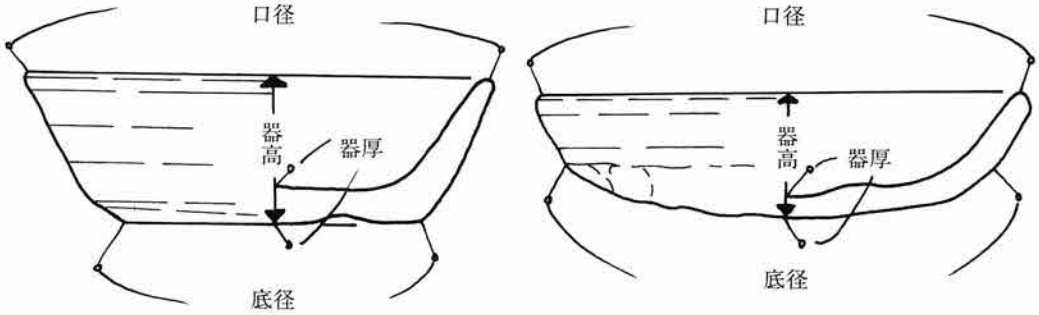


Fig 9　計測模式図

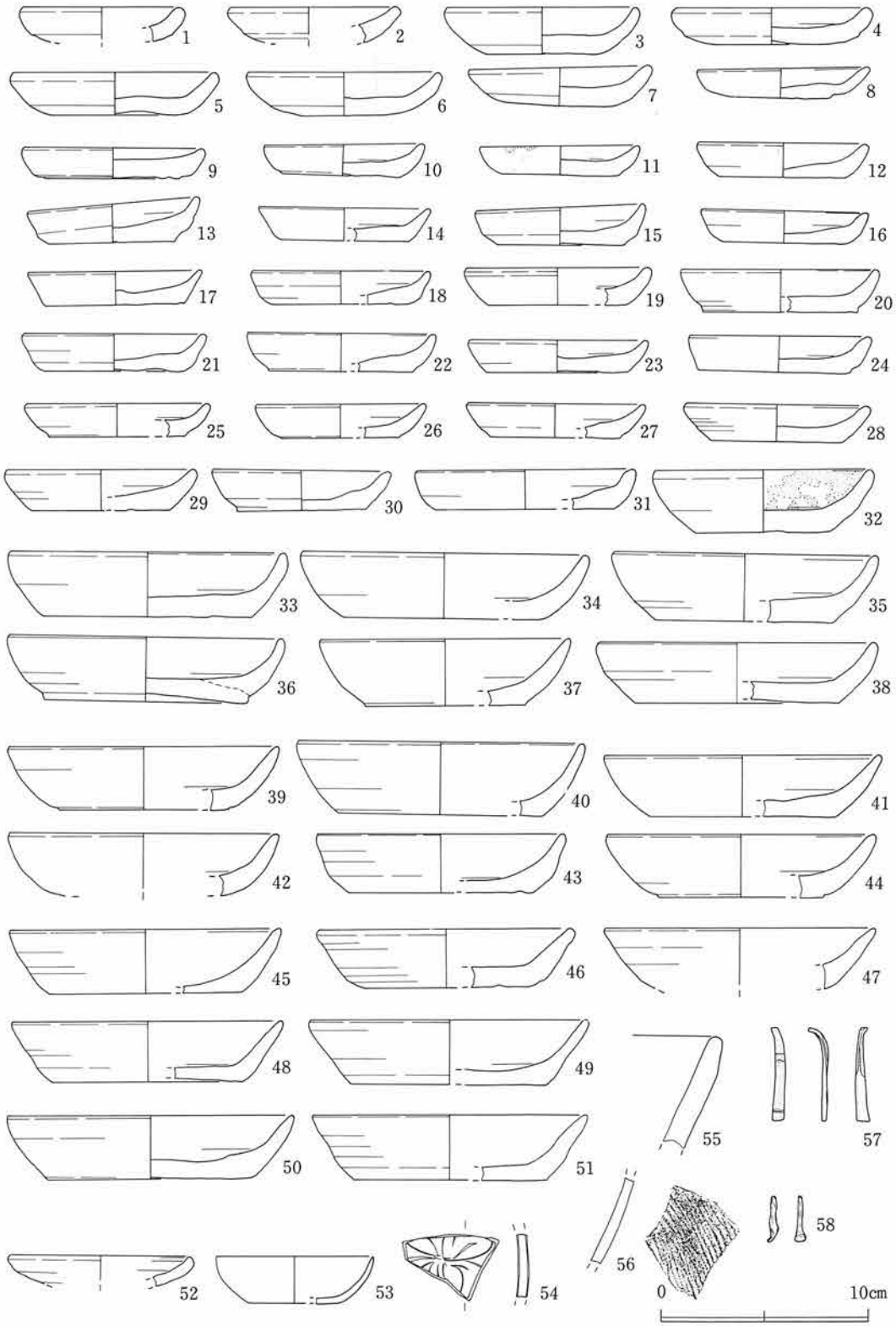


Fig10　遺構15出土遺物(2)

Fig10～14は、床面から出土した遺物である。

1～51は、かわらけ皿。1～7は、手づくね成型のかわらけ皿である。1は、灰褐色で外面胴下部に強い稜が見られる。胎土に雲母を含む。口径74mm、底径67mm。2は、灰褐色で外面胴下部に稜が見られる。口径74mm、底径60mm。3は、灰燈色で、雲母、石粒を含む粗い胎土である。外面胴下部に稜が見られる。4は、外面胴下部に強い稜が見られる。口径90mm、底径83mm、器高17.5mm、器厚5mm。5は、灰褐色で、胎土に貝状骨針を含む。口径96mm、底径82mm、器高20.5mm、器厚7mm。6は灰褐色。外面胴下部に稜が見られる。口径90mm、底部71mm、器高21mm、器厚約8mm。7は、灰燈色。外面胴下部に稜を見る。胎土は、雲母、貝状骨針、小石粒を含み粗い土である。口径85mm、底径70mm、器高18mm、器厚9mm。

8～51は、ロクロ成形のかわらけ皿である。小型のもので、口径67㎜～102㎜。器高14㎜～21㎜。大型のもので、口径116㎜～136㎜。器高28㎜～34.5㎜。下層出土のかわらけ皿も、年代差のある様々なタイプの器形が混在しており、上層出土のかわらけ皿と同じ様を呈する。成形技法を観察すると、積み上げロクロ成型のものが多く見られた。外底部の処理方法は回転糸切りのみであった。

52は、通常、山皿と呼ばれる小皿である。白色粒の混入する粘性の強い胎土。口唇部に降灰釉がかかる。口径83mm。

53は、瀬戸窯の入れ子である。外底部は篦切りで雑に仕上げられる。胎土は粘性が強くきめ細かい。口径75mm、底径44mm、器高22.5mm。

54は龍泉窯系劃花文碗の小片である。内面に蓮華文が配され、素地は灰色を呈し堅徴である。釉は灰青色を呈する。

55は、常滑窯の捏鉢、口縁部片である。口唇部より内側にかけて降灰釉がかかる。

56は、須恵器片である。灰黒色を呈し、外面に叩き痕が残る。

57、58は、鉄製品である。57は、先端が平らに加工されており、工具の可能性もある。長さ3.4cm。58は、釘。長さ1.1cm。

59は、柾目材を削り出した連歯下駄である。歯は、鋸で切り出されているが、磨滅しており、高さは不明である。鼻緒孔はくり抜かれ、中に繊維を撚ったものが残っていた。長さ24cm、幅10.6cm。60は下駄の歯である。残存の高さ8.8cm、幅11.1cm、厚さ3.0cm。

61～67は、板草履の草履芯である。

61は、長さ23cm、幅5.1cm、厚さ0.6cm。先端部は直線的な削り出しを呈し、合わせ部分に切り込みを持つ。後端部は合わせ部分が最先端となるように削り出される。側縁部は緩やかな曲線を呈し、方形の抉りが入る。先端に2ケ所穿孔がある。表裏両面に繊維圧痕が残る。この草履芯の左右は、厚く型取りした板を、2枚に割り裂いて一対にしたと推察される痕がある。62は、長さ22.7cm、幅4.8cm、厚さ0.4cm。先端部は直線的に削られ、後端部は合わせ部分が最先端となるように削られている。側縁部に抉りがあるが型は不明。63は、長さ22.5cm、幅5.1cm、厚さ0.3cm。先端部、後端部ともに直線的に削られ、合わせ部分が最先端となる。側縁部は緩やかな曲線を呈し、上

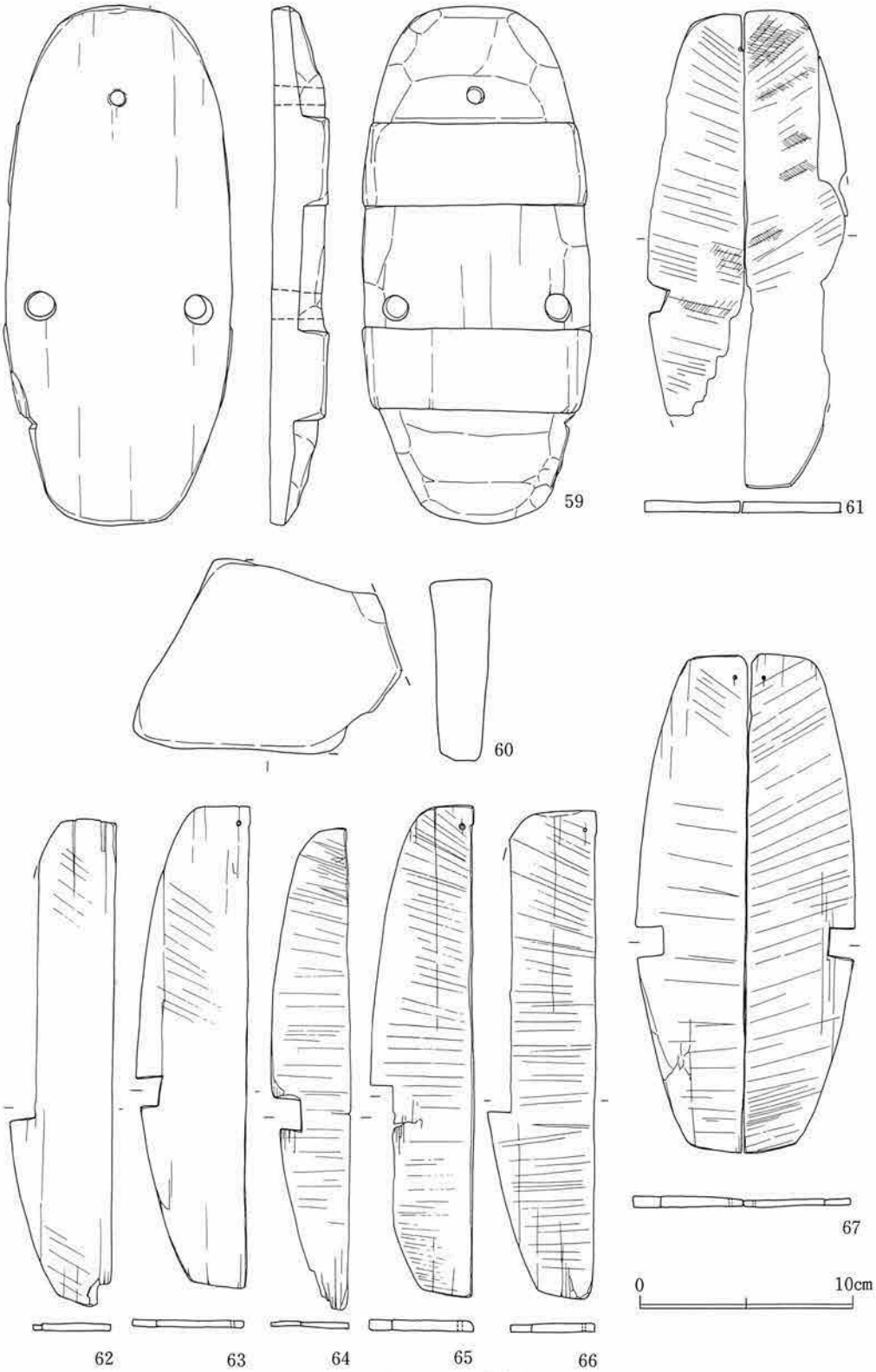


Fig11　遺構15出土遺物(3)

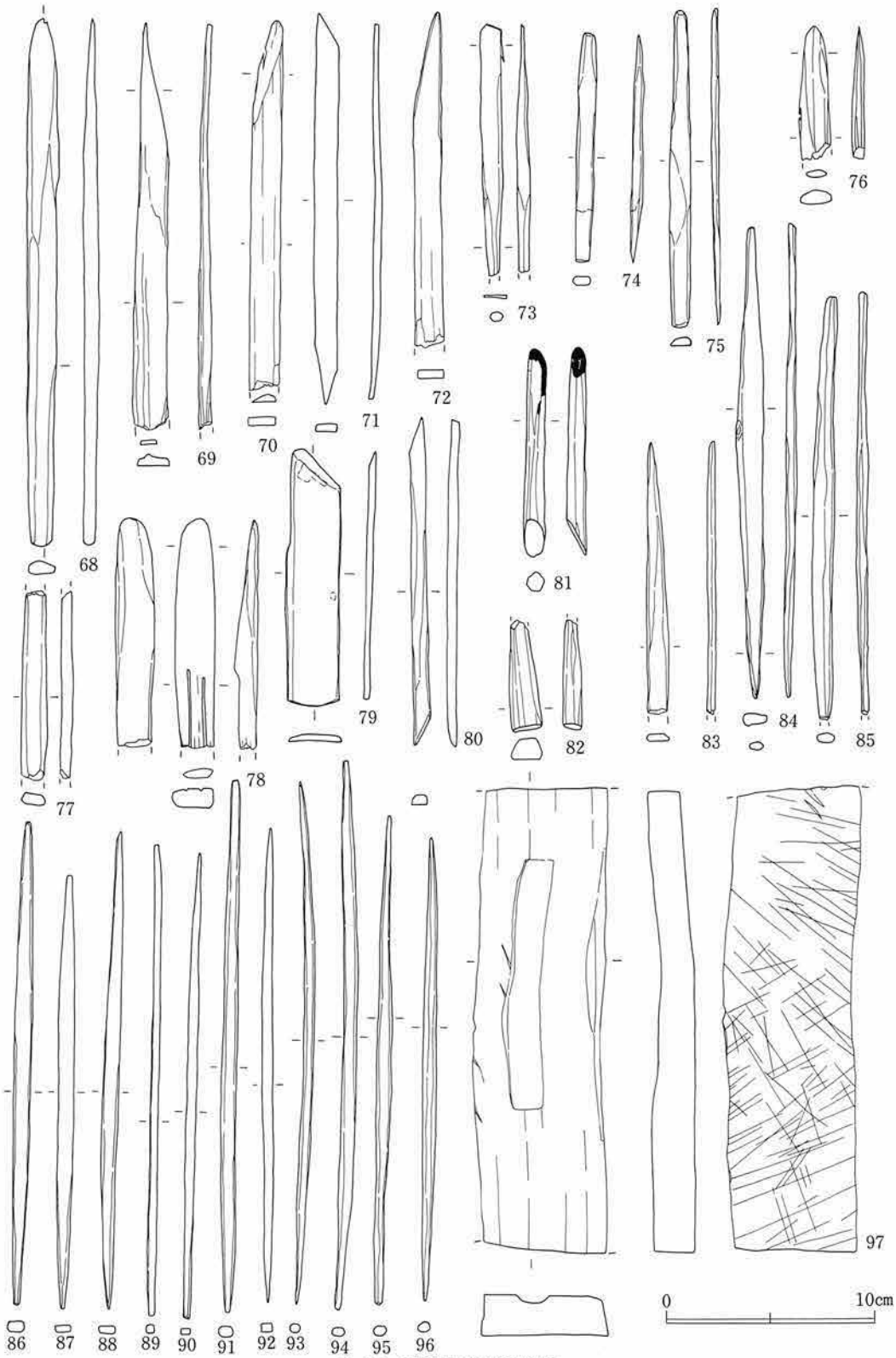


Fig12　遺構15出土遺物(4)

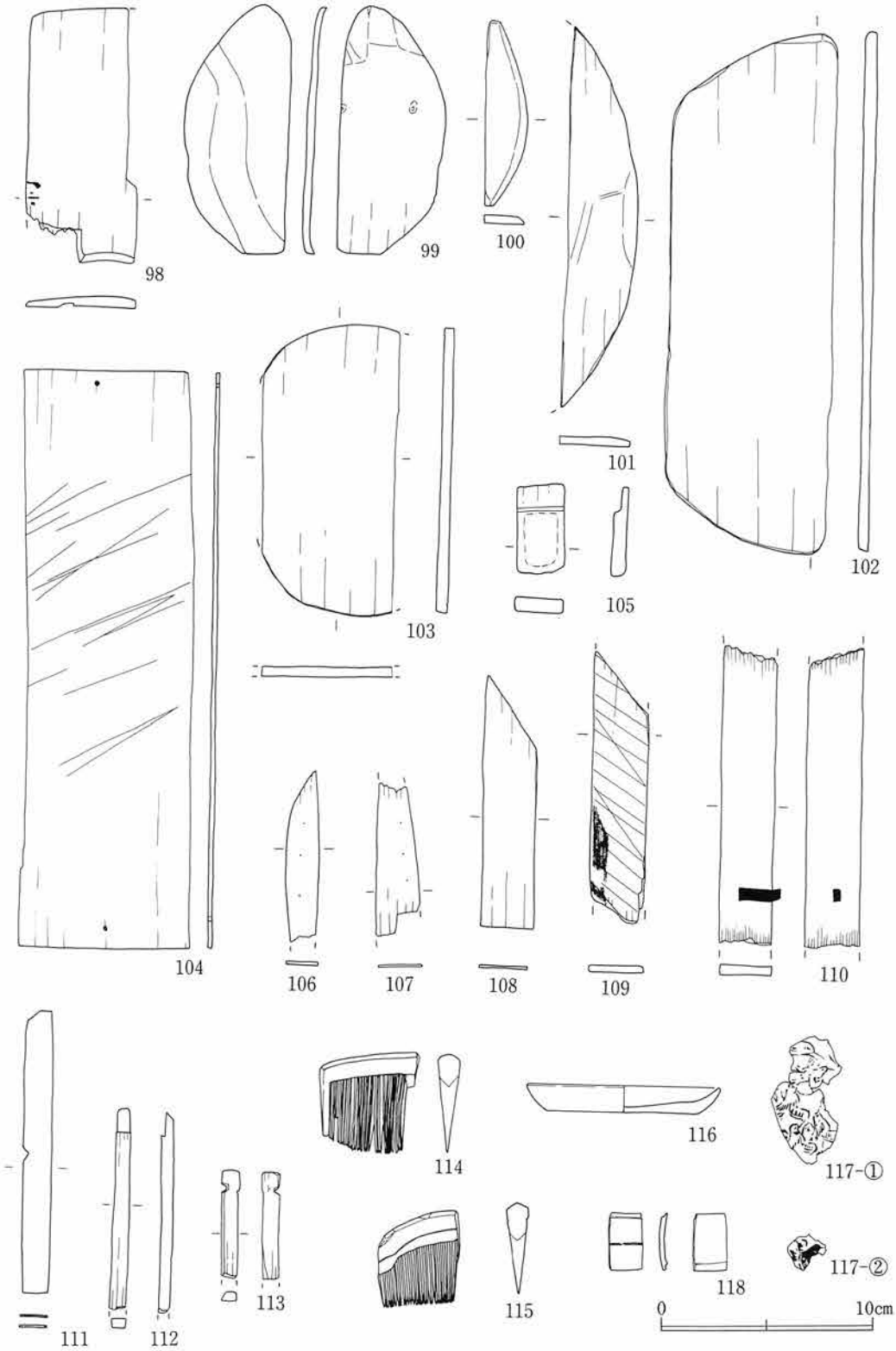


Fig13　遺物15出土遺物(5)

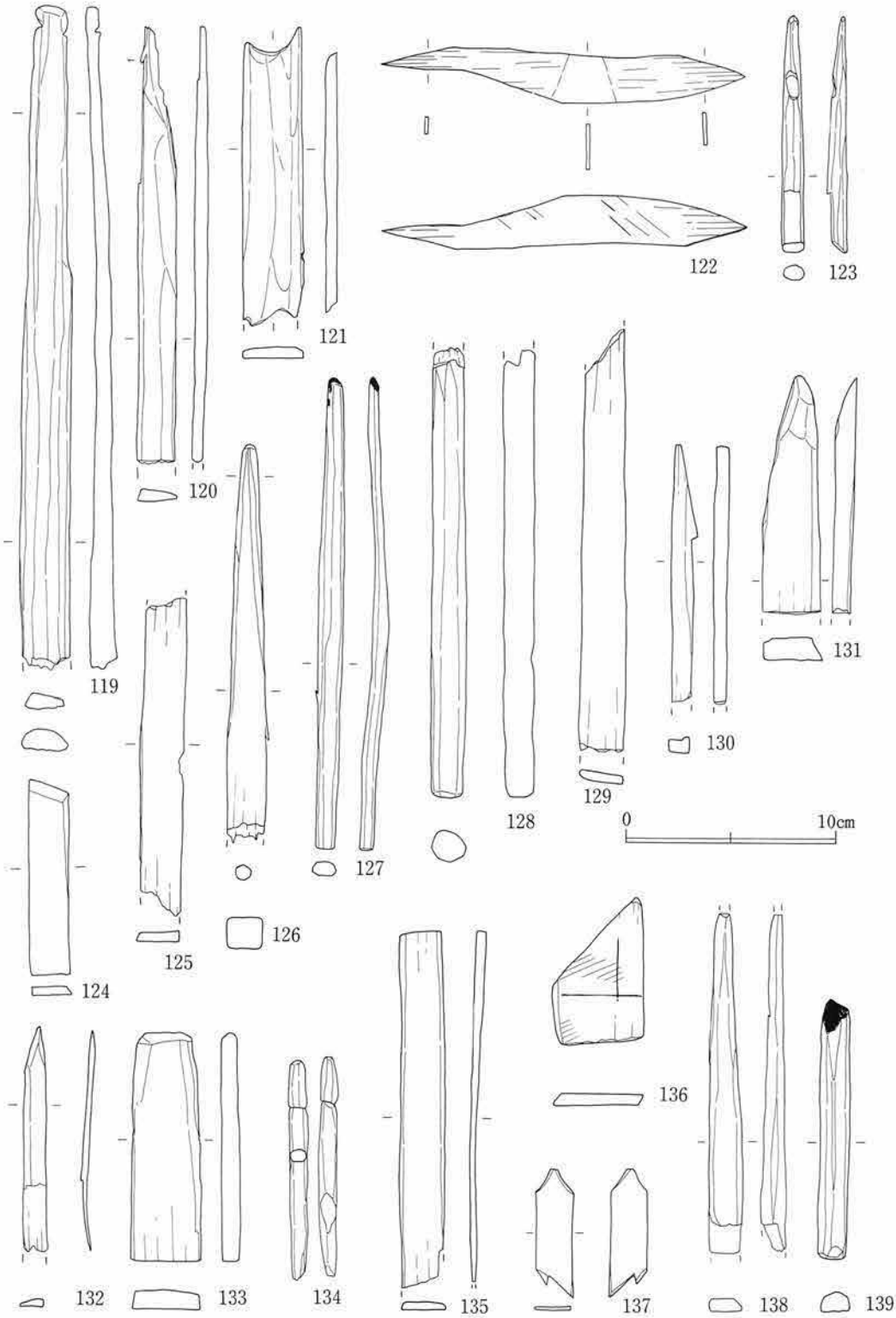


Fig14　遺物15出土遺物(6)

方を斜めに切り込んだ抉りがある。先端部に穿孔あり。僅かに繊維圧痕残る。64は、長さ22.5cm、幅3,7cm、厚さ0.3cm。先端部、後端部ともに残存状態悪く、正確な形は不明である。側縁部は緩やかな曲線を呈し、方形の抉りがある。65は、長さ22.9cm、幅4.8cm、厚さ0.4cm。先端部、後端部ともに直線的に削られ、合わせ部分が頂点となる。側縁部は緩やかな曲線を呈し、方形の抉りが入る。先端合わせ部分に切り込みと小孔がある。繊維圧痕が顕著に残る。66は、長さ22.9cm、幅5.0cm、厚さ0.3cm。先端部は直線的に削られ、後端部は合わせ部分が頂点となる。先端合わせ部分に、穿孔と切り込みがある。67は、長さ23.1cm、厚さ0.5cm。先端部、後端部ともに直線的に削り出され、合わせ部分が頂点となる。先端部の合わせ部分に切り込みと穿孔が残る。側縁部は損失部分が多いが、上方を大きく斜めに切り込んだ抉りの部分を頂点となるような山型を呈していたと推察される。両面共に繊維圧痕残る。

68～82は、篦状木製品である。68は、長さ24.8cm。先端部、平らに削られ断面長方形を呈する。70は、尾の部分が欠損。残長17.4cm。先端部は刃状に削られ、断面長方形を呈する。71は、長さ33.3cm、厚さ0.3cm。両端ともに斜めに削られる。72は残長15.6cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm。先端部は斜めに削られている。73は、長さ11.8cm、幅1.0cm、厚さ0.6。先端部は平らに削られる。断面円型を呈する。74は、長さ10.8cm、幅0.8cm、厚さ0.5cm。先端部、後端部ともに平らに削られる。75は、長さ14.9cm、幅1.0cm、厚さ0.4cm。後端部は平らに削られる。76は、篦状木製品の先端部と思われる。先端部は平らに削られ、断面形は偏平なカマボコ型。77は、残長9cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm。篦状木製品の柄の部分である。78は、篦状木製品の先端部と思われる。中程から先端に向って平らに削られる。断面形は長方形。79は、長さ12.0cm、幅2.5cm、厚さ3.0cm。先端部は斜めに削られ、黒色系漆が付着している。80は、長さ15.3cm、幅0.75cm、厚さ0.45cm。両端を斜めに削られている。81は、長さ9.9cm、幅1.1cm、厚さ0.9cm。先端部に焼痕が有り、後端部は、斜めに削られている。付け木として使用されたのかもしれない。82は、篦状木製品の先端部と思われる。断面形カマボコ型。

83～85は、箸状木製品である。83は、残長12.8cm。断面長方形を呈する。84は、長さ22.2cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm。断面は偏平なだ円型を呈する。85は、残長19.9cm、断面だ円形を呈する。

86～96は箸である。

箸は、先端部の形態が、○両端を細く削る。○両端を直に立ち落とす。○片側のみ細く削り、もう一方は直に立ち落とす。の三通りあり。断面形は、○偏平な方形。○方形。○だ円形の三通りが確認された。

86は、長さ22.8cm、厚さ0.5cm。断面は偏平な方形で両端を直に立ち落とす。87は、長さ24cm、厚さ0.7cm。断面は偏平な方形で片端のみ細く削られる。88は、長さ22.5cm、厚さ0.75cm。断面は偏平な方形で、両端を細く削る。89は、長さ22.1cm、厚さ0.35cm。断面は四角に近い方形。両端は直に立ち落とす。90は、長さ21.9cm、厚さ0.45cm。断面は方形。片端を細く削り、もう一方を直に立ち落とす。91は、長さ25.1㎝、厚さ0.7㎝。断面はだ円型。両端は直に立ち落される。92は、長さ

22.4cm、厚さ0.5cm。断面は方形、両端が細く削られる。93は、長さ23.6cm、厚さ0.5cm。断面はだ円型。両端が細く削られる。94は、長さ25.9cm、厚さ0.55cm。断面はだ円形。両端が直に立ち落とされる。95は、長さ23㎝、厚さ0.7㎝。断面はだ円型。片端は削られ、もう一方は直に立ち落される。96は、長さ21.8cm、厚さ0.6cm。断面形はだ円型。両端が細く削られる。

97は、表面に切り痕があり、俎板として使用されたと推察される。長さ21.9cm、幅5cm、厚さ2cm。

98は、蓋板と思われる。周縁部は丁寧に面取りされ、断面はカマボコ型を呈する。厚さは中心付近で0.5cm。

99～103は、曲物の底板である。99と100は、側面を調整しており、他の物に転用して使用されたと推察される。99は、復元径6.6cm、厚さ0.3cm。100は、径は復元不可能であった。残存値を最大値で計測。長さ8.6cm、幅2cm、厚さ0.4cm。101は、復元径14.4cm、厚さ0.35cm。102は、復元径12.5cm、厚さ0.55cm。103は、だ円型を呈すると思われる。復元径6.8cm。厚さ0.4cm。

104は折敷片である。長さ26.7cm、厚さ0.2cm。表面に切り痕が有る。俎板として転用されたと推察される。

114・115は、黒色系漆[註2]を髹漆した櫛である。２点とも密な歯を持つ。114は、1cmの間隔に13本の歯を持ち、棟厚10mm、縦幅48mm。115、は1cmの間隔に10本の歯を持ち、棟厚10mm、縦幅43mm。

116は、黒色系漆を髹漆した皿である。口径88mm、底径70mm、器高12.5mm、器厚約4mm。文様は無い。髹漆は外底部にも施されている。117は、漆皮膜のみ検出されたため、器型は不明。黒色系漆を髹漆した後、赤色漆[註3]を使用し手描きで施文している。①は千鳥を重なり合う様に描かれており、形も大きさも様々である。②は、小片のため全体像は不明だが、赤色漆で千鳥を描き、針描き[註4]で羽毛や、輪隔を表現している。118は、黒色系漆を髹漆し、竹を模した入れ子と推察される。器厚は非常に薄く、髹漆も丁寧に施され、内側面下部に漆を接着剤として使用した痕が有る。

105～113（Fig. 13）、119～139（Fig. 14）は、用途不明品。

105は、部材片。長さ4.1cm、幅2.2cm、厚さ0.6cm。106、107は、折敷を加工し、転用したものと推察される。表面に針穴状の穿孔がある。106は、残長7.7cm、幅1.5cm、厚さ0.1cm。107は、残長7.1cm、幅2.1cm、厚さ0.1cm。108は、折敷板を加工し、転用したと推察される。先端は大きく斜めに切断される。長さ11.1cm、幅2.5cm、厚さ0.1cm。109は、曲物の側板か。全体に均等に、切り痕が斜めに入る。残長11.6cm、幅2.6cm、厚さ0.3cm。110は、曲物の側板片。桜皮で綴じられていたのがわかる。幅2.5cm、厚さ0.5cm。111は、折敷を加工して転用したものか。側面に三角形の切り込みが入る。長さ13.2cm、幅1.8cm、厚さ0.1cm。112は、先端部は斜めに切断され、枘（ホゾ）が切ってある。断面形は方形。残長9.4cm、幅0.8cm、厚さ0.6cm。113は、側面に方形の抉りがある。長さ5.1㎝、幅0.8㎝、厚さ0.4㎝。119は、長さ30.9cm、幅約2.2cm、厚さ1cm。断面カマボコ型で先端部に両側面から三角形の切り込みが入る。120は、長さ20.5cm、幅1.8cm、厚さ0.6cm。先端部は

損失しているが、側面に刃状の加工がみられる。121は、刀子の鞘。残長13.4cm、幅2.8cm、厚さ0.5cm。断面はカマボコ型。122は、長さ17.1cm、厚さ0.15cm。折敷を加工して転用したものと推察される。整形は丁寧。123は、長さ11cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm。先端部は細く削られ、後端部は斜めに切断される。断面形は偏平な方形。124は、長さ9.1cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm。先端斜めに切断される。篦か？。125は、残長14.8cm、幅2.1cm、厚さ0.6cm。側面に丸く抉りが入る。126は残長18.6cm、幅1.9cm、厚さ1.5cm。先端部は細く整形される。断面形は四角。後端部に木釘が打ち込まれている。部材を転用したと推察される。127は、長さ21cm、幅1cm、厚さ0.6cm。断面形は偏平な方形で、先端部に焼痕が残る。128は、残長21cm、幅1.7cm、厚さ１、5cm。断面形は、ほぼ円形を呈し、丁寧に整形された棒状木製品である。129は、残長19.8cm、幅2.2cm、厚さ0,4cm。両側面とも丁寧な整形。130は、残長12cm、幅1.1cm、厚さ0.7cm。先端部は大きく斜めに切断され、釣り針の返し状になっている。131は、長さ12.1cm、幅2.8cm、厚さ1.1cm。先端部は細かく削り整形されている。132は、残長10.6cm、幅1.2cm、厚さ0.6cm。先端を細く尖らせている。133は、長さ11.8cm、幅3.2cm、厚さ0.9cm。断面は方形。134は、残長10.3cm、幅0.9cm、厚さ0.8cm。先端部周囲に切り込みが入る。遺存状態は悪い。135は、残長11cm、幅1.1cm、厚さ0.8cm。断面カマボコ型。後端に向って薄く削ってある。136は、長さ6.6cm、幅4.3cm、厚さ0.5cm。先端部は斜めに削られるが、粗い整形である。137は、長さ5cm、幅1.7cm、厚さ0.2cm。138は、長さ15.9cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm。欠損部分が多く原型は不明。139は、長さ12.2cm、幅1.4cm、厚さ1cm。断面カマボコ型の棒状製品。先端部に焼痕がある。

この他に、藁を結んだ状態で炭化したもの、数種の種が出土している。

床面上からは、多量の木製品遺物が出土しているが、損失部分の多いもの、器形不明のものは図示していない。

註１　京都鋳造遺跡研究会、五十川伸夫氏にご教示いただいた。

註２　黒漆と称せづ黒色系漆と呼称する事に関しては、伊丹まどかの『中世都市研究』「佐助ヶ谷遺跡出土の漆器（椀・皿）の文様（意匠）の分類と傾向。」の文章に従った。

註３　赤色漆と称する事も、註２の文章に従った。

註４　針描きとは、蒔絵の技法の一つで漆の乾かないうちに鳥軸、針、竹篦などで引っ掻いて文様をかく。葉脈や花弁の輪郭線を表現する時に使用する。引掻きともいう。

第五章　まとめと考察

本地点の発掘調査では、小面積ながら、多くの新事実が得られた。しかし、今回の報告対象面積は建設予定地の約４分の１に過ぎない。たとえ本地点の全域について考察を加えたとしても、言えるのは出土遺物からの年代だけであり、性格にまでは言及できないのが、都市遺跡内の小面積調査であろう。したがって、本報文中では検出された遺構全体の性格に触れることをせずに、出土遺物からの本地点の遺構存在年代について考察を加え、検出遺構では方形竪穴建築址の分類に含まれている、[註1]「遺構15」について考察を加えるにとどめることとする。

以下に述べる年代観等は、原因者負担分調査区の出土遺物をも含んだものであるが、特に遺物の図示はしていない。これらについては別の報告書を作成中であり、詳細はそれを参照していただきたい。本報文を執筆している段階ではまだ原因者負担分調査に関わる整理作業は終了しておらず、出土資料にも十分な検討を加えているわけではない。そのため、やや遅れて刊行される本地点の報告書内の記述との間で若干の相違点がでることも考えられる。この場合、遅れて刊行された報告書がより十分な検討を加えた結果であると言えます。御容赦下さい。

Ⅰ．検出遺構の年代

本地点（原因者負担分も含む）で検出された遺構は切り合い、確認状況等からおおよそ４期に区分することができる。おおまかにみると第１期は河川、第２期は上層遺構群、第３期は下層遺構群第４期は中世以前の遺構に相当する。第３期の下層遺構群は検出状況等からさらに２分することも可能であるがここでは区分しない。

第１期の河川は現在北側を平行して流れている扇ヶ谷川と考えられる。しかし、河岸はなだらかな傾斜面を持たずにほぼ直立しており鎌倉で検出されている所謂「自然河川」とは異なる部分もみられる。おそらく「開削」された用水路的な河川であったと思われる。

河川の上半の埋土は大型土丹で短期間になされており、近・現代の遺物を含んでいる。これに対して下半分には若干量の常滑甕片、かわらけ小片等が含まれているが、18世紀代の肥前窯製品も数点含まれている。[註2]この肥前窯製品は河底に近い位置から出土しており、年代決定資料となる。室町時代からこれら肥前窯製品の年代との間に比定できる遺物は出土していない。

このことから、おそらくこの河川は18世紀（江戸時代）に、農業用水的に開削された河川であったと考えられる。

第２期の上層遺構群では、包含層が削平されていることもあって、面上からの出土遺物はほとんどないが、遺構15からは多量の遺物が出土している。遺物はかわらけがほとんどであるが、白磁口兀皿(ほぼ完形)、劃花文青磁碗片、瀬戸入子片等が含まれている。かわらけは少量の手づくね成形の他はすべて回転糸切り技法であり、所謂「薄手・精良胎土」のものは１点しかふくまれていない。

かわらけに対する考察等は別報告書に譲るが出土遺物全体では上層遺構群は13世紀第４四半期から14世紀前半頃の年代が考えらよう。遺構15は、本期遺構群内では古い時期の構築と言える。

第３期の下層遺構群は手づくねかわらけを主体とする遺物が出土しており、他のものはあまり含まれない。手づくねかわらけは器肉が薄く、焼成良好の一群とやや器肉が厚くボッテリとしたものとが混在する。遺跡全体の遺物の整理が細かく終了していないため断定できないが、さらに２分することも可能と思われる。年代は12世紀末～13世紀前半頃までの間であろう。

第４器は中世以前であるが、出土土器片が細片であるために、年代は明確にできない。しかし、本遺跡に近い小町１－116番地点[註3]では８世紀から10世紀にかけての住居址・遺物が確認されているため本地点もこれらに関係するものと考えられよう。

以上のように、本地点で検出された遺構は中世では12世紀末頃～14世紀前半頃まで、さらに近世、18世紀頃に構築されたものであると言える。周辺の調査地との関係等多くの問題が残っているが、詳しくは別の報告書で触れたい。

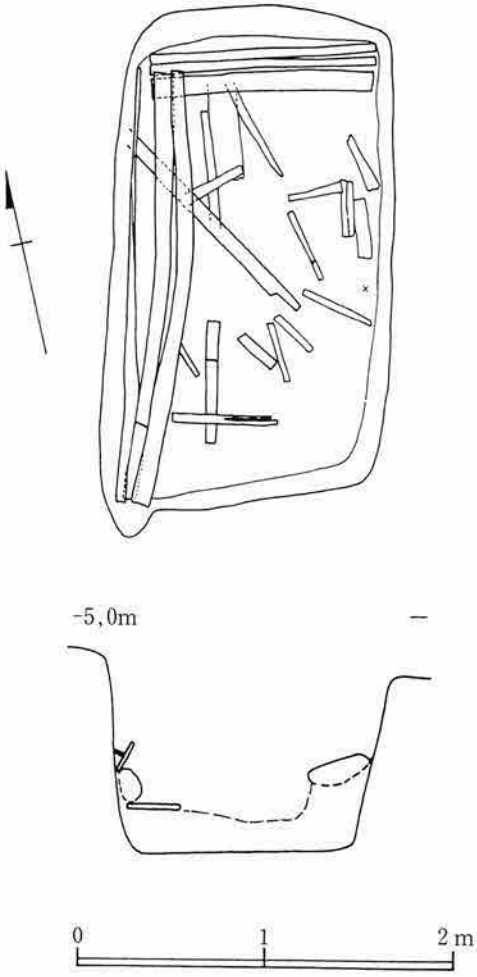
II．遺構15について

遺構15は現状での方形竪穴建築址（以下方形竪穴と言う）の分類に含まれるのは前項で述べた。しかし、現在までに行われている方形竪穴の分類は、本来「半地下式の床を持つ、上屋を推定できる建物」としての方形竪穴に、類似する形態の遺構が多く取り込まれたがための混乱を整理することも目的の一つとしている。[註4]そのため筆者は鎌倉石を床四周に巡らす方形竪穴については「倉庫」であろうとの見解をしめしたことがある。[註5]これは筆者が過去に行った方形竪穴の形式分類の第１形式にあたる。[註6]

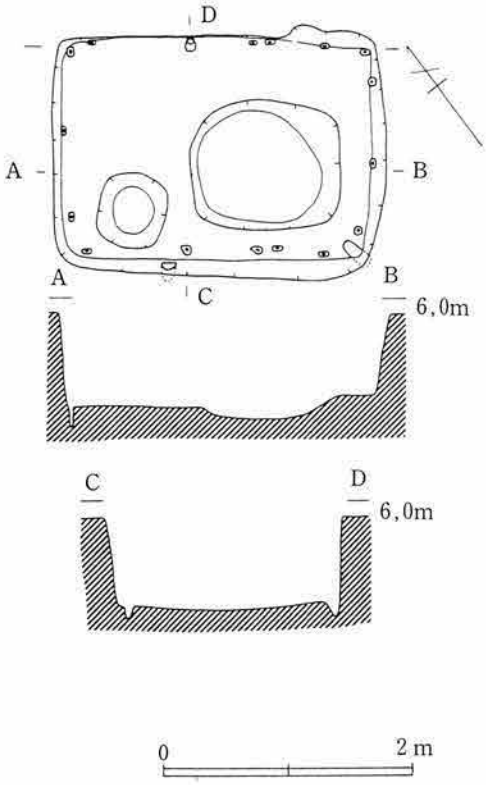
本地点で検出された遺構15は筆者の形式分類では第２形式に含まれる。この形式には「竪穴四周壁直下床面上に杭が打ち込まれ、これが背後の壁板を支えるが、打ち込まれた（あるいは立てられた）柱が、上屋を支えるなどの規模のないもの」という構造の方形竪穴が含まれる。すなわち、壁板は残っていてもこの壁板は「掘り込み壁の土留め」であって、上に立上がる建物の壁板になるほどの強度がないものである。

本地点検出方形竪穴と同型式のものは、市街地から浜地にかけて広くみられるが、諏訪東遺跡３号方形竪穴[註7]、中央公民館用地第３方形竪穴[註8]松風堂ビル用地第７方形竪穴[註9]等が類似する。特に諏訪東遺跡例は、筆者自身が調査しているということもあって、極似していると言える。又、詳細は不明であるが今小路西遺跡（御成小学校内）の南街区にも、似た形状の方形竪穴が存在しているようだ。[註10]これらはいずれも短辺が（上端で）2m以内の長方形様を呈しており、松風堂ビル例以外では「規模のわりには深い」形状である。

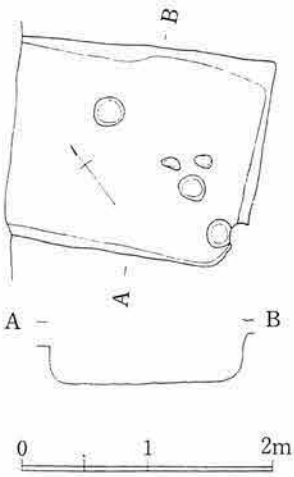
この形式の方形竪穴の覆土の特徴としては(本地点と諏訪東の例だけであるが)、下半にワラ様の植物繊維が厚く堆積しているという点がある。筆者自身のこれまでの鎌倉市内での方形竪穴の調査からみた限りでは、この堆積はこの型式の方形竪穴にのみ認められる堆積とも言える。浜地ではこ



▲諏訪東遺跡



▲中央公民館用地



◀松風堂ビル用地
(小町1-309-5)

Fig15　方形竪穴類例

れらは残存しないので把めないが。

本型式の方形竪穴の性格（用途）については筆者が型式分類を試みた時点においては単に「本来の方形竪穴と構造・使用目的が異なっているようだ」と考えていたに過ぎないが、今日では「この型式は方形竪穴という区分には含まれない」と言える。

では、この型式の方形竪穴の用途は何かと言うとあまり明確には言えないが、「倉より簡単な室（むろ）」の可能性を指摘したい。これの根拠としては第1に多量のワラ様の植物繊維が覆土下半に堆積していることである。これは「さしかけ屋根」が下落した結果とも考えられる。

第2に、諏訪東遺跡例に認められたことであるが、細い割板を敷いた様な痕跡が残り、積み重ねられたかわらけが出土していることがあげられている。これは「床」が存在していたことを示しているとも言える。壁板については、特に触れないが、本地点例、諏訪東例ともに、粗い割板の構積みで作られており、前面の支柱は打ち込まれたものではない。諏訪東遺跡例では礎石（土丹）を使用している。

以上「室」とかんがえる根拠として示した2点はこれを断定できるほど強いものでなく、非常に弱いものである。したがって、検出例が増加して、さらに良好な方形竪穴が確認されれば若干の変更は考えられよう。この型式の方形竪穴については「規模のわりに深い」という形状等から「水溜め」あるいは「防火用水的な池」という考えもあるようだが、[註11]これも積極的な論拠にかける。たしかに、火災の多い「都市鎌倉」にはそういった施設も必要であり、河川、井戸の他に何らかの施設が存在していたとは十分に考えられるが、現状で、本型式の方形竪穴を「水溜め」とするには抵抗がある。

本型式の方形竪穴は「杭で背後の板を支える」構造であり、この型式のものは「ゴミ溜め」的な板1枚を杭で支えたようなものもある。[註12]今後、より機能的な分類を行い、用途を考えていかなければならないと考えている。

III. 遺構の変遷について

検出された遺構からは、面積が少ないこともあって、明確な構築遺構の変遷とは言えないが若干の変化が把めた。しかし、本地点で認められた構築遺構の変化は遺構（あるいは構築者）の性格の変化によるものではなく。遺構の立地している地形の変化によるものが多い。土地使用者の性格の変化による遺構の変化もあるのだろうが、把むにはいたっていない。

地形によると考えられる変化は下層遺構群内にみられる。今回報告分には含まれないために図示していないが、溝の流下方向が大きく変化する。検出遺構（中世）で最も古い溝は北（現在の扇が谷川）に向って流れるが、それよりやや新しい溝は180°反対方向、南に向って流れている。この流下方向の変化には「都市としての地形の整備」とでも言うような「都市造営作業」が関わっていると考えられる。源頼朝が入る以前の鎌倉の様相はほとんど把めていないが、鎌倉時代初期に開削された溝の流下方向にほとんど規格性がないことからも起伏に富んだ複雑な地形であったろうと推定

できる。

この複雑な起伏に富んだ地形に若宮大路を作り、御家人他の居館を作るための造営作業が行われたわけである。これは、各御家人等が個人的に行うものでなく、幕府の指導に従っての行為と言えよう。鎌倉時代の初期における本地点周辺のような市街地での地行は中世地山の暗褐色粘質土の切り崩しと埋め立てでされているのも特徴の一つである。

註

註1　a汐見一夫「方形竪穴建築址考」『中世都市研究』1号　1991年　の分類D類
　　b斉木秀雄「方形竪穴建築址について」『諏訪東遺跡』　1985年　の第2型式に含まれる。

註2　佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏に御教授いただいた。

註3　馬淵和雄「小町一丁目116番地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書・2』　1986年　鎌倉市教育委員会

註4　少なくとも筆者はそう考えている。

註5　斉木秀雄「鎌倉石を使用した建物について－方形竪穴と板壁掘立柱建物の紹介をかねて－」『鎌倉考古・21号』　1992年　鎌倉考古学研究所

註6　註1のbに同じ

註7　斉木秀雄他『諏訪東遺跡』　1985年　諏訪東遺跡調査会

註8　斉木秀雄他『(推定）藤内定員邸跡遺跡』　1985年　鎌倉市教育委員会

註9　斉木秀雄『小町一丁目309番5地点発掘調査報告』　1983年　（推定）藤内定員邸跡発掘団

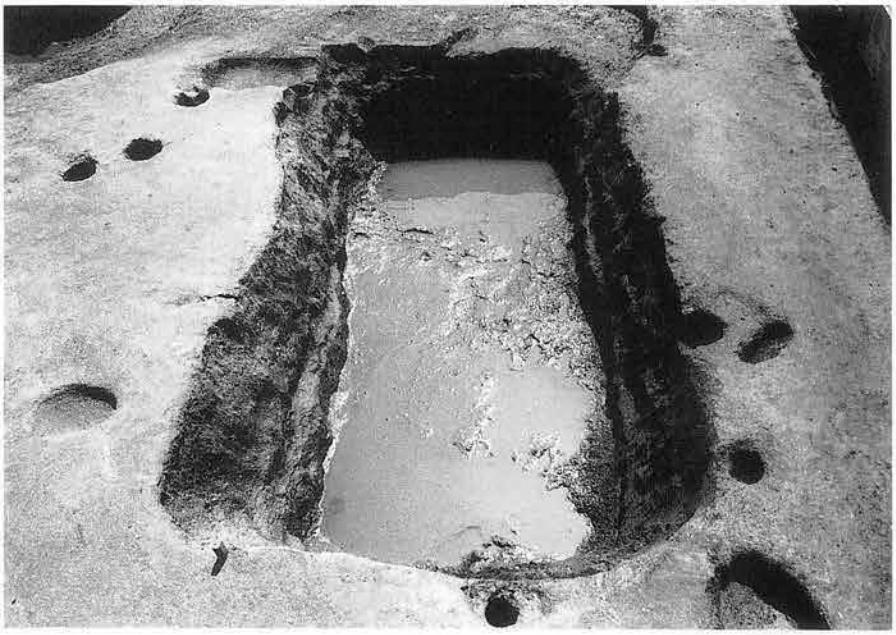
註10　調査中に実見した。

註11　河野眞知郎氏と雑談した折にこのような説も「用途の一つ」として出た。

註12　大三輪龍彦　斉木秀雄他『研修道場用地発掘調査報告書』　1983年　鎌倉鶴岡八幡宮　の第1方形竪穴建築址が代表例。

1　1区上層遺構群全景（リモコン式高所撮影装置による）

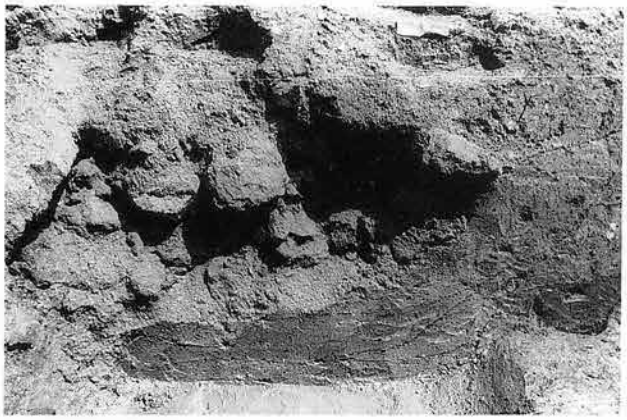
2　1区下層遺構群（リモコン式高所撮影装置による）



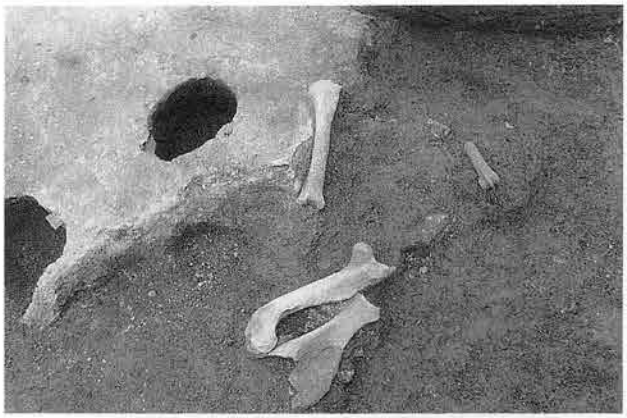
▲1.遺構15（西より）

◀2.遺構15（東より）

3 遺構15東西土層断面▶
（西より）



◀1.旧河川堆積土層
（西より）



2.１区上層東側遺構群▶
獣骨出土状況

◀3.遺構184
手づくね出土状況

PL 4

◀1.溝3（南から）

▶2.遺構15南側 柱穴列（東より）

◀3.溝3
遺構15東側構群(北より)

4.旧河川の状況(北西より)▶

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書　9

平成4年度　発掘調査報告(第3分冊)

発行日　平成5年3月

編集
発行　鎌倉市教育委員会

印刷　㈱グラフ